

# ぐらさい日記

長之助

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

簡単に言います。ウチのグランサイファー妄想日記です。

グランくんは本来一人称『僕』ですけどこの小説では『俺』で通します。あとなんか下ネタ突っ込んだりするかもしれないのでそこはご勘弁を。

それとグランハーレム的な感じで色々な女性キャラクター（1部除く）がグラン大好き系女子になっております。そこもご了承ください。

## 目次

団長相談室、おめえもよく飽きねえよなあ	1
美少女錬金術師、こういうのが好きなのか？	4
灼脚の麗姫、あたし着いていける？	11
絢爛の紡ぎ手、フレキシブルにいけるかしら？	19
神託の妖童、共に歩めるのかい？	26
醒竜姫、私迷わないかな？	34
相談室のおやすみ	42
西の守護神、くっくどうーどうるどうー？	51
西南西の守護神、この世の理を知らない？	58
西北西の守護神、須らくこの声を聞いてくれんのか？	66
南南西の守護神、そんなにジロジロ見たいのかの？	74
北北西の守護神、道はどこに出来るの？	81
十二神将の宴	88
竜殺しの騎士、我が剣で魔を断つのか？	96
炎帝、消し炭にしてやろうか？	104
俊英の双剣士、白竜の刃と散れるか？	112
不撓不屈の騎士、この一瞬に全てを賭けようか？	119
眠れる輝竜、舐めると痛い目を見るよ？	127
フェードラツへの騎士達の任務	134
不滅の群青、私に任せろよ？	142
真紅の穿光、その力を示してみる？	150
峻厳な鬼教官、私のしごきが必要か？	157
地砕の霹狼、平穏を望むか？	164
冥闇の剛刃、見たいのか？この顔が？	171

月よりの使者、興味深いか？

組織の日、団長の死

ガンパウダーミキサー、こんちくしょーです？

創意の銃設計士、それじゃあいつちよ頑張ってみる？

奮励の偽秀、好機はいつ来るのか？

銃工房嫁騒動

未完の錬金術師、派手にやっちゃお？

千年を探す者、ウチに任せてみいひんか？

千年を継ぎし者、堪忍な？

ホワイトパーリナイ

狂恋の華鎧、お姉様お姉様お姉様ア！！

騎士修行中、やれるっすか？

スウインガートリオ、マジパネーション？

料理対決

天稟の射手、快樂の先、行ってみたい？

神箭の射手、お見せいたしましょうか？

顛悟の射手、任せて欲しいのです？

守り人ブラスター

マナリアプリンセス、魔力漲ってる？

マナリアナイト、今まで以上にお役に立てるでしょうか？

ピカピカ☆マナリア魔法学院

小さな騎士、自分に任せるでありますか？

正義の騎士、日々研鑽していますか？

デイリジエントナイト、とことん頑張るのです？

シークレットナイト、正義を問うか？

義に篤くお嬢様想いの老紳士、潔くお逝きになつてはどうです？

365

リユミエールクライシス

スピアナイト、突進しかないのか？

焦熱の帝国魂、突撃しかないか？

元帝国兵達のレクイエム

夢見の双子、貴方が見るのはどんな夢？

異界の艇人、懐かしいかい？

船旅の夢現

星跡の巡礼者、我らに癒しの力を？

天穿の銃槍騎、私の切り札はどれだ…？

剛腕の大喰王、腹減ったか？

Theゼエン

蒼き迅雷の拳闘士、限界を超えるぞツツツ

!!!!!!!

リボンファイター、容赦はしねえぜ？

殴蹴連撃

蒼導の剣、覚悟してくださいね？

蒼天の剣閃、弱さは無いだろうな？

The秩序

不屈の心を持つ鋼の戦士、消えてなくなれエ!!

愛宿せし鋼の戦士、出撃しますか？

鉄人GO

吸血姫、カプっとするよー？

血貴、楽しませてくれよ？

ヴァンパイアダブル

533 525 518 510 503 496 487 480 473 466 459 452 445 438 431 424 417 410 403 395 388 380 372

ゴブリンスレイヤー、命を掛ける覚悟はあるか？ | 541  
ゴブリンキラー、闇を祓う炎に見せられてみます？ | 548  
剣の賢者、学ぼうかの？ | 555  
親バカ兄バカ | 562  
再興を求めし義侠騎士、カチコミしますか？ | 569  
古今独歩の大拳豪、拳1つでどこまで行けるか…？ | 576  
剣豪と拳豪 | 583  
サムライドリーマー、ござるー？ | 591  
無頼の好漢、痛い目に遭ってもらおうか？ | 599  
侍寒々 | 606  
亡国の希望、お願いしますね？ | 614  
亡国の血脈、お手伝いの必要か？ | 621  
竜騎士、ここは譲れないか？ | 628  
護国真龍、真龍の名伊達ではないぞ？ | 635  
アイルスト一念発起 | 642  
海に咲く五花、みんな準備はいい？ | 650  
夢見る音符、一緒に乗り越えちゃお？ | 658  
アイドルキャスター | 665  
紅陽の舞主、私に色々教えて？ | 673  
夜失の桃煙、遊びましょ？ | 680  
ビビビの敏感シスターズ | 688  
世紀の大怪盗、その程度かい？ | 696  
モーターデイテクティブ、俺の推理を聞くか？ | 703  
探偵助手、何してるんですか？ | 710  
L E T S 推理タイム | 718

グランがもし誕生日だったら前編	726
グランがもし誕生日だったら中編	734
グランがもし誕生日だったら中編2	742
グランがもし誕生日だったら中編3	750
グランがもし誕生日だったら後編	757
揺らぎの斬姫、大丈夫？	765
魔竜統、私を落胆させるなよ	772
ママ姉	779
壊天災、張り切っていくぜえ？	787
親愛の妹君、今日のごはんは何かな？	795
幼女と大人とクレイジーこむら返り	802
ハロウィンパーティー	810
ステルスハロウィン	817
ハロウィンラッシュ	825
聖乙女、私に任せてくれないか？	833
禁呪の恋人、愛の力ですね？	841
闇堕ち&光堕ち	848
妄想少女X、いい構図ね？	856
必中の遊撃手、練習を思い出して？	863
電矢の遊撃者、信頼してもらえます？	870
おこたみ怠み	877
年末のクリスマスタイム	884
年末年始の1幕	891
ウィッチクラフト、いいかしら？	898
天象の風、精霊の御加護に感謝しましょう？	905

魔女っ子シスターズ | 912  
ホワイト（アウトヤ）でー | 920  
二天、逃がさないわよ？ | 927  
三天、どうだ？ | 934  
五天、遊ぼうよ | 941  
九天、一緒に弾こう？ | 948  
十天、逃げられないよ | 955  
十天ガールズ！ヒアウイゴー！ | 962  
一天、何故争わねばならないのか | 969  
四天、その程度ですか？ | 976  
六天、キエエエエエエエエ!!! | 982  
七天、本気出しちやおっかなく？ | 990



## 団長相談室、おめえもよく飽きねえよなあ

騎空艇グランサイファー。団長グランを始めとする、数々の色々な種族や性別の団員が乗っている多種多様な騎空艇である。

当然、騎空艇に乗っている以上彼らは騎空団であり、その長にグランという少年を置いている。

団員全てが、グランに何かしらの感情を抱いていた。尊敬、恋慕、友情等々……友情や尊敬に関しては、グランはある程度察知できるが恋慕だけはどうしても察知できない。だが、それもある意味で正解なのだろう。察知してしまえば一気にバランスが崩れてしまうかもしれないからだ。

閑話休題……そんな、色々な団員が色々な感情を持っている空間が成立しているグランサイファー。そんな中で、団長のグランはある一つの決断をした。

「話し合い、しようか」

それは、ふと出た一言。その突然の一言に彼の隣にいた長年の相棒であるトカゲ……ではなく、ドラゴンのような見た目をしているビィは、突然のグランの言葉に困惑を浮かべるしかなかった。

「なんだあ？いきなりどうしたんだよグラン」

「いや、俺ずっと思ってたんだけど……グランサイファーの皆とちやんと話し合えてないと思って」

「そうかあ？ちゃんと団員達のことを考えてたりするじゃねえか」

「いやいや、それはちよつと……今の状態はスキンシップが足りないすぎる……」

「言葉おかしくなってるぞ」

「……ともかく、今の団のみんなと話し合いしてみたいと思ったんだよ」

「……………」

グランの言った言葉に絶句しているビィ。正直『頭でも打ったのか？』と思ってしまったが、ただ団員達の事を考えての台詞だろうと考えたので、流石にこれは失礼だと思って言葉は出さない事にした。

「……で、話し合うってどうするんだよ」

「ほら、グランサイファアの1番下の部屋で、1個まだ使われてない部屋あるじゃん？」

「え、いやそんな部屋知らねえけど……つうかまだ部屋余ってるのかよ、グランサイファア」

「まああるんだよ、そういう部屋が……で、まあその部屋に出来れば1人ずつ団員呼んで、会話のスキンスリップをしようかと。」

「実はあの部屋、いろんな場所に声届くような面白い仕組みになってるからね。そのまま……」

「そこまで言って、グランは少し黙ってしまった。そして、ビィは一つ考えたことがあった。わざわざ船の通信管を使わなくても、音声と映像を届けるような設備自体は、この船にもあるのだからそれを使えばいいだろうと。」

「そして、その考えはグランもしていた。」

「……うん、やっぱり設備使った方がいいよね？」

「まあ、いいんじゃないかね？許可取れりやあなんだっていいだろうし」

「うん、団員同士での繋がりはあると言ってもやっぱり、全員は無理だしね……というか知り合いが乗ってたことに長い間気づかないことあるし、グランサイファアって」

「ローアイン達が言ってたなあ」

「……うん、ならラカムとかにも頼んで色々してみよう」

「まあ、面白そうだしいいんじゃないかねか？」

「グランは立ち上がって、やる気を見せていた。そしてその傍らでビィは他人事のように眺めていた。どこまでその企画は続くのだろうか、と。」

「流石に全団員の部屋に映像を写す設備載せるのは難しいし、まあみんなが集まりそうな場所でいつか」

「で？どうするんだ？」

「……団長相談室とかって名付けよう」

『オイラが言いたいのはそういう事じゃねえんだけどな』という言葉は飲み込んだ。ビィは、グランの決めたことはなるべく彼自身に行っ

てもらえればいいと思っていた。

最悪、巻き込まれなければいいと……そう思っていた。

そして今、団長相談室という名のグランサイファー限定番組が始まろうとしているのであった。

美少女錬金術師、こういうのが好きなのか？

「……というわけで、団長相談室第1回のゲストはカリオストロです」  
「おい待て、いきなり部屋に連れてこられたかと思っただらなんだこれ」  
「団長相談室」

「いやだからそれがなんなのかって話をだな……ああていうか音楽うるせえ！切れ！」

グランサイファアの一室に、グランとカリオストロがそれぞれ椅子に座って対面していた。テーブルを挟んで対面しており、それぞれ喉が乾かないように飲み物まで置いてくれている親切設計である。

先程まで音楽が流れていたが、カリオストロの一喝により音は無事に切られた。

「……で、何だこれ」

「いやあ、グランサイファア内広すぎて一緒に乗ってたことに気づかなかった！みたいなあるあるがあるらしくてさ、それを解消するためにこうやって面と向かって軽く駄弁ろうかと思って」

「ああ……まあ確かにあるあるだな」

グランの言うことに少し納得したカリオストロ。新しく来た団員を紹介するにしても、ここは色々和多すぎるのだ。団員それぞれの予定だったり広すぎて会えなかったり。

「というわけで、自己紹介をどうぞ」

「世界一の美少女錬金術師、カリオストロだよ☆」

「はい、自己紹介どうもありがとう」

スイッチのON/OFFが激しいのがカリオストロの特徴だが、もはやそれに慣れてしまったグラン。カリオストロを知っているグランサイファア団員も、カリオストロのそういう所に慣れてしまっている。

「それで、いい機会だからカリオストロに聞きたかった事があるんだけど」

「んー？何かなあ、団長サン☆」

「錬金術って魂とかの説明があるけどさ、精神ってどうなるの？」

「……というところ？」

「いや、カリオストロって元々男だったわけじゃん」

一瞬カリオストロの後ろに彼女の所有している生物、ウロボロスが現れたがグランは見なかったことにした。

「元々男だったけど、今は美少女……カリオストロの魂はカリオストロ自身で構成されてるんだろうけどさ、精神的に見たら男女のどっちに精神が傾いてるのかなって」

「……そうだな、だったらこの場を借りてお勉強会……にはならないが、ちよつと説明といこうか」

そう言つて、カリオストロは置かれてあつた紙とペンを手に持つて絵と文書を書いていく。そして、その書かれた紙を映像に移すかのように見せる。

「まず、そもそも自分の性別つてのは、環境とかで意識が変わつてくるもんだ」

「というところ？」

「そうだな……例えば、男が女として育てられたり女が男として育てられたりした場合、一部を除いたら自分が育てられた性別だと、第二次性徴期まで、そうやって認識する。

それが第1前提」

「第1前提」

「で、次に自分の肉体的な性別を認識する事で自分の性別を確固たるものにする、それが第2前提」

「……どういうこと？」

カリオストロの説明に、グランは首を傾げる。カリオストロは紙を見せながら、口でさらに追加の説明をする。

「男と女の肉体的な特徴を言ってみる。ああ、第二次性徴期からの特徴な。種族別でも答えてもらおうか」

「うーん……女の人は胸が大きくなる、男の人は筋肉質になる……とか？」

ドラフとかだと男の人は滅茶苦茶でかいけど女の人は俺より身長は小さいよね」

「まあそんな感じだ。で、お前は自分の性別がなんなのかわかるか？」

「え、男だけだ」

「なんでそう思った？」

「そりゃあ……男についてるアレがあるし、自分の体も筋肉質だと思ってるから……ああ、そういう事」

納得したかのようにグランは手を叩く。カリオストロは椅子に深く腰掛けて、自慢げな顔になっていた。

「肉体的な性別ってのは、そういう事だ。でまあ、その2つの前提から人間は自分や相手の性別が何なのかを無意識に想像し、理解する。さつきも言ったが、1部は除くぞ」

「……一部って？」

「簡単に言おうか、ファステイバみたいな奴だ。」

まああれはまた別の要因がある気もするが……ともかく見た目と中身の性別が違う奴もいるってのは、覚えておけ」

「うん、わかった」

カリオストロの言うことに頭を縦に振るグラン。話がズレたためか、カリオストロは一旦咳き込んで元に戻すことにした。

「……とまあ、寄り道はしちゃったが要するにさつき言った2つの要因で、性別が認識される。肉体的なものは……ドラフ以外だと割と操作出来るからな、例えば男の割に華奢な体してる奴とかもいる訳だしな。」

「なるほど」

「で、だ。その理論を使うと俺様は何の性別に見える？」

「……初対面だったら女の子って思う」

「初対面じゃない今は？」

「……正直判定しづらい……あ、これが環境とかで意識が変わってくるって事？」

先程と同じように、納得して手を叩くグラン。教える楽しみがあるのか、カリオストロは自慢げな顔を続行したままグランに説明をしていた。

「そういう事だ。俺様を知らない奴は、俺様を美少女だと思うだろう？けど俺様を知っているグランや他の奴らは、俺の事を見た目は美少

女だと言うが中身で混乱する……って事だ」

「なるほど……で、カリオストロの性別は？」

「今は美少女って事にしとけ、というかしら」

「はーい」

「精神性の話も似たようなもんだ、全く同じ人間でも成長過程で変わってくるんだから、精神ってのは明確にグループ分けできるもんじゃねえ。そこら辺は魂と似たようなもんだ」

カリオストロはそう言って椅子に座り直す。先程までの自慢げな顔はどこへやら、一転して真面目な顔になっていた。

「……ん？ならカリオストロはカリオストロの事を——」

「美少女だと思ってるよ☆」

「だよね……ん？」

ここで、グランはある一つの結論に達した。環境が変わってくるという話ならば、男だった時代よりも女だった時代の方が長いカリオストロは、その環境要因的に『女』ではないかと。

成長過程で、ある程度精神が成熟するのは自分の肉体もまた大きくなって成熟するからである。だが、カリオストロは所謂負けず嫌いなところがあり、少々子供っぽい性格をしているともグランは思っていた。

ならば、文字通りカリオストロの精神は今『美少女』なのではないか？という結論に達した。

「どうした？」

「……ん？いやなんでもないよ」

そう返事するが、今グランの頭の中ではカリオストロの精神性の立証でいっぱいになっていた。

カリオストロが美少女なのは内外ともに間違いがないだろう。しかし、彼女が生娘的な反応をするのか、メーテラのように男と遊ぶことに慣れている反応をするか……という疑問に立っていた。

だが、プライドの高いカリオストロの事である。決して他の男達と遊んでいるような美少女では無いだろうと考えて、グランは生娘的な反応が帰ってくると考えていた。

「……お前、変なこと考えてねえだろうな？」

だが、実際どうなるかはわからない。それを確かめる為には女性が恥ずかしがるようなことをすれば、判明するのだろうとグランの思考は明後日の方向に飛び始めていた。

「……ねえ、カリオストロ」

「な、なんだよ」

「ちよつとスカート捲ら——」

瞬間、グランの床下が開いてグランは部屋から強制退出を食らう。その一瞬の出来事で、カリオストロは反応出来ずにグランが居なくなって困惑してしまっていた。

「……え、ちよ、おい……グラン？ グラァーン!?」

因みにここはグランサイファー最下層部に位置する部屋である。つまり、ここから真下に落ちたということは、グランはそのまま外に投げ飛ばされてしまっていることになる。

「うわっ!? マジで空に投げ出されてるじゃねえか!! い、今助けて——」

「その必要はありません」

「うお!?!、リーシャかよ……というかグランが落ちたんだが!?!」

「安心してください、下に独立飛行が可能なメンバーを配置していたので無事です」

「ああそうだったのかそりやよかつ……おい待て、つまりお前が落とされたのか?」

本を構えながら、カリオストロは構える。目を離れた隙に、空いた床は自動で勝手に閉まっているのだが、それを気にしている余裕はなかった。

「私……ではありませんね。この番組を企画した際に、密かに団長さんが位置する場所を自動で開閉する様に改造したんです。勿論手伝いもありましたが」

「な、何の為にそんなことを……」

「今のように団員にセクハラ行為、または発言等を行った場合にああやって団長さんに罰を与えることにしています。」



「そ、そうか……」

別にグランだったら構わない……と考えているカリオストロだったが、それは口に出さない。自分の方が強いはずなのに、今はリーシャに勝てる気が何故かしないからである。今下手なことを言えば、何をされるか分かったものでは無い。

「でもあいつ、何だかんだああいう自分に起こるハプニングは、番組的に美味しいとか思っただが」

「……それはそれで困りますね、他の女性団員にセクハラしては駄目なんです」

『他の』という言葉で引つ掛かりを覚えたカリオストロだったが、それはもうある意味いつもの事なので華麗にスルー。グランがいなくなっているのです、既にもうこの部屋に用はないのでそのまま帰ろうとしました……時である。

「ああ、今回の初回の感想は艇のメンバーに自由記入のアンケートを出す人だけ出していますので、カリオストロさんの部屋に送らせていただきますね」

「おう」

感想は『カリオストロまじ美少女』みたいな意見か自分が今以上に美少女になる意見以外求めていないが、まあ後で拝見させてもらおうと思ったカリオストロであった。

後今から個人的な理由で、密かにグランの部屋に行こうとも思っているのであった。

「……感想つてこれか」

後日、カリオストロは受け取ったアンケートを手を取っていた。かなりの団員がいたが、そのほとんどが書いていたようでまるで辞書のようになっていた。

「……まあどれもこれも差し当たりない意見ばかりだな……ん？」

全員が差し当たりのない変わらない意見の中、カリオストロは一枚のアンケート用紙に目をつけた。

紙は無記名なので、本来は誰が書いたのかわからないはずなのだが、それだけは誰が書いたのか一目瞭然だった。

『師匠、結局グランにスカート捲らせたの？』

「……クラリスか。あいつ無記名アンケートに何質問書いてんだ……うわ、このアンケート質問ありな上に、されたら返さねえといけねえのかよ……」

カリオストロは正直どう書くか迷ったしなんなら面倒だと思っただが、それでも何と回答したものかと悩んだ。そして、1つの答えに達した。

『既に風呂も一緒に入った仲だから問題は無いよ☆』で良いだろ、嘘だけだ」

そこまでの仲にはなっていないのが、悲しい現実である。だが、何となく弟子に先を越されるというのは、嫌だったので嘘でも既成事実として広めておいてやろうと、カリオストロはそういう結論になったのであった。

「……で、これどうすれば……ああ扉のポストに入れときや勝手に回収してくれんのか」

便利なものだと適当に考えながら、自分の部屋のポストにカリオストロはアンケートで質問があった用紙全てに返事をして、それらを全てポストに入れた。

「さて……今日もグランのどこ行くか」

そして、そのままグランの部屋に向かうカリオストロなのであった。因みに、あの後カリオストロがグランに落ちた感想を聞くと『なんかすごい気持ちよかった』と答えているのであった。

灼脚の麗姫、あたし着いていけてる？

「第2回団長相談室、ゲストはアリーザさんです」

「どうもー!!アリーザです!!誰かあたしと勝負してみない!？」

「はい騎空艇で暴れないでね、この団で暴れるメンバーみんな強すぎて、船が本当に壊れちゃうから」

第2回団長相談室、部屋に招かれたアリーザは元気よく大声で自己紹介していた。それを、グランは冷静に流していた。第1回の時と同じく、BGMが流れているが、アリーザはそれを気にしない。

「で、前の時に思ったんだけどいい?」

「え、何?」

「これってさ、団長相談室って名前だけど団長』に』相談するんじゃないかって、団長『が』相談するってこと?」

「よく気づいたな正解だ。特に何もやれないけど」

アリーザは元気よく話しているが、グランは淡々と進めていた。相も変わらずBGMは鳴り止まらずに流れていた。

「ていうかこの音楽何?」

「なんか、『無茶振りしても許されるBGM』らしい。魔法的なものではなくて、ただそう言われてるだけだが」

「それ多分BGMじゃなくて、人の問題だと思うな」

椅子に座って、置いてある飲み物を直ぐに飲み干してアリーザは元気に座り直す。グランは、相変わらずアリーザから視線を外さずに淡々としていた。

「で、呼ばれたってことはあたしに何か聞きたいことがあるって事?」

「うん、いやというか多分さ……アリーザと組んだ人達から男女問わずに来ている質問なんだけどさ」

「うん」

「なんでパンツ隠さないの?」

グランの淡々とした質問、だが先程まで活発になっていたアリーザまでもが沈黙してしまう。いや、沈黙というよりはいきなりの質問で思考が追いついていないという方が適切である。

「……パンツ?」

「パンツ」

「……あ、蹴る時?」

「蹴る時」

短い単語で会話をする2人、しかしアリーザは今のやりとりで納得したのか安堵の息を漏らしていた。

「ああ、あたし下に履いてるのアレパンツじゃ……ああいや下着じゃないよ」

「え、そうなの?でも服の下に履いてるじゃん」

「スパッツみたいなものだよ、本当に見せちゃあいけない下着が見えてたら大変だよ」

「ああ確かにそうだな、下着なんて見えてたらやばいもんな」

下着みたいな格好している団員もいるし、なんなら下着付けてますか?と聞きたくなるような格好の団員もいるので、見える見えない以前の問題なのだが。

「というか前回は第1回だったからな、第2回ということもあってかいろんな団員のいろんな質問を受け取っている」

「どゆこと?」

「まあ、要するにアリーザ宛に質問が来ているって話だ。」

「へー、どんな質問が多いの?」

グランが取り出した小さなダンボール箱。その中には束になっている紙がいくつも入っており、グランは無作為にその中から1つを取り出して読み上げていく。

「んー……じゃあ1つ目『そんなに活発に動き回って胸痛くならないの?』」

「え……ああいや、ちゃんと胸固定出来るものは付けてあるよ?というか誰、これ質問したの」

「名前を知られたくない時は仮名か無記名だが……あ、これソーンって書いてある」

「ソーンさん……」

同性だから気になっていたのか、ソーンからの質問に俯くアリー

ザ。ドラフ族特有の体型は、他の種族の者達も気になってるようだ。

「えー、じゃあ2つ目……『パンツが気にならない蹴りの仕方を教えてほしい』これシルヴァだね」

「うーん、さつきも言ったけど、これ本当のパンツ見せないようにするためだしなー」

「予定が合ったら今度一緒にそういうの買いに行こうね〜」

「えー、まあとりあえずこれで一旦最後にしてみよう。『どうやったらそんな風に大きくなれるのですか!?』……ってシャルロッテ騎士団長さんが悩んでますけど」

「いや、種族的な体型はもうどうしようもないんじゃないかなあ……」  
シャルロッテからの質問に、アリーザはゲンナリしながら答えていく。そして、完全に突っ伏しながら顔だけを上げてグランの方に視線を向ける。

「うーん……身長が小さいから、胸が大きいのって案外結構しんどいんだよ。」

「それ、他のドラフ以外の女性の前で言ってみな。多分すごい目で見られると思うから」

「そういうものかな？」

「他の種族、つてのは分かってるだろうけどそれでも羨ましくはなるもんだろ？俺だって、ドラフ男性の身長の大きさとか筋肉の付き方とか、結構羨ましいと思ってるしさ」

グランの言葉に、アリーザは少々納得していないようだが、ドラフ男性の体格のことを出されて思う部分があったのか、どうやら概ね納得してくれたようだ。

「まあ、そういうものなんだって言うのは理解出来たかも」

「理解出来たならよろしい」

「……そう言えば、今回は落とされないんだね？」

「あ、パンツの話の時に？」

「うん」

自分が質問されることはあまり考えてなかったのか、グランは意外

そんな顔になっていた。

アリーザも、そこが気になっているのか姿勢を直してグランの事をじっと見ていた。

「いや、あれリーシャも気になってた話題だったんだよね」

「あ、そうだったんだ……にしても皆気になるなら聞けばいいのにね」

「え」

「え」

驚いた声を上げるグランに対して、アリーザも意外そうな声で返していた。そして今そこでなんで驚くのか、と言わんばかりの表情をグランに向けていた。

「いや、お前さすがにそれはないわ」

「え、なんで？」

「え、じゃあ逆にスタンがアリーザ以外に『今日何色のパンツ履いてますか?』とか聞いていいの?」

「そんなのいい訳ないじゃん」

「そういう事だぞ?」

「ん?……あ、もしかして普通にセクハラ?」

全くその可能性に行き着いていなかったのか、アリーザは意外そうな顔でそう答えていた。

グランは少しだけ呆れていたが、しかしそこがまたアリーザらしいと言えばアリーザらしいので、あまり強く言わない方がいいとそれ以上のツツコミは控えた。

「逆になんてお前セクハラになんないと思ってたの?」

「いやあ、いつも見せてるものに対して聞かれることがセクハラになるとは……」

「アリーザからしてみればいつも見せてるものだろうけど、他の人達から見たらパンツ見えてるよ、って言うに言えない状況だからな」

「え、なんで?」

「パンツ見えてるって意外と言えないもんだよ、異性には」

「男って不憫だね」

「単純に性別の問題だから男どうこうって話じゃないけどな、隣の芝

生は青いって奴だ……使い方違うなこれ」

自分で言ってから悩むグラン。その様子を眺めながら、お代わりしたジュースをアリーザは飲み干していた。

「……そう言えば、ドラフ族って寝る時どうしてんの？」

「寝る時？」

「いや、角があるから横向きになれないじゃん？かと言って男はともかく女性はうつ伏せもキツそうだし」

「あー、やっぱりそう思うんだ」

明るく微笑みながら、アリーザは深く座り直す。そして自分の角を指さしながら答え始める。

「まあほとんどその通りなんだよね。確かに、うつ伏せなんて出来るのはほんとに小さい時だけだよ」

「ヤイアですらあれだから……ドラフ女性って成熟しやすいのか？」

「そうなんじゃない？他の人の意見も聞いてみないとわからないけどさ、ハーヴィン族よりは大きいとはいえ、ヒューマンの10代前半くらいの身長しかないから肉体的にはかなり早く早熟するんだろうね」  
ヤイアの例もあるので、早熟しやすいと言われればそういう物なのだろうと納得はできる。

グランはこの団にいる色々な女性ドラフの事を思い出しながら、うんうんと頷いていた。

「あ、話題戻していい？」

「え、何？」

「胸固定出来る下着って割と頑丈なやつ？」

何故か下着のことを聞き始めるグランに、アリーザは目を点にした。もしかしてそういう趣味があるのか？と思ってしまうほどに頭が混乱していた。

「え、何でそんなの聞くの？グランも付けるの？」

「なんで俺がつけるんだよ……そうじゃなくて、この間依頼に行った時にソフィアとシルヴァの下着が壊れたって話してたからさ、できれば教えてあげて欲しいなって」

「それくらいならいいけど、ちよつとビックリしちゃった」

「オーダーメイドじゃない限りは、出来る限りいいお店は紹介しあつた方がいいしな

強制はしないけど」

グランのその言葉に、3杯目のジュースを飲み干したカップを置きながら、アリーザは少し疑問を持った風でグランに喋り始める。

「グランってさ、その辺ドライだよな」

まあみんな好きに出来てるのはそれが理由なんだろうけどさ」

「まあなかよしこよしを押し付けたらダメだと思うしさ。これだけ大きな団になってくると、全員が全員手を繋いでお店に行こう……なんて出来るとは思ってたないよ

皆違つて皆いいつて奴」

「ふーん……まあ、いろんな人乗つてるから価値観の違いすごいよねこー」

「王族から村人まで、老人から子供まで……色んな人がいるな、確かに」

色々な団員を思い出していきながら、グランはこの団の多種多様性を改めて思い知っていた。自分が団長ということも忘れて。

「価値観が違うから、他種族間の恋愛とかの話も聞く時あるからね」

「1番の例がお前達だけだな」

「あ、そういうええさっきの体型の話に戻るんだけどさ」

「お前が戻すのか……」

急に話を戻すアリーザ。苦笑いしながらも、グランは話を聞くことにする。すると突然、アリーザは自分の胸を両手で持ち上げ始める。

「ドラフの女性ってみんなこんな胸大きいけど、他の種族から見てもう見えてるの？」

「どう、見えてる、とは？」

グランは、ポヨンポヨン弾んでいる胸を見ながらアリーザの問いに問いで返していた。というか、話を聞いていられるほど冷静になれていない。

「だってさ、ドラフ男性つてこの胸に余り興味が湧いてないんだよね」



「何だと!？」

「ど、どっちかというと控えめな方が興奮する?とかなんとか」

「お前それどこで知った」

「この騎空団に入る前まで、お見合いが多かったけど……その時にいた人の1人かな」

グランはつい立ち上がって大声を出してしまったが、アリーザの言葉聞いて席に着く。そして、少し思考し始める。

興奮する、というのは自分とは違う部分……もしくは間違いを犯すということを意識することで初めて興奮材料たり得るのだ。つまり、エルーンはもしかしたら着込んでる人が好みなのかもしれないし、ハーヴィンは大きい人が好きなのが多いのかもしれない。あくまでグランの予想であるが。

「……そうか、なるほど……ドラフ男性ならまあ分からなくもない。見慣れたものには興奮しないから……」

「そういうもの?」

「そういうもの……だと思う」

「ふーん……」

アリーザは素っ気なく返事をする。『そういうもの』だと言われれば確かにその通りなのかもしれない。自分と同じ所に惹かれるのは、ナルシストみたいでどうにも落ち着かない感じがしたからだ。

そして、グランは何を思ったのかアリーザの胸を凝視しながらごく真面目な顔つきで、喋り始める。

「というわけでアリーザ、俺がちゃんと興奮できるかどうか確かめる為に胸をm——」

そこまで喋ったところで、グランの姿が急速に下に動く。セクハラを働き掛けていたので、別室にいるリーシャがスイッチを押したのだ。

アリーザは一瞬驚いたが、テーブル越しにグランが落ちた穴を見て苦笑いをする。

「うわあ、本当にこれ空に投げ出されるじゃん……」

今回はリーシャは現れないようで、しばらく待っていても現れな

かった。仕方なく、最後にお代わりで入れたジュースを飲んでカップを置いてから、アリーザは部屋から出ていくのであった。

「……あれ？　そう言えばポットも何も無かったけど……あのジュース、誰がお代わり入れてたんだろ……他に、誰もいなかったよね……？」

……少し、考えて怖くなったのでアリーザはそのことに関しては特に何も考えないでおこう……と、思ったのであった。

絢爛の紡ぎ手、フレキシブルにいけるかしら？

「ハッピーエンド以外認めない、コルワよ。服のデザインのことなら私に任せて頂戴」

「……はい、というわけで先行されましたが、コルワさんです。服の修理とかのことならほんとにすごいからこの人。でも、ちゃんとお金は払おうな」

「別に団内料金でもいいのよ？」

「嫌ダメだから……特別扱いだめ、絶対」

グランは渋い顔をしながら、両腕で×印を作る。コルワは頭の耳を動かしながら、クスリと微笑んでいた。

「……で、コルワ的に俺ってハッピーエンド出来そう？」

「未来予知なんて出来ないわよ？」

「ああいや、そうじゃなくて……何かあるじゃんほら、『この人結婚できなさそうだなあ』とかそう言うの。主観でいいから教えてくれない？」

「なら……」

そう言ってコルワは考え込み始める。グランは何だかんだ言っても団の皆に慕われている。友情、愛情……そして劣——

「いやいやいやいやいやいやいや！」

「うわっ!?!どしたの……そんなに俺ダメ？」

「へ!?!あ、えつと……ちよ、ちよつと妄想がすぎただけよ」

笑って誤魔化すコルワだが、いやらしい妄想をしたために、赤面している事までは隠せない。無論、自分とグランでした妄想である。

しかし、殆どの女性団員が彼のことを慕っている。愛の文字がつき、恋で慕っている。

「周りが認めれば凄く大きくて多いハッピーエンド、認められなかったら……戦争ね」

「え、何それ怖いんだけど……因みにコルワは認める派？」

「……ハッピーエンドに迎えるから認め……ああでも……」

悩み始めるコルワ。この話題を軽く振ったはいいものの、どうやら

コルワにとってかなり集中しなければならぬ事案らしい。とりあえずこのままではただの思考映像なので、話を変えることにした。

「コルワ、とりあえずコルワに対していっばい質問来てるから何枚か読んでいい?」

「あ、いいわよ?」

「ん、じゃあまずは……『お仕事で困った事ありますか、誰かに手伝いを頼んだ時がありますか』……無記名だから誰か分からないな」

その質問に対して、コルワは考え込んでいた。自分の記憶を辿っているのだろう。どうやら、無いことは無いらしい。

「そうね、何かの絵を服に描いてくれ……って言われた時はどうしようかと思っただわね。」

だから基本、私はそういった仕事は前までパスしてたわ」

「絵描けないの?」

「そういうわけじゃないのだけれど……ほら、私の性格がね?」

「あ、本気でやりたいからこそ断ってたんだ……って、前まで?」

今はそうではないのか、とグランは問いたです。コルワ少し考えた後に、唇の前に人差し指一本を立てて『秘密』という合図を送る。

「確かに、この団に入ってからそういう仕事はしているわ。けれど相手から『名前を出さないで欲しい』って言われちゃってるのよね。」

あ、仕事内容を話すのもダメって言われてるから、言わないわよ?」

「なら聞かない。嫌な事を聞かれるのは、誰だって嫌だしね。当たり前の話だけどさ」

「そうそう、当たり前前当たり前」

「というわけで次の質問は……」

ガサゴソとダンボール箱の中身を弄りながら、グランは無作為に一枚を取り出す。そして、手に取ったそれを読上げていく。

「えーつと……『この団内で気になる人はいたり?』これは……ヘルナル……」

「気になる人、って言う……」

「ん?俺?」

「……そうじゃ、ないわよ!!」

一瞬ほかんとしたコルワだったが、直ぐにまた顔を真っ赤にする。なぜ真っ赤になるのかわからないグランは、首を傾げていた。そして、コルワは思い出したように喋り始める。

「あ、そうそう！あの子達よヴィーラちゃん達！」

「達……って言うとかタリナも？」

「それに、ローアインとファアラちゃんもよ」

意外な人選だと、グランは軽く驚いていた。コルワはそのまま気になる理由を語り始めていく。

「あの子達って恋の三角形どころか、四角形じゃない？どういったハッピーエンドに転がるか、気になってしょうがないわ」

その四角形が血で血を洗っている以上、単なるハッピーエンドで終わるわけがない……とグランは思ったが、楽しそうに語っているコルワを見て追求をやめた。

「ローアインといえば……彼ら、貴方のこと滅茶苦茶慕ってるわよね」  
「カタリナ目当てで入ってきたと思ってただけ……いや、いつの間にかかなり尊敬されてたんだよね。飯も美味しい性格もいいから、結構慕われてるのが素直に嬉しかったり」

「慕われる、って言うのはいい団長の証拠よ」

「ありがと、じゃあ次のお便り……とりあえずこれで……『種族』ごでやっぱり服の作り方って変えてますか？』、匿名希望です」

質問の言葉に、苦笑いを浮かべるコルワ。やっぱり来てしまったかと言わんばかりの表情である。

「どしたの、その顔」

「うーん、確かに種族ごとで服が違うのは当たり前なのよね……」

「やっぱりそういうものなの？」

「そういう物よ」

そう言いながら、近くにあつた紙にスラスラと何かを書き込んでいくコルワ。どうやら、各種族が好んで着る服の特徴を書いていってるようだ。

「例えば私達エルーンだと、背中や脇が空いているでしょう？」

「そうだね、凄く気になる」

「それと同じで、ハーヴィンは小さな服が好まれるのよ。場合によっては、1番作るのが難しいとも思っているわ」

「そりゃあ一体どうして?」

純粹に質問するグラン。コルワは先程書いた紙の裏に、今度はある一つの服のデザインを書き込んでいた。ヒューマンが着るような服である。

「例えばこの服ひとつ取っても、4種族分で作るとなるとかなりデザインがここから変わってくるわ」

「ハーヴィンはそのままのデザインで、寸法を小さくしてもバランスが変わらないように……エルーンは脇や背中を空けるように……ドラフは?」

「ハーヴィンとは逆、大きくしないといけないの。女性だった場合、胸囲の方で服がきつくなる可能性もあるわけだし」

「男性だと身長2m超えてるのばかりだから……確かに大きめに作らないとダメだね」

「そ、ドラフは問題ないのだけれどハーヴィンの場合、デザインを小さくするからデザインがおかしくなる時があるのよ」

「それだったら大きくするドラフも同じなんじゃ……?」

グランは詳しくないためか、申し訳なさそうに疑問を呈する。コルワは少し考え込んでから、いい例えが思いついたのか指を鳴らした。そして、笑顔でグランに向き直っていた。

「例えば、この服には色々な花が描かれたデザインにして欲しいって頼まれたとするじゃない?」

「うん」

「大きく見せる場合は、花を追加したり描く花を大きく描いたりすることも出来るけど……」

「あ、小さくすると極論花が小さすぎて描けないとか?」

「そんな所よ、花は花びらだけの存在じゃない。ちゃんと花と認識できるパーツが見えないと、それは花にならないのよ」

なるほど、と頷きながらグランは納得していた。それに満足したのか、コルワはどこか楽しげな表情を浮かべていた。

「……そう言えば、これも前気になってたことなんだけどいい?」

「何かしら?」

「エルーンって背中と脇丸出しの人多いけど女性って下着つけてるの?あれ」

「エルーンはエルーン専用の下着があるのよ」

「そんなのあるんだ……まあ、女性下着専門店なんて入ったことないし、見たことないのもあたりまえか……」

顎に指を当てて考え込むグラン。ザンクティンゼルでも、ちゃんと女性自体の下着はあった。所謂近所付き合いで、干してあるのを見かける程度であり、別にそれを見て思春期の劣情が暴走したとかそういうのではないが、それを基準で考えてしまっているためにエルーンの下着がどうなっているか気になっているのだ。

「背中空いてるけど、どうやって付けてんの……?」

「エルーンってね、ショーツとブラが1つになってるのよ、背中で固定する代わりに、二の腕やショーツと繋がって胸を固定してる感じね。

勿論、ちゃんと背中にくつつけるタイプもあるから、そっちを選んでいる人も多いわ」

「そんな感じなんだ……」

「いざと言う時、知っておかないと困るわよ?」

いつもの流れで言ってしまったコルワだったが、後から言ったことを少し後悔していた。これではまるで、エルーンと付き合うことが前提の言葉ではないかと顔を真っ赤にした。

しかし、グランの返答はどこかズレた回答となっていた。

「え、女性用下着をつける機会なんて結構無いよ?」

無論、誰かと付き合うからみたいなの解答が返ってくるとはコルワも考えていなかった。しかし、グランの言い方はまるでどこかで下着をつけたことがあるかのような言い方になっていた。

「……今のは、聞かなかった事にしてあげるわ」

「……?」

コルワの態度にグランは首を傾げたが、直ぐに何かを思いついたかのように、座り直した後にコルワに真剣な表情を向ける。

「ねえコルワ、気になるから見せてくれない?」

「へ?何を?」

「エールの下着」

「見、見たいの?」

「うん、というかほんとに形だけ結構気に——」

瞬間、グランの体が真下に向かって消えていく……と思われたが、グランは両腕を広げて何とか自分が落ちようとするのを回避していた。つまり、空いた床に対して両腕を広げること、つかえ棒のよくな状態にしているのだ。

「さ、流石に三回目ともなったら慣れてくるに決まってるでしょうが!!」

「……そ、そんなに見たいの?」

コルワはしやがみ、テールを挟んだ向こう側のグランに対して話しかける。正直、見せるくらいならどうって事ないと思っではいるのだ。しかし、グラン相手となるとコルワはまともに思考が働かない状態になっているのだ。

「気、気になるんだよ!だからその上の服を一旦脱い——」

しかし、つかえ棒にされることくらいは予想済みだったのか、グランが乗せている腕の部分だけが更に開いて、やはりと言うかなんというかグランは空に向かって落とされるのであった。

「あ……やっぱり落ちちゃったのね……」

少し残念そうにしているコルワだったが、下の方でアンチラがグランに抱きつきながらも救出してるところを見て、少し羨ましいと思ったり少し嫉妬しちやったり。

「……まあ、後で形だけなら見せてあげましょうか……」

「駄目ですからね?」

「うわああ!?!い、いつから居たのよ……」

突然聞こえてきたかと思えば、背後にはいつの間にもやらリーシャが立っていた。幾らそちらに注意を向けていなかったからと言っても、ドアの音すら立てないで入ってきたことは恐怖でしかない。

「団内の風紀を乱すことは許しません。例えば、下着を見せるだけで



あってもその下着を着ている状態を見せることは、団内最悪の事態を巻き起こすことになります」

「……最悪の事態?」

「最終的に、団内には団長さんの子供だらけになります……母親は皆別で」

「あのね、リーシャちゃん。流石にそれは飛躍しすぎよ?服を作ったら失血死した、ってレベルで明後日の方向にぶっ飛んでるわよ?」

コルワは、リーシャがこんな思考が明後日の方向にいつてる少女だっただろうか?と思ってしまう。もつとまともなタイプだと思っていたが、団長が絡むとどこかおかしくなるようだった。

「まあ……団長さんモテるものね」

「……はい」

コルワが苦笑しながらリーシャの頭を撫でる。それで少し落ち着いていたのか、リーシャは落ち込みながら素直に撫でられていた。

「じゃあ、私部屋に戻るわ」

「あ、はい……あ、質問とかの回答お願いしますね」

「ええ、分かってるわよ」

そう言っつて、コルワは部屋から出ていく。そしてその後リーシャは空いた床を元に戻していくのであった。

因みに、落ちるのが3回目ともなつて慣れたのか、グランは落ちることに對してあまり驚かなくなっていたし、落ち方も考えておこうかと思うようになっていたのであった。

神託の妖童、共に歩めるのかい？

「はい、というわけで今回はアルルメイヤさんです」  
「よろしく」

「椅子の高さあつてる？」

「心配しなくとも、水晶の上に乗ってるから」

「ああ、あのでかいヤツね」

最初から軽い会話をしながら、グランとアルルメイヤは会話を行っていく。アルルメイヤはハーヴィンなので、椅子の高さがほかの種族と比べて合うかどうか分らなかったからだ。

「アルルメイヤってさ、未来予知出来るんだよね」

「まあね、私はあまり行おうとは思わないが」

「水晶で見るんだよね」

「……？ああ、と言っても見えるのは私だけで他の人には見えないよ？」

「その角は？」

グランの質問により、アルルメイヤは沈黙する。未来を見るのに、水晶を透して見るのならば、一体頭につけてる角のような飾りは一体何なのか。グランは前からそれだけが気になっていたのだ。

「……ほら、雰囲気であるだろう？」

「え、ほんとにそんな理由？」

「冗談だ。オシヤレだよオシヤレ」

「そっちの方がいいよ、いや俺の個人的な考えだけどさ」

少しだけ安堵したかのような息を出しながら、グランは椅子に座り直す。そしていつもの如く質問箱をいじって中から無作為にお便りを取り出す。

「というわけで急ですが、質問コーナーです」

「どんだん来たまえ」

『私、結婚できそうか？』ってイルザさん……何故こんな……』

「悪いが、私は個人のための未来予知はしないんだ。だから、自分で掴み取ってくれという他ない」

苦笑をしているグランに変わって、アルルメイヤは淡々と進めていく。無論、妖艶な微笑はちゃんと出してはいるのだが。

「はい次『この前グランの部屋に入ってきましたが、何か用事でもあったのですか？あんな真夜中に』……これ、ヘルエスだけど……」

ヘルエスからの質問。無作為に取り出したので、全く何かを意識した訳でもない。あまりの不意打ちの質問にグランとアルルメイヤ、両名珍しく焦って訂正を始める。

「待ってくれ……ヘルエス、君は何か勘違いをしている。確かに真夜中に入ってしまったことは確かだが、あれは本当に用事があつたんだ……」

「そうそう、アルルメイヤはうちの団のハーヴィンググループリーダーその1だからね。偶にそうやって報告させてもらってるんだよ、うん。もう次行こう次」

後でヘルエスに弁明するとして、グランは次のお便りを取り出す。先程みたいな質問は、なるべく引き当てたくないところではあるのだ。

「お、これは……『未来予知してみようかな、と思った個人っていますか？』……匿名希望か」

「まあ、個人に対しての未来予知をしようとは思っていないが……敢えて言うなら、自分だろうか」

「自分？つまりアルルメイヤ自身って事？」

「ああ……自分に降りかかる厄災、と言うよりかは自分のこれからを見てみようと思ったことは、今でもあるね」

「へー、どういうこと見たいと思ったの？」

アルルメイヤは少し考えながら、カメラの方に視線を一瞬だけ移す。無論、すぐに戻したがグランにはバツチリと気づかれてしまっている。

「……いや、ここでは言わないでおこう。というか、言えるようなものでもないからね」

「そっか、ならいいや」

「いつもは三通だが……テンポが早いせいで凄く早く終わったように

「思えるな」

「まあ、ほんとにテキパキ進んでいったからね……アルルメイヤに聞きたいことって、実はあんまり無かったりするし」

「私は眼中に無いかい？」

「そういう言い方は反則だよ。アルルメイヤで気になることを聞いたら、大体すぐに教えてくれたり、気になってることを察して教えてくれるじゃん？だからだよ」

手で静止のようなポーズをして、アルルメイヤを少し叱るグラン。それが彼女にとって何か気に入る要素があったのか、彼女は微笑んでいるだけだった。

「そう言ってくれるだけでも嬉しいよ……ああそうだ、君に少しだけ聞きたいことがあるんだ」

「お、逆パターン……何何、どんどん聞いてって」

「ハーヴェインの女性は恋愛対象かい？」

「……えらくストレートに聞いてくるね。ハーヴェインの女性かあ……」

ウンウンと考え始めるグラン。アルルメイヤはその様子をじっと見つめていた。

「……うーん、そもそも好きになった女性が自分のタイプだと思ってるんだよね。だから、ハーヴェインだとかドラフだとかエルーんだとか……そういうのはあんまり意識してないかも」

「そうか、ある意味安心したよ」

「ていうか、今の質問って……」

「いや何、君はなにぶん女性に好意を持たれやすいからね。ハーヴェインの女性から告白される時もあると思っただけさ」

「なるほど……まあ俺がモテるかどうかはともかくとして、まあそう言ったことも限りなく低いけどありそうな……」

微笑んだまま、アルルメイヤはじっとグランを見つめていた。そして内心、グランは自分の事に関してほとんど自己評価が低いと確信していた。

「君はもう少し自分に自信を持ったらどうだい？」

「とは言っても……みんな、俺の実力とか人柄を認めてくれてるけど……それが恋愛的な意味での好意に繋がるかは別じゃない？」

「めんどくさいね、君」

「はつきり言われた……」

「まあ、この場合示さない方も悪いといえは悪いだろうけど……ところで、最近異性とどんな過ごし方をしていたんだい？」

「異性？うーんと、ちよつと待ってここ一週間の記憶辿るから……」

そう言つて、グランは再び考え始める。団長が相談室する場所だったはずなのだが、どうやら今回に限っては立場が逆転していると2人ともうつすらと考えていた。

「1週間前は？」

「えーつと……ゼタと出かけて、服一緒に見に行ったりした。その後にはベアトリクスと一緒に団の子供達用のケーキを作って、その後にはイルザさんと2人でカフェに行った……かな」

「六日前」

「早朝にヴァジラとお散歩して、朝にマキラと一緒に機械のパーツを買いに。昼にはアンチラと一緒にお昼寝……で、夜にアニラの持つて羊のぬいぐるみの洗濯が終わったから、部屋に行つて渡してきたついでにいくらか話した」

「五日前」

「朝から夕方までユエルとソシエと一緒に出かけてた」

「四日前」

「依頼を受けてたから、フィーナとカルバ、それにマリーと一緒に出かけたかなあ……やたら変なトラップが多い場所でさあ、皆でやたら水被ったりしてた」

「……三日前」

「ヴィーラとファラが料理対決してたから、審査員やってた」

「一昨日」

「ベルセルクのジョブで、ナルメアとフォルテと3人で稽古してて……その後に街の武器屋とかに寄つてた」

「昨日」

「一日中クラリスとカリオストロと一緒に勉強してた、錬金術の」

「ここ一週間の予定を聞いても、アルルメイヤは微笑みを崩さない。だが、その内心は羨望と嫉妬が少しだけあった。無論、その対象はグラン相手ではなく彼らと過ごした女性達に対して、なのだが。」

「……最近私に構ってくれていないね」

「じゃあ、明日1日アルルメイヤに付き合おうよ?」

「……本当かい?」

「うん」

「言質は取った、ならば明日は……いや、日付が変わった瞬間から私に付き合ってもらおうよ」

「随分ときつちりしてる事で……まあ、別にいいけどね」

やけに嬉しそうなアルルメイヤを見て、グランもまた嬉しくなっていた。が、直ぐにその気持ちは消えていた。何故ならば、リーシャがドアの隙間から凄まじい眼光を飛ばしていたからだ。

「……」

「グラン?」

「い、いやなんでもないよ……」

風紀が乱れている、と言われてしまえばそれだけで済むのだが、どうにもそれだけじゃないような気がしているのだ。しかしその原因が詳しくわからない以上、グランもあのリーシャを無視する他ないのだ。

「……?」

「そ!それより、さ……アルルメイヤって偶に未来予知してくれるよね」

「どう言ったことなら個人のための未来予知をしてくれるの?」

「基本的にその人物に危険が訪れる場合だね。例えば、君が今から吹き飛ばされる未来を見た場合、私は吹き飛ばされないように君の立ち位置を変える……なんてことも出来る」

「因みに今の俺が吹き飛ばされる、って言うのは?」

「無論、ただの例え話さ」

「ならよかった」

落ちるのでは無く、吹き飛ばされるといふ状況とその光景がわからない以上、グランは吹き飛ばされるのならば安心は出来ないと考えていた。普通、落ちることも不安に感じるもののだが、慣れてしまっているグランにとつて落ちることは不安を煽るものでは無いのだ。

「ところで……ふと気になったことだが」

「何？」

「ハーヴィンに性的な要素は求めるかい？」

「待つて待つて、え、どういうこと？」

「いや……いつもならば、そろそろセクシャルハラスメントの1つや2つやり始めている頃だと思つてね」

「それを言われてセクハラをするほど俺は大胆な男だと思つてるの？」

真顔で返すグランだったが、アルルメイヤは表情一つ変えずにさらにそこから切り返していく。

「目の前にヘルエスがいて、今のような話題を振られたらどうする？」

「背中を指で撫で——」

そして、グランは落下した。まさか自分ではなく、この場にいらないヘルエスに対するセクハラで落ちるとは、アルルメイヤも分からなかったのだ。と言うよりも、予知しなくても落ちること自体は分かっている話なのだが。

「やはり、運命は変えられないか……」

虚空を見つめるアルルメイヤ。その瞳には何を見据えているのか……それは、彼女だけにしかわからない事である。

少しだけ虚空を見つめたあと、アルルメイヤは椅子から降りてそのまま部屋を出ていった。既にグランのいない部屋は、彼女にとっている必要のない場所である。

「アルルメイヤさん、ひとついいですか」

「リーシャかい？一体どうしたんだい？」

「団長さんの部屋に、夜行っているという話について聞きたいので部屋まで同行願います」

「……私の運命も、変えること能わず…か……」

そしてそのままアルルメイヤは、リーシャに引つ張られて自分の部屋とはまた違う部屋へと連れていかれるのであった。

「やれやれ、まさか3時間の拘束とはね……秩序の騎空団は恐ろしい……」

アルルメイヤは、自室に戻ってからぐったりとして横になっていた。しばらく、思考を回さずにベッドで横たわりながらぼーっとしていたが、ふとあることに気付いて起き上がる。

「……もしかして、私はセクハラをされる対象ではないということか？」

本来、女性はそのようなことは望まないはずなのだが、自分だけセクハラをされなかったことがどうにも気になってしまった。そして、自分が女性として見られていないのでは？という考えも持った。

「最初はハーヴィンはそういった対象に入らないと思っていたが……シャルロットやルナールは、彼からかなり愛されて……愛されて……？」

シャルロットやルナールがグランと関わっている事を、ふとアルルメイヤは思い出していた。だがよく考えてみれば、グランが2人と関わる時はシャルロットはまるで我が子のような扱い方であり、ルナールはまるで我が子を見るかのような母親のような目で見ていることが多かった。

「……やはりハーヴィンは恋愛対象では無いのか……？少し確認に



……」

そうして、グランに聞きに行こうと思ったアルルメイヤだったが、部屋の扉を見た瞬間にその考えは改めた。何故ならば、リーシャがドアの隙間から覗き込んでいたからだ。

「……今度にしよう」

そうして、アルルメイヤは全てを頭の中から捨てて眠りに没頭し始める。正直ドア付近が恐怖の塊そのものなので、全く寝られないのだがそれでも寝ようと没頭するのであった。

醒竜姫、私迷わないかな？

「はい、段々と色々慣れてきたところで第五回目のゲストはグレアさんです」

「よ、よろしく」

いつものBGMが流れながら、グランとグレアはお互いに座っていた。グレアの尻尾が妙にソワソワしているかのような動きが、まるで犬を連想させるのでグランはとてもグレアが愛らしく思っていた。当然、自分の娘が可愛いとか姪が可愛いとか……そう言った類のものではあるが。

「早速だけど、まず1つ」

「何かな、団長さん」

「グレアってスカートに尻尾用に穴あけないの？」

首を傾げて聞くグランに、グレアは困ったかのように目を逸らして頬を掻いていた。その反応に、グランも更に首をかしげていた。

「ど、どうしてそう思ったのかな？」

「いや、ユエルとかソシエは尻尾あるけど穴開けたりして、そこから尻尾通してるから……でもグレアはそうじゃないみたいだし……」

「……笑わない？」

「そういった話では俺は笑わないよ」

少し顔を赤くしたグレア。そして、さらに顔を真っ赤にしながらソボソと呟き始める。

「……が……から……」

「ん？」

グランは耳を近づけて、聞き取れないグレアの声を聞こうとする。グレアはそれを察してくれたのか、もう一度……最早ゆでダコなのではないかと思えるほどに顔を真っ赤にして、何とかグランに伝えようとする。

「あ、穴を開けたら……スカートがちぎれちゃったから……!」

「……あー」

グランは納得しながら離れた。ここで1つ、ユエルやソシエとグレ

アの違いを述べよう。

まず、前者の2人は尻尾の大半が獣のように毛で出来ている。あの二人の尻尾はもふもふだが、それは毛の塊に空気が入っているからである。そして、毛の塊であるならばある程度尻尾が小さくても通せるのだ。狭いところを通る猫のようなものである。

対して、グレアは竜と人間のハーフである。その尻尾は竜のものであり、それには毛が存在していないのだ。多少の小さいものはあるかもしれないが、どちらかと言えばグレアの尻尾には鱗が多い為に、猫や犬のように多少小さくても通る……と言った事が出来ないのだ。

つまり、グレアの来ているマナリアの制服でグレアの尻尾用の穴を開けると、スカートがちぎれやすくなってしまふということである。

「そんな理由なら仕方ない……とは言っても、スカートの下から尻尾通すのって下着見ええない？」

「そもそも尻尾が大きすぎるから見ええないよ」

という事は下着は履いていないのだろうか、と真面目な顔をしてグランは考えていたが、さすがにそれを今ここで言うとは早速落とされそうな気がするので辞めておいた。

「そう言えば、私には質問のお供りは届いているの？」

「あるよー、割といっぱいだけどランダムで三通だから選ばれなかった人は嘆かなくてもいいよ……つとまずは一枚目」

グランはいつも通りダンボール箱を手に取り、そこから無作為に1枚を取り出していった。

『何食べればそこまで大きくなるの？』……イオからだ」

「大きく……えつと、イオは成長期だからいっぱいご飯食べれば、身長は伸びると思うよ」

そうじゃない、聞いているのは驚異的な胸囲の話だろうとグラン内心でツツコミを入れた。知っている人は知っているだろうが、この娘はかなりの純情である。

「グレア、そうじゃない」

「へ？」

「Bの話」

「びーのはなし……？」

やんわりと伝えたが、伝わらなかった。グレアは首を傾げてしまつて、なんのこっちゃと言いたげな表情を浮かべていた。

「……ああいや、後でイオから直接聞くといいよ。というわけで2通目いってみようかな……」ツバサ君のことはどう思ってますか?」アンからだよ」

「ツバサ……って確かあの乗り物に乗っている男子だよね……見た目はアレだけど……でも、いい人だと思う。エルモート先生みたいに、素直じゃないタイプなのかもね」

微笑みながら返すグレア。存外仲良くなれそうだとグランは感じていた。そして、そのまま三通目へと移る。

「『みんなのクリスマス衣装についてどう思いますか?』匿名希望」  
「寒そうな人が多いよね……もっと厚着したらいいのに、って思っても。特にクラリス……」

「ああ、本人はあれもう気にしてないみたいだけどね。やる気でカバーしてる」

「団長さんは……どう、思うの?」

「眼福」

「……そう、私も考えておく」

「……ん?今なんて——」

「そんなことより他の話題って何かある?」

グランの言葉を遮ってグレアは新しく話題を振る。お題三通のノルマは既に叶えているので、新しく話題を振ろうとするが、尻尾の話も既にしてしまっているので、新しく振る話題を考え始める。

「……あ、そう言えば団長さん」

「ん?どうしたの?」

「団長さんって、マナリアに通おうとは思わなかったの?」

「……うーん、魔法は一応使えないことも無いけど……」

「え、あれだけ使えて『一応』の範囲内なの?」

グレアは心底驚くような表情をした。今度はグランが頬を掻く番となっていた。グランも、自分が手を出すもの手を出すものを次々マ

スターしていく事に驚いているのだ。

「いや、本職と比べるとね……つて考えちゃって」

「……充分すごいと思うけど……」

自慢の剣を始め、魔法を使うようにすれば各属性の魔法を使いこなし、拳主体で戦うようになれば、並の格闘家では歯が立たないほどの筋力を持ち始め、神官になればありとあらゆる傷を回復させることが出来る。

しまいには獣の本能を持ち始めたり、魔法とは違う忍術を使いこなし始めたり、刀や銃……そして弓矢などもプロ顔負けには使いこなし始めている。

「……団長さんの言葉を聞いたら、他のプロの人達泣きそうだよね」

「え、なんで？」

「多分、そういう所で……」

グランは頭に疑問符を浮かべていたが、しかし追求しては行けないような気がして、そのまま話を終わらせることにした。

そして、別の話題をふりはじめる。

「あ、そう言えばグレアはこの団に慣れた？」

「あ、うん……皆優しい人ばかりだしね」

「そっか、それは良かったよ」

「あ……後コルワさんに服作って貰えるようになったんだよ？」

「そうなんだ、凄いでしょ？コルワの作る服って」

「うん！」

グランが微笑み、グレアが微笑み返す。グレアがこの団で楽しく暮らせていることに、グランも喜んでいるのだ。彼女は竜と人間のハイフである、人間は自分とは違うものを排除しようとする者が多いが……この団ではそれが無いというのがグレアにとっては良い環境となっているようだ。

「あ、部屋にピアノ置けた？」

「前に団長さんが買ってくれたピアノのこと？あれならちゃんと置けたよ」

「まあ、マナリアにおいてあるやつとは違うけど……」

「それでも、嬉しかったよ。私の入団祝いにくれたのは……本当に嬉しかった」

「気に入ってくれたようでよかったよ」

「団長さんって、他の人達にもこういう事ってしてるの？」

「プレゼントって事？頼まれたら基本してるよ」

グレアは納得しながら少し遠くを見るような表情になっていた。それだけ、グランが人に好かれる理由がわかったからである。無論、好かれて嬉しい気分にはなるが、複雑な気持ちにもなる。

「皆にプレゼントをあげるって、お金大丈夫なの？」

「その分稼いでるしね、依頼をいっぱいこなせばこなすほどポケットマネーも増えるし」

「団長さんも、団自体にお金を入れてるんでしょ？」

「そうじゃないとダメに決まってるしね」

「基本的に、騎空艇の中にいたり買い出しする人達とかのお小遣いだったり、必要な物資とか買うため……とかだよ」

「そうそう、とは言っても待機組も依頼を受けることあったりするんだよね」

「え？そうなの？」

意外な事実には、グレアは驚いた声を出していた。てつきり、魔物と戦うことが出来なかったりする人達もこの団にはいるので、そういった人達は依頼を受けないものだとばかり思っていたからだ。

「……あ、もしかして勘違いしてない？」

「へ？」

「依頼と言っても、魔物と戦ったりするだけじゃないんだよ。例えば『コックの数が足りないから料理得意な人は手伝ってくれ』みたいな依頼があったりするし、災害が起こった土地に行って救助活動したりするよ」

「そうだったんだ……」

「まあ、今言った2つだと活躍することが多いのはローアインとフラだけだね」

「料理上手なんだよね、その2人って」

「これがまた、すごい美味しいの。グレアも食べた事ある？」

「ないかなあ……そもそも、この団っていっぱい人いるのにご飯みんな食べに来るよね、食費ってどうなってるの？」

「平均1日20〜30万……多分もっといってると思う」

「……もう一種の施設だね、ここ」

「シエロにも言われたよ……『団長さん達の団は金の羽振りがいいですわ〜』って」

無駄に似ている声真似を披露しながら、グランはため息をついていた。団長という立場になると、色々仕事があるのでそれによるため息なのだろう。

「……でも実際お金すごい動かしてると思うよ？」

「まあ、そうだろうね……この団に所属してくれている以上、依頼達成料から残るお小遣いとは別にお給料も上げてるし……」

「あ、偶に色んな人がお金入った袋を渡しに来るのって、そういうことだったんだ……」

「よくよく考えてみると、よくお金溜まってるなって思ってたりするよ……もしかして、お金徴収しすぎてないかな……」

心配するのはそこなのか、とグレアは苦笑していた。しかし、自分よりも団員のことを心配してくれるからこそみんな着いてきてくれるのだ。

「団長さん」

「ん？」

「いつも仕事しっぱなしだし偶には休んでみたら？」

「休むって……具体的に？」

「……一日中寝るとか？」

趣味は鍛錬、暇があればナルメアやジャンヌなどといった、猛者達と戦っているようなグランの休み。考えてみれば、趣味以外で休めることなんてそうそうないし、新しく探すにしても疲れてしまっただけ元も子もない。

故に、少し考えてから提案したグレアの意見はただの惰眠を貪ることだった。

「流石に一日中は……」

「だ、だよね」

「あー、でも……皆でピクニック行きたいなあ……」

「……なら、今度二人で行ってみる？みんなが行けるような場所の下見……ってことでさ」

「いいね！じゃあ今度二人で出掛けようか！」

グランは指を鳴らして楽しそうにし始める。グランは気づいておらず、またグレアが狙った事なのだが、これはつまりデートなのである。あわよくば……みたいなことをグレアは内心考えている。当然、グランはグレアがそんなことを考えているなんて微塵も思っていない。

「ふふ……その時は、草原の上で寝てもいいかもね」

「それもいいなあ……あつ」

唐突に、何かを思い出したかのように間拔けな声を出すグラン。グレアは突然どうしたのだろうかと首を傾げていた。

「ところでグレアってさ、寝る時どういう寝方してるの？」

「へ？仰向けだと尻尾が邪魔になるし……うつ伏せだと胸が苦しいから、基本的に体は横向きにしてから頭を上に向けて寝てる感じかな……」

「なるほど、つまり寝ながら抱きついた時いい感じに胸に当たる事がア!!」

「っー」

突然大声を出すグラン。原因は、開いた床に足を当てて落ちまいとしている姿だった。段々と落ちるタイミングが分かっているようで、グラン自身対処し始めているのだ。

「だったらセクハラをしなければいいんじゃないか？という結論が出ないのはご愛嬌である。」

「だ、団長さん……引っぱってあげようか？」

「ああうんお願いグレア」

股が180を超えているかのような開きっぷりを、グランは見せていた。人体構造としてソレはどのようなかと思いつながら、グランはグレ



アが差し伸ばしてくれた手を掴んで――

「グレアさん、そういうの番組的にどうかと思います」

「きゃあああああああああ?!」

「あっ」

!!!!

突然現れたリーシャに驚き、グレアはそのまま腕を勢いよく振ってしまった。グレアが振ったのは、竜の血が濃く出ている腕の方……簡潔に言えば『力の強い方』である。そして、グランが掴んだのもそっちの腕である。

そして、グレアはグランの腕を掴んでいないので、当然振り回せばグランの手はグレアからすっぽ抜けて勢いよく飛んでいく。

グランサイファーを勢いよく飛び出し、放物線を描きながらグランははるか遠くまで飛んでいきながら、落下し始めていく。

「――だ、団長さああああああああああん!!」

腕を振ってしまったことを後悔しているグレアと、流星に驚かすのはやりすぎたと後悔しているリーシャ。2人の叫びは空に消えていくのであった。

## 相談室のおやすみ

「……」

グランは目を瞑ったまま、目を覚ましていた。と言うのも、意識が覚醒した時から身体が動かないのだ。

一体全体、何故動かないのかが分からないが、どうにも何かにのしかかられている感覚と両腕を掴まれている感覚があるのだ。そう、まるで腕ごと抱きしめられているかと言わんばかりに。

「……」

目を開きたい、しかし目を開けてそこにお化けとかいたら、正直トラウマになってしまうとグランは困っていた。今までそういったものは面と向かい合った時は、よく剣で倒せていたのだが……こういった呪い系となるもはや対処が思いつかない。

だが、グランは一つ気になっていることがあった。先程からやけに強いにおいを感じているのだ。例えるなら、というか臭ってきているのは香水そのものの匂いで……

「——ってこの匂いカリオストロカ!!」

「やったー☆団長さんは、カリオストロカの事分かってくれてるんだあ☆!」

「一瞬新手の金縛りかと思ってヒヤヒヤした!!」

「あ?なんだ、金縛りにあつたのか?」

「カリオストロカが抱きついてたからそう勘違いしただけだけだな!!」

息を荒らげながら、無理やり笑みを作ってるグラン。別にカリオストロカに怒っているわけじゃなく、ただ安心したから大声出して突っ込んでいっただけである。

「……って今日何か出かける約束してましたっけ?カリオストロカさん」

「あ?オレ様の記憶にねえしそんなのしてねえだろ?」

「……今太陽上がったばかりっぽいけど、というかなんで珍しい露出過多……それクラリスのクリスマス服だな!」

「おう、寒いからベッドに入れてくれ……もちろんお前付きで」

「ハイハイ風邪ひかないと思うけど、風邪ひかない様に被せてやる」  
そう言つて入れ替わるようにして、グランはカリオストロをベッドで寝かせて自分はベッドから降りる。早朝の朝は、この時期寒いのだ。ベッドから出たくなくなるほどに。

「……で、なんで珍しい露出過多の服きてるんですか、カリオストロさん」

「夜這いだよ」

「随分とストレートな事で……」

「……ま、まあ今のは冗談として……」

自分で言つて恥ずかしくなったのか、カリオストロは顔を真っ赤にしていた。そして、今言つたことを忘れたいのかそのまま別の話題に移していく。

「こ、この服……似合ってたか？」

「んー……まあ似合ってるよ？」

「何か歯切れの悪い言い方だな……そりゃあ、胸はあいつよりちいせえけど……」

「いや、そうじゃなくて」

「ん？」

グランは首を振つて訂正する。実際、カリオストロは綺麗で可愛いので比較的何着ても似合うのだ。グランが作った、特製のクソダサTシャツを着せても可愛かった。

「カリオストロは、いつものカリオストロの格好の方がいいよ。クリスマス衣装も、カリオストロがいつも着ている方がいいと思うし……ああ、いつものつて言つたけど前の赤中心の服も今の青中心の服も可愛いよ」

「……お、おう……あ、ありがとう……」

小声で消え入る様に、カリオストロはグランに礼を言う。しかし、不意打ちのグランの言葉に顔を真っ赤かにして、本気で照れているためその声は本当にグランにすら届かないほどに小さかった。

「さて……じゃあちよつと素振りしてくる、この時間帯に起こしてくれてありがと、カリオストロ」

「あ、おい！……別に、オレ様は寒い暑いを感じないようにしてるけどな……」

そう言つてカリオスト口は、敢えてそのままグランの布団で眠り始めるのであった。勿論、既成事実の為でしかない。

「ふん！ふん!!」

朝早い、未だ気温の低い寒空の下でグランは素振りを行っていた。1振りする事に、気合を入れ直しては直前の一振りよりも強い一振を出していく事を繰り返していた。

「あ！おいグラン!!」

「アリーザ？この時間帯に起きてるの珍しいな？」

「いやあ、目が覚めちゃってさ」

「……このまま模擬戦行くか？」

「お！いいねー！ルールはどうするの？」

「どちらかが膝をつくか、または首か胸か頭で寸止めされたら負けの三本勝負」

「よし！いっくよー!!」

開始の合図も特になく、グランとアリーザはそのまま模擬戦に突入していく。グランの得物は剣、アリーザは自慢の足である。無論、ちゃんとした装備をアリーザはつけている。じゃないと剣がまともには捌けやしないためである。

そして、2人が戦っているところを一人の女性が観察していた。

「ふふ、あの二人は張りきっているね……」

アルルメイヤである。早起きしていた彼女は暇で騎空艇内を散歩していたのだが、2人の戦っている音を聞いてここまで足を運ばせたのである。

「いっくよー!!」

「存分に！激しく!!動いてこい!!」

グランはよく分からない注文をしていた。アリーザは特に気にすることも無いが、そもそも昨日の自分どころか1分前1秒前の自分よりも早く強く激しく動こうとしているため、その注文は勝手に叶えられていた。

「はあ!!」

「いい動きだ……」

そういうグランの視線は1点に集中していた。跳ねて揺れて動き回る2つのものを凝視するために、アリーザを無駄に動かさせていた。そんな下衆な考えを、アリーザは悟った訳では無いが――

「灼龍炎牙!!」

「ちよ!?それ打つのは流石にげふい!?」

「あ」

アリーザの奥義の蹴りが、グランに向けて放たれる。剣でギリギリガードできたものの、勢いは止められないのかそのままグランは変な声を出しながら吹き飛ばされて……騎空艇の柵を壊して自由落下を始めた。

「ぐ、グラアアアアアアアアアアアアン!!」

「これは……どうしようもないね」

天罰である、とアルルメイヤはふと考えた。この世の中は、残酷なのだ。グランは悲しんでいた。特訓と男の欲望、2つを求めるものは何故救われないんだと落ちながら下唇を噛み締めるのであった。

そもそも、セクハラ目的で行動しているのが悪いのだが、それを辞めることはおそらくないだろう。

「団の女性達が一部を除いて全員漏れなく、バッドエンドなしでハッピーエンドを迎えるためには、どうすればいいと思う?」

「まあた、急にどうしたの?」

「……団長さん、自分のことをもう少し客観的に見られるようにした方がいいよ」

それから何やかんやあつて助かったあと、グランはコルワとグレアと一緒に出かけていた。グレアの新しい服の見立てる為だが、コルワがインスピレーションを得たいからと着いてきたのだ。

「え」

「そうねえ、出来れば皆が認めてくれるのなら構わないかもしれないけれど」

「待つて待つて、マジで急になんの話?」

「……確かに、唐突だったかしら?」

コルワが苦笑しながら首を傾げていた。少しだけ乗っかっていたグレアも、同じく苦笑してグランだけがよくわからないと言った表情をしていた。

「……というか着いてくるのはいいけど、俺服のこととかよく分からないよ?」

「あら、1人のプロから選ばれるより、プロアマチュア含めたいろんな人の意見を取り入れるのが、実は一番いいのよ?」

「そういうもの?」

「そういうものだよ、団長さん」

「だからグレアちゃんの新しい服、ちゃんと選んであげましょうね」

「団長だし、一人の男としても選ばせてもらうよ」

「えへへ……」

嬉しそうな顔をするグレアに、コルワはうんうんと頷いていた。売店で買った飲み物を手に、3人はぶらりぶらりと歩いていった。

「そう言えば、今回はどうやって助かったのよ？」

バハムートソード・フツルスの奥義

「レギンレイヴ+十を推進力に空飛んだらギリ助かった、なんかこう……うまい感じに操縦したら元の場所に着地できてた」

「いつも思うのだけれど、貴方マトモな人間じゃないわよね」

「いやいや、俺なんて十把一絡げだよ」

「全てが間違えてる気がするよ……」

苦笑するどころか、完全にドン引きしながらグレアは飲み物を流し込んでいた。今は太陽も完全に真上に来ており、昼時なので多少の腹も減ってくるというものである。

「あ、グレアちゃんちよつといいかしら？」

「何ですか？」

「貴方ちゃんとしたやり方で下着つけてる？」

「コルワ、慣れてるとはいえ男の目の前で下着の話を持ち出される10代女子の気持ちを考えてやって欲しい」

「……ごめんなさい、でもグランにも言えることなのよ？」

「え、男はパンツ履くだけだよ？」

「は？ちゃんと付けないと大きくならないわよ？」

「明確にどこが？なんて聞けないのが辛い……というか成人女性からこんな話振られるの初めてだよ」

くわっ！という擬音でも付きそうなほどに目を見開いて、コルワは熱弁をし始める。要約すれば、下着もちゃんとしたのを付けないといけないし、付け方もきちんとしてないといけない……という事らしい。

「……わかった？」

「……は、はい」

「……」

「グラン？」

考え込んでいるグラン、その真面目な顔にコルワも少し緊張しながらグランに話しかける。一体どこから、真面目な考えをしているのだ

ろうかと思つてふと話しかけるが――

「よく分からなかつたんで、ちよつと騎空艇でちゃんとした履き方のレッスンを男女ともに同室で」

「セクシャルハラスメントで逮捕します」

「待つて……リーシャ待つて……」

キリツとした顔で凄まじいことを言おうとしたグランだったが、突如現れたリーシャによつて手錠をかけられて連行されていく。2人はその光景を呆然としながら見守る事しか出来ないのであった。

「まさかこの時間まで正座させられるとは恐れ入った」

「君の足壊死していかないかい？」

夜、グランサイファーのとある一室でグランとアルルメイヤが一緒にいた。そのとある一室とは、簡単に言えば団長……つまりグランの部屋なのだが、今アルルメイヤはそこにいるのだ。

「それじゃあ、いつもの頼むよ」

「よしきた、俺の準備はいつでも万端だ」

そう言つて、グランはベッドの上で胡座をかいて、自分の膝を軽く叩いていた。

アルルメイヤは、グランの膝の上に頭を置いて横になっていた。無論、頭につけてる角のような髪飾りは今はつけていない。

「まったく……最近リーシャがいて、あんまり来れてなかつたもんな……アルルは大丈夫だったか？」

「いや……少し、寂しかったけどね……」



予め断っておくが、この2人は別に付き合っている訳では無い。アルルメイヤの過去、それを教えられたグランはアルルメイヤと二人きりの時は定期的に甘えさせるようにしているのだ。

好意的かと言われれば是だが、恋愛対象としてみているかと言われれば返答を返さないと言ったところだろう。未来を予知出来るアルルメイヤは、その能力上街の人から敬われることが多い。しかし、一人の人間として見られることは少なく、そうやって見てくれているグランに甘えることが多いのだ。

「こうしてないと落ち着かないんだもんな」

「私の性格が問題なんだろう……最近では、マシになってきたとも思えるが……」

「……寝れてたか？」

「寝れてたさ、さすがにそこまで子供じゃない……それに、別にずっと1人だったわけじゃない」

「リーシャを嫌わないでやってくれよ？彼女も彼女でちゃんとしたルール敷いてるんだしさ」

「ああ、そもそも彼女のルール自体は私は賛成しているんだ。恋愛自由、血を見るような争いだけは、法度……その原因となる行為も、法度。当たり前の話しさ」

「こうやってないと寂しく感じる、は私も恥ずかしいから言えないし」

頭を撫でられながら、アルルメイヤはグランの膝の上に手を置く。ズボンの上からでもわかる筋肉の硬さが、逆にアルルメイヤに安心感を持たせていた。

「……そうだな、確かに言いづらいな」

「……そう言いながら、グランは部屋の外……ドアの隙間から見えるものに視線を移していた。」

そこには、少なくともカリオストロ、コルワ、グレア、アリーザの4人がいるのだ。つまり、覗かれていた。

「……………」

さてどうしようかと頭を悩ませるグラン。アルルメイヤとしては、

この秘密は2人のものにしていたかつただろう。彼女達がそれを他に吹聴するとは全く思わないが、知らず知らずの内に増えてしまった秘密の共有者をどうするか。

「……………」

だが、向こうもこちらが気づいたことに気づいたのか、それぞれ反応を示していた。コルワは親指を真上に立ててサムズアップ、グレアとアリーザは顔を真っ赤にしながら食い入るように見ており、カリオストロは両手を合わせて頭を下げていた。珍しく謝っているな、とグランは苦笑いを返していた。

それが通じたのか、ゆつくりと音を立てないように扉は締められて彼女達はそれぞれの部屋に帰っていく。

「グラン？どうしたんだい？」

「ん？明日のご飯、どうしようかなあつて」

「…………ふふ、そうだね。寒い日だから温かいものでも食べたい気分だ」

そんな他愛もない話をしながら、グランはアルルメイヤの頭をまた撫で始めるのであった。

西の守護神、くつくどうーどうるどうー？

「少しの合間を挟みまして、はい多分第五回目団長相談室……ゲストはマキラさんです」

「どうぞよしなに……」

「突然だけどまだ余ってたゴリラTA飲む？」

「勘弁……前に録画されたの見せられた時、凄く恥ずかしかったんですよ」

「ウホウホ言ってるの可愛かったけど？」

「……」

かなりの弄りから入った団長相談室。マキラは顔を真っ赤にしながら俯いていた。それがまた可愛いとグランは強く頷いていた。

「そう言えばさ、お役目の時に着る服あるじゃん？白と赤の」

「はい……それが？」

「お役目交代の時に着てる服ってさ、みんな白と茶色の服になってるのって偶然？」

「もふもふは暖かいので……」

「……確かに暖かそう」

思い出しながら、グランは頷いていた。マキラは今はお役目交代をし終えている状態なので、モフモフの方である。

「……そう言えばさ、マキラって俺落ちてる時いつも担ぐ訳だよ、今日は代替えでもいるの？」

「プロトバハムートが待機、と……」

「ルリアめ……プロトバハムートはさすがに硬いから怪我しちゃうぞ……それほどまでに俺に女体を触らせないつもりか……」

「嫉妬、ですか……」

「まあ、それがルリアの可愛いところでもある……と、話を戻そう。マキラってルナルと仲良いよね」

「おこたの民です」

「暖かいもんなあれ……前の同人誌制作の時も一緒にいたもんね」

「……あれは、途中から記憶がないということに……」

再び顔を赤く染めながら俯くマキラ。ゴリラには、いい思い出がないようだ。しかし、それをひたすら弄って赤面させようとしているのがグランである。

「……お便りの方を……」

「ゲストの頼みなので、団長さんは聞いちやうぞー……という訳で第1通目『あの鳥ってどのくらい速度が出るんだ?』ミュオンから」

「流星に貴方の相棒よりは遅いですね……」

「というか最速が早すぎるわアレ……しかも弄り大好きグランサイファアの面々に調整という名のレベルアップされてたぞこの前」

「え、どうなったんですか」

「初速300キロ」

「死にますね……」

そんな速度でいきなり走り出したらほぼ確実に死ぬると思うが、ミュオンはどうやって生き残ったのだろうか……とマキラは不気味に思いながら疑問に感じていた。

「ともかく2通目、『鳥以外に好きな動物はいますか』」

「基本的に色んな動物が好きですよ、しかし最近羊、犬……も好きになっってきたり」

「それ、理由としてはアニラとヴァジラ……というか、ガルの影響でしょ?多分」

「全く持っただけの通り……背中に抱きついてると、柔らかいので……ついついウトウトと……」

「まあ1回触らせてもらったことあるけど、柔らかいもんね羊とか犬って」

「はい」

アニラの周りには羊が、ヴァジラには相棒にガルという犬がついている。マキラはハーヴィンなので体が小さく、羊や犬に抱きつくとなると恐らく体全体で抱きつくことが出来るのだろう。

「じゃあ三通目、『随分と、胸元の露出が激しいんだね』……アルルメイヤだ」

「胸元……お役目の時の格好のことですかね……」

「ああ、確かにサラシみたいなの赤いの1枚だけつけてたもんね」

「あの季節にあの格好は少し寒かったですよ」

「少して済むあたり、ルリアの系譜かなにかで？」

「……？彼女がどうかしたんですか？」

「いや、ルリアって年中あのワンピースなんだよね。寒い時はあれにマフラーと偶に耳あてってくらい」

「……新陳代謝が盛んなんだと思います」

「なるほど確かに……って、ハーヴェインってもしかして皆そうなの？  
全体的に新陳代謝が高いから寒さがあまり気にならないとか？」

首を傾げるグランに対して、マキラも同じように首を傾げていた。  
どうやら、その辺のことはマキラもよく分かっているらしい。今この話を続けようとしても、恐らく続かないままに終わってしまう可能性があるため、グランは咄嗟に話を変えようとする。

「あー、そうだ。今年ももう終わりが近づいてきているけど、次は亥だけどどんな子なの？」

「……それは、あつてからの楽しみです」

「そっかあ、まあ会える迄待ってみようかな」

亥……つまりは猪なのだが、どんな子かを予想しながらグランは首を縦に降って、連続で頷き始めていた。結構シユールな光景だが、グランは直ぐに正気に戻ってトークを続けていく。

「……そう言えばですね、私ちよつと気にしていることがあつて」と言うとき、

「お酒、勧められるんですよ」

「お酒？飲めないの？」

「うーん……ほら、私って一応20歳以下なので……遠慮したいんですよ」

「あ、そう言えばそうか」

「何故か、20歳以上だと見る団員さんも多くて……いえ、怒ってる訳では無いんですけど」

「16歳だもんね、マキラ」

「はい、未成年です」

西の守護神マキラ、彼女の年齢は16歳である。しかし、そのゆつたりとした喋り方のせいか、未成年ではないという見方をする団員もいるようで、それについて少し困っているのだという。

「ルナルの作業手伝っている時も、1部の手伝いだけだったんだよね?」

「はい、何故か見せられないと叫ばれながら見てないシーンの方が多かったです」

「まあ、俺たち未成年だしさ……そこはしようがないと言えばしようがないよ」

「そうですね」

サラツと言っているが、グランも未成年なのかとマキラは内心突っ込んでいた。そう言えば、ほぼ同年齢だという話を入団時にしていたような気がするということも思っていた。

「……団長君って、どんな修羅の世界に生きていたんですか?」

「え、なに急に」

「普通の……少なくとも戦うことをしようとしてる未成年は、ありとあらゆることジョブの経験値を、直ぐに達人レベルまで上げることなんて不可能だと思うんです」

「その話前もされたんだけど……別にザンクティンゼルは平凡な村だよ」

「平凡な村にはあんなに強いお婆さんとか、強力な星晶獣が眠る祠とか……無いと思うんですけど」

「あー、どうしよう今ものすごい正論が来た気がする」

返答に困るグラン。言われてみれば、平凡な村にあるものでないものばかりである。

「というか、戦う際にちよつとワープしてますよね……」

「確かに気づいたら変なところにいるよね、星晶獣と戦う時って」

「そう言えば、ルナルくんが言ってたことなんですが……」

「ルナルが?」

「星晶獣の中で、誰が一番好きか……と」

「うーん……そうだなあ……」

考え込むグラン。ぶっちゃけ、男の浪漫としてはコロツサス・マグナを推したい所なのだが、ティアマト・マグナやユグドラシル・マグナ……そしてセレスト・マグナやシュヴァリエ・マグナも推したいところなのだ。

リヴァイアサン・マグナもすきではあるが、しかし残念なことに候補には上がらなかった。

「多くて決めきれないかも……因みにマキラはなんて答えたの？」

「私はティアマト・マグナです」

「そりやまたどうして？」

「飛んでいるからです」

「なるほど……確かに自分で飛行してるもんね」

ティアマト・マグナ自身がというより、あれは竜に乗っている為飛んでいるように見えるのだが、マキラはどうもそこに親近感を覚えているようなのだ。

と、ここまで話してから1つグランは気づいたことがあった。

「なんか今日星晶獣の話ばかりかしてる気がする」

「そうですね……でも、こうやって団長君とお話出来るのは楽しいので……問題なし、です」

「そうやって貰えると、団長冥利に尽きちまうぜ……嬉しくなったので番組終了時には何でも言う事聞いちゃう」

「……では、あとで膝の上に座らせてください」

「ん？その程度でいいの？」

「はい、私にとってはとても嬉しいことなので……」

「よし、なら後で俺の部屋でゆっくりと——」

ここで床が開く。落ちるグラン、眺めるマキラ、目を開くグラン、咄嗟に持っていた武器の一つ、バハムートソード・フツルスを抜剣して咄嗟に奥義を放つ。今の彼はファイターであり、使える力には奥義を一瞬で放てるものがある。ウエポンバーストである。

それを使い、剣の力を解放……奥義であるレギンレイヴを真下に打つことで落下をせず、グランはその場で浮遊し始める。

「……って訳で、後で俺の部屋でゆっくりと……」

トントン、とグランの後ろで肩を叩く者がいた。グランはその時はその手を優しくどけて後ろは見えていなかった。代わりにマキラが珍しく青ざめた顔をしているが。

しかし、肩を叩く者は諦めず何度も何度もグランの肩は叩かれる。流石のグランもちよつとイラツときて、後ろを振り向いてしまう。

「……なんだよ、ちよつとしつこいぞ一体誰だよ俺の肩を触ってるのは——」

後ろにいたのは、体が緑色であり腹が黄色とピンクの縞模様でできている生物だった。

「……はい、律儀に落ちます」

グランは奥義を解き、自由落下を始める。その生物はそのままゆつたりと部屋から出ていき、扉は無慈悲に閉められる。

「……真の仲間」

ぼそつと呟かれた言葉は、小さかったものの確実に音を拾っていた。マキラは例に乗っ取って部屋から出る……と、部屋を出てすぐそこには何故か廊下で倒れているリーシャがいた。

「どうせ……どうせ私なんて……」

ポスターに自分がいなかったとか、めっちゃ団離れてるじゃんと言った言葉は彼女を傷つけるのだ。先程の生物の存在は、リーシャにとっては見るだけで泣き出したくなるほどの存在だったのだ。

「……」

マキラは黙って倒れているリーシャに対して両目を閉じて、手のひらどうしをくっつけてお祈りをする。きつとこれから救われる展開が来るのだろうと、どこかで思いながら彼女はリーシャも部屋も後にして自室へと戻っていく。

結局、この日はあの生物を誰も目指すことは出来なかった。聖夜の奇跡などという名目をひっさげて現れた、ツッコミ役奇跡なのだから。

「ああ……そうだ。まだメリークリスマスは……全員には言えてませんでした」

しかし既にクリスマスイブは過ぎているのだ。言ったところでもう終わってるよと言われてしまうのがオチだろう。



「……お役目交代のお手伝い……しに行つてあげましょう」

本来は1人ですべきことだが、別に手伝つては行けないという訳でもないので、ヴァジラのお役目終了のお手伝いをしようと思つたマキラ。アンチラやアニラも誘つて、ヴァジラのお手伝いをしてみんなどこかで温かいものを食べに行こう……そう考えたのであつた。

「ガチ○……………ピン……………モード……………魔境……………はっ!？」

そしてグランは目を覚ました。何故か自分が見覚えのない綺麗な虹の石を捧げて、武器や星晶獣や魔物などを手に入れようとしており、それを300回行おうとしている夢を見たのだ。随分と酔狂なことをしているもんだと、グランは夢の中の自分の事を笑つていた。どうにも、他人事のような気がしないが気にしたら負けである。

「……朝起きたら武器が増えているのは、まさかあれは実際に起こっているからなのか……………?」

グランは頭を振る。今のは、恐らく知つてはならない真実のような気がしてならないからだ。部屋で目を覚ましたグランは、次なるゲストを招くために部屋から出て相談室のセットを行うのであつた。

西南西の守護神、この世の理を知らない？

「はい、今回のゲストはアンチラさんです」

「やつほー」

「よく起きたな」

「え、酷くない？」

「起きなかつたら起きるまでハグしてた」

「……直ぐに起きなかつたらよかつたかも」

最初にある程度の会話を言い、ちゃんと話せるかどうかの確認を行う。そして、その後手を鳴らして序盤の会話を終了させる。

「とうかマキラは私服で来てくれたんだけど、アンチラはお役目の時の服なんだな」

「こつちの方が好きでしょ？」

「ああ、実に大好」

いつもより早く、床に穴が開く。自由落下し始めるグランだったが、アンチラ……の分身が両脇から支えてくれたおかげで落下せずに済んだ。

「今日は実に早いな」

「確かに早いかも……今のつて駄目なんだね」

「さすがに好きな服の話で落とされたら堪えないぞー、リーシャー」

その声が届いたのか、床は一旦閉じる。再度降ろされてから新たな椅子を用意し、グランはそれに座り直してトークを続けていく。

「まあ、リーシャが落とそうとしたのも分からんでもない」

「え、なんで？」

「いやだって、お役目の時のアンチラの服って凄い色々見」

再び床が開く、アンチラの分身が支える、グランがリーシャを説得する、床が閉じる、座り直す。今回、既に2回も扉は開かれてしまっていた。

「いや、タダの注意じゃん？え、何……マジで今回厳しいぞ」

「何でだろうなー」

「…………アンチラって何歳だっけ？」

「10歳だよ?」

「それでか……」

「へ?」

「いや、今一つの解を見出したただけだ。気にしないでくれ」

真面目な顔で何かを悟るグラン。アンチラは首を傾げながらも、言われた通りに気にしない方向でいくことにした。

「さて、十二神将2人目という訳だね。色々聞いていこうかなと」

「ふっふーん、何でも聞いてくれていいんだよ?」

「まず、勘違いされやすいからこそこの話題からいつてみよう」

「ほうほう?」

「みんな!アンチラはエルーンだからな!!」

「そうだぞー、エルーンなんだぞー!」

グランに便乗するかのように、アンチラはグランの言ったことを復唱する。自分の尻尾をチョロチョロ動かしながら、実に楽しそうに叫んでいた。

「そうなんだよねー、僕って女の子だしエルーンなんだよ」

「前に尻尾は自分でつけてるのか、みたいな事聞かれてたからね」

「生前から付いてるよー」

「いや、生前だったらお前前世も尻尾付きになっちゃうからな。せめて生まれつきと言いなさい」

「はーい」

グランに軽く注意され、アンチラは笑顔を浮かべながら返事を返す。このやり取りだけでも、十分楽しいようだ。

「まあでも、頭の上に耳が無いからな。勘違いされやすいと言われればそうなのかもしれない」

「エルーンにもドラフ並に分かりやすい特徴があれば……それが耳なんだよねえ。ちゃんと横だけどケモノ耳着いてるよほらほら」

自分の猿のような耳を指さして、アンチラはそれを強調していく。この耳さえ隠してしまえば、確かにただの小さなヒューマンの子供である。

「耳を隠すつていえばさあー」

「うん」

「フォリアいるじゃん？」

「フォリアがどうかしたのか？」

「帽子取るまでヒューマンだと思ってたよ、僕」

「分かる」

グランが大きく頷きながら同意を返す。フォリアは基本的に帽子を被っているため、露出がちよつと多めの少女にしか見えないのだ。「俺も前に部屋に来た時に初めて帽子脱いでくれてさ、その時初めてエルーンだつて分かったんだよ」

「へえー、そんな経緯があつたんだ」

「おう、そういう経緯が」

3度、さすがに慣れてきたのかアンチラの助けを必要とせず、開く床に瞬時に力を込めて壁に飛び移つて、落下を免れる。というか今回アンチラは分身をださなかつた。

「待つて、今なんで落とされかけたんだ俺」

「え、いたいけな少女に手を出したから現行犯で極刑つて意味じゃないの？」

「さて、決して俺はそんなことをしていない。というか来たのは団に入ったばかりの頃で、部屋にはビィとルリアもいたぞ」

「……まあ、その2人がいるんなら本当にそうなんだろうね」

微妙に膨れっ面のまま、グランは閉じた床に改めて座り直して再びトークを再開する。

「とりあえずなんだ、お便りを読むからな。1つ目『分身つてどのくらいまで出せるの、アンちゃん』」

「あ、マツキーからだ。でも……うーん、何体まで僕分身出せるんだろ？」

「え、限界までやった事がないの？」

「そもそも分身をそこまで使わないし……分身で1軍隊作れたとしても、作るよりジークフリートさん一人連れてきた方が早いよ」

「言いたいことは分かる」

ジークフリートはこの団においては、上位に食い込むほどの強者で

ある。よくシエテと特訓している光景が見られるが、明らかに本気の戦いにしか見えないというものもチラホラという。

「でも分身を作って、分身に何かやらせたい……みたいな人もいる訳だが、した事ないのか？」

「しても多分僕だし……」

「全員で寝てるか」

「どう頑張ってもそうなる未来しか見えないから、僕自身の力で頑張るか本当に他人の力を借りるしかないんだよねえ」

「まあなんだ、とりあえず自分で早寝早起きするくらい頑張れ」

「はい」

アンチラは再び手を挙げて、返事をする。どうにもやるのが楽しいようだった。

「では2つ目：『そんなに飛び回って下着が見えぬのか？』」

「アニラお姉ちゃんからだ！」

「でまあ、確かにアンチラって棒高跳びみたいな攻撃多用してるよな」

「凄いでしょ、僕のバランス能力と如意棒の力は」

「確かにすごいが……で実際にどうなの？」

「うーんあんまりその辺気にしたことないんだよねえ、見えたところで何か変わる？」

「少なくとも俺が気になる」

「んー……」

アンチラはグランを見て虚空を見て、再びグランを見てを繰り返し始める。考え事をしているのだろうが、今何を考えているのかグランは気になっていた。

「まあ、グランになら見えてもいいかなあくらい」

「ほうそれはまた何」

床が開いた。

「びっくりしたわ……俺が即座に天井に掴まれる技術がなかったら即死だった……」

「どうやって天井にくっついてるのそれ」

「気合いで」

「時々思うけど君って星晶獣だったりしない?」

「天井や壁に貼り付ける星晶獣なんてものがいたら、俺は星の民をこれから暇人と呼ぶことにするぞ」

溜息をつきながら、グランは床に着地する。ここまで慣れてしまえば、不意打ちで開けられようとも落ちることは無いだろう。

「慣れたら番組的に面白くない?」

「とは言っても進行も何もしないまま落ちたらそれこそグダグダになってしまわないか」

「確かに」

「という訳でね、三通目行きましょう。『君の部屋を掃除している時に、ガルがグランのパンツを持ってきたんだけどどういう事?』」

「……」

「……アンチラ、弁明を」

「い、いやあ……干してるのが飛んで行っただのが見えてさ……筋斗雲使って拾って来て……渡し忘れて……」

「そうか……」

「だ、大丈夫!僕それ以外の用途で使っていないからね!」

アンチラが両手を動かしながら、弁明しようとする。グランは真面目な顔でじつとアンチラを見つめた後に、手を叩いていた。

「呼びましたか?団長さん」

それと共に、リーシャが扉を開けて入ってくる。アンチラの顔が青ざめていくのが、グランにはハッキリわかった。

「アンチラに……話を聞いてやってくれ……」

「待って!本当だから!本当に洗濯物拾ってきただけだから!!」

「……実はな、アンチラ……」

「へ?」

「俺の下着……特にトランクスが……1日置きで無くなっていくんだ……1週間もしたら……帰ってくるんだけど……」

その話を聞いて、アンチラは咄嗟に目を伏せた。それが、無くなっている原因を知っている者の反応だと、グランは判断した。

「リーシャ、アンチラだけじゃないだろうから……アンチラと同じよ

うな事をしている団員の情報を出させて」

「分かりました……それで、あの……犯人が判明した場合は……？」

「いや別に？そのパンツ持っていつても良いしなんなら俺をお持ち帰りしても」

床は開く。グランは落ちる。リーシャの手にはボタンがひとつ。本日の回収要員ではメーテラがいるので、ちゃんと拾ってくれることだろう。面倒臭がりだが、彼女がとても優しいことをみんなは知っているのだ。

「……そのボタンで、開くんだね」

「開け、と言うだけでも開きますよ。なんだったら念じれば開きます」

「あの床はどんな改造してるのか気になって怖い……」

「という訳で、同業者のお話を聞かせてもらいますよ」

「はい……って待って？今同業者って言った？もしかして君も」

「行きましょう、大急ぎで」

「あっ！ちよつと待ってー!!」

リーシャは早歩きで先へ進んでいく。それについて行くように、アンチラもついて行く。リーシャが連行する立場のはずだが、ただの同行者のようになってしまうのはご愛嬌。

既に閉じた床は、開くことは無くグランはメーテラに回収されて今は船首にいる。それもまたいつも通りなので、誰も気にすることは無いのだ。

「………バイ」

「何だあ？」

「俺の部屋のタンス……鍵つけようかと思う、南京錠の」

「そりゃあ構わねエけどよお、つけたところで多分変わらねえと思うぜえ？」

「え」

「えっ」

グランは素っ頓狂な声を出す。ビイは逆になんでそう思わないのか全く疑問に思わないのか、と思ってしまう。

「つーかよお、別に取りられてもいいんだろお？」

「いや、買ったリングを強奪されると買ったリングを渡すのではまた話が違うだろう？」

「まあ、そりゃあそうだけだよお」

「そういう事だよ……」

ビイは、どうせ部屋の鍵を変えようが部屋のタンスや押入れに鍵をつけようが、その鍵がとんでもなく複雑なものだろうが、結局関係なく開けられては取られるというのがオチな気がしてならないのだ。

「ともかく……俺はタンスに鍵をつけるからな」

「まあ、好きにしたらいいんじゃないかあ？黙って付け替えることは出来ねえから、ちゃんと相談しろよー」

「そこら辺はラカムやノアと相談するよ」

恐らくその2人も今のビイと同じ事を言うのだろう、とビイは呆れ顔で考えていた。実際、このあと相談しに行ったらラカムとノアに微妙な顔をされてグランはビイに言ったことと、同じ事を言う羽目になったのであった。

そして後日、グランは自分の部屋に置いてあるタンスに鍵をつけた。が、今度は騎空艇の湯浴び場の更衣室に置いていたパンツが取られるようになったというのは、また違う話なのである。

そして、とある昼間。

「……団長君が部屋から出てきません」

「という訳で、部屋の前まで来ました」

羅生門研究所に尻理屈程ねて作らせた機械

「そして……この全自動万能鍵開け機を使えば……」



グランの部屋の前にいるのは、マキラとアンチラである。昼間から来ないグランに少し疑問を感じて部屋まで来ていた。

「3秒で開きます」

「さすがマッキーー！」

そうして開かれたグランの部屋の扉……そこに居たのは、大量のトランク스에 囲まれたグランの姿だった。

「何これ」

「朝氣づいたらこんな事になった……まだ片付け終わらない……と  
いふかなんで100個以上取られてんの俺……」

「……失礼します」

顔を真っ赤にして、マキラは部屋から退散して行った。アンチラは苦笑いしながら、1歩ずつ後ずさっていく。

「じゃー、僕も退散するねー」

「あ、待って!!せめて片付け手伝って!無理そうなら男手呼んできてええええええ!!」

騎空艇にグランの叫びが響く。しかし悲しいかな、トランク스에 囲まれた男を救う人物は、男女ともに誰もいないのであった。

西北西の守護神、須らくこの声を聞いてくれんのか？

「今回はヴァジラさんです、いつも一緒とのことなので例外として相棒ガルジヤナも連れてきてもらいました」

「がおー！」

「まあ、とりあえず一言いい？」

「む？」

「1年間お役目ご苦労様でした、なんか最後に余計な目に遭ったけど」  
お役目の交代のときを思い出すグラン。ヴァジラもそれに釣られて、あの時のことを思い出していた。

「いやあ、あの時はびっくりした」

「まさか、よくわからん女が、よくわからん機械を使ってよくわからん攻撃方法で辺り一面火の海にしたからな」

「休みだなんだと言ってるのにも関わらず、ワシ達の家を燃やそうと  
したからの」

「チビ達大丈夫だった？」

「大丈夫！まあちよつと家が元通りになるまでの間に、騎空艇に居座らせてもらってるけど」

「あんな可愛らしい子達を酷い目に合わせるのは頂けんぜ」

グランは珍しく少し不貞腐れながら愚痴を零していた。要約すると、フライデーと名乗る女が謎の機械、エビフライを使ってヴァジラ達の家を燃やしたということがあったのだ。無論、ちゃんと懲らしめたのだが反省せずそのままどこかに消えてしまっていた。

「グランには可愛がってもらってるからなあ、みんなグランのことに気に入ってるみたいだよ」

「そりゃあ良かった……というか、今はその着物なんだな」

「まあ、寒いし」

「そりゃそうか……つと、とりあえず序盤の挨拶が終わった所でお便りを読上げてみよう」

「わーいー！」

可愛らしく両手を上げて喜びながら、ヴァジラはワクワクを隠しき

れないようで、耳をピコピコ揺らしていた。

「まず1通目『ガルジヤナとはどのような意思疎通を凶ってるんだい？』シロウだね、嫁さん大事にしろよ」

「意思疎通？」

「まあ第三者から見たら、ガルはあまり吠えないからな。ガルが吠えてない時でも、完璧な意思疎通が出来てるしそこが気になったんだろうし」

「とは言っても……長い間一緒に暮らしてきたから、としか言い様がない」

困ったかのように首を傾げながら、ヴァジラはずっと耳をピコピコさせていた。グランはそれをずっと眺めており、ヴァジラに気づかない程度にソワソワしていた。

「ずっと一緒に暮らしてきたから、相手の考えていることが分かるか？」

「グランにもそう言った人いるでしょ？」

「……確かに、ビイと一緒にいたらお互いなんとなく相手の考えがわかかったりしてる場面が幾つかあるなあ……」

「表情を見るだけで分かったりする、そういう物じゃないかな」

「なるほど……」

「次行ってみよう！」

「んー……『撫でさせて欲しい』……ユーステスカ」

「ワシをか？」

キョトンとした顔をしながら、ヴァジラは自分を指さしていた。言葉が足りないせいで、余計な誤解を招いてしまっているとグランは思った。あとからイルザやゼタ達に弄られるのは目に見えている。

「多分ガルとチビ達の事だと思う。ユーステスカって犬が大好きだから」

「ガルがいいのなら、撫でてもいいぞー」

「あくまでもガルの気持ちを考えないといけないからね」

「ワシ以上にイチャイチャし始めたら嫉妬するかもしれないけど！」

明るく笑い飛ばすヴァジラ。相変わらず耳が動いており、知らず知

らずのうちに手を伸ばしてしまいそうだと、グランは自分の右腕を見ていた。

「ガルって大きいからさ、小さい子なら乗れそうだよね。特にハーヴィン族」

「急ぐ時とか、載せたりしてたりするよ」

「ちよつと羨ましいかもしれない……」

ガルのフカフカしてそうな体に触れた事があるであろうハーヴィンに、グランは少し羨ましがっていた。何だかんだ、動物は好きなのだ。

「とりあえず3つ目行くか……『カミオロシしている時、やはり性格変わるのじゃな』……アニラだ」

「まあ、あれワシじゃないし……」

「神様ってどんな人？」

「人……?なのかよく分からないけど、でも少なくとも概念的なものに近いから、説明がしにくいかもしれない……」

「外見とかない？」

「ない、かなあ……」

「なら諦める」

「それがいいと思うよ」

明るい笑顔を振りまくヴァジラ。ついに我慢が出来なくなったのか、グランはヴァジラの頭をよしよしと撫でていた。

「グ、グラン？」

「いやあ、あれだけ目の前で耳を動かされたら頭撫でたくなっちゃうよ」

「や、やめろお……」

「そう言う割には笑顔だな ……やはり犬か」

「わ、ワシは犬じゃないぞお!!」

そう言いながらもヴァジラは満面の笑みを浮かべており、両手を顔の高さまで上げて猫の手のような形をしていた。完全に主人に服従した犬である。腹を上にして寝転ばないだけ、まだマシなのかもしれない。

「んー？でもこうされるのがいいんだろー？ほれほれ」

「や、やめろオ！なんかこういい感じに撫でるなあ!!」

「おーおー、耳がピコピコしているぜ……お主はそういう所が可愛い  
のじゃ……ふおっふおっふおっ」

「じ、爺さんになつてる……ああクソお！撫でるのすごいウマいい!!」

まるで甘えん坊のペットと主人のイチャつきである。これを見せ  
られている者達は、恐らく謎の虚無感に襲われている事だろう。

「ああ、そう言えば前にユーステスがチビ達に餌をやろうとしてたな」  
「チビ達が？でもそんな話聞いてないぞ？」

「そりゃあ目もくれず、菓子作ってるベアトリクスの方に向かって歩  
いて行ったからな、その後何とかしてベアトリクス止めたけど……い  
や、犬に甘さたつぷりのお菓子はまずいって」

「食べたことないが、そんなに甘いのか？」

「いやー、もうほんと素晴らしいくらいに甘い。何作らせてもとんで  
もなく甘い」

過去に一度だけ食べたことがあるグランは、遠い目をしながらその  
時のことを思い出していた。

何故かおにぎりを作らせても激という文字が付く程には、甘さの境  
地に達している。

「あれほんと1種の才能だよ」

「それだけ言われると少し気になるなあ……後で頼んでみるか」

「止めとけ、1口食べたグランサイファーお姉様組が涙を流しながら  
お菓子を食べていたのは凄惨な光景だったから」

「……あれだけ動いている面々でも太るのか……」

「俺は気にしない、なんて無責任な事は言えないからな……俺も太っ  
たからレスラーになった迄ある」

レスラーの体型を思い出して、つい吹き出すヴァジラ。あの顔であ  
の立ち方は彼女にとって笑いのツボを刺激するなにかだったらしい。

「レスラーと言えば……急に脱ぐのやめてくれんか、びっくりする」

「ダクフェからでも0.5秒あれば、レスラーになれるぞ？」

「早着替えの達人だな」

あの複雑そうな鎧をすぐさま脱げる、という所に恐ろしさ半分尊敬半分のヴァジラ。少なくとも慣れていたところで、0・5秒は流石に無理だろうと思っっているので、少しは盛っているだろうとも思っていた。

「む……その目は信用していないな？なら、見せてやろう……俺の力を!!」

その場でいきなり服に手をかけるグラン。そして、そのまま上の服を脱ごうとしたところで――

「秩序の騎空団だ、逮捕する」

「なんでモニカさんおるん……？入団してないよね……？」

「リーシャに呼ばれてな、とりあえず逮捕だ」

手錠をかけられて無残にも連行されていくグラン。ヴァジラはその光景を見ているしかなかった。

早着替えが本当にできるなら、それを見てみたいと思ったのだが、それよりも誰にも気付かれずに部屋に入った上に、即座に手錠をかけることが出来たモニカのすばやさも正直なところ評価したかったのだ。

「……なあ、ガル……人間って凄いなあ……」

凄くどうでもいいことで、人間の可能性を魅せられたヴァジラ。早着替えや早逮捕なんて絶対にするのがないし、されることも無いだろうがそれでも軽く尊敬の念は抱いていた。

「さて、チビ達が部屋で待つてらだろうし帰るかガル」

ガルはそのままヴァジラについて行くことになった。その際にふと部屋の中を覗いてから、再びヴァジラの方を向いて彼女の後ろを歩いていくのであった。

「まあ、エヴィカツ丼でも食べようじゃないか」

「これ美味いっすね、タルタルソースが意外にもご飯とエヴィにベストマッチ」

「ふっ…前にリーシャがオススメしてくれた店からお持ち帰りしてきた」

「この時期冷めそうなのに……」

「そこはちよつと頑張った」

「服の中に入れても入れたんですか？」

エヴィカツ丼を食べながら、グランはモニカと楽しそうに話をしていた。ちゃんと喋る時は、口の中のものを飲み込んでから話しているので、なんら問題はない。

「いや入れてないが……何故服？」

「だってモニカって一部に大きな膨らみがおつと危ない」

いつもなら落とされるところだが、生憎ここは秩序の騎空団の本拠地アマルティア。代わりにグランの顔のすぐ横にモニカの剣が通り過ぎる。

「秩序の騎空団にセクハラをするとは無謀極まりないな」

「んな事言っても秩序の騎空団員は、日夜あんたの話で盛り上がってるぞ」

「……え、どんな話？」

『お酒あげたい』『飴玉上げたい』『一緒にお風呂入りたい』『○○で××をしてその後に△△したい』『××で○○を△△して□□した後☆☆したい』

「も、もういい!!」

顔を真っ赤にして、モニカはグランを静止する。その様子がとてもグランの心に来た為、グランはそのまま話を続行する。身長はともかく、心とスタイルは既に成人しているというのに赤面するその様子は、グランのいらぬ嗜虐心に火をつける。

「いや、まだまだ続けるね！ヴァジラの太ももについての話題を触れられなくなった腹いせに、耳元で無駄に低い声で言いまくって——」

グランは、言葉を言い終える前に鎖で体を雁字搦めにされていた。もう1つ言うのであれば、そのままよくわからない金属製の椅子に固定されていることも付け加えられる。

「団長さん、今日はここなので落とせませんが……代わりに飛びましょう」

「飛ぶって何……?」

「大丈夫です、年越しは私の部屋で過ごしてもらうだけですから」

「リーシャ……たまに思うけど君俺より強——」

「ではまた後で」

リーシャは手持ちのボタンを押す。その瞬間、グランを乗せた椅子は轟音を立てながらそのまま天井へと飛んでいく。だが、その天井はまるでその椅子が飛ぶことを設計されているかのように、次々に開いていく。そうして、グランは1度アマルティア上空まで飛んで行った後にアマルティアにあるリーシャの部屋まで飛んで行ったのであった。

「……何故君の部屋なんだ、リーシャ」

「団長さんと一緒に過ごしたいからです……」

赤面しながら、少し喜んだかのような表情を見せるリーシャ。モニカは、既に始めてもいないツツコミを放棄して、ただ一言『そうか』とだけ付け加えて開いた天井を見ていた。

「……私も一緒に過ごしたかったんだがなあ……」

「へ?モニカさん何か言いましたか?」

「い、いや?なんでもないぞ?」

珍しく慌てながら、モニカはそそくさと部屋を出る。リーシャは不思議そうに首をかしげていたが、特に気にすることも無くそのまま気分を高揚させながら部屋に向かう。

「……」

自分と一緒に年越しを過ごしたいという願いは、恐らく団員以外で



も持っている人は多いだろう。

都合上、グランサイファーに乗ってみるのもいいかもしれないとモ  
ニカは思いながら一人部屋へと戻っていくのであった。

南南西の守護神、そんなにジロジロ見たいののか？

「こんにちは、今回のゲストはアニラさんです」

「よろし——」

「お役目マント外してもええんやで？」

「なぜ急に言葉遣いが変わるのじゃ……まあそうじゃの、そこまで寒くもないしろう。今回限り、脱がしてもらおうとするかの」

アニラは、そう言われて羽織っているマントを外す。そして畳んでから荷物置き籠の中に丁寧に置いてから再びグランに向き直る。

「改めて……南南西の守護神、アニラじゃ」

「アンチラが申年、マキラが酉年、ヴァジラが戌年……で、アニラは未年の十二神将……ということまで1つ」

「なんじゃ？」

指を1本だけ立てて、一つ目の質問ということを明確に表すようにしてグランはアニラに問掛ける。

「羊の肉って食べていいの？」

「ううむ……まあ、食べる訳にもいかんじやろうて」

「まあ、流石にまずいもんね……んじやあ話題変えるためにもう一つ質問」

「ほう」

そこから二本目の指を立ててさらにグランは質問を重ねていく。

「アニラのラム肉を堪能させてもらっても……落ちるかあ!!」

質問をした直後に、グランはその場から飛んでアニラと自分を挟んでいたテーブルの上に着地する。アニラは驚きながらもその場で拍手をしまつていた。

勿論、先程までグランがいた場所は床が開いている。

「必死じゃの……」

「リーシャが落とす感覚が最近掴めてきた気がする」

「それ覚えたら駄目なやつではないかの」

「まあまあ、騎空士になれば10回くらいは船とか自分が落下するか慣れておいて損は無いよ」

「普通はそこまで落ちないようにするもんじゃがな……」

苦笑するアニラに対して、グランは小さいダンボール箱を取り出すいつも通りのお便りダンボール箱である。

「そういうもんかな？とりあえずお便り行ってみようか……一つ目

『団長君の膝枕は柔らかいですか』……マキラだね」

「なぜ膝枕してたことを知っておる……」

「どっかで見てたんじゃない？偶に視線感じるし」

「……すまぬ、それについては返答は出来ぬ……」

顔を真っ赤にするアニラに対して、グランは何かを感じとってそのまま2通目を探し始める。そして、取り出してから読み始める。

「2つ目『アニラお姉ちゃんのあのモコモコって何で出来てるの？』」

「毛ではないのか？」

「なんの毛か、って事じゃない？」

「……多分羊の毛じゃないののう？」

「暖かい？」

「少なくともこんな格好を外で出来ておるんじゃし、かなり暖かいと思うのじゃ」

「ちよつと後で堪能させてよ」

「構わんのじゃ」

アニラは少し言葉の噛み合わなさを感じ取ったが、今はそこを追求するべきではないので何も言わないことにした。

グランはそのまま三通目のお便りを手に取る。

「3つ目『後で羊の1匹を貸してください、マキラ』ってこれ質問お便りっていうかただのお手紙……」

「別に構わんがの、嫌がらん限りは」

「割と人懐っこいよね、アニラの羊って」

「団長殿も、抱きしめてみるか？」

「後でね、纏めて一緒に」

「欲張りじゃのう、しかし気持ちは分からんでもないのじゃ」

グランは内心アニラは絶対勘違いしていると考えていた。グランはアニラと纏めて、アニラは呼び出した大量の羊をまとめて抱きしめ

るものだとそれぞれ考えているのだ。

「というわけでお便り紹介が終わった所で、談笑と洒落こもうか」

「そう言えば、最近新たに色々団員が入ってきたのう」

「そうだね、星晶獣なんかもいるし」

「星晶獣と言えば……多腕の……シヴァ、と言ったか？」

アニラが、最近入ってきた新団員についての話題を振る。その中でも、本当について最近仲間になったシヴァという人物の名を上げる。

「彼がどうしたの？」

「いやあ……前に一緒になることがあつての、少し話したんじやが……」

「天然だったでしょ？」

「いや、神秘的な雰囲気があるのう……と言いたかつたんじやが……」

「天然って言っても怒らないよ、むしろどんな意味か聞いてくるし」

「悪意がないように言わねばいけないのではないのかの？」

「どうにも、悪意事態は本人が感じ取れるみたいだね。星晶獣みんな感情に対してすぐ感じ取れるみたいなんだよね」

団内に居る星晶獣達のことを思い出しながら、グランはウンウンと頷いていた。アニラも目にはするが、余り関われないためどのような人物かは知らないのだ。

「他に仲良くなった人とかいる？」

「そうじやのう……同じ槍使いのよしみで、ヘルエス殿やゼタ殿と良くしてもらってるのう」

「なるほどねえ、確かに同じ槍使いだし仲良くなることは容易か……」

「まあ、船の中じやとあまり激しく特訓出来んのが残念じやが」

「まあぶっ飛んじやうしね」

この騎空艇の中にいるメンバーの中には、グランサイファーですらも破壊できてしまうほどの強者がいるのだ。そのせいか、軽い特訓や試合などは構わないのだが、船を破壊する程にやる気を出していけないという制限もある。

「あの制度、ラカム殿が作ったのかの？」

「いや、俺……まあ理由としては色々あるんだけどね」

「色々……？船の中で特訓して船が壊れた、という話があつたからでは

ないのか？」

「いや、まあそれもあるけど……『特訓で本気出すのはダメ』じゃなくて『本気出すのはダメ』っていう言い方をしてるのが理由だよ」

「むー……？」

よく分かっているのか、アニラは首を傾げながら困惑してる表情を見せる。それを感じとったグランは、紙とペンを取り出してサラサラと書き込んでいきながら説明をしていく。

「例えば、清潔に保たれてるからそんなこと絶対にありえないんだけど、害虫が発生したとする」

「うむ」

「そこにサラーサを呼んだ団員がいました。サラーサは頼まれたので『本気で』虫を潰しました。さてどうなる？」

「サラーサ殿はとても大きな剛力の持ち主……となると……」

少しアニラは想像する。そこには、害虫1匹のためにメテオスラストを打つサラーサの姿があった。そんなことをすれば、グランサイファーは一溜りもなくなってしまう。

「……なるほど、確かに『本気出すのがダメ』じゃな」

「そういう事。もし本気出した人がいた場合は、始末書書いてもらいます。勿論、それは俺も例外ではない訳で」

「修理の費用はどうするのじゃ？」

「団のお金から出します」

ふむふむと、納得しながらアニラは頭を縦に降って頷いていた。そして、恐る恐る手を挙げながらグランに尋ねる。

「……因みに、始末書を書いた人物はいるのかの？名前までは言わなくとも良いが」

「もちろん居るよ、何人か」

「ふむ、妾も気をつけねばならんのう……しかし、そんな制限があると魔物と遭遇した時はちと辛いのではないか？」

騎空艇で飛んでいる時でも、飛行する魔物の群れと遭遇してしまう場合は、グランサイファーではよくある事である。なるべく避ける時もあるが、やはり見つかってしまえば襲われる事も多々あるのだ。

「流石にそこはルール適応外だよ。けどまあ、出来る限り壊さないで貰えるとありがたいかな……だから魔法や銃なんか持つてる人は、結構手伝って欲しいかも」

「なるほど……近接武器よりもそちらの方が船の上で闘う上で良いのか」

「まあ……魔法とかで闘うにしても限度っていうものがあるけど」

「……と、いうと？」

「……勢い余って船が爆破される時ある、別に魔物と戦って出来るキズだし良いんだけど……」

「……」

ふと、1人だけ思い当たる人物がアニラの頭の中に思い描かれる。クラリスである。彼女は、調子が良くなってくると手当たり次第に分解の錬金術を放ち始めるのだ。

無論、仲間がいる方向に打たないだけマシなのだが、前に襲われた時に甲板に人1人が落ちてしまいそうな程には大きな穴が空いていたのだ。

「……修理費用が嵩むとか、そういうのは気にならないんだよ。そういうの気にしてたらダメだし」

「じゃの」

「けど……船落ちる可能性だってあるからね……だから船飛ばしてる時とか魔物の群れとぶつかりたくないなあ、と思ってヒヤヒヤしてる……」

苦笑するアニラ。言いたいことも、今のグランの気持ちもよく分かかってしまうのがやはり仲間だということだろうか。と思っていたのだが、突如グランは笑みを浮かべて立ち上がる。

「けどもうそんなに心配はない!!何せ、ここには頼れる仲間がいるから壊される心配も特に無くなった!!」

「そう言えば……最近、アテナという名の星晶獣と親密になったという話を聞いておるが……」

「ふふふ……基本的に星晶獣がいる場所、住処と決めた場所は星晶獣の加護が与えられるんだ……つまり!!加護だらけのこの船は安全と

いうことSA☆!!」

守護の女神アテナ、ユグドラシル、ティアマト、サングルフオン、アザゼル、ゾーイ……この船には様々な星晶獣が乗り込んでいます。それら全ての加護をグランサイファーが受け継いでいるとなると、確かにこの船はそう簡単に落とせやしないのだろう。

「そもそも、本気出したらだめの制限なんて、ほとんど息してないしね！船が頑丈になりすぎて困っちゃうよ全く!!」

鼻が伸びる、とはこの事なのだろうかと思う程にグランは声高々として笑っていた。

「……しかし、それでも壊れるのじゃろ？」

「……うん、色々星晶獣がいて大概の攻撃で怯みすらしなくなってるのは本当だけだよ……防御貫通はダメなんだ……」

防御無視の攻撃というのはいくらでもこの空には溢れている。それを考えると、いくら硬さがあると言ってもその程度としか言い様がないのだ。

「まあ、どうしようもない時はほんとにどうしようも無いからのう。そこは、操舵手に任せるしかないのじゃ」

「ラカムの腕は全空一なんだ……誰にも負けるわけがないんだ……」

壊されることに何かトラウマでもあるのか、グランは顔を両手で隠して俯いていた。乙女か何かか、とアニラは心の中で突っ込んでいた。

「……ま、まあまあ……そんなに気を落とさずと良いじゃろ、どうせならこれが終わり次第2人で街に出かけるかの？」

「っ!!いくーなんだったら朝までずっと付き合ってくれ——」  
グランの下にある床が開く。既に慣れ切っているグランは避けようとその場をジャンプしようとする。

しかし、同時に開いた天井から大きめの金属の塊が降ってくる。全くそちらの方向を予期していなかったグランの背中に、その金属の塊がクリーンヒットする。

「びゃくぐれん!!」

謎の声を発しながら、グランは落下して行った。鉄の塊は回収出来

るようになっていたのか、ロープで括りつけられていてゆっくりと上に戻されていった。動きが手作業で戻している風では無かったので、機械か何かで戻しているのだろう。

「むう……しようがないのう、また後で……と言うか、何故落とされたのじゃ？」

「未成年は夜までに帰るようにしてください。団長という立場であっても、それは変えられません」

「なるほどのう」

突然現れたリーシャに驚くことも無く、アニラは溜息をつきながら部屋から出ていく。朝までコースでも、別に構わないと言うのが彼女の本音なのだが、今この場で言ったところでしょうがない話なのである。

「……」

ひとまず、グランの部屋に向かおうと心に決めた後にアニラはそのままグランの部屋に直行するのであった。



## 北北西の守護神、道はどこに出来るの？

「な、なんだか照れるな……」

「て事でクビラさんに来て頂きました」

「だ、団長？これ本当にやらないといけない？」

「無作為の結果、こうなったので……というか別に拒否することも出来たんだから、拒否してもよかったんだよ？」

「こ、断れるわけじゃないじゃん……団長の頼みだし……」

少しだけ顔を赤くしながら、クビラは目を逸らして俯いていた。その仕草自体はとても可愛いが、後ろにあるクビラの得物が気になってしょうがなかったので、あまり見ていなかった。

「……あ、1ついい？」

「え、何？」

「終わるまでネガティブな事を言ったら、その数分晩御飯にお肉が出てきます」

「……豚肉？」

「いや、牛肉」

「私にとってはご馳走だよ……いや、別に食べたらダメみたいなのはないと思うけどさ……」

「まあたまに豚肉混ぜるかもしれないけど」

「それは止めて……」

グランの肩を掴んで、クビラが精一杯懇願する。テーブル越しなので、腰を曲げないと手が届かない距離なのだが、その際にクビラのドラフの特徴がいい感じにいい感じしている、とグランは全くない語彙力で感想を心の中で述べていた。

「まあ、流石に冗談」

「ほっ……」

「って訳で……とりあえず色々聞いてから、お便りに今回は移っていいこうかと」

「何か聞きたいことでもあるの？」

「まあ、その後ろの武器かな……」

「ああ、猪突・上宝沁金ノ撃槍の事？」

「ちよと……なんて？」

「猪突・上宝沁金ノ撃槍」

「……ごめん、覚えられない」

「うん、正直覚えられないと思う」

部屋の中の機材を壊さないように軽く振り回しながら、クビラはあっけらかんと答える。本人も、かなり覚えにくい名前だと思っ  
ているようだ。

「軽く振り回してるけどさ、それ本当は滅茶苦茶重いんだよね？」

「んー……というより、重さを自由に変えられるから重さなんて言っ  
てもそこまで差がないと思う」

「重さを自由に変えられるって結構やばいよね、破壊力はかなり有る  
し」

「うーん、団長の方がやばい気がするけど……」

「何で皆俺をそんなに持ち上げるの？」

ちよつと疑問を持って、グランは首を傾げる。彼からしてみれば、  
自分をそこまで持ち上げてくれることは嬉しいが、あまり自分が強い  
という自覚は無いようだ。

「団長が謙虚すぎるだけなんじゃ……」

「十天衆とか、カリオストロとか、ジークフリートとか、ガンダゴウザ  
とか……見てたら俺なんてまだまだ弱すぎる部類だよ。というか、こ  
れでも1部なんだけど」

「この団つて多分今いる人達だけで世界掌握出来そうだよね、やらな  
いだろうけど」

「いやあ、そんなこと出来るほどこの世界は甘くないよ」

「いや、結構簡単に出来ちやいそうなんだけど……」

グランはサラツと答えるが、クビラからしてみれば何故ここまで謙  
虚になるのかよく分かっていなかった。グランより強い人物が大量  
にいるのが原因なのだろうか。

「……そんなに強いのか？」

「強いも強いよ、例えばジークフリートなんてその内車輪のように回

転しながら切ってくるんじゃないかな」

「横回転？」

「いや縦回転で、一国の軍隊相手にできるんだしいけるでしょ」

本来、どれだけ強くても人間は一国の軍隊を相手にして無事なはずが無いのだが、ジークフリートは体力の消耗以外では特に目立ったダメージは見受けられなかった。

とは言うものの、グランもそれを成し得るのではないのか？とクビラは少し疑問に思っていた。

「その人本当に人間？」

「いや、正直人間だと思うけど強すぎてやばい。前に剣持たせてもらったけど全然持ち上がらないくらい重かった」

「ええ……」

「それに、俺ヨダルラーハにも勝てないんだよね」

「ああ、あのハーヴィンのお爺さんだよ」

茶色の髪に茶色の髭、ハーヴィンという種族でありながらもその強さは折り紙付きという程の剣士、それがヨダルラーハである。

「すごい手数で攻めてくるんだよね。こっちは防御で手いっぱいになる」

「へえ……」

「ヨダルラーハの本気の連撃を防げれば、帝国とかが使いそうなガトリング砲とか全部捌けそうな気がする」

「それをしたら、多分団長は人間を超えた何かになってると思うよ、確実に」

「そんな過剰に褒めるな褒めるな、照れちゃう」

「今更そんな柄でもないでしょ？」

「バレたか……」

顔を両手で隠すグラン。しかし、クビラが言い放つと途端に手を退けてそこから真顔が飛び出してくる。真顔な事に少し驚いたが、そのままクビラは談笑を続けていく。

「他にもそんな人っているの？」

「十天衆の皆は……まあ当然のことながら全員強いから置いておくと

して、それ以外だと……イングヴェイとかかな」

「あの機械の人？」

「そ、あの機械の腕の渋いイケメン……本人も滅茶苦茶強いからね」

「ちよつと手合わせしたいかな……」

「いやあ、この団って強いやつはホントみんな俺より強いからねえ」

嬉しそうに笑いながら、グランは団の者達を語っていく。それがクビラにとっては少し羨ましかった。まるで自分の事のように、嬉しそうに語ってくれる……という事が。

「でもさ、この団にいる十天衆って1度は団長と手合わせしたんでしよう？つまり、団長に勝てる人達は十天衆より強いつてこと？」

「んー……というより、十天衆と戦うときは大概天星器を使つての戦いだつたからなあ……あれを使つて勝てるつてことは、つまり素だと負ける可能性が高いかも」

「そんなに強いんだ……」

「俺だつて、負けるつもりは毛頭ないから特訓してるけどね？それでも流石に十天衆と言うべきか……凄まじい強さなんだよね。1人で一空域くらいは支配できると思うよ」

十天衆の強さを語りながら、グランは強く頷いていた。道具ありきとはいえ、そんな者達に勝てるのはやはり恐ろしく強いじゃないか、と内心でクビラは突っ込んでいた。

「あ、そう言えば前に十天衆のシエテさんとジークフリートさんが戦つたりみたいなた話してたけど」

「ああ、ぶつちやけあれ多分互角だよ？本当に……」

「と言うと……」

「単純に戦い方が全然違うからね、あの二人。シエテは自分の力で手数を補つていくタイプだし、ジークフリートはあの剣1本で全て薙ぎ払つていくタイプだし」

「手数と力が互角なんだ？」

「んー……シエテがどんな剣を模倣して生み出したとしても、単純な腕力の差でジークフリートが上回ってるみたいなんだよね。」

でも、シエテは素早く動いてすかさず決めに行くタイプ。まあジーク

クフリートの持つてる剣みたいな大剣を振り回したりすることもあ  
るけど……そっちの方が、しように合つてるとかなんとか」

「ふーん……拮抗してるんだね」

「そうなんだよね……まあ十天衆に近い実力を持つてるジークフリー  
トが強すぎるって話なんだけど」

そう言つて目を瞑るグラン。この団にも、十天衆に近い実力を持  
つ団員はいるのだ。

十天衆が最強とは言つても、それと同等の力を持つものは必ずどこ  
かに居るといふことなのだろうか？とふと疑問に思うグランだった。

「十天衆と言えば……最近ソーンさんと仲がいいんだよね」

「へえ、馴れ初めは？」

「んー……1人で朝練してる所を見てみたいでね、それで声をかけ  
られたとかそんな感じ。」

あの人弓使いだから教えられることは少ないけど、一緒に組むこと  
があつた時のために……つて事で最近によく特訓も兼ねて一緒にい  
るよ」

「良きかな良きかな……」

まるでおじいさんのように頷きながら微笑むグラン。その反応に  
苦笑しながらも、お茶を飲んで一息ついてからクビラは続けていく。

「そのおかげかな……最近は、色んな人と組んでどんな癖があるかつて  
言うのを、よく見たりするようになったかも」

「最近の発見は？」

「んー……秘密」

「へ？まあ、いいんだけどね」

クビラは楽しく笑いながら、誤魔化していた。実は思いついた話は  
クラリスの事である。ただ、よくグランと一緒にいる時はグランのこ  
とをよく見ているという話なのだが、これを言うのは少しクラリスに  
悪いような気がしたからだ。

「あ、そうだ。クビラって温泉が好きなんだよね？」

「へ？好きだけど……どこかい温泉でも見つかったの？」

「いや、単純にザンクティンゼルに温泉1個だけあるから行くこうつて

話」

「へー……団長の故郷だよな？温泉あるんだ」

「まあ、村の人達が集まって一緒に体洗ったりする場だから……24時間365日ずっと混浴だけど」

グランは体を捻りながら床をジャンプする。床が開く気配がしたからだ。そして前回は、上から落ちてきた物体に反応できずに落とされたため、今回はそれを回避するために体を捻って上を見るようにしたのだ。

だが、今回は上から物が降ってくることは無かった。降ってきたのは、1人の星晶獣だった。

「我、穢れを浄化せん……！」

「あゝっ、ツツツツツツツツツ！！」

突如飛来したシヴァが、グランを抱擁しその体を燃やし始めた。シヴァの炎はただの炎ではなく、穢れを浄化する炎なのだ。よって、殺そうとしない限りは肉体が燃えることがないように調節が可能なものなのである。無論、熱さはちゃんと感じるらしいが。

そして、そのまま燃えながらグランは落下していく。ただ穢れを浄化されているので、穢れを持たない者は触れても大丈夫なので、ちゃんと拾われることだろう。

「……だ、団長ー!!生きてるー!?!」

「生きてるー」

下から声が聞こえてくるので、ちゃんと拾われているのだろう。そこに安心したクビラだったが、いつの間にかシヴァがいないことに気づいた。特に目立った用事はないのだが、いつの間にか姿を消すその姿はまるでリーシャのようだと、クビラはふと思ったのであった。

「僕ねー、グランって言うのー」

「燃やされた結果がこれか……」

ビイは、グランの部屋で燃やされた結果のグランを見ながら呆れていた。簡単に言うと、グランは絶賛幼児退行中なのだ。

「まさか穢れを浄化された結果……穢れを知る前の子供の頃に返るなんてのは、オイラも予想外だったぜ……」

「えへへー」

つぶらな瞳、そして子供のようなその仕草は紛れもない子供そのものである。これで団員に対するセクハラが減ってしまえば、ある意味いいのではないだろうか……とさえ思っていた。

「……ああいや、これはこれで不味いかもなあ」

グランのことを恋愛的な目で見ている女性達から、変な知識を教えこまれたりすれば大変である。そうになると、精神年齢でかなり子供なのに、変な性癖を覚えてしまうかもしれない。

「しょうがねえ、何とかして戻すか」

ビイは呆れながらも、グランを元のグランに戻そうと考える。セクハラを行うとは言え、何だかんだ団をまとめていたのは彼だったのだから、幼体化したままではだめだろう。

「……セクハラする有能から、セクハラしない無能に変わっちゃうって……今度、丁度いい均衡にしてグランをセクハラしないだけの状態にしてもらいてえなあ」

そう呟くビイだったが、世の中そんなに甘くないことは知っているので、仕方なく戻るために頑張り始めるのであった。

## 十二神将の宴

その日、グランサイファアの一角ではかるた大会が行われていた。とは言っても、参加メンバーは十二神将達とグランの合計6人なのだが。

「ここじゃっ!!」

グランがカルタを読んで、全部読み切った後にそれぞれの持ち札を確認。その枚数によって順位を付けて、最下位を外してもう一度!というのを繰り返していき、完全な順位をつけていくという遊びである。

因みに、1度順位が決定した後にグランがそれぞれのメンバーと対決して、勝ったところで順位に割り込む形となる。

かなり時間がかかる遊びだが、要するに今回は皆暇なのである。

「ここっ!!」

そして、今現在ツートップでアニラとクビラが対決をしていた。その際、グランは次に読む札を完全に暗記したあとで読んでいた。それは何故か？

2人の動くさまを眺めていたかったからである。2人のドラフが、激しい動きをしながら札を獲る。それをただ見たかっただけなのだ。

「クビラ姉もアニラ姉も凄いなあ」

「そうですね……」

「2人ともー!頑張れー!!」

既に敗退しているアンチラ、マキラ、ヴァジラの3人は2人の対決を観戦していた。因みに、この3人が敗退した理由としては基本的にドラフの2人による胸囲アタックのせいだとも言える。激しく動くために揺れ、そしてそれが凄まじい一撃を伴って3人を吹き飛ばす……とまではいかないが、どうしても邪魔になってしまっていた。無論、3人もそれは了承済みで行っている。

「じゃあ次読むぞー『か——』」

まだ一文字目なのにも関わらず、2人は即座に動いていた。残り枚数が少ない事、そしてこのカルタをほとんど暗記しているという前提



なので、ほとんど読んでいなくても動いていく方がいいと二人は結論づけたのだ。

「ここじゃっ!!」

「くっ……!!負けた……!」

そして、ラストの一枚を取り終えたところで勝負は決した。このカルタの枚数は奇数なので、必然的に接戦していても最後に取ったアニラの方が1枚多くなってしまったのだ。

事実、枚数を確認のために数えてもクビラの方が少ないので、やはりクビラの敗北となっていた。

「さて……こちらは終えたぞ?」

「やろうか、団長!」

「望むところだ。」

アニラとクビラの不遜な笑みに、グランもまた自信たっぷりに笑みを返していた。

その自信はどこから来るのか、そもそもカルタをするやる気がちやんとあるのかなどと言う疑問を誰も持っていない辺り、やはりグランサイファーに乗るような人物はいい者達ばかりなのだろう。

「じゃあ、僕が読むねー」

アンチラが読み札を手取る。そして、適度にシャツフルしてから1番上にある札を読み始める。

1文字目、瞬間的に2人は動いていた。アンチラが呼んだ札は、グランの目の前にあった。つまり、向かい合って座っているアニラからしてみれば、一番遠い場所なのだ。

「(ンン)——」

アニラがその札目がけて飛び込んでくるかのように、手と体を伸ばす。そして、それに合わせるようにしてグランも自分の手を真下に向けて下ろしていく。勢いよく、それでいて豆腐を扱うかのように優しいタッチを心がけて腕を動かす。

ここまで言えば伝わるだろうが、グランは札を取りに行っていないのだ。その凄まじい反射神経と、その反射神経についていける肉体を持ってして、アニラの胸を触ろうとしているのだ。

「ふ——」

グランは笑みを浮かべる。

正面から堂々と触りたいところだが、カルタ内でそれを行う事は不可能に近いだろう。ならばどこでもいいから触ろうということ、上から触るような形にすればカルタ内でも、物理的に触ることは可能だろう。

顔に無理やり当てられに行く、手ではなく腕に当たるようにする……などと無駄に思考を費やして、胸を触りたいがために2桁を優に超える作戦をグランは立てていた。

「取っ——」

「ここだ——」

アニラは札を取りに行き、グランは男の欲望を叶えようと動く。2人の目的がどちらも叶いかけた…その瞬間、どこからともなく笛の音が鳴り響く。

「団長君、アウトです」

「何…だと…?」

「どさくさに紛れて、アニラ君の胸を触ろうとしていましたね。私達の目は誤魔化せても、この特製『絶対見逃さないカメツスル君』の目からは逃れられません」

そう言っ出てきたのは、小型のカメレオンのような機械だった。どうやら、不正しないように予め懐にしのばせていたのだろう。

「カメツスル君目いいんだな……」

「団長君の事です、2人の胸を触ろうとしているに決まっています」

「ほう」

「にやっ!?!」

アニラはニヤニヤと笑みを浮かべ、クビラは胸を隠して顔を真っ赤にしていた。恥ずかしかったのか、変な言葉が出てきていた。

「我がが団長殿は、どっちの胸を積極的に触りたかったのかの〜?」

ニヤニヤしながら、アニラはグランに擦寄る。クビラとは違い、団長ならばと言わんばかりの急接近である。

しかし、これはアニラの年上の余裕と言うやつである。そのような

ものは、グランにとっては壁にもなりえない。

「どっちの胸も積極的に触りたいに決まってるだろ」

「にゅっ!？」

グランはアニラの片手を両手で握り、ずずいと顔同士の距離を近づけて言い放つ。言っていることは、はつきり言うときとセクハラなんて生易しいものではない。

しかし、それでも嬉し恥ずかしと言うやつだったのか、アニラは顔を真っ赤にして俯いてしまう。そして、目を逸らしながら自分の人差し指同士をくつつけたり離したりし始める。

「すごい発言……一応僕まだ10歳んだけど触るつもりだったの？」

「え、何触って欲しかったのか？」

「……触るほどあるのかな」

そう呟きながら、アンチラは自分の胸を軽く触っていた。まだまだ育ち盛りなのだが、グランからは否定の言葉が一切出てこなかった。

「この中で2番目に大きいから大丈夫だと思う」

「マツキー、多分それ下から2番目ってことだよね」

「ハーヴェインはどうやっても大きくなれないし……」

「あー……」

アンチラが納得してしまったのか、言葉を出してしまう。多少の盛りはあるかもしれないが、一般的にハーヴェインの体型で胸があるということは余りないことである。

マキラは、目立たない方である。あるかないかは誰も心の中ですら、言及しようとはしなかった。

「あつ、ということとは真ん中は……」

「……ワシ?」

ヴァジラが苦笑いを浮かべながら、頬を掻く。あまりこういう話題をしたことがないのか、反応に困っている様子だった。

「いやでも……なんか嬉しくないなあ」

「へ?どうして?」

「真ん中とは言っても……上位2人がトップクラスすぎる……」

「あー……」

マキラとアンチラが同時に声を上げる。上位2人であるドラフのクビラとアニラは、確かにこの中では見えている世界が違う、と言わんばかりの盛り盛りようである。

「何なら大きくしてやろうか」

「出来るのか!？」

「何でも揉めば大きく……なる……と……」

グランが手で何かを握るような仕草を取りながら、ヴァジラ達に近づいていた。しかし、その視線は部屋の扉へと吸い込まれていった。そして、少しずつ青ざめ始めたグランに疑問を抱き、十二神将達も一斉に扉の方に視線を向けていた。

そこにはリーシヤがいた。

「……ここで何を?」

「カルタです」

「カルタなのに揉むんですか?」

「揉みません」

「なら今の動きはなんですか?」

「マッサージです、胸の」

揉まないと言っておきながら、胸のマッサージを行おうとする团长グラン。十二神将達は固唾を呑んで見守っていた。

「それ、揉んでませんか?」

「揉んでます、はい」

「なぜ揉もうと?」

「いや胸小さいの悩んでるから、团长だし助けてあげようかと……」

「团长が触る必要性あるんですか?」

「……」

ついに何も言い返せなくなってしまうグラン。その顔色はゾンビよりも悪い色になっていた。

「ないです」

「そうですね、そういう事をしたいのならまずは付き合ってから行くべきでしょう」

「はい、仰る通りです」

「あ、じゃあここにいる全員でグランと――」

「そうなった場合団長さんには秩序の騎空団に所属してもらおうことになりませぬ、50年ほど牢屋で」

「10代と付き合った時の罰が凄まじく重い……」

「恋は人それぞれですが、法律という名のルールは守りましょう」

「はい……」

「ところで胸を触られると大きくなるというのは誰情報ですか？」

「イオがロゼツタから聞いたつていう話をして……ロゼツタはメーテラから聞いたみたいなお話してた」

「なるほど……情報提供ありがとうございます。とりあえず団長さんは逮捕です」

「ああ畜生、逃げられると思ったのに……」

グランはそのまま手錠をかけられて、連行されていく。一体この光景も何度目だろうか、と十二神将達は顔を見合わせて苦笑していた。

「あの者の言うこともわかるがのう」

「全く！失礼しちゃうよ！僕はもう大人です！」

「……私が原因では？」

「いやあ、ワシはただの嫉妬だと思っけど」

そして、そのままグランに対しての談義が始まる。今までも何度かやってきたが、いい意味でも悪い意味でも話のネタに尽きないグランは、やはり十二神将達のいい話の材料となり、なあなあで終わったカルタの代わりとして、談義が彼女たちを夕飯まで楽しませたのであった。

「流石によオ、全員と付き合うのは駄目だと思うぜ？こういうのは1人に絞らなきゃいけないえだろ」

「んなこと分かってるよ……というかそれが原因で逮捕されたわけじゃねえよこのトカゲめ……」

「オイラはトカゲじゃねえ!!」

アマルティア島にて、グランは秩序の騎空団特別牢に入れられていた。そして今、面会時間ということでビーが彼の話を聞いていた。

「でもよオ、どっちにしる胸揉もうとするのは犯罪じゃねえか」

「……え、アンスリアとかは未遂で終わるけど偶に触らせようとしてきてくるから、いいものなのかと……」

「いやまあ、ぶっちゃけ悪い気はしてねえだろうけどよオ……人としてどうなんだア？」

「めっちゃ反省してる……あー、全空の美少女達と付き合っても問題ない星晶獣とかいねえかなあ……」

「そんなもん、いる訳ねえだろ……」

「んなこと言われなくてもわかってんだよ……」

グランは机に突っ伏しながら、ただただ愚痴を零していた。余程逮捕されたのが堪えたのだろうか。

「で？今回いつまでだ？」

「反省文書いたら出してくれることになった……」

「ほー、良かったじゃねえか」

「とりあえずリーシャとモニカ褒めちぎっておくわ……」

「ん？何でだ？」

「何か、照れた時の顔が可愛かったんで……」

「お前はもうしばらく、頭を冷やしておいた方がいい気がしてきたぜ」  
ビーは諦めのため息をつく。この男はどう足掻いても、こういうことに関しては反省をしないのだろうかと思っただからだ。

「もっかいシヴァつとくか？」

「何シヴァつとくか？つて……そんな動詞初めて聞いた……」

面会時間でもただ駄弁るだけのグランとビー。見張り役の秩序団員は、新人なのか腕時計とグランを交互に見て、オロオロしていた。

「どうやら時が来たみたいだな……」

「なんだお前」

「だが、俺はまた復活する……絶対にな!!」

「おう、とりあえず出てきたら連絡寄越せよな。気が向けば迎えに行くからよ」

「偶にお前めつちや辛辣だよね……」

そう言つて、グランはそのまま部屋の奥へと戻っていく。ビーは溜息をつきながら、同じように部屋の外へと出る。

今度戻ってきた時には、リングでも奢らせようと考えていくのであった。

竜殺しの騎士、我が剣で魔を断つのか？

「えー……なんと今回のゲストは元黒竜騎士団団長、ジークフリートさんです」

「どうも、不得手ながらも頑張つていこう」

「とりあえず一ついいすか」

「何だ？何でも言ってくれ」

指を一本立てながら、グランはジークフリートに話しかける。その顔はととてもとても真面目なものだった。

「何でそんなに頭が良くて強いのか？」

「ありがとう、でも俺はそこまで強くない……と言えば謙遜になつてしまうな。質問されている以上、謙遜で返す訳にもいかないか」

「答えられる範囲でいいよ」

「とは言つても……人一倍頑張つた、としか言い様がないな。何か特別なことをした、という意識は俺にはないよ」

「これが真の強者の言葉か……」

グランはしみじみと感じていた。ジークフリートとの間にある、絶対的な何かを感じとっていた。

「それに、俺は一人で行動することに慣れていないからな。皆が何かしている時は、俺が独自に動いてサポートするだけさ」

「パーさんのお兄さん……アグロヴァルの事件の時とか？」

「そうだな、直近で言えばそれが目立つだろう」

「確かにあの時のサポートは凄かった……」

「さて、お便りとやらは俺にはないのか？」

ジークフリートが穏やかな笑顔で、お便りの読み上げを催促してくれる。ちゃんと体は大人だが、こういう自分が体験したことのない物に對しての好奇心は子供の様だと、グランはふと考えながらお便りを探していく。

「んー……じゃあこれ！『受けですか？攻めですか？』」

どう考えてもルナルである。しかも、お便りに書かれている文字がとんでもなく歪んでいる。恐らく、これを書くだけで彼女は天命を



全うしているのだろうか……そう思えるほどに字が歪んでいた。

「そうだな……」

「素直に答えるんだ……」

「俺は基本攻めていくな。しかし、武器の大きさを利用して相手からの攻撃を全部受け止めることも出来る……そう考えると、『攻め』なのだろうな」

今、おそらくルナルが部屋で悶絶しているのだろう……とグランは予測していた。下手をすれば、今のジークフリートの一言で精神が肉体から乖離する程には喜びで心が満ちているだろう。

「とりあえず、2通目行ってみよう……お、これとか『今使っている武器以外で使ってみたい武器はありますか?』匿名希望」

「武器か……確かに、この団にいると色々と気になるものもあるな。」

「例えば?」

「かの銃工房の、娘さんの最近使い始めている武器だな」

「娘さんと言うと……」

グランの知っている銃工房で、なおかつ娘がいるところはククルやクムユがいる工房のことを指しているのだろう。しかし、娘と言っても二人いる為どちらのことを指しているのか、少々迷ってしまう。

「姉の方だ」

「……あー、あのガトリング」

「あれを両手に持って使ってみたいな」

「反動で肩があらぬ方向に曲がりそうだな」

「~~そ~~ここまで反動があるなら、その反動を利用して空を飛べそうだな」  
「~~そ~~」

「~~そ~~ジークフリートは、偶によく分からないことを口走っている。ガトリングの勢いだけで飛べるなら、今頃ククルの肩はあらぬ方向に吹き飛んで空の彼方に辿り着いていることだろう。」

「反動があると言っても、流石に空は飛べないのでは……」

「ん?俺は剣を動かす時の勢いで5秒ほど飛ぶぞ?」

「めっちゃ飛んでる……」

秒数制限があるとはいえ、流石に今のは盛りすぎなのではないだろう

うか？とグランは半信半疑だった。それをジークフリートも察したのか笑顔で立ち上がる。

「ならば、試してみるか？」

「試す？今から？」

「ああ、丁度いい機会だ。前から俺の剣技を見たいという者達がいたのでな……前から見せられなかった者達もいるから、今ここでカメラ越しにとはいえ見せてやろう」

ふむ、とグランは考え込む。番組としてはただ駄弁るだけの番組なので、ガチ指南の番組になるのはあまり好ましくない。

しかし、ジークフリートの言う通り見たいと思っている人物が多いのもまた事実。2つの事柄を合わせて、そしてひとつの結論まで持っていく。

「……よし、ならカメラ越しに見せてあげてよ。何なら俺が相手でガチ目の特訓行っちゃおう？」

「団長が望むなら、そうしよう」

グランは、ジークフリートの笑顔を見てふと思ったという。『それにしてもこいつ、笑顔が似合いすぎだろう』と。ルナールのHPは尽きていないだろうか。

ともかく、こうして異例の相談室を抜け出しての相談室が行われることになったのであった。

「さて、行くぞぞぞ。」

恒例のフルフェイスの兜を被り、文字通り全身真っ黒な姿となるジークフリート。黒竜騎士団団長という肩書きは、伊達ではないのだ。

「いつでもどうぞオ!!」

大してグランは、ベルセルクのジョブで挑むことになった。単純なパワーならこちらがいいだろうと思ったからである。何故か、妙にテンションが高くなっているが、ジョブで着ている衣装のせいである。

「なら……フツ……!」

「ぐげっ……!」

10mほど離れてたにも関わらず、ジークフリートはその間を一瞬で詰める。そして、上から振り下ろされる一撃をグランは装備していた武器で受け止める。

「重っ……うお?!」

「まだまだだ!」

しかし、ジークフリートは器用に剣を動かして武器を滑り込ませてグランの得物を下から上に突き飛ばした。当然、ほぼ不意打ちの形なのでグランの得物は物の見事にグランの手から離れて、空中に身を乗り出す。

「フンツ!!」

「うおっと……ま、参りました」

そして、さらにまた即座にグランの首に武器を迫らせてチエツクメイトとなる。今回は、グランの完全敗北である。

「随分とすぐに決まったな」

「いや……ジークフリート本気で決めに来てたでしょ……今の動き今までの特訓でやった事なかっただろうし」

「そんなことないさ……あの動きを出来るか疑問に思ったから……案外やれば出来るものだな」

「今の1連の動き、10秒どころか下手したら5秒も経ってない気がするけど?」

「ああ、出来るだけ早く動きたかったからな」

やはり、ジークフリートは化け物なのだと言更グランは理解した。

分かっていたことではあるが、未だに成長を続けている辺り、そのうち本当に十天衆のシエテなどに勝てるのではないだろうか？とさえ思えてくるほどである。

「やっぱりおかしいよお前……」

「褒められるのは悪い気がしないな」

「……いやまあ、本当に褒めてるからいいんだけどさ」

「さて、部屋に戻るか」

そう言っつて、たった数秒で終わった特訓は更に数十秒の会話により幕を引いた。後日、ジークフリートの元には大量の挑戦者が団内で現れたようだが、ある意味自業自得である。ジークフリート本人は嬉しそうではあるので、問題ないのだが。

閑話休題……その場を後にしたグラン達は再び部屋まで戻ってき  
ていた。

「そう言えば、空飛んでた？」

「……いや、踏み出してから団長の武器を弾くまでは飛んでいたはずだ」

「武器弾いてる時に、どうやって腰に力を入れているのか謎だった……けどそれ一瞬だよね、決着が早かったし」

「……また今度、な？」

「まあ、いいよいいよ大丈夫だし。予定が合えばお願いします」

「ああ……と、まだ一通余ってなかったか？」

「そう言われれば確かに……んじやま、最後のお便り読んでみますか。」

『ご飯作れるなら、グランサイファー内で定期的に行われる料理対決に参加してみます？』質問ではあるけどこれで聞くことじゃないね!!  
匿名希望だから誰かわかんないけど!!」

「……そのような催しがあるのか？」

「ん……まあ、ある事はあるけど」

グランサイファーに乗っている料理が得意な者達が集まる会合がある。とは言っつても、自分の作った料理を提出して食べてもらうだけの会なのだが。

「なら、俺も参加してみようか」

「前にフェードラツへのレストランで、俺たち手伝ってたもんね」

「ああ、また今度行きたいものだ」

「それにしても魔物のプリンはどうなんだろうか……」

「なかなか美味かっただろう？」

「魔物って知らなかったら、確実に美味いと叫ぶほどには」

「ゼリー状の魔物を使ってゼリーも作ってみたいな……」

ジークフリートは、どうやら探究心が強すぎるようでゲテモノ料理を作りたい欲求があるようだ。グランは苦笑いしながらもあのプリンは美味しかったので正直馬鹿にできないことはある。

肉や魚をちよくちよく買ってきてはいるが、団員が多いので食費も馬鹿にならないのだ。

「前にレフリーエに怒られたしな……」

「ん？どうした？」

「いや、質素姫に儉約して欲しいって言われたこと思い出して」

「食料事情はあまりいいとは言えないかもな、それでも俺達が満足して食べられる物があるのは素晴らしいが」

「ローアイン率いる料理得意組が頑張ってくれています……」

リユミエールなりローアインなりカタリナの後輩なりなどの料理が得意な人選が、グランサイファアの食料事情を担っている。魔物の肉もいいかもしれないが、こちらもプロではないのであまり勝手に捌けないのだ。

「ちゃんと下処理できる人見つけた方がいいのかなあ」

「いや、案外皆そういう知識を嫌でも身につけていると思うぞ」

「それはいいような悪いような複雑な気持ちだ……」

「慣れておいた方が、今からでも問題は少なくなるだろう」

「なるほど……確かに考えたら、人っぽい見た目してる奴以外は皆食べてるしな」

「今まで食べた中で一番美味しかった魔物は？」

「アルバコア」

「星晶獣じゃないか……」

星晶獣と言う割には、夏になれば決まって捕獲されるただの生物の

ような気がするが、そこをあまり気にしてはしようがないだろう。どっちにしろ、美味しいものは美味しいのだ。

「しかし……アルバコアは確かに美味しいな……」

「ジークフリートは、食べてみたい肉ってある？」

「リヴァイアサン、どんな味がするのか気になる」

「……あれって魚？それとも蛇？」

「蛇のような見た目をした海にいる星晶獣だろう」

真顔でわかり切っていることをジークフリートは言うが、どちらにせよ今ここで食べられかけているリヴァイアサンからしてみれば、食べないでくれと思うのが本音であろう。

「……ちよつと今度魔物狩り行こうか」

「よし、パーシヴァル達も呼んでどの肉が食べられるか確かめてみよう」

「毒があるかもしれないし、毒抜きできる人も探さないとね」

何故か珍味探しの方向に話が進んでいる相談室。もうそろそろ時間が迫っていることを認識したのか、グランは話を締め始める。

「……ってわけだね、そろそろお時間となって参りました」

「いつもならば、団長はそろそろ落ちているか秩序の騎空団に連れていかれてるな」

「けど今回はどうしようもないでしょ、さすがに男にセクハラするほど俺も酔狂じゃないさ」

「あまり、女性陣たちを困らせることはしないようにな」

「はい……という訳で、今日の団長相談室はここまでです。ご視聴ありがとうございますございました」

元氣よく返事を返すグラン。そして、そのまま番組を終わらせてカメラの電源を落としてから、一っため息をついた。

「ふう……とりあえず、ご飯の話してたらお腹減ってきた」

「そうだな、何か作って小腹を満たすとうかがうか」

そう言っつて、2人は部屋の外に出てくる。しかし、その場で確認した光景で固まってしまった。いた。

「歩いてください、ルナールさん」

「はい……」

「——ルナアアアアアアアアアアアル!?」

「これは一体どういうことだ……」

驚きながらも、グランとジークフリートはリーシャと連行されているルナルルに近づいていく。

「あ、団長さん。実は……ルナルルさんの部屋に大量の耽美絵が置かれていたんです」

「いつもの事じゃん……」

「いえ、えつと……ジークフリートさんと団長さんのものだったので、肖像権の侵害ということで逮捕しました」

「言わないでええええええええええええええええ!!!!」

涙を出し、大声を上げて叫ぶルナルル。しかし、その言葉に対してジークフリートもグランも何ら気にしていない様子だった。

「いや、まあ妄想するのは悪くないしね。それで物販し始めたら流石に不味いけど、書くだけなら別にいいんじゃない?」

「団長さん……!」

「趣味嗜好は人それぞれだ。特に、絵というものは他人にインスピレーションを得て描くものだからな。」

団長の言う通り、物販した場合は少し問題だが……そうでないなら、大丈夫だろう」

「……ジークフリートさんが言うなら、しょうがありません。しかし、反省文自体は書いてもらいますよ。描いてる時の声が響き渡ってましたから」

「……はい」

こうして、ルナルルは連行された。彼女はまた戻ってきたら耽美絵を描くのだろう。それで逮捕されないことを、祈るばかりである。

炎帝、消し炭にしてやろうか？

「今日のゲストはン我が主君……ことパーシヴァルさんです」

「よろしく頼む……ところで、何だ今のは」

「今のつて？」

「主君の言い方だ」

「いや何となく……なんか、こういう言い方をした方がいいのかと思つてさ」

「長い付き合いだと思つているが、未だにお前の知らないところを俺は発見しているような気がする」

「人つて言うのは、案外長い付き合いでも知らないことが多かったりするもんだよ」

「そういうものか……」

そう言つて考え込むパーシヴァル。たまに適当な事を言つても、こ  
うやって考え込むくせがパーシヴァルにはあるが、それは単にパーシ  
ヴァルが思慮深い王と言うだけの話である。

「さて、今回はジークフリートと話をしていたな」

「パーシヴァルはどんな話したい？」

「俺は特にないな……可能ならば、王とは何たるかという話をしたい  
ところだが……」

「そういう話し合いじゃないからねえ」

「俺とて、時と場所は考えるさ……とは言うものの、案外思いつかない  
ものだな……」

「うーん……なら、最近パーシヴァルが気になつていることの話でも  
してみる？」

「気になつていること、か……そうだな……お前と、マジサについてだ」  
「ありや？なんか意外なところから聞くもんだね」

パーシヴァルからマジサの単語が出てくるとは、グランは夢にも  
思つていなかったのだ。因みにマジサとは、ヒューマンであり使い魔  
にモラクスを使役している女性である。特徴としては、魔女のような  
格好と帽子と胸囲が著しく大きいことである。



「あの女、やけにお前にくつついているようだが……交際しているのか？」

「ああいや、そうじゃないよ。付き合ってるわけじゃないけど、ちょっとプライベートな問題かな」

「ふむ、そうか……ならば聞く訳にもいかないな……それと、もう1ついいか？」

「はい？」

「お前は妙に鈍感になる時があるが、わざとかな？」

「……え、待つて何の話？」

パーシヴァルが言ったことの意味がわからずに、聞き返すグラン。しかし、今のグランの言葉だけで納得したのかそれ以降何も聞くことは無かった。

「……と、とりあえずお便りいってみよう……『兄弟仲良くしていますか？』ティナだね」

「あのゴブリン狩りの男の妹だったな……仲良く、か……出来ているはずだが……いや、傍から見てどう思われているかはわからないな」

「何か、変な仲の良さはあると思う。何というか、王族特有の高貴な仲の良さというか……」

「……そうか？俺と兄上は仲がいいか？」

「仲良いと思うけど……」

「……そうか」

簡素な返事だが、少しだけ声音が優しくなっているのをグランは見逃さなかった。だが、その事を口に出すほど彼も無粋ではない。

「では2通目『パーさん、イチゴ使ったスイーツが一番好きなのありますか？』意外なところからだね、ローアインだこれ」

「ああ、あのよくわからない言葉を使う3人組か……料理の腕がとてもいいと評判だったのな、試しに食べてみたが……」

「気に入った？」

「……かなり」

ローアインの料理は地位の差を感じさせないものだったらしい、流石である。本人達は、リユミエールメンバーの料理には負けると言っ

ているが、あれは料理とはまた別次元の存在だろう。

「…イチゴのスイーツだったな。基本、好き嫌いはないように育てられている…だが、敢えて言うならばショートケーキやタルトが食べたいな」

「ああ、美味しそうだね…特にショートケーキ」

「そうだろう…団長はチョコ派だったな？」

「そうだね。まあビィと二人でザンクティンゼルに住んでたから、デザートも料理も卒無くこなせるくらいだけど」

「得意なデザートはなんだ？」

「チョコプリン with 低カロリー」

「…今度作ってみてくれないか？イチゴと一緒に、大きいのを」

「それ最早パフェだけど別にいいよ、ローアイン達と一緒に作ってみる」

こう言いながら、グランは何故かまたルナールが暴走している気がしていた。ルナールの耽美絵…無論全年齢のだけだが、そういうのを読みすぎたせいだろうか。

団長という立場上、どうにも閲覧しなければいけないらしい…とこののがリーシャの見解である。

「ああ、楽しみに待っている」

「…というわけで、3つ目言ってもいい？」

「構わん、俺も存外楽しんでるしな」

そう言いながら微笑むパーシヴァル。ルナールの様な女性が増えるのは、あながちこういう事をするイケメンがいるからではないだろうか、とさえ思えてくるグランであった。

「さて、3つ目は…『この団にいる各国の王や軍の隊長を見て、印象に残ったことはありますか』これは匿名希望だね」

「印象か…」

「ある？」

「あるにはある、が…フェードラツへの白竜騎士団は除外させてもらう。よく知っている国ということもあるしな」

「ああうん、多分基準がそれかパーシヴァルの実家だもんね」

「ああ」

そして、パーシヴァルは少し考える。グランサイファーには、あまりにも王様やそれに属する身分のものが多く、そしてランスロットやヴェインの様な軍の隊長なども乗船している。

よく考えて見なくても、色々な意味で恐ろしい団である。

「……そうだな、アイルストは個人的にも勉強になったな」

「昔は王政の国だったけど、今は国民が議会を作って動かしている国だもんね」

「ああ、王という国の一番頭を立てずに国民同士で話し合いを進めていきながら、今後の国の指標を決める……国としては、良い国だと俺は思っている。無論、王政が悪いとも思わんが」

「どっちにも利点欠点はあるからね。一概にどっちがいいとかって言うのは、国で違ってくるだろうし」

「そうだな」

パーシヴァルは嬉しそうに語る。諸国を旅して、王とは何たるかということを考えて行く……自国の民のためにそこまでするパーシヴァルは、やはり王たる器を持っているのだろう。

「それに、一概に王政と言ってもまた色々違ってくるよね」

「その通りだ。王自体が戦闘能力を持つ場合と、持たぬ場合がある」

「ジュリエットとか……そうだね」

「彼女は持つ部類の方だな……しかし、それだけで過信せずに国のために出来ることをしてくれる、彼女もまたいい王だろう」

グランは、ジュリエットの後にロミオ……神王モンタギューの名を上げかけていた。しかし、これを今口から発することは許されない。というか、ロミオが乗っている事は内密にせねばならない。ロミオからのお達しである。

「さて、読み上げてたところで……」

「ん？」

「また一つ、質問をいいかな？」

「構わん」

「この団で国を作るとしたら、パーシヴァルならどんな配置にする？」

あ、名前を知っている人だけでいいよ」

「この団で、か……ふむ……」

そう言って考え込むパーシヴァル。なんの意味もない、興味だけの質問だが、パーシヴァルは『適切な人員を配置するために必要なこと』といった風に考えていそうだとグランは少しだけ面白がっていた。

「……王なのは、まず騎空団団長であるお前だろう。」

「嬉しい評価だよ」

「そして、その王に必要な副官……所謂秘書には、カレンを置くべきだな」

「カレンって……オイゲンの姪っ子の？」

「そのカレンだ……王に成り変わろうとする野心を持ち合わせているやつほど、王の仕事を請け負った時のために王のスケジュールを綿密に組んでくれるだろう。それに、彼女は性格がいい……そのスケジュールを悪用することもないと考えて、その人選だ」

「なるほど……」

人を見ているパーシヴァル。グランでさえもついつい頷いて感心してしまうほどだった。

「次に、街の工業に関してだが……これはガラドアが良いだろう。金属の扱いに関しては、この団の中でもトップクラスだ」

ドラフの男ガラドア、鉄を愛し鉄に愛された男。彼の金属推しは確かに団の中でもトップクラスである。

「商業に関してはカルテイラ、軍部の扱いに関してはイルザと俺は思っている」

「その理由は？」

「この団ではシエロカルテに並ぶほどの商業が出来るのは、カルテイラだけだと考えた為だ。」

軍部の方に関しては……まあ、彼女の部下のしごきをみていれば、ちゃんとしている軍だろう」

「確かにね」

カルテイラは、エルーンの少女である。シエロカルテの同期であり、その商売の腕はシエロカルテにも負けてはいない。

イルザは、星晶獣を1人で倒すことの出来る武器、封印武器を持ち合わせている『組織』のメンバーであり、ゼタやベアトリクスなどもしごきあげた腕利きである。しかし、offの時は1人の恋に恋する乙女といった女性でもある。

「あと他に国に必要な部署って合ったっけ?」

「料理関係だな」

「料理関係……」

料理と言われてまず出てくるのは、リュミエール聖騎士団に所属しているセワスチアンである。リュミエールグルメを作ることが出来る彼は、この団に置いては破格の料理スキルを持っているが……

「リュミエール聖騎士団ってありの方向なの?」

「この団に所属しているのは間違いないとはいえ、彼らはあくまでもリュミエール聖騎士団だ。と考えるならば……抜いた方がいいだろう。あくまでも、どこの組織にも所属していないかつこの団にいる者が好ましい」

「となると……」

残っているので目立っているのは、ファラとローアインである。カタリナ思いの2人だが、ファラは帝国を抜けている為には無所属の扱いとなっている。

「代表としては、ローアインになるのかな?」

「そうだろうな、一般人とはいえあの料理の腕は評価しておきたい」

「……こんな所かな?」

「まだまだ決めたい部署があるが……時間が無いようだな」

「というわけで匿名希望の人! 答えは出たので参考にするなりなんなりするように!!」

グランはカメラに向かって、そう告げる。パーシヴァルもそれで終わることを確認したのか、すつと立ち上がる。

「というわけで今回の団長相談室はここでおしまいとなります、次のゲストを待っててくださいね」

カメラの電源を切り、グランもまた部屋を出るために扉のドアノブに手をかけながら、パーシヴァルと話をする。



「血の処理は俺がしておいてやる……通りがかった船だしな」

「すいません……」

こうして、ルナールはグランサイファー医務室に運ばれていった。医務室はソフィアとファステイバの管轄なので、ルナールは流石に落ち着けるだろう。

## 俊英の双剣士、白竜の刃と散れるか？

「今日は白竜騎士団団長ランスロットさんにお越しいただけました」  
「よろしく頼む」

「まあまあ、そんなに固くならないで。簡単に喋ってもらっただけだから」

「そ、そうか？」

少し緊張気味のランスロット。ジークフリートやパーシヴァルは、綺麗に座れていたが、どうにもその2人と比べて堅苦しいような印象が漂っていた。

「さて……色々あるけど、実はランスロットに1つ謝りたいことがあるんだ」

「謝りたいこと？この場でか？」

「いや、別にこの場じゃなくてもいいんだけど……謝りたい、って言うか相談？」

「ん……う？」

「10月31日、12月24日もしくは25日、1月1日……そんで俺の誕生日……その日の夜、決まって俺は夢を見るんだ」

深刻そうな顔をして、グランは語り始める。今挙げた日は、いずれも何かしらの行事が存在する日である。そしてそれはランスロットも気づいており、その夢に自分が関係しているのだと思っていた。

「夢……？」

「10月31日、去年のハロウィンで見た夢は……ランスロットが牢獄で閉じこめられすぎて未来予知を覚えた夢だった」

「……え、えつと……」

「いやごめん……ほんと自分でも何言ってるのかわからないんだけど……」

申し訳なきように、しかしこれは事実なのだ。グランはランスロットに言い聞かせていた。見てしまっているのだから仕方ないとまでは言わないが、グランはどうしてもランスロットに言いたかったのだ。



「じゃ、じゃあ……12月24日1、12月25日…クリスマスだと？」

「……去年のは、グランサイファアの甲板に出たら幽体離脱したランスロットの夢を見たんだ」

「……何故、幽体離脱だと？」

「あの時の、夢の中のランスロットが言ったんだ……『体は牢獄にあるけど』って……」

「そうか……」

最早グランも、何を言っているのか全く理解出来ていなかった。そもそも、何故こんな夢を見ているのかすらよく分かっていないのに、説明し始めるとより一層意味がわからなくなってくるのだ。

「1月1日……元旦では？」

「体があるのか、それとも幽体離脱したままなのかは分からないけど……民衆に崇められている存在になっていた」

「済まない、だいぶ過程が省かれたように感じるのだが」

「ごめん、でもこれ割とそのまま語ってるんだ……」

「そう、か……団長の誕生日では、夢の中の俺は何を渡したんだ？」

「……本？」

「い、いきなり無難になったな……いや待て、本？牢獄の中でか？」

ランスロットはふと怪訝に思っただけで、ランに聞いた。ランも語りづらそうな表情をして、唇を噛み締めてしまっていた。

「……牢獄内での、自筆の……」

「いやもう、済まない夢の話はやめよう……頭がおかしくなりそうだし……そうだね、もうやめにしよう」

少し気分が落ちていたので、グランは静かにお便りダンボール箱を取り出してシャカシャカと振り始める。無作為化のための必要な過程なのだとか何とか。

「さて、気分転換にお便りいってみよう……因みに、ランスロットは自分にどんな質問来るかとか考えてたりする？」

「そうだな……案外、騎士団のこととか聞かれそうだな」

グランは心の中でそのセリフの後に『主にルナールが』という単語

をつけ加えていた。というか、既に2度やらかしているのでそろそろ心臓に負担をかけるのは止めて欲しいとグランは切に願っていた。

「さて、1つ目は……『フェードラツへの知り合いの中で1番一緒に戦いやすい相手は誰ですか?』」

「ヴェインだな」

「わかっていただけ即答だね」

「昔からの付き合いで、癖も知り尽くしているからな」

どこからか、何かが破裂したような音が聞こえたが恐らく気にするほどのことでもないだろう。大方、どこかのハーヴェインが鼻血を吹き出した音に違いない。

「ヴェイン戦斧、ランスロットは二刀流だったよね……癖を知り尽くしているとはいえ、相性っていいもんなんだね」

「ああ、そもそも俺が二刀流による手数での攻撃、ヴェインが強力な一撃を叩き込むというのが主流だからな。主に俺が敵の目を引き付けてから、ヴェインがトドメを刺すというやり方が多い」

「確かにそう考えると凄く相性がいいんだ……」

「団長はそういう相手いないのか?」

「うーん……正直に言うと、グランサイファアの全員と相性がいいみたいなのもあるかも」

事実、グランは団長という立場のせいもあるかもしれないが、団員の殆どと連携が取れるのだ。ある程度の個人練習を行っているが、それでも異常な程に全員と連携を結ぶことが出来る。

「改めて考えると素晴らしい才能だな……」

「そうかな?」

「そうに決まっているだろう? 誰とでもコンビを組めるのは、立派な才能だと思う」

「そう褒められると悪い気はしないな……というわけで2つ目……つと、さつきもこれも匿名希望だけど……同じ人かな? 『フェードラツへ組以外でコンビを組める人はいますか?』」

質問は真逆だが、しかしほぼ真逆の質問が行われるという辺り同じ人物のを引いてしまった可能性も否めない。とは言っても、1人1通

とは決めていなかったのでグランは気にしていなかったのだが。

「ヴェイン以外でか……」

「誰かいる？」

「……シルヴァ、さんかな」

「あー、狙い撃つてくれるから？」

「ああ、敵に囲まれた時とかはかなり助かってるよ……しかし、少しだけ言うことがあるとすれば……」

「ん？」

珍しくランスロットが、女性に対して悩んでいるところを見たような気がするので、グランは少し気になって前のめりになっていた。ランスロットはその勢いに少し押されたが、ボソツと一言だけ言い放った。

「あのスカートは……その、色々と危ない……」

「……あー」

シルヴァは狙撃手である。しかし、インファイトも一般人以上にはできるので、偶に魔物を蹴り飛ばしたりすることがあるのだ。しかし、格好としては彼女はいわゆるスカート……それもミニスカの類である。当然、蹴ればその中身が現れるということもある。

「……まあ、最近はスカートじゃなくなってきたから助かっているが」

「あ、そっか。最近ズボン履くようになってきているもんね」

最近シルヴァ……もとい、シルヴァ、ククル、クムユの銃工房三姉妹関連で少々問題が起きていたのだ。その問題を解決すべく、色々奔走していく内に彼女にも心の整理が着いたのか、最近ようやく今までと趣向が違う服を着るようになったのだ。

ただし、以前の青が目立つ格好と現在の黒が目立つ格好では、へそや胸が目立つということはあまり違いが出ていないのだが。

「まあ本人言われるまで意識してなかったみたいだから」

「そうだったのか」

「というわけで3つ目『この団に入って新鮮だったことはありませんか？』今回全員匿名希望だったよ」

「色々であるが……そうだな、一つ上げるとすれば、団員が皆同じ立場で親しくしようとしてきているところかな」

「え……白竜騎士団って実はギスギスしてるの……?」

ランスロットの言葉を聞いて意外そうな顔をするグラン。しかし、直ぐにランスロットが謝りながら訂正を加える。

「そうじゃない、済まない言葉が悪かったな。騎士団ではヴェイン以外は皆敬語で接してくれるからな。」

この団でも、敬意を込めて敬語で接することはあるが、それでも俺と皆同じ立場にいてくれる……それが新鮮だったんだ」

「なるほど、そういうこと……確かに、騎士団所属とかは敬語同士で話し合っているとこよく見るよ」

シャルロットやバウタオーダなどを見ていて、グランはうんうんと頷いていた。そもそもバウタオーダは根っからの真面目なので、誰に対しても敬語なのがデフォルトなのだが。

「色々面白いでしょ?この団」

「ああ、騎士団は皆同じようにしているが……この団は秩序がきちんと整っているのに、皆自由にやれている……素晴らしい団だと思う」

「まあ、ある程度無法だと思うところもあるかもしれないけど……そこはちゃんとウチにもいるM s. 秩序がいるからさ」

遠回しにリーシャのことを言っているのだが、伝わっているたわっていないはどうでもいいのだ。ただ、言っておかねばならないと思っただけである。

「なるほど、秩序の騎空団団員がいるなら安心だ」

「あ、そう言えばさ」

「なんだ?」

「ジークフリートを除いたフェードラツへ3人組って誰がいちばん強いのか?」

「……そういえば、考えたこと無かったな」

「まあ単純な俺の疑問だっただけだからさ……」

「これからのコンビネーションの為に、1度手合わせしておくべきか……」

実力は、いつまでも伸び続けるものである。適度な手合わせをすることで、どんな時にどんな動きを行えばいいかがよく分かるのだ。

「……つと、そろそろ時間のようだな」

「じゃあ、今回の団長相談室はここまでにしておこう。皆さん、ご視聴ありがとうございますございました」

促されるままに電源を落とし、番組を終わらせるグラン。そして、そのまま部屋から出ていく。

「ところで、最初の夢の話は本当なのか？」

「嘘語ったところでしょうがないじゃん……ん？」

ふと、グランの目の前をルナールが横切った。平然としており、前回々回のような失態は、まるで犯していないように思える。

しかし、だ。それが逆にグランの疑問を煽っていた。今回の放送で、何事もなく平然とルナールが出てくるわけがないのだ。

「ルナール……？」

「あ、団長さん。番組面白かったわよ」

ニコツと、微笑み返すルナール。耐性がついて鼻血を出さなくなったと考えればある意味喜ばしいといえれば喜ばしいのだが、その清々しい顔はあまりにも違和感があった。

いつものイケメンを見た時の反応や、耽美絵の妄想をしている時のような顔や雰囲気は一切見られなかった。そして、その清々しい顔はグランはどこかで見たことがあるような気がしていた。

「あ、ああ」

「それじゃあ私はこれからご飯食べに行くから……ランスロットさんもどうですか？」

「そうか？なら、一緒に行こうか」

そして、まさかのランスロットを「ご飯を誘うというやり方までしてきたのだ。これはもう謎が謎を呼ぶ急展開でしかなかった。グランは2人を見送ることしか出来なかったが、ふとここでソフィアのいる救護室が近いことを思い出したので、グランはそこに向かっていった。

「あ、ルナールさんですか？」

「なんかした？」

「ああ……先程、団長さんの番組が始まる前にこの部屋に来たんですよ」

「ほう……まあここにも映像映し出す奴は置いてあるから……見れないことも無いか」

「そしたら途中で鼻血がとんでもない量出てきて……」

「出てたのか……」

「メタノイアさせました」

「あの清々しい顔をどこかで見たような気がしていたが……そうか、ソフィアのメタノイアの効果か……」

つまり、こういう事である。

ルナルルは前回前々回の反省から、救護室でソフィアの回復を即座に受ける事によって、自分たちに迷惑がかからないようにとソフィアに説明したのだ。

ソフィアはOKを出して、ルナルルは番組を閲覧……案の定鼻血を大量に出したのでソフィアが蘇生。

そして、蘇生されたかつ妄想も極限を迎えた状態だったので、その時点で既にネタ帳に書き込んでいく。

そして、その後でここを後にしてグラン達と鉢合わせた……という事なのである。

「……必死だな、あいつ」

しかし、耽美絵師であるルナルルは悪くないのだ。悪いのは、それっぽい言葉をついつい吐いてしまう自分とフェードラツへ組なのだから……

不撓不屈の騎士、この一瞬に全てを賭けようか？

「今回のゲストはヴェインさんです」

「ランちゃん、見てるー？」

カメラに向かつて手を振るヴェイン、実に楽しそうはしゃぐその姿はまるで子供のようにも見える。

「今までこうやって見てきたけど、案外この部屋って広いのな」

「え、うんそうだけど……何、狭いと思ってた？」

「皆の鎧がごっついからなー」

「あー、ジークフリートとか凄いもんね。よく考えたら映像越しだと分からないこともあるか……」

ランスロットやヴェインはともかく、パーシヴァルやジークフリートは鎧がかなり装飾過多だったり分厚いものだったりと如何せん面積を取っている。そこを考えれば、カメラ越しだと狭く感じるというものだろう。

「というか、何でフェードラツへ組は鎧着てんの？脱いできてもよかったのに」

「まあー、そこは気を引き締めるため？ってな!!」

「へー……そう言えばヴェインは、あの中で料理が1番できるよね」

「そうだなあ、ランちゃんが料理できないからさ。ジークフリートさんやパーさんは料理できる方だし」

「俺パーシヴァル料理できないと思ってたよ……」

「誤解されがちだけど、パーさんは学ぼうと思ったものはきっちり勉強していくタイプだからなあ……料理も多分実家の侍女さんにでも習ったんじゃないか？」

パーシヴァルが料理しているところを思い出して、グランはウンウンと頷いていた。この団にも料理好きはいるので、勉強していくのだろう。

「そうそう、料理といえばさあ」

「ん？足りない食材でもあった？」

「いやいや、俺ずっと思ってたんだけど……リュミエール聖騎士団の

バウタオーダさんいるじゃん?」

「ああうん……彼がどうかしたの?」

「歌いながら料理しててさ、あの低い声で歌うもんだからすごくフライパンとかに振動が行くんだよ」

「う、うん」

「だからなのかさ、同じ調理の仕方同じ具材を使っても全く味が変わるんだよなあ」

「……そうだったの?確かに作ってもらったことある炒飯はすごくパラパラしてたけど……」

意外な事実をヴェインから告げられて、驚くグラン。あの低音で歌うことに、まさか調理そのものに影響を与えるとは思っていなかったのだ。今度から、頑張つて低音で歌ってみようと思うグランであった。

「でもなあ、多分俺らには難しいと思うんだよその調理方法」

「え、なんで?」

「ドラフの男性つてさ、殆ど声が低いんだよ……しかもよく響くつていう共通点もある」

「……まさか、ドラフ男性の新しい特徴を見つけちゃった?俺達……」  
「そうかもしれない……これランちゃんに言っても、何かよく分からないみたいなの顔されたけど」

「いや普通そんな反応になるわ……いやでも、そうかあ……種族の差で料理に区別がつくのかあ……今度団内で、各種族別の料理自慢大会でもやって見る?同じ具材同じ調理方法で同じ料理を作ってもらおう  
感じで」

「お!!それ楽しそうだなあ!やろうやろう!」

グランの提案に楽しそうに乗るヴェイン。にっしつしと笑うその姿は、グランから見ても白竜騎士団の隊長副隊長が人気の理由がわかるものであった。

「だからモテるんだなあ」

「ん?持てるって何が?」

「ん?いや、ランスロットもヴェインも女性からモテるからさ……そ



ういう所が人気の秘訣なのかなあって」

「俺もランちゃんも、女の人に持たれるほど軽くないって！むしろ逆で俺達の方が持つちゃうかもな！あ、何なら俺ランちゃんまで担ぎあげちゃうかも」

「……………ん？」

「ん？」

何故か微妙に会話が成立していないような気がしたグラン。しかし、あまり気にしていると頭が痛くなりそうだったので、ここらで序盤の雑談は切上げて置こうと思うのであった。

「さて……………そろそろお便り行ってみよう」

「待ってました!!」

「さてさて……………『団内で料理を作れるメンバーの中で、教えてもらったり逆に教えたりすることはありますか』匿名希望」

「うーん、全員!!」

「え、それってどっちの意味で？」

「どっちの意味もだなあ……………って言うのもさ、俺達を作る料理って微妙に違うものなんだよね、同じもの作るにしても」

「ん？例えば？」

「そうだなあ……………ローアイン達と俺の料理だと、レストランとかの売店で売る料理の作り方、俺は騎士団に振舞ったりする料理の作り方……………って感じかな？」

「何となくわかるようなわからないような……………」

要するに、何もかもが同じでもどういった料理を作るか…料理を作る癖が無意識に染み込まされているということなのだろう。

「だから、全員で教えあってるって状態なんだ」

「へえ……………」

素直に感心するグラン。同じ料理でも、そこまで違いが出るのなら自分も教えて貰いたいものだ、と考えるのであった。

「とりあえず、2つ目行こうぜー」

「よし来た……………2つ目は…『自分の武器以外の武器を使ってみたくて思ったことはありませんか?』」

「うーん……」

「ないならいいと思うよ?」

「いや、むしろ多すぎるんだよなあ」

「え、そんなにあるの?」

「剣も槍も弓矢も銃も何もかもを1度は使ってみたいと思ってる、騎士団のみんなとかランちゃんの為になることなら、なんだってしたくなるしさ」

根底にあるのは、白竜騎士団に対する気持ち。それがあからこそ、ヴェインは色々は武器を使ってみたいと思うのだろう。無論、自分自身に対する興味もない訳では無いのだろう。

「でもヴェインは、何となくだけど重たそうな武器を使ってるイメージがあるかも」

「え、なんで」

「……いつものイメージ?」

「あっちゃあ……そうかイメージかあ……一応、俺だつてククルちゃんを使ってる武器とかは使つてみたいとか思ったことあるぜ?」

「あれは特注だからねえ……まあでも、使つてみたいと思わなくもない」

「団長ならきつと使えるって」

謎の励みしたが、グランは褒められて悪い気はしていなかった。しかし、あれはククル専用の武器なので、自分が使うには自分専用のを作ってもらう必要があるだろう。

「そうだといいいけど……と、とりあえず三通目行ってみようか」

「よーし、ラストだな!」

『よく子供たちと一緒に居ますが、子供が好きなんですか?』

「子供かあ……大好きだぞ?」

「よく遊んでくれるしね……俺が構ってやれない分、団の大人達が子供たちをちゃんとお世話してくれてるから俺達もちやんと動くことが出来ます」

この団には、子供だけが乗船しているというパターンがある。ヤイアや、アレクなどがい例である。

「おかげでいい子に育ってきてます……！」

「おいしい、随分と子沢山の父親だなあ」

グランのことを父親と言いながら、楽しそうに笑うヴェイン。それほどまでにグランの顔が父親のように見えたのだろう。

未だ少年の身で団長になっているような人物なのだ、いくらか早熟であつてもおかしくはないだろう。

「ああそう言えば、偶に白竜騎士団のみんなに頼んで、子供たちの親とかの様子を見に行ってもらつてる時があるんだよ」

「あ、ヤイアのお父さんとか？」

「そうそう、子供の心配とかしてる人もいるし……逆に、今ご両親がどんな状態なのかを報告しに行つてる」

「助かるよ」

「いいよいいよ、それにこれ白竜騎士団だけがやつてる訳じゃないんだよな」

「え、そうなの？」

「リュミエールも、他の騎士団だつてみんなこの団の役に立とうとしてる。この団に救われたと思つている人も多いつてことさ」

「……人徳つてやつ？」

「人徳つてやつ」

ヴェインのその言葉に破顔する程に笑みを浮かべるグラン。自分が褒められるということが、彼にとってはかなり嬉しいことなのである。とはいつても、毎日褒め倒されているような気がしなくもないヴェインなのであつた。

「さて、お便り全部読み終わったわけだけど……実際、この番組どう思う？」

「楽しいと思うぞー俺もずっとこの団にいるけど、まだまだちゃんと知らない人とかいたりするしな。ちゃんと知り合えてこそみんなで食べる飯がさらに美味くなるつてもんさー！」

「そうそう、元々知らない人同士が知り合える機会を作るのがこの番組の目的なんだから」

「の割には、女性団員にセクハラ働いてないか？団長」

「それは言わないで欲しいかなあ」

苦笑いをしながら、グランはあきつての方向に視線を向ける。男の欲望に忠実すぎるのも、如何なものかという話だが……グランはどうにも辞められないようだ。

「ま、本人達が本気で嫌がるようなことはしないのは分かっているしな、団長は……そこら辺のボーダーライン見極めるの上手じゃないか？」

「そうかな？確かに本気で嫌がることはしたくないけど……」

「まあ普通、セクハラはしちやあダメなんだけどな」

「ごもつとも……」

「まあ何度も落とされてるのに、セクハラやれる不屈の精神は逆にすごいと思うぞ」

同意を求めている訳では無いが、しかしそれでも言ってしまうことがあるのはしょうがないだろう。というのがグランの弁解である。10にも満たない子供でも、もう少し我慢はできるようなものだが。

「……つと、時間大丈夫か団長」

「ああ、もうそんな時間か……」

そして、気づけば番組終了の時間が迫ってきていた。やはり、話し込むと時間が経つのがとても早く感じてしまう。グランはもう少し長めにやれないかと思っただが、それは冗長になりかねないので自分自身で即座に頭を降って否定した。

「さて、今日はこの辺で終わりにしたいと思います。皆様ご視聴ありがとうございました、また次回おあいしましょう」

そう言ってから、グランはカメラの電源を落とす。そう言えば、今日はルナールが引つかかりそうなことを言っていなかったな、と自分の基準でグランはそう思っていた。

何が琴線かはわからないが、おそらく今回は大丈夫だろうとグランは踏んでいた。

「あ、団長俺これからランチちゃんとパーさんと出かけるから、また後で」

「あ、うん了解。じゃあまた後でね」

そう言って、一旦部屋の外に出てから別れるグランとヴェイン。そ

の後、グランは何となくルナールの部屋の前に来ていた。

「鼻血やら前もって医務室にいるやら……段々と悪化して行つてたが……今回は大丈夫だろう、今回は……」

溢れる嫌な予感を抑えながら、グランはルナールの部屋の扉をノックする。返事は帰つてこない、留守なのだろうか？

「……ルナール？居ないのかー？……ん？」

ドアをノックしているうちに、グランは気づいた。ドアに鍵が掛かっていないのである。この団では、一応部屋の扉にはそれぞれ鍵を設けている。殆どの団員がノックしてから入るため、あまり意味を為していないが、プライバシーを遵守する……主にルナールが鍵を使用しているのだ。

「……ルナールが部屋を開けてる……？お邪魔しまーす……」

本来、いようがいまいがルナールは部屋に鍵をかける。耽美絵を見られたくないからだ。それと、未成年には見せられないのものとかもあるのでそれを見せないようにするための保護として、である。

だからこそ、開いているわけがないのだ。

「ルナール……はっ!？」

ドアを開けた瞬間、そこにはルナールが倒れていた。それも、まるで天寿をまつとうしたかのような笑みを浮かべていた。

「ルナール!!お前なんで死んでるんだ!!」

「……」

「ん？何だ？」

ルナールの口から漏れている言葉、それを逃すまいとグランはルナールの顔に耳を近づける。

「めっちゃ……尊い……」

「お前……尊さが……」

つまりはこういうことである。ヴェインのランちゃんの連呼で、それだけで尊さが彼女の中で振り切ったようなのである。

グランはこの後泣きながらソフィアの元へと連れていった。そして、ちゃんと蘇生してもらってからルナールは自室へと戻って行ったのであった。その時のソフィアの困惑した表情は、グランもルナール

も忘れることは出来ないであろう。

眠れる輝竜、舐めると痛い目を見るよ？

「はい、今回のゲストは白竜騎士団見習いのひよこ班アーサー君です」「よろしくお願ひします」

「えー、ゲスト紹介の時に何故この団に居るのか？という疑問を持つた人もいると思うので、解説をどうぞアーサー」

グランはカメラに向かって手を伸ばす。アーサーはその方向に視線を合わせて、体を向けて体を強ばらせながらもハキハキと喋り始める。

「は、はい！えっと……ランスロット……さんが言うには、この団にいる事で騎士団生活で自分がどのように過ごすかの練習……と聞きました！」

「って事です、因みにここでは団員全員差がないように俺が徹底してるので、団長だとか隊長だとかで優劣をつけないようにしています。

別に団長とか隊長って呼ぶ分には構わないんだけど……ランスロットはそこら辺凄まじく徹底してるので、呼ばせないようにしています。敬語でようやく許されました」

「えっと……団長はどうなんですか？」

再びグランを向き直り、首を傾げながらアーサーは問う。グランサイファーに乗船している団員は、軽く100は有に超えている。これだけの大きい団を従えているグランは、団長と呼ばれることにどう思っているのか……それを聞こうとしていた。

「どうって何が？」

「自分が団長と呼ばれる事に」

「うーん……まあ、実際団長だから受け入れてるよ？」

「本音は？」

「俺を尊敬してくれて嬉しいけど、呼ばれるのめっちゃやむず痒い……皆もつと俺の事名前前で呼んで欲しい、フランクにいつてもいいんだぜ？」

「そこまで行くのはいかがだと思いますけど……」

「ま、こんな本音はこういう時だからこそ……言えるもんなんだよね。」

偉い人と会う時とか、グランって呼ぶ人は皆団長呼びになる」

「公私分けて接している、という事なんですネ」

「ま、そんな所だね……さて俺の話はさておいて……アーサーの話に行こうか」

「あ、すいません……話逸らせちゃって」

少し申し訳なさそうにするアーサーに、苦笑しながらグランは大丈夫だと言言う。そこまで気にしていることでもないし、そもそも談笑する番組なのだ。なんら問題がある訳では無い。

「いいよいいよ、気にしないで。って訳で……今回代表としてアーサーを読んだ訳だけど、実はアーサーの所属しているひよこ班は全員ここに所属しています」

「この団の生活はどう?」

「結構楽しんでますよ、色々勉強になることも多いし……ただ「ん?」

「ランスロット……さんは『騎士団にいるよりこっちの方が生活が濃密だ』と言っていたんですが……それがよく分からなくて」

「あー……」

「団長さんはどういう意味かわかりますか?」

「分かる、分かるけど……よし、簡単に……説明しよう」

「は、はい」

グランの勢いに押されて、アーサーは再び体を強ばらせてグランの話を真面目に聞こうとする。再三申し上げるが、別にそこまで真剣なことは言うことはほとんどない。

「騎士団とこの騎空団が共通していることはみんなが同じ生活、同じ規律で生活する空間……って言うこと、それは分かるよね?」

「はい」

「けど、騎士団は自分だけじゃなくてある程度他人も含めた共同生活……こっちはプライベートや趣味丸々持つてきてもらってるから1人部屋なんだよ、そこに違いが出てくる」

「……えっと、例えば?」

「人には見せられない趣味がし放題……あ、犯罪はダメだよ?」



どの口が言うのかはわからないが、グランはカメラ越しに注意する。どこぞの女騎士の部屋の前に立って、観察する元アルビオン領主が幾度となく確認されているので遠回しすぎる注意である。

「犯罪じゃない範囲で人に見せられない趣味……?」

「極論女装とか」

「……確かに見たら関係がギクシヤクしそうだなあ……」

アーサーは渋い顔で反応を返す。頭の中で誰かが女装していたのだろうか?それを問う気も起きないグランであった。

「さて、場も温まつてきたことだしお便り行ってみよう」

「お、俺にあるんですか!」

「あるよー?あるある……さて一通目……えー……」

チラツと『攻めですか?受けですか?』の質問が見えたが、グランはそれを華麗にスルーして別のを取り上げる。そろそろ賢者モードにぶち込んでやらないとだめだろうか、とルナルの顔を思い浮かべながら内心渋い顔をしていた。

『騎士団では剣を扱いますが、この団でも剣の使い手は沢山います。誰かを目標にしていますか?』

「そうだなあ……確かに、この団には剣の達人が多いですよね」

「そうだね、アーサーは誰か勉強になると思ったことはある?」

「やっぱりヨダラーハさんやアレーティアさんですよ!」

「あの二人から教わるのは至難の業じゃない?」

教えて貰えるには教えてもらえるかもしれないが、あの二人は達人を飛び出た何かなので、単純に見たり聞いたりする場合は確実に勉強にならないと……グランはそう思っているのだ。

「いえ!二人の心意気や剣を使っている時の感覚などを聞くのも勉強です!!」

「まさかの精神論の方を学んでいたとは……」

剣の使う道ではそれも確かに重要なかもしれないが、そちらの方がよっぽど習うより難しいのではないだろうか?

「まあ、この団には他にも色々な剣の使い手はいるからね。ただ武器として振り回すんじゃないくて、演舞として舞うための剣の使い道なん

「かもある」

「ガイーヌさんやユエルさんですな……」

「ん？2人となんかあった？」

「い、いえ……その、色々と凄いなあと思ってた……」

そういうアーサーの顔は真つ赤である。未だウブな少年の心から見ると、あの二人の格好は色々と刺激的すぎるようだ。グランはもう慣れていたので、寧ろこつちから攻めていくが。しかし、そんなことを少年に言えるはずもなく……

「確かにねえ……さて、2通目いってみよう」

誤魔化すしかないのである。そして、そのまま流れるように別のお便りを読もうとハガキを漁る。アーサーも、それで話が流れたので何も追求することは無かった。

『騎士団では料理も食べますが、この団の料理で驚いたことはありますか』

「驚いたこと、かあ……むしろ、料理が得意な人がこれだけいること自体が驚きのようなものですかね」

「ん？そうなの？」

「はい、しかもどれも絶品な美味さなんで……」

「多分騎士団だと料理作るのって給仕の人がやってくれると思うんだけど……」

「どつちかと言うと僕らの味はヴェイン……さんの方ですかね」

「ああ、美味しいよねヴェインの作るスープ」

「豆を煮込んで作るスープ、単純だが質素且つ美味しいという大変お財布にも優しいスープはグランの心を蕩けさせているのだ。実際美味しいものだから仕方が無い。」

「ヴェインのスープ……じゃなかった、ヴェインの料理以外で印象に残ってる人の料理とかある？」

「んー……セワスチアンさんの……」

「やはりリュミエールグルメか……まあ確かに美味しすぎるのはいけないんだけどね」

恐らく団最高の食事は、リュミエールグルメが支配しているだろ

う。あれを突破することは愚か、肩を並べることすらも難しいレベルだとグランは考えていた。

これからもこんなのを食べられ続けるリュミエール聖騎士団が、グランはとても羨ましかった。

「俺が女だったらセワスチアンに結婚申し込んでる」

「え、何の話ですか急に」

「いや、リュミエールグルメずっと食べ続けてたいなあって……」

「料理で結婚相手決めますか……」

「料理は必要なフアクターさ……つと、話逸れた……三通目『騎士団生活では他の人と相部屋になるので、趣味を持つことは難しいです。そんなアーサーさんの趣味はなんですか?』」

「その流れで趣味を聞くんですか……?」

「正直俺もびっくりした……まあとりあえず趣味ってなんかある?」

「うーん……鍛錬ですかね?」

「もつといろんな趣味持とうぜ! って俺が言えたことじゃないか、俺も趣味が鍛錬……というか学ぶ事?」

「団長さん色んなことやってますし、あれ全部趣味なんですか?」

「訳分からんくらい強い婆さんと戦うことは、趣味のうちに入らんど。ほんと何だあの婆さん」

「でも強いひとは戦っていききたいです、強くなりたいたいですから」

少し前のめりに意見を言い放つアーサー。彼の飽くなき強さの探究心は、これほどまでに強いのである。

「うんうん、その気持ちをこれからもちやんと持っていてくれよな……つと、もうこんな時間か」

「話し込んでると時間ってあつという間ですね」

「そうだな、まあ別に何か重要な話をするような場じゃないし……こんなもんだよ」

「こんなもんですか」

終わりの時間が近づいてきたことで、少しだけ名残惜しくなっているアーサー。しかし、当然のことながら別段大切な話はしていないとグランは改めて説明をし直す。

「さて、今回の団長相談室はここまでとなります。皆さんご視聴ありがとうございました。」

そうしてカメラの電源を切って、アーサーとグランは部屋の外に出る。アーサーは自前の剣……無論鞘に収めたままのものだが、それを見せてグランを誘う。

「団長さん、この後1戦どうですか？」

「お、鍛錬か？いいよいいよ、十分に付き合っただけだから」

グランも今装備している武器を見せながら、いい笑みを浮かべる。ふと、今の会話をルナルが聞いていたらどうなっていたら尊死する思ったが、流石に今回は放送中にそういうルナルが聞いたら尊死する様な単語や文章を発した記憶はないので大丈夫だと、グランは少しだけ油断していた。

「……いやでも、この流れだと……」

「……団長さん？どうかしましたか？」

「ん？いや……ごめん、ちよつとだけ待っててくれない？」

「へ？は、はい……」

アーサーを置いて、グランはとある部屋に向かっていく。無論、ルナルの部屋である。前は鍵が開いていたので、簡単に中に入ることが出来たが、今回は鍵がかかっているらしくキッチンとドアは開かないようになっていた。

「……ルナル、いるのか……いないのか……何か音がするし、多分いるなこれ……」

中からは奇妙な音が聞こえてきていた。グランはその音に聞き覚えがあった。それは、大急ぎで書類にサインしてる時に出るペンと机がぶつかり合う音だ。今回は、それを更に激しくしたかのような音量になっていた。

「……ん？なんか声も……」

「ふ、ふふ……シヨタ同士……滾るわ……！」

「……」

グランは正直、ドアがあつたらそつ閉じしたい気分になった。恐らく今の自分の顔は、真顔を通り越して死んでいることだろう。それほ

どまでに感情が死んでしまった。

「そ、それを敢えて寝取らせて：!?そしておじさんのハーレム……うーん、偶にはそっちもいいかもしれないけど……無しね」

そのおじさんはどこから出てきたのかとか、何故ダメだったのかとか、そもそもハーレムっておじさんなにしてんのか、色々突つ込みたいたところはあつたが、抑えるまでもなくグランの口からそのツツコミが出ることは無かつた。

「……帰ろう」

グランは、ルナールを今回は放置することにした。ペンが動かせている以上、唐突に死んだりしない限りは大丈夫だろうという考えである。本音を言えば、今の状態のルナールにはあまり関わらない方がいいという教訓があるので、関わり合いたくないということである。

「さて、アーサーとの特訓に行くか」

そしてそのまま、グランはアーサーと特訓に行ったのである。後日発見されたルナールは、何かをやり遂げたかのように凄くいい笑顔で眠っていたという。

無論、未成年をそういった青年本に出すのは駄目である。仮にランドセルを背負っていいようが、18歳以上にしなければならぬのである。そのせいで、ルナールはリーシャオリジナルの懲罰房行きになったのであつた。

## フェードラツへの騎士達の任務

グランとフェードラツへの騎士達は、グランサイファーに寄せられた依頼の一つである魔物退治を請け負っていた。

その依頼では、魔物が大量発生しているために数を減らして欲しいというものであり、ある程度強力な人手を募って行くことになったのである。そして、ある程度班分けをして四方八方から攻めることで魔物達を減らしていくという作戦で行くことになり、グラン達も別れて行くことになった。因みに、ひよこ班のメンバーも参加しているが、それはヴェインに全員ついていくことになっている。ほかは、全員一人での参加である。

「……とは言っただけどさあ!!こんなにも多いなんて聞いてないけど!!」

「いやあ、しょうがねえだろ? 森の入口から既にすんげえ数いたんだからよオ」

「私も手伝います!!」

「ありがとう全体攻撃してくれて!!」

グランはビィとルリアを連れてきていたが、正直なところ魔物の数が多すぎるためにルリアの方が数を倒しているという結果になっている。プロトバハムートは強し。

「うおおお!!」

切って切って切りまくって、グランは逆に冷静な思考を手に入れていた。『あー、この剣後で洗うの面倒だなあ』だとか『血の匂いキツすぎてエルーン達から嫌われるんじゃないやね?』だとか色々なことを考えながら、ひたすらに魔物を討伐して行った。

「GYA O O O O O O O O!!」

「ヒドラです!!」

「うるせええええええええ!!」

かつて1度殺されたヒドラだが、正直今相手になることは決してないのである。一撃あれば十分だと理解している。

既に、ヒドラは絶命していた。

「ビィ!!他のみんなの様子見てきてくれ!!こっからでも見れると思う

!!

「おう!!」

ビィに他の者の観察を任せて、グランはそのままルリアと共に進んでいく。プロトバハムートの一撃は確かに強力だが、ルリアの体力の問題もあるので乱発することは出来ないだろう。

「ん?」

「どうしたア!!」

「ジークフリートのいる方角だけどよオ、ウルフが空を飛んでるぜえ」  
「流石ジークフリートさんだ!!空を飛べないはずの魔物を空に飛ばせるなんてなあ!!」

「GYOOOOO!!」

「ヒドラです!!」

「またかよ!何体いるんだよここの島!!最早ここヒドラ捨てられた説あるだろ!!」

叫びながら、血潮を飛ばして魔物は討伐されていく。死屍累々となった道と共に、グランの体はトマトのように真っ赤に染っていく。こうは言っているが、別段何かある訳でもない。

「倒したはいいけどどう処理すんだよこの魔物達!!グランサイファアの食料庫入れとく!」

「だったら干し肉にしないと、ひとまず一種類ずつ食べてみたが…そのまま食べるに適さない魔物もいるから、気をつけよう」

「え、ジークフリートあれ食べたの?一種類ずつでも何体いると思っ

てんの？」

「サバイバルは慣れっこだ」

「違う、その回答は俺の求めているものと違う」

他愛ない話をしながら、グラン達は魔物の肉の処理を考えていた。いくらなんでも多過ぎると村からも渋い顔をされた。これでも村で8割引き取ってくれた辺り素晴らしくいい村だろう。

「いやまさか一人で100体以上倒す羽目になるとは思わなかった」

「そして倒したのはいいが、ジークフリートが他のヘルプに回れるほど余裕があつたことも驚いている」

パーシヴァルが困った顔をしながらそう呟いていた。ジークフリートは首をかしげていたが、そこがおかしい所なんだぞとグランは叫びたくなっていた。

「ていうか日を増す事におかしくなつてない？今日どうやって移動してたのジークフリート」

「ん？地面を歩いていると、上からの奇襲に気づきづらいことに気づいてな、枝から枝に飛び移りながら移動していた。無論、時折移動する最中に攻撃も加えながらな」

「頭おかしい……」

「実は星晶獣か何かじゃないのか、お前は」

パーシヴァルでさえそう突つ込まざるを得ないほどに、ジークフリートはおかしなことをしているのだが、ジークフリートはそれに気づいていない。

「……まあ、とりあえずもつと乾かすか」

「団長、何日滞在するんだ？」

「んー……5日くらいかな。その間に出来るだけ干し肉にしちやおう、他は……まあ物を凍らせることが出来る人達に肉を凍らせてもらつて、保存が効くようにしよう」

「そうだな、それがいいだろう」

「はー、疲れた疲れた……ん？どつたのひよこ班の諸君」

グランは、よく考えたら一言も喋つてないひよこ班の面々のことが気になって声をかけていた。それを代表するかのように、モルドレッツ



ドが一言だけ発した。

「基準がおかしくありませんかね、団長達」

「……え？ジークフリートじゃなくて？」

「普通これだけの魔物は、100人とか200人の兵でやるものだと思いますが」

「……？」

「今回、何人で終わらせましたかこれ」

「えー……俺でしょ、パーシヴァルでしょ、ランスロットでしょ、ジークフリートでしょ、ヴェインでしょ、ルリアとひよこ班の4人で……10人だね」

「おかしくありませんかね、しかもその内俺ら1割も狩れてないと思うんですが」

「大丈夫大丈夫、ぶっちゃけ俺と同じ年の頃だと俺そんなに強くなつてなかったよ？多分俺より強くなれる素質あるからさ皆」

「違う、そうじゃない」

グランの勘違いに辟易するモルドレッド。モルドレッドはあれだけの大量の魔物を、自分達4人を抜いた6人で倒しきれないわけがないと話しているのだが、グランは『力が及ばず全く倒せなかった』と勘違いしていた。

「……でも、これどうやって持ち帰る気ですか？」

「そうだなあ……半分以上村が貰ってくれたとはいえ……それでも食料庫が魔物の肉だらけになってしまうな」

ランスロットとアーサーが話し合っているが、あまりいい案が思い浮かばなかった。事実、山のように積まれた魔物の肉をどう処理するかは問題なのだ。保存するとは言っても、量が量である。

「……よし、なら団から助けを呼ぼう……そして突発的だけど肉だらけのバーベキュー大会だ」

「まあ、突発的に英気を養えると思えば……」

というわけで、何だかんだでグランサイファーで肉の処理を行うことになったのであった。それでも、一体どれほど食べればいいのかは全くわからないが。

「まさか、先に風呂に入っってこいと言われるとは思っっていなかった」  
「いや、寧ろなぜ言われなと思っっていたんだお前は……」

現在、グランサイファー備え付けの浴場施設で一同は体を休めていた。血の匂いを落とすために、せめて石鹸の匂いになっってこいと団員の殆どから言われたためである。

「もう血の匂い染み付きすぎたから、あえて誰も言わなインじゃないかと……」

「いやあ、それはちよつと無理だろ」

「だよねえ」

「俺達も……しばらくは着込めないな」

「ああ、綺麗に手入れしてやらないとな」

「ランちゃんの鎧真っ赤だったもんなあ、パーさんみたいになっってた」  
ヴェインが、魔物の血塗れになっったランスロットの鎧を思い出しながら体を洗っっていた。

黒い鎧のジークフリート以外は、全員服や鎧が真っ赤に染っっていたのは最早仕方の無いことである。

「うーん……俺の服も取替えないとなあ……青色が真っ赤になっったし」

「寧ろあの修羅場でよくルリアちゃんを守れてたよなあ、团长」

「返り血一滴も浴びてませんでしたね……」

「匂いすら染み付いてなかつたけど……どういふことなんですかね……」

ルリアの体の匂いからは、血の匂いは感じ取れなかつたのだ。彼ら

の鼻が麻痺しているだけでなく、唯一そのままバーベキュー大会に参加し始めているというのが明確な証拠である。

「星晶獣の力でしょ」

「便利っすね……」

「まあ、早く体洗ってバーベキュー大会行かないとね」

そう言いながら、グランは男風呂の前におそらく鼻血を出して倒れているであろうルナルを思い浮かべる。偶然浴場の入口で鉢合わせしたのだが、一緒に風呂に入ると言った途端謎の奇声を発していたのだ。ハンサム・ゴリラでも飲んだのだろうとグランは脳内解釈をしておくことにした。仮に倒れていたとしたら、バーベキュー大会に参加していないメンバーが介護してくれているだろう。

何だったら、ジャミルが助けているだろう。

「……そう言えば、ジャミルも風呂入れれば良かったのに」

「んー?どうした団長ー」

ヴェインが顔をのぞき込む。『なんでもない』と一言だけ言ってそのまま体を洗い終えたあと、よく体を拭いてバーベキュー大会へと乗り込む準備をするのであった。

因みに、鼻血のあとすらも残さずルナルは消えていた。ジャミルだろうか。

「あー、バーベキューバーベキュー」

「いっぱい食おうなあ、皆ア!」

「流石の俺も空腹が過ぎている……」

「ああ、魔物の肉とはいえ食べられるのも多かつたからな」

「……ヒドラから得た肉は美味しそうだったな」

それぞれ思い思いの言葉を言いながら、甲板へと向かっていく。グランサイファーで行われている突発的なバーベキュー大会は、突発的だったにも関わらずほとんどの団員がその肉を頬張っていた。何人かは、体重を気にしていたが。

「おらおらーひよこ班の君らもいっぱい食えろよ!?騎士団にしても騎空団にしても、体が資本だからな!!」

「「はい!!」」」

綺麗に揃った返事は、流石は白竜騎士団の見習いと言ったところだろう。その元気な声を聞きながら、グランは肉を頬張っていた。他の者達も遠慮なくガツガツと食いはじめる。

「ふむ……タレが美味しいな」

「確かに……何を使っているんだろう」

「これあれだなあ、多分……まあ作った人に聞いてみつかあ」

ヴェインは肉のタレの味を噛み締めながら、タレの味を作ったものを思い浮かべる。恐らくはローアインやバウタオーダのどちらかだろうと踏んでいた。リュミエールグルメだと、oh myリュミエール！と叫んでしまいかねないからだ。

「はー……にしても……」

「ん？どうかしたか団長？」

「……仕事終わった後の飯は美味しいなあ」

そう呟いたグランの顔はとても穏やかな顔をしていた。あれだけ多くの敵と戦い、そして終わらせたのだ。皆の協力があつたとはいえ、疲れるものは疲れるのである。

「……もつと食うぞお!!」

「」「」「おー!!」「」

周りにいた団員達が、グランのその声と共に大声を出す。パーティーなので騒がしくて当たり前なのだが、そうやって騒がしくしていられることにグランは嬉しさを感じて、そのまま肉をひたすらに頬張り続けるのであった。

「ルナルさん、最近失血し過ぎですよ」

「尊さが……」

「はいはい、尊いのは分かったので……私の蘇生も確定じゃないので、多少のきついのは我慢してくださいね」

「え？」

「実はあれ失敗すると余剰エネルギーが体を駆け巡って、すごく痛いんですから。」

今まで1度で成功していたのでルナルさんは、知らないでしょうけど」

「あ、待って、自分で立てるからちょっと待っ」

この日、医務室からルナルルの叫び声が1度だけ響き渡ったという。因みに、ソフィアの蘇生には別に余剰エネルギーだとかそういうのは存在しない。あまりにも頻度が高いので、これ以上厄介にならないようにソフィアが着いた冗談である。

ルナルルはそれを鵜呑みにしてしまったせいで、無駄に大声を張り上げてしまったようだが。

不滅の群青、私に任せろよ？

「はい、今日はベアトリクスさんに来ていただきました」

「ふふん、私に任せな」

「その場合お前から目が離せない」

「はあっ!？」

グランの唐突に放った一言により、ベアトリクスは顔を真っ赤にする。グランとしては『無謀すぎるから』『危険すぎるから』などといった理由からの拒否である。

しかし、ベアトリクスは意味そのままに受け取ったのか、はにかみながら指で遊んでいた。

「い、いやあ……い、いきなりそんな事言われても……こ、公開告白つてやつかこれが……!」

「え、何言ってるの?」

「え?」

「ベアトリクスから目を離したら、いつも何か起こってるから……そういう意味での目が離せない、なんだけど」

「な、なんだよお……! 私ひとりで恥ずかしいみたいじゃんかあ……!」

今度は照れではなく、羞恥によつて顔を真っ赤にしていたベアトリクス。1人で勝手に突っ走るところは、こういうトークでも変わらないうようだった。

「ま、とりあえず世間話でも……ベアトリクスはお菓子作りが得意なようで……カロリーが凄まじく高いみたいだけど」

「ふふん、私は料理が得意なんだ。見直したか?」

「いやあ、料理をしてもお前が作る料理は全部お菓子になるんですけどね。その辺、どういう解釈をしたらいいんですかね」

「うぐっ……あ、あれは本当になんでなんだろうなあ……」

「それはともかくとしても……まあ、ホットケーキくらいならまともだったよな」

「あ、前にこっそり焼いた時か?あれもうちよつとちゃんとしたの作りたかったんだけど」

「縁は黄色くて中心は茶色くできている以上、立派なホットケーキだ  
と思うんだがなあ……どうやってあれ以上にちやんとする気なんだ」  
「クリームとか果物でデコレーションしたかった」

「なんで君パティシエやってないの？」

「純粋な疑問をぶつけるグラン。ベアトリクスもそのことに気づいた  
のか、ハツとした顔になっていた。」

「……まあ、組織に入ったのは別にいいことだったと思ってる。パ  
ティシエでも、やっていけてたのかは分からないしな」

「まあ、ドジだしなあ」

「だ、誰がドジだあ!!」

「よし、ならお前の体を亀甲縛りでガチガチに固めて」

「久しぶりに、グランは落下した。久々の女性団員とのトークなの  
で、ついつい早いところからセクハラを始めてしまった、というのが  
彼の言い訳である。」

「ただいま」

「きよ、今日はそのまま続けるんだな」

「リーシャに『流石に落ちるのが早すぎる』って怒られた」

「……確かに早すぎたな」

「平然と部屋に戻ってくるグラン。久しぶり過ぎて対処できなかつ  
たのは、ある意味彼は自分の失態だと卑下するだろう。」

「とりあえず、お便り行ってみよう」

「誰から届いてるかなあ」

ワクワクとした気持ちを隠しきれずに、ソワソワするベアトリクス。その様子を微笑ましく見ながら、グランは1通目の手紙を覗いていた。

「まず1通目『ねえ、何であんた本当に作った食べ物全部甘くなるの？』ゼタからです」

「そ、それは私にもわかんないんだってえ……」

「……ん？よく見たら裏面に何か……」『というのは冗談で、何でそんなに家庭的なの？』

「ゼタア……！」

「家庭的って言う……お菓子作りを初めとして、裁縫もそれなりに出来るよね」

「あ、ああ……新衣装も自分で作ったものだしな」

ちよつと嬉しきで涙目になりながら、ベアトリクスはグランとの会話を進めていく。彼女の意外と家庭的な所は、案外周知されていないのだ。

「そうだねえ、これで料理もちやんと上手く出来たらもう立派な嫁に行ける娘になつちやうよねえ」

「よ、嫁って……」

3度顔を真っ赤にするベアトリクス。照れ芸、恥ずかしがり芸、そしてキレ芸と、顔を真っ赤にする手段には事欠かないなどグランは内心で苦笑していた。

「まあそれ以上のドジっ娘属性をどうするかだな」

「わ、私だって上手くやればいける!!」

「亀甲縛り……の話は落ちるし、今度本当にドジっ娘って言われないように特訓でもするか?」

「ふ、2人で……だよな?」

「いやもうこの番組で言ってる時点で無理でしょ」  
「うう……そうだよなあ……」

泣いたり笑ったりと、忙しい人だなとグランは思っていた。ところで、彼女はグランよりも一応歳上である。これを見る限り、逆に彼女が年下見えてしまいかねないと、グランは謎の焦燥感を感じていた



が。

「という訳で無慈悲に2通目『どうして鎧がそんな薄いんですか』ルリアから」

「私のはゼタモチーフだからなあ……って言っても、そもそもあんまり分厚い鎧は着ていけないんだよな、私達」

「って言うത്？」

「そもそも分厚い鎧なんて着てたら、戦う際にちよつと面倒だしな」

「あー、星晶獣と？」

「星晶獣と」

そう、ベアトリクス達……つまりは『組織』に入っている者達は、全員1人で星晶獣と戦える程の力を持っている。

ベアトリクスでさえ、1人で星晶獣を倒せる力を持っているのだ。そして、星晶獣の一撃は並の魔物の一撃と比較にならないほどの強力な攻撃である。となれば、あえて体を軽くするために装甲を薄くする方が無難という事である。

「でもそこまで露出激しくすることも無くない？」

「しょ、しようがないだろ？一応鎧なんだからできる限り薄くしたいんだよ」

「……そう言えば、ユーステスもイルザも普通に服だったな……」

組織メンバーの中で、鎧を着ているのはゼタとベアトリクスである。現在 Second Advent 諸事 情によってベアトリクスは鎧を着ておらず自家製のスーツを着ているが。

「でもさ、私思うんだよ」

「何が？」

「国とかが使ってる鎧って、割りと意味成してない時あるよなって」

「え、それまたどうして？うちの団にも鎧着ている人はいっぱいいるけど？」

「だってさ、全員直接攻撃は当たらないように避けてるか攻撃に対して反撃するとかじゃん……鎧に攻撃が当たったところなんて、見たことないぞっ！」

「……ん？あれ、ほんとだ……!？」

白竜騎士団の面々や、リュミエール聖騎士団の者達は鎧を着込んで  
いる。しかし、その鎧が相手の攻撃を防いだ……と言ったのを見た事  
がない。

そもそも、偶に帝国軍と戦っていた時だつてグランですら帝国軍の  
鎧……それも兜を凹ませたりして倒していたのだから、人間同士の戦闘  
ですら、鎧が役に立っていないということになる。

「まあ、騎士団とかのだと由緒正しいとかなんとかで着てるんだろう  
から、そこら辺の事情は仕方ないんだろうけど」

「まあ、そうか……」

「にしても、グランは最初ゼタと会つてたんだよな？」

「まあ、うん」

「……その、ゼタつてどんな印象だった？」

「強いて言うなら……ちよつと年下の男の子にイタズラしてる近所の  
お姉さん」

「そ、そうか……私とか、教官は？」

何故か急にそんなことを聴き始めたベアトリクス。グランはそこ  
まで疑問に思わないまま、ひとまず答えていく。

「ベアトリクスは……おっちょこちよいでドジだけど、けど真っ直ぐ  
な印象……ドジだけど」

「そ、そうか……ん？私今サラツと馬鹿に」

「イルザは表面上厳しいけどめっちゃ女の子らしい人」

「……え、マジで？」

「offの時に前会つたもんで、その時色々話してた」

「で、デートしてる……」

ガツクリと項垂れるベアトリクス。グランは首を傾げるが、しかし  
何となくフォロー入れておこうと考えていた。入れておかねばなら  
ない気がしたからだ。主に、相談室のドアの隙間から覗いているリー  
シヤの視線が怖いから。

「……偶然出会っただけじゃデートになんないって、結局数言話した  
後に色々あつてすぐ別れたし……10分も経ってないと思う」

「ほ、本当か？」

「本当本当」

「そ、そうか……」

嬉しそうにするベアトリクス。そしてそれと共にリーシャの気配がいつの間にか消えていた。グランは安堵した。

「……つと、そろそろ三通目行くか『初めて見たものでも調理できるんだな、鉄砲玉』」

「ぎよ、教官……」

「そう言えば、確かに魚とかキノコとか初めて見た割には滅茶苦茶上手に料理できてたよね。お菓子だったけど」

「まあ…鱗取るくらいはわかるよさすがに」

「いやいや、それが結構難しいって話してるんだけどな」

ベアトリクスは、作るものが大体お菓子の味になる代わりに、料理だけは初めて作るものであっても、プロ顔負けの見た目に出ることが出来る。味は完全にお菓子の味なのに、滅茶苦茶美味しいという奇妙な料理になってしまおうが。

「そういうもんか？」

「そういうもんだよ……」

「……ふふん、そうかそうか！」

「天才なのは誇っていいと思うけど、調子乗ったらまた酷いしっぺ返しを食らうことになるぞー」

褒めると調子に乗り、褒めなくても手柄を立てると調子に乗る。何だかんだ頼まれた仕事は完遂することも多いので、組織を続けていられるのだろうと、グランはふと察した。

「……ん？もしかしてもう結構時間経ってるか？」

「おっと、ほんとだ……結構時間経ってるな」

「落ちないのか？」

「いや、まるで俺が落ち芸を取得してるみたいな言い方するのはやめてくれよ……あながち間違ってるか」

満更でもない表情をグランはするが、ベアトリクスはそれを華麗にスルーして締めにかかる。

「じゃあ皆！今日はありがとうな!!」

「あ、ちよつ……司会進行役の俺が切るのが定番だと思っていたんだけどなあ……いや、こういうのもありか?」

ベアトリクスがカメラの電源を切り、番組を強制的におわらせる。『もう終わりの時間』という所だけを認識していたので、グランの言葉にベアトリクスは頭に疑問符を浮かべていた。

「……にしても、戻ってくるのはありなんだな」

「さつきも言ったけどリーシャに戻されてなあ……まあ、俺も早すぎたと思うけど」

「ところで、私が縄抜けを出来ないほどだと思ってるのか?」

「出来てたら捕まった時なんて勝手に抜け出せるでしょ」

「うぐつ……あ、あの時は油断してただけだ!! ちゃ、ちゃんと冷静ならできるさ!!」

「ほーう?」

グランの目が怪しく光る。自分の言ったことは撤回しないベアトリクスだが、グランのその瞳を見て一瞬たじろいでいた。

「リーシャー、リーシャー!!」

「はい、何でしょうか団長さん」

「こう、ベアトリクスをいい感じにギツチギツチに締め上げてくれ。縄抜けが出来るか見てみたい」

「分かりました、ベアトリクスさんには秩序の騎空団仕込みの『えげつない拘束』をしてあげましょう」

「え、拘束するだけだよな? 縄だけだよな? ま、待つ……あー!!」

ベアトリクスの無慈悲な叫びがこだまする。リーシャに結ばれるベアトリクスというくんずほぐれつな場面を見ながら、グランは真顔でただ頷くだけである。

「あ、忘れてました」

「ん——」

グランが疑問に感じるよりも早く、リーシャは自分が持っていたボタンを押す。そして、その瞬間にグランの足元の床が開き、グランは本日2度目の落下を味わう。

「え……きよ、今日はもう一回落ちてたんじゃあ……」

「別に一日の落下回数に制限はございませんので」

「あー……」

ベアトリクスは、グランが落ちた穴をただ覗く事しか出来なかった。リーシャに何故か全く抵抗出来ずに、ただふん縛られてがちりホールドされるのを、ただ気にしないようにしかできなかつたのだ。

その後、ベアトリクスが縄から抜け出すのに約3時間ほど掛かったという――

真紅の穿光、その力を示してみろ？

「今回はゼタさんです」

「よろしくねー」

「つてわけで早速ーっ」

「ん？何いきなり」

「バザラガが前に言ってた言葉発音できるようになった？」

グランが苦笑しながら尋ねる。前、とは組織関係でゴタゴタした時に、組織で扱われている『武器』を解放する特殊な言語の事である。それをバザラガが発しており、ゼタもそれが可能だと判明したのだが、あまりにも発音に難がありすぎたために結局言えない結果となっているのだ。

「いやいや、あれ発音出来るわけないじゃん。未だにあれ何言ってるかわかんないのよねえ」

「だよねえ、俺も何言ってるかよくわかんないよアレ」

「しかもあれ、むやみに発音するわけにもいかないのよね……下手に言っちゃったら私もアイツみたいになっちゃうわけだし……あ、そう言えばちよつと訂正しときたいんだけど」

「え、何を？」

「あの時ベアが言ったことよ！流石にあればっかりは怒りたくなつたわ!!」

「……？」

グランはいまいちピンときていなかった。が、ベア……つまりはベアトリクスが言ったことは、バザラガによる対抗心やその他諸々の感情により、彼女の持つアルベスをグロウノスの様に解放できる……と言った時である。その時ベアトリクスは、『夫婦じゃん!!』と言ったのだ。それがどうも、ゼタは気に食わないらしい。

「あいつとは！そんな関係じゃ!!ないから!!」

「わ、分かったから……一旦落ち着きなさいな」

「……ふう、よし落ち着いた!!」

「ならよし」

どう見ても落ち着いていないからこそ、今ここでその話題を出したのだが、ゼタはそこまでに至っていないかった。

「……で、今日はいつ落ちるの?」

「落ちるのを期待されてるのか……?」

「いや、何だかんだ助かってるし……あんた、最悪空飛べるじゃない……勢いで」

事実、バハムートウェポンの力によって落ちるのを回避した事例はあるが、流星に空を飛ぶほどのものではない。

「あれは別に空飛んでるわけじゃないしなあ……重力に逆らって、浮くのが限界」

「それがおかしいって話してんだけどなあ……まあいいわ、気にしてたらしょうがないし」

「なら番組を進行させてもらおう……って訳でお便りコーナー」

「余計なやつとか入ってないといいけど……」

「1通目『ゼタ、俺もそこまで考えていない』バザラ——」

お便りを貰き、器用に壁に刺さるアルベスの槍。奇跡的にも、顔や体からずらした位置で読んでいたので、どこも傷つくことは無くお便りだけが突き刺さっていた。

「今のなしで」

「ういつす……『なんでパンツ見せてるんですか』ルリア……からです」

「パンツ?」

「パンツ見せてるって言うか……そもそもゼタのスカートってほんとにスカートの役割果たしてないよね」

「いやもう……あんまり気にしたことないのよねえ……え、もしかして目に毒?」

「いえ別にそのまま続けてくださいゼタ姫」

「次に姫とか言ったら、アルベスの槍であんたの槍潰すわよ?」

「女の子がそんなこと言っちゃ……あ、ごめんなさいなんでもないです」

いつの間にか抜いた槍をグランの下半身に向けながら、ゼタはその

まま座り込む。しかし、ゼタにもその意識がなかったのか頬をポリポリと搔いていた。

「いやあ、でもあんまり深く考えたことないわ。そもそも見られようがそんな気にしないし……あ、でも体は別」

「何故またそのような思考に」

「だって星晶獣との戦いがメインなのよ？ スカート履きたいって思っ  
ても見えるし破けるじゃない」

「だから初めから見えるようなデザインに……？」

「ま、そんな感じじゃない？……自分でも最近意識してなかったから、  
理由がうろ覚えだけれど」

「というか、何でルリアちゃんがそれ気にしてるのよ」

「たまに俺が目線で追ってるせいかもしれない」

「……毒？」

「薬」

「……ぷっ、あははははは!!じゃあしようがないわね!」

薬といえば笑うゼタ。その後唐突に笑いがなくなり、槍を突きつけられる……と言ったことも無いままそして三通目：ではなく2通目に入る。

『「槍使いも多いこの団ですが、ゼタさんはどの位置にいますか』」

「1番!……って言いたいけどねえ」

「いいじゃん、じゃんじゃん言っていこうよ」

「いやいやいや、言えるわけないでしょ……どんだけ槍使い多いと思ってるのよこの団に」

「自分は1番!くらいに表明していた方がいいと思うよ?特に槍使いは」

「ん?なんか妙に含みがある言い方ね……」

グランの言い方に少し違和感を感じるゼタ。その後急にグランの顔が険しくなり、両肘をテーブルに立てて両手を組みそれで口を隠すように顔を重ねる。

まるでどこかのサングラスをかけた司令官のようなポーズを取り



ながら、グランは騙り始める。

「槍使いは……まだいいんだよ。剣となると……」

「ああ……難所すぎるわね……」

剣を使う人物達を列挙していくと、十天衆ですら3人いるのだ。さらに、星晶獣などの人外も入ってくる他……十天衆並に強力な剣士もこの団には所属している。

「考えてみたら、なんでそれでアンタ舐められてないのか不思議だわ……この団いい人ばかりよね本当」

「分かる……めっちゃ良い人いい子が多い……」

しみじみと思いながら、グランは改めて三通目を取り出す。というか取り出さなければ、アルベスの槍が飛んでくるのがわかっているからだ。流石のグランでもあれに刺されれば大ダメージである。

『同業の人達に対してどんなイメージを持っていますか』

「同業？」

「組織メンバーじゃない？」

「なるほど……まあいい機会だし言っておきましょうか、別に深いところ語らなければ大丈夫でしょ」

そう言いながら、ゼタは少し唸りながら考えていく。そしてそれからどこから取り出したか、紙にペンで書きあげていく。そうした方がわかりやすいと思ったのだろう。

「じゃあ、ベアのイメージ言ってみましょうか」

「ベアトリクスのイメージ……って言っても前からの付き合いなんですよっ」

「そ、だからイメージというか……あの子の印象かなあ……」

「まあ、とりあえずどうぞ」

「負けず嫌いで、ちよつとドジが入って……なんでも自分で背負おうとするけど、いい子……それがベアに対するイメージかな」

「画面の向こうで嬉し泣きしてそうだな」

かなり素直なので、恐らく本当に嬉し泣きしているだろう……とグランは予測していた。そしてそのままゼタは次の人物のイメージを語り始める。

「教官に対するイメージは…いい人だと思う、onの時は確かに厳しくて言動が荒っぽいけどね。あれでも面倒見が良くて、色んなお店知ってるから上司としても女の先輩としても尊敬出来る…そんなイメージよ」

「信頼してるんだね」

「ベアは未だに怯える時あるけどね…まあ、怒られるのは自業自得よ」

いつぞやの時に、ベアトリクスが極寒の地の湖に自身の武器を落とした時のことを語ると、大目玉を食らっていたことをグランは思い出した。offとのギャップが激しい人物とも、私情と仕事を分けて生活している人物とも言える。

「バザラガは…あんまり口開かないし、口を開けばお節介、しかもまるで嫌味を込めるかのような言い回し、本人にはそんな気がなくとも私を煽ったりしてることなんて多々あったり…」

「本音は？」

「…まあ、悪い奴ではないのはわかってるわよ。自分1人で背負い込むのはベア以上に酷いから、私がちゃんとしてなきや…ってそんなイメージよ」

「何だかんだ、信頼してるよねえ」

「ばっ…まあ、信頼はしてるわ。何度も言うけど、あれに異性として見てるってのはないわよ。」

「まあ、見てる見てないは俺らにはわかんないけど…どうしてそこまです怒るのか」

「…失礼、じゃない？」

「失礼？」

「仲間の信頼、って奴があるのにそれ以上の感情持ち込むのはなんかね…多分、全員が全員…同業に恋愛感情なんて持ち合わせてないと思うわ」

「なるほどね」

バザラガに対するイメージ…だが、そのイメージを聞いてグランは何となくあそこまで怒る理由も理解は出来ていた。納得もしてい

た。

「最後はユーステスね……」

「さて、どういうイメージ？」

「寡黙だけど……多分私達の中では一番熱いわよ？それに犬好きだし……あ、これ言ったらまずかつたかしら」

「いやもうみんなにバレてることだし……」

「それもそうね……ああえっと続きだけど。熱血漢、犬好き、それらを隠すクールさを兼ね備えた仕事人間……かしら？」

「随分とカッコいい要素を兼ね備えているねえ、そう聞くと」

実際かっこいいのだから困る、とグランは思っていた。クール系は若干の憧れがあるのだ。自分にはおそらく真似できないレベルのクールさなので、自分らしさを売りにしていくことは変わらないが。……つと、ここまでかしら？」

「そうだね、そろそろ時間だし……それでは皆さんご視聴ありがとうございました。またお会いしましょう」

そう言いながら、グランはカメラの電源を落とす。そして、ゼタに向き治してからとある違和感に気づく。いつもとは違うパターンだと、そう感じとつた後に、その違和感の原因に気づいた。

「……落ちてないよね、俺」

「あ、ほんとね……パンツのくだりで落ちなかったのなんで？」

「お便り関係だったからじゃないか……？落ちないのは意外だったな」

「あんたいつも落ちてるもんね……」

「まあ、落ちて変なことが起きないよりマシかな……」

「それもそうね……じゃ、戻りましょうか」

「うん……あ、そう言えば前気になってたんだけどさ」

「え、何？」

ふと、思い出したかなようにグランはゼタに尋ねる。番組以外で聞きたいことがあるというのは、ゼタは意外だったらしくキョトンとした顔をしていた。

「パイポジって何」

「……あんた、それをどこで……」

「いや、前にゼタの部屋通りがかかったら聞こえてきてさ……気になつてたから本人に聞くのが早いかなあつて」

「……アルベスの槍よ!!」

「え、ちよ、待っ」

「プロミネンスドライブ!!」

「熱い!!」

ゼタの一撃により、グランは部屋の窓から飛び出していった。後日、グランは『思ってたより熱かった、もつと特訓して耐えられるようになりたい』とか言っていた。

「……あー……あれ聞かれたかあ……!」

そして、吹き飛ばした直後のゼタは顔を赤くしながらうつ伏せになっていた。どうとも思っていない者達に見られるのは構わないが、グランだけはどうしてもダメらしい。

他の者になら聞かれても、彼女は気にしないという自信があった。

「パンツのくだりめっちゃ恥ずかしかった……」

顔を赤くしながら、ゼタは手足をバタバタと動かす。嬉し恥ずかし……といった感情が入り交じっているのか、ちよつと笑みを浮かべながらも恥ずかしがっていた。

「……後で謝ろう」

結局、勢いで吹き飛ばしてしまったことについてはゼタは謝った。グランは大して気にしていなかったため、1日二人きりでお出かけで荷物持ちという軽い罰をゼタに与えるだけで済ましたのであった。

尚、あまり罰になっていないのはゼタ本人が1番理解していた……が、黙って置くことにした。理由は、面倒だから……である。

峻厳な鬼教官、私のしごきが必要か？

「本日のゲストはイルザさんです」

「イルザだ、よろしく頼む」

「……offf?」

「いや、流石に仕事の時の口調にはしないさ……あ、甘いものあるか？」

「色々買ってきたんでどうぞ」

「これは……プリンだな、頂こう……はむっ……」

開幕早々プリンを頬張り始めるイルザ。その食べ方は上品な食べ方であり、彼女を初めて見た人がいれば簡単に惚れてしまうだろう。グランはよく見ている光景なので、『綺麗』としか思わないが。

「……っと、済まないな。私と談笑する物だったというのに」

「いえ、綺麗だったので問題ないですよ」

「そ、そうか……」

顔を赤くしてそっぽを向くイルザ。帽子が小さいので、深く被ることですら出来ないから顔を隠せないという状況になってしまっている。

「そ、それで……私とどういう話が……」

「まあただの談笑ですよ。どう言った話をするかは、お便りや俺たちの気の向くままってね」

「……ああ、そう言えば……君は身を固める気はあるのかな？」

「身を固める……」

ここでグラン、身を固めるの意味を理解しているがこのままボケで返すか、素で返すかの2通りで思考していた。

ボケで返す場合『あ、メデューサにいつもされてますよ』と返す気になっていた。しかし、この答えの場合イルザに天然が入って『結婚と離婚を繰り返しているのかこのクソ未満のカスがア!!』みたいなことになりかねない……いや、流石にないだろうがグランはそう考えていた。

もしくは『……無理やり結婚させられているのか……?』と返されるパターンも考えている。

どちらにせよ、ボケで返すのはあまり得策でないと言える。ボケと気づかれて罵倒されかねないからだ。つまり、最善手はそのまま答えるということである。

この間、1秒未満である。

「少なくとも、今はそんな気がないですかねえ」

「……そうか、いや……君もまだ子供だものな……うん、まだ早いのかもな……」

「まあ団内で決めるんだったら……と思うことはありますけど」

「ほう!？」

いきなり前のめりになって、グランに詰寄るイルザ。恋バナが好物の彼女は、どうやら食いついているようだ。

「まだ特に決めてはいないですよ?もし決めるなら……って話ですし」

「因みに、何故そういうった考えになったのかな?」

「んー……父親のせいかも」

「君のお義父さんの?」

「文字がおかしい気がしたけど……まあいいか……」

少し気にかかったグランだったが、構わず話を進めていくことにしたのだ。今気にしてたら、おそらく話が一向に進まないだろうと感じたためだ。

「いやあ、俺はビィと二人つきりで過ごしてきたし……ああやって残されるくらいなら、家族で船乗りながら過ごしたいなあって」

「……」

「代わりに再会した時思いっきり殴減衰までのダメージ叩きだしてやるりますけどね」

「ある意味素晴らしいな」

「まー、会えたら……の話ですけどね。『待っていないな、イスタルシアで、ボコ殴り』的な」

「それもまた親子の愛情というものなのだろうか……」

「ある意味違うかもしれませんが……とりあえずお便りいってみましょう」

父親の話を一息終わらせて、グランはダンボールの中からお便りをひとつ取り出す。

「1通目『スナイパーライフルのことはどう思っている?』シルバーアからです」

「ふむ……遠くから獲物を狙う銃……中々素晴らしいと思うが、特訓してどうこうなるような武器でもないだろう。センスがいる武器だと私は思っているよ」

「使ってみたいとかは?」

「使う機会があれば、使っていたのかもかもしれないな。私の使っているのは調停の銃ニバス……二丁拳銃だからな。一応、他の者達とは違い私は武器の力を戦闘で生かすことは余りないが」

そう言えば、とグランは思い直していた。ニバスがなくても、彼女は戦えるように特訓しているのだ。無論、ニバスの力自体は使っているものの、それはおまけ程度であり、彼女の技の一つである『バーストイレイザー』はニバスがなくても使用できていたからだ。

「しかし……うん、使ってみたいと思う。純粋にカッコイイじゃないか」

「分かる」

「では、2つ目にいってくれ」

「はいはい……2通目『年下の旦那がいたら、欲しいですか?』ヘルエス様からです」

「…欲しい、というか結婚したい…」

恋バナが好きな彼女だが、一応結婚したいという欲求も存在している。周りが結婚ラッシュしているという噂まではびこっている。

「年上……じゃ、ダメなんですか」

「いや…年齢的に……ああでも……」

頭を抑えて仕事モードである普段からは考えられないほどに、イルザは迷っていた。

「あー……ま、まあ年下年上は好みの問題だろうし……あんまり気にすることじゃあ……」

「やはりそう思うか!？」

「OK OK、一旦深呼吸して落ち着いてみましょう」

明らかに結婚の話題になってから、情緒不安定になっているイル

ザ。欲求に飢えすぎているのも、些か問題なのではないだろうかとグランはため息をついていた。

「あ、ああ……すまない……」

「話題転換のために、さつきと三通目いっちゃいましょう……』どういうハッピーエンドを迎えたいかしら』コルワさんです」

「ハッピーエンドか……彼女らしい発想だが、結婚するまではまだエンディングだとは私は思っていないよ」

「……と、言いますと？」

イルザの言葉に、首を傾げながら意味を尋ねるグラン。イルザは調子を取り戻したのか、年上の余裕のようなものをチラつかせながら、語り始めていく。

「結婚が終わりだと思っていたら、直ぐに関係が破綻しかねない……そうだなあ、もうここはいつそ孫に囲まれる老後までをゴールにするべきじゃないか、と私は思う」

「孫……そりやまた、長い話ですね」

「当たり前さ……色々、あるかもしれないしなあ……」

何故か遠い目をするイルザ。その瞳は一体何を見ているのだろうか、と、グランは疑問に感じたが、今ここで問いただしてしまうと恐らくさつきの二の舞になりかねないので止めておいた。

「まあ、その色々とやらを乗り越えてこそハッピーエンドがあるってことですね」

「そういう事だ！というかな、君は一体誰と身を固めるつもりだ!？」

「……ん？」

「10代でフラフラしているのも構わないが、20代になってから焦っても遅いんだからな!!」

「イルザさん？」

「何だったら全員と身を固めるか!?!それだつたら——」

ここから、映像が途切れている。別にカメラが壊れたわけとかではなく、グランがちよつと危険を感じたので映像と音声を差し換えたのだ。因みに、差し替え先はグランサイファーから見える一番いい景色の窓の映像と、その音声である。



「……すまなかった、頭が痛い」

5分ほどしてから、イルザはテーブルに突っ伏しながら寝ていた。グランはその際に、形が変わっているイルザの膨らみ2つを視界の中心に起きながら、イルザにクリアオールを掛けていた。

「いや……何でアルコール入ってたんですか」

「恐らく先程食べたプリンだろう……カクテルが入っているのが売りだと聞いたが、ゆっくり食べるものなのだろう……本当は……」

「そんなプリンあるんですね……」

「一部の人に人気のスイーツだからな……」

「なるほど……」

先程暴走していた理由は、プリンの中に含まれるアルコールが彼女を酔わせたことが判明した。しかも、プリン本体に含まれるものではなく、冷ましたあとのカラメルに混ざっているものであり、それが今頃になって効いてきたようだった。

「頭まだ痛いなら、継続してクリアオール掛けておきますよ」

「済まない、助かる……」

「カメラはまだ回してないんで……復活できそうですか？」

「……精神的なのが混ざって、今日はもうだめそうだ……部屋で甘やかしてくれ……」

「まあ、それくらいならいいですよ」

「助かる……」

イルザはグランに背負われて自室へと運ばれていく。その際に、や

たら背中に体を押し付けられていたので、グランは溜息をつきながらどうやって寝かせるかを考えながら運んでいくのであった。

「……何をしてる、グラン」

「それはイルザか？」

「あ、ユーステスとバザラガ……どしたのこんな所で」

「いや……暴走気味だったから少々心配になったのでな……その様子では、酒が入っていたか」

「ご名答……今から部屋に運ぶところ」

「災難だな」

「この程度のことなら日常茶飯事だし……問題ない問題ない」

そのままグランはイルザを運んでいく。本来、このような場面を見られたら何かしらの反応があるはずなのだが、どうやらイルザは爆睡してしまっているようだった。

泥酔では無いだけマシだと考えるべきだろう。

「んん……」

「はいはい、今部屋に運んであげますからね」

今はこの船にいるから問題ないものの、彼女の部下などにこの姿は見せられないだろう。あくまでも、うちの団限定での姿ということになる。

「……そう考えると、レアなものを拝ませてもらってるんだな……にしても、あのプリンのアルコール度数はどうなっているんだ……」

落ち着いたとはいえ、あのイルザがここまで酔うのはよっぽどの事である。後でこのプリンを提出した誰かを、叱るべきだろう。そう言えば、そもそもあのスイーツは誰からの差上げだったか。

「……俺やん」

最序盤に自分で言っていたにも関わらず、忘れていたグラン。自分に反省を促しながら、イルザを部屋まで運んで行った。

無論、ちゃんと寝かせる時に仰向けにして寝かせて、着替えとかは同性であるゼタに任せて、自分はその場を離れるのであった。

「……流石に、寝てる異性の服を勝手に脱がすのは……ねえ？」

「オイラに言われても困るんだけどよオ」

呆れた顔をしながら、グランの愚痴に付き合うビィ。愚痴、と言う割には誰かに対する罵倒や、汚い言葉遣いが全く出てこないが、代わりにはどれだけこの団の女性陣が刺激的な格好をしているか……というところが度々言われていた。

「いやいや、理解してくれよビィ……お前にしか喋れないんだよ……」

「オイゲンやラクム辺りでいいじゃねえか」

「どっちも『男なら全員娶っちゃまえ』って帰ってきたんだからな」

「ダメ大人じゃねえか!!」

「まともな相談相手がビィしかいねえ……」

セクハラはする癖に、意外とママだったり紳士的だったりするのは少しおかしい話なのだが、それでも恋愛対象として見ている女性が未だに居ないというのは、ある意味鋼の心だ……などと思いつつながら、グランは大きなため息をついたのであった。

「……あ、今度二人きりになった時に背中感触の感想語ってみようか」

「お前ほんつつつつつつと、そういう所だからな？」

「ビィさん口調変わってますぜ」

ちやつかり、今回の話でも落ちていないというのが、ある意味奇跡だとも言えるのだが……その事に、グランとビィは気づいていないのであった。

地砕の霹狼、平穩を望むか？

「今回のゲストはユーステスさんです」

「……」

「出来れば何か喋って欲しい……」

「……勝手がよく分からないからな、そちらに任せる」

「あ、はい……まあただ雑談と質問コーナーするだけだからね……と  
りあえず、これどうぞ」

「……っ!!」

ユーステスはグランに渡されたものを、確認しながら受け取る。そして、受け取った直後にその目を見開いて即座にグランの方に視線を向け直す。

「……いいのか？」

「あげるよ、今回出てくれたお礼」

「……そうか、受け取ろう」

そう言つて、受け取った物をユーステスはポケットに丁寧にしまい込む。因みに渡された物は一枚の紙なのだが、その紙には『ワクワク触れ合いアニマル広場1日無料券』と書かれていた。

要するに、動物に惹かされただけである。俗に言う買収である。

「ユーステスの武器はフラメクって名前だけど……イルザと同じ銃型の武器なんだね」

「あちらとこちらでは、用途はまるで違う。そもそも、俺達の立場が違うから当たり前の話ではあるな」

「そう言えば同期なんだっけ？」

「ああ、昔は仕事の時に今のような言葉遣いをする事は無かった。だが、今の言葉遣いにしてからの方が部下の生存率は、目に見えて高くなったと聞く」

「要するに、汚い言葉を使って反骨心を鍛え上げてるんだと思うよ。まあ、部下の人達の場合反骨心というか、尊敬の方が上回ってる節があるけど」

仕事の時にはクソクソ言い放つイルザ。しかし、本来は下品なこと

は嫌いな性格なので、実を言うところとちよつとだけ丁寧な罵倒になっているのだ。

「ベアトリクスは、イルザのことがトラウマになっているな。あいつが罵倒を言い始めた後に組織に入ったから、当たり前と言えるが」

「そう言えば、ペア組んでるんだよね二人で」

「ああ……お前達と最初に出会ったのは、ノースヴァストだったな」

極寒の地、走るソリ、やたら騒ぐ世紀末風味なハーヴェイン達。オダツモツキーを壊滅させるために、ベアトリクスとユーステスはペアを組んでいたのだが、初めてグラン達と出会ったのがその任務だったのだ。

「前から思ってたんだけどさ……イルザ以外皆個人個人で思いのままに動いているよね」

「基本的に、組織から与えられる任務以外で組織の施設に赴くことは少ない。俺達が基本的にこの船にいるのは、そういった理由もある」

「あー、確かにずっと居るよね。魔物退治をその武器でやっても、文句言われないの？」

「文句を言われるのならば、わざわざ貸出はしないだろう。上層部は……武器に対しては凄まじい程に慎重だからな」

「あー、確かに」

使用者よりも、武器の回収が最優先などというのが組織の上層部である。グランが大嫌いな部類の一つである。

「……お便り、とやらは？」

「急に振ってきたね……まあならいつてみよう……何が出るかなー」

ガサゴソとダンボールを漁り、グランは1つの紙を取り出してそのまま書いてあるのを読上げていく。

『今まで戦った星晶獣、または話に聞いた星晶獣の中で戦うのが辛かった、または辛そうな相手はいますか？』

「星晶獣か……組織の任務で狩ったのは、一応喋らないようにしておこう。つまり、お前達が今まで倒した星晶獣の聞いた話をするようになる」

「それでも構わないよー」

「まずは……そうだな、天司達だろう」

天司、この空における島の浮遊を保たせている星晶獣達のことであり、それぞれ4種いるのだが……それとは別の天司がいるのだ。その中で戦った天司と言えは……

「サンダルフォンとかだね」

「ああ……単純な戦闘能力の高さでは、かなり厄介な相手だったと聞く」

「そうだねえ、かなり苦戦した記憶があるよ」

それでも倒せているのだらうと、ユーステスは珍しく笑みを浮かべてグランを見守っていた。

「もう一つ上げるとするならば……オネイロスだな」

「あー……」

星晶獣オネイロス。夢を司る星晶獣だが、厄介なことにあまりにも現実味のある悪夢を見させることにより、夢と悪夢の認識を入れ替える力を持つ。しかも厄介なことに、そのまま衰弱させたり長い眠りにつかせることだって可能なのである。

「まあ、もうそんな心配はないけどね」

「そうだな……しかし、夢か……」

ふと考え込むユーステス。夢になにか思うところでもあるのか、その瞳はかなり真剣なものとなっている。少し様子が気になったグランは、ユーステスに話しかける。

「ユーステス？どうしたの？」

「……いや、瑣末なことだ」

「……？」

ユーステスは言えなかった。『毎晩動物と触れ合う夢を見させて欲しい』などと一瞬でも思っただけを、喋る気にはならなかった。

「まあいいけど……他にも強いって思っただ星晶獣はいる？」

「……そうだな……色々いるが、俺が感じたのは主にその2体だと言っておこう」

「なるほどねえ……なら、次いつてみよう。『銃使いとして、戦ってみたいまたは特訓などで戦っている相手はいますか？』」

「俺はあまり、武器を用いた特訓はしないな」

「あれ？そうなの？」

「肉体の鍛錬を行っている……そもそも、武器を手放す時がある可能性もあるからな、なるべく武器を選ばない戦い方を覚えた方が楽だと感じた迄だ」

「……確かに、いざと言う時いろんなもので戦えたらいいよね」

他人事のように言い放つグランだが、ごく稀に水風船やトレピリなどと言った明らかに武器ではないものまで、武器として扱っているのだから彼も人のことを言えた義理ではない。

「お前は少々規格外だ……兎も角、俺は銃使いとあまり戦わない……そもそも、フラメクやニバスのような類の武器ならばともかく、実弾のみを使う武器の場合、資材がもつたないだろう」

「……あー……」

銃弾を特訓として使うには危ない以前に、そんな撃ち合っていたら確かに弾薬が勿体ない事にグランは気づいた。

近接武器や銃身そのものならばともかく、火薬に関してはあまり買い占められないのだ。

「あの三姉妹も少しぼやいていただろう」

「ククル達ね……どうしても市販の火薬類って国が優先されやすいからなあ……」

買えないこともないが、一騎空団が所属する分を補えるほど買えるという訳でも無い。故に基本的に火薬の素材を買ったり採掘したりして、ククルとクムユが弾薬と火薬を作るといふ状況である。

「……ま、シエロカルテにはあまり強く言えないけどククル達が作ってくれる方が質がいいから俺は好きだよ」

「……お前のそういう所が、修羅場を産むと本で読んだことがある」

「……修羅場？」

一体何の本を読んだのか問いただしたかったグランだが、それに時間を割いて居られないので、とつと三通目にいくことに決めたのであった。

「『組織の中でペアを組んで1番相性がいいと思える人はいますか

「?」

「ベアトリクスだ」

「即答……なんで?」

「……というよりも、恐らく1番組みやすいのがアイツだ」

「ベアトリクスが…?」

あのドジっ子が全員と相性よく戦えるほど器用だっただろうか、と明らかに失礼なことを考えたグランだったが、ユーステスはそのまま解答を言い放つ。

「あいつは武器の力もあるが、攻撃力に関しては1番の強みを誇る」

「…あ、エムブラスクって窮地に追いやれば追いやるほど強くなるんだっけ」

「ああ、特に俺やイルザの場合……銃弾があいつの頭を掠めると窮地に追いやれる」

「まさかの無理やりピンチに追いやる戦法…!」

「……冗談だ」

一切の表情を変えずに冗談を言われても、中々信じられないものなのだなどグランは思い知った。さすがにユーステスも悪いと思っっているのか、ちよつと耳が垂れていた。

「突破力があるんだ、あいつは」

「ああ、そつちだよね……うん」

「俺やイルザ、ゼタやバザラガではなし得ない突破力だ……ゼタは、ベアトリクスの次にあるようだが」

「エムブラスクの力、なのかな」

「さあな、俺はあいつの性格や資質そのもののおかげだと思っている」

相変わらず表情を変えずに言うが、やはり信頼事態はあるのか客観的ながらも彼女をちゃんと褒めていた。年上のクール男がモテやすい理由がグランはわかったような気がした。

「……少し喋りすぎたな」

「そんな、バザラガじゃないんだから…」

「……」

照れ隠しなのか、バザラガのような事を言うユーステス。そもそも



バザラガのあの言葉もグランは照れ隠しの1種だと思っているので、組織の男達はどうにも照れ隠しの印象が強くなってきた。

「……もう、時間だろう」

「あ、ほんとだ……もう終わりの時間だった。では皆様ご視聴ありがとうございました、また次回お会い致しましょう」

そう言ってカメラの電源を落とすグラン。落とした後、ユーステスと一緒に部屋から出る。

ふと、グランはルナルルの存在を思い出した。今回は、全く意識していなかったため何か地雷になっているのかの可能性があるので。

「……いや、流石にもう大丈夫だと思うけど……」

「どうした」

「い、いや……別に」

「……そうか」

ユーステスは一瞬不思議そうな顔をしたが、グランが何も言わないのなら、とそれ以上の追求をすることは無かった。そのまま2人が歩いていくと、目の前にほんの少しドヤ顔をしているベアトリクスが現れる。

「お、なんだユーステスじゃないか!」

「……やけにご機嫌だな」

「ふふん、これからも私を頼ってくれよな!!」

どうやら、番組内で言った一言がベアトリクスを調子に乗らせたらしい。ユーステスは呆れて、グランは苦笑いをしていたがベアトリクスはそんなことには気づかないで2人の前を通り過ぎる。

「……あいつは、また何かやらかしそうだ」

「まあ、ベアトリクスだからね……何かやらかすのは分かりきっているというか」

グランとユーステスの妙な信頼は、このすぐ後に的中する事となる。2人も、ベアトリクスもその事には気づかないのだが。

「ふんふんふーん!」

調子に乗って鼻歌を歌うベアトリクス。しかし、彼女がとある部屋を通り過ぎた瞬間に、いきなり扉が開いて何かが現れる。

「うわああああ!？」

「バウツ!!」

それはスカルの飼っているペットである。オダヅモツキー時代からの相棒らしく、いきなり部屋の扉から現れたベアトリクスは馬乗りになされていた。

「ちよ、おまつ!待っ!!あー!どこに連れていくんだ!ちよつと待って!ほんと何だ何なんだー!!」

「……あれ、助ける?」

「いや、別に大丈夫だろう」

犬に首根っこ掴まれて、拉致されていくベアトリクス。その光景は実にシニールなものであり、別段危機感を煽るようなやばいものでもない。2人はそこまで助ける気にもなれなかった。

「あれはじゃれているだけだ」

「へえ、凄いなユーステス。そんなこと迄分かるなんて」

「見てないで助けてくれよ2人ともー!!」

船の中でベアトリクスの声が響き渡る。仕方なくベアトリクスは救出されたが、どうにも腹が減っていたようだったので、グランが何か持っていたビーフジャーキーを与えることで解決したのであった。

因みに、主人のスカルは勝手に食料庫から肉を持っていこうとしたので、リーシャにこっそり絞られていた。

後日、その事を本人は完全に忘れていたのだが。

冥闇の剛刃、見たいのか？この顔が？

「今日のゲストはバザラガさんです」

「……」

「デジャブ」

「勝手が分からん、それ以前に……俺はあまり喋らない」

一体何を言っているのだろうか、とグランは思った。確かに、他の組織メンバーに比べれば喋らないかもしれないが、それでも人並みにはバザラガは喋っているのは明白である。

「まあ……それもまた番組らしさだろうし、いいかな」

「助かる」

「ああうん……あ、そう言えばバザラガってさ……」

「……？」

「どうして鎌なの？」

「……それは、どういう意味だ？」

鎧の中の眼光が光る。正直、他にもこのような目には散々合わされているので、バザラガの目が中から光るくらい大して驚く要因にはなりえなかった。

「いや、前にアルメイダに武器を作ってもらった時……大鎌だったじゃん？アルメイダが勝手に武器を作るとは思えないし、バザラガの指定だよ、あれ」

「ああ……グロウノスが使い慣れていたら。下手な剣や斧を振るうよりは鎌の方が、慣れてきる分使い勝手がいいと考えた迄だ」

「ああ……結構鎌って特殊な武器だもんね」

基本、鎌というのは内側に刃があるものだ。その特性上、鎌の内側でないと切れない為に他の武器よりも特殊な動きをしなければならぬ。その動きに、バザラガは慣れてしまっているのだろう。

「それに、下手な武器では簡単に壊してしまっそうだな」

「力強いもんねえ……」

ドラフの男性の宿命と言うべきなのか、バザラガの体はとても強靱な体になっている。

それに加えて、彼は体のあちこちを改造しているために下手な攻撃では怯まないうえ、恐ろしく強力な一撃をもたらすことも出来るのだ。

「皮肉だが、グロウノスのおかげとも言えるだろう」

「体の調子はどう？」

「グロウノスは、今のところ暴走する傾向はない……だが、いざと言う時は俺を」

「はいストップ、それ以上言ったらゼタとイルザ交えて正座させて怒るよ」

「……済まない、癖だ」

「ほんとにゼタが言う通りだよね……背負いすぎだからさ、ちよつとは頼って欲しいよ」

「俺としては頼ってるつもりなのだがな、どうにも頼り方を間違えているようだ」

「……もしかしてだけどさ、冗談言ってる？」

「何故そう思った」

「妙に流暢に喋ってるし……そういう時、バザラガ冗談言ってること多いじゃん……自分の顔ネタにしてる時とか」

「……」

どうやら凶星だったようで、バザラガは黙る。グランはムツとした表情をするが、それが面白かったのか小さくバザラガは笑い始める。

「ククツ……団長、お前は優しいな。しかし、俺をどうするかまでは言っていないぞ？」

「え、でもあの流れだと……」

「俺を……殺してくれと言うと思ったか？そこまで俺も愚かではない」

「……あー、もうからかうのやめてほしい」

「済まないな……しかし、こういう冗談を言う場だろう？」

「むっ……」

バザラガに一本取られたのが悔しいのか、グランはさらにムツとした表情を取る。そして、しばらくそのまま考え込んだ後にお便りのダ

ンボール箱を漁り始める。

「おい、団長」

「罰として、お便り箱の質問に答えてもらいます。きつちり三通！」  
「……くく、ならばその罰は受けるしかないな」

まるで我が子を見守るかのような、そのような笑みを浮かべているであろうバザラガ。その雰囲気につられてか、グランもついつい笑ってしまふ。

「と、とりあえず一通目！『結局身を固める気はあるのか』イルザさんです」

「……どういう事だ？」

「え、そのままの意味じゃないの？」

「俺に、恋人を作れと？」

「作れ、というよりそういう気持ちある？つて程度じゃない？」

「……今は考えられないな、気が変わればまた別かもしれないが……」

「というと？」

「人間、恋愛すれば変わる可能性があるからな。恋に恋する……という柄でもないが、俺がそういう気持ちで固まれば相手が見つかるかもしれないな」

鎧の兜をカンカンと指で軽く叩きながら、バザラガは思考する。少なくとも、今は恋愛に関しては気持ち動いていないようだった。

「今は好きそうな相手が見つかってない？」

「俺が気づいていないだけの可能性はあるがな……だが、今は身を固める気は無い。それもまたいいかもしれない……と思うことはあるがな」

「ふーん……」

「俺よりも、お前のことだ団長。身を固められる相手は多いだろう」

「なぜ急に俺に振る……いやいや、そもそもこの話前にしたから!!」

「ふっ……それもそうか」

「はあ……」

急に前にしたのと同じ話を振るバザラガ。歳が倍近く上なのがあるせいかな、どうにもグラン相手にはまるで親のように振舞っている節

がある。グラン自身も、そのことには気づいていた。

「……とりあえず、二通目いくね』いつも兜を被っていたり包帯を顔に巻いていたりしますが、お風呂の時はどうしているのですか』」

「……聞きたいか?」

「……正直、俺も気になる。兜被ってる時と、包帯とフードの時あるよね……兜は錆びるし、包帯は湯気で取れそうなものだし」

「ここで回答したら、俺の顔見たさに俺と一緒に風呂に入ろうとする奴らがいるだろう」

「多分居るね」

「……ならば却下する。無用なトラウマを植え付ける訳にも行かない……それに、俺自身に変にストレスがかかる」

「……まあ、顔覗いてトラウマになるとかならないとかは兎も角、勝手に覗きに行くのは迷惑かかるね。」

「というわけで、迷惑かけないようにしてあげてくださいねー」

カメラに向かって、グランがそう話す。基本的に良い人物ばかりなので、好き好んで誰かの迷惑に行きようなことはしないだろうが、一応の注意である。

「まあ、好き好んで覗きに来てもガツカリするだろうがな」

「え、なんで?」

「グロウノスの侵食のせいか、こちらの好きなタイミングで兜が生えてくる」

「え、待つてそれすごい気になる」

「……冗談だ」

「……ほんとに?」

「本当に冗談だ」

言葉がおかしくなっているが、一応兜が生えてくるというのは冗談らしい。しかし、グランは冗談だとわかっていてもその事ばかりが気になって、ソワソワしてしまっていた。

「……ひとまず、3つ目に行ってくれとありがたい」

「あ、うん……『ご飯食べる時っていつ食べてるんですか』」

「鎧の時は……隙間に入れられるからそこまで疑問ではないだろう

な」

「偶に顔に包帯巻いてる時あるよね……あの時は？」

「ずらして食っている。だったそれだけの事だ」

「まあ、普通にそうなるよね」

実に単純明快な答えである。しかし、ずっと顔を隠しているために気になっている団員がいたのも事実である。ある程度答えは決まってきたようなものなので、これはすぐに終わる質問だった……のだが。

「……兜は兎も角として、包帯の時いつずらして食ってるの？」

「さてな」

兜の場合、隙間から通すだけなのでさほど問題でもないのだが、包帯の場合一々巻いているのをずらしてから食べて、そして戻す……などと言ったことをするにはあまりにも面倒な手間がかかりすぎているのだ。

「……まあ、いいか別に」

「……俺が言うのもなんだが、あまり回答が出来ていないな」

「まあ無理にプライベートな所迄答えさせるっていう趣旨じゃないし、別に問題ないよ」

「そう言ってくれると助かる」

大きく座り直すバザラガ。言葉だけでしか判断出来ないが、グランはバザラガが落ち着いたように見えていた。

「さて、これでお便りは全部だけど……何かバザラガの方から言いたいこととか聞きたいこととかある？」

「……いや、特にないな。せいぜい風呂に入る時は俺と被らないように気をつける……と言うくらいだ」

「まあ、そこは大事なことだしね」

何度も伝えるようにするグランとバザラガ。それは本当に大事なことな為に、伝える必要があるのだ。そして、これを言った後に2人はふと考える。

「……これ、言っちゃうと気になって見に行く団員がいるんじゃないの？」

「……カシウスだな」

最近団員になったカシウス。彼は大雑把に言えば月に住んでいた元『組織の敵』であり、彼は気になることはなんでも調べたがるタチなのだ。そして、この空の世界では彼の知らないものがそれこそ恐ろしい数存在しているので、興味を持ってしまえばそれを知ろうとするだろう。

「いや、流石に本人が嫌だと言ったら諦めるよカシウスは」

「だどいいがな」

元々組織の敵だったということもあり、他の団員達と比べて組織の者達は皆カシウスに何らかの警戒があった。ベアトリクスはそんなことも無いが、それも彼女だけである。

それも、最近は薄まってきてはいるが……やはり、完全になくなるにはいまだ早いようだった。

「さて、今回の団長相談室はここまでとなります。ご視聴ありがとうございます」

そして、終了の時間だということを理解してからグランはカメラの電源を切る。

「お疲れ様、バザラガ」

「ああ……しかし、俺をこういう場に呼んでよかったのか？」

「え、なんで？」

「俺は喋らない。そして、喋ったかと思えば冗談か冗談じゃないかわからないことを言う……到底、こういう場には向いているとは思えないがな」

バザラガの鎧の奥にある瞳が、グランを見たような気がした。グランはそのまま少し考えた後にこう言い放つ。

「俺は別に、盛り上げたくてやってるんじゃないよ。みんなに、全員の事をちゃんと知ってもらいたい機会だと思っただけだよ」

「つまり、喋ろうが喋るまいが……」

「全然関係なし！勿論、完全に無視されるくらいなら喋って欲しいけどね？そんなこと絶対にありえないだろうし」

「ふっ……団長に信頼されている分、これからも頑張らねばな」



バザラガは鎧の中で微笑んでいた。そして、ゆっくりと立ち上がってそのまま部屋の外にグランと一緒に出ていた。

「俺は今からイルザ達と集まり、少々話し合いだ。団長、済まないがここで一旦別れる」

「ん、分かった。夕飯の時間までには終わらせてね」

「ああ、他の者たちも重々承知していることだろう」

そう言っただけでバザラガは、一旦グランから離れて別行動をとる。組織メンバー同士での話し合いだ、団長のグランであっても聞かれたくないことなどがあるのだろう。

「……にしても、鎧のせいもあるかもしれないけど…声、響いていたなあ……」

ふと、グランはバザラガが去った後にそう呟いていた。バザラガは元々声が低く渋いタイプであり、それが鎧を被っていることによりいい感じに響いていることが実は内心ずつと気になっていたのだ。

「……俺も歳食ったらあんな感じの声出せるかな？」

「いやあ、そいつは無理だと思っぜえ？」

「いきなり来たかと思えば、俺の未来の否定か……ビー」

「いや、何でそんなに深刻に捉えるんだよ……めんどくさい奴かよお前」

「冗談だって……しばらく組織メンバー達は話し合いっぽいから、適当にお菓子でも食べて待っておこうか」

「おう」

そして、グランもまたいつの間にか居たビーを連れて、自室へと足を運んでいくのであった。この後、特に何も用事がないため久々に部屋でゴロゴロするつもりである。

月よりの使者、興味深いか？

「はい、今日はカシウスさんです」

「……最初こそは非合理だと思っていた」

最初に出た発言。カシウスは合理的な事を好み、思考することを好むが感情論などはあまり好みではなく、苦手の部類としている。

「え、何が？」

「このように、まるで見せしめであるかのように顔を晒してまで未だ顔を合わせたことの無い団員に自己を紹介する、という事がだ」

「最初は、つてことは今は？」

「このような機会を設けることにより、自己紹介を行う回数が減らせるといふ利点がある。ふむ、存外合理的だと今は思っている」

「納得してくれた？」

「ああ」

内心グランは、『実はそこまで合理的に考えていなかった』と思っているが、それを言い出さなくてもいいかと口に出すことは無かった。

「さて、改めて自己紹介といこうか。名はカシウス…月から来た異邦者だ」

「まあこんなこと言ってるけど、色々知らないこと多いので皆さんほとんどん教えてあげてくださいね……という訳でカシウス」

「なんだ」

「この船は楽しい？」

「感情論はあまり得意ではないが…しかし、未だいくつもの発見があるという意味では、それは楽しいと思っているのだろう」

つまり、嫌な思いはしておらず退屈も特にしていないという事なのだろうとグランは自己解釈を行った。カシウスは未だ語り足りないのかとどんぞつていく。

「しかし、不満が無いということも無い」

「それは何？」

「あのカタリナという騎士の料理だ」

「……え…あれ食べたの…？」

「恐らくあの騎士は俺を嫌悪、または警戒しているのだろう。『仲間になつたのだから食べるといい』などと言って」

「あ、ごめんカシウスストップ」

「何故だ」

「それについてはまた後で話そう」

「……理解した。今ここで話すべきではないという事か」

カタリナは、自分の料理が下手だという自覚がない。しかし、自覚がないからこそ厄介なものもあるということ、グラン達は知っている。というか、いつ教えるべきか未だに悩んでいるというのが本音である。

「しかし、フォツシルの民は自分のことを理解していない者もいるのだな」

「少なくとも、感情論が少しでも入ってしまうと本当の意味での客観的な意味で見れなくなるんだろうね」

「……いや、考えてみれば月にいた頃は自分のことを理解する、ということさえ頭になかつたな」

「そうなの？」

「自分の意味は、上から与えられることだけだ。成果を上げて、そしていい飯と部屋にありつく。待遇が良くなればなるほどに、自己自由時間も増えていく……合理的ではあるシステムだ」

「ちよつと息苦しうだけどね」

「そういう事すら、まず月の民は考えつかない」

「ふーん……」

「それに比べれば、自己を発達させる事が可能な空間というのは合理的であり、非合理的だと言うべきか」

「矛盾してない？」

「そうだな……自己を発達させるのは1部の、才能のある者達が行うべきだ。それ以外の、一定数値未満の者は自己を発達させず月のように限られた空間、食事、娯楽を楽しめる程度であればいい……それが一番合理的だろう」

「1部の者達だけに出すシステムって非合理じゃない？」

「俺は感情論が苦手だが……しかし、感情の与える力がとてつもないものだということも知っている。自己を発達させるのは、それを磨くという事にほかならないだろう」

グランとカシウスの合理的か非合理的かの会話が続いていく。完全に二人の空間となってしまっているが、ふとカシウスは思い出したかのように会話をいきなりストップさせる。

「カシウス？どしたの？」

「団長、非合理だ。このままでは、お便りとやらを読む時間がなくなってしまうぞ」

「おっとそうだった……ありがとねカシウス。んじゃあまずは早速一通目……『好きな事はなんですか』」

「未知への研究だ。自身の知らないことを知り、学んでいく。月にいた時には味わえない様なことばかりだ。井の中の蛙大海を知らずとは、この事を言うのだろうか」

「何それ？」

「東洋の言葉らしいな、『世間が狭い者は自分の世界が全てだと思いついでいる』という意味があるらしい」

「へえ、誰から教わったの？」

「金色の髪をした……確か、ミリンと言ったか？ジンという者からも聞いた覚えはあるが」

「流石侍2人組……東洋に関しては向こうが知ってるだろうからなあ……」

「どちらも東洋に関する装いと、そして行事を知っている2人である。こういったことも知っているのかもしれない。」

「2通目『好きな食べ物は何ですか』」

「好き嫌い、と言うやつか……生憎だがそういったものはあまり意識していない」

「あ、そうなんだ」

「調理の仕方によって、味が変わるのは当たり前前の話だ。例えばピーマンという植物があるな」

「ああ、よく子供が苦手な野菜に上がるよね」

「あれは細かく刻んで料理に混ぜ込むだけで、栄養素を簡単に補給できる。多少切り刻んだ程度では、あの苦味を回避することは難しいだろう」

「でも切り刻んでも、緑色はなくならないよ?」

「故に、色の濃い料理に混ぜ込めばあまり気付かれずに出来るだろう」  
確かに、とグランは考えていた。色と味が濃い料理ならば、ピーマンの存在を完全に消し去ることが可能だろう。そうそうあの緑色を消し去る方法なんて言うものがあるとは思えないが。

「どうしてそんな調理方法を知ってるの?月で習った?」

「いや、こちらの本で学んだ」

「ああ、調理本も読んでたんだ」

「好きな事が未知への研究だからな、手当たり次第に知識を吸収していききたい」

「……本、整理してる?」

「ああ、俺以外も読みそうな本は団の書庫に寄贈してある……にして、よくこの船に書庫を置こうと思ったな」

カシウスが、ふと呟いた。そう、この船には書庫が置いてあるのだ……と言ってもそこまで大きなものでは無く、本の管理を任せられる人物こと叡知の殿堂の司書であるアルシャに任せているのだ。

「まあ本を読むにしても、個人の部屋で置いておくにも限界があるからね。他の人も読めそうな本は、本人の自由意思で寄贈してもらおうことにしてるよ」

「ふむ……しかしこれだけの団員がいて、それでも他の施設をおけるスペースを確保出来ているのは素晴らしいな……この船の部屋割り状況はどうなっている?」

「そりゃあ、もう……星晶獣の力でちよこちよこつと……」

「そんな力を持つ獣がいたのか?」

「……」

話がストップした。少し考えた後に、グランは早口で説明をしている。星晶獣の能力ではなく、星晶獣の力とか能力とかをフル活用&応用を組み合わせていくことで、何やかんや船が広くなっていると

んな感じの話を延々と続けていくのであった。

「団長、話を戻して欲しい」

「……ごめんね、要するに企業秘密なんだ」

「どれだけ長く語っただろうか？ 理性を取り戻したグランはすっかり顔を俯かせて項垂れていた。

「あれだけ語っておいて、結論がそれなのは少しばかり要約出来なすぎではないか？ 不合理だ」

「どつちかと言うと理不尽とか不条理とかじゃないかなあ……俺が言う言葉でもないけど」

「それで？ 3つ目はなんだ？」

「三通目『あんた、ベアのパン食べたの？』ゼタから」

「ああ、あのやけに糖分過多の穀物加工食品か」

「……あはは」

名称としては合っているのだろうが、しかし素直に『クソ甘いパン』と言えばいいものを、わざわざめんどくさく言うのは彼の性格ゆえなのだろうか。

「あれは確かに甘い……が、消化が早く尚且つ栄養素を取り入れられるのはいい事だ。それに、甘いものは疲れを緩和させることが可能だからな……携帯用食品として、あれだけ適しているものは無いだろう」

「要するに、サバイバル食品って奴だね」

「が、あまり取りすぎると体に不調を来たしてしまう故、あまり連続して食べることはオススメしない1品とも言えるな」

あの甘いパンを、連続して食べる。確かにお菓子のパンとしては、団随一と言っても過言ではないほどに美味なベアトリクスのパンだが、あれは一つ二つ食べるだけで十分なのだ。何個も食べていたら、本当に体を壊してしまいかねない。

「しかし、あの甘さはともかくとしても美味だと感じるものは早々ないな」

「そうなの？」

「ああ、月では甘味は娯楽の1種だからな……いや、こちらの様に綺麗に盛りつけるといふこと自体が、かなりの娯楽だ」

「え、月では何食べてたの」

「栄養素をふんだんに詰め込んだ、ブロック状のものだ。食べやすく、栄養素も豊富になっている。腹持ちもいいため、月では娯楽食品を除いてはよく食べられているものとも言えるな」

「……え、ほんとに？」

「さて、どうだろうな？ 団長達が月に来る機会があれば判明するだろう」

珍しく、ジョークを言うカシウス。不合理なことは嫌いだと言っていたはずなのに、何故ジョークを言ったのか。

「……冗談、というのはなるほど……こういった時に使えば確かに、多少の趣があるな」

「……今のも、未知への研究？」

「ああ、再三言っていることだが……感情論は苦手だ。しかし、苦手だからと言って敬遠するのはまた別の話だろう」

カシウスはそう言い放つ。要するに、食わず嫌いや知らないままただ嫌うのは違うだろうと言いたいらしい。

「そうだね……というわけで、お時間がやって参りました。次回の団長相談室をお楽しみください、ご視聴ありがとうございました」

そして、グランはカメラの電源を切った。そして、そのままカシウスと共に部屋の外に出る……と、カシウスがグランに向き直る。

「そう言えば団長」

「ん？ 何？」

「有り余る程の急激な血糖値の向上に気をつけろよ」

「へ？う、うん……」

それだけを言っただけで、カシウスはグランから離れる。一体何が言いたかったのだろうか……とグランは思っていた。

そしてふと、カレンダーに目を向ける。そこには2/14と書かれている文字が目に入ってきた。

「あ、そうか今日はバレンタインだったのか……」

ふと、去年のバレンタインを思い出すグラン。去年は、確かチョコの食べすぎで倒れ、そして体重と血糖値の上限値が上がったかのよう爆上がりだったことも思い出した。

「……今年は、生きて帰れるかな」

それでも、全員分食べる上にホワイトデーには全員3倍返して挑む所存である。

その為に、その為だけに……貯めたお小遣いを使っているような気がしてならないが、それで皆が幸せになれるのなら……とグランは天を仰ぎながら目を細めるのであった。

「思ってたより、エグいチョコあるなあ……」

渡された等身大ドロシーチョコレートや、既製品のはずなのに何故か毒々しい見た目となっているカタリナのチョコレートを見ながら、グランはそれを頬張って行くのであった。

3時間ほどかけて全部食べたが、しばらくグランの理性は戻らなかつたそうなの。



## 組織の日、団長の死

「一応…蘇生は続けているんですけど……」

「復活出来なさそう…?」

「少なくとも……しばらくは寝たきりかと……」

「う、うう…なんでだよ団長オ……!」

ベッドで寝たきりのグラン。悲しそうな顔をしているゼタ、悲しうだが、それでも説明を続けるソフィア、そして何も言わないイルザ。「なんで、どうしてこんなことに……」

「……食べ過ぎ、ですね……」

そう言って、ソフィアは今や立ち入り禁止となっているグランの部屋に視線を向けていた。

何故立ち入り禁止となっているか……それは、2/14がバレンタインだったこと…そしてグランは100を超えるチョコを貰ったこと…それら全てが部屋に存在したことで、吐き気を催す程の甘ったるい匂いの空間になってしまっていること…それらの要因が合わさった結果である。

「それに、カタリナさんのチョコも食べてましたし……」

「ヴィーラがちよつと同情してたわね……」

「彼女もしばらく寝込んでましたが…せいぜい数時間でした……」

「なんで、既製品を買ったのに……あんな事になってるのよ、他の子はとめなかつたの?」

「……同じものを、買ってる人もいました」

「……」

カタリナは、触れたものを毒素に変える力でも持っているのだろうか?とゼタは思ってしまった。しかし、それがトドメであるだけ過程の中で大量のチョコを食べたことも要因なのだ。

「薬草を取ってきたぞ」

「……実に非合理だな、食べられないのであれば言えればいいものを」

「それが彼のいい所、なんだろうな……」

「……まったく……」

外からカシウス、バザラガ、ユーステスが帰ってくる。グランの体を治すための、薬草を取ってきてくれたのだ。

「ありがとうございます……これで少しは体調も良くなるかと……」  
「う、うう……！」

「ベア、あんたいつまで泣いてんのよ……」

泣いているベアトリクスの肩を抱くゼタ。ソフィアは薬草を煎じて、それをグランの口の中に流し込んでいく。

「それ、そのまま流し込んでもいいの？」

「これ、液体にするとかなり早い時間で気化してしまうんですよ……ただ、必要な栄養素を気体にして肺に流し込んで血管内の赤血球に運んでもらう……という方法が取れるので……」

「あー、うん。不思議薬草ハイハイ」

適当な返事をするゼタ。というか、泣いているのはベアトリクスだけであり、他の面子は呆れていたり同情してただけである。ゼタは前者6割後者4割である。

「それで？いつ復活するの？」

「さあ……あれだけのチョコを食べたんです……血糖値がまともな値に戻るまでは……」

「せめて、薬が飲めるほどに回復してくれるのが合理的なのだがな」

「そうは言うが、団長も人だ……いや俺ですらあの量を食う気にはならん」

「……そう言えば、クラリス泣いてたわね」

「ああ……」

『折角勇気出したのにこの結末は酷くない!』と、泣きながら誰に八つ当たりするでもなく叫んでいたクラリス。流石のカリオストロも、これには慰めていた。

「バレンタイン……今年は1層おかしなものを出している人が多かつたらしいわね」

「可笑しなものというか、お菓子なもの……というか……少なくともその類に位置するのはカタリナさんと、ドロシーさんくらいです」

「自分の等身大のチョコレートだなんて、どうやって作ったのかしら

……」

自身の等身大チョコレート、などというおかしなものを作りあげたドロシー。流石のグランも、彼女の愛の重さにちよつと驚いていた。

「まあ、ウイスキーボンボンを食べさせられなかっただけマシかもね……」

「確か、アルコールが入ったチョコだったな……酒の勢い……なるほど……」

「おい、イルザ。それ以上の事を考えれば俺も相応の対応を取らねばならんぞ」

妙に嫌な気配がしたせいも、ユーステスはイルザに注意を行う。イルザは軽く舌打ちをしたが、ユーステスは冷静に秩序の騎空団を呼ぶ為の準備を整えていた。

「流石に、酒を飲めない歳の子供に酒を飲ませるのはまずいだらう」

「バザラガ……そういう話じゃないからちよつと黙ってて」

「……喋りすぎたか」

「しかし、実際問題彼がいなければ船は動かないぞ？」

団長であるグランが倒れる。それ即ち団を動かすものがいなくなる……という事でもある。

しかし、カシウスが追求した事は予測できていたのか……何故かベアトリクスが自慢げに答え始める。

「ふふん、そう思うだろう？けどな、いざと言う時のためにグランは客観的な判断を取れる人物達にコンタクトを取って、そいつらで団を動かせるようにしているんだ」

「因みに、その内の一人は私だ」

そう言つて、イルザが軽く手を上げる。組織メンバーの中では、一応上司に当たる人物なので一組織を動かすのに最適な人物だとも言える。

「何人ほどいる？」

「さあな、私が覚えている限りでは10人はいたはずだが……この船にも新しい仲間が続々と増えている。今の時点では、そこから増えているかもしれないな」

イルザは思い出しながら指折り数えていた。200人ほどいるこの団には、確かに最適だと言っても過言ではない人数ではある。

「私は聞いていないが、他に彼からこれから行う行動を聞いている者もいるかもしれない」

「ふむ、なるほどな……だが、今この船にはまともに人数がいらないようだが？」

「そりゃあね……動かせる、って言っても皆団長大好きとかいう集まりよっ」

「なるほどな……」

「まあ、食糧の買い出しとシエロカルテとの相談……それに子供たちの面倒も見ないといけないし……ああそれと解決できそうなら、依頼を解決し続けたりもしてるわね」

「……それは、いつも団長が行っていることか？」

「へ？そうだけど？」

ゼタが『今更何を？』と言いたそうな顔をしていた。しかし、カシウスは思っていた……『1人に任せすぎでは？』と。しかしそこは、グランの性格というかなんというか、彼は自分がやれる範囲のことは全てやろうとするタチなのだ。セクハラはするが。

「……ひとまず、我々はしばらく休めるというわけか」

「そうですね……薬草はこれだけあれば十分でしょうし……」

「にしても……いつからこうなんだ？」

「いつからって？」

「バレンタインデーなるもので、食べ過ぎによる昏倒だ」

ゼタ、バザラガはこの団では比較的古参の方である。2人は顔を見合わせるが、少ししかめっ面になっていた。

「うーん……少なくとも私達が一緒に行動し始めてから……の時点ではまだ倒れてなかったような気がするわ」

「自信はないがな……今のよう昏倒する時間が長かった、というわけではなかったかもしれないのだからな」

「ふむ……何故団長が倒れる事態に発展しているのにも関わらず、バレンタインデーが禁止にならないか疑問だな」

「はっ」

「……」

ゼタの比較的マジトーンな声に、カシウスは目を瞑って黙る。こういう時は黙ってやり過ごすのが一番合理的だと、判断したのだろう。ゼタはしばらく睨んでいたが、すぐさま視線を外してグランに向き直る。

「……ねえ、思ったんだけどさ」

「どうしたんだ？ゼタ」

「……寝たきりの団長さん襲えば既成事実できるんじゃない？」

「ゼタ、お前にそんなことが出来るわけ」

バザラガが苦言を呈そうとした瞬間、ゼタの持つアルベスの槍が炎を吹き出す。瞬間、バザラガは思った『ああ、こいつ理性飛んでるわ』と。

「待ってください、流石に寝たきりの人と既成事実作るのはちよつと……体力的に……」

「あ、そっか……」

「そもそもだな……お前の場合恥ずかしがって出来ないだろう？前に胸直してた時の話振られただけで、顔を真っ赤にしていたくせに」

「ちよ、教官それ言うの反則……」

バザラガ、もとい組織男子メンバー＋カシウスはそのまま黙って部屋を出る。女3人よれば姦しいなどと言う事もある。下手に姦蛇をつついて破局を食らうより、そもそもバトルを受けなければいいのだ。

「……それで？幾らなんでもずっとこのままって訳には行かないでしょう？」

「はい……シャオさんにもお薬は作ってもらって、飲ませたんですけどね……甘いものを食べすぎた弊害としか……」

「1週間？それともそれ以上？」

「さあ……団長さんの気力次第という事しか……」

「……あれ、ここどこ？」

グランは、目が覚めると知らない場所にいた。それは綺麗な河川であり、そのの見えない深い川と、辺り一面に敷き詰められている小石が特徴的な場所だった。

霧が深く、そして自分のいる場所…そこから川を挟んだ反対側には、赤くて綺麗な花畑が存在していた。

「……とりあえず川を渡ってみよう。話はそれからだ」

ふと、顔を上げて川の向こうの霧を見つめる。しかし、ある程度見つめてからグランはとあることに気づいた。誰かがいるのだ、川の向こうに。

「だんちよ〜」

「ローアイン？なんでそんな所にいるんだ？」

「いやさあ、キャタリナさんのチョコ貰ったから馬鹿スコーンって勢いでモリモリ食べてたわけよ。いつもよりちよーつと刺激的な味だったと思っただらさあ……」

「なるほど、ここにいたと……というかここどこ？」

「三途の川」

「……ごめん、もう1回言っつて？」

「Sans River」

「……マジか、ここ三途の川なのか……」

絶望に打ちひしがれるグラン。まさか、チョコの食べすぎで死んでしまうとは思っていなかった。

「いや、だんちよマダマダ生きてるよ。RiverってかLiver」

「あ、ほんと？……ってそっち側にいるローアイン達は……」

「あ、俺らヴィーラちゃんに刺されたりとか、キヤタリナさんのチョコ食べてたらいつもこうなってる、なんかもう行き来出来るようになってんで大丈夫です」

「え、マジで？お前そういう能力手に入れちゃった？」

「いやあ、こんな能力要らないっすわ」

「俺だっぺいらないと思うよ。正直お前不憫過ぎない？」

「まあしばらく遊んだら帰りますわ」

「……そう言えばトモイとエルセムは？」

いつも3人一緒のローアイン達。いつもどんな時でも一緒だが、今回彼らは被害に遭わなかったのだろうか。

「何かあ、エルっちは川の上流見てくるって言って泳いでいって、トモちゃんは閻魔大王と飲みに行つてさあ」

「え、なにそれ大丈夫なの？トモイ後で処刑されない？」

「いやあ、流石に大丈夫っしょ。めっちゃ話わかりますよあの人、何か凄いやから」

「あ、待つてローアイン。閻魔大王とかいう話はNG、めっちゃややこしくなるから」

恐らくその閻魔は、Fから始まってRで終わるような世界の話になつてしまつたり、ヤマがザナしてドウーする人だつたり、何か普通に地獄一の強さで鬼の灯の人の攻撃受け止められたりだつたりする人とか色々いるのだ。ここはお空の世界なので、そう言った話はちよつとNGです。

「そういうの知らない人もいるから」

「……？まあ、そうっすね……とりあえずしばらく遊んだら戻るんで」

「わかった、夕飯までには戻つてこいよー」

「ういーっす」

「死ぬかと思った!!!」

数時間後、ローアイン達とグラン：カタリナのチョコを食べて昏倒していた者達が復活した。

ヴィーラは数時間で復活したとの事だったが、ローアイン達の場合カタリナの（自称）失敗したチョコを沢山食べていたらしく、それで一時的に死にかけていたという。

団長の復活は喜ばれ、ローアイン達は自分達で肩を組んで生還を喜んだという。

今回の教訓としては、やはりカタリナのチョコは避けるべしということだろう。



ガンパウダーミキサー、こんちくしよーです？

「今回のゲストはクムユさんです」

「ぴゃああああ……！」

「……フード取れそう？」

「が、頑張つてやるですよコンちくしよー!!」

顔を隠す程に深く被っていたフードを、一気に広げるクムユ。勢いが着いたので、その勢いのせいで揺れた2つの大きな砲弾にグランの視線が向かう。しかし、すぐさま視線を戻していた。

「よし、じゃあ続けようか」

「は、はい……！」

「クムユはとある銃工房の育ちで、姉としてククルやシルヴァがいるんだよね」

「は、はいです……シルヴァ姉ちゃんも、ククル姉ちゃんも優しくってお父ちゃん達と同じくらい好きです……！」

大好きな人を語っているからか、クムユは少しキョドリながらも年相応の柔らかかそうな笑顔を向けていた。

「ククルは銃を作ってたけど……クムユは銃弾の火薬を調合してるんだよね」

「クムユは、お父ちゃん達から教わったのを実践してるだけです。でも……いつかは、ククル姉ちゃんやシルヴァ姉ちゃん専用の銃弾を作ってみてーです」

「いいね……あ、俺には無いのかな？なんて」

ちよつとした冗談を言ったつもりだったが、何故かその瞬間クムユの顔が真っ赤に染まり、目が凄まじい勢いで泳いでいた。これこそ、目がぐるぐるしていると言うやつだろうかとグランは思ってしまった。

「ぴゃ、ぴゃ、ぴゃ……?! い、いきなりそんな事言われても恥ずかしーに決まってるです!! てやんでー!!」

「……もしかして、俺なんか変な事言っちゃった？」

「お、お母ちゃんが言ってたです！男に渡していい銃弾は結婚指輪と

同等だって!!」

銃工房、クムユやククルのお母さんというのはかなり肝が座っている女性なのだが、まるで山賊などの仲間にいる女性のような特徴しかない。いい人なのだが、肝が強い事と偶に冗談とは思えない冗談を口走ることがある。

「……銃工房の常識が分かんないから、女将さんの冗談かどうかかわからない……」

「て、てやんでー……だ、団長さんは…クムユと結婚してーですか…?」

「していいの?」

「は、はわわ……ー!」

少し楽しくなってきたけど、流石にこれ以上乙女の純情を弄ぶ訳にはいかないと、グランはダンボール箱を取り出す。それはお便りの入った箱でありいつもの様に掻き回していた。

「とりあえず、お便り読みあげようか。クムユはどんな質問が来て欲しいとかある?」

「へ、へ?そ、そう言われても……クムユ、ビビりなのを治すためにこれに参加しただけで……よくわかんねーです」

「ふむ……とりあえずこれいってみよう。『銃工房で暑い時は脱ぐらしいですが、火花とか当たった場合火傷しないのです?』アステールだね」

「い、いつも脱いでるので気にしたこと無かったです……それに、火傷も…クムユは身長が足んねーと言われて、触らせてもらうことが少ねーです。だから、火傷はお父ちゃん達もクムユもした事がねーです」

「あれ?ククルが銃作ってる時って、鉄の形整えるためにカンカン叩いて火花出てたけどあれは?」

少し前、銃工房のいざこざが少々起こった際にグランはククルの作業を少しだけ覗き見たことがあった。

無論、部屋の温度管理とかもあるらしいので中に入って黙って見ている程度だったが、その時は程よく火花が散っていたような思い出があった。

「ククル姉ちゃんは、ちゃんと自分に当たらねー様に距離を離していただきます。お父ちゃん達も同じようなものです。けど、クムユは身長と腕の長さが足んねーから…力もみんなと比べて弱えですし……」

「……持ち上げるのが大変？」

「け、けどあくまで昔の話です！今はクムユも立派な職人……になるために頑張ってる見習いですー！」

「ふふ、ごめんごめん」

プンスカ、という疑問が似合いそうな程に頬を膨らませて両手を下に振るクムユ。その勢いで2つの大きな砲弾が上に下に勢いよく動いているので、グランの言葉は尻すぼみになって行き黙ってそれを眺めている状態になってしまった。

「……」

「だ、団長さん？何か顔がこえーです……」

「おっとごめん……2通目って大丈夫？」

「クムユは全然問題ねーです!!」

「んじやあ2通目いつてみよう……」

ガサゴソと箱の中を掻き混ぜていき、そしてその中から無作為の1枚を取り出す。

「2通目『銃工房はいつもあんなに皆軽装なのか?』アレク」

「工房の中は熱いから、薄着じゃないと倒れてしまつて……」

「あー……かなり薄着にしてもすごく汗かいてる時あるよね。前のククルの時とか」

「お父ちゃんも薄着だし、気をつけてさえいれば火傷はしねーですみます。だから、あんまり厚着することがねーです」

そう言えば、とグランは銃工房一家の格好を思い出していた。とりわけ、目の前で見ている分ククルの格好が1番イメージに近い格好なのもあつた。

かなりの薄着、厚着してそのまま加工なんてやった日には、熱さで水分不足になる可能性が高いと言わんばかりの薄着。

「クムユも作業の時は薄着になるの?」

「は、はい。けどクムユは、あんまり薄着になつたことがねーです」

「今はふわふわクムって感じユの格好だもんね。前の格好火クムはかなり薄着だったけど」

「クムユが作業するとなると、あれくれーの格好になると思うです。流石に上着は脱ぐでしょーが」

入団当初は、まるで姉御肌！と言った感じの服を着ていたクムユだったが、後で母親から貰った服はフリフリのふわふわな感じの服だったので、年相応の可愛さが目立つ服装になっていた。

「水着は？」

「あれはまた用途がちげーですし……そもそも足を見せるのは、危ねーです。薄着になると言っても、流石に足の方は危ねーんで分厚いズボンを履いてるです」

「そう言えば、ククルもズボン分厚かったね」

「はいです」

ただの薄着ならば、男性は最早下着で良くなってしまふ。しかし、上半身はともかく下半身は守っておかねばならないのか、よくよく考えたらククルはそういつた格好になっていた。

「なるほどねえ……」

「早くクムユも、ククル姉ちゃんみてーな格好をしてお父ちゃん達のお手伝いをしてーです」

「銃工房の女将さん達も、こんな親思いな娘がいて大層感動してるんだらうなあ……」

「く、クムユはまだそんない子じゃねーです！ビビりだし……」

「ビビりと言っても、それは大分改善されてきたじゃないか。最近大きな物音がしてもビックリしなくなっただろ？」

「そ、それはそーなんですが……」

「大丈夫大丈夫、クムユの思いは親御さん達に伝わっているからさ」

そう言いながら、グランはクムユの頭を撫でていた。その行為に赤面するクムユ。まるで仲のいい姉妹のような風景だった。グランは赤面するクムユが可愛いと思ひ、そのまま撫で続ける。それに比例するかのようにクムユの顔も真っ赤に染まっていく。

「……おっと、このままほのぼの映像を流し続けていたいところだけ

ど、そうなるのとちよつとまずい事になってしまふ。三通目に行こう」「そ、そう言いながらなんで頭を撫でるのを止めねーんです?」

グランは片手でクムユの頭を撫で続け、そして器用にダンボールを脇で抱えながら余った腕でお便りを探す。

「ほい『銃使いの団員の弾を作っていたりするんですか?』」

「流石にそこまでのことは、クムユに任せたら駄目じゃねーかと思うです」

「まあそれは確かにそうだけど……理由は?」

「銃に一人一人の癖が染み込んでると同じように、弾丸も一人一人の癖が詰まってるから……って感じですよ」

「弾丸に?」

イマイチピンと来ないグラン。銃ならば理解できるが、銃種に合った弾を選ぶというのならばともかく、使い手の癖が詰まっているというのがイマイチ理解出来ていなかった。

「弾丸ってーのは、銃が同じでも使い手の使いやすさによって、変わってきちゃうんです。それに、弾を込めたら銃の総重量も変わってくるんで……あんまり自分に合っていない重さの弾丸だと、重心がブレる可能性だってあります」

「はー……なるほど。確かに使える銃によつちやあ、複数の弾丸を使用することも出来るしね」

「だから、無闇にクムユが使うよりは1番自分に合っていると思う弾丸を作ることが重要、ってー考えですよ」

「シルヴァやククルの弾丸は?」

「シルヴァ姉ちゃんは、狙撃銃のスペシャリストなんでクムユの作った弾丸も使ってくれます!ククル姉ちゃんのはちよつと特殊なものもあつたり……だから、クムユが関わっている場合とそうじゃねー場合があるんです」

「なるほどねえ……」

グランはシルヴァの狙撃銃と、ククルが使っているオリジナルの銃を思い出していた。

ククルが最近使っているものは、大量の弾を一気に撃ち続けると

言った方式のものであり、狙撃銃とは違って大量の敵を掃射するのに適している銃である。

「つと……そろそろ時間だ」

「そう言えば、さつきから気になってる事がありやがるんですが」「え、何?」

「団長さん、さつきからクムユのどこを見てやがるんです?」

「そりゃあ勿論おっ」

久しぶりの落下である。というか13歳の少女に対して、胸を見ているというのは最早セクハラ以上の犯罪なのではないだろうか。

そして、あまりにも久しぶりすぎてグランもそう言えばセクハラしたら落とされる……というのを完全に忘れていた。

「だ、団長さん!?!」

自然な落下、一応下で待機してる者達がいたためギリギリで落下死する事は免れているが、いきなりだった為クムユはついつい驚いてしまう。

「そろそろし始める頃なんじゃないか、と思ってきましたよ」

「ぴゃあ!?!」

そして唐突に隣に現れるリーシャ。追加で驚くクムユ。突然人が隣にいたら誰だって驚くだろう。

「こ、こんちくしよー!!!」

そして、何故か叫びながらクムユは部屋から大慌てで出ていった。その顔には半泣きのせい、涙が少しだけ溜まっていた。どうやら、驚き過ぎてキャパオーバーしたようだった。

「……え、あれ……今のもしかして私のせいですか?」

そして、困惑したリーシャの質問に答える者は誰一人として居ないのであった。

その後、グランの部屋に大泣きしているクムユが入ってきて、暫くあやすことになったのだが……グランはその時に、クムユを慰めるとは別でいい思いをしているのはまた後日の話である。

「団長さんは意地悪ですう……!」

「え、まだ俺なんもしてないけど!?!」

「ボロ泣きクムユをあやしなから街に出る訳にも行かず、何故かリーシャに真後ろを着いていかれながら、グランは何とかクムユをあやしきったのだった。」

その時にリーシャが言っていたのは、『お胸が豊かな小さな少女を泣かしている男の図』のようにしか見えないという事だった。

グランは反論しようとしたが、リーシャには反論が許されないうのも思い出して、そのまま泣き寝入りをする子のごとく、黙ってリーシャが着いてくるのを我慢するしかないのであった。

創意の銃設計士、それじゃあいつちよ頑張ってみる？

「今日のゲストはククルさんです」

「はい、みんなのお悩み聞いちゃうよ？ククルお姉ちゃんでーす」

「ククルはクムユのお姉ちゃんで、銃工房の跡取り娘でもあります。今や使うのは自分が作り出したオリジナルの銃、シルヴァや俺達の力になってくれると物凄くありがたいです」

「やだなー、褒めすぎだよ団長」

照れながら頭を掻くククル。褒めるのは得意なのだが、褒められるのはあまり慣れていないようだった。

「お悩み聞いちゃうよ？って言ったけど、そんなククルはなんか最近悩みがあるって聞いたけれど？」

「え、それって誰から？」

「ルリアに聞いたんだよ。前に話してた時になんか言ってたから、詳しく聞こうと思ったんだけどどうにもはぐらかされちゃってさ」

「あ、あー……」

グランが聞くと、目を明後日の方向に向けるククル。グランが直接聞いても話しづらいのか、言葉が出てきていなかった。

グランも、話しづらい話題を降ったのだろうかと思っただのだが、嫌そうという訳では無いのが、余計に彼の困惑を買っていた。

「もしかして変に言いづらい事聞いちゃった？」

「う、うーん……その、団長にはあまり……というかできれば男性には話したくないなあ……って……」

ここでグラン、ピンと来ていた。自分と言うよりも男性という括りである以上、恐らく悩みは女性的なことだろう。つまり、自分が何を言ってもアドバイスにならない可能性もあるし、下手をすれば的外れの見当違いを起こしてしまう可能性もある。

「そっか、なら聞かないでおくよ」

「……ごめんね？本当に言いづらいことさ……」

「ううん、こっちが無理に聞き出すわけにもいかないしね」

グランはそれでその話題を終わらせた。因みに彼女の悩みとは、シ



ルヴァとクムユの間に挟まれたことによる、胸囲の話題である。ルリアに言った時は、彼女の目が死んでしまっていたということもあり、中々言い出せない話題となっていた。

「さて、それじゃあ……ククルはこの団に入って良かったと思ったこととつてある?」

「うーん……いっぱいだなあ。クムユにも会えたし、シルヴァ姉にも会えた。それに私の中で今の所最高の銃も出来上がった、ソーンさんにも出逢えたし……何より団長にも出逢えた」

「俺に会えたのはいい事?」

「うん!とつてもいい事だと私は思ってるよ。運命なんて、ガラじゃないかもしれないけれど……私はそういうのを感じとつたくらいには、とつてもいい事」

「そつか、そう言つて貰えると俺も嬉しいよ」

お互いに微笑むグランとククル。姉弟と言うには、あまりにも似ていないかもしれないが、今この時はそういった雰囲気は出していた。

「……つと、そろそろお便りを読んでいこうかな」

「じゃあ、よろしく!」

「お言葉に甘えて……一通目『この団にはガラドアさんみたいな鉄を加工する人もいますが、そういった人達と合同で作業することはありますか?』」

「そうだねえ、ガラドアさんには前にお世話になったけど……うん、うちの銃工房に来てくれたりして、鉄の加工の仕方とか教えてくれたりするよ」

「へえ、そうだったんだ」

「うん、だつてあの人の加工技術は凄いいからね。エアロバイスさんも、よく手伝つてくれてるし……でも基本的には1人で、というかウチの銃工房は銃工房で……私一人の時は私一人のときで作業したりするよ」

「あれ、ちよつと意外かも?」

この団で仲良くなっているから、グランはてつきり合同で作業することも増えたのだろうかと思つていた。しかし、どうやらそうでも無

いらしい。

「だって私のことは私ひとりで：銃工房のことは銃工房の中で収めて  
いかないと駄目だからね。」

勿論、意見を聞くことくらいはあるけど……私はなるべく1人で出  
来ることをしていく性格だから、余計にガラドアさん達の手助けを請  
おうとは思ってなかったよ」

「なるほど、どっちかと言うと見守るために来てるってことだね」

「まあそんな感じだね」

「ふむふむ……とりあえず答えは出たので2通目に……『銃を作る時  
に気をつけなきゃいけないことってありますか?』」

2つ目の質問は、銃の加工の際の質問だった。ククルは顎に指を当  
てて少しだけ考えていたが、直ぐにその答えを出していた。

「そうだねえ……やっぱり熱さかな、汗もかくし喉が渇く。慣れてく  
ると、どのタイミングで水分を補給するかって言うのが分かるけど、  
慣れてないと倒れちゃうこともあるからね」

「やっぱりそういうことなんだね、絶対暑いもんねあそこ」

「何が厄介かって、あんまり暑すぎると汗自体直ぐに蒸発しちゃうか  
らさ……思ってた以上に水分が抜けてる時あるんだよね」

「あんまり暑いとそうなっちゃうのか……」

「ファータ・グランデにはそこまで暑い気候の島が無いからねえ……  
他の空域にはあるのかもしれないけどさ」

確かに、とファータ・グランデにある殆どの島を思い出していたグ  
ラン。1番それらしいと言えばアウギユステかもしれないが、夏に海  
に行く程度なのであまり灼熱とは言えないだろう。

「あ、バルツとかは?」

「確かにあそこも暑いけどさ、汗がすぐ蒸発する程じゃないでしょ?  
もしそうだった気候なら、水不足が深刻化してたかもしれないね」

「ふむ……確かに」

暑いといえば暑いが……と言ったところだろう。勿論、島の場所に  
よってはそういった場所もあるかもしれないが、そもそもバルツは火  
山もある島なので、暑いのは当たり前なのだが。

「まあ、ちよつと話がそれちゃったけど……とりあえずそんな感じかなあ」

「なるほど……水分補給っていうのはいついかなる時でも大事なんだなあ」

「じゃあ次行ってみよう！」

「はい……3通目『中身を見てみたい銃等がありますか?』」

「……中身?」

質問の意図がイマイチ理解できなかったのか、ククルは首を傾げる。グランは何となく予想が着いたのか、その予想を口に出す。

「要するにバラしてみたいって事じゃない?」

「ああなるほど……でもまあ、他の人の銃を勝手にバラすのもなあ……」

「まあほらそこは……あくまでも仮定でね? 『もしも中身が見れるなら誰の銃を見たいですか』みたいな」

「なるほど……」

グランの言葉に理解と納得を示すククル。そして少し考えた後に、思いついたのか名前を上げていく。

「十天衆の……」

「え、ソーン?」

「ううん、ソーンさんじゃなくて。エッセルさん、っていたでしょ?」

「ああ、彼女の銃を見てみたいの?」

「うん、手入れは自分で出来るらしいから見せてくれることは無いんだけどね?」

十天衆が1人、エッセル。桃色の髪のエルーンであり、銃を主な武器として戦っている。十天衆という名の通り、少なくとも銃使いの中ではトップクラスに強い猛者である。

「あれ、そうだったんだ」

「信用してくれてない、つて訳じゃないけどね? 誰だつて自分の武器を他人に渡すのは仲が良くても躊躇すると思うよ?」

シルヴァ姉の銃は私が作ったものだから、私しか見れないんだけどね?」

「へえ……他にはいる?」

「うーん…イルザさんのニバスとか、ユーステスさんのフラメクとかかなあ…あれはもう、特殊武器すぎて私の手には負えないだろうけどさ」

イルザ、そしてユーステスの武器。どちらも、彼らの属する組織から配られたものであり、はつきり言えば中身を見せることが許されない武器である。

仮に任されたとしても、銃の形をしたまた別の武器なので自分では手に負えないと考えているのだろう。

「あれはね…むしろ、あれバラしたら凄いいことになりそう」

「武器の自己防衛本能みたいなのが働いて…」

「船の中でそれは勘弁…」

「だよねえあはは」

苦い思い出である。組織から配給された武器は、皆別の姿を持っているのだが、それはまた別の話だったりするので割愛しよう。

「あ、そう言えば今日シルヴァ姉の銃のメンテだった！」

「え、ほんと？」

「別に時間は特に指定してないからいいけどね？バラして組み立て直すだけの簡単なお仕事なのです。だからと言って、集中しないといけないけどね」

「ふーん…あ、ならさ」

「ん？」

「俺の銃も」

瞬間、グランの姿は掻き消えた。またもや下に落下したのだ。いや、落下することは構わない。彼にとってそれは日常茶飯事なのだから。しかし、なぜ落とされたのか…彼にはその理由が全くわからなかった。

ただ、自分の銃もメンテナンスして欲しいと言いたかっただけなのだが…と、ここまで考えたところで気づいた。

ああ、言い方の問題だったのかと。ならしようがねえな…と思いつながらグランは自由落下に身を任せるのであった。

「…………え、なんで今落ちたの…？」

『俺の銃』なんていう事を言うのは、セクハラでしょう」

ククルも疑問に思っていたが、リーシャが説明をする。リーシャの説明を聞いて、意味がわからなかったのか首を傾げながら考えるククルだったが、少し考えて意味が理解出来たのか顔を真っ赤にした。

「あつ……」

「……そういう事です」

「あ、あはは……団長は別にそういった意味で言ってるんじゃないと思うけど……」

真っ赤になりながらグランのフォローを入れるククル。内心、それはそれでありかもしれない……なんていうことを考えていたが、それは口に出さず心の中に留めておいた。

「……確かに、よく考えずに落としてしまいましたね……」

「で、でしよっ……」

「後で団長さんに謝っておきます」

リーシャがククルの言葉で少し考えたが、よく考えずに落としたようであり、それを反省してから部屋を出ていった。

ククルはそれをしばらく見ていたが、リーシャが部屋を出てしばらくしてから、まだ顔を赤くしながらモジモジと体を動かしていた。

「だ、団長の銃……ね……」

そんな言葉を、ククルはぼつりと呟く。しかし、その後が続くであろう言葉を言うことはなく、そこから先どう思ったのかは彼女しか知りえないことなのであった。

「ふむ……」

「見事にバラバラだなあ」

戻ってきてから、グランは模型の銃をバラしていた。影響を受けたというか、ちよつとやりたくなつたお年頃なのである。しかし、本当に武器をバラして部品が無くなれば困るのは自分なので、まずは模型から……ということになつたのである。

「ここからまた組み直すわけか」

「思いの外模型でもパーツが多いもんだなあ」

「うし、なら一旦組み立てるとしますか」

そう言つてグランは模型の銃を組み立てていく。一心不乱に黙々と続けられるその作業に、ビィも何も言わずに羽を飛ばたかせているだけだった。そして、しばらく時間が経つた時によりやく組み立てが終つたのである。

「おわつたー!!」

「結構時間かかるんだなあ……もう夕方だぜえ？」

「これからもつと早く組めるようにならないといけないなあ」

「まあいざと言う時、直せた方が楽だもんなあ」

そう言つていたグランだったが、しばらくすると時間が段々と短縮されていくわけであり……今回は数時間かかっていたが、次回は1時間短縮、その次は1時間での組み立て終了、そして5回もこなす頃には1時間は余裕で切つていた。

「おいおい、もうマスターしたのかあ？」

「いや、まだまだ……これから本物の銃に取り掛かる」

グランの底知れない探究心を見て、ビィは感心しながらも呆れていた。因みに、しばらくすると本物の銃でもプロであるククルと遜色ない修理タイムを叩き出したので、完全にマスターしていたのであった。

奮励の偽秀、好機はいつ来るのか？

「今日のゲストはシルヴァさんです」

「よろしく頼む」

「今日はそつちの格好なんだね」

「違う方が良かったか？」

「いやいや、そういった意味じゃないよ。ただ着分けている時多くなってる」

今のシルヴァの格好は、スーツのような格好だが、へそ周りの腹が出ている格好であり、胸は白い布地で隠している。そういった格好である。

「まあ私としては、どちらの格好も好きだが……こちらの方が仕事着らしいだろう？」

「まあたしかに……けどいつも思ってるんだけどさ」

「ん？」

「何でいつもお腹露出してるの？」

「…へ？」

まさかそんな質問が飛んでくるとは思わなく、シルヴァは少し意外そうな顔をしていた。それに対してグランは、逆に意外そうな顔で返していた。

「いや、その格好もお腹が出ちゃってるし……いつもの格好もお腹出してるからさ。ずっと気になってたんだよそれ」

「そ、そんなにか？」

「いや、シルヴァって結構恥ずかしがるタイプなのに、珍しいなあって思っただけだよ。スカートの話振ったらめっちゃ赤くなってたじゃん前」

「うっ……その話はちよつと……」

顔を赤くして俯くシルヴァ。スカートの時と言い、今の時といおうやら彼女は自分が男達に取って、痴女か何かに見えるのだろうか？とも思わないのだろうか、とグランは思っていた。

痴女は言い過ぎだが、しかしそれでも男達が視線を逸らす事ばかり

である。

「わ、私としては……あまり意識していなかったんだ。可愛かったり……これいいなあって思ったものを着ているだけで……」

「……露出とかは一切？」

「考えていない……」

赤くなっていた顔がさらに赤くなるシルヴァ。見ていて面白い反応ではあるが、しかしあまりからかっても居られないのでここで一旦格好のことは切り上げることにしたグランであった。

「まあシルヴァの格好は置いておくとして……さて、いつものお使い箱です」

「あ、ああーさあどんどん来い!!」

少し焦りながらも、シルヴァはグランに同調する。じゃなければ、いつまで経っても格好のことで話が終わらなくなりそうな気がしたからだ。

「さて、1通目……『戦闘をする時に、自分が組みたいと思う団の人はいますか?』」

「そうだな……私としては、お互いに攻撃を阻害しないような組み合わせが好ましい」

「と言うと?」

「私の戦い方は狙撃銃による一撃必殺だ。ククルの武器の様に大量にいる魔物の相手をするのは、あまり向いていない武器だ」

「なるほど、確かに」

「ソーンと組めば、また話は別なのだがな。彼女は私よりも遠い位置から、敵の大軍を殲滅することが出来る」

十天衆ソーン。常軌を逸した視覚を持ち、スコープから覗いて遠くを撃てるシルヴァと違い、彼女は裸眼で彼女よりも遠いところを見る事が出来る『魔眼』を持っている。

そして武器は、魔力を矢として放つ魔導弓である。これにより、一度に大量の矢を放つことが可能となるのだ。

彼女にも弱点はもちろんあるが、それはまた別の機会である。

「ソーンを連れ出すのは……」



「…まあそうか、彼女は誰と組んでも強いからな」

「彼女以外はどうか？」

「うーむ……この団には、近接が多いからな。それも、大概が手練の者達ということも考えると、私としては誰と組んでも遺憾無く実力を発揮できると思っている」

「ククルとかクムユも？」

「ああ」

「なるほど」

確かに、彼女の戦闘スタイルは余程のことがない限り味方を阻害するということは無いだらう。

一撃必殺、群れのボスや味方の後ろから攻撃してきそうな魔物を排除するのが役目なのだ。

そういう点を考えれば、他対戦をする場合シルバーアヤクムユのような周りに弾丸をばらまく戦い方をする者達との噛み合わせはいいほうなのだろう。

「ユーステスとかイルザみたいなのは？」

「彼らも私と上手く噛み合う戦い方だな。まあ私以外狙撃銃を使う者が居ないというのが、一番の理由なのだろうけど」

「ふむ……とりあえず、誰と組んでも問題ないってことだね」

「そういう事になるな」

「では話題がいい感じになったところで2通目に行ってみよう。『何故そんなに大きいんですか？』」

「……？身長の話か？」

「いやあ、多分そつちじゃないと思うなあ」

グランは、お便りの主が何を言いたいのかわかっていた。要するに、胸の話である。

しかし、体の話題というのは本人も困るものなので、笑って誤魔化すだけになっていた。

「体の話題は、本人にも答えられない事があるんで……」

「……？そうだな、確かに私の身長の話をしようにも食生活や普段何をやっているか……以外にも理由があるかもしれないしな」

シルヴァも、少しズレてはいるが理解してくれたようで頷いていた。グランはこれは無効だと考えて、改めて新しい2つ目の意見を出していた。

「えーつと…『銃工房の人達と仲がいいと聞きましたが、銃の話以外にどんな話をしたりするんですか?』」

「銃以外、か…」

「あ、無い?」

「いや…あるんだ…確かにあることはあるんだが…」

どうにも歯切れの悪いシルヴァに、グランは首を傾げる。もしかしたら、ククルと同じように体の話題を上げている可能性もある。それを危惧したグランは、無理に答えなくてもいい…そう伝えようとしたが、その前にシルヴァが語り始める。

「その、ココ最近結婚の話ばかりされるんだ…」

「…結婚?」

何かと答えづらい話題かと身構えていたグランだったが、いざ聞いてみると全く別方向の話題が飛んできていた。

「私もいい歳だ、いい相手はいないのか?と色々聞かれてな…付き合っている相手はいないと1度は言ったのだが、そうするといいい男性を紹介すると銃工房の女将さん達からの相手の写真を見せられるんだ」

『こんな見た目の男だけでもいいかい?』みたいな?」

「まあ大体そんなところだ…」

なんと、お見合い話とまでは行かないがそれに近い話題をシルヴァは振られていたわけである。確かにそれは、少し答えづらい話題ではあるとグランは苦笑いしながら納得していた。

「女将さん達が、私の為に相手を見繕ってきてくれるというのは…まあ感謝している。私が…その、付き合いたい男性がいるという話をしたら、それ以降『その後の調子はどうだい?』みたいな感じでしょうちゅう聞かれるようになったが」

「やっぱり銃工房の女将さん達ってさ…」

「ん?」

「シルヴァの親だよ、ほんとに親にしか感じないよ」

「……そうだな、確かに私にここまで世話を焼いてくれるのは、母親や父親という役割くらいだろう。あの人達は世話焼きなんだ、と改めて知ったよ」

「でも、嬉しいでしょ？全然嫌そうじゃないし」

「ああ、私のもう1人の両親だ……」

そう言っただけ微笑むシルヴァ。その笑顔には、銃工房の人達に対する親愛と家族愛のようなものが入り交じって居るようにグランは感じた。

「ふふ……」

「ん？どうした？団長」

「いや？シルヴァもいい人達に恵まれてるんだなあって」

「ああ、あの人達は私の中で一番に登るくらいいい人の集まりだと思ってるよ」

グランとシルヴァはそれぞれ微笑んでいた。しかし、ずっと微笑んでいては番組が進行しないので、グランはシルヴァに了承を取ってから三通目に移行する。

「三通目、『何故ミニスカートなんですか？』」

「……やっぱり気になってる人多いのか？」

「そりゃあ、銃を撃つだけならともかく……蹴るじゃん、シルヴァ」

「拳でも戦えるようにしておいた方がいいのだろうか……？」

「そこまでしなくていいと思うけど……まあでも、ミニスカートではシルヴァとチームを組んだ男性陣はまず戦いづらいと思う」

シルヴァは今の黒い服と、青い服の2着を持っている。前の仕事着は後者の服だったのだが、この服はミニスカートであり、シルヴァはそのミニスカートがある状態で蹴りを主としたインファイトを行う場合があるのだ。

そして、当然ミニスカートで魔物などを蹴るのでミニスカートの中である所に男達は視線が行くだろう。中につける短パンを履け、という話なのだが目の前で真っ赤になっているシルヴァがいるので、グランは当然履いていないのだろうと結論づけた。

「中になんか履けば問題ないと思うけど……」

「それが簡単に出来たら苦労はないんだが……服にもバランスがある、それを簡単に潰してしまえば、今度は銃工房の人達から何があったと心配されかねない……」

「ああ……」

もし外からわかるくらいの短パンを履いていた場合、シルヴァが少し面白おかしい格好になってしまうのは間違いがないだろう。『ならそもそも長いのを履け』と言うだけの話なのだから。

「……さてと、こんなもんかな?」

「ん?もう終わりなのか?」

「まあ簡単な話し合い程度だしね」

「ふむ……なら仕方ないか。少し名残惜しいところだが……」

「というわけで皆さんご視聴ありがとうございました、またのご視聴をお待ちしております」

いつもの宣言を終えて、グランはシルヴァと共に部屋を出る。そして出てから気づいたのだが、シルヴァはよく見たら肩から銃をかけていたのだ。何故気づかないのか。

「その銃、ずっと持ち歩いてるの?」

「まあな、いざというとき武器を携帯しておくのは間違いではないだろう?」

「まあ確かにね」

少し興味をもったグランが手を伸ばそうとする。シルヴァは寧ろ、もつと見てほしいと言わんばかりに見せようとするが……突如、その足元に黒い例の虫が通りすぎる。

「——ひゃう!」

驚くシルヴァ、咄嗟に後ろを向きながらバックステップを取る様は慣れたものであり、1秒と経たずして戦闘態勢に入る。

「がふう!」

そしてその際にシルヴァの自慢の脚で行ったジャンプ、その体当たりと銃の持ち手がそれぞれグランに激突する。1つはみぞおち、もうひとつは股間部である。

「あっ!？」

「な、ナイスバトルチェンジ……後太もものライン綺麗つすね——」

悶絶しながら、グランは落ちていった。番組が終わったというのに、部屋から出たというのに、リーシャが設置した落下罠はまだ生きているようだった。

「え、えっ……!？」

先程の驚きはどこへやら、グランが落下したことによる驚きと困惑がシルヴァを襲っていた。

そんなことをしている間に、開いた扉は締めまりグランは落とされた穴からは戻ることが不可能となった。どうせ拾われているので、大丈夫だろうけど。

「……な、なんだったんだ?」

その後、グランが無事だとシルヴァは聞き安堵した。因みにシルヴァの足元を通った黒い例のアレは、シヴァが跡形もなく燃やし尽くしたことによって、団内に平穏を取り戻したのであった。

落ちたグランは、その後なんとか拾われて戻ってくる事が出来たが、流石の部屋外での不意打ち落下は心臓に悪かったという。ただちよつと気持ちよかつたらしい。

## 銃工房嫁騒動

グラン達は今、ククルの銃工房へと来ていた。銃のメンテナンスと、山に入ってくる侵入者の退治や、街に降りようとする熊や魔物などを森に追いつ返す仕事だったりと色々あるのだ。

しかし、今回はそれが終わった後偶然にも時間が出来たので、グラナー1人が銃工房夫婦に呼ばれて二人と向き合っていた。なぜ呼ばれたのかわからないグランだったが、部屋に入った瞬間に広がる空気の重さに息を呑んでいた。

「よオ、団長さん」

「ほんとお世話になりっぱなしで悪いねえ」

「いや、俺らもここにお世話になってますし……正直、いつも助けられてると思っっています」

「まあ、何だ座りな」

「あ、はい」

促されるように座るグラン。その隣に、夫婦が挟み込むように座る。表情は笑っているが、目が笑っていないかった。

「なア団長さん」

「な、何でしょうか」

「……誰と結婚するんだい？」

「……Why？」

親父さんから放たれた言葉を、つい聞き返してしまうグラン。しかし、親父さんはそんなグランを無視して話を進める。

「シルヴァはいい子だ……優しくてよオ……血は繋がっちゃあいねえが、あの子も俺らの娘だと思ってる。銃持ってる時は、子供みてえにはしゃいでなあ……俺らもついつい力になりてえって思っちゃまうんだ」

「あ、あの……？」

「クク坊も我が娘ながらイイ子でなあ……技術力じゃあもう俺の上をいってるかもしんねえ……発想力も技術力も、腕も頭も確かで……しかも可愛いと来た、こりゃあもういっぱい支援するしかねえわけよ」

「えつと……」

「クム坊はまだビビりだけだよオ……そこがまた可愛いんだ……俺らによく似てきたし、心も成長してきている。ありやあ将来俺らみてえに……いや俺ら以上に立派になるだろうよ」

突如始まる親父さんの娘自慢大会、娘の実況は親父さん、解説は特に喋っていないが女将さん、そしてたつた一人の観客にグランを添えて、笑顔が渦巻く重苦しい3人大会が今ここで開かれていた。

「で、だ……団長さん。アンタはうちの娘3人から誰を選ぶ……つてえ、話を今してる訳よ」

「く、クムユ、ククル、シルヴァの3人から……ですか」

「ああ、俺らの自慢の三人娘だ」

グランの肩を抱く親父さん。今ここでグランの思考は、プロトバハムートやその他の強力な星晶獣と戦う時並に思考を高速化させていた。

・選択肢1：1人を選ぶ

「シルヴァですかね」

「ククルとクムユを選ばねえつかア!?!」

「ピンツ」

駄目である。そもそも三人娘を全員等しく、そしてとんでもなく大きく愛しているのが親父さんだ。例としてシルヴァになったが、恐らく他の2人を選んでも似たような事になるだろう。

・選択肢2：全員選ぶ

「俺だって騎空団の団長ですよ!?!全員と結婚してみます!!」

「てめえそんな節操なしなのかアアン!?!」

「ピンツ」

論外である。全員選ぶというのは、つまりはクズ野郎のすることなのだ。とグランは考えているが、セクハラしている時点で大概がクズ野郎である。

・選択肢3『誰も選ばない』

「まだ俺は結婚は考えていなくて……」

「ウチの娘達が気に入らねえつかア!?!アアン!?!」

「ピンツ」

駄目だった。グランの思考は今本人が気づいていない内に、ネガティブ化している。その為、何を考えても悪い方向にしか働いていない。流石にこれで怒られるのは、理不尽である。

・ 選択肢4：実は付き合ってる人がいる

「実は俺付き合ってる人がいて〜」

「既に恋人がいながら、俺らの娘を誑かしたのA!?アアン!」  
「ヒンツ」

もはやこれに至っては、何故怒っているのかよく分からない迄ある。だがこれ以上選択肢は思いつかない。フルスロットルでどれだけ回転させようが、ネガティブな思考ではどんなことを考えても悪い方へと考えてしまうのが人間である。

「まあまあ、あんたちよつとは落ち着きな。団長さんも困ってるじゃないか」

「女将さん……!」

先程まで親父さんと一緒だと思われていた女将さん。しかし、グランは今彼女を救いの天使かなにかなのでは?と思っていた。その希望は直ぐに容易く壊される。

「で、誰と結婚するんだい?」

逃げ場はない、二人しかないのに四面楚歌なこの状況をグランはどう回避するか頭をグルグルさていた。その内、緊張とストレスによつて口から破局が出てしまいそうなくらいには体調が急激に悪化していた。

自分を助けてくれる者はいないのか、いや2人からしてみても結構深刻な問題なのは分かっているが、しかしそんな事を全く考えていない時に、その質問は答えられないのではないだろうか?とかを考えてながら脂汗をグランは大量に流していく。

と、そんな時だった。

「ちよ!?なにやってんのさ二人とも!!」

「く、クク坊!?それにクム坊とシルヴァまで……!」

「お、お父ちゃん!団長さんをいじめたらめっ!です!!」

「あの、その……!」



突然の娘達登場で困惑する夫婦。グランがまるで捨てられた子犬のような目をしていたため、すぐに3人に回収されていた。

「とりあえず、団長は向こう行つてて」

「ういっす」

そう言つて一旦部屋から追い出されるグラン。ククルに感謝の念をドア越しに飛ばしながら、彼女達が部屋から出るのを待ち始めるのであった。

「……私達、まだ団長と付き合つてすらないのにその話は早すぎるよ……」

「3段くらい飛んじやつてますよ……」

「すまねえ……ただ、あの人くらいじゃねえと……俺らも安心できねえんだ……」

結果的には、迷惑をかける形となつてしまった。しかし、何処の馬の骨かもわからないような男と、全空の中で最上位を取っているような騎空団の団長、しかも性格もよく困っている人は軒並み助けていくと来れば、最早これに勝る男は早々居ないだろう。

「まあ、お父ちゃんの言うこともわかるよ？でもさ、人に迷惑をかけるなんて……」

「うう……俺はなんてことを……」

「で、でもクムユ達のためにやつた事……って考えたら……」

「まあ……私達もいつまで経つても進展がないから駄目なんだろうけどさ……」

少しだけ顔を赤くしながら、ククルは頬を掻く。グランとの結婚というのは、全く考えていなかったことであり突然そんなことを言われて、嬉しさやら困惑やらが入り交じつてしまっているのだ。

「……ところで、お父ちゃん的には団長にどうして欲しいの？」

「そりやお前、男なんだからよ……まあ自分に惚れてる女全員囲えるくらいには……」

「……ウチの団長なら、全員と結婚してもちやんと全員愛してくれそうだから困る……」

ただでさえ200人以上いる様な団で、その全員のクリスマスやら

ハロウィンやらの予定に付き合ったり、バレンタインでは女性団員全員から手渡されるチョコを全て食し、そして3月14日にはちやんと全員にお返しを作って渡すのだ。

セクハラ発言と行為が問題ではあるが、しかしこうして見てみればきつちり甲斐性はあるのだ。しかも異常なレベルで。

「まあ、それをするためには色々やる必要があるんだよ」

「色々ってえと……」

「馬鹿、あんた年頃の娘から何言わせようとしてんだい」

「……お、おおう……すまねえ」

親父さんは先程までの勢いはどこへやら、すっかり女将さんに尻に敷かれていた。

女性にしかわからない問題があるのだろうと、親父さんはこれ以上の追求をするのを辞めていた。

「まあとりあえず……私達は大丈夫だから!!」

「そ、そうか……まあ本人達の好きなようにさせるのが1番って言うしな……」

「そういう事だよ、ほら早くあたしらは団長さん謝るよ」

その後、銃工房夫婦からの懇親の謝罪により事件は収束した。あれはあまりにも子供溺愛しすぎていた夫婦だったからこそ起こった事件であり、悪気がなかったというのもグランは知っていた。

謝らなくても正直怒ってはいなかったし、別に気にしてもいなかったのだ。

「とは言うものの、だ」

それから数日たったある日、銃工房三姉妹と共にとある依頼を受けていたグラン達。

その道中突然口を開いたシルヴァに、他2人の姉妹の視線が集まっていた。

「実際……ククルやクムユはまだ時間があるかもしれないが、私は……」

「し、シルヴァ姉……？急にどうしたの？」

「……もういつその事私達で既成事実作るか？」

「え、待つてシルヴァ姉。その話せめてクムユが居ないところで……」

「きせいじじつ……？」

グランは魔物の気配を探るために先行しているため、三姉妹がなんの話しをしているのかは聞こえていない。

何やら言い争いをしている事だけは、少し離れた位置にいるグランにも理解出来ているのだが……

「……済まない」

「皆何で数段飛ばしで考えてるの……？」

「……？」

クムユだけが、一体なんの話しをしているのかわからずに首を傾げていた。しかし、シルヴァもククルもクムユにはまだ早いと言って教えてもらうことは無かった。

「と、とりあえず！この依頼を終わらせよ、ね!？」

「そ、そうだな」

「あいですー！」

「おーい、なんの話してんのみんなー」

魔物がいないことはとっくに確認済みなので、グランが3人を迎えに来る。ククルとシルヴァの2人は、なんの話しをしたかを誤魔化していた。クムユは理解出来ていないので、そもそも話せなかった。

「ま、魔物がこの先いないなら行こうか！」

「わ、私も先に行くよ」

「そう？ならみんなで行こうか、シルヴァには先の方を見てもらいたいし」

そう言ってグラン達は依頼解決のためにずんずん進んでいった。グランは話を聞いていないのでこのことは直ぐに忘れて、クムユも話がよく理解出来ていなかったので特に印象に残ることも無いままに、忘れてしまうのであった。

「……ところで団長ってハーレムってどう思う？」

「ハーレム？してもいいような、しなくてもいいような……まあ結婚する人によるよね。俺はまだ、恋愛のれの字も知らないような男でもあるし」

「……それを親父さんに言えば、直ぐに話し合いは終わっていたのでは？」

「いやあ、焦ってたしネガティブ思考に陥っていたし……そうそう簡単に思いつくことなんてないよ」

「ふーん……」

ククルがなんとなく聞いたハーレムの事、グランは否定派では無い為に今からでも、案外なんとか自分達と結婚させようと思ったたのできるのではないだろうか……と、ククルは考えていた。

「まあ、俺恋愛してる暇あるのかなあって感じだし」

「好きなことか気になる子いないの？」

「みんな魅力的だと思うけど……イスタルシアまで行ってから考えないとねえ、あと親父は殴り飛ばす」

グランの言葉に少しだけ笑うククル。どんなことよりも夢を優先するのは、結構損な性格のようにも思えてしまうが、こういうのがまた人を引きつけるのだろうとククルは思い、そのまま絶対にグランについて行こうと考えるのであった。

未完の錬金術師、派手にやっちゃおう？

「はい、今日のゲストは錬金術師クラリスさんです」  
「……」

「チョコ美味かったぞ」

「いや、うん……ありがと……」

顔を真っ赤にしながら、気まずそうに顔を背けるクラリス。しかし、グランはクラリスの顔をじっと見ながら、会話を続けていく。

「な、デートな……いつ行くんだ？」

「待って待って……今それ言うのは待って……」

「なぜに」

「いやほんと……ウチが言ったことだけど……」

その後の言葉が聞き取れないほどに小さかったクラリス。グランは軽く首を傾げるが、クラリスはいつもとは打って変わって大人しくなっていた。

「仲良くなるためのデート、って言ってたな」

「ほんと、ごめんほじくり返さないで……言葉をもうちょっと選んだ方がいいってというのは分かってるから……」

「男女が出かけるんだから、それはもうデートなのでは……？」

「……あれ？そうなるの？」

「え？」

「……え？」

「え？」

お互いに声が重なり合うグランとクラリス。その時、ようやくグランとクラリスの目が合ったが、それに気づいたクラリスがすぐさま目を伏せてしまう。

「いやまあ、うん……こ、今度……ね……」

「わかった……ところで今日全然元気ないな」

「いや、あの……ちよつとグランに聞きたいことがあると言いますか……」

「ほう、俺に？」

「えつとあの……何人から告白された……？」

「……告白？なんの？」

「……へ？」

再びキョトンとするクラリス。実を言うと、バレンタインの日にチョコを渡し、そしてデートの約束を取りつけたはいいものの、ほかの女性団員から告白されているグランの姿を何度か目撃していたのだ。

それを見て、少し今気分が落ち込んでいる……と言った状況である。

「え、いやだって……ディアンサとか……」

「あー……えつとまあ、確かに好きだって言ってくれたけどさ……」

「……ええ、グラン意味理解して言ってる？」

「……何のことやら」

『あ、こいつはぐらかしたな』とクラリスは直感的に感じとっていた。そして同時に、クラリスはグランには複雑な感情があるということも理解することが出来た。

「ま、まあわかんないならいいんだよ!!」

「そ、そうか!!」

強制的に終了させられた話。だが、こうでもしないと番組が進行しないのだから、仕方が無いとも言えるだろう。

「とりあえず、お便りを読んでいこう。1通目『クリスマスでなんで水着着てるんですか』」

「あれ水着じゃないもん!!」

「いやあ、あれは水着だわ。布面積完全に水着だわ。じゃなかったら下着だわ」

「そ、そんなに酷い？」

「今のユエルの方が布面積がある」

「ゆ、ユエルに布面積で負けた……？」

ちよつと前のユエルと比べればどっこいどっこいだっただろうが、少なくとも今のユエルとクリスマスマスの時の衣装を着ていたクラリスを比べれば、どちらが布面積が多いかなんて言うのは簡単にわかるこ

とだろう。

「というかあれ寒くないのか？」

「まあ……やる気？」

「お前のやる気どうなってんだよ」

ファータ・グラндеではクリスマスは冬である。そして、クラリスは水着や下着同然の格好をそのクリスマスに行っているのだ。場所によっては凍結しかねない。

「それにクリスマスの衣装で言うんだったら、他の子達も結構露出多いじゃん」

「少なくともお前の格好よりはマシだ」

「そうかなあ……そう言えば、クリスマス……」

「ん？クリスマスになんか嫌な思い出でもあったか？」

「嫌な思い出というよりは……その、お母様から『孫の顔見せて欲しい』って言われたことあったなあって……」

「お前のお母さん随分と直球なこと聞きますのね」

「お父様微妙に尻に敷かれてるから……止められなかったんだと思う」

そう言えば、1度自分を連れて帰ってこいと言っていたなとグランは思い出していた。

団の仕事もあるために顔見せ程度で済ませたが、恐らくあの時だろうか。

「とは言っても随分と直球な……」

「案外、お母様ってししょーの方に似てる気がしてきた……」

「性格が？」

「性格が……思い立ったら吉日！と言わんばかりに行動派なのに、すごく頭使って行動してるし……」

「それに関しては、クラリスが頭を使わないで行動することが多いからじゃないのか」

「う、ウチだって考えてる時くらいはあるよ!!」

「例えば？」

「……どうやって、どっかーん？ってするかとか……」

「それはもう相手からしたらただの拷問ではないだろうか」

クラリスは錬金術師である。しかし、始祖であるカリオストロと比べて彼女は『ものを作り出す』ことにおいての錬金術の才能はからつきしである。

そうやって普通に錬金術を使おうとすると、どこかで綻びが出来て爆破する……それくらい『普通の』錬金術が向いていないのだ。

しかし、彼女の真髄は『分解』という一点においてカリオストロ以上の才能を持っている。それこそ、不要なものだけを分解して取り除くと言ったことも可能なのだ。

「だ、大丈夫だよ……ただの爆破するから」

「爆破でも十分怖いからな」

「……確かに」

逆になぜ今まで気づいていなかったのか、グランはそれがよく分からなかった。とは言っても四肢が弾け飛んだりする程でもなく、ただ爆破して吹き飛ばす物だから気にしたことがないのかもしれない。

「まあいいや……話ズレてきたので2通目に行こう。『団内で尊敬する人はいますか?』」

「尊敬……ししよーとか?」

「カリオストロもそうだけど……他にいたりはしないの?」

「とは言ってもなあ……みんな偉いなあって思うのが尊敬だったら、みんなを尊敬してることになると思う」

「なるほど……じゃあ、最近こういうところ尊敬しましたよって人いる?」

「尊敬、尊敬……」

クラリスは言葉を反芻させながら、色々な人物を思い浮かべていく。そして、ある程度の候補に目星をつけた後に口を開く。

「うーんと……ウチ的にはコルワさんとか……?」

「あら意外な人選……何故また?」

「何というか、人をハッピーにしたいって言う気持ちで色んなものを作れるって才能だよねえって」

「確かにね、コルワは自分の気持ちを素直に仕事に表してるもんね」



ハッピーエンド以外は認めない、そんなコルワが作るのは服だった。服という一点において、彼女もまた才能が突出している人物である。

「後はイオちゃんだよね」

「どういう所が尊敬できたの?」

「あの歳で宙に浮けるっていうのがね……才能の塊だよ、ほんとに」  
空の世界において、個人単位で空を飛べる人物は数少ない。それこそ十天衆であるソーンや、ウーノクラスでないと当てはまらないだろう。例外として、メーテラが十天衆でもないのに自由に飛行しているが。

「まあウチが最近尊敬したのはその2人かなあ」

「なるほどねえ……因みにグランサイファーで1番可愛いのは?」

「勿論ウチが最かわっ☆」

「はいありがとうございます、じゃあ三通目行くか」

「え、振るだけ振っておいて!」

クラリスのいつもの言葉を何となく言わせたところで、グランはそのまま3通目に移る。今のセリフを言わせた意味は、全くないと言っているレベルである。

「『オレ様が1番かわ』」

「それししょーのだよね?!それ本当に質問!」

「うん、これ質問じゃねえや。次行こう……『何でみかんが好きなんですか?』」

「え……お、美味しいからじゃ駄目?」

「まあ、好きな食べ物なんてそれぞれで決まるからなあ……ただ気に入った食べ物だったり、昔からよく食べてたりとかって理由も様々だし」

「そ、そうだよね!別にただ美味しいってだけでもいいよね!!」

みかんが好きでも嫌いでも構わないが、しかし語呂合わせのためだけにみかんが好きだと言っていない限りは、まったく問題ないだろうとグランは思った。未完の錬金術師はみかんが大好きである。

「後でみかん使ったデザートでもなんか作るか」

「え、グラン料理できるの?」

「元一人暮らしだぞ? 基本色んなもの食べたかったから、料理は習ったし色々学んだよ」

「……ちよつと、みかんのデザート気になる」

「後でスフラマール先生に手伝ってもらって、みかんの粒入りアイス作ってやろう」

「わーい」

そう言えばみかんの在庫あったかなと、グランはふと思った。この際、足りないものを色々買い足していくのも悪くない……とも思いつながら、後で向かう買い出しメンバーを頭の中で決めておくのであった。

「……あれ? でもアイスって固めるだけだよな?」

「おいおい、アイス作りは過酷なんだぜ?」

「そ、そんなに?」

「ただ凍らせるだけじゃあダメだからな、まあ作り方見せながらやろうか」

「わ、わかった!!」

覚悟を決めたかのように目付きを変えるクラリス。ふと、そこまで来てグランは時間が迫っていることに、ようやく気がついた。

「では、時間が来ましたので今回はここまでとさせていただきます。ご視聴ありがとうございます」

そしてそのまま電源を切って、番組を終了させる。軽く背伸びをして、立ち上がる。クラリスも一緒に出ようと思ったのか、立ち上がる。

「……さて、出るか」

「そうだね」

クラリスと一緒に部屋を出るグラン。ふと、ここまで来てクラリスは気がついたことがあった。

「そう言えばさ、グラン」

「んあ? どした?」

「女性団員にセクハラしてるけどさ、ウチにはしないの?」

クラリスの言葉に固まるグラン。クラリスも何故固まったのか分

からない、という感じで首を傾げていた。

「え、何セクハラされたいの?」

「え、いや、あの」

「はい言質取ったー、もう言い逃れは出来ないぞー!」

「え、え……」

「ぐへへへ、言葉責めだけじゃあ終わらさねえぞクラリスウ?」

「キャラが!!キャラがまるで違うよグラン!!」

手をワシワシさせながら、グランはクラリスに迫っていく。まるで手の動きだけ作画枚数が違うのでは、という感覚を抱かせる程に滑らかに手が動いていた。

「覚悟しなア!!」

「やああああ?!」

まるで子供の遊びのような光景だが、正直犯罪的な場面にも見えかねない。

グランがクラリスに後一步迫ろうとした……その時であった。

「……あれ?グラン?グラーン?わっ!?!」

「……ったく、何となく通りがかったらこんな状態になってんのかよ」

「し、ししよー……?」

通りがかったのは、カリオストロだった。グランはカリオストロが召喚したウロボロスに、頭だけを軽く啜えられてぶら下がっている状態になっていた。

「さ、帰んぞ」

「う、うん」

その場で離されて、地面に落ちるグラン。カリオストロはクラリスと共に戻り、その場にはグランだけが残されていた。

倒れたグランを見ながら、クラリスは少し勿体ない気持ちになりながらも、その場を離れるのであった。

「それとな、クラリス」

「ほえ?」

「さすがにクリスマス衣装は水着だぞあれ」

「ししよーまでそういうこと言うの!?!」

錬金術師師弟は、歩きながらしようもないことを話しつつ、そのまま部屋へと戻っていくのであった。

千年を探す者、ウチに任せてみいひんか？

「今日はユエルさんです」

「よろしく頼むでえ〜」

「今日は露出がない方だね」

「何かなあ、ロゼツタに言われたんよ。『前の格好は見ただけで危ない、今の格好も危ないからこれ着て』って」

「前のならばいざ知らず、何故今の格好も…？」

「さあなあ…ウチには分からんわ」

今のユエルの格好は、赤い着物のような格好であり、下もキチンと丈の長いズボンを着込んでいるために、いつものユエルからしてみれば圧倒的厚着と言われても仕方ないくらいには着込んでいた。

「何かなあ『子供達が歪む』とか言うつつたんよ、よう分からん」

「歪む……」

グランは今とは違う格好…今見ているものとは違う、また別の格好を思い出していた。上は白い布を前掛けのように付けており、唯一スカートだけが腰周りを覆っていた。胸囲周辺は、黒い編み目のようなものをつけており、胸だけが綺麗に下着のように覆われていた。そこまでは見ただけでわかるが、もうひとつの下着…要するにスカートの中身がよく分からない状態だった。別段、グランは無理やり見ようとはしないが。

因みに、膝下まで布でおおわれているが、踵とつま先だけが出ていた。

「いつものは、まあ前のと比べたらあれだけど…一応露出はあったからね」

「やんなあ、なんでなんやろうか」

恐らく、付け根のギリギリのところまでしかないスカートが原因だろうとグランは思ったが、特に言うべきことでもないので自重した。

「こんな事言うのもアレなんやけどな」

「ん？」

「ウチよりロゼツタの方が色気あると思うねん」

「自分の格好を客観的に見てから言った方がいいぞ」

「グランまでそないなこと言うんか……確かに前の格好は、ちよつと露出してたかもしれないけど」

ちよつと所ではない。胸はほとんど出てるし下はパンツ一丁、太ももの途中まで布で覆っているだけで、それ以外は何も着込んでいない。それをちよつとと言い張るのはどうだろうか。

「というか前の格好でちよつと疑問だったんだけどさ」

「ん？」

「胸を被ってた布はどうやってあれを維持してたんだ」

前の格好、先程も言った通り露出が激しい格好だが……その格好がグランサイファーにおいての七不思議の1つとなっている。因みにもう1つヘルエスの格好も七不思議に入っているが、また別の話である。

「え、どうやってっつてどういう事？」

「いや、胸周りを布で覆うのはわかる、わかるんだ。けどさ……普通下着みたいに横向きにぐるっと1周してると思うんだが」

「……」

「いやいやいや、要するに胸にあった布二枚をどうやって支えてたか気になるんだが」

初めてあった時のユエルの格好。太ももの布は置いておくとしても、胸を覆っていた布だけは、グランはどうしても気になっていたのだ。

何故なら、下着のように胸全体を覆っているものでは無い。縦向きにそれぞれの膨らみに布をかけているだけである。それを固定するためのものは、一切何も無いのだ。

風が吹けばめくれてしまいかねないレベルなのだが、実はそういったことは一切起きていなかった。

「胸かけてたあれ？」

「胸かけてたあれ」

「あれなあ……実は挟んどったんや!!下乳に！」

「よく取れないな!!」

「嘘や、冗談に決まっとるやろ」

ニシシと笑いながら、ユエルは誤魔化していた。これはあの格好の秘密を言うことは無いだろうと思ひ、仕方ないのでお便り箱を取り出してその中からお便りを3通取り出す。

「話が長引きそうなので、ここで質問お便りのコーナー行つてみよう」  
「待つてたで！うちがそういう立場になんのは楽しみやわあ」

「何が出るかな、何が出るかな、何が出るかはお楽しみ……っ」と『アンスリアさんと、ユエルさんの舞の違いってなんですか？』

「それは……なんかも、別モンとしか言い様がないわ」

この団には、何人か舞を踊る者達がいる。そう言つた者達の中でも、アンスリアは有名な者であり、そのアンスリアとユエルの踊る舞はどう言つた違いがあるの……という話をしてるのだろう。

「まあ、どのくらい違うのかつて話をしたらいいんじゃない？」

「うーん、素人目からしてみたら分からんことなんやろうし……せやなあ、例えて言うんやつたら……いちごパフェと普通のバナナくらい違ふと思うわ」

「分かりづらい」

「うーん……せやかて、ウチもなんて言うたらええかわからんのよ。全くの別ものとして考えて欲しい、つて事しか言えんよ」

「ふむ……まあそれでいいでしょう。実際俺もどう違ふか、つて言われても答えられないことなんてあるし……悪いけど2通目にいかせてもらう」

「質問してくれた人、ごめんな」

カメラに向かつて両手を合わせるユエル。その際に耳がピコピコ動いているのを見て、グランは無性に触りたくなる欲求に駆られていた。

「2通目は……』どうして最近厚着してるんですか』  
「厚着？」

「今みたいな格好をどうして始めたんですか、つて事でしょ」

「いや……この格好も、最近してるいつもの格好も……儀式用つて奴やしなあ……今着てるんはソシエが用意してくれた大切なもんやし」

「そうだったよね、確かその格好ソシエのお下がりだっけ？」

今着ている衣装、赤い色が目立つ着物のような格好はソシエのお下がりだった。つまり、ソシエにはもう着られない服ということになる。それは、ソシエが成長したため着られなくなった…というのが正しいと思われるが……

「……あれ？今更気づいたけど、ウチってソシエより体小さいってことにならへん？」

「え、小さいの嫌なの？」

「出来ればソシエと同じが良かったわあ…そうなると胸の大きさ負けてるやん!!」

「ぶふっ」

突然そんなことを言うので、グランは不意打ちで吹いてしまった。ある意味逆セクハラである。意味は全く違うが。

「まあウチはグランが気に入るんやったら、どんな格好でもええけどなあ」

「でも初めてあった時の格好は、好き好んで着てたやつだよね」

「いやあ、あれくらい身軽の方がええやろ？」

「身軽すぎて逆に危なそうだけど」

「そうやろうか？つて、さつきもこんな話したような気がするわ」

「まあまあ……でもまあ、1番初めの格好を知ってる人からしてみれば、今は確かに厚着だよね」

あくまでも比べてみれば、の話である。レスラーの格好をしているグランに比べたら、他の格好は大概厚着に見えるような…そのようなものである。

「ウチよりヘルエスの方が露出が多いような——」

「絶対にそれは無い」

「背中丸出しやん、いつ鎧が前倒しになるか分からんであれ」

「自分の格好も基本背中丸出し…というかエローン全体がそうでは？」

「……せやったわ!!」

耳と尻尾がユエルの反応と同期しているかのように、ピンと上に向



く。素直な犬のように見えるのは、やはりユエルの元来の性格だからだろうか。

「まあ、そろそろ話が脱線してきたし…三通目行くか」

「せやな」

「んー…『尻尾ってどうやって洗ってるんですか』」

「しつぽ？」

「そのいかにも、モフモフしてそうな尻尾の事だろうな。触っていい？」

「アカンでく？言葉だけならともかく実力行使は、秩序の人に晒し首にされるでく」

「そんなスプラッタなことをする人は、ウチにはいません」

ユエルの尻尾。実を言うと、尻尾を持っているエルーンは数が少ないのだ。基本的に、特別な力を持つエルーン等が尻尾持ちなことが多い。グランサイファーに乗船しているメンバーの中では、ユエル、ソシエ、アンチラ、ヴァジラの4人である。

その内、ユエルとソシエは狐の尻尾のようなモフモフである。

「確かに、この尻尾実を言うと洗いにくいよなあ」

「まあ、見るからに水を吸い取りそうだもんね」

「そうなんよお、いざ洗おうと思ったら…その、結構いい感じに長いブラシが必要でなあ…ソシエとウチの自主制作したブラシを使うて、毛の内側まできっちり洗わなあかんのよ」

「水落とす時ってどうしてるの？振ってる？」

「振られへんくらい重なるんよなあ…」

「そりゃあ大変だ、じゃあどうしてるのさ」

「こう、ソシエに絞ってもらってるわ…ただあんまり強うしすぎると痛いから、優しいく絞ってもらってんねん…アンチラやヴァジラが羨ましいわあ」

モフモフであるが故に、ユエルとソシエは尻尾で四苦八苦しているようだ。アンチラの尻尾は、猿のようにモフモフしたものではないので、あまり水を吸い取る等といった不便は起こっていないようだった。ヴァジラはその中間であり、犬のような尻尾のだがグランは別

段そういつた事で悩んでいるという話を聞いた覚えがなかった。

「尻尾付きのエルーンって少ないからね…」

「だから色々珍しがられるし、尻尾洗う道具も不足してるんよなあ」

「そう言えばさ」

「ん？なんや？」

「尻尾触っても」

セリフが終わる前に、グランは吹き飛ばされていた。突然壁から飛んできた鉄球に当たり、そのままの勢いで壁に吹っ飛ばされていた。

因みに、いつも床が開く様にその壁も開く事で、グランは凄まじい勢いのまま船の外へと吹き飛ばされたのだ。

「……場外ホームランやなあ…まあ、そないに気になるんやったらちよつとくらい触らせてもええかもしれんなあ……」

随分と遠くに吹き飛ばされたグランを眺めながら、ユエルはポツリと呟いていた。

ちなみに、尻尾を触りたいというのはセクハラ発言になるのか？という話だが、こればかりは当人達しかわからないことなので、グランは今度から尻尾触る発言はしないようにしないといけないと思っていた。

しかし、あのモフモフは1度味わってみたいと思わなくもない……とも思っていた。

この矛盾が、彼をただただ悩ませるのであった。

「は？尻尾？」

「うん、触られるのどう思う？」

「オイラは別に気にしねーけどよオ、あいつらみてーに毛はねえし鱗だから触るといてーぞ？」

「え、鱗って触ると痛いのか!？」

あまりにも気になったので、グランは何を血迷ったのかビイに触られることを、どう思うか聞いてしまっていた。

当たり前だが、ビイの尻尾ではユエルやソシエみたいにふわふわしたものは無いので、当然触っても何も思えないというのが正式な回答である。

アンチラは、よく触っている……というか腕にぶらさがってる際に嫌でもしつぽが腕に触れているので、今更感があるのだ。

「くっ……」

「そんなに触りてえならよオ、本人達に頼めばいいじゃねえか」

「ダメ元で頼み込めばいけるか!？」

「いやあ、オイラはそんなん知らねえよ。あいつらに聞けって話だしなあ……それよりも、あつちにアンチラがいるぞ」

「はい？」

ビイが指をさした先には、確かにアンチラがいた。しかし、膝をついてめそめそと泣いている姿なのだが。

「なぜ泣いている……」

「団長が尻尾浮気するなんてえ……」

「尻尾浮気」

「他の尻尾に惑わされるなんて、酷いよオ……」

グランは困惑した。尻尾浮気という聞き覚えのない単語を口にされたばかりか、何故かアンチラが泣いている姿が心に刺さったからだ。

これも、あのフワフワのもふもふを触ろうとした天罰なのだろうか……とグランは考えた。

しかし、触りたいという気持ちもあった。しかし、泣いているアンチラが……尻尾が……アンチラが……泣いている尻尾が……と思考がルー

プしていった後……

「……」

「……あれ？おーい……」

「……困惑しすぎて思考がぶっ飛んじまったな、こりやあしばらくは元に戻らなさそうだぜ」

——グランはその内、考えることをやめたのであった。

千年を継ぎし者、堪忍な？

「今回のゲストはソシエさんです」

「よ、よろしゅう……な」

「肩の力抜いてリラックスリラックス」

「肩の力、抜いて……すー……はー……」

顔を朱に染めながら、ソシエは深呼吸をして自分を落ち着かせようとす。何度か深呼吸を行い、落ち着いたか？とグランが考えた瞬間

「グ、グランはん……カメラあるから言うたって、グランはんと二人きりは……かなわんわあ……」

結局落ち着けなかったのか、顔を先程以上に真っ赤にしてソシエが悶えていた。余程、グランと二人きりで一緒にいるというのが彼女にとって耐えられないらしい。

「二人きりになる事なんてまあまああるから、まあココアでも飲んで落ち着いて、な？」

「お、おおきに……」

ソシエは耳を激しく動かしながら、グランから手渡されたココアをゆつくりと飲んでいく。両手で支えながらゆつくりと飲むその姿は、彼女の育ちの良さを十二分に見せつけてくれる良いものであった。

「落ち着いたか？」

「ちよ、ちよつとだけなら……」

「ならよし、まあ初めは多少の雑談とかして気を紛らわせていこう」

「そ、そうや……グランはん……」

「ん？どした？」

「尻尾触りたいんやったら……触つても、ええよ？」

グランは先程まで、ソシエをリラックスさせるために笑顔だったのだが、ソシエの顔を赤くしながらのその発言に、レスラー並の真顔ぶりを発揮していた。

「尻尾？」

「う、うん……ユエルちゃん時もそうやったけど、別にウチら……気にし

てないから、な?」

「いやまあ、俺としては触りたいんだけどな」

「な、なんかあったん…?」

「アンチラに、尻尾浮気はしちゃいけないと泣きながら怒られた」

「そ、そらどうしようもない、わ…」

「どうしようもないのか…：尻尾はお一人様1名までなのか…」

よくわからないことを口走りながら、グランは頭を抱えていた。最早彼自身が何故頭を抱えているのか、それすらも分からないままに頭を抱えてしまっていた。

「す、好きな人には…：自分だけを触ってもらいたいから…ね…」

「好きな人、ねえ…」

その言葉の意味がわからないほど、グランもアホではないとソシエは思っていた。唐変木とまではいかないが、それなりに人の心を機敏に感じ取れるだろうと。

まあ、ここでそういう話題を出すのは少し卑怯だとは彼女自身思っていたが。

「…：そ、そのグランはん?」

「ん?」

「番組…：進めよか…」

「せやな!!!」

グランはお便り箱を迫真の顔で漁っていく。表情の迫真さと、体の地味な動きのギャップがツボったのか、ソシエは声を殺しながら笑っていた。不意打ちだったが、耐えられてしまったことにグランは少し不服であった。

「という訳で切り替えて1通目『着物は重くないんですか』」

「重くはない、かな…：けどどつかの島にはすごい重い着物がある言う話なら知つとるよ…」

「まあ見た目が凄いからね、モフモフの極みというか…：その島の重い着物ってどんなやつなの?」

「文献で調べたことある程度やけど…：なんでも、着物を12枚重ね着するらしいんよ」

「それで重くなるの？」

「そうみたい…」

実際に見たことがないために、グラン達はその重ね着がどれほど重いかは想像出来ないが、しかし言うからにはすごく重たいものなのだろうと言うことだけは理解出来ていた。

「仮にそれだけ重いとなると、舞は踊れそうにないね」

「そ、そう見たい…それに何回も脱いだり着たりするのが面倒やから…しばらく着続けるみたい」

「…それってつまり、ずっと着たまま風呂にも入らずって事…？」

「…：ほんまや、そうなるんだ…」

ソシエも気づいていなかったのか、驚いた顔でグランと目を合わせていた。特にソシエは尻尾のあるエルーンの為、自分の体の匂いなどには敏感なのである。放置していると、尻尾に汚れが溜まっていくのだそう。

「…：む、昔の人て…体臭いの気にならんかったんかな…？」

「気にならないわけが無いだろうし…：なんかで誤魔化してたのかもしれない」

「な、なるほど…：…」

ソシエは耳を激しく動かしてグランの意見に聞き入っていた。その仕草が、とても子供っぽい可愛らしさを出していることにグランはにやけ顔が止まらないでいた。

「ぐ、グランはん…？なしてそないに顔が崩れてるん…？」

「いや、ソシエって子犬みたいだなあって」

「う、うち…：ワンちゃんなん…？」

なぜ急にそんなことを言われたのか。それをソシエは今一理解していなかったが、グランが人を貶すようなことは言わないと信じているので、きつと褒め言葉なのだろうと解釈していた。

そして、褒め言葉だと認識した途端心が暖かくなるような嬉しさも覚えていた。

「何かさ、ソシエの反応と耳の動き見てたらっついね」

「あ…：ウチ、耳動いてた？」

「そりやあもう、空に羽ばたくんじやないかってくらい」

「…空飛べるくらい？ウチが空飛んだら…ユエルちゃん喜んでくれるかな…？」

「いやそれはわかんないけど…まあとりあえず2通目行こう。『寝る時の体勢ってどうしてますか？』」

「…？寝る時…ウチは横向いて寝てるよ」

多少首を傾げながらも、ソシエは少しの言葉で会話を終わらせる。横向きとなると、尻尾と胸がどちらも上にも下にも向いていないということになる。

「やっぱり、尻尾に体重かかるの辛い？」

「そ、それもあるけど…毛に癬ついてまうんよ…」

「ああ…」

睡眠時間がいかほどかは知らないが、仰向けで寝た場合寝返りすることを含めても、1時間かそこらはずっと尻尾が下になるために、潰されてしまうのだ。そうになると、毛に癬が残って翌日からのケアが大変だということである。

「うつ伏せは…」

「呼吸しづらくて辛いんよ…」

「だろうね」

ソシエもユエルも、それなりのものを持っているからね。とグランは言葉を出そうとしたが、出した瞬間落とされてしまいそうな気配を感じたので喋ることは無かった。こんなタイミングで落とされたら、番組が終わってしまう。

「他の子はそんなことないみたいで…羨ましいわあ」

「尻尾ついてる間柄でそういう話題ってやっぱりあるの？」

「ウチらでしか共有出来ひんし…コウ君に聞いても、うつ伏せで寝てることあるらしいわ…」

コウ。それはユエルやソシエと同じ尻尾付きのエルーンの少年であり、彼女達2人の関係性を示す『九尾』関係の少年でもある。現在はとある島に住んでいるという話がある。

「まあ彼は男の子だしね」



「そういう時…男の子にちよつと憧れるわ…もしウチが男の子やったら、ユエルちゃんも守れるかもしれんのに…」

「ソシエが男……」

今のソシエを男にしても、グランはピンと来なかった。純粹で天然な少年になるだけでは？と、グランは思ってしまったからだ。

「……そ、そないに変かな…?」

「いやまあ、ちよつとイメージしづらかったただだから気にしないで」

「そ、そう…?それやったらええんやけど…」

「じゃあラスト、三通目『なあソシエー、ウチの事大好きー?』…ユエルだこれ」

質問と言うよりも、まるで友達か恋人にするかのような軽い疑問。しかし、それでもユエルから来たものは嬉しかったのかその表情はまたとても嬉しそうなものへと変貌していた。

「う、ウチは…ユエルちゃんの事大好き…あ、後…」

「ん?」

ソシエがグランを見た瞬間、グランは自分に指を指す。見たことがバレて恥ずかしかつたのか、ソシエは手で持っていた扇で自分の真っ赤になった顔を隠していた。

「ほ、ホンマにみんな…大好き、やから……」

「ここにユエルがいたら、ソシエに抱きつきながら頭撫でそうだ」

『ウチもソシエのこと大好きやでえー!!』と言いながら抱き着く姿を、グランとソシエの2人は容易に想像していた。ユエルならやりかねないと、いい意味で予想して2人で顔を合わせてつい笑ってしまう。

「…ふふ、確かにユエルちゃんならしてそう…」

「でしょ?ユエルのスキンシップって、親しくなればなるほど激しいからね」

「た、多分そういうことすんのは…ウチと、ルリアちゃん…ビィに…グランはんだけやと思うわ……」

「他にはしそうな人いないの?」

「せ、せいぜいコウ君くらいやないかな…でも、ユエルちゃんは自分が大好きな人くらいにしか、ホンマにスキンシップせえへんから…」

誰とでも仲良くなるスキルを持っていそうなユエルだが、それでもあまり過剰なスキンシップはしていないとソシエは言う。おそらくそれは男性限定で、女性に関しては抱きつく人は多いのでは？とグランは思っていた。実際のところ、どちらなのかは2人にもよくわからないままなのである。

「さて…今日はここまでかな」

「あ……もう、時間なん？」

「そうそう、まあ案外短く感じるよね」

「せやなあ……もつと、グランはんと二人きりでおりたかったわ……」

「はは、俺の私室まで二人き」

毎度の事ながら、グランは落とされてきた。最近雑に落とされすぎじゃない？とか思っているが、しかしまあ今のは落とされてもしようがないとは思っていた。

流石に今のベリアルばりのセクハラは頂けなかったのだろう。

『特異点、そういう時はこう言うんだ』

「ベリアル、お前…死んだはずでは…!？」

『いやこれは特異点の妄想だし』

グランの心の中のベリアルが、何故か語りかけてきていた。因みに今のグランのセリフは、言いたかっただけである。

「それで？落下している俺が言うべきセリフとは？」

『決まっているだろう？特異点、君もよく聞いてるはずだ』

「はっ……まさか…!？」

グランは、妄想の中のベリアルが何を言いたいのか理解した。そして、妄想の中のベリアルと同時に、そのセリフをグランサイファーの底面に向かって言い放つ。

『俺と姦淫しないか？』

「グラン、その誘い方はないわ」

「あ、はいすみませんでした」

因みに、既にメーテラに拾われているので今のセリフはガッツリメーテラに聞かれていた。

ちよつとまんざらでもなさそうだが、メーテラはそれを口に出さな

い。

「ほら、いつも通り船に戻しとくから」

「ああ、うんありがと」

「…あんだ、頭おかしくなってるなら休みなさいよ?」

メーテラにまで頭の心配をされてしまったので、グランは仕方なく今度病院に行くことになってしまった。

そこまでおかしいことを呟いていただろうか?と、グランは思っているが、正直なところ頭の中に妄想のベリアルがいるという時点で立派な精神病である。

「…明日、団全体を休みにするかな…」

余談だが、次の日のグランサイファーは一切仕事をせず、とある島で1日休んだり遊んだりをする団員で溢れかえったという。

グランもその中の一人だったのだが、休んでいる時に来てくれたソシエにこう言い放ったという。

「なあソシエ、休みの日って何すればいいんだ…?」

「…う、ウチとユエルちゃんと一緒に出かけるとか?」

「…そうだな、ユエルも誘って出かけるか」

多少呆けながらも、グランはとりあえず2人と出かけたのであった。

## ホワイトパーリナイ

「特異点！姦淫しよ」

「光の刃ア!!!」

「がふっ」

「オラさっさと立てベリアルウ!!戦果と金貨と銀貨落とさんかいワレエ!!」

「おいおい、俺のマゾヒズムをくすぐるのは止めてくれよ。興奮で達してしまうだろう?」

「ベリアル語録はもういいんだよ!!アズラエルとイスラフィルのこと許すと思ってんのかゴラア!!!」

「はっはっは、既に満身創痍の俺にまだ攻撃を続けるとはね。特異点はサディズムの塊じゃないか?」

「どこともしれない赤い空の下で、メカニックとなっているグランはシユヴァリエマグナの力が宿った銃で、ベリアルを殴っていた。言葉にして表してみると至極単純なことだが、持ち手の方でぶん殴っているのがベリアルの頬に凄まじいダメージが入っている。

「なんだったらもっかい錬金術とドリルとメイド達のコンビネーション味わせてやろうか!?!」

「えっ」

「おいおい特異点、後ろの女達が驚いてんぜ?あとそれやられるとまた俺達してしまう」

何かの括りで分けられた全員の怒りを代弁するかのごとく、怒り狂ったグランはベリアルを殴っていく。

「おうお前あと一ヶ月くらい殴り続けてやるからな!!」

「おいおいそんな長時間のプレイをする気か?ずっとせめてばかりじゃ飽きるだろうし、途中で交代しよう…そしたらマゾヒズムとサディズムを両方満たすことが出来るぞ?」

「うるせえ!!」

赤い空の下でグランの叫びがこだまする。彼の怒りはもはや誰にも止めることが出来ないのだ。

「はっ…!? 夢か…:…ん?」

「っ…!?!」

「…:…やあクラリス、何故君は寝ている俺の顔にそこまで顔を近づけているのかな? 俺の顔がよく見えないという話なら、眼鏡をつけるといい」

「ち、違うから!?! ウチは別にそこまで目が悪くないから!?!」

目が覚めると、グランの顔の数センチ先にクラリスの顔があった。真っ赤にした顔と、慌てふためく姿が存在しているこの異常な状況が、グランの寝ぼけた頭をそれなりに回転させてくれていた。

「ふあ…:…あ、もしかして寝過ごしちゃってる?」

「いや、そこまで寝過ごしてないと思うけど…:…珍しくグランより早く起きたから、ちよつと様子見に來ただけだし」

「ああそうだったのか…:…ああそうだった、クラリスちよつとこっちおいで」

起き上がったから、グランは手招きしてとある部屋へとクラリスを招く。

入った瞬間に、凄まじいほどのチョコの匂いがクラリスの鼻腔に入ってくる。

「こ、このチョコのにおいは…:…」

「はい、これバレンタインのお返し」

「…:…あ! 今日ホワイトデー!!」

「何だ今気づいたのか。だったら話は早いな…:…はい、これクラリス

の分だから存分に味わってくれ」

「この部屋、チョコの匂いがかかなり凄いけど……私のお菓子もチョコなの？」

「何人かはチョコじゃないけどな……お前にはミカンを使ったビスケットだ」

クラリスが丁寧に包装された箱を開けると、そこにはグランの言う通りみかんの香りが漂うビスケットが入っていた。

「うわ凄い……1人で作ったの？」

「当たり前だろ？作ったのは俺一人だよ……ああそうだ、これからみんなにお返ししにいかなくちゃいけないんだったな」

「……団全員の子にお返しする気なの……？」

「え？そうしないと失礼だろ？」

クラリスはそういうことが聞きたいのではなかった。この場にあるお返しのお菓子は、全員分なのだと考えたらグランはいつこれを作ったのか……それが気になるのだ。

「因みにグラン、昨日何してた？」

「昨日？うーん……まあいつも通りだったな。朝昼夕方ずっと依頼だったよ、合間合間に船に帰ってきてたから、お返しのお菓子はその間に作ってた」

「合間合間……？」

そんな合間、一体どこに存在していたのだろうか。クラリスは聞きたかったところだったが、あまりにも不思議かつある意味で恐怖だったので、これ以上の追求はしないことにしたのであった。

「まあとりあえずお返し返してくるから……あ、なんか用事？」

「う、ううん……本当に部屋覗きに来ただけ」

「ならごめん、俺は行ってくるよ」

そう言つてグランは、部屋から大量のチョコを担いで出ていく。1人ぼつんと残されたクラリスだったが、顔を赤くしながら、自分の人差し指を唇に当てて、ちよつとだけ後悔を感じているのであった。

「ん？グランはん…？どないしたんその大きい荷物…」

「…甘い匂いするけど、それお菓子？」

「お、正解。という訳で2人にもバレンタインのお返しを配ります」

グランは出会ったユエルとソシエに1つずつお菓子を渡す。2人には、自家製のお饅頭である。

「……え、これグランはんの手作り？」

「凄いなあ……もうこれお店で出せる味やで？」

「うんうん……すっごく美味しい」

貰ってから、グランに許可をもらって直ぐに食べ始めるユエルとソシエ。本当に美味しいお饅頭を、彼女達は美味しそうに食べていた。そして、その光景をグランは楽しそうに見ていた。

「もしかしてそんなかのお菓子、全部グランの手作りなん？」

「おう、そうだよ？今日の間、女性団員全員に返すつもりだからさ！」

「今日の間にて……依頼でおらん人は除いてなん？」

「いや、今日は依頼で出かけてる人も予定だと帰ってくる日だし、今日出るような依頼受けてる人はいないんだよね」

サラツと発言したグランだが、そのセリフにユエルとソシエは首を傾げる。団長なのである程度の予定は把握しているだろうが、今の言葉をもそのまま受け取ると本当に全員の予定を覚えていることになりかねない。

「……ぐ、グラン？」

「ん？何？」

「ほんまに全員の予定覚えてんの？」

「そうじゃないと団長務まらないでしょ？」

改めて、2人はグランの凄さを思い知っていた。おそらく並大抵のことでは覚えきれないものをなんとかして覚え、鍛錬も欠かさず行い、そして団員達とのコミュニケーションも忘れない。

団長になつてからなのか、はたまたそれよりも前からこうだったのかは2人には分からないが、少なくともグランは並大抵の団長には出来ないことをしていた。

「あ、お饅頭また作って欲しかったら言ってね。合間があればいつでも作ってあげるから」

「ほんまに?!じゃあまた今度作ってな!!」

「そんなに気に入ってくれたら嬉しいなやっぱり」

「ぐ、グランはん…」

「ん?どうしたんだ?」

「あ、厚かましくて悪いんやけど……ウチにもお願い、な……」

「気にしなくていいよ、いっぱい作ってあげるからさ」

嬉しそうに、耳と尻尾を動物のように動かす2人。彼女達はグランよりも歳上だったはずだが、グランも自分自身歳上であっても親しい間柄のように、敬語を使わない方針のために偶に年上と年下の区別がつかなくなってきたところであった。

「他誰かに渡したん?」

「いいや?寝起きにクラリスが部屋にいたからさ、とりあえずクツキーをクラリスに渡して、その後で全員に渡しに行くって言うの伝えて先に出てきたんだよ。」

ユエルとソシエは、部屋から出て初めてあつた女性団員だよ」

「……あれ?ルリアは?」

「ルリアには今みたいに隠しながら……みたいな事が出来ないからねえ」

「へえ、そうやったん?初めて知ったわ」

「魂分け与えてるせいかな、感情も大雑把に移っちゃうんだよね。ルリアが悲しかったら俺も悲しくなるし、俺が嬉しいとルリアも嬉しくなる……みたいなの」



ルリアには、サプライズが出来ないと愚痴るグラン。確かに、心がある程度通じあっている相手では、サプライズでチョコを渡すことは不可能に近いだろう。

それこそ、お菓子を作りながらほかの全く関連性のないものを考えなければならぬ。流石にそれはいくらなんでも不可能なので、グランでも出来ないのだろう。

「不便？」

「いや？全然そんなことないよ。それに感情が伝わると言っても、そんなに事細かく伝わるわけじゃないから、多分わかったとしても、『何かを渡してくれるかな？』くらいだと思う」

「その根拠は？」

「俺がそうだから」

「なる程なあ」

グランとルリアにしか分からないこと。この二人の仲は、かなり硬いものでありそれが例えグランの家族や、仮にできたとしても恋人以上に繋がっていられるのだろう。

彼らの繋がりは、グランを好いている女性陣からしてみれば羨ましさ半分、ルリアだからこそその安心半分と言ったところである。

「……あ、俺そろそろ他の子達にも渡しに行かないといけないから行ってくるね」

「頑張つてな〜」

「おーう」

そう言つてグランは2人から離れていく。やけに大きな荷物を抱えているにも関わらず、グランは変わらずいつもと同じように動いていたのであった。

「……あれ、重さどれくらいあるんやろうなソシエ」

「多分……ウチらには想像つかんくらい重たいと思うよユエルちゃん……」

「ふう、ようやく全員に返し終えたぜ」

全員にチョコを返してきたかつバルルガンにチョコを渡してきたあと、グランは部屋に戻ってきていた。

その時点で既に夕方になっており、チョコを渡すのに奔走しすぎたと自分でも思ってしまった。

「もうちよつと早く配るべきだなあ」

「いやいや、早すぎんだろ」

「おやビー君、いたのか？」

「ひでえなあ、朝から部屋にいたつてのにお前オイラをおいてけぼりにするんだもんよオ」

ビーはグランの頭の上まで飛んでいき、その小さな体を乗せる。グランは『悪かった』と言いながらビーの頭を撫でていた。

「つーかよお、朝から居たのになんでわかんねえんだ？」

「いやあ、クラリスがいきなり目の前にいた事とか今日がホワイトデーだって事を忘れててさあ」

朝のことを思い出しながら、グランは苦笑いをしていた。グランの言葉に、ビーはため息をついていた。

「ったくよお……まあ、今日はオイラもルリアと一緒に色々してたから良いんだけどよ」

そう言いながらため息をつくビーだったが、実は彼は見ていたのだ。朝からわざわざ部屋にこっそりと侵入し、誰もいないこととグランが寝ていることを確認してからキスをしようとしていたクラリスの姿を。

呼びかけようと思ったが、直ぐにグランが目を覚ましてしまったた

め、声をかける間もないままここまで来てしまったのだ。

因みにグランは全く気づいていないが、ドアの鍵はぶっ壊されていた。

「さーて、あとは事務処理だけ終わらせて今日は寝るかあ」

「おいおい、今から仕事すんのかあ?」

「書類仕事だけだし、それなら1時間もあれば終わるでしょ」

「まあそうだけだよオ」

ビィはグランの仕事量をいつも見ているが、ビィ自身が寝るまでの間にグランが休憩した所を確認したことがない。無論、昼食等や依頼途中の休憩は除くが。

「そーいやよお、ルリアにはお返しは渡したのか?」

「うん、街中で前に見たすんごい縦に長いホールケーキ。あれ作った」  
それはホールケーキではなく、もしかしてウエディングケーキなのではないだろうか。ビィはそう突っ込みたかったが、今突っ込んだところはどうしようもないので――

「とりあえずオイラもできることがあるなら手伝うぜ」

グランの仕事を手伝う事にしたのであった。

狂恋の華鎧、お姉様お姉様お姉様ア!!

「怒っていいですか」

「何で急に怒るんですか、本日のゲストのヴィーラさん」

本日の相手はヴィーラ、カタリナにご執心の一途な女性である。但し、最近是他の者とも付き合うようになったため、基本的な態度は軟化している。

「まず初めがお姉様では無かったことに対してです」

「いや、まあ……1番初めって緊張しやすいから、なるべく破天荒な人物の方が良かったって話」

「……まあ、確かにお姉様は清く正しくそして高潔であるお方です。その判断は、間違っていないと言えるでしょう」

「まあカタリナもいずれやる予定だよ、本人がいいならね」

「……その言い方だと、まるで本人に断られたパターンがあるようですね?」

「と言うよりもまあ……本人の顔が出せないパターンかな、あと名前とかね」

グランは名前を言うことは無いが、例えばどこかの英霊使いの元国王だったり顔も本名も明かせない存在なので、この番組には出せなかつたりする。

「そうなんですか……所で団長さん、1つご提案……というか話したいことがあるのですが」

「ヴィーラから?そりやまた珍しい……俺が出来そうなことなら手伝いますよ」

「では遠慮なく……お姉様と一緒に部屋に」

「駄目です」

「……出来そうなことなら手伝うと言ったのはあなたですが?」

「団長はなんでも知ってます、それが叶えられるかどうか自分の心にちゃんと聞いてください」

「……くっ」

ヴィーラは日記を書くのが趣味である。その日記の内容として

ちよつとカタリナの事に中心になっている事が問題なので、団長であるグランとしては『何か暴走しそうな気配がある』ため却下せざるを得ない。

「まあいいでしょう……所で、これは1人同士の話し合いですよね?」  
「基本的には……ね。場合によっては、複数人と同時に話し合うこともあるよ」

「そうですね……」

「今ローアイン達のこと考えなかった?」

「何故私が?」

「今物凄い殺意と笑みを見たからだけど。殺し合いダメ、絶対」

手で大きくバツを作るグラン。基本的には男は苦手なヴィーラだが、最近ではグランにはカタリナ並に心を開いてきていた。

「ところで団長さん」

「はい何でしょうか」

「お姉様のチョコは如何でしたか」

「刺激的な体験ができたよ」

「そうですね、私もです」

目を合わせるグランとヴィーラ。この2人は結構絡みも多いが、カタリナの作る料理等は2人にとって、絆を深める結果にしかならないことが多い。

「そう言えば、ヴィーラって料理出来るの?」

「領主だった時はさせて貰えませんでしたけどね……この団に入ってから、料理の練習をする事が増えたのでまあそれなりに……と言った所でしょうか」

「今度デザート作ろうか」

「……二人きりでですか?」

「人が少ない方が好みなら、二人でやるけど?」

「……団長さんって、罪人ですよね」

「まあ最近少なくなっただけど、秩序の騎空団の檻に入れられることがあつたから罪人だよね、うん」

「そういう意味も含めてですよ」

変な事実があるために、妙な解釈をされるところなるといふ見本である。何故これが団長なのか、とヴィーラは思わなくもなかった。

「お便り、読んでくださいますか？」

「ああ、うん……さてでは早速引いてみよう。1通目『一時期凄い格好になっていたつすけど、あれ何でつすか？』これフアラからだね」

「何故彼女に……まあいいでしょう、あの時の格好<sup>S</sup>だけを見て変な勘違いをしていた者もいるようすしね」

「あの時は……確かシュヴァリエが着いてきたことが発覚したんだよね」

「ええ、シュヴァリエの力を顕現させるとあのような格好になっていました」

「……シュヴァリエが考えたってこと？あの衣装」

背中やへそが丸出しであり、『それ下着じゃね？』と思えるかぼちやパンツのような何か。彼女の格好はシュヴァリエが原因だったのだが、シュヴァリエのセンスが問われる問題のような気がしていたグラン。ヴィーラも、今ここで言われて、初めて気にしたようであった。

「……今度、聞いておかねばいけないのかもしれないかもせんね」

「ひとまず、あの時の格好はシュヴァリエが自分の意思で作り上げた格好です。まあ、シュヴァリエの力の一端を使えるあたり凄かったよねあの力は」

「そうですね……仮にも星晶獣なのですから」

無論、今でも行使可能な力である。元々城塞都市アルビオンの星晶獣として君臨していたシュヴァリエだったが、ヴィーラのことをシュヴァリエ自身が気にいり、そこからは彼女を主としてシュヴァリエはグランサイファーに乗っていた。

「にしても……私のあの格好……今にして思えば……」

「ん？」

「腹立たしく思えてきました」

「え、待ってなんで？」

「あのチャラ男や彼女に見られてしまったことが、です」

ヴィーラとフアラ、そしてローアインは恐ろしいと言わんばかりに

仲が悪い。但し、シユヴアリエ無しであつてもパワーバランスはヴィーラが1番上であり、1番下なのがローアインというアンバランスになっているためそれが余計に仲の悪さを深めていた。

と言つても、ヴィーラが一方的に嫌っているだけであり、ローアイン達は嫌つていると言うよりは尊敬や羨望の眼差しを向けることもあるが。

「ま、まあ……しょうがないと言えましょうがないよ。制御しようと思つてできていたものでもないしさ」

「それは……そうなのですが……」

「とりあえず……2通目に行こう……『生霊出てるってローアインくん達言つてたけど?』コルワから」

「は?」

グランは、初めて本格的な死を覚悟した。傍から聞けばいつもと同じ、ヴィーラの声が少し不機嫌になっている程度だと認識出来るだろう。しかし、グランは今の彼女の声がまるで地獄からの声のように聞こえてしまったのだ。

それほど、殺気が込められていた。

「何ですか生霊って」

「い、いや……俺じゃなくてローアインが言つてる事ね?」

「……ではあのチャラ男達が何を言つてるのか……知っていますか? 団長さん」

「……まあ、大まかには伝えられたよ。だいぶ前にコルワが合コンしてたつて話……覚えてる?」

「ああ、懇親会でしたっけ……団からの出費を出す訳には行きませんでした。彼女達が自分で行ってたあれですか……あれがどうかしたんですか?」

「あの時に言つてたらしいんだよね、ローアイン達がヴィーラの話題を出すと何故かヴィーラに睨まれたかのような感覚になるって」

「は?」

何故一々殺気向けられねばならないのだろうか、とグランは吐きそうになっていた。戦うことには慣れてしまっているが、しかし彼女

からの殺気はただただ『殺す』という意味しか感じられないのだ。

「だ、だから俺を睨むのをやめて……ローアイン達が言つてたことなんだからさ」

「あのチャラ男共……1度本気で……」

「まあ、真面目な話」

「……はい？」

「シユヴァリエの防御機構でも働いているんじゃないの？」

シユヴァリエは今や、ヴィーラという個人に力を貸している存在である。ヴィーラが敵と認識したものを、シユヴァリエもまた敵と認識している為に起こっているのではないか？とグランは予想していた。

「さあ……幾らシユヴァリエでも私個人がああ男達を睨んだ時の感覚なんて再現して何の得になるのか……という話になりませんか？」

「む……それを言われるときついな……」

「……いやでも、私の生霊ですか……」

「……」

何かを企んでいるなどグランは思ったが、何だかんだで一線は超えていないので恐らく大丈夫だろうと考えることを放棄した。また何か口を出して殺気を出されたのでは……おそらく吐いてしまう自信があつたからだ。

「三通目『団の中で1番だと思える男性はなんですか!?!』ペンネーム顎男爵さんからです」

初めてペンネームを使われたとグランは思った。しかし、この名前は……1人しか思い当たらないのだが、タイアーがこんなことを聞くだろうかとも思っていた。

「団長さんです」

「……意外な返し」

「あら、これでも団長さんは尊敬しているんですよ？私の考えていることや、他愛のないことでも話してくれる魅力的な方だと思つています。」

ただ……」

「ただ？」



「女性で無いのが残念です」

女性だったらどうなっていたのか、グランは怖くて聞けなかった。可愛い物好きも、大概にしておけよヴィーラ……と言えたならどれだけ精神が凶太くなれるだろうか。

「しかし……全員が全員団長さんを目指すという訳にも行きませんか  
らね」

「全男性グラン化計画なんて碌でもないな」

「そんなことをしている暇があるのなら、もつと魅力的になれるように自分を磨くことだけをやって欲しいものです」

言っていることは至極まともなのだが、なぜだかヴィーラがいうと別の意味に聞こえてこなくもない。

果たして、自分磨きをしたところで男性は彼女に相手にされるのだろうか。

「まあ、冗談なんですけどね」

「ヴィーラが言うのと冗談に聞こえないんだけど」

冷や汗を流すグラン。そして、ふと時間を確認するとそろそろ終わりが近い事がわかった。

「……さて、今日はここまでにしよう」

「そうですね、いい時間ですし」

「皆さんご視聴ありがとうございます、またこの番組でお会いしましょう」

そう言っただけでグランはカメラの電源を切る……と同時に扉が大きく開かれる。

「秩序の騎空団だ！御用改である!!」

突如入ってくる秩序の騎空団所属であるモニカとリーシャ。突如入ってきた2人に、グランは驚いていた。

「え!?待って俺まだ何も悪いことしてねえよ!」

「いや、今回は彼女の方だ」

そう言っただけで、モニカはヴィーラの方に指を指す。ヴィーラは何も言わずにモニカを見ていた。

「とある筋からの情報だ。どうやら、カタリナ・アリゼの部屋から星晶

獣の気配がしたそうだな。詳しく調べてみると……彼女の部屋のベッドの下から、星晶獣シュヴァリエが発見されたらしいな」

「なるほど……もうバレてしまいましたか」

「えっ、えっ……」

「盗撮の疑いで現行犯だ……」

そう言つてヴィーラはそのまま連れていかれる。彼女は一切の抵抗なく、また何かを恨むようなことも一切なかった。ただ、やり切つた顔でそのまま連れていかれたのだ。

「……一体全体、何がどうなっているのやら……」

その場に残されたグランは、ただそう呟く事しか出来なかった。自分が逮捕されなかつたことも、ヴィーラがシュヴァリエを盗撮カメラ扱いしていたことも、そして何故かやり切つた顔をしていたことも……全てが彼にとっては困惑の材料となり得るものだった。

「……とりあえず、部屋に帰ろう」

恐らくいつもの自分のように、ヴィーラは解放されるだろう。というかシュヴァリエを盗撮のカメラのように使つて、リアルタイム生中継を自分の目だけで見れるようにするとは……

「……という事は、俺とルリアの視界も繋がる可能性が……ん？」

手元からなる金属音。ふと気になつて見てみれば、自分の手には手錠がつけられていた。そして、隣には先程モニカと一緒に戻つたはずのリーシャが立っていた。

「盗撮未遂で逮捕です」

「してないのに……」

「する気満々だったでしょう」

「ふ……負けたよ」

「エリクシールは使えないので、リベンジボーナスだけで耐えてください」

そして、何だかんだでグランも一緒に連れていかれるのであった。因みに、本当にルリアと視界が共有できるかどうかは知らない。

騎士修行中、やれるっすか？

「はい、フアラさんです」

「何か雑じゃないっすか!？」

「んなことない、んなことない……というか今日はラフな格好<sup>S</sup>なんだね、寒くない？」

「大丈夫っすー!この程度全然寒くないっすよ!!」

現在のフアラの格好、ノースリーブである。いつも来ている鎧は、今日は着ていないのだそう。

「えー、フアラは騎士修行中の身……なんだよね一応」

「なんすか？何か足りないところでもあったっすか？」

「いや……フアラって料理上手というか、家事上手だから騎士というよりも主婦目指した方が……って考える時あるよ」

「あはは、褒めても何も出ないっすよ団長。ただ出来ることをやっているだけっす」

フアラの料理の腕は、ローアインやほかの厨房メンバーも舌を巻くほどである。それに加えて、旅に出たばかりのグラン達の厨房係も務めていた事もあった。

さらに、洗濯も掃除も上手となれば最早主婦である。

「そう言えばさ、俺ずっと思ってたことあるんだけどいい？」

「なんすか？」

「帝国の騎士ってさ、ちゃんと男女いるんだよね？」

「当たり前じゃないっすか、寧ろなんでそんな当たり前のこと聞いてくるんすか？」

「だよなあ、普通そうだよなあ」

グランがこんなことを聞いた理由。それは、帝国兵にカタリナやフアラ以外の女騎士をまともに確認した記憶が無いからだ。七曜の騎士などはともかくとして、一般兵で声だけで判別できる範囲内では見たことがないのだ。

そんなに女性騎士が少なく、本当にいるのだろうか？と疑問に感じているのだ。

「ああでも、ファアラと一緒にの班は別の意味でヤバそうだなあ」

「どういう意味っすか?」

「いや…料理洗濯といった家事が出来る女性…甘えちゃいかねない」

「……?」

「魅力的な女性って話だ」

「成程! 団長はそういう女の子が好きって話っすね?」

少し話がズレてしまうファアラ。しかし、ここでふとグランの悪戯心が働いてしまう。別に他意はないが、ファアラのような性格の女の子はからかってみたくなるのだ。

「そうだね、ファアラとなら結婚できるよねって話」

「……はっ!?!」

不意打ちで顔が赤くなるファアラ。冗談で言っただつもりだったが、真面目に反応されるとボケ殺しになってしまったため、グランまで素っ頓狂な顔をしてしまっていた。

彼が望む反応としては軽くスルーされるか、ヴィーラののような殺意を向けられるかの二択のつもりだったのだが。しかし、ファアラにヴィーラ並の殺意を向けられたら、軽く死ねるほどの絶望を味わってしまうという面倒くささがついて回っているが。

「ななな、何言ってんすか急にい!?!」

「いや、それくらい魅力的って話なんだけうお」

上から降り注ぐ理不尽な武器の雨あられ。ザツクリザクザクという軽快な音を立てながら、グランの上から床と垂直になるように武器が降り注ぐ。トドメと言わんばかりに、上からウロボロスが降ってきて押し潰す。

「ちよ!?! 団長!?!」

「ああうん大丈夫大丈夫、生きてる生きてる」

「え、生きてんすかそれ!?!」

「ギリギリ生きてる。ファランクスとかで生き延びてる」

「ファランクス凄いつすね!!」

70%カットしても確定で死んでそうな事になっているが、ファアラ

はもう突っ込む気にもなれなかった。

瓦礫の山から生えるかのようにグランの腕が出てきて、ダンボール箱を探してお便りを取り出す。

「じゃあお便り読み上げていこうか」

「え、そのままやるんすか?!」

「あ、確かに今のままだと読めないな……ちよつと待つて今出るから」  
何事も無かったかのように、グランは武器の山を掻き分けて出てくる。出血もまるでしておらず。よくある武器の形をした玩具だったのではないだろうか……とファラは思考を放棄した。というか、しないとやっていけないと直感で感じ取っていたのだ。

「はいはいー通目……カタリナさん以外からは、剣を教えて貰ってますか?」

「ししよーつすね!!」

「確かヨダルラーハに教えて貰ってたよね」

「はいっす!!」

グランも後から知ったことだったが、どうやらファラとヨダルラーハはいつの間やら師弟関係となっていて、それなりに剣の教えをしてもらっていたようだった。

とは言っても、ヨダルラーハレベルになると教えも上手いのか最近はかなり腕が上達してきているが。

「団長は師匠に教えて貰ったんすか?」

「いや、剣自体は独学だったよ。俺が教わったのは……せいぜい極意とかくらいかな」

「仲間になった時点で、既に教えられることはないほどに強かったんすね」

「んー……いや、そうじゃないと思う」

「ほえ?どういう意味つすか?」

ファラが不思議そうに聞くが、説明しづらいのかグランは考え込みながら言葉を発していく。

「んー……多分、だけど……独学が過ぎた、とかじゃないかなあ……」

「………と言うと?」

「うーん……ファラってさ、ランスロットの剣術とジークフリートの剣術は一緒だと思うか？」

「ランスロット卿は二刀流の手数主体、それと違ってジークフリート卿の剣術は一撃特化のように思えるっす」

ジークフリートは、あの一本で手数を表現し始めるからこそ恐ろしいのだが、今言いたいのはそういうことではないので割愛をする。要するに『剣術の違い』というものを言いたかったのだ。グランは。

「まあヨダルラーハの剣術と、俺が独学で学んだ剣術はお互いに違ってるものだったって事だよ」

「……うーん」

「……説明ムズいんだよ、俺だって」

「いや、言いたいことは理解してるっす。カタリナ先輩がジークフリート卿から剣術を教わっても、違いが大きすぎて教えにならない……みたいな話っすよね」

「ああうん、まあそんな感じ……ってあれ？今何が疑問だったの？」

「いや……そもそも团长はある意味で模倣の達人みたいな所あるから、剣術が違うから……みたいなこと言われてもピンと来なかったっす」

自分の得意分野である趣味の圧倒的追求力。それがまさか、こういった所で足を引く張るとは思ってもみなかったグラン。確かに、二刀流使うジョブとかあれば自分はそれを学んでいるのかもしれない。「そもそも手数の話をするなら、前に言ってた剣豪や侍がそうじゃないっすか」

「あ、ほんとだ」

一体何回コロツサスマグナに奥義を打ち込んだだろう。最早見慣れた景色レベルまである。閑話休題。

「まあ……团长はあんまりにも趣味で色々しすぎているからこそ、教えられなかったのかもしれないっすね。固定観念が着きそうな気がするっす」

「そうかな……そうかも……」

そういつた事にしておいた2人。時間が推しているのでさっさと

2通目に行こうとしてお便りを取り出す。

「2通目『カタリナさんに向けているのはLove?それともlike?..』」

「どういう意味っすか!？」

「恋愛か友愛かということじゃないかな」

「ふふん、そういうことならLove一択っす!!」

『それは絶対ない』と心の中で断言するグラン。Loveだと言いつ張るならば、最低ユエルやソシエのクラスにまで登り詰めなければならぬ。そのクラスに行くためには、まだフアラには経験値が足りていなかった。

「はい答えが出たので三通目に行こう」

「もつと会話を広げて欲しいっす!!」

「いやこれ以上この話題続けたくないし」

「何でっすか!？」

「え、何?後ろにいるヴィーラに刺し殺されたいの?」

「三通目行くっす!!」

先程から負の念を送り続けているヴィーラ。なぜだか負のオーラを感じとってしまったので、グランには恐怖の対象でしかない。

フアラにもそれを感じてもらえて何よりである。

「三通目『団内で「あー、自分でも意外だな」と思える尊敬出来る人物を上げてください』」

「ローアインっすね」

「本当に意外なチョイス:どして?」

「いやあ、よくめげないなってところがっすね」

「なるほど」

撃沈回数が光の速さで増えていっている、という噂を持つローアイン。しかしそれでもめげずに、ひたすらに策を練っては告白を繰り返して続けた。確かに、あのガッツは見習うべきものがあるだろう。「まあそれ以外は料理の腕くらいなだけで……あんまり尊敬できなくてわけじゃないっすけどね」

「酷い言われ様だ…」

「そもそも頭の中の妄想で、女性を機械化させるって割とどうなんっすか」

「フアラちゃんそれ言っちゃあいけないやつう」

果たしてキャタピラの事なのだろうか、それともメカヴィーラの事なのだろうか。どうでもいい話題だが、そこだけを追求めたくなつたグランだった。

「……これ最後急ぎ足になつちやつたな」

「まあ時間がないんで仕方ないっすよ」

「……まあというわけで、今日の団長相談室は終わりです。ご視聴ありがとうございますございました」

そう言つてからカメラの電源を切るグラン。切つた後に、フアラと一緒に部屋から出ていく。

「そう言えばさ、フアラつて白と青好きだよね」

「突然なんすか」

「いや、鎧は青色だけど普通の服とか着てる時つて白色多いなあつて」

「そうっすか？」

「今もそうだけど……水着とかさ」

歩きながら、他愛のない話をしていくグラン。フアラは楽しそうに話を続けていくが、ふと何かを思い出したかのようにフアラがピタツと止まる。

「フアラ？」

「忘れてたっす!!今から先輩と一緒に修行っす!というわけで団長、また後でっす!!」

そのまま一瞬で走り抜けるフアラ。1人置いてけぼりにされたグランだったが、まあ今日はフアラの脇が何度も見れたのでよしとした。何がよしなのかは分からないが、良しとしていた。

「じゃあ逮捕ですね」

「ねえリーシャさん、さすがにそれはキツくない？」

「秩序の為です」

「秩序のためかあ…ならしようがないなあ…」

「というか本当に脇だけ見てたんですか？」



突然現れては手錠をかけるリーシャ。別段、グランは手錠をかけることは何ら気にしないのだが、リーシャのふとした質問は答えずに顔を逸らしていた。

「……団長さん、素直に答えてください。さすがに本気でしばきますよ」

「え、俺しばかれるの？」

「はい、シヴァかれます」

「あ、発音的にやばいやつそう」

「シヴァさんに焼かれるのと、サラーサさんにホームランされるのとどっちが好みですか？」

「流石にどっちも本気で痛いからやめて欲しいかな……」

痛いで済むのか、とリーシャは呆れ顔だがこの2人のコントを聞かされている周りの部屋の住人達は、なんだコイツらと疑問顔にもなっていた。

「あ、そうだ」

「なんですか唐突に」

「今日の晩飯アマツタケにしよう、フアラ見てて思い出した」

「団長さんの出費ですか？」

「……団の出費に」

「出来ると思ってるんですか？」

「デスヨネエ……」

アマツタケは高級食材である。主に繁殖している島の住人の民度があるのだが、それでも高級食材である。食材の味だけは嘘をつかないのだ。値段はぼったくり価格だが。

しかし、それを団1つで補おうとすると当たり前だがとんでもない出費となるだろう。

「……やっぱリーイノシシ鍋で……」

「出費はどうするんですか？」

「……狩ってきます」

こんなやり取りをしながらも、本日のご飯のためにグランサイファーは秋の味覚が素晴らしく美味しいであろう島に向かうので

あつた。

スウィンガートリオ、マジパネーション？

「今日のゲストはなんと3人」

「ちいーつす、エルセムでーす」

「ういーつす、トモイでーす」

「うえーい、ローアインでーす」

少し茶色がかった肌の色、そして金髪銀髪となっている3人組。ローアイン、エルセム、トモイ…3人合わせてチームローアインである。

いつもは1人なのにも関わらず、何故か今回は3人組である。その理由だが……

「えー、団長権限によりこの3人は揃ってないとなんか会話1／3位の内容で終わりそうだと思ったので3人にしました」

「ちよ、ダンチョ酷くね？」

「いや実際君ら3人の魅力って、君らの独特な話し方と3人いる時のテンションの上がり方だし」

「……あれ？もしかして結構褒めちぎられてるパティーン？」

「マジで？」

「マジで」

「やっぱダンチョ素敵だわ男だわ。俺ら一生ついていくわ」

感動しているのか、真面目な顔でウンウン頷いているローアイン。それに釣られてかエルセムとトモイも頷いていた。

「まあ、ローアインはファラと一緒に専らキッチン仕事させてるけど…なんかキッチンに不満ある？」

「あー、火力がちよーっとデンジャラスな時あるっすわ」

「え、マジで？そんな危険なことになってんの？」

「なんつーか…ココ最近、グラサイめちゃんこボロボロになってる弊害っていうか…0か100しかねえピーキーな火力つつうか」

「やばいな…外装とかエンジンに負担かけすぎて気づかなかつた…1回グランサイファアガチで修理しないといけないか……」

よく考えなくても、サンダルフォンの時の災厄や天国の門への到

達、そしてつい最近決着の着いたベリアルの時なども含めて、グランサイファアは幾度となく修理と改修を尾施されていた。

しかし、その際に1番被害の大きかったエンジンや外装にばかり手をつけていたせいで、他の部分に手が回ってないことも多かったという。

「それでも、クツキングできるんで問題はまあねえんすけどね」

「いやいやいや……大問題だわ。言ってくれてありがと、修理費出さないとな……」

グランは大真面目な顔でメモしておく。後でラカムに伝えるためでもある。

ローアイン達はそんな彼の様子を見て、真面目な顔をしていた。メモを書き終えた時、グランは3人が見ていることに気づいて首を傾げていた。

「…どしたの？」

「いや、やっぱりダンチョは器でかいわ」

「マジそれな、俺ら言わなかったのが悪いのに感謝されたし」

「いやいや、そこで感謝以外何が出るの？」

「つべえよ、マジやべえよ。これ俺女だったらまず惚れてたわ」

「「分かるー」」

なんのことだが分からずに更に首を傾げるグラン。ローアイン達も、グランがそれを天然で行っていることを知って、さらに尊敬を抱いていた。

「元々はシア、キャタリナさんのためにグラサイ乗ろうと思ってたけどオ……いい人ばっかでマジバビツたのよ」

「分かるわ、そんな中でもダンチョは1番聖人」

「マジそれな」

「聖人って……そんな俺人に好かれるような事したかな」

「ダウト」

「ダウター」

「ダウテスト」

「え、なにそれお前ら息びったりかよ」

ローアイン達が1人ずつビシビシとグランに指をさしていく。幼馴染で腐れ縁だと聞いているので、長い間つるんでいたらここまでの連携プレイを出すことが出来るのだろうか、とグランはしみじみ思っていた。

「まあ？ダンチョとビイさん並には一緒にいると思いますし？」

「…確かに俺とビイも結構以心伝心してる時あるかも…」

「まあ2人の絆はやべえってのは知ってるけど、さすがに絆では負けたくないっすわ俺ら」

「多分一番仲いいよねグランサイファアの中で」

何せ、K・B・S・Nなる技を使ってくるのだ。しかし、ここまでイケメンで料理ができて他人を思いやることができるにも関わらず、何故か彼らはモテない。

理由は前述の騎馬戦だろうと、グランは笑顔の裏でそう考えていた。というか、それが理由なのは明白なのだが何故か気づいていないようなのだ。

「そう言えばカタリナにアプローチ続けて、今何回目？」

「この間でえ…万超えたっすよ」

「だはっ！桁を盛るんじゃねえよ桁を！」

「おめー1日何回アタックしねえと万超えるか分かってんのか」

「は？ンなもん100回以上アタックすれば簡単じゃん」

「え、マジで？100回でいいの？」

3人のお馴染みの漫才が目の前で繰り広げられていた。グランはそれを見ながら、苦笑を漏らしていたがふと思いついたかのようにダンボールを取り出す。

「お、いつもの出しちやいますパティーン？」

「そうそう、そろそろお便り読んでいかないとね…時間がね…とい  
うわけで1通目『何故ノイシユさんは無事だと思えます？』」

「それ俺らに聞く？」

「ダンチョ、それ混じったやつじゃね？」

「……いや、これローアイン達宛だよ」

「マジで？それ書いた人答えられるってなんで思ったんすかね」

「さあ…？」

ノイシュ：彼らと絡んだことがない、という訳では無いが彼らよりは、ヘルエスやセルエルの2人の方がまだ答えられるだろう。

アイルスト王国側の人間のはずなのに、特に料理という観点でしか絡まないのに何故送られてきたのか。

「無事つてえと……」

「あれでしょ、刺激物に対する耐性の高さでしょ」

「だよね……」

ノイシュは、どんな料理でも基本的に美味しいと言ってくれる。そう、たとえそれがカタリナの用意した料理であっても、本当に心の底から美味しそうに食べるのだ。それで腹を下したこともないので、彼の胃袋の丈夫さは事情を知っているものからすれば、恐らく人類1だろう。

「ヴィーラちゃんですら、倒れる時は1発のものを本当に美味そうに食べてくれるっすからねえ」

「あれほんと謎」

「ヘルエスも言ってたなあ…毒味役として凄く役に立てないって…」

カタリナの料理を美味いと言えるのなら、当然それと同等の刺激物も彼ならば美味しく頂けるということである。アイルスト王国の騎士だった彼だが、そこ以外はほぼ完璧と言っても差し支えない。

逆に言えば、そこに関してはまず任せられないということになる。

「……まあ、バレンタインの時なんかは皆頼ってるけどね」

「キヤタリナさんのチョコ…食べてるからなあ…」

ローアイン達もウンウンと頷いているが、結局の所何故彼があそこまでの味覚音痴なのかは…考えない方がいい案件な気もすると、この場の4人はそう感じとっていた。

「次行こう」

「ウェーイー！」

「2通目『3人の好みの女性は何ですか?』」

「無論キヤタリナさん」

この手の質問において、ローアインは既に心に決めた人がいるの

だ。まず、迷うことなくカタリナを彼は宣言するだろう。

「んー…フリーちゃん」

「ゆぐゆぐー」

少し言い淀んでいたが、エルセムとトモイも同じく答える。グランは知らないが、フリーちゃんとは帝国にいる宰相であるフリーシアのことであり、ゆぐゆぐとは星晶獣ユグドラシルの事である。

「フリーちゃんって?」

「あー、ほらあの、帝国宰相の」

「ああ、フリーシア…：帝国の人だけどあの綺麗だよね」

「おっと?もしかしてダンチョの好みもフリーちゃんパティーン?」

「あはは、綺麗だけど恋愛対象かどうかはわからないや」

グランは笑ったが、まあ好みのタイプという反応でもなかったのでローアイン達は同じように笑って、その場を誤魔化す。というか、下手なことを言ってしまうとグラン自身の身が危ないことを皆知っているのだ。

「ゆぐゆぐって、ユグドラシルの事?」

「そうっす」

「……可愛いよね」

「D○感」

ユグドラシルは可愛い。ルリアの中にいることが多いが、一度姿を表した時に時折彼女は笑顔を見せるのだ。星晶獣とはいえ、女の子らしい趣味を持っていると言っても間違いではないので、グランサイファーでもかなり人気の高い女子である。

「エルっち、1回ゆぐゆぐとデカさ一緒になったとかって妄想してたんすよ」

「そうそう、ギガントエルセムとか言ったロボット」

「え、彼女機械関係苦手だよ?」

「……は?」

このことを3人は知らなかったのか、グランのぽつりと言った一言に目を見開いていた。

そう、ユグドラシルは機械が苦手なのだ。自然豊かなルーマシーに

いる星晶獣のためか、自然豊かな環境を好みこそすれ、人が多く発展した産業などが多い環境を、彼女は好んでいなかった。

真逆の位置にあるものなので、当たり前といえれば当たり前かもしれないが。

「おいおいおい……まさかの速報だぞコレ！」

「おいおい……これは悲しい事実だわ……」

「……ゆぐゆぐ……」

悲観する3人だが、別に巨大化しなくてもユグドラシルとは一緒にいられるのだ。そもそも、星晶獣に取って大きさというものはあまり意味をなさないものらしいからだ。

事実、その身の大きさを変えているのも何人かいるためである。

「フーちゃんも……そういうのあんのかな……」

「あ、トモちゃん病み始めた」

「つべえわ、病院案件再びだわ」

「病院？」

「トモちゃん、フーちゃんの事考える度に病んでんすよ」

「フーさん達と会った時とか、俺らですらドン引きだったし」

遠い目をするトモイだが、正直時間もまともにならないので仕方ない話だがグランは3通目に移行……しようとした時。突然ドアがノックされる。

「ん、あれ？今撮影中なんだけど……誰ですかー……」

グランが席を立てて扉の前に行く。途中まで目で追っていたローアイン達だが、ふと視線を窓の方に移すと……何故かシュヴァリエがふよふよと浮いていた。窓の外に。

「……あれ、ヴィーラちゃんの……」

「ぱひっ！」

シュヴァリエを見つけた瞬間に、グランが素っ頓狂な声を上げる。瞬間的に視線を後ろに移すローアイン達。

そこでは何故かグランをお姫様抱っこしているヴィーラが立っていた。

「ちよ、ちよちよっ!？」



「な、なんでヴィーラちゃんがここに!？」

「俺らなんか余計な事言った!？」

「いえ、ただ……居場所がわかってる分やりやすい……いえ、殺りやすいと思ひまして」

言い換えられているが、発音的には何ら変わりのない言葉。しかし、ローアイン達はその言葉にある殺意を明確に感じていた。そして、それが当たり前のように自分たちに向けられていることも、理解していた。

「言い換えられてないのに言い換えられているパティーンだわ!!」

「殺意溢れてるわ!!」

「俺……最近油っこいもの、駄目なんだよね……」

遠い目をするトモイ。この状況が、彼が現実逃避をするには十分なほどえげつない状況だというのは理解出来ていた。その現実逃避も、無駄な話なのだが。

「なんで今それを——」

シユヴァリエがカメラの前まで行き、向きを変える。ローアイン達を映さないようにして、窓の外だけを映す様にする。

しかし、その綺麗な青空とは裏腹に画面の外では赤黒い現場が繰り広げられていた。

「「ぎゃー!!!」」

ローアイン達の悲鳴がこだまする。何が悪かったのか、何が行けなかったのか。今回三通目まで行けてないのだけどそれでいいのだろうか。

と、色々突っ込みたいことは山ほどあるのだが、しかし外に向けられたカメラはヴィーラの手によってoffにされて、そのままグランはヴィーラに持ち運ばれていき、ローアイン達はその場に放置されているのであった。

その構図は、さながら選択肢を間違えた結果の死亡……つまりは、物語で言うところのBAD END。

因みに、グランはちゃんとヴィーラの手によって団長室に運ばれて行ったのであった。ローアイン達も、きちんとメタノイアをかけられ

たのであった。

## 料理対決

「さあ始まりました、グランサイファー団内料理対決。実況は私グランと解説にビイさんをお迎えしております」

「なあ、これってなんの」

「まずは選手の紹介を致しましょう、NO・1 ヴィーラ選手です。真剣な表情をしていますね、専用のエプロンを纏っていることからそのやる気が伺えます」

突如始まった謎の料理対決。ビイは理由も説明されずに連れてこられたため、グランに大して説明を求めようとするがグランはその言葉を遮って、選手の説明に入り始める。

「なあ、話を」

「NO・2 ローアイン選手です。本日はトモイさんとエルセムさんを連れてこずに、1人で戦うと言った所存でございます。大会開始前に言った一言は『ダチは巻き込めない』でした」

「おい」

「NO・3 ファアラ選手です。いつもの鎧姿ではなく、ノースリーブの上からエプロンを羽織っています。その姿はさながら、配給のおぼちゃんの格好です。ギャップが可愛いですね」

ここで一旦、グランが黙った。ようやく話を聞いてくれるのかと思ったビイだったが、真っ青になって冷や汗で襟元を濡らしているグランを見た瞬間に、言葉を失っていた。

「……そして、最終NO・……カタリナ選手です」

「なんで姐さんが参加してんだア!？」

「料理と言ったらこの人、この人と言ったら料理。彼女から料理を抜けば剣の腕だけが残ります」

「じゃあ剣の腕で戦って欲しかったぜ……」

呆れたかのような表情をするビイ。自分にも被害が及ぶ可能性を考慮したが、既に逃げられないことを悟ってしまったためその現実から必死に目を背けていた。

「ルールの説明をします。今から4人には、それぞれ料理を作ってい

たきます。

そして、それらの料理を作った選手以外が食べ、そして1番美味しいと思った選手の札をあげる仕組みです。それで1番標数の多かった選手の優勝となります」

「……そのルールだと同数になった時とかどう済んだよ」

「いい質問ですね解説のビィさん。しかし、その問題は既に解決しているのです。

因みに、料理を作る順番はもうクジで決定致しました。ここにボードを張り出します」

グランの取り出したボードに、それぞれ料理を作る順序が書かれていた。1番カタリナ、2番ローアイン、3番ヴィーラ、4番フアラ……の順となっていた。

「……おい、姐さんが1番って……」

「さて、作ってもらいましょう。まずはカタリナ選手、調理お願い致します」

「おいおい、大丈夫かよ……というか、ほんとに発端はなんなんだ？」

「……実はな——」

「——グランサイファーで1番料理が上手い人物は、誰なんだろうな？」

「キヤタリナさん？どうしたんすか急に」

「そうっすよ、珍しいっすね。先輩がそんなこと言うなんて」

「ああいや……ふと気になっただけなんだ。忘れてくれ」

今から約2日ほど前、突然カタリナがそんなことを言い始めた。その時、キッチンにいたローアインとファアラが物珍しそうに、カタリナを見ていた。

「なんか気になることでもあったんすか？」

「この団には料理上手がたくさんいるだろう？しかし、よく考えてみたら全員が納得するような味を作れるものばかりだから、1番があるのなら知ってみたいと思ったんだ」

「……そう言えば……」

「考えたこと無かったつすね。実際どうなんすかね」

ローアインとファアラは顔を見合わせる。あまり考えたこともなかったが、良く考えればそういった事を今まで思いつかなかつたのが不思議である。

「だったら、ダンチョに相談して料理対決とかしてみるのは良さそうつすね」

「おお、それは名案だな。よし、ならば私も参加しよう」

「えっ」

「という事なんだ」

「悪い、オイラには一切理解できなかったぜ。というか、開かなかつたらしいだけの話じゃ無かつたのか？」

「いや、俺が聞いた話の時は料理対決するからの事しか聞かなかつた。後からカタリナが参加することを知った」

「おいおい……参加メンバーくらい聞いておこうぜえ？」

「普通回避したと思うだろうが……」

「つーかよう、そういう話だったら……」

ビィはヴィーラに目を向ける。そう、今の話ではヴィーラは一切出てなかったのだ。なのに何故参加することになっているのだろうか。「ああうん……ダメもとでカタリナも出るって言ったら……出場決めてくれたよ」

「ああ……」

「……因みに、カタリナの作った料理は残りの3人が食べる訳だが、参考で俺も食べることにした」

「何でそんなことになったよオ……」

「……団長だし、さ。さすがに団員が自分から毒を食べに行ってるのに、俺一人が食べない訳には行かないだろう？」

遠い目をしながら、グランはそう語る。ビィは呆れながら選手達の様子を目で追うが、カタリナ以外全員がもれなくグランと同じように遠い目をしていた。

「……さて、カタリナ選手が料理を作っている中で他の選手達の意気込みを聞いてみましょう。」

ヴィーラさん、やる気はどうですか？」

「……そうですね、2日あれば問題ないと思います」

「おいおい、食べてから2日の間昏倒してるじゃねえか……」

ヴィーラのコメントに、ビィが突っ込む。しかし、いつもならば睨みつけるはずのヴィーラも、この時はビィにむける意識すらないのかわただ小さく優しい笑みで微笑んでいるだけだった。

「なるほど、どうやら自信満々みたいですね」

「今のコメントからやる気を感じられるなんて、お前どうかしてるぜ」「ありがとうございます。では次はフアラ選手に聞いてみましょう。フアラ選手、意気込みの方や如何に？」

「そうっすね……こっちも2日あれば……いや、1日半でいけるっす」「何で微妙に張り合ってたよ……それでも1日は昏倒してるじゃねえか……」

ビーがまたもや突っ込むが、フアラもまた気にしていなかった。カ  
タリナが料理を作っている間、フアラはどうして空は青いのかを考え  
始めていた。

「お二人共、やる気に満ちあふれついるコメントありがとうございます  
です。では最後にローアイン選手、やる気はどうですか？」

「ポジティブ思考すぎるな……」

「そうっすねえ……俺のマジ硬キング胃袋がどこまで持つか……それが  
分かれ目っすねえ。俺も、他の2人と同様に……イヤ、半日で復活して  
みせますよ」

「なるほど……素晴らしいコメントありがとうございます」

「今のを素晴らしいと言えるお前の脳みそはちゃんと機能してんのか  
？」

ローアインは覚悟を決めた目をしていた。それは、彼が（妄想の中  
で）マツチヨを狩る時と同じを目をしていた。グランはその覚悟を、  
きっちりと感じとっていた。

「ていうかよお、自然治癒で直す気なのかあ？」

「例えすぐさまメタノイアをかけたとしても、直ぐにまた気絶させら  
れるのは目に見えているからな。だったら、自然治癒に任せた方が治  
りやすいと踏んだ迄さ！」

「何でそんなにキメてんだよ……」

もう何度呆れたことだろうか、ビーは最早自分が何回呆れたのかを  
数える程には呆れているような気がしていた。

しかし、ふと思ったことがあった。それは、『何故自分がここにいる  
か』という事である。

「なあグラン、オイラは何したらいいんだ？」

「終わった時に、こっさり助っ人呼んできてくれ。さすがに4人も倒  
れて、いざと言う時に船が傾いて、いい感じに落ちる可能性があるか  
ら」

「ああ……てつきりそんなことだろうと思ったぜ……呼ぶのは誰でもい  
いのかあ？」

「出来れば二人以上を同時に担げる人が好ましいかな……その方が人数

割かなくて便利だしさ……」

出来れば筋肉がある人が好ましいと、グランは付け足す。理想的な案としては、ファステイバが彼は1番理想的だと考えていた。しかし、そのファステイバは今日はいない。

「ファステイバが1番よかつたんだけどな……」

「今日いねえのかあ？」

「カジノに行ってるよ……今日はデュエルの当番らしいからさ、少なくとも明日まで帰ってこない」

「じゃあ他のドラフに任せるしかねえんだなあ……」

幸い、ドラフの男性はみな筋肉質で力持ちである。そしてこの団にも、いっぱいドラフの男性はいるので、助っ人には困らない……と考えていた。

「……あれ？」

「どうしたあ？」

「バザラガは組織メンバーで仕事、アギエルバも仕事……その他の男性ドラフ達皆今日は依頼や、個人の用事でいない可能性がでてきた」

「ええ……」

グランは真顔のまま内心とんでもなく焦っていた。しかし、ビィが何とかしてくれるだろうと直ぐに思考を切りかえた。今日の彼は、最早諦めが早い性格なのではないかと疑うほどに、切り替えが早くなっていた。

「さて、そうこうしている間に料理が完成しそうですね」

「早すぎねえか？」

「さて、カタリナ選手……改めてお聞きしますが……何を作っていらっしやるのでしょうか」

「そうだな……今回はあえてシンプルにオムレツを作ってみた。卵と、塩コショウという最低限だけで勝負を挑もう」

そういうカタリナの作っているオムレツだが、色が水色だった。それも、鮮やかな水色ではなく、何やら紫色の煙を発している毒々しい水色だった。

「姐さん……ほんとにそれその3つだけなのか？」



「ああ、卵も高いものだが……市販のものを使っている。何か、まずかつただろうか？」

きつとまずいのは料理だけでは？なんてツツコミは野暮だろう。カタリナは市販のチョコが、何故か劇的に不味くなる才能の持ち主なのだ。普通の卵が変色するくらいよくあることだろう。

「おい、あれほんとに食う気かあ？」

「何をゲホツ…言う、ゲホツゲホツ…実に刺激的な見た目と、香りゲホツではないか…ゴホツ… ヴ… ゲホツゴホツゴホツ…」

「目を真っ赤に充血させながら、咳き込みまくってるせいでまるで説得力がねえぜ……」

そして、人数分のオムレツが出来上がり……それぞれの席へと置かれていく。

既に皆死にかけの表情である。

「へヴンみえらあ……」

「私…これを食べ切れたら、団で白いモフモフの犬を飼いたいと思いました…」

「それ、死亡フラグつすよ……」

「では、いただきます」

「いただきます」

そして、全員が全く一緒のタイミングでカタリナオムレツを口に入れる。瞬間、訪れたのは——色とりどりとなった視界だった。グランの視界は歪み、色々な色へと変色していく。

自分の体が溶けていき、この空へと一体化するかのような感覚も味わっていく。この感覚をもって、ルリアは大丈夫かとふと考えたが…そもそもよく考えたらカタリナの料理を食べれる人材だった。

意識は飛んで、ありとあらゆる可能性を見て行つた。それが現実なのかはたまたま走馬灯なのか。ただの妄想なのか現実逃避なのか。誰にも分からなかったが、ただ1人……グランだけはとある境地へと至った。

世界の仕組み、それを理解したような気分になった…グランは麻薬もびつくりの境地へと至ったのであった。

「あれ、ここは…」

グランは再び訪れていた。バレンタインの時にそういえばここ来たなあとか思いながら、川の石を積んでは崩して積んでは崩して……それをただ繰り返していき、復活までの暇つぶしを行うのであった。

天稟の射手、快樂の先、行ってみたい？

「いつも貴方のすぐ側に、何だかんだいつも落ちた俺を助けてくれる救世主ことメーテラさんがゲストです」

「はあい、メーテラだよ」

そう言いながら、胸を強調させつつ投げキッスをするメーテラ。さすがに良い子の性癖がねじ曲がる可能性があるもので、これ以上はグラんがさせなかつたが。

「実は存外意外なんだよね」

「は？何が？」

「いや、メーテラってこういうの面倒くさがるもんだと思ってたから」  
基本的に、メーテラという女性は彼女自身が面倒臭いと思つたことは、絶対にやらない性格である。そう考えると、グランが落下した時のために下に待機させられるのを彼女が良しとしているのもまた意外である。

「……まあ、あんたの為って言うだけよ。あんたじゃなかったらやらないわ」

「……」

その言葉に対して、グランは真面目な顔で思考し始める。その言葉の意味を、ちゃんと理解するために思考を繰り返していく。

「何よ」

「それが本音かどうか、考えてる」

「あんた鈍くない？」

「そもそもカリオストロとか、メーテラみたいな性格の女性達が『団長大好き！』をした直後に『冗談だよ』ってやらされすぎてるから、単純に信頼の問題だと思う」

「……」

メーテラは申し訳無きそうに首を背けていた。そう、たとえ本当に心の底から好きだとしても、それを普段冗談で使っていたらその類に關しては信用がなくなるのは彼女も理解しているのだ。

「…いや待って、カリオストロがあんたに好きって言ったの？」

「猫被ってたら大体そんな事言ってるぞ」

「じゃあ猫かぶってないときは？」

「……」

顔を背けるグラン。猫を被っている時のカリオストロの『好き』は信用していないが、猫を被っていない時の彼女の反応は…彼にとつては珍しくて案外信用出来ているのかもしれない。

「あちゃあ…アタシも普段猫被つとくべきだったか……」

「いやいや、メーテラはそれが魅力だから」

「は？じゃああんた本気でアタシに興味ないの？」

「少なくとも暇だから『いい男居ないかなあ』とか言つてて特定の異性を愛してるって効かないと思う」

「……あー、うん…確かにそうだわ……ごめん、それに関してはあんた何も間違つてないわ」

顔を抑えるメーテラ。さすがに照れ隠しなのか、顔が真っ赤になっていることがグランでも理解出来ていた。

そして、グランその間にダンボールを取り出してお便りを探し始める。

「それ、いつものお便り箱よね」

「そうそう、何かこういう質問とか来そうだなあつてのある？」

「……何でアタシが天才で美しいのか、とかありそうよねえ」

「実際にあると思うけどね……スーテラ辺りから送られてきそう」

「……あの子、本気で送ってそうだわ」

スーテラとは、メーテラの妹である。メーテラとはほぼ真逆と言ってもいいほどの性格をしているが、スーテラはメーテラに心酔していると言ってもいいレベルなので、偶にメーテラですら怯ませることがある。天然は強し。

「さて、それじゃあ一通目行ってみよう。『何故いつもあんな服きてるんですか』」

「動きやすいからに決まってるじゃない」

「解決!!って訳にも行かない……スカートとか履かないの？」

グランの質問に対して、メーテラは髪を弄りながら答えていく。枝

毛を見つけたのか、ちよつとしかめつ面になっていた。

「一時期は履いてたわよ？それこそスーテラやアステールみたいだね」

「じゃあなんで今は履いてないの？」

「邪魔だったのよ、空飛ぶ時に」

「…邪魔？」

邪魔、というのがイマイチ理解できないグラン。空を飛ぶのに、どうしてスカートが邪魔になりうるのか。

「スカートってさあ、下から風吹いたりするとめくれるのよねえ。アステールみたいな服だったら、もうやばかったわ絶対」

「アステール…がふっ」

「アステールで妄想したら殺す」

「イエスアイマム……」

魔導弓で腹を殴られながらも、グランは少し抑えながら話す程度だった。何だかんだ、妹達が好きなので不埒な妄想をしたら流石に理解してしまうようだった。

「……後、五月蠅い」

「何が？」

「下にいる奴らが」

グランはすぐには理解できなかったが、空を飛んでいる時の話だというのを少ししてから理解した。

そう、スカートで空を飛べば当然下にいる人達が気づいてこぞいて覗こうとするだろう。

「ああなるほど……で、結局今みたいな格好になったってわけ」

「ちよつと肌寒いけどねえ」

「ズボン…というかパンツ履く気は？」

「いやよ、デザインはいいの多いかもしれないけど…動き易いの選びたいし」

どうやらお気に召していなかったようだ。まあ、短パンなどを履かずにいる時点でそういった類のものを身に付ける気は無い、というのは分かりきっていた話なのだが。

「じゃあ2つ目…『いつから空飛べるようになってたんですか』」

「気づいたら」

「ええ……」

「だってアタシ天才だし？なんか『飛べる気がする』とか思ったら飛んでたって感じ？」

自分のことを棚に上げるが、事実自分一人の力で宙を浮遊することが出来るのは限られたものの特権である。それこそ、全空に名を轟かせている十天衆並でないで行えない芸当なのだ。

この団にも自分の力だけで飛べる人物が何人かいるが、その誰しもが団内でも有数の実力者である。

「まあ、メーテラって確かに天才だもんねえ」

「まあ、スーテラもかなりの天才よ。アタシが規格外すぎるだけで」

この流れで唐突にスーテラを褒める。スーテラの事はなんだかんだ言っているが、仲がいいのはご愛嬌である。本人は口では否定しているが、態度でバレバレである。

「規格外の天才だよねえ、ほんと。自由奔放だけど」

「アタシを押しさえつきたいなら、それだけの価値をアタシに示して欲しいわ。村のしきたりとか、アタシを抑えるには魅力がまったく足りなかったけど」

「そう言えば、アステールのことはどう思ってるの？」

「え？アタシより劣るけどあの子も天才じゃない？」

身内にはかなり甘い判定の姉上。今この場で褒められている2人は、恐らく手を振り首を振り否定するかもしれないが、事実スーテラもアステールも弓の腕はかなり良い方である。アステールは、まだ小さいため弓ではなくボウガンを使用しているが。

「なるほどねえ……じゃあ三通目行こうか」

「何そのニヤケ笑い……いや、聞いたら藪蛇っぽいし何も聞かないけど……」

「『ソーンさんと関係はありますか？』」

「ソーン……ってああ、十天衆の……」

「あれ、もしかして関わったことない？」

ソーン、十天衆の内の一人だがメーテラと同じく弓使いである。そして、十天衆である以上その強さは折り紙付きであり、2人が折り紙付きの弓使いであることを考えれば、かわり合いがどこかで発生する……と考えていたのだが、そうではないらしい。

「関わったことないっていうか……アタシが避けてる」

「どうして」

「だってほら……何か、入りづらい雰囲気だし」

「……シルヴァと？」

「うん……というか、同じ弓使いの天才っただけでそこまで関わることもないと思うわ」

ソーンはシルヴァと仲がいいが、メーテラはどうやらその2人の中に入ることを拒んでいるらしい。シルヴァが苦手……という感じでもないため、本当に2人が放つ独特の雰囲気に入りづらくなっているだろう。

「そんなもんかな」

「そんなもんよ」

メーテラは呆れているかのように言い放つ。人との関わりを、彼女はあまり気にせずに行うのかと思いきや、そうではないようだった。

「なんていうか、距離感間違えてる感じの友達よねアレ」

「言いたいことは分かる」

『見た目がイチャイチャしすぎて』という話だが、おそらく本人達はそんな気は全くない……筈。グランはあくまでも予測しか出来ないもので、これ以上追求するのは難しいのだが。

「まあ、良くもあんだけイチャイチャ出来るもんだわ」

「羨ましい?..」

「は?..」

「いや、別にそういつた風に見える程仲良いのが羨ましいのかと」

「別に? スーテラとはいい感じの付き合い方出来てるし?..」

一切スーテラの話は出ていないが、やはりどこか仲良く出来ていないと思っっているのだろう。

2人が仲良くしていたら、グランは嬉しいのだ。普通の意味でも裏

の意味でも。

「まあ、ならそういうことしておくよ」

「はいはい……で？もう終わりなの？」

「そうだねえ……ちよつと早いけどもうそろそろ時間だし終わりにしようか」

「あつそ、ならアタシ帰るわ。後片付けよろしくねえ」

そう言いながら、メーテラはそのまま部屋を出ていく。ここまで付き合ってくれたのだから、グランは文句を言う気は起きなかった。

……だが、ふとメーテラの背中を見ると変な欲求が生まれてしまう。ユエルやソシエの尻尾を見たらモフりたくなるように、背中丸出しの格好を見ると、つつい指が伸びてイタズラをしてしまうのだ。

「えい」

「きやうんっ!？」

「ギルティ」

「ぎやふんっ」

グランが指を伸ばしてメーテラの背中に触る、メーテラが聞いたことないような高音を出す、リーシャが現れて鳩尾に右ストレートを入れる、グランが悶絶する。

まるで予め決められていたかのごとく、これら1連の動作が行われてしまった。

「さ、流石リーシャだ……的確な一撃を入れてくれる……」

「団長さん、セクハラダメ絶対」

「ふ……触りたくなるような背中をしていたから、ついね……」

「あ、アタシの魅力が凄すぎたってやつだわあ……!」

顔を真っ赤にしながら震えているメーテラ。流石に背中に触られるのには、慣れていないようだ。

「はい、ひとまずメーテラさんはこれを着てください」

「何これ」

「ジャージです」

「え、ダサっ」

「着ろ」



「…う、うん……」

そして、メーテラはメーテラでどこからともなくリーシャが取り出したジャージを着せられる。緑色だったが、リーシャの圧が凄かったので何故か断ることが出来なかった。

「……じゃあ、もう問題ないですよ」

「…じゃあ、アタシ部屋に戻るわ。アンタも無事に行きなさいよ」  
「ういっす」

その後、メーテラが部屋から出た後に謎の断末魔が聞こえてきたのだが……特に知りたいとも思わなかったので、そのままスルーして戻って行くのであった。

「姉様…？その格好はどうしたのですか？」

「何か、着せられた……」

道中、妹のスーテラと出会うメーテラ。スーテラは、いつもの露出度高めの格好をしているメーテラを見て、困惑の表情を浮かべていた。

頭からつま先まで目線を動かして、よりその困惑の表情を浮かべていた。

「随分と……露出が減りましたね」

「……もしかして、あの秩序の人それが目的……？」

今となつては聞くことが出来ないが、リーシャがこれをメーテラに着せたのはそれが目的だったのか……？とメーテラ自身がそう考えた。

しかし、後日それを脱いでいつもの服装にしても、特に何も言われなかった。メーテラはより困惑を深めるしかなかった。であった。

神箭の射手、お見せいたしませうか？

「今日はスーテラさんです」

「どうも、スーテラです」

キリツとパリツと。姉のメーテラとは違い、スーテラは真面目に自身の自己紹介を行う。しかし、これでも姉に心酔している辺り姉妹仲は本当に良好と言えよう。

「スーテラって真面目だけどさ」

「はい」

「ローアイン達に聞いたけど、懇親会やったんだよね。あの3人と、スーテラとコルワとラムレッダの3人で」

「そうですね……姉様に女子力を鍛えてこいと言われてきましたので」

「女子力……」

ここでグラン、ボケるか素直に話すかの2択を迫られていた。1つは女子力を何らかの『力』だというボケ、もう1つはまともなやり取りをするだけ。

考えていた時間は1秒にも満たないが、その思考の時間がグランにボケる機会を奪わせる。

「よく分からなかったのですが、姉様が言う通りならば私は強くなつたと思いますー！」

「おっと本格的に勘違いしてたよこの子」

「えっと……何か間違えていたでしようか？」

「女子力って、そんな何かの力とかじゃないんだけど……」

「なんと…!?!では、一体どのような力なのでしょうか」

「女子力っていうのは――」

女子力って……何だ？グランは笑顔のままそう思考した。そもそもグランは男である。女子力というものを、ふんわりとしか理解していないのだ。ファッションセンスや、おしゃれなどの『なんか女子っぽくて可愛いもの』としか認識していないのだ。

いや、グランですら理解していることをスーテラは理解していない

ので、相当な天然が入っているのだが…はつきり言って説明するならば、グランでは無く姉のメーテラやコルワなどに任せられた方が確実な気がしていた。

つまり、この場での回答はただ一つ。

「――俺に聞くより、メーテラやコルワに聞けば確実なものがわかるよ」

「なるほど…では後程姉様達から聞いてみます」

「それがいいと思うよ」

「コルワ殿といえは…あの人は色々な人と仲が良いのですね」

「まあファツションデザイナーだし…おしやれを気にする人だったら、多分大体の団員が話をつけてると思うよ。」

イルザでさえ、面識あるくらいだから…多分人と相談することも仕事としてあると思う」

「そのような事が…」

水着の1件で、イルザはコルワと知り合うことが出来た。というか最近、団の中でグランに聞けばどんな有名な団員として入団したか…と言ったことを聞けばわかると思っっている団員がちらほら居る。

実際、入団しているもの達で王族や騎士団などもいるために何も間違っではないのだが。

「さて、そろそろお便りに行きましょう。1通目『懇親会でギャップ萌えをされたってあったけどマジで何したの?』メーテラからです」

「姉様にはそのことを何度も聞かれました…」

「言ってないの?」

「と言うよりも、多分伝わっていないのだと思います」

「…どゆこと?」

「それが――」

度々出てくる懇親会。『どんなシチュエーションで恋人を作りたいか』という話題になったそう。その中で、メーテラはメーテラのように男を誘う…という事を伝えたそう。

それを妄想した一同は、ギャップ萌えという話題になった…という物である。因みに、メーテラのシチュエーションでは『男を逆ナンシ

て、狩りに誘う』というギャップ萌えの中に野性味を突っ込んだよく分からないものだった。

「逆ナンはスーテラがやると、良心が無くなる」

「へ？」

「あの村長さん、凄い顔になりそう」

村長とは、メーテラやスーテラがいた村の村長ことである。そこは外界とほとんど隔絶されており、スーテラはそこで村のしきたりとして守り人として仕事をしていたのだ。

そして、この村長はスーテラ達の父親であり…当然の事ながら真面目だと思っていた娘が男を誘って狩りに出る…などというよくわからないことを提案した暁には、恐らく頭を抱えることだろう。いや、これで頭を抱えない方がおかしい。

「大丈夫です！ちゃんと村の猪を狩れる実力は伴っています！」

そして、スーテラはこの返しである。天然さだけでいえば、メーテラすら啞然とするほどの天然っぷりなので、恐らく彼女達の父親もスーテラの勘違いやその他諸々のことを説明するのに時間を要するかもしれない。

「そういうことじゃないんだけど…」

「へ…？」

しかし、天然真面目キャラは可愛いのでグランはそれを眺めていたと思うようになった。単なる趣味である。

「さて、話題はこの程度にして次のお便りの紹介にいきましょうか」

「はい！楽しみです！」

「2通目は…『スーテラちゃん、好きなタイプはいるのかにやあ？』ラムレッダからです」

ラムレッダ、水色の髪が特徴的なドラフである。元シスター見習いなのだが、とある事情により酒にハマってしまったため教会を脱走…酒飲みのドラフだが、最近グランはクビを持ち出してきている時がある。

「好きなタイプ…団長殿のような人でしょうか」

「うわっ、素直に嬉しい…とは言うけど、あくまでも『俺のような』っ

て事でしょ？俺じゃないんだよなあ……」

「なるほど……これが唐変木と言うやつですか」

「はい？」

「いえ、姉様が団長殿は唐変木の人たらしと言っていましたので」

「メーテラに言われるのはなんか釈然としない……」

「それと……」

「ん？」

「同性愛者を疑ってました」

「事実無根の嘘だよそれ!!」

事実無根とは言っても、友人関係を超えているのではないか？と言わんばかりのスキンシップを行っているのは、グランの方である。偶にルナールが鼻血を出しているのも、それが基準となつている時がある。

「しかし、これだけ女性がいて……1人の恋人もできないというのはそう疑われてもしょうがないのでは？」

「言わないで欲しい」

「女性の気持ちに気づきにくいのも、異性に興味が無いからでは？」

「そんな事は無い」

「女性にセクハラするのは、本命の男性から自分を遠ざけるため……」

「待つて待つて……俺メンタル弱いからそれ以上スーテラに言われると死んじゃう……」

グランは椅子から転げ落ちて、床に突っ伏していた。冗談めいた感じで言われるよりも、真顔で淡々と言われ続ける方がどうやらメンタルに響くようである。

既に顔が真っ黒になっており、グランはこの世全てに絶望しているかのような表情になっていた。

「も、申し訳ございません……どうやら言い過ぎてしまったようです」

「許すけど心がびよんぴよんしない……赤き地平の世界にまで落ちる……」

「ええ……？」

困惑しきっているスーテラ。当たり前である。目の前で男が意味

不明なことを言いながら、自分の前で倒れているのだから。

「……」

「……あの？団長殿？何故私のことをじっと見ているのでしょうか？」

「……いや、もうちよつと前に移動してるあぁっ!？」

グランの目の前に突き刺さる剣。随分と見覚えのあるその剣は、秩序の騎空団のものだった。

結構な速度で飛んできて突き刺さったためか、揺らしながら独特の音を立てつつ剣は落ち着いていく。

「……DIE or DIE」

「その選択肢は死しかないぞリーシャさん」

ゆつくりと起き上がって、目の前に突き刺さった剣を抜いてから部屋の外にいるリーシャに返すグラン。その間、謎の言語を発しながらリーシャはグランを見ていた。睨みつける、というより目を見開いて観察していると言った方がぴったりの表現である。

「あ、あの今は……」

「気にするな、グランサイファーにたまに現れる秩序の精霊だ」

「随分と黒い殺気を放っていた精霊ですね……」

スーテラは、グランに精霊の定義を聞きたくなくなったところだったが……しかしあれに触れるのは何かの黒さが遺伝するような、そんな感じがしたので触れることは無かった。

「はい、というわけで三通目に行こうか」

「は、はい……」

既にリーシャはいなくなっているので、安心してグランは三通目に移行するのであった。

『もう少し自分のハッピーをまともに考えてもいいかもしれないわよ』 どう考えてもコルワだこれ」

「ハッピー……ですか」

「まあ、要するに結婚しないのって話だよね。コルワの話ってそういうのだし」

「私が幸せになる……少し、思いつきづらいですね」

「んー……守り人の仕事しすぎてるのかな。それで頭が硬くなってるんじゃない？」

アステールは、まだ小さいために恋に恋すると言った状態だが、スーテラは恋ということそのものを知らないために、メーテラに置き換えるくせが、少しばかりでているようにグランは感じ取っていた。「硬くなってる、ですか…」

「だって、何かにつけてスーテラはメーテラの話してるんだよ？気づいてた？」

「……いえ、私はそんなにしているつもりは」

「別に悪いことって言うてるわけじゃないよ。というか、仲良いところどんどん見せつけて欲しいんだ」

「それはまた…仲がいいのは、もちろんいい事だと思います。私も姉様と仲良くしたいですし」

「……とまあ、話ズレちゃってるけど…」

グランが、ズレた話を戻すために一旦区切る。ハッピーというのが、人によつて変わってくる定義なため、コルワの定義を使つて考えるがやはり思いつかないようだった。

「恋、というのが何度説明されても私には理解できなくて…」

「まあ、気持ち的な問題だしね」

恋をたとえ今スーテラがしていたとしても、恐らく気づいていないだろう。姉であるメーテラや、妹分のアステールなどを優先する事が多い…というか、スーテラが他人を尊重しすぎる性格なのも相まつて、自分のことは特におざなりになってしまうのだ。

「申し訳ありませんが、私にはその質問は答えられないということに…」

「ま、しょうがないよ」

結局、コルワの質問には答えられなかった。しかし、別に正確な回答を求めるようなものでもないのです、グランは気にしていなかった。「さて、では今回はこのくらいにさせていただきますご視聴ありがとうございました」

「……あ、団長殿ちよつといいですか」



「ん、何？」

カメラの電源を落とそうとした寸前、スーテラがグランを静止させる。今ここで止めるということは、何か言うつもりなのかもしれないが……グランはスーテラが何を言うのか全く理解できなかった。

「——私のこと、イイ男の人は誘ってねえ」

「ぐはっ!!」

突然のメーテラのモノマネ。ダメージがでかかったのか、グランは血を吐いてその場に倒れてしまっていた。

「だ、団長殿!？」

「だ、ダメージカットが通じなかった……まさか、無属——」

「団長殿!?今の遺言はなんですか!？」

いい顔をしながら倒れるグラン。困惑し、叫ぶスーテラだったがすぐさまメタノイアをさせるためにグランを担いで、運んでいくのであった。

運ぶ形式が米俵を担ぐタイプだったので、役得とばかりにグランはスーテラの背中に顔を押し付けていたが、当然のことながら復活した瞬間にリーシャに秩序されたのであった。

穎悟の射手、任せて欲しいのです？

「はい、今回のゲストはアステールさんです」

「が、頑張るのです！」

「アステールは、メーテラとスーテラの妹分なのだけれど、使う武器は2人とは違ってボーガンを使用してます」

「わたしにはまだ弓を引けるほど力がないのです……」

自前のボーガンを取り出しながら、少しだけアステールは俯く。その頭を撫でて、グランは無言で彼女を慰める。そして、ボーガンを手にとってカメラに写しながら眺めていく。

「にしても、ボーガンなんて考えたよねえ……」

「は、はい！ちゃんと認めてもらえてよかつたのです」

「案外、守り人の条件ってそこまできつくないのかもしれない……やることはきついけど」

「そうなのです……」

星晶獣マルドゥーク。メーテラ、スーテラ、アステールの3人の故郷にいる星晶獣である。守り人であるスーテラとアステールは、その星晶獣によって凶暴化した魔物の退治などを行っている。

しかし、つい最近だが――

「倒したんだよね、マルドゥーク」

「はい、一時的に故郷に戻っている時にメーテラ姉様と一緒に」

実は、一時的にスーテラ達はこの船から離れていたことがあった。その時に、偶然にもメーテラまでもがその島に戻っていて色々あつてマルドゥークを完全に倒したという話になったのだ。

「おかげでメーテラ姉様は大忙しです」

「やることなくなったようなもんだからねえ」

「島の人達も、外に出てこれて嬉しそうだったのです……ただ」

「ただ？」

「怪しい男に引っかかるなど逐一言われたのです、私とスーテラ姉様まで」

スーテラとアステールの思考は、どちらかと言えば故郷の村の人た

ちよりである。つまり、今まででたことの無い外の世界にとんでもなく期待をしている…という事である。

「スーテラはともかく…アステールはまだ1人で外に出ちやだめだよ。変な人に連れていかれるから」

「む…私はそこまで不用心じゃ無いのです!!」

「飴ちゃんあげる」

「わーい、ありがとうなのです…はっ!!?」

グランが唐突に取り出した美味しそうな飴を、アステールはなんの疑いも無く手に取って口に運んでいた。少しの間美味しそうに舐めていたが、すぐに冷静になって顔を赤くしていた。

「……」

「……ちよ、ちよつとだけ不用心だったのかもしれないのです」

「ちよつと?」

「う…かなり、なのです……」

「まあいじるのはこの程度にしておこう。そろそろお姉さんの魔導弓から仕返しの攻撃が飛んできそうだ」

もう1つ飴を渡しながら、グランはアステールの頭を撫でる。口の中でコロコロと飴を転がらせて、頬を膨らませたり凹ませたりするその姿は紛うことなき子供っぽさが現れていた。

「さて、アステールに一つ質問をします」

「質問、なのです?」

「うん。まあ難しいものじゃないし、ただ聞きたいだけだからリラックスお願いします」

「は、はいなのです」

「じゃあ聞きます…:…グランサイファーにいるの、楽しい?」

「っ…:…はいなのです!!」

グランが微笑みながらその質問をすると、アステールもまた嬉しそうに頬を緩ませながら肯定する。守り人という使命があると言っても、未だ12歳の子供なのだ。子供は子供らしく遊んでいるべきなのだろう。

「さて、そんなグランサイファーを楽しんでいるアステールにもまた、

「お便りが届いています」

「う〜…ドキドキするのです」

「1通目『よく遊ぶ子はどなたですか?』スーテラからです」

「クムユちゃんや、サラちゃんとよく遊んでもらっているのです」

「クムユとサラ」

サラは9歳なのだが、かなり大人びている少女である。手を出そうものなら、保護者一同と彼女の守護をしているグラフィオスにぶつころぼんぼんマンだろう。

「編み物や…どこかの島に降りた時は、船の近くでかけっこをしている時もあるのです」

「クムユがかけっこ」

クムユはドラフの少女である。走った時の光景が、まるで走馬灯のようにグランの頭の中に広がっていた。それを、一切の鼻の下を伸ばすことはせずに真顔で考えていた。

「実に楽しそうだね」

「そうなのです!」

「ぬうう…:眩しい…これが若さゆえの純真さか…!」

「…?団長さんとアステールは、そんなに歳は変わらないと思うのです」

「そんなアホな」

「アステール、何と12歳なのです」

「出会ったのいつだっけ?」

年齢の話題を、簡単にきりだせる。他の女性にこのようなことをしようものなら、細切れの後からのミンチだろう。

そして、グランはつつい聞いてはいけないことを聞いてしまっているが、アステールはそれを華麗にスルー。それは、世界的に答えられない事である。

「次に、行こうか」

「はいなのです」

「2通目『服装は風でめくれないんですか?』これか…俺も気になつてたんだよね、実際のところどうなの?」

アステールが着ている服はワンピースのような服装である。つまり、上と下が一緒くたになっただけで、風が吹いてしまつてスカートがめくれてしまった場合、一気に上までめくれあがる可能性が高いという事である。

「抑えておけばどうとでもなるのです」

「まあそりやそうか……1箇所抑えておけば、余程の強い風じゃ無い限り上まで持ち上がらないはずだもんな」

「大体そういう感じなのです……ただ、ポートブリーズは風が強い日が結構あるのです」

「確かに……」

ポートブリーズ諸島、ティアマトが守護している島でありいつも穏やかな風が吹いているのだが、スカートが一気にまくれ上がるほどの風ならば割と定期的にくめれることが多いこともある。

そういうグランは、いつも皆にスカートの下に短パンを履かせてから移動している。

「まあそこら辺は俺がいつも注意喚起してるし……めくれても下着は見えないと思うから、安心して——」

「……」

何故か顔を赤くして俯いているアステール。喋っている途中だったのだが、グランはつい言葉が紡がれないまま止まってしまう。まさか、1度下に短パンを履かないで出かけたのかアステール、と。

「……アステール」

「……その、ラステイナさんの話なのです」

「え、この流れでラステイナ？」

ラステイナはドラフの女性である。特徴として、大きな爆発を起こすことも出来る武器を持っているが、とんでもないレベルでのドジをほぼ毎日起こしている。その度に、殺せと言われるので最近そのセリフを言う度にグランはどうしてやろうか考えている。

「その、風でスカートが捲れあがったのです」

「彼女が履いてなかったの？」

「いえ、履いてたのです」

「…?」

履いていたのなら、ラスティナであつても問題は無いはずである。そこから脱げたとかでもない限り。

「けれど、風に驚いてころんじやつて」

「あつはつは、ラスティナらしいなあ」

「そのまま何やかんやで鎧が全損、服もほとんど破れてあられもない格好に……」

真つ赤にして再び俯くアステール。しかし、グランは男としての反応よりもまず、過程が知りたかつた。風でスカートが捲れあがつて、どうしてそのような事になってしまうのか。あいつはマジシャンかなにかなのか。そう思わずにはいられなかつた。

「まあこれ以上聞くのは、ラスティナの名誉に関わるので辞めておこう。というわけで三通目いってみよう」

「は、はいなのです」

「『グランサイファーで探検をすることもありますが、最近あつた面白いことつてありますか?』……つて、探検なんてしてんだ?」「危険なところなどには寄つてないのです…けど、毎日新発見があるのです」

「へえ……例えば?」

「最近隠し通路を見つけたのです」

「マジで!?!」

隠し通路、男としてはロマンの塊だろう。しかし、まさかこのどれだけ広いかも分からないグランサイファーに、隠し通路があるのはグランも驚きながらも興味を惹かれていた。

「ど、どんなやつ!?!」

「カタリナさんの部屋と、団長さんの部屋に繋がつてる通路だったのです」

「…ん?」

ここでグラン、少しだけ嫌な予感がしていた。別に、グランの部屋とカタリナの部屋はそこまで近い訳でもない。かつてこれにグラン達以外の人が乗っていたとして、そうやって部屋を結ぶ利点もない。

となると――

「その隠し通路、ヴィーラ――」

グランの横に何かが通り過ぎる。通り過ぎたそれは、後ろの壁に刺さって左右にぶれながら独特の音を奏でていた。無論、それは剣である。よく見て、グランも見なれている……ヴィーラの剣である。

「お怒りに触れてしまったようだ。後でお鎮めしなければ」

「……？」

頬に掠って、血が出ると言ったことは無かったのでそこは安心である。かすり傷というのは、血が出ると跡が残りやすいのだ。

「とりあえず、今日はこんなところかな……皆さんご視聴ありがとうございますいました。またこの番組でお会いしましょう、さようなら」

「なのですー」

カメラの電源を切って、グランはアステールと共に部屋から出る。アステールをリードするために、彼女の肩を抱いて部屋を出て歩いていくのだが……まあ、はつきり言ってその状況の見た目が良くなかった。

「団長、いつものだ」

「はいはい、今日は一体なんの罪だ」

「幼女暴行」

「ふっ……ていうか今回はてつきりヴィーラが来ると思ってたぜ……」

「彼女は今ちよつとメカってる」

「メカってる……？」

謎の会話をしながら、グランはアステールを置いてモニカに連行されていく。アステールは困惑も何もしていなかった。彼女は純粋なのだ、手錠も何もされずに連れていかれたグランは、きつと秩序の騎空団のお手伝いをしたのだと……なんかそれっぽいことを考えていたのだ。

「ねえ、今回オチ雑じゃない？」

「オチ？なんの事だかわからんが団内始末書をまとめてきたから読んでくれ」

「ほう、脚に重石を乗せられている拷問状態でか？」

「そのままパジャマに着替えて寝ようとしてる君が言えることじゃないな」

「そんな馬鹿な……」

グランはパジャマに着替えていた。脚に重石を乗せられたままだったが、しかし動くことに一切の支障は無いことの証明だった。

グランは始末書報告を読みながらモニカと談笑していく。

「にしても、最近団の女性達からのアプローチがキツついで」

「それはもしかして私も含まれているのか」

「いやあ、まさか拷問監禁されてまで俺を独占したいなんて……モテる男は辛いなあ」

「拷問されているという自覚はあるんだな……」

「あ、ベアトリクスまた壁に穴開けてやがる……あいつだけ今度お菓子屋でもやらせて稼がせてやろうか」

「それは彼女からしてみれば本望なのではないか？」

他愛のない談笑をするには、絵面があまりにもシニールすぎるのだが、モニカも諦めたのか一切のツッコミをすることは無いまま、グランと談笑を続けていた。

そして、談笑が終わって団長としてのグランの仕事が終われば、グランはそのまま眠りについた。眠れるのかと突っ込んだが、グランは一切関係がなく……少なくとも開放されるまではその状態が続いてたという。



## 守り人ブラスタ―

「とんでもなく遅れたエイプリルフルイベントだゴラア!!」

突如襲いかかる筋肉質なビィ。身長は成人したドラフの男性よりも高く、そしてより筋肉質になっていた。羽は可愛い時の面影はなく、とても長くなっていた。

「うるせえー死ね!!!」

そして突如現れる金髪の少女。ピンクのスカートが特徴的な彼女は、そんなマツスルビィを一撃で粉砕していた。

「今日からこの話は『ジータの百合百合パラダイス☆』になるんだよ!!  
R―18に染めてやるから覚悟しておけ!!!」

まずはベアトリクスが相手だ!!立派な犬に仕立ててやんよオ!!」

そして唐突に叫び出す。しかし、彼女は気づいていない。自分の騎空団に所属しているのがオツサンばかりだということに。

そして、まだもう1つ……弊害があるのだ。

「はっ!?なんだ、夢か…」

今のがグランの夢であるということである。因みに、ジータが実際にいるかどうかは秘密である。ここでは特に関係もないので、割愛させて頂く。

「団長殿、夢を見ていたのですか？」

「うん……とても、とても変な夢だったような…」

「女の子口説くのに変な夢はないでしょう」

「じゃあここでもしメーテラの夢を見てたって言ったら？」  
「……」

現在、とある島の宿屋でメーテラ、スーテラ、アステールの3人と共にグランは駄弁っていた。別に一緒の部屋に泊まっている訳では無いが、朝迎えに行くとグランが未だに寝ていたのでこうして様子を見ていたというわけである。

「あれ？メーテラ姉様、顔が赤いのです」

「う、うっさい!!とりあえず早く依頼片付けに行くよ!!」

今日の依頼は魔物退治：簡単なものである。だとすれば、メーテラが着いてきているのは珍しい話だが、どうやらこの村にある化粧品が目当てだったようだ。

「そーいや、化粧品は買ったの？」

「依頼終わらせてからの方がいいでしょ、そーいうのは」

「まあそうだけど…まあ今回の依頼はすぐ終わるもんだし、先に買っ  
といても……」

「壊れたりしたら嫌じゃん」

「確かに」

「ねえ」

「はい」

「魔物退治って言ったわよね」

「言いました」

「目の前にいるの明らかに星晶獣なんだけど？」

目の前にいるのは、星晶獣である。砕かれるために生まれてきた：と言われてもおかしくないような、そんな星晶獣達がいたのだ。悲しき存在である。

「なんでいるのかなあ……って僕も思っていました、はい」

「ルリアどこ行ったの」

「今日は船でミックスパイを食べてます」

「……あれ倒すの？1体2体じゃないのよ？」

「……頑張ります」

「改めて考えたら、星晶獣倒すのに『頑張ります』って言えるのをおかしいわ」

「最もな意見だが、少なくともこの場には星晶獣を単独で倒せるのが二人はいるのと、そのうちの1人がメーテラ自身のために全く説得力がないのが悲しい現実である。」

「えーつと……6体くらい？」

「大体そのくらい、メーテラ達が苦手そうな奴等もいるからそっちは俺がやるよ」

「あつそ……で、今何持つてるのそれ」

「刀と鯉」

「ジヨブは剣豪なのね……」

二人で話し合っているが、残り2人はついていけないのか会話に混ざれなくなっていた。しかし、やらねばならない時もある……2人は自分の得物を構えて準備だけはしていた。

「姉様、団長殿」

「ん、スーテラ達も準備できたみたい」

「じゃあメーテラ達はあつちの方、俺は向こうの方やるよ。数多いし」

「じゃあ任せるわ。もしアタシらより遅かったらペナルティね」

「俺の方が早かったら？」

「……きよ、今日1日なんでも聞いて——」

「つしやオラいくぞお!!」

「えっ早っ!!」

メーテラが言い切るよりも早く、グランは星晶獣の群れに使って突っ込んで行った。そして、アステールは思っていた。

「ここまで星晶獣が溜まってている島は、なんなのだろうか…と。」

「まずは2体イ!!」

「あんたやる気出しすぎじゃない!」

そして、わかりやすい餌をぶら下げられた為かとんでもなくやる気を出しているグランを見てから、自分の胸に手を当てていた。

「アステール?どうしたのですか?」

「スーテラ姉様、やはり男性は胸が大きい方が好みなのでしょうか」

「…団長殿の事ですか?」

「はいなのです……」

「大丈夫ですよ、アステール」

「ほえ?」

「団長殿は、小さな子供にも興味のある大変心の広いお方ですから」

明らかに言い方に語弊があるような感じだが、しかしアステールは何故かその言葉で嬉しそうにしてしまっていた。

「ねえ!今何か凄く誤解されてる気がするんだけど俺!!」

「気の所為でしょ!!ほら早く倒す!!」

「あ、はい!!」

叫びながらも、グランは星晶獣をひたすらに片っ端から倒していく。暴れるのでしようがないし、と思いつつ淡々と倒していく。その間、頭の半分ほど使って全く別の事を考えているのだが、そうやって別のことを考える度に吹き飛ばされていた。

「ぐへえ!!」

「あんたもう何回吹き飛ばされてんのよ!!」

「大丈夫だ!破局食らってたらこんなの屁でもねえ!!」

「ほんとサルナーンとかに感謝しなさいよ!」

2人して会話をしながら、サラツと倒され続けていく星晶獣達。気づけば、その数もかなり減っていて残り一体となっていた。

「さっさと終わらせるわよ!」

「しかし姉様！この星晶獣大きいです！」

「いいから！やらないといけないのよ！」

「だったら、4人で合体技なのです!!」

「は？合体技？」

「はいなのです！スイール君がロマンだと言っていたのです!!」

グランは思った。確かに合体技とロボットは男のロマンである。ならば、年頃の子供であるアステールとスイールがそんな感じの話をしているもおかしくはなさそうである。

「てか、合体技って何すんのよ」

「まず私のボーガンを巨大化させるのです！」

「そして、私とそのボーガンの先を支えます。姉様はボーガンの上に乗る、団長殿は抱きついて下さい」

「ええ……」

ドン引くメーテラだが、スーテラに言われた通りに行動する。何故かグランはメーテラの腰に抱きついていたが、メーテラは敢えてスルーしていた。

「行くのです！」

「守り人ブラスタター、シュート!!」

「技名ダサっ!!」

グランとメーテラは打ち出される。そして、敵に届く直前にメーテラはグランを弓にかけて、流星の如く一直線にグランを打ち出す。

過剰に増した速度はグランの体に突風を与え、貫通力を与え、破壊力をもたらした。

結果星晶獣は撃ち抜かれて、依頼は無事完了したのであった。

「夢、だと……」

ベッドで起きるグラン。今まで現実だと思っていたら、途中からおかしくなって夢だとあとから気づくパターンである。見てる時は、一切夢だと気づいていないのがよくある話だが。

「随分と楽しそうな夢見てたんだなあ」

「ビィ…俺寝言でなんか言ってた？」

「いや別に……それよりもルリアが呼んでたぜ」

「ルリアが…？」

自分の場所はある程度分かると思うのだが、わざわざ呼び出すあたり二人きりで話がしたいとか、そんな所だろうか？グランはひとまず、ルリアの気配を辿りながらグランサイファーの中でも人気のない所を訪れることとなっていた。

「ルリア？どうしたんだ？」

「それが……私の中の星晶獣達が、ボロボロになってるんです」

「え、全員？」

「いいえ、一部だけです」

グランはふと、やけに鮮明に覚えている夢の光景を思い出していた。自分の中の夢とはいえ、何体か星晶獣を倒しているのだ。

少しだけ、グランは冷や汗をかいていた。

「グラン？どうしたんですか？」

「ん？いや……ちよつと気になることと言うか……」

「気になること…？」

グランは考えた。言うべきか言わないべきか。正直に言うべきだと、グランは思っている。しかし、ルリアが今まで力を吸収した星晶獣だったのならば、多少の見覚えはあってもおかしくないはずなのだ。

グランには、夢の中で見た星晶獣達にその見覚えを感じなかったのだ。もしかしたら、全くの別件かもしれないと思い始めていた。それでも、中々冷や汗は止まらないが。

「どうしたんですか？」

「ん？いや……今日夢で星晶獣と戦う夢を見たなあつて……ただ、見覚えはないから別なのかなって……」

「うーん……多分、私とグランが繋がっているせいであらうけど、それに流れたんだと思います。それが、グランの夢の中で現れてしまった」

「夢、ゆめか……」

いくらなんでもできすぎている気がしなくもないが、グランは気にせずに夢関連のことに關してのエキスパートを呼ぶことにした。彼女達も星晶獣だが、まだどうにかしてくれるだろうと。

「流石に私もそんなアホな夢を見る団長だとは思ってなかったわ」  
「そんなきついこと言わないでくれよ……」

グランは、メーテラにドン引きされていた。当たり前である。夢の内容をそのまま話した結果、何故か自分達が変な必殺技を使っていたと言われれば誰だつてこうなってしまうのだ。

「いやあ、守り人ブラスターはないわ」

「え、そつち？」

「どつちもに決まってるでしょ」  
「ういっす」

どつちもの意味が通じているからこそ、グランはさらに小さくなっていた。しよぼんと肩をすぼませている姿を見て、これを団長だと思うものは誰一人としていないだろう。

「こんなのスーテラとかアステールに話せないわ、幻滅されるわよ幻滅」

「あの二人に幻滅されたら待っているのは死では……？」

冷静に意味不明なことをグランは言っているが、メーテラは華麗に無視をした。

その頬は朱に染まっていたが、グランは気づくことは無い。

「……夢に出るって言うのは、それなりに脈アリって事じゃん……」

「メーテラさんメーテラさん」

「ん、何よ」

「今日の依頼一緒に行くことは変わらないでしょうか」

「守り人ブラスタールとか言い出さなければなんでもいいわ」

「ういっす」

そう、この2人：アステールとスーテラの2人を加えて依頼に行くのだ。まるで、グランが見た夢と同じように。

「メーテラ姉様ー！」

「お、きたきた……ってやけに上機嫌じゃん、アステール……どしたの？」

「聞いてください姉様！今日はスイール君に面白い技をおしえてもらったのです!!」

ふと、グランは嫌な予感がしていた。というか、頭の中ではリーチがかかっていた。あと一つ揃えばトリプルビンゴをしてしまうと言わんばかりに、頭の中で警鐘が鳴り響いていた。

「……へ、へ……」

メーテラも同じことを思ったのか、その額には汗が滲んでいた。彼女もまた、嫌な予感に縛られているのだ。

「私達も、スイール君達と同じように合体必殺技を使うべきだと思うのです！」

「アステール、1回落ち着こう？」

「もう技の名前も決めてるのです！」

「アステール、お願いちよっと——」

「技の名前は——」



「はっ!?!」

一体何度目だろう。夢と思って起きればまた夢：悪夢の連鎖は続くのだ。一体どこから夢でどこからが夢ではないのか。

特にシリアスは求められていないので、この謎は永久に解決するとは無いだろう。

そう、オチはないのだ。

マナリアプリンセス、魔力漲ってる？

「今日はアンさんです」

「はーい！というか、団長さん酷いよ」

「え、何が？」

「グレアを先にした事だよ!!」

「やはり文句を言われたか……いや、その時アンとオーウエンはしばらく戻ってこない状況だったし……」

「まあ、そうだけどさあ……」

アン、マナリア学園に通う女生徒でありグレアとはとても仲のいい関係を築き上げている。オーウエンはマナリア学園に通う際に、付き添うことになった騎士であり、彼は1歩引いた位置でアン達を見守っている。

「折角グレアの可愛い姿が見れると思ったのに!」

「まあまあ、そこら辺の埋め合わせをしてあげるからさ」

「ほんとに!?!じゃあ今度グレアと合わせて3人で出かけよ!」

「別にいいよ」

オーウエンは、誘うつもりなのかはたまた勝手についてくるからと初めから来るだろという予想だけで言ったのか、グランは強く聞くことが出来なかった。

「とりあえず、例のヤツやってよ例のヤツ!!」

「例のやつ……というのは、やはりお便りの事かな」

「そう! 私が答えられることなら、なんだって答えてもいいという凄いものー!」

「そんなに凄いもの?」

「自分の言葉で語れるんだからね、そりゃあ凄いよ? あ、別に実家で私に発言権が無いとかそういうのじゃないから」

直ぐに訂正を入れてくるアン。しかし、オーウエンという気のいい紳士が送られてきているのだから、アンの実家がそうだったものではないことは、十分に理解している。

「じゃあ……1通目『アンさんの制服、グレアさんの制服、オーウエン

さんの制服、ツバサさんの制服、なぜ4つとも細部が違うのですか？』

「あれ？違ったっけ？」

「結構違う……まあ、男女で違うのはしようがないとして、同じ性別でもみんな結構違っていたりするんだよね」

そう、マナリア学園には制服がないのだろうかと言わんばかりに、この団に所属している生徒達は制服が変わっている。細部が違うと言われているが、パツと見てその違いが一目瞭然の部類なので最早細部が違うどころの話ではないだろう。

「まあそもそも私達が代表として言われてるけど、そもそも立ち位置結構浮いてるよね」

「ん？そう言われてみると……」

アンは、お姫様である。そしてオーウエンはそれに仕える騎士。当然一般生徒かと聞かれると首を横に振るまでは行かないにせよ、首を傾げる者もいるだろう。

そして、グレアは竜と人のハーフである。当然その立ち位置も違うし、何より制服の形が彼女の背中の羽や尻尾に合わせているため、違うのは当たり前である。

そして、ツバサは不良である。校則に背いているのに、制服のルールは守っている……という訳でもないのだ。

「なるほど、確かに全員立ち位置が特殊だ」

「でしょ？そもそもマナリア学園って制服の縛りそんなに強いわけじゃないと思うよ」

「まあ、確かに」

ツバサはよく先生などに怒られているらしいが、その理由もケツタギアやテストの点数、出席日数などが理由であり制服や髪型に関しては特に言われていることも無いようだ。

「さて、こんなところかな？」

「結構真面目に答えてくれたし、俺も納得したしで……」

「ふふん、これでも話は上手くなるように努力してるんだよ」

「目標は？」

「喋りと言ったらこの人！っていうレベル」

「志が高すぎる」

その範囲が、ファータ・グランデなのかそれとも全空に知れ渡らせるつもりなのかは、グランは敢えて聞くのをやめておいた。フンスツと胸を張っているアンを見ていて心で心が幸せになるからだ。

「さて、じゃあ2通目に行くか」

「はい」

『「アウギユステで授業があったらしいですが、水着は現地買いですか？」』

「ううん、マナリア学園の近くにあるんだよ実は」

「団長さんにも手伝って貰ったもんねえ……というか、ごめん1ついいかな？」

「はいなんでしよう？」

「マナリア学園じゃなくて、マナリア魔法学院だから」

「はい、というわけで皆さん間違えて学校の名前を覚えないようにしましょう」

マナリア学園ではなく、マナリア魔法学院。それが正式名称である。因みに、グランを含めて『別に意味伝わるしよくね？』って思ったのがかなりいたりする。

アンも、実はマナリア学園の方がわかりやすいから、そっちの方が好みだと言うことを偶に思っている。

「で、本題に戻るんだけど……」

「水着の話だね」

「珍しいよね、海もないのに水着の販売なんて」

「まあね……でも需要があるから売れるんだよ」

「なるほど、確かに」

海での授業は、マナリア学園……もといマナリア魔法学院では恒例行事である。つまり、その度に水着の販売が行われるということになるので、その分需要が大きくなる……という事である。

他の島などでは、こうはいかない。

「ザンクティンゼルとかなら兎も角、ファータ・グランデの主な島々は

水着の販売なんてしないからねえ」

「水浴びする時とかどうしてるの?」

「ザンクティンゼルは……」

グラン、ここでふと思考に入る。よく考えたら、自分の島は田舎である。他の島とほぼ交流がないと言わんばかりに、各島を行き来する定期便の騎空艇が来ない程である。

ルリアやカタリナが来なかったら、今もあの島で修行を行っていたのかもしれない。

とまあ、そんな話は置いておき……それほどまでの田舎の島での常識、下手をすれば引かれるのではないだろうか?

「アンの実家のところはなかったの?」

そう思い至ったグランは即座にアンに話を振る。引かれるのは別にグランとしてはまったくもって問題ないのだが、番組が放送事故を起こすのは問題なので回避出来るところは回避していかねばならない。

「え、私? 私の実家は特にそういう事は無かったなあ……だから、あんまり海って言うのに関わる機会がなかったんだよね」

あまり焦ることなく、アンは自分のことを語っていく。その頭からは既にザンクティンゼルのことは抜けきっているようだった。

「で、水浴びする時とかどうしてるの?」

訂正、忘れていたなどといったことは一切起こっておらず、普通に聞き返してきていた。

グランは放送事故を起こさないようにしなければならぬので、ここで頭を高速でフル回転させなければならぬのだ。

「ザンクティンゼルは特にそんな感じのはなかったかな。足は水に付けてる程度でさ」

「へー……他の島のことは分かる?」

グランは安堵した。事実は語っているが、語っていないこともあるだけなので嘘つきと言われても嘘は言っていないので、これでなんら問題ないと、グランは判断した。

「さあ……少なくとも、水浴び程度ならどこの島でもあるんじゃない

かな?」

「ポート・ブリーズの辺りは無さそうな気がするけどね!」

「あー、確かに。あの島、熱くもなく寒くもなくで適度に涼しい風が吹いているから夏でもそこまで汗で不快なことにはならないんだよね」

風の島、ティアマトが守護する島だが、ティアマトの加護なのかポート・ブリーズ諸島は結構涼しいことになっている。ちなみに、ルリアの中にいるティアマトと、団員としてこの船に乗船しているティアマトとはまた別なので気をつけよう。

「バルツは…」

「あそこはそもそも水分が空気中に少ないんじゃないかな…ジメツとした暑さじゃなくて、カラツとした乾いた暑さというか」

「なるほど…」

「アルビオンはわかんないけど…ルーマシー群島は多分木々が多いから日陰が多くて涼しくなってる気がする」

と、自分の推理をとりあえずファータ・グランデの島々で説明していくグラン。本当はもつと色々な島のことを語っているのだが、今回はここまでとして割愛させて頂くことにした。

「さて、3つ目と行こう…『グレアさんとよく仲がいいですが、他に仲のいい人はいますか?』」

「これって学院の事?それともこの船でのこと?」

「船のことをお願い」

「じゃあツバサ君!」

「え、結構意外…」

別段、交わらない訳では無いと思うが、ツバサの方から積極的に向かうことは基本ないだろう。つまりアンが積極的にツバサに話しかけていってるといいう事になる。

物怖じしないその性格は、グランも見習わなければいけないと心の中ですら決めていた。

「そう?でも、彼結構面白い話聞かせてくれるんだよ!」

「例えば?」

「ケツタギアの話!私あれ乗ってみたい!」

「ケツタギアにのるお姫様……」

正直、パワーワード感が強すぎるが、あまり突っ込まない方がいいのだろうと、グランは思った。光景もシユールなので突っ込みたくなかったが、所謂ツツコミに対してボケが過剰供給されている状態なので、どこから突っ込んだらいいのか分からないのだ。

「オーウエンが止めそうだけどね」

「確かに！でもオーウエンも乗ればきつとわかるよ！風になるって多分いいものだし！」

完全に魅了されてしまっているようだった。それだけ、新鮮なことは彼女の好奇心をそそのめるのだろう。

微笑ましいとも言える。

「……つと、悪いけど今日はもう時間だね」

「うーん、短かったなあ」

「まあまあ、個人的な話なら後で俺の部屋にいつ……」

純粹にただ普通に落ちた。今のグランの様子を言葉にするならそれに尽きるだろう。最近回りくどい方法が多かった様にも思えるので、この程度が案外問題なかったりするのだ。

「……え、あつ……え?!?!」

アンも反応がつかぬ遅れてしまい、一瞬何が起こったのか理解出来ていなかった。グランが落ちたと認識した時によやく反応ができるようになった。

「……びつくりしたあ……」

アンが確認した時、グランはすでに空を飛べるもの達によって拾われているので、その時点で既に問題はなくなっていた。落下した本人であるグランも、あまりにも綺麗に落ちたために自分が落ちたことを認識していなかったほどのだから。

「……とりあえず、今から団長さんの部屋に行こつと」

恐らくグランも部屋に戻るだろうと予想したアンは、先にグランの部屋で待つておくことにした。誘われているのだから、行っても問題ないだろうという考えである。

まあ、考えも何もグランが今さつき誘っていてなおかつ『あとで』と

言っているのだから、ほとんど何も問題がないように感じるのだが。

「ツバサ君、どうするっすか?」

「っべえよ…マジマブだべ…」

「そうだなあ…とりあえず、姫様ん為にケツタギアそれっぽい  
作ってやろうぜ」

「ういーっす」

そして、グランサイファアの別の一角ではアンの為に不良達がケツ  
タギアを新しく作ろうとしているのは、また別の話である。

「あ、グレアちゃんのはどうするっすか?」

「……」

「ツバサ君?」

「ヘルメット入んねえから駄目だ」

そして、さりげなくグレアが話題に上がっているが、不良らしから  
ぬルール遵守による乗り物乗車拒否も、きちんと行っていた。

しかし、不良とは名ばかりで彼らが元々いいところの学校の生徒で  
それなりのルールや規範はあるということ…忘れてはならない。



マナリアナイト、今まで以上にお役に立てるでしょうか？

「今日はオーウエンさんです」

「オーウエンです、趣味は鍛錬を行う事などです」

「いやあ、分かっていたけどオーウエンは真面目だね」

「そ、そうでございましょうか？」

グランに言われて、戸惑いながらも背中をきっちりと正すオーウエン。そういう所が真面目なんだぞ、と言いたくなるような真面目さである。

「趣味が鍛錬って言うのは、俺と一緒にだね」

「しかし、団長殿の腕前は相当な鍛錬の成果です。私も、それほどの量を出れるようにならねば…と思っています」

「うん、マジで真面目だよね」

「あまり、そう言われても…私としましては、普段と変わらぬ態度なので」

ローアイン達ほど、とまでは言わないがもう少し砕けていても問題は無いだろうと、グランは苦笑いを浮かべていた。実際問題、それで問題が起きていないのだから、強く言うのは間違いなのだが。

「団長殿はどういった鍛錬を行っているのですか？」

「と言われても簡単なことばかりだけどなあ…ああでも、やっぱり強い人と戦い合うって言うのは強くなれると思う」

団内にいる、グランよりも強い者達のことを思い出しながら、グランはそう語る。それを参考にするつもりなのか、オーウエンはきちんとメモを取っていた。

「普段どういった人達と鍛錬を行っておられるのですか？」

「基本団内全員だからなあ…まああくまで戦えるメンバーに限定するけどさ…例えば十天衆とか？」

「全空最強と名高い七曜の騎士と肩を並べる十天衆…確かに、この団に所属していることは知っていますが、団長殿と特訓をしていたと

は」

「まあ、そんなこと言われてるけど十天衆達も人間だよ。みんなで競い合えばみんなで強くなれる！って訳じゃないけど、強くなるうとはしてるんだよね、俺も含めて……全員」

「強くなるうとしてる……」

グランのその言葉に納得しつつも、驚いた表情をしているオーウエン。やはりそれをメモすることも忘れていなかった。

「……とまあ、こんな感じで世間話しながらゆるゆるとしていくから、もうちよつと肩の力抜いてもいいよ」

「かしこまりました」

本当にそれ肩の力抜いてんのか、と突っ込みたくなかったがグランはそこを堪えながらお便りダンボール箱を取り出す。やはりというかなんとというか、お便りもいっぱい来ていた。

「はい、という訳でお便り紹介のコーナー。1通目『普段誰と鍛錬を行っていますか？それはいつ行われていますか？』」

「普段は、朝に行っております。姫様が起床される数時間前に起床し、腕立て伏せなどの一般的なトレーニングを行ってから、一緒に鍛錬を行う感じですよ」

「一緒について……誰と？」

「相手は選んでおりません。鍛錬室に訪れる人は様々ですので、その人で行うようにしております」

「なるほど、相手は選んでないんだね」

「そういうことですね」

相手は選ばない試合。それは相手を固定化しないことによる、戦闘慣れが広い範囲で行われるというメリットがある。無論、相手がいなければ鍛錬が行えない、バランスが難しいなどといったデメリットもあるが、いろんな人間がかなりの数存在しているこの団では、あまり起こらないデメリットだろう。

「最近戦ってて、驚いた人物って居る？」

「そうですね……ヴィーラ殿でしょうか」

「あれ？でも前に強いからこそ鍛錬相手に云々みたいな事言っただけ

かった？」

「いえ、私は剣の腕だけで判断しておりました。そして、剣の腕は私の予想以上であり、同時に星晶獣の力をあかも使いこなせていることに驚いたのです」

ヴィーラは、体内にシユヴァリエが存在している。故に、シユヴァリエの力とも言えるビットを、自分の手足のように扱うことが出来るのだ。

「なかなか相手にできない戦い方してたでしょ」

「はい……しかし、彼女と相対することはとても有意義であつたのは間違いありません。何せ、高速で動く火器を持った大多数の人間を相手にしているようなものなのですから」

中々のポジティブだが、そんな人物達がいるのかどうか甚だ疑問なグラン。しかし、動体視力を鍛えるという名目であれば、確かにヴィーラは中々の相手になるだろう。シエテ等も、剣拓を飛ばして戦ったりするので闘うことは出来るはずだが。

「まあオーウエンが馴染んでいるようで良かったよ」

「ここの人達が優しいおかげですね」

「オーウエンもその中の一人に入るんだけどね」

「ありがとうございます、団長殿」

謙遜をせず、褒められたら素直に受け入れて感謝を述べる。しかし、謙遜するところは謙遜する。それもまたオーウエンの魅力なのだろう。

「さて、2つ目に行こう……『マナリア学院で武器の持ち込みというのはOKされているのですか？』」

「基本的にはOKされていたはずですが……まあ、一部の生徒のみですが」

「一部、というと」

「簡単に言えば、私や姫様のような特殊な立場に置かれているものならば……ということですよ。それであっても、私は基本的に抜かないのを前提として許されています」

つまりは、生徒個人の良心が信頼されているということになるのだ

ろう。そうでなければ、魔導書以外は基本的に許されないはずだ。グレアのような、さらに特殊な体質も存在するために本当に良心に任されているのだろうか。

「なるほど、確かに普通なら許されるとは思えないもんね」

「まあマナリア魔法学院に通っている生徒は皆礼儀正しいもの達ばかりですから。故に、見た目にあまりこだわられない様になっているのです」

確かに、例として上げるならば幽世からの敵のせいで自分に魔法の才能がないと感じ、未来に不安を抱いた者達が素行不良を起こし、特殊クラス等という所に入れられている生徒達でさえ、武器を持ち込んでいなかった(はず)。そう考えれば、皆根はいい子達ばかりなのだろう。

「なるほど、マナリア魔法学院はそれなりに自由な校風という事だ」  
「それでも、厳しいところは厳しいというきちんとした一面も持っています。しかし、そう言ったところがマナリア魔法学院のいい所なのでしょう」

「うーむ、きれいにまとまった。まさか2題続けてこんな綺麗にまとめられるとは思わなかった」

「ゆくゆくは全空に『話す人と言ったらこの人』を目指している姫様のサポートをするつもりですから」

「まさか夢が合致するとは思わなかったぜ……」

オーウェンがアンに合わせたのだろうが、本人が本当にそれをやりたいと思っているのならば、グランにそれを止める権利は一切ないのだ。故に、驚くには驚くがそれ以上グランは言うことがなかった。

「ではそろそろ3つ目というこう……『好意的に見てくれる女性がいたらどうしますか?』」

「……申し訳ありません、あまりに回答に困る質問です」

「前提が曖昧?」

「……はい……」

「なら前提を設定しよう」

グランは『マナリア魔法学院の生徒のパターン』と『生徒でないパ

ターン』更にそこから『好意的に見れる女性』と『見れない女性』という4つの前提を作りあげた。最後の項目は性格、見た目ととりあえず何でもいいので好意的に見れないものとして扱う、という前提とした。

因みに、アンを見守ることが仕事だが今回はその前提は外させてもらう。あくまでも一介の生徒という扱いである。プラス、相手は同い年だ、

「なるほど……」

「じゃあ、パターン組み合わせ1『生徒』で『好意的に見れる』」

「……そうですね、受けると思います」

「ポジティブな意見ありがとう…次は『好意的に見れない』」

「ふむ……」

少し考え込むオーウエン。もう少し絞った方が良かったかとグランは思ったが、その前にオーウエンは回答を行った。

「……それでもうける、と思います」

「お、意外」

「女性に対して差別は行わないと言うつもりなので。しかし、その女性が犯罪などを犯していた場合は自首を勧めますし、別れを切り出されればそれを素直に受け入れるつもりですが」

「君ほんと紳士やね……『生徒でない』『好意的に見れる』」

「私と時間を合わせる事ができるならば、という質問をさせて頂くことになるかもしれません。生徒でないのならば、生徒である私と時間を合わせるのが苦痛になるかもしれませんので」

こうもポンポンとそれなりに紳士の回答をされていると、グランは申し訳なくなってくる。セクハラばかりしているためである。ならばやめろ、という話なのだが。

「最後『生徒でない』『好意的に見れない』」

「2つ目と、3つ目の回答を組み合わせたものですね」

要するに、注意するべきところは注意する時間が合わせられないことを苦痛と思うのならば……という事なのだろう。

というか全部受ける前提で考えてんな、とグランは思った。まああ

くまでも、相手を傷つけない…かつ犯罪や悪いことをしているのなら注意する、という前提なのだろう。

「なるほどねえ……というか全部受ける前提だよね」

「まあ、初めから『断る』という選択肢では話が進まないと思いましたので」

「そんなところまで考えてたのか……」

「さて、団長殿……もうお時間です」

「おっともうこんなお時間か……というわけでご視聴……」

「…団長殿？」

「……いつも言ってるから以下略!!」

言うことに飽きたのか、グランは唐突にそう宣言した。ある程度時間が経てばまた言うかもしれないが、今回はそんな気分だったのだろう。

「オーウエン！」

「は、はい！」

「解散!!」

「はっ!!」

何故かキビキビとオーウエンに指示を出してテキパキと片付け始めるグラン。オーウエンもそれに乗っかって、動いていた。ササツとカメラの電源は落とされ、後片付けも行われ、そして1分未満の内に2人は部屋の外へと出ていた。

「あ、そうだ……この後訓練で1戦やろうか」

「分かりました、団長殿が言うのでしたらやりましょう」

「ぶっ!？」

軽く訓練の約束を取りつけたグラン。しかし、その直後に謎の音が聞こえてきたので、その方向に目を向けた。そこにはルナールが倒れていた。偶然ここを通りがかったのだろうか、それとも狙っていたのだろうか。

オーウエンは瞬間的に、ルナールをお姫様抱っこして医務室まで運んで行った。その最中、それを見守っていたグラン。

「……なんか、やけにスピーディーに事が進んだなあ……」

何故自分はあるなテキパキとオーウエンに指示を出せたのか、また何故一切のツツコミもなく急にこんなことになったのか。

もしかしたら、オーウエンの紳士ぶりに当てられて自分のやっていた行為に罪悪感を感じて、早く話を終わらせたかったのかもしれない。

しかし、それはグランにも答えがわからないことである。何故なら、特に考えず行動していたためだから。

「……つかルナール！大丈夫か!?おーい、ルナール!!」

そして、勢いのままにルナールを抱き抱えたオーウエンをグランは追いかけるのであった。

## ピカピカ☆マナリア魔法学院

「……あれ？アン……？どうして団長さんの部屋に？」

「グレアこそ……どうしてここに来たの？」

グランサイファー、団長室。ここに今2人のマナリア魔法学院の生徒がいた。部屋の主であるグランはここにはいないが、お互いに何故ここにいるのか、何故ここに来たのかが気になってしまったのだ。

「いやあ、団長さんから呼ばれてただけど……いなくて」

「私も呼ばれたんだけど……あれ？」

「グレア？どうしたの？」

何故ここに来たのかを話していたが、唐突にグレアが部屋の隅で何かを見つけた。それは一枚の小さな紙だった。

グレアはそれを拾って読み上げていく。

『古戦場、思ってたより早く始まったわ。ごめん』

「……古戦場……？」

「朝早くから何人か出て行っただと思っただら……そういう事だったんだ……」

色々なメンバーが、今グランサイファーから抜けている。無論、团长たるグランもその例に漏れないが、グランが選出したメンバーがグランサイファーの運用を行っているので、特に動かせないということはない。

「うーん……まさか本人がいないなんてね……」

「結局用事ってなんだったんだろう……？」

恐らくしばらくは帰ってこないだろうと、2人は思った。というよりも、この時期グランはしばらく船から離れるのだ。戻ってこない故に、仮に用事があるものは待たなければならない。急ぎでない限り、基本的に内々的に終わらせるためグランにはあまり相談されることが少ないが。

「戻ってこないなら……うん！グレア、お出かけしよっか！」

「え？今から？」

「ちよっとその辺の野原を散歩するだけだよ！ご飯までに戻ればいい



し！」

「う、うん」

こうして、急遽2人は出かけることとなった。散歩する事はよくあるが、二人きりで出かけるのは久しぶりなので二人ともどこか楽しそうだった。

「そう言えば、アルビオン学園…だったよね？ ヴィーラさんとカタリナさんが元々通っていた学校って」

「へ？急にどうしたの？」

「んとね？あそこって町ぐるみで魔物を放してるらしくてさ、街中で魔物との戦闘が行われるんだって」

「へえ……」

「でね、マナリアも同じことしたらみんな魔物との戦いに自信がつくんじゃないかな!？」

「アン、多分それは間違ってる」

多分どころか、アルビオンの様なことをして成り立っているのは町ぐるみで行われているからだ。普段でそれを行おうとするのは、中々に賭けだろう。下手をすれば、街一つが社会的に崩壊する。物理的に崩壊する可能性も無くはないが。

「そう？」

「流石にマナリア魔法学院で同じ事をするのはね……」

「まあ……よく考えたら、やるのが全然違うから成り立たないのか」

そう、アルビオンは騎士道を学ぶ学園であるのに対し、マナリア魔

法学院は魔法を学ぶ場である。運動と研究という全く別のものでは、同じことをしても成り立たない場合が多い。

「でも、いざと言う時におどおどばかりしてられないよ」

「それは……」

「たとえ戦えなくても、人の避難とか……冷静に対処できる人がいたら、戦える人達は安心出来ると思うんだ」

守るべきものが周りにいて、敵が誰を狙うかわからない状況で戦うよりも、敵が自分だけを狙う状況を作り出せたら確かに安心して闘いやすいだろう。グレアは一時前の、力を制御できない自分を思い出しながら、そう思っていた。

「……ってなんか真面目な話しちゃったね、せつかくグレアと二人きりで出かけてるのに」

「じゃあ楽しい話しよつか」

「そうだねえ……あ、そう言えば前から気になってたんだけど……」

「何？」

「グレアってさ、前に水着きた時……尻尾どうしてたの？」

「へ？」

「だって、水着って下着程度の面積しかないのに、グレア普通に水着着てたからちよつと気になって」

水着を着ていたグレア。面と言われると彼女は恐らく赤面するだろうが、彼女の尻尾はかなり太い。その尻尾が外に出たまま水着を着るというのは、どういう原理なのか……アンはそれを質問しているのだ。

「え、えつと……答えなくちゃだめ？」

「ダメ」

「う、う……あ！あそこに団長さん！」

「え、嘘!？」

一瞬アンが後ろを向いた瞬間、グレアは猛ダッシュで逃げていた。どうやって逃げるかをテンパリながら、ひたすらに走って逃げた。

「あ！待ちなさいグレアー!!」

「ま、待てって言われてまつ訳ないよ!」

「尻尾のこと聞くのってそんなにダメなのー!?!」

「ダメー!!」

赤面するグレア。尻尾を見せることはなんら問題ないのだが、どうやら尻尾に関係することだと、彼女の中の羞恥心が刺激されてしまうようだった。

そう言えば…とアンは前にグレアの尻尾が大きくなっていった事を思い出した。太ったとグレアは思っていたが、要するに体が成長するに合わせて尻尾も適切な太さになっていたという話なのだが…要約すると、尻尾はいろんな意味で彼女の弱点である。

「ど、どこまで逃げるつもりだったの…」

「そ、それは…」

「ど、というか…どこどころ…」

あれからひたすらに爆走していた二人。ついにアンがグレアを捕まえたと思われていたが、気づけば見知らぬ場所に立っていた。

「島だから…多分真っ直ぐ走ってたと思うし、戻れば辿り着けるかな…」

「…ごめんなさい」

「どうしてグレアが謝るの? 追いかけてたり、聞いたら行けないこと聞いた私が悪いんだから」

「でも…」

「ほら、グレアは気にしないで? 早くグランサイファーに戻る?」

「うん……」

手を繋いで来た道に戻る二人。戻ると言っても、真後ろに方向転換して歩くだけなのだが。

しかし、手を繋いでもグレアの顔は沈んだままだった。

「……まだ気にしてる?」

「だって、私のせいだし……」

「もー、グレアのせいじゃないって言ってるよー?」

アンは苦笑しながらグレアを励ます。アンはグレアに対して怒っている、と言ったことも全くないし落ち込んでいるグレアを見て純粹に励まそうとしていた。

「……ありがとう、アン」

「ううん、どういたしまして」

そのアンのが伝わったのか、グレアは笑みを返してまたアンも笑みを返していた。

「それにしても、のどかだねここは」

「そうだね」

2人で手を繋ぎ、並びながら景色を見つつ歩いていく。こんな綺麗な景色を2人で見れると考えたら、案外道に迷ったのも悪くない……とグレアは考えていた。

「そう言えば……オーウエンは?」

「オーウエンは今日はいないよ。普段私から離れることなんて滅多にないんだけど……今度の学園での健康診断関係みただったから」

「え、なら私達も……」

「男子のことは男子にしか分からないってやつだよ」

「そういう……もののかな?」

「そういうものだよ」

そんな話を続けながら、2人は歩き続ける。それなりに離れていたのか、歩くにつれて日が段々と沈んでいく。お昼を食べる前に戻るつもりだったが、彼女達がグランサイファーを発見した時にはもう既に夕方になっていた。

「いやあ、晩御飯が楽しみだ!」

「そうだね……けど、団長さんはまだ戻ってきてないみたい」

「本当にしばらく居ないみたいだねえ……結局、何の用事だったんだろ？」

「うーん……わかんないなあ……」

グランが帰ってくるのは、まだ先の話である。そして、その間グレアとアンはゆったりまったりとグランサイファーの中で過ごそうかと予定を立てるのであった。

「はあああああああああ!!」

「うおおおおおおおおお!!」

そして、場所は代わり。現在グランはリーシャと共にそこそこ大きな魔物を殴り倒し続けていた。

しかし、倒せど倒せどその数は一向に減らないでいた。

「多くない!?!」

「古戦場ですし!!ところで団長さん!!」

「何!?!」

「今回の目的は!?!」

「二王弓!!」

「分かりましたいきまます!!」

こちらも他愛ない話をしながら、魔物を切り倒し続けていた。時折星晶獣が出ているような気がするが、そんなことを気にする余裕もないままだひたすらに倒し続けていた。

「二オオオオオオオオオオオ!!」

とりあえず叫びながらグランは倒し続ける。一体何体倒したか……そんなことを考えている間があるならば、2匹は倒せる。弱くはない、魔物達も並の騎空士ならば倒されてしまう可能性があるものだ。

しかし、今のグランの気迫は魔物達を圧倒していた。ひたすら剣を振り回し、切り刻み、消し飛ばす。まるで嵐のように動き回るグランを見て、本能的に危機を察知しているのだ。故に群れ全体で対処しなければならぬ。

何故か月末になると、大量の騎空士達によって乱獲される彼らだが、存外しぶとい種族のようで未だにその数は減らせていなかった。

「ところで団長さん！」

「何ですか!!」

「久遠の指輪ってあるじゃないですか!!」

「はい!!」

「付けてくださいー!」

「ないです!!」

その瞬間、たった一瞬だったが空気が凍りついたような感覚にグランは襲われていた。

背筋が冷え切って、心臓どころか背骨とかほかの色々な所全てを握られたかのような……そんな感覚に陥っていた。

「え?」

「いや、ないよ」

「何ですか?」

「ヒビイロカネを作りたいから……」

「……分かりました、じゃあ街中で500ルピくらいで売ってる玩具のやつでいいです」

「ええ……いやまあ、それくらいならいいけど」

「言いましたね?!約束ですよ!!言質取りましたからね!!」

グランは思った。『あ、これ絶対に拒否つとかないとやばいやつだったんだ』

まさか500ルピで、ここまで迫真になるとは思っていなかったか

らだ。これは、指輪を付けるだけでは済まないだろうなとしかめっ面をしながらグランは考えていた。

「え、ていうかいつ!?」

「これ終わってからです!!」

「そっかあ!!」

グランは考えるのはやめた。考えるよりも、今は目の前にいる魔物を狩って時間を進めていたかったのだ。今は古戦場、時間があるなら回して数を稼がないといけない。

そう、数は大事なもののな。稼がないといけない。

「うおおおお!!」

本来、こういうのはシリアスな雰囲気で行われるものかもしれないが、そういうのは一切なくグランはただ仲間と共に狩り続けるだけである。

血を頭から被り、匂いがこびりついてしまったせいで段々と魔物が近づかなくなってくるが、それでも追って殺す。星晶獣が出たら、とりあえず殺す。それくらいの勢いでやらないと、古戦場では生きていけないのである。

「キュベレーだ!!下のライオンを今日の晩飯にすんぞ!!」

「またですか!?朝昼晩連続してますけど、何回目でしたっけ!?」

「知るか!数えるくらいなら殺して食うぞ!!」

正直、グランをここまで変貌させている古戦場に、仲間たちは戦慄していた。ただ変態であっても優しい団長なら良かったのに。セクハラするクズだったけど優しい団長だったのに。

でも、古戦場だといつも事なので仲間たちはすぐに考えるのをやめて魔物狩りに勤しむのであった。

小さな騎士、自分に任せるでありますか？

「今回のゲストはシャルロッテさんです」

「団長殿」

グランと、テーブルの上から覗く金色の王冠。グランはそれを手で指し示して『シャルロッテ』と言った。知らない人が見たら、自分の顔を出さない人物の様に思えるだろう。

「顔が映っていない様に見えますが、ちゃんと写っているのが真実ですのでご安心を」

「団長殿」

「さて、ではシャルロッテさんの簡単な自己紹介から——」

「団長殿！ちよつといいでありますか!!」

「……どしたのシャルロッテ、ちゃんと番組始まる前の君の要望聞いたじゃない」

「うぐつ……き、木箱を取ってくるのであります」

そう言つて、王冠は姿を消す。さて、何故こんな事になっているのか……簡単な説明を行おう。

番組が始まる前、シャルロッテは自分がよく使う木箱は今回使わないと伝えた。理由としては、誤魔化すのは問題だからだと。

グランはそれをやめておいた方がいいと注意はした。しかし、意思の硬いシャルロッテを簡単に曲げることは難しいので、そのまま始めた方が効果的だと思つたのだ。

因みに、木箱がない場合丁度頭だけが隠れるようになっていた。視点によつては、頭髪が極稀に見える。

「取ってきたであります」

「ほら、ちゃんと椅子の上に載せろよ？」

「載せたら椅子に乗れないであります」

「大丈夫だつて……俺が載せるから」

そう言つてグランはシャルロッテを脇から抱き上げて持ち上げる。ハーヴィンなので、グランからしてみれば持ち上げるのは容易いだろう。実際、肩車しても恐らく苦にはならない。



「……団長どによ!!」

「どした急に」

顔を真っ赤にしたシャルロット。その性格と、お子様ランチが好きだという所からよく子供扱いされるが、彼女はこれでも20歳を超えた成人女性である。

サラの方が大人っぽいなんて言う話はしていない。

まあそんな成人女性の体に触れて持ち上げるというのは、かなり問題がある行為である。

「いきなり触られると驚くのであります!!」

「宣言したら?」

「……それは、まあ…覚悟決めるのであります…」

「とりあえず載せるよ」

そして、グランはシャルロットを席に載せる。そして同時に、その手首に手錠が掛けられる。

「流石に今の普通にアウトですけど」

「やっぱり? やましい気持ちはなかったんだけど」

「無くてもアウトです、後本人の前でそういうのやめておいた方がいいですよ」

手錠をかけた人物と、軽く話をするグラン。ちゃっかり、グランの台詞で女性として見られてないと思ったシャルロットが、シヨックを受けていた。

「あの、ところで君誰…?」

「リーシャさんの部下です」

「リーシャは?」

「古戦場の後始末しに行ってます」

「そっかあ……」

そのまま連れ出されるグラン。シャルロットは少しシヨックを受けていたが、それ以上にそのまま連れていかれたグランに驚きを禁じえなかった。

「え、これ……進行不可というものでは……」

「ご安心を」

「うわあ!？」

突然、影から現れる人物。黒い肌に細身ながらもがっちりとした筋肉。彼の名前はジャミル、グランを主として使えている人物である。

「ここからは私が進行させて頂いてもらいます」

「よ、よろしくであります……」

「いざと言う時、私に全てを任せてくれました。主がない今、私がその力を振るう時」

「振るうところ間違ってるであります……というか、失礼であります  
がこういう事はやったことがあるのでありますか?」

シャルロットは、ジャミルにこういったトーク関係のことをした経験がないと感じた故に、このような質問をぶつけていた。実際問題、ジャミルのことを知っている者達であれば少し不安になることもあるだろう。

しかし、ジャミルはそんな不安を払拭するかのように口角を上げて笑みを浮かべていた。

「勿論あるはずがないでしょう」

「え、その笑みは何でありますか」

「無くても、どうにかしなければならぬのが私の役目…故に、こういう時は逆に自信を持ってと主に教わりました」

「団長殿…色々間違っているであります」

しかし、続行されるものはやらねばならない。お互いに真面目な性格故に、ボケはあってもツツコミがない…という酷い状況になってしまっていた。

「では、続けましょう……確かこちらの方にお便りがあるのでしたね。ではそちらを読んで言って、進行してもらいます」

「……分かったのであります」

ため息をつくシャルロット。しかし、先程も言った通り彼女もまた真面目な性格なので、この番組は進行してしまうのだ。

「さて……確か無作為に3枚ほど取るのでしたね…これでいきましよう」

手でかき混ぜた後、適当な1枚を掴んでからジャミルはお便りを取り出す。

『どうしてその王冠は、そんなにバランスがいいのですか』

「頭につけてるこのことでもありますね」

「恐らくそうでしょう、確かにそれは結構長いのに中々落ちるところを目撃したことがないですね……頭に縫いつけてたりするんですか」  
「そこまでしていないのであります……」

シャルロッテと言えば、頭の上にある特徴的な王冠が目印である。彼女の身長を、これでもかという程には強調してしまっているが、シャルロッテはそれに気づいていない。

「では、何故落ちないのですか？」

「特訓の成果であります。頭の上これに乗せながらも、戦って落とすことがないようにしておくくらいに、バランス感覚を鍛えたのであります」

「そうですか」

ジャミルは突っ込まなかったが、しかし内心『そうではない』と突っ込んでいた。シャルロッテは、それなりに大きな剣を使って戦っているのだが、そのせいか戦い方は自分を軸に剣を振り回して相手を斬ることが多い。

そう、回転しているのに王冠は落ちないのだ。故に『そうではない』では2通目に参りましょう」

「え、今の終わりでありますか」

「何か問題でも？」

「団長殿はもう少し会話をしていたであります」

「はつきりと申し上げると、これ以上聞くと明らかに尺が足りなくなってしまう。残念ですが、この話題はここまでにします」

「む、むう……」

確かに、これ以上聞くのは中々時間が長くなってしまふ。シャルロッテもそれは分かっているため、ジャミルの言うことに反論をすることがなかった。それを確認してから、ジャミルは改めて新しくお便りを取り出す。

「『この団にいるハーヴィンの人達と戦ったことはありますか』」

「ヨダルラーハ殿と特訓でなら、何度か戦ったことあります」

「他の人物はいないのですか?」

「いるのですが、ハーヴィンで剣士という共通点があるのであくまでも例として挙げさせて貰ったであります」

「なるほど……因みに、ヨダルラーハどの器用さと手数が特徴的な戦い方ですが……」

「自分も、それなりに闘えているつもりはあります。あくまでも、自分の主観なのでこれで満足するつもりは毛頭ないであります」

シャルロットは大きな剣の一刀流、ヨダルラーハは刀の二刀流。同じ剣士と言っても、武器の少しの違いで戦い方はまったく変わってくるのだ。

「なるほど……そういった努力の積み重ねで強くなっていったのですね」

「そんな所があります」

「では三通目『どうしてお子様ランチをよく作ってもらっているのですか』」

「パウタオーダ殿が、理由をよく話してくれます」

「あれは子供を成長させるに必要な栄養素が、多く含まれている食材で構成されています。さらに、子供が喜んで食べるためにゼリーなどの甘味や、旗などといったものまで付いている……」

お子様ランチの特徴を上げていくジャミルだったが、ここまで言うてから『やはりシャルロットは子供では?』と疑念を抱くようになった。

見てしまったら確かにそう思うのもわからなくもないが、しかし大人だである。合法だ。

「今自分のことを子供だと思っただでありますね」

「いえ、そんなことは無いですよ」

全く自然に、一切の表情を変えることなく、顔の筋肉を動かすことなく、ジャミルはガチで誤魔化していた。シャルロットは訝しんでい

たが、しかし時間も時間なので仕方なくここはスルーを決めることにしたのだ。

「まあ、今言ったことがお子様ランチの大体の特徴であります。けれど、自分は身長を伸ばしたいのであります……ですから、牛乳もセツトにして、よく運動してからよく寝る生活を続けているのであります」

「ハーヴェインですから、それ以上は伸びないのでは」

「壁は超えるために存在するのであります、自分はそうやって努力で壁を超えてきたのであります」

「なるほど」

ジャミルはなにか思う所があったのか、今のシャルロッテのセリフをメモしていた。キリツとしているシャルロッテだが、その顔はどこか嬉しそうで若干にやけていた。

「さて、そろそろお時間ですね」

「おや、もうそんな時間でありますか。相手が今回はジャミル殿でしたが名残惜しいのであります」

「それは褒められている、と受取りましょう……さて、ご視聴ありがとうございます。恐らく次回は主殿が復活する予定ですので、画面で主殿を見たい方は安心してください」

「自分との剣の勝負も受けて立つてあります」  
「ではまた」

瞬時に消えるジャミルの姿、その瞬間カメラの電源が落とされて番組は終了していた。シャルロッテは真面目同士もう少し語ってみたような気がしたが、それはまたの機会ということにしておいてそのまま部屋から出ていくのであった。

アマルティア島。はつきり言うと、グランは今取調室にいた。目の前にはアマルティアのお菓子が出されているが、一切手をつけていなかった。

「食べていいんですよ?」

「身内ならともかく、明らかに個人の私物だよねこのお菓子。君の懐から出したヤツだよねこれ、というか目の前で出されたんだけど」

「人のものだってわかると、さすがに手を出しづらんだけど」

ちよつとクシヤつてなってる包み紙のせいで、より懐に割と長い間入っていた感が強くて、グランは余計に手が出せなくなっていた。

「いや、流石に出して困るようなもの出してたら秩序の騎空団やっていけないよ」

「いやまあ、そうなんだけどさ……つかいつリーシヤ戻ってくんの?」

「後始末終わったらですよ」

「後始末ねえ……?こんな長いことかかるもんなの?」

「流石に魔物の死体そのまま放置してたら、結構やばいんですよ実は」

「まあそれはわかるんだけど……そんなに連れて行ってないの?人」

「そういう訳でも——」

いまさつき知り合ったと言っても、過言ではない程には面識が薄い目の前にいる秩序の騎空団団員の人。その人と適当にだべりながら、グランはリーシヤを待っていた。

しかし、リーシヤを待ち続けていたのはいいのだがその後リーシヤが戻ってきたのはまさかのその日を超えた……というオチであった。

要するに、グランは唐突に丸一日秩序の騎空団にお世話になっていたと言うだけの、そんな話なのであった。

正義の騎士、日々研鑽していますか？

「えーっと…見慣れた人からはちよつと驚くかもしれませんが、今回のゲストはバウタオーダさんです」

「団長殿、今の言葉の意味は一体…」

「…いや、鎧着てなくて兜も外してるせいで誰かわからなくなりかけてるってのが…」

「なんと…」

「だって貴方兜できつちり髪の毛隠す上に鼻上あたりまで兜の真ん中のあれがあるじゃないすか…」

今回のゲストはバウタオーダ、いつもは分厚い鎧を着ているのだが、今回はいつぞやのリュミエールグルメの時の格好だった。何故コックの格好をしているのか謎である。

「私の印象は鎧なのですか……」

「ちよつと例え話しようか」

「？」

「俺がもし初めてあった時から、つい最近までレスラーの覆面をつけてました。そして先日、気がつくとその覆面を脱いで普通に話しかけてきました。」

その時、俺の自慢の仲間は俺を俺と認識するでしょうか」

「……声だけだと、ちよつと判別しづらいかもしれませんが」

「つまり、そういう事だよ……」

「何も無い時くらいはせめて兜は外しておくべきでしたか…」

グランの例えでも理解出来たのか、バウタオーダは遠い目をしていった。実際、グランも『本当に同一人物か？』と、初めて見た時は疑いがなかなか晴れなかった。

「というかあの兜ってどうやって被ってるの？バウタオーダってドラフだから、角が邪魔になりそうな気がするけど」

「今の鎧は新しくなっているものですが…基本的なことは何も変わらないですよ、ちよつと持ってきますね」

そう言って、一旦バウタオーダは部屋から出ていく。グランはしば

らく待ち、5分ほどしたらバウタオーダが戻ってくる。

「さて、この形はいつも私が被っている時と同じですね」

「これだけ見ると角が引つかかりそうなものだけど……?」

「まずは、この顎にかかる部分……ここを上げます」

「ああ、それ持ち上げられるんだ」

バウタオーダが実際に兜で実践してくれる。顎にかかっている部分は、根元が角に引っ掛けて使うものなのでそういう仕組みになっているのだろう。しかし、それでもまだ終わらないらしい。

「次に、このままだと角がまだぶつかってしまっているので後頭部を守る部分を少しだけあげるように後ろに下げます。あとはこれを被り、締め取れないように固定すればいつもの私です」

「さつき言ったこと根に持つてる?」

「いえ? 私が私たる所以を披露したのみです」

「そうですか……いやほんとすいませんでした」

「ふふ、冗談ですよ団長殿」

少し皮肉を言うバウタオーダだったが、冗談が過ぎるのもいけないと感じたのか、苦笑を浮かべて軽く謝罪をする。グランも少し安心をため息をついていた。

「と、というわけでお便りの方いこうと思います」

「なんだかんだ、楽しみですよ」

「1通目『リュミエールグルメを教わろうと思っっていますか?』」

「そうですね……出来れば作りたいたところです。しかし、私があれば学ぶ域に達しているかどうか……」

「騎空団の一員として依頼を受けながら厨房までやってくれているのに、その料理の腕もほかの料理人達に負けず劣らずの腕を持っているバウタオーダがその域に達していない……?」

グランは自分で言っていて、その言葉の意味が全く理解出来ていなかった。確かに、リュミエールグルメはただの料理ではなく文字通り『精気を養う料理』である。美味すぎる、というのもあるが食べれば元氣と活力が即座に湧いてくる料理なんて、調理方法が秘密であってもおかしくない。一応、レシピこそあるがグラン達が作るとただの料理



になつてしまふのだが。

だがしかし、バウタオーダの料理も相当なものである。豪快かつ繊細な味というものを表現しているのだ。そんなバウタオーダの料理でさえも、リュミエールグルメを作ることに達していないなどという言葉は本当に彼にとつては理解が不能だった。

「というよりも、唯一料理を作れる人材が料理の鉄人すぎるとというのが主な話な気もしますけどね……しかし、いつか作れるようになろうと思つていますよ、リュミエールグルメは」

「頑張つて欲しい……そして俺は食べてみたい……2通目『どうして騎士空団に入ったのですか?』」

「自分の正義が奮えないのならば、騎士団にいる意味が無いと当時は思つていたからです」

現在、リュミエール聖騎士団のメンバーが5人在籍している。その内、バウタオーダは自分の正義のために聖騎士団を抜けているのだ。しかし、聖騎士団団長が身長の問題で抜けていることを知った時渋い顔をしていたが。

「まあこれに関しては俺は知つてたけどね」

「団長殿はあの時一緒にいましたからね」

「正直なこと言うと、感動してたりするんだよね」

「……というと?」

「まあ、当時の帝国の騎士達に追われてたからね……頭では違う人、と分かつていても……どうしても騎士つて人に苦手意識が湧いてた時もあつたよ。」

あ、勿論別にそれで信用していなかつたなんて事ないよ? わざわざこっちの団に来てくれた人もいるしね」

「なるほど……確かに、大きな国の騎士団ともなると何かを勘違いした騎士が出てくることもありますね」

帝国。グラン達は当時彼らに追われていたのだが、グランも一応は帝国の兵達も仕事でやらされているとは分かつていた。しかし、どうにも追う者達の柄が悪い事が結構多かつた為、一時期騎士という役職に苦手意識を少しだけ持たされたことがあつた。

無論、それで仲間の騎士達が信用出来なくなったとかや同じように苦手になった……ということは無かった。

「……まあ、中には面白い人もいるって思ってたから……結局中身までガラの悪い人が苦手なのかも？」

「中身まで？」

「ほら、口悪くても性格がすごくいい人がいるじゃん……エルモートとか」

「確かに……彼の面倒みの良さは団内随一ですからね」

エルモート。炎を使う赤髪のエルーンの男性である。口が悪いが面倒みは物凄くいい。この事を本人は否定するが、団内で彼を知っている人は彼がいい人だということを知っているのである。

「さて、そろそろ三通目……『リュミエール聖騎士団、ちゃんと動けますっ。』」

「……」

「……これに関しては、本当に一言ある」

「はい」

「大丈夫か？リュミエール聖騎士団」

現在、リュミエール聖騎士団から来ている者達は5人である。その内、団長がいるのだ。そしてバウタオーダは部隊長、残り3人の内、セワスチアンも重要な人物である。

「まあ、それだけ団長殿が魅力的な人物だと言うことなのでしょう」

「そう言われると悪い気はしない。けど、悪い気がしないだけで流石に心配になってくる」

無論、リュミエール聖騎士団だけという訳では無い。白竜騎士団団長と副団長もいるし、なんだったら元帝国兵も何人かこの船に乗船しているのが事実なのだ。

「……しかし、よくよく考えてみれば……」

「ん？」

「グランサイファーに乗船している中で、何人が元または現騎士団……そして王族関係なのでしょうか」

「それはグラサイ七不思議の内の一つだ」

「え…いや、団長殿の誘いに乗っているためでは…？」

グランサイファーで、王族や騎士団が何人仲間になっっているか…という話はある意味禁句である。ごく稀にここで会談をしたりしているのを、グランは定期的に確認している。しかし、それを止められるほどメンタルは備わっていない。

「まあ、うんそうなんだけど…いつの間にかこんな重要な船になっ  
てるなんて思わないじゃん」

「まあ、確かに…あまりこの船で王族や騎士団の話をするのもどうかと思いますし…」

「それはいいよ、うん。そういうのって多分大事だし、仕事ほっぽって  
までここに乗って貰うと、逆に俺の胃が壊れちゃう」

真顔で返事するグラン。バウタオーダも、これ以上はあまり話題に出さない方がいいのかと感じ取ったのか、それ以上お互いに話題に出すことは無くなった。

「さて、そろそろ時間かな」

「ふむ…確かに話していると、時間が経つのが早く感じますね」

「それだけ楽しんでもらえたってことだからね、この番組を立ち上げ  
た身としては嬉しい限りだよ…さて、ご視聴ありがとうございました、またこの番組でお会いしましょう…さようなら」

「エヴィのチャーハンです」

「いただきます…美味い…！」

番組が終わってから、グランはバウタオーダにチャーハンを食べさせてもらっていた。新しく味付けを変えたらしく、その試食の為に番組終了後、キッチンに来ていたのだ。

「前のと違って、辛味が効いてるよね」

「少し雑誌で見たのです、少しくらい辛い方が食欲も増すと」

「なるほど、確かに」

「にんにくも使わせてもらいました」

バクバクと食べるグランに対して、チャーハンの説明をするバウタオーダ。素材の説明を聴きながらも、グランは飯を食べる手を止めていなかった。いや、止めたらむしろ料理に失礼だと言わんばかりに咀嚼していた。

そして、あつという間に食べ切っていた。

「……いやあ、やっぱりバウタオーダの料理は美味しい。流石リュミエール聖騎士団団長の胃袋を掴んできただけある」

「お褒めに預かり光栄です」

「これでもまだリュミエールグルメを作れないなんてなあ……」

「セワスチアン殿の腕が良いのですよ」

最早美味すぎてグランに取っては『滅茶苦茶美味い』か『とんでもなく美味いか』でしか判別できなくなっていた。最早リュミエール聖騎士団で飲食店を経営できるレベルである。

「とりあえず……ご馳走様でした」

「お粗末様でした……そう言えば、団長殿は料理はなされるのでしたね」

「まあ、一応ビィと長い間二人きりだったからね。出来ないことも無いけど……正直なこと言うと、ここの料理メンバーに勝てる気がしないんだよね」

「ふふ、それでも貴方の料理を食べてみたいと思う人はいるようですよ」

「ルリアとか？」

「彼女もそうでしょうけど……」

そう言いながら、バウタオーダは一瞬だけ目線を後ろに飛ばしてい

た。グランも做って、ほんの一瞬だけ後ろ……ドアの方面を確認する。するとそこには、キッチンの近くに在籍している女性メンバー達がドアの隙間からこちらを覗いていた。

「というわけで、偶には団長殿が料理を振舞ってみても良いのではないでしようか」

「……まあ、普段みんなに頑張ってもらってるし……やるか！」

こうして、グランは突発的にバウタオーダが見守る中女性団員達に料理を振る舞うことになった。それでもかなりの人数がいるので、作る料理が増えに増えて……久しぶりに団の食料庫を使い切ってしまう結果となった。

久々に空になったグランサイファアの食料庫を見て、グランは少しの達成感とこの後の飯をどうしようかと頭を悩ませることになったのだが……それはまた別の話なのである。

デイリジエントナイト、とことん頑張るのです？

「今回のゲストはブリジールさんです」

「よろしくお願ひします、です！」

ブリジール、元リユミエール聖騎士団の一員だったが、脱退して今はグランサイファーに在籍するハーヴェインの女性である。ハーヴェインなので子供っぽく見えるかもしれないが、シャルロット同様成人女性である。声の色っぽいのが、成人女性である分かりやすい証明なのかもしれない。

「一日十善をモットーに、掃除洗濯が趣味とのことで」

「はいなのです、休日もお掃除とお洗濯を率先してやるのであまり遊んだことは無いのです。けれど、あまり剣の方は…」

「そっちはあんまり無理して語らなくていいよ、苦手な事の一つや二つあるんだろうし」

彼女は、あまりにも体力と力がない。剣も数回振ればバテてしまうために、その事を気にしてバウタオーダに剣の鍛錬の師をお願いしているほどだ。

「でも、騎士団に在籍しているのに……」

「どこに在籍してても、苦手なものは変わらないよ。問題なのはそれに取り組んでいるかどうかだし」

「団長さん……」

「ブリジールはちゃんと剣の鍛錬してるじゃない。バウタオーダからちゃんと報告も受けてるし……そうやって努力をしている事が、重要だと思うよ」

グランはそう語っていて、途中ブリジールを見てから気づいた。感動した目でこちらを見ているのだ。

「ありがとうございます!!」

「うん、どういたしまして……という訳で話が一段落したところで、そろそろお便り紹介いってみようか」

「はいー」

いつもの様に、グランは箱を取り出すある程度掻き混ぜては中身の

上下を変えるようにひっくり返したりして、無作為性を上げていく。そして、一通目の手紙を取り出す。

「という訳で、まずはこのお便りから……『一日十善と聞きますが、まずはどのようなことをしているのでしょうか？』シャルロットからだね」

「シャ、シャシャシャ……シャルロット団長から……！」

「ステイステイ、大きく息を吸ってー」

「すー……」

「吐いてー」

「はー……」

シャルロットのものからだと言われた瞬間に、ガチガチに緊張し始めたブリジールだったが、グランは深呼吸を促してなんとか落ち着かせようとしていた。

「緊張の糸はほぐれたか？」

「は、はい……なんとか……」

「で、一日十善は主に何をしていたのかって話な訳だけど……」

「主なこと、と言えば人のお手伝いなのです」

「なるほど、ブリジールらしい」

一日十善、文字通り1日の間に良い事を10回行うというものである。無論、ブリジールはそれ以上……下手したら倍以上を毎度行っている可能性があるが。

「ただ、力仕事は1度行うと……」

「ああ……」

彼女は、先程も言った通り力がない。剣が振れないほど、と言うよりはシャルロットのような身の丈にあっていない大剣なんて、持ち上げることはほぼ不可能な程である。

「力はなんとか付けようと思っただけなのですが、何故か今以上の体力と力が中々付かないのです……」

「んー……まあ成人しちゃうと、どうしても筋肉も成長しづらいのかもしれないしねえ……」

ハーヴェインの体躯だから、という言葉は出てこなかった。というの

も、この団に在籍しているハーヴィン達のことを考えると、あまり腕力が育たないというのが、種族特有のものでは無い気がしていたからだ。

「そういうものなのですか…」

「あくまでも、多分だけどね…人の手伝いつて言うけど、毎日違った人の手伝いをしてるの?」

「はいなのです、ただナルメアさんだけは毎日手伝ってるのです」

ナルメアは、ハーヴィンを全体的に子供として見ている。見た目が完全におじいちゃんヨダラーハの様なものならばともかく、彼女からしてみればハーヴィンは皆子供のようなものだと思っているのだろう。

ブリジールが手伝っているのが、もしかしたら彼女の目には子供が母親のお手伝いをしている図のように見えているのかもしれない。

「他に毎日してるメンバーっている?」

「うーん…あまりいないと思うのです。連続して、というのはありませんけど平均的に考えたら、基本的にほぼ平等くらいにできていると思うのです」

「なるほど…ブリジールは皆のアイドル的存在なのかもしれない」

「あ、アイドル?ちよ、ちよつと照れるのです…」

はにかみながら、顔を軽く赤面させるブリジール。声のせいも相まって、ギャップ的な可愛さが存在していた。グランも、心の中で親指を立てていた。主にサムズアップ的な意味合いでの。

「でもまあ、そうやって誰かのために動けるといのはとても素晴らしいし、俺はいいと思うよ」

「そう、そうですか?」

「うん、まあこの団だと基本的に皆誰かの手伝いしてるっぽいけど、それでもブリジール並に誰かの手伝いをしている人なんて全然ないよ」

「え、えへへ…」

「さて、一応解決したっぽいので2通目行きましょう。『自炊するのですか?』」



ブリジールって確か、ご飯作れたよね」

「なのです、騎士団では自炊係をしていたのです」

あまり話題にならないが、ブリジールも料理を嗜んでいる。こちらもかなり美味しい料理のだが、ハーヴェインでは料理をするのがキッチンの高さに難しいのか、あまりしているところを見たことがない。無論、料理人のエルメラウラは例外としているが。

「ハーヴェイン用のキッチン作るか」

「えっ!?急にどうしたのです!?!」

「いや、作れるならもつと作る機会増やした方がいいかなと思つて」

「大丈夫なのですよ?ただちよつと、こちらの体力の問題といえますか……」

「ああ……」

そもそも忘れてはならないのが、この団に居る料理人の中には依頼を終えて帰ってきてから、料理を作る者達もいる。その依頼は、基本的に魔物退治のことを指しているのだが、そんなことをする猛者がいるのでブリジールが自分の体力を低く見ているのだ。高いかどうかは別として。

「でもまあ、キッチンたまに使う時台を使つてるでしょ?それはさすがにどうかかなと思うわけで」

「まあ…台を使わずに済むのなら、確かに楽に調理できると思うのです…けど、それはきつと楽な道にただ逃げてるだけなのです」

「ブリジール……」

「私は作られても、恐らく普通のキッチンを使うのです」

「そこまで覚悟が決まっていたなんて……しようがない、キッチンの件はまた検討しておこう」

「はい、ありがとうございますなのです」

ブリジールの懇親の笑顔が、グランの心にグサリと刺さる。眩しい笑顔が邪な心を浄化しているかのような、そんな眩しさを誇っている笑顔だった。

「ブリジールって大人のお姉さんだよね」

「なのです、これでも20歳は超えてるのです」

『ハーヴィンという種族をこれほどまでに生かしたギャップが他にあったらどうか、アルルメイヤがいたわ』とグランは思った。その後心の中でアルルメイヤに謝罪をしながら、次の話に移ろうとする。

「さて、最後の1通、三通目：『コーデリアさんとは仲がいいんですか？』」

「なのです、同期の仲なのです」

「いつも仲良さそうにしてるもんね」

「です、コーデリアちゃんはとても優しくいい人なのです」

コーデリアの話題を出すのが嬉しいのか、ブリジールは満点の笑顔を向けていた。仲がいいのは、周知の事実だが同期というのはリュミエール聖騎士団員達と、グラン達ぐらいしか知っていない情報だろう。

「コーデリアの方はいつもブリジールのやることなすことに目を光らせてるけどね」

「そうなのです？」

「凄いいよ、うん」

正確にはブリジール本人ではなく、ブリジールに近づく者達に対して目を光らせているのだが。ブリジールは、あまり人を疑うことはしない上に、直ぐに信じてしまう癖がある。その上怒鳴られたら驚いてしまうため、チンピラとかに絡まれたらとても大変なことになってしまう。

時折そういうことが起こってしまうので、コーデリアは目を光らせて観察していることが多いようだ。

「コーデリアちゃんは私の事になると、途端に大袈裟になるのです」

「いやあ、多分大袈裟じゃないと思うなあ」

「私はこれでも…元…聖騎士団の一員なのです、そんな簡単にやられたりしないのです」

元の所だけ小さく呟いて、ブリジールはすぐにグランに向き直る。きっちり聞こえているので、何ら問題は無い。

「じゃあ俺が今から言うことやることにNOを叩きつけてみて」

「はいなのです」

「うん、じゃあまずは飴ちゃんあげる」

「わーい、なのです」

そのまま飴を受け取って、懐にしまうブリジール。既に言われたことを達成できていないのだが、それに気づいていないのかワクワクと緊張がおりませになった表情をグランに向けていた。

「ブリジール、ブリジール」

「？」

念のために確認を取ろうとしたが、ブリジールは名前を呼ぶとキョトンとした顔をしていた。『あ、これ本当に気づいてないパターンだ』とグランも完全に気づいて、1度この話題を区切った方がいいと確信した。

「そろそろ時間だし、続きは後でやろうか」

「あ、はい、分かったのです!!」

ブリジールは何も疑うことなく、純粋にグランの言葉を受け入れていた。『終わったならネタばらしをしよう』と、グランは考えていた。無論、その時の反応がどうなるのかというのが彼はとても気になってしょうがないのだが。

「と、というわけでご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう」

お決まりの言葉を言ってから、カメラの電源を落とす。その後、ブリジールと一緒に部屋を出ながら、どうやってブリジールにこの簡単なゲームをクリアさせるか…むしろその方に躍起になっているのであった。

「はあ……」

「…？ブリジール、どうしたんだい元気がないじゃないか」

撮影からそれなりに月日が経ったある日、ブリジールは船の甲板で黄昏ていた。そこに、コーデリアが声をかけていた。

「コーデリアちゃん……実は、体重が増えていたのです」

「体重が…なるほど……」

「でも、理由が全く分からないのです……」

コーデリアは知っていた。ブリジールが太ったのは、団長であるグランが事ある事に、飴やらパンケーキやらをブリジールに食べさせているのだ。

番組内で行われていた例の遊び、あれは未だに続いておりその度にグランはブリジールに甘いものを食べさせていたのだ。

「何故……」

「…何故だろうな」

コーデリアは、どちらを怒るべきか悩んでいた。太った理由が理由なため、グランを叱るべきなのだろうが……甘いものの食べすぎで太っていることも伝えるべきなのかというのも考えているのだ。

「とりあえず、動かないと痩せられないのです」

「そうだな、私も手伝おう」

そしてコーデリアが取った選択肢は、『助言はしない』ということだった。彼女もまた、ブリジールの純粋性ではいずれ危ない目に遭うと知っているのだ。

「……まあ、それはそれとして団長とは1度話し合わなければならぬのかもしれないな……」

「コーデリアちゃん？どうしたんです？」

「いいや、何でもないさ」

「ふふ、とりあえず一緒に雑巾がけするのです！」

「足腰を鍛えるには丁度良さそうだ」

友人として、そして仲間として……コーデリアはブリジールのサポートをするだろう。とりあえず、最近騙そうとする度に出てくるも

この料理が派手になっていくグランは、1度きっちり話し合っておくべきだと思いつつながら、コーデリアは腰に帯刀している剣を構えるのであった。

シークレットナイト、正義を問うか？

「今回のゲストは、リュミエール聖騎士団遊撃隊最後の切り札こと、コーデリアさんです」

「よろしく頼む」

「一応言っておいて欲しいとの事なので言いますが、彼女は女性なのでそのところよろしくウ!!」

「ありがとう団長、しかしそこまでメインで発表するとは思わなかったよ」

凜々しい顔で少し微笑みながら、コーデリアはグランに少し注意を入れる。女性だが、可愛いと言うよりも凛々しさが勝っているために、イケメンという言葉がよく似合っている女性である。

「さて、ここで紹介の際に行った『遊撃隊って何?』って人もいるかもしれないので、紹介しましょう」

「遊撃隊というのは、大まかに言えば主力部隊の補佐をする部隊だね。情報収集は勿論のこと、場合によっては工作人員のようなことも行う。戦闘の際には、哨戒や攪乱なども行う部隊のことを指すんだ」

「という事らしい……やること多くない?」

「まあね、サポートというのは元来やる事が多いのさ……まあ私の場合、正義審問を行う立場もある」

「シャルロットが倒れた時のとかね」

正義審問、簡単に言えばリュミエール聖騎士団の者にちゃんと正義が自分の中にあるかを問うものである。と、簡単に言えば楽そうだが場合によっては剣を抜く場合もある……どころか、基本剣を抜く羽目になる。何せ、そのようなことになっている時点でリュミエール聖騎士団から疑われているということになるのだから。

「しかし、正義審問って名前は堅苦しいイメージがあるけど、結構やっていることは物騒だよね」

「まあ、上から疑われているとなるのだから物騒なのも当たり前だと思っただけだね」

「確かに……前の時の理由は何だったっけ」

「リュミエール聖騎士団を抜ける者が多いので、示しが付かなくなってきた。だからちよつと聞いてこい……という理由だったかな、簡単に言えば」

「まあ普通そうなるよね……普通考えたら、頻繁にポンポン人が抜けるような騎士団って、人からあんまりいい印象持たれなさそうって思う」

「上の方もそう考えたのだろう。その上、抜けたのがリュミエール聖騎士団団長なのだから、尚更だ」

そんな事態になっているのに、あまり重要な扱いをされてないあたり、上層部はあまり好かれていないのではないだろうか……とグランはふと思った。それを察したのか、コーディネリアはただ1度だけ頷くだけだった。

「とまあ、やる事が多くて仕事で疲れてるコーディネリアさんに対して、お便りの発表を行います」

「こういう事をやっけていても、多少の息抜きにはなるのでね……頼らせてもらうよ、団長」

「ご期待に応えられるように頑張るぞい……1通目『女性相手の仕事が多いのですか?』」

「ああ多いよ。特に、私のような見た目だと女性に好かれやすいらしくてね。私自身が女性ということもあって、喜ぶ手段が男性よりわかりやすいだろうと言う判断さ」

「まあ理論的にはわかるし、筋も通ってるんだけどさ……」

「何だい?」

「普通そういうのって、優先的に男に回しそうなもんだよね。いなかっただの?」

「さあね、私に回ってきたということは、上層部のお眼鏡に叶うようなものはいなかった……ということじゃないかな?」

リュミエール聖騎士団の男性諸君が、グランはとても不憫に思えた。いや、恐らくコーディネリアがいる時点で回ってくるのは明白なのでもしかしたらイケメンがいるかもしれないが。

「そもそも上層部がどういう構成してるのやら……」

「それは残念だが、流石に言えない。この場だと結構口がゆるくなつてしまいかねないけどね」

少しだけ微笑みながら、コーデリアは自分の指をグランに軽く押し当てて、言えないという意味表示をする。こんなことをされたら、確かに女性達は墮ちるのが分かると、グランは理解した。

「そういうのされるとギャップで惚れるぞ」

「…ふふ、そういうのは冗談でも言うべきじゃないよ」

少し間があつたことに、グランは気づいていなかった。そこまで間がなかったからかもしれないが。

「とりあえず、2通目を頼むよ」

「ほいさ……『趣味は何ですか』」

「…あまり口外したくないな」

「俺は知ってるんですけどね、まあ本人が言いたくないと言つても言えないようなことが趣味つてわけじゃないですよ。ただ言うのが本人の性格的に言えないって話なだけで」

「まあ、そのくらいしか言えないとだけ言つておこう」

彼女の趣味は、所謂乙女趣味と言うやつである。別に隠している訳では無いが、彼女の性格が何となくその趣味のことを話したがらないと言っただけの話である。

「ブリジールに私が可愛いと言われるのは、そこが由来なのかもしれない」

「そういう時は『お前の方が可愛い』とかなんとか言つてやりな」

「それをブリジールに言うと、他の女性と同じように勘違いして…いや、ブリジールならいつもの私だと流すか…?」

本気で考え込み始めるコーデリア。ブリジールの事になると、いつもこうなるのかとグランは思った。しかし、よく考えてみればブリジールと長い付き合いなので、心のどこかで過保護なものが芽生えているのかもしれない。実際、見てないと何が起こるか分からないのだから。

「おーい、コーデリアさんやー」

「つと……すまない、考え込んでしまった」



「正直見てたらかなり心配になるのは分かるけど、今は番組を進行させるんで、思考の切り替えお願いしまーす」

「……すまない、いやほんとに」

「ってわけで三通目『コーデリアちゃん、どうしていつも心配してくれるのです?』ブリジールから」

「逆にブリジールを知っているものからすれば、何故君が心配にならないと思わない?」

実際その通りである。一日十善、その行いのために彼女は街に出ては人を助けるために一生懸命である。

しかし、人を助けるその行動の合間合間で不幸に見舞われているよな、もしくはドジを踏んでいるよな、そんなことが起こっている気がしてならないのだ。

「とりあえずチンピラを追いかけては、怒鳴られて驚いてるをやつてる気がする」

「最近、チンピラ程度だと驚かなくなってきたけどね……」

「まあ最近、誰をどうチーム分けするか……って言うのを分かってきたから……最近というか、メンバーが一気に増えた辺りから」

「いつからだろうな、急激に仲間が増えるようになったのは」

「夢で緑の恐竜が現れた時くらいかな……最近は赤いモツP」

「団長、何を言ってるのかわからないが……モツPではなくおそらく雪男だ、どんな見た目をしているのかは知らないが」

そんな夢の話は頭の隅に置いておき、グランは最近よくブリジールと組んでいる……というか組ませている者達を想起していた。

まずはクムユだ、肝っ玉担当。ブリジールと同じように、仲間になった当初はビビりだった……が、今はなんとか肝っ玉になりつつある。そこを利用して、ブリジールに年上の威厳を見させてやるという気持ちにさせるのだ。

次にスフラマール先生だ、大人の余裕しかない。同じハーヴィンなので、コミュニケーションが取れやすいとも言える。

そして最後に、レスラーの格好をしたグラんだ。ただ黙って後ろからついて行くだけの存在、スフラマール先生以外の2人からは怖がら

れている。

「レスラーってこういう時便利だよね」

「あれに後ろに立たれるのは心臓に悪い」

「そんな怖い顔してる？」

「団長、どんな恐ろしい顔よりも真顔で無言なのが1番怖いんだ」

どこかで経験があるのか、コーデリアは迫真の顔でそうグランに諭していた。グランはコーデリアの後ろに立った記憶がなかったが、何故か自分が原因のような気がしていた。

「さて、話を戻そう……そうやって組ませてくれる間はいいが、何かしらの用事や体調不良でブリジールが前に出る、または1人になる場合がある」

「そういった時に、心配でついて行くんだね……後ろから」

「ああ、別にそんな時だけという訳では無いが」

「えっ」

「あっ」

闇を垣間見た気がしたので、グランはこの話を即座に終わらせた方がいいと判断した。時すでに遅しと言うべきか、口から出た言葉は他人が知るまで二度と戻ってこないと言うべきか……今のでコーデリアの印象が恐らく180度くらい変わってそうだ。

「……まあ、話題の転換も何ももう時間なんですけどね」

「……そうか、もうそんな時間なのか」

「というわけで皆さんご視聴ありがとうございます。次回またこの番組でお会いしましょう……ではまた」

そしてカメラの電源が落とされる。そして、直後にコーデリアがテーブルに突っ伏していた。

だが、そんな時である。突如扉が大きく開かれたのだ。

「大変です団長さん!!」

「リーシャ!?どうしたんだ!？」

「ブリジールさんがこの島の1番大きなマフィア組織に絡まれています!!」

「どうしてそんな事に!?!船にいてコーデリアのを見るって言ってたよ

な!？」

「その前に買い物に行つて、飲み物片手に真剣に見ようとしていたらしいんです。しかし、途中でお婆さんが困つていてそれを助けていたら、マファイアの下っ端に絡まれてしまったらしいんです」

ちなみにこの説明を行つている時点で、コーデリアは既になくなっているのだがそのことに2人は全く気がついていなかった。

「その光景を目撃したランドルさんが、マファイアとの喧嘩に発展したらしいです。しかし、それを偶然見かけてしまったフェザーさんが入つてきて状況はさらに悪化」

「……」

「下っ端が上の者を呼び、さらに呼んで言つて……今じゃあマファイア側は数百人いる状態です」

「えつと、ここにリーシャがいる理由と……ブリジールがいない理由を……」

「ブリジールさんは『自分が原因だから』と残ってます、数が多いので驚いていましたが、一人一人の戦闘力はそこまででもないのでブリジールさんも普通になぎ倒していつてました。」

私がいる理由は、同じように参戦しようと思つたのですがブリジールさんにいい顔で『団長さんと呼んで欲しい』と言われました」

「まあ、何だかんだブリジールもかなり強くなつてるもんね……」

状況が混沌としているせいで、ブリジール連れて帰ってきた方が良かったのではないか?と思わなくもなかったが、しかしまあさつさと迎えに行つた方がいいと思ひ、グランもさつさと準備を行い始める。

「……ん?ランドル、フェザー、ブリジールの3人だけ?」

「いえ、カリオストロさんにソリツズさん……ブローティアさんにアテナさん、サラーサさんにエッセルさんとカトルさんもいます」

「なんだその過剰戦力!!マファイア側が全滅なんてルート決められたら、とつても面倒なことになるじゃないか!!」

さつきまでブリジールの心配をしていたが、この明らかなまでの過剰戦力を聞かされたらブリジールよりもマファイア側が心配になってしまう。

皆、誰かを殺すようなことは無いと信じてはいるが、人間がアリと遊んで殺さないなんてなかなか稀である。というか、追いかけてくる奴らにマフィアが追加されるのが恐ろしく面倒なだけである。

「とりあえずさっさと行こう!!」

「はい!!」

因みに、向かった先では既に全滅させられていたので、仕方なくグランはボロボロのマフィアのボスと『お話』することで追いかけられずに済むようになったのであった。

その後、全員で戦闘場所の補修作業に入ったのだが……

「…そう言えば、コーデリアは？ブリジールは？」

「ブリジールなら、私が連れて帰ったよ」

「コーデリア…いたのか……」

「先程ブリジールをこの場所から離してグランサイファーに連れて帰っていたのさ。そして、団長が入れ替わりでここに来たというものだからまた来た…という話さ。」

私も補修作業、手伝うよ」

手伝われることは嬉しいが、グランが全速力を出してもここに来るのに数分はかかるというのに、コーデリアはどのくらい速度が出ていたんだろうか…そう思ったが、グランは聞く気も起きなかったので……そのまま一緒に戦闘場所の補修作業に入ったのであった。

義に篤くお嬢様想いの老紳士、潔くお逝きになつては  
どうです？

「今回のゲストはセワスチアンさんです」

「はっはっは、この老獺を出してくれるとは嬉しいですよ」

「自分のことを老獺って言う人は、多分まだまだ元気じゃないかな」

「団長さんも、だいぶ毒されていますね」

この団には子供も多いが、逆に老人が少ないという訳では無い。寧ろ老人も子供と同じくらいに多いのだ。セワスチアンもその一人だが、グランは元気な老人の姿ばかり見てるので感覚が麻痺していた。「さて、セワスチアンはリュミエールでも屈指の料理人。有名なリュミエールグルメを作ることの出来る一人なわけだ」

「特殊なことは何もしておりませんよ、ただ技術のみなのでこの団でもレベルを上げることが出来れば、作ることが可能なものです」

「少なくとも、食材の栄養素を200%引き出せるなんて料理はどんなでもない練習量を積まないといけないのでは……？」

「どんな事も簡単にはできません、練習を積んでこそ出来るものばかりなのです。今我々が地に足をつけて歩いていられるのも、赤子の時に練習したおかげなのですよ」

ほっほっほと、笑いながら語るセワスチアン。言っていることは、グランは理解もできるし納得もできるが、この団にいる数々の料理人達ですらまだその領域に達していないのだから、とんでもない練習量があるのはその通りだと思っていた。事実、セワスチアンは練習量が多いことは否定していないのだから。

「元々は荒れてたんだって？」

「ええ、まあその通りでございます。若い頃はそれはもう荒れに荒れておりました。まあ、私が若い頃の話ですよ……それに、その時や今と比べても多少『行き過ぎた時代』という物もございました」

過去、リュミエール聖騎士団は『清く、正しく、高潔に』という motto が行き過ぎた時があった。本人の素行だけでなく、血縁者の素行

までも調べあげていたのだ。駄目なら、もちろんその者は退団である。

「まあ、あまり湿っぽい話は無しに致しましょう」

「そうだね……そう言えば、シャルロットとは彼女がリユミエール聖騎士団に入る前からの付き合いなんだよね」

「ええ、まあ。お嬢様が小さい頃からの付き合いでございます。料理も、その時に培ったもので御座います」

「もしかしてシャルロットも料理が出来る？」

「はてさて、彼女は剣を握ることを選んだのです。料理が出来るかどうかは、考えたこともございませんでしたな」

知らないという事実か、それとも知っていて誤魔化しているのか。老獪と自分で言う部分を見せてきたセワスチアンだが、これに関しては本人に聞けばいいので、グランはそれ以上の追求を行わなかった。

「さて、お便りに行ってみましょう」

「ほほ、楽しみですよ」

「1通目『今でも剣は使えるんですか？』料理をしているところをよく見るからこそ、この質問なのかもね」

「勿論でございます。握れなければ、騎士ではなく給仕係と何ら変わりませんかからな」

「ただの給仕係は、国の式典に自分の料理を出すとは思えないんだけど」

「確かに、その通りでございます。まああくまでもものの例えですよ」

事実、剣を握れば恐ろしく強い。剣が重いという類ではなく、技術面において器用な剣の動かし方をするのだ。

ただ一撃が重いという事よりも、ある意味厄介なものである。

「ま、セワスチアンは剣は握れるし凄く強い……って結論になるね」  
「団長さんには敵いませんよ」

本心なのだろうが、グランからしてみればセワスチアンは実力を隠しているような気がして、しょうがないのだ。

「まあいいや……とりあえず2通目『お子様ランチはよく作るのですか』」

「そうでございませぬ……お嬢様の方ではよく作ります。ここに入る前に行っていた『ゲリラ炊き出し』でも、器さえ足りていれば子供たちには振舞ったりもしていましたよ」

「ゲリラ炊き出し……？」

「突発的に、村や町で炊き出しを行うのです。ご飯を食べれば、皆笑顔で元気になる……その顔を見るのが楽しくてしようがないのですよ」  
「清く、正しく、高潔に……モットーが綺麗だから純粋に人の為に動けるんだね。凄いと思うよ」

「人の為に自らを捨てる覚悟で動ける団長さんも、中々のものだと思いますけどね」

「俺はまだ若造だしね、突っ走ることしか出来てないよ」

グランの回答に、セワスチアンは頬を緩ませて笑みを浮かべているだけだった。まるで、お爺さんが孫を眺めているようなそんな表情である。

「……その表情を見ると、こうなんかモヤツとする」

「それは恐らく、お嬢様と同じような気持ちでしょうな」

「お嬢様というと……シャルロッテ……？」

シャルロッテとなると……という感じに連想ゲームを始めるグラン。そこまで長い時間思考するのも駄目なので、素早く頭を回転させる。そのおかげで直ぐに答えに行き着く。

「ああ、これが子供扱いされた時の気持ちか……」

「まあ、お嬢様は本当に成人していらっしやいますが、団長殿は実際未だ子供ですがね」

「うぐっ……確かにまだ20にもなっていないひよっただけど……」

「しかし、実力はかなりのものです。恐らくこの団にいる強者達も、あなたの歳ではまだ貴方並に強くなかったでしょう」

「なんか、褒められてんだか褒められてないんだか分からない……でもまあ、そうやって褒められたら嬉しいやっぱり」

「ふふ」

『そういった素直さが、子供の様に好感が持てる』とセワスチアンは内心思っていた。が、これを口に出すとまた変に拗ねる可能性があった

ので、これ以上は特に触れることもなかった。

「その笑みでまた何か考えてそうだけど……何か会話が泥沼になりそうだから、切り上げておこう。」

「じゃあ、三通目行ってみようか。『騎士の鎧は使わないのですか?』  
そう言えば、スーツというか……執事が着るような服きてるよね」

「あくまでも、お嬢様の執事ですからな。リュミエール聖騎士団の騎士でもあります、それ以上に執事……いや、爺やでいたいのですよ。」

それに、鎧は纏わなくても戦うことは可能ですからな」

グランにも思い当たることがあった。最近使ってるジョブの中にも、鎧を使わないジョブが多くなってきているような……そんな気がするからだ。

「もしかして、鎧って強くなっていくと着なくなってくる……?」

「どうでしょうねえ……『殴られる前に殴る』と『肉を切らせて骨を断つ』という2つの戦法が主なものですが、そのうち後者をメインで使う者は、さすがに鎧が必要になってくるでしょう」

「セワスチアンは……まあ前者だよな」

「お嬢様もですな」

シャルロット、というよりもハーヴィン全体がそのような傾向にあるだろう。一応、鎧をつけているハーヴィンもいるが軽装だったりする。それこそ、ブリジールなどがいい例である。

但し、何事にも例外は存在するのだ。

「そう言えば……エルーンも軽装が多いような……」

「さすがにそれは気の所為で御座いましょう、鎧を付けているものも多い。ただ、この団には先程申した2通りの戦い方の内、前者を主にしている者が多いというだけでございましょう」

「そういうものか」

そもそもエルーンの服装が、背中と脇がガッツリ空いているものが多いので、元々布面積がヒューマンの半分以下というのもざらである。

とんでもないレベルになると、最初の出会った頃のユエルなどになっってくるが。



「さて、そろそろお時間ではございませんか？」

「んー、ちよつと早い気もするけど……いや、中途半端な時間になるよ  
りマシなのかもしれない」

「では、最後におひとつよろしいですか？」

「珍しい……一体何事」

「お嬢様との事です」

「何も、おかしな関係にはなっておりませぬが……」

「いえいえ、ただ……私、誠に申し訳ありませんがお嬢様が本当に悲し  
んでいる時に、少々我を忘れてしまうことがあります」

グランは冷や汗をかいていた。セワスチアンが言わんとしている  
ことは、ちゃんと彼に通じていた。通じているからこそ、グランは下  
手なことが言えなくて腹に穴が空く思いをしていた。

「さて、話を戻しましょうか」

「はい」

「お嬢様が泣いている時、背中にはお気をつけください」

「はい」

「では、代わりに私が締めると致しましょう。皆さんご視聴ありがと  
うございました、またこの番組で団長殿とお会い出来ますよ。

では、お元気で」

そう言つて、セワスチアンはテキパキとカメラの電源を落として、  
後片付けをして既に部屋から出るだけの状態に収めていた。その間、  
グランは顔が青を通り越して藍色に染まっていた。

「おやおや、随分と体調が悪そうですね」

「H A H A H A、そんなことないよ……うん、そんなことない」

原因を生み出したのはどこのどなたやら、そんなツツコミを入れて  
も目の前の自称老獪は、軽やかに流すだけだろう。故に、グランはこ  
れ以上この話題を続けるのは不毛だと感じていたし、これ以上ここに  
居ると胃に穴があくどころかそれ以上のことが起こりかねないとき  
え思っていた。

「さて、そう言えばそろそろご飯の時間ですね」

「あ、確かに」

「子供達もお腹を空かしていることでしょう、ついでにいつもの料理体験会をしますか」

「え、何そんなことしてんの」

「ええ、まあ。子供たちに料理の美味しき、そして調理をすることの楽しさと同時に、危険性を学ぶにはいい機会ですからな」

グランも、正直それに混ざりたかった。ただ、この場合の子供達というのは恐らく自分よりも年下……良くてクムユやアレクなどの年齢の子達になるだろう。

よく考えたら、あの子達とそこまで年は変わらないのだ、この団長は。

「……料理ができる子供って、ヤイアとかだよね」

「そうですね、彼女はとても腕がいい。そして何より、料理にかける思いが違う……彼女もまた、リユミエールグルメを作ることが出来る逸材なのかもしれませんな」

「ヤイアのリユミエールグルメ……」

彼女がいつも作るチャーハンのせいかな、妄想してもチャーハンを作っている絵しか浮かんでこない辺り、相当なイメージがこびりついてしまっているように思える。

実際問題、チャーハンをかなりの頻度で作っていることは間違いないのだが。

「団長殿も参加しますかな?」

「え、いいの?」

「ええ、構いませんよ」

「なら参加する」

突如、団内で開催されている料理体験会に参加することになったグラン。しかし、かれはまだとある事実気づいていなかったのだ。

主催者は、言わなくてもわかる通りセワスチアンである。そして、セワスチアンが定期的を開いている以上……それを教えられている子供たちの腕も、メキメキと育っているという事になるのだ。今、彼らがどのレベルにいるのかグランはまだ分かっていない。

後日、そこには一心不乱に料理を作り続けてルリアやアーミラ、そ

してレツドラックの胃袋に延々と料理を送り込ませるグランがいるのだが……それはまた別のお話。

## リュミエールクライシス

今グラン達はとある島に来ていた。というのも。この島で大型の魔物が現れたという話があったからだ。ついでに言うと、この島では過去人間達が争っていたという形跡があり、歴史的にもそこそこ価値のある場所である。

何故そこそこと言ったか、それは価値がある以上にこの島では貧困が凄かったからだ。正確に言うならば、貧富の差というものがとても大きかったからだ。もつと言うならば、それを加速させているのは富裕層、そして加速させている結果貧民層の者達は20歳まで生きれば上等とされている。

そんな中、その状況を改善しようと1人の少年が依頼を出した。依頼を出した時にかかる仲介料が本来発生するが、シエロカルテはそれを特別に無しとして密かにグラン達に依頼を回したのだ。極秘に回さないと、周りがうるさいというのもあるが。

「よし、じゃあ作戦説明を各メンバー唱和開始」

目の前にいるのは、リュミエール聖騎士団の者達。今回、やれる事が各自で違ってくる者達を連れてくる必要があったのだが、主な作戦をこのメンバーで行うことになった。

「自分は富裕層東地区の制圧であります」

「私は西地区ですね」

「んでもって俺が南と北担当、北に関しては終わった者が順次行うこと」

富裕層、この島のこの村ではかなり小さな規模である。故に、1つの地区を制圧するのも1人で充分だと判断したのだ。

因みに、富裕層は全員貧民層から無茶苦茶な労働などをさせているので、それで逮捕しまくるので制圧するのと何ら変わらない……故に制圧と言っているのだ。

「私は貧民層の街で炊き出しです、広いので先に出向いているグランサイフアーキツチンメンツと合流して行う、そうですね」

「私も同様なのです」

「私はブリジールの警護だ」

セワスチアン、そしてブリジールは貧民層で炊き出しである。しかし、貧民層は島の99%を占めているのでとても数人ではカバーできない。ひとまず、料理をひたすら作って貰うためにキッチンメンツも先にこの村に来ているのだ。

「んでもって、他のリユミエール以外のメンバーはいざと言う時のために待機。白竜騎士団と雷神卿も場合によってはこちらに参戦して手伝ってくれるので、その連絡は俺が向こうにいるルリアに何とかして送る」

「各々で問題が発生した場合は、各自握っている信号弾を発射：団内で高速で飛行が出来るものがその場に向かう……でしたな？団長殿」

セワスチアンが確認を取り、グランは確認する。作戦開始まで少しあったので、疑問がある者がこの時間で質問する時間帯となった。

「私たち3人で足りるでしょうか？」

「そこん所は、頑張るしかない。あんまり大勢で来ると警戒されるかもしれないし、せいぜい富裕層の所に来て各自別れる程度がベストだと判断した」

「場合によっては、反抗されるかもしれないのであります。確認なのですが、その場合護衛は」

「殺さないで何とか倒せ。殺すと俺らがやってるのが本当に侵略と変わらないと判断される可能性もある」

「そう言えば……この島には司法は無いのですか？」

「元々この島がやばいってのは、各国や他の島々も判断してたよ。けど、今まではのらりくらりとかわさっていたのさ。国で駄目なら、個人で動くしかない……案外、依頼として出されたのは好都合だったかもな」

「というところ……」

「俺らが、どの国にも属さない騎空団だったからだ。しかも、それなりに強いと評判で人数も多いと来た」

「つまり……あまりにもちようど良かった、という事ですか」

「失敗しても縁切り尻尾としての役割ができるし、成功したら俺らに

報酬丸々入る。そういう面で見ても、各国からはちょうど良かったのかもな」

そうこうしてる間に、時間が来た。グランは時間を再度確認して、全員の作戦をもう一度確認させてから……この島そのもののシステムを破壊するために、動くのであった。

「誰だ貴様!!」

「自分はリュム……っと、今はただの騎士であります!!」

国の名前を出すのは大いに不味かった。自分達が失敗するとは到底思えないが、不安の芽を消すためにシャルロットはなるべくいつもの口上は言わないようにしていた。

「ふん！ハーヴェインの騎士なぞ恐るるに足りぬ!!衛兵！であえであえー！」

その声とともに、どこからともなく大量の衛兵が現れる。この富裕層は、どうやらハーヴェインを舐め腐っているようだった。それに気づいたシャルロットは、スッと落ち着いて傍目から見てもわかるほどに雰囲気を変える。

「ハーヴェインだから……それで舐めていては、負けるのは貴殿らの方でありますよ?」

「多少腕がたつようだが……自分の身長ほどもある大剣を、ハーヴェインが振り回せるはずがない、どうせこけおどしだ！やれ!!」

「うおおおおおおー!」

「仕方ないでありますね……」

迫り来る衛兵たちに、シャルロットは落ち着いたままである。そして、衛兵の1人が武器を振り上げた瞬間……シャルロットは動き始める。

1人目の武器を弾き、その瞬間剣で殴り飛ばす。そのせいで後ろにいた他の衛兵たちも何人か巻き添えで飛ばされて、その時点で気絶して終わり。そのまま自分を軸に武器を回転させて2人目の頭から剣で殴って気絶させる。

その勢いで一気に移動して、同じように剣で殴りながら3人目、4人目と進んでいく。

「な、なんだこいつ……」

「この程度でありますか」

「ひいひいひいひいひいひいひい!!」

10人ほどいた衛兵は、30秒も掛からずに全滅。文字通り『この程度』なのである。所詮、雇われ騎士なのだったらこの程度なのかもしれない。何せ、貧民層に脅して使う程度でしか使ってこなかったのだから。

「さて、どうするでありますか?」

「で、抵抗しないから殺さないで!」

「さて、ご飯が出来ましたよ」

「わあ……お爺ちゃん!これ食べていいの!?!」

「ええ、どんどんお食べなさい」

一方その頃、セワスチアンは貧民層の村で炊き出しを行っていた。最早料理対決を一人で行っているのか、と言うくらいに大量の調理器具を取り出して、その場で調理を行っていた。

「凄い……こんな食べ物見たことがない……」

「ほほ、遠慮しなくていいんですよ」

子供たちと会話しながら、セワスチアンは作る料理を決めた。お粥である。何故お粥？という話になるだろうが、それは今の会話で子供達が具材の食料の事を『見たことがない』と言い放ったためである。食料もまともに見た事がないレベルとなると、あまり本腰を入れて作った料理を、胃が受けつけないかもしれない。となると、消化が早くて食べやすいお粥をベースに色々な味付けを行っていった方が、子供達のためになると判断したのだ。

「と、なると白米が大量に必要になりますね……」

そう考え込むセワスチアン。信号弾に関しては、どんな些細なことでも使っていていいとも言われているので、躊躇わずに打ち出そうとする……が、その前にセワスチアンの目の前に1人降りてくる人物がいた。

「その必要はないわ、セワスチアンさん」

「貴方は……十天衆のソーンさんでしたな」

降りてきたのはソーンだった。全力で飛ばしてきたのか、その額には汗が浮かんでいた。それと一緒に、山積みになった袋詰めのお米も持ってきていた。

「今の話は全部聞かせてもらっていたわ、お米が必要なよね？持ってきたわ」

「手際が良すぎて怖いくらいですな……しかし、貴方は耳がいいとは聞いたことがありますか……？」

そう、ソーンは魔眼を持っているがそれはとんでもないくらい目の良さ……というものなのだ。それと同等の聴力を持つという話は、セワスチアンは聞いたことがなかった。



「セワスチアンさん、読唇術って知っているかしら？」

なるほど、とセワスチアンは十天衆の規格外をこんな所で感じ取っていた。そして、同時に持ってきた大量の米を見て、これなら子供達に分どころか大人達に分までも補える…そう確信したのであった。

「いやあ、グランサイファー全員で力を合わせるっていい事だね」

「そうなのです！」

「いやあ…ブリジールは凄かったよ。大量に並べられた鍋を、一人で管理してとても美味しいスープを作っていた」

「私も、少々大人気ないところを見せてしまう程に…この島の富裕層に説教をしてみました」

そして、依頼を完了した後全員で打ち上げを行っていた。楽しそうに飲み食いしているのを見ながら、キッチンメンツも全力で楽しんでいた。

「あの富裕層達はどうなるのです？」

「違法なレベルでの税の徴収を行っていたみたいだし、見事に全員お縄さ」

「全員、秩序の騎空団に送られましたよ」

「お、リーシャ…：仕事お疲れ様」

「ありがとうございます、それと貧民層の人達の為に各国が力を上げてあそこを発展させるようですよ」

「定期的に様子見に行かないとなあ」

そんないい感じのことを話しながら、グランはグランサイファーか

ら島を見ていた。これからどのような島が発展するのか、それを考えて少しだけ楽しみな感情と、安心感が入り交じっていた。

「団長殿、ローアイン殿がチャーハン作り対決を挑んできたので審査員をお願いできますか？」

「チャーハン……食べる!!」

まあ主な目的なヤイアのチャーハンを食べるためなのである。無論、それもバウタオーダも分かっているので、ヤイアのチャーハンに負けないようなチャーハンを作ることを心がけている。事実、彼はヤイアのチャーハンが自分のよりも美味しいと思っているからだ。

「ふふ、グランサイファー内での幾度とない料理対決……今日こそは勝ってみましょう」

「カタリナが参加しないことを、祈っておいた方がいいと思うよ」

参加させてしまったら、対決なんてかなったものでは無い。そこは他のメンバーが何とかして、彼女を遠ざけてくれる事を祈っておくしかないのだ。

「あ、具材……というか食材残ってる？ 依頼で大半使い果たしたような……」

「ご心配なく、シエロカルテ殿がいい売り場を紹介してくれまして……そこで購入してはいかがでしょうか」

「よし、許した。というわけで早速美味しい美味しいご飯対決というじゃないか」

「ええ、絶対に負けるわけにはいきません……審査員として誘った私が言うのもなんですが、団長殿は参加しないのですか？」

「いやあ、俺はいいよ」

ぶっちゃけ、自分の腕も食べられるほどのものではあると思っているグラン。しかし、相手が相手なので勝てる気がしないというのが本音である。

料理を副業または本業として行ってきた者たちに、せいぜい飯食えたらいいわ程度でしか料理を嗜んでこなかったグランが勝てるとは、彼自身思っていないのだ。

後、セワスチアン参加するので100%勝てる気がしないというこ

ともある。

「なるほど、では参りましょうか」

「はい」

その後、チャーハン対決は盛り上がり、盛り上がった後、サプライズとしていつの間にか作っていたカタリナのチャーハンを、彼は団長権限で全部食べたのであった。

スピアナイト、突進しかないのか？

「本日のゲストはデリフオードさんです」

「よ、よろしく頼む…痛っ……」

「……筋肉痛？」

「き、昨日の依頼で…」

「昨日の依頼、キツかったもんな」

「後で、カリオストロが薬師達と一緒に作った湿布あげるから、それ貼って…」

「もう貼ってある……」

「……」

黒い鎧に身を包んでいるデリフオード。湿布を貼っていないながらも、筋肉痛に悩まされるその姿はグランには妙に他人ごとのように思えない節があった。

「……ええ、はい。見てわかるけどデリフオード筋肉痛らしいので、サツといきましょう」

「おじさんでもおっさんでもないのだ……これでもまだお兄さんなのだ……」

「30代でその言い訳はちよつときつい」

「えっ」

団内でも、おっさんまたはおじさん呼びを嫌う人物はいる。わかりやすい例としてアルベールが挙げられるが、彼は一応まだ20代後半という括りにすることが出来る。

しかし、完全な30代は流石にお兄さんで通すことは難しい様に思えている。

「いやいや、30代でもまだまだ頑張れる。40代からなのだおじさんというのは……」

「40代になっても、同じこと言っていないって自信はありますか」

「……言っただなあ、私」

「でもほら、自分がお兄さんだと思える時が1番お兄さんなんだよ」

「……なるほど、自分の最盛期は自分で決めるか」

「うん、まあそんな感じじゃないかな」

何故か意味が通じているこの会話。グランもフオローしたままではいいが、彼本人も30代はおじさんだと思っっている。

「ならば、私は未来永劫お兄さんだ」

「……」

妙にロゼツタが言いそうなことを言っている、とグランは思った。背中に植物の棘が飛んできて刺さったが、血は出てないのでよしとしよう。

「未来永劫はちよつと……」

「なぬっ!？」

「まあ、うん……そういう人がいてもいいんじゃないかな」

「……やはりカリオストロ殿に頼んで美少女にしてみらうか……?」

「え、何そんなこと言われてんの!？」

今までの会話から、突然飛び起きたかのようにデリフオードに詰寄るグラン。一応絡みがあったことはグランも知っているが、そのような会話をしているとは驚きだったのだ。

「ああ……錬金術師の一件の時にな」

「はえー……ああ、クラリスの両親助けに行った時か」

「そう、あの時にカリオストロ殿に言われたのだ。『錬金術で作った体になれば、筋肉痛に悩まされないと。ただ、美少女限定だと言われてしまったのだ』」

「カリオストロらしい気の利かせ方だ」

団を辞めたデリフオードに対して、あの時のカリオストロは妙に敵意を抱いていた。気を利かせる事は、それが理由でありえないと思っ  
ていたが……筋肉痛を解消する代わりに、美少女の体になるなんていう  
捻くれた気の利かせ方をするのはカリオストロらしいと言える。

「つて、あんまり世間話してる訳にはいかないや」

「お便りだったな」

「はい、大量に届いております。1通目『帝国兵って辞めても問題ない  
んですか』」

「退職金は出ないが……まあ私には仕事と割り切つて、子供を襲おうと

する事は出来なかった、という話か。それに、私が辞めたところで帝国にはあまり痛手になつていないだろう」

「言っちゃあなんだけど……兵士だもんね」

「それこそ、リュミエール聖騎士団の様な状況にでもなれば、相当な痛手なのだろうが……」

元帝国兵で、一番位が高いのはグランの知る限りカタリナである。しかし、辞めた人達は軒並み裏切り者となつてはいるが……

「よく考えたらさ、デリフオードって辞めたんじゃないかと……」

「……うむ、上司と折り合いがつかず解雇されている……」

「かつこいいこと言つたのはすごいと思う」

「いや、私だけ解雇されて職場がないから着いてきた、じゃあ示しがつかないと……」

そう、デリフオードはグラン達とあつた時既に帝国兵では無かつたのだ。ではなんだったのかと言うと、仕事を探すことに翻弄している30代の男である。

「まあ、夢は見るべきだけど見栄は張らない方が……」

「な、何故だかわからんが今日は団長がやけに辛辣なように思える……」

「さ、2通目行くか。『槍の名手と言われているのは本当ですか?』」

「ああ、百人将ダリルとゼシード……我ら3人は同期なのだが、何かしら噂されたものだよ」

「ゼシードって、一時期上司だった人だよ……」

「我ら3人、貴族の出でもなければ学があるわけでもない。この身一つで兵士となりのし上がってきた身なのだ」

ゼシードと百人将ダリル。共にデリフオードの旧友だが、一時期デリフオードが帝国軍に戻る際に二人とも口添えをしてくれた人物である。だが、結局仲違いしてグランサイファーに戻ってきたのだが。

「けど、お給料は向こうの方が良かったんでしょ?」

「……まあ、その辺りはどうとでもなる。それに、帝国軍と違ってこちらはそのびのびと過ごせるのだから一長一短だ」

時折帝国兵がやめたりしているのは、軍がキツすぎるからでは無い

だろうか…と思うのはグランの勝手な妄想である。しかし、カタリナはともかくとしてもユーリやアラが辞めているところを見ると、明らかに帝国兵という立場の優先順位が低すぎる気がしなくもない。

「まあ、俺はデリフオードの意志に従うよ。無理強いさせるわけでもないんでもないからね」

「けど、槍かあ…」

「団長も使えるだろう？それも、私と同等に…いや、なんなら同等以上か」

「まあ周りから教えられて覚えていつてるからね…おかげでごちゃ混ぜになった我流の槍術だし」

「我流でいいのだ、他人の技を教えてもらったとしても、それを自分の技に昇華できなければ意味がない」

「教えてもらわなければ意味が無い、かあ…」

「どうした？」

「いや、なるほどと思ってさ。確かにその通りかもしれないね」

「納得して貰えると、こちらも嬉しくなるな」

デリフオードはニコニコと微笑みながら、グランを見ていた。まるで親が子供を見るかのような視線だが、そういうのを含めておっさんとかおじさんとか言われるのではないだろうか…とふと考えてしまっていた。

「……」

「団長？どうした？」

「いや、デリフオードって結婚してるんだよね？って思ってた」

「あ、ああ…結婚してるが……」

「奥さん大事にね…」

「あ、ああ……」

何故か年下に妻を大事にしろと言われる始末。デリフオードは訳が分からず混乱していた。色んな意味で。

「さて三通目『鎧を脱げば筋肉痛もマシになるんじゃないですか？』」

「……？これは、どういう…」

「慣れてて忘れてるかもしれないけどさ、鎧って重たいんだよ」

「ああ、それは知って……なるほど、脱げばその重さが無くなる分筋肉の疲労も少なくなるということか……」

「多分そういうことなんだろうね」

帝国軍に復帰前の彼の鎧は、丸みが目立つ銀の鎧だった。そして彼は、片手に槍もう片方の手には大きな盾を持って戦闘行動を行う。鎧よりも、大きな槍と盾が筋肉痛の原因という可能性もある。

「……いやしかし、私はこちらの戦い方で慣れきってしまったてるからな」

「変えるとなると、ヘルエスみたいに綺麗に回しながら回避しつつ突くって戦法になるのかな？」

「……私には難しそうだ」

「いつその事羅生門研究所で、自動防御してくれる盾でも作ってもらおう？」

「やるやらないより、そこまで行くと純粋な好奇心で見たくなるな……」

「多分羅生門研究所なら作れる気がする」

防御を捨てる戦法は、どうやらデリフオードにはまだ難しいようだ。そもそも30代なので、避けて戦う戦法を若い時から身につけておかないと、今更そんな戦法に鞍替えしたところで全く育たずに終わってしまうだろう。

「となると……やっぱり今の戦法？」

「そうだな……結局の所そうなってしまうのだろうな……若い時から、もっと動いておくべきだったか……？」

「やっぱりカリオストロに義体作ってもらった方が早いんじゃない？」

「いやしかし……美少女だぞ?! 妻がいる身でそれは……」

「奥さん複雑な心境だろうね」

ある日、帰ってきた夫が何故か美少女になって帰ってきた。それは妻からしてみれば、ただただ困惑する状況だろう。一体何をどうしたらそんなことになるのか、カリオストロという存在を知らない限り、分かるはずのないことである。

「……いや待って、もし結婚してなかったらいいの？」

「……」



「え、デリフオード？」

筋肉痛が辛すぎるから、美少女になつても構わないから回避したい……だから何も言わないのだと、グランは考えるようにした。正直、仲間がいきなり美少女になるのはグランも困惑するからだ。

「……さて、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「……」  
グランは話を切った。なぜだかこれ以上この話題を続けておいたら、成人男性の変な覚悟を聞くことになりそうな気がしたからである。

「じゃあ、俺……仕事に戻るから……」

「うむ……私も、依頼がないか探してくるとしよう……」

そして、まるで気まずい空気から逃れるかのように、二人は部屋の前で別れていた。グランは団長としての仕事を、デリフオードは依頼がないかをシエロカルテに確認しに行くこと。

二人とも、これ以上この話題を持ち出すことは無くなりこの話は自然消滅したのだ――

「そう言えばカリオストロって、美少女限定で義体作つてくれるんだよね」

「ああ、デリフオードのおっさんには言ったな」

「む……」

とある日、カリオストロとグランが話しているところをデリフオー

ドが見かけていた。

すぐさまもの陰に隠れていたが、盗み聞きは良くないと思いつついつい聞いてしまっていた。

「あれって俺のも作ってくれるの？」

「いや、グランのは無理だ」

「え、なんで」

「無理というか、俺様の気分がむかねえ」

「ええ……」

「…私の時は気分が向いていたのか…？」

まったくそんな事は無い。ただ、グランは男でないとダメだとカリオストロが思っているだけで、気が向かないとかそういう話ではないのだ。

「わからん…わからん……」

しかしデリフオードはそれに気づくことは無い。自分の美少女化のことでただひたすらに複雑な感情を抱きながら、その場をこつそりと離れて悶々とするだけなのである。

「え、じゃあデリフオードの時はなんで美少女化させようと思ったのさ」

「元々冗談のつもりだったんだがな、よく考えたら他人の義体を作ったことがなかったんで、試しにな。まあもうする気はねえよ、あの時はあのおっさんに対してちよつとキレてたしな」

「え、なんでキレてたの」

「まあ、俺からしてみたらあのおっさんはあの時裏切り者の可能性があったしな…俺様は、仲間を裏切る奴には容赦ねえんだ」

「……なるほど、ありがとうカリオストロ」

ただ、この場を離れるのは正解だったかもしれない。何故ならば、あのまま居続けていたら、この2人の無駄に甘い空気を吸うことになっただけかもしれないのだ。

妻がいる身だが、無自覚の癖に甘い空気を出す女たらしとそれに好意を寄せている少女の若さはデリフオードにとって危険だっただろう。

まあ、デリフオードにはそこまで考える余裕が無いのだが。

「……なぜだろう」

「グラン？ どうした？」

「今回、オチらしいオチを付けられていないような気が……」

「は……？」

## 焦熱の帝国魂、突撃しかないか？

「今日のゲストはユーリさんです」

「よろしくお願ひします」

「えーっと、ユーリはフアラと同期の元帝国兵なんだよね」

「はい、フアラを久しぶりに見かけた時はまあ：驚きましたよ」

「だろうね、同期が何故か指名手配してる奴と一緒に居るんだし」

この指名手配というのは、グラン達のことである。ユーリと初めてあった時は、そんな事もあった：という雰囲気ではか話さないほどにはネタになりかけているが。

「親父さんが帝国兵なんだっけ」

「はい、立派な帝国軍人になろうと思つてました。今は帝国兵では無いですが：今は、親父の顔に泥を塗らないようにいるつもりです」

「信念を持つことはいい事だ：」

うんうんと、まるで歳上であるかのように頷くグラン。言うほど歳は変わらないはずなのだが：とユーリはふと疑問に思ったが、褒められていることは素直に嬉しいと直ぐに思い直していた。

「まあデリフオードとかよりは、結構帝国軍人ってわかりやすいんだよね」

「そう：でありますか？」

「初めてあった時は帝国兵の鎧着てたしね、デリフオードは帝国兵つて一瞬分からなかったもん」

「成程：しかし、デリフオード殿は団長達と出会った時点では既に帝国兵を辞められていましたし、鎧も自分で買ったものになっていたのでは？」

「ま、そつちか帝国にあのタイプの鎧を貰ったか：だろうね。とりあえずそろそろ談笑は終わらせて、お便り紹介といこうか」

例のごとく箱を取り出して中を漁る。かき混ぜつつ、グランが直感的に1枚のお便りを、箱から取り出していた。

「……1通目『帝国兵になったばかりは、皆同じ任務をすると聞いたのですが本当ですか？』」

「まあ本当ですよ、最初は全員荷物運びです」

「それって物資を届けるとか…そういう役割ってことだよな」

「はい」

「確か任務効率がよかつたんだっけ」

「ええ、その部隊の隊長が指示をする。それに従って規律正しく動く、適度な緊張感を持ちつつも心の重荷にならない精神的負担の軽さ……まあ色々最初としては結構いい任務なんですよ」

部隊によつては、談笑しながら行われるらしい。ユーリは真面目だったが、この任務では肩の荷を下ろしている者もいるのだとか。それだけ最初の任務ということで、比較的楽なものを選ばせているのだろう。

「結構効率がいいんだなあ……」

「騎空士にはそういうものはあるのですか？」

「うーん……初心者の騎空士達にはこれ！って言うのは思いつかないかなあ…多分、シエロカルテに聞いたらかわかれるかもしれない。帝國兵は指針があるけど、騎空士はやりたいことによつては各々で指針が違うからそこが違いなんだろうね」

「成程……」

「多分効率がよくて、初心者向けのものってなつたら……偶に屋敷の草むしりとかあるし、それかなあ個人的には」

「そのようなものがあるのですか？」

「まあ偶に掃除し忘れた屋敷のお偉いさんが、その依頼を出してくる程度だけどね。それでも滅多にないよ」

「ふむ…」

「まあ、グランサイファーではほかの簡単そうな依頼にまずはついて行かせる…っ感じかな、戦闘できるメンバーに関しては…だけど」

「戦闘できるメンバー？」

「ヤイアとか…後ローアインもだね、戦えないけど他でやれることはあるよ？って人はその仕事を任せてたりするし、その特技を活かせる依頼に行ったりしてるよ」

「成程…」

ユーリは勉強会でも来ているかのように納得しては、それをメモ書きしていた。これではまるでどちらかがインタビュールされていくからにないし、そもそもこの番組で勉強すると以降のメンバーが萎縮してしまいかねないので、堅苦しいのは禁止にしてあるのだ。

「さて、勉強会は程々にして……2通目『フアラさんは帝国兵の時はどんな人だったんですか?』」

「今とあまり変わらない、それだけですかね」

「あつさりしてるねえ……元々カタリナ追いかけてたり、転びやすかったり料理が得意だったりしてたの?」

「はい、ただ料理が得意なのが一人いるだけで……大分心が楽になるって話があるんですよね」

「へえ、そうなんだ」

「俺らの時は……偶に野生動物を狩っては捌いて焼いてましたね」

「……携帯食糧とか、無いんですか?」

「基本的に携帯食糧を使うのは、本当にその辺に食べられるものがあった場合ですね。携帯食糧って……まあ基本肉なんですけど」

干し肉などが主な携帯食料だが、ユーリはあまり食べなかつたらしい。それよりも、野生動物を捌いて食っていた方が彼としては好みなようだ。

「でまあ、話を戻すんですけど……フアラって結構調味料とか持ってるんですよ」

「鎧の中に?」

「鎧の中に」

フアラらしいといえば、フアラらしいものである。料理選択掃除等の家事を得意とする彼女は、常にまずい飯を食うのが嫌だったようだ。

「生肉焼いて食うより、塩とか胡椒かけた方がやっぱり美味いらしくて」

「なるほど……今度から依頼行く時フアラ連れていこうかな……」

フアラを連れて行けば、料理が華やかになること間違いなしである。グランも料理はできるから、可能な時は基本的にやっているが……

やはり手は欲しいものである。

「団長殿は、野営する時はどんなものを作ったことがありますか？」

「あー…基本的にそつちと一緒だけど、木の実とか食べられるものを潰してソース作ってたなあ」

「ソースですか…」

「ま、果実とかになってくると、基本的に甘いソースしか作れないんだけどね」

「酸っぱいのとか、なかったんですか？」

「いやあ、記憶にないかなあ…1番いいのは胡椒とか塩だよやっぱり…」

「…って話だいたい逸れてきたな」  
ふと気がつくと、ファラの話から野営時の食べるもの話になっていることに気がつくグラン。話を変えるために、最後の3通目の手紙を取り出す。

「3通目『盾は持たないんですか？』」

「盾は基本的に帝国兵士は持たないですよ」

「そう言えば、剣を両手持ちが基本だよな」

戦っている帝国兵や、ユーリの姿を見て思い出しているグラン。帝国兵は基本的に剣1本で戦っている様だった。カタリナも、レイピアとは言え剣1本で戦っていた。

「デリフォードが例外な感じなのかな」

「まあ、一般的な鎧があれなだけです…：功績を積みればそれなりに自由は貰えますし」

「なるほど…まあ槍の名手だなんて呼ばれてるし、功績は凄かったんだらうなあ…」

「デリフォード殿は1から頑張っていたようすしね」

「確かに…」

よくよく考えてみれば、功績を詰んでるであろう異名を持っている帝国兵は、皆どこか武装が他と違うというパターンが多かった。とは言っても、全て帝国兵から始まっている訳では無いだろう。そうなる、帝国幹部が何人かおかしなことになるから。

「帝国って、兵士以外にも軍に入れるルートあるの？」

「まあ、余程の例外か…それとも指揮能力に長けていたら直ぐに指揮官クラスには抜擢されると思いますよ」

「フュリアスとかそのルートなのかなあ」

フュリアスを見る限り、指揮能力は見ても人格などはあまり重要視されていないらしい。結構問題行動は多いように思えるのだが、大丈夫なところを見ると本当に人格はどうでもいいらしい。

「フュリアス將軍ですか…」

「帝国内だとどんな噂なの」

「口が悪い同僚が言ってたことですが、『有能なガキ』らしいです」

「マジで口が悪いなその同僚…」

「というのも、見た目では無く言動やその性格からそう言ってたらしいですが…」

「まあフュリアスも口は悪いけど、あの立場でいたんだし本当に將軍クラスでいいくらいには強かったんだろうね…遠慮無くえぐいこと出来る性格というのは、恐ろしい」

口こそ悪いが、躊躇してしまうようなところを遠慮無く行える、冷酷とも言える冷淡さ。それがフュリアスの強みだろう。無論、自分の思い通りにいかないのと偶に癩癩を起こす所は子供っぽいと言われても仕方ないと思えるが。

「まあ、正直なことを言うと帝国内でもあまり評価は良くなかったですね…あくまでも、一兵士達の間で…ですが」

「ま、俺は軍にいた訳じゃないからよく分からないけど…あれが『嫌味な上司』ってやつなのかな…」

「団長殿、恐らくそれは全く違うと思われれます」

「あ、マジで？」

「はい」

「そうか、違うのか…」

嫌味な上司所ではないのだが、如何せんいきなり騎空団の団長をやっているのです、どうにも想像がつかないようだ。そもそもグランサイファーに嫌味な人なんていないのだから。

「まあ違うなら違うでいいけど…そろそろ時間なので終わるか」



「おや、もうそこまで…」

「そこまで進んでましたよ、はい。というわけでご視聴ありがとうございますございました、また次回この番組でおあいしましょう。さようなら」

電源を切り、番組を終わらせるグラン。ユーリも、席から立ち上がってササツと片付けをする。

「ところで団長殿」

「どしたの」

「この後何か予定はありますか？」

「あと1時間もすれば依頼かなあ、一緒に来る？」

「あ、行きます」

このあとの予定を軽く会話しながら、グランとユーリは部屋から出る。部屋から出た後は特に重要でもない話題を話しながら、予定の島につくまで時間を潰す。

「そう言えばさ」

「はい」

「帝国兵ってみんな共通して武器は剣なの？」

「どうか剣が1番扱いやすいですし…次に銃とか、ボウガンですかね…ただ、こちらにも剣に比べたら技術があるので…」

「まあ、剣はとりあえず振っておけば勝手に技は決まってくるしね…」

「団長殿が言ったら、妙に説得力ありますね」

「そう？」

「まあ、ええ」

独学で剣術を覚えているグランは、はつきり言えば才能の塊だろう。簡単に色々な武器や技、それに術なんかを会得しているのだから。

「まあそれ言ったら、この団にはそういう人多すぎるからね…」

「確かに……」

どんな武器でも、必ずそれ1つに絞ればとんでもなく強かったり才能があったり…そんな人物がいる。それに関しては、十天衆がいい例だろう。

無論、グランは一時的には言えその十天衆に勝っているのだが。

「自分も、いつか団長殿の様に強くなりたいですね」

「俺を目指すより、両手剣ならジークフリートを見習ってくれ」

「……そんなに凄いのですか？実は、一緒になったことがないので……」  
「なら丁度いい。今から行く依頼はジークフリートが来るからその時に見てみるといい……すごい驚くぞ」

実際、その後ユーリを連れてジークフリートと共に依頼に向かったが、曲芸士や軽業師もびつくりのアクロバティックかつ器用な動きを披露しながら、魔物を屠っていくその姿にユーリは驚きしかなかったという。

その時、ユーリが言った言葉が『本当に人間ですかあれ』だった。

正直なことを言うと、ジークフリートは実は星晶獣の力を埋め込まれた元人間だよ、と言っても通じそうなくらい彼は強いのだ。

「ま、本当はただの人間なんだけど……本当に人間？」

「一応、人間だ」

「人間の限界って何処なんだろうなあ……」

## 元帝国兵達のレクイエム

「どうして……こんなことに……」

「デリフオード殿……！」

悲しむグラン、倒れ込むユーリ。その彼ら2人の目の前にあるもの……それは、ベッドで倒れて眠っているデリフオードの姿であった。

彼は安らかな顔をして眠っていた。だが、時折苦しそうな表情をしていた。その顔を見て、さらに2人は悲しさを加速させていた。

「なんで、こんな……」

「まさか、まさか……筋肉痛で気絶して倒れてしまうなんて!!!」

「……申し訳ないが……筋肉痛じゃなくて腰をやったのだ……」

「あ、起きてた」

「いや、ここまで騒がれて寝ていられるわけにも……」

「つか何でこんな事になったのかユーリ知ってる？」

「実は――」

時は少し遡る。デリフオードは、少しだけ船の外で運動をしていたのだが、帰ってくる食料庫の前でユーリが大量の荷物を乗せた台車を引っ張っていたのだ。

「おや…ユーリ殿、その大荷物はどうした？」

「これはデリフオード殿！実は、団長殿が荷物を受け取ったらしいのですが…あまりの多さにその場にいた団員全員で手伝うことになったのですよ。」

俺は、ここに荷物を入れて欲しいと言われたので…ここにいるわけ  
です」

「なるほどな…よし、ならば私も手伝おう」

「え、いや悪いですよ」

「いやいや、これも運動の一環だと思ってやれば問題ないだろう…  
ところで、かなり多いが主に何が入っているんだ？」

「干し肉と野菜、それにアウギユステで取れたカツウオヌスの干物ら  
しいです」

台車から滑り落ちそうな程に積み込まれた荷物。ユーリ1人に任  
せているあたり、自分でも持てそうだとデリフオードは確信してい  
た。そうして、ユーリの代わりに台車を引っ張ろうとするが…

「あ、それいきなり腰に力込めると結構ガツツリいくんで――」

「ふぬあっ!？」

「で、デリフオード殿おおおおおおおおおおおおおおおおお!!？」

「ユーリ注意してんじやん」

「面目無い…」

呆れているグラン。申し訳なさそうに謝るデリフオード。それを  
見て、ユーリもデリフオードに同情の目線を向けていた。

「はあ……自分で何日くらいかかると思ってる？治るの」

「明日までには…」

「カリオストロとかシャオに見てもらって、ソフィアとかにも様子見てもらって…後で一応俺も様子見てあげるから、経過見次第だけど3日は重たいもの持たないこと。槍も禁止だからね」

「そんな!？」

槍すらも禁止されて、驚くデリフオード。背中痛みがひどいので起き上がれない為、少し返事をするのがきつそうである。体制的に、寝たままというのは辛いのだろう。

「で、では私はこのまま数日寝たきりでいろと!？」

「丁度いいからこの際だ、筋肉痛もある程度治してこい」

「言葉がきつい!!い、いや筋肉痛はないのだ!!」

「いや今起こっているとかじゃなくて、恒常的に起きないようにしてもらえって意味」

「それは最早不可能なのでは…!？」

グランのあつさりとした態度に困惑しきっているデリフオード。だが、休めるというのは彼にとっても悪い話ではなかった。

「いや、永久にっつてわけじゃないけど…ある程度なら矯正はできそうだよ」

「……というと?？」

「ファステイバにマッサージしてもらおうといいよ、すっごい効くから」  
「なんと…!？」

今までデリフオードはその可能性を考えていなかった。そうだが、マッサージのプロに矯正してもらえばいいのだと、ここで思い至ったのだ。

「それに、デュエリストとして体を作ってるファステイバの意見を聞けば、健康面でも参考になると思う」

「おお…おお…!!」

感涙しているデリフオード。今までその可能性に思い至らなかったのか?とグランは思ったが、よく考えてみればデリフオードはどこか諦めているところがある。年齢の事を気にしているが、それもどこ

か諦めているところがあったのだろう。

「ファステイバには俺が話つけておくよ」

「感謝するぞ団長殿あだあ!？」

「もう、起き上がるんじゃないよ!!腰を悪化させたいのかい!?!このあほたれ!!」

こうして、何やかんやでデリフオードの体作りが本格的に始まったのであった……とは言っても、マッサージを受けつつ湿布を貼りつつ様子を見つつ……ある程度回復してからでないと、試せないものばかりなのは言うまでもないことなのだが。

「あれから1週間……」

「ファステイバ殿は大丈夫だとおっしゃっていましたが……」

そんなことがあってから1週間、デリフオードの様子を見に来たグランとユーリこの1週間の間、本格的かつ集中的にデリフオードを治療していたらしいが……その結果が今でたということなのだ。

「デリフオード、いる?」

「おお、その声は団長殿か。入ってきてても構わんぞ」

「……元氣そうですね、声も前聞いたデリフオード殿の声だ」

万に一つの可能性として、カリオストロの手によって女体化していたり魔改造されていたり……そんな可能性も考えていたが、声だけならば普通だった。少なくとも女体化はされていないようだった。

「じゃあ入るよー」

「……」

生睡を飲み、緊張するユーリ。そうして開かれた扉の先にいたのは……いつもと変わらない、ただラフな格好になっているだけのデリフオードだった。

「……ちゃんと、デリフオード殿ですね」

「ああ……どんな姿になっても動じないようにしてきた心が無駄になった」

「一体どんな姿になっていると想像していたんだ……」

「……で、まあ……体の調子はどう？」

「ああ、素晴らしいな。筋肉痛に悩まされていた体が、嘘のように軽い！これが若さか!!いや、私は今でも若いのだが!!」

まるで別人にでもなったかのように、デリフオードはその場で反復横跳びをしていた。なかなか速い。それに感心して、無意識に拍手をしてみらした。

「本当に、純粹に治ったんですね」

「ああ！ただ、食事生活や運動なども、なるべく維持し続けていかななくてはならない」

「まあ、それはそうだろうね」

「それで確実に、私はこの慢性的になる筋肉痛を……治す!!」

まさに覚悟の表情というのを、2人は目撃していた。前々から筋肉痛にならないように、試行錯誤していたデリフオードだったが……今回はそれが実ったようだと実に感心していた。

「良かった良かった……じゃあ、俺らは今から出かけてくるから」

「ああ、私はこの後ファステイバ殿と再びトレーニングの時間を行う……何かあったら、呼んで欲しい」

「ああ、その時は頼らせてもらおうよ」

そうして、2人は扉から出ていた。そして、そのままグランサイフアーから一直線に歩いていったのである。

「いやあ、あんな状態になるとは……」

「にしても、やはり不思議な空間ですね……夢、なんですすよねこれも」  
「うん、さすがに1週間じゃあ多分まだ治ってないだろうから……無

理言って夢から様子見させてもらってよかったよ……ありがとう  
ヴェトル」

そう言って視線を動かした先には……紫の髪をした少女が現れる。  
ヴェトル：今は人間の少女のような姿をしているが、これでも一応夢  
を司っている星晶獣である。他人の夢の中に他人を送り込んだりす  
ることも可能だ。

「……ううん、貴方の頼みだから……けど、条件忘れてない……よね……？」  
「条件？団長殿、何か交換条件を出していたのですか？」

「うん、でも忘れてないけど？」

「じゃ、じゃあ……今日から1週間……添い寝……して、いい？」

赤面するヴェトル、その光景を見ながらユーリは思う……『団長に  
好意を寄せている女性は、種族の壁が完全じゃない』と。人間ならとも  
かく、星晶獣まであんな少女のような表情にできるのだから、相当で  
ある。

「いいよいいよ、カモンベイバー」

「やった……！」

「……ところで、デリフオード殿本人は？」

「まだろくに動けてないよ」

「夢を見させて……イメージが、体に追いつく様にしてる……私の夢は……  
見すぎたら夢の方に体と意識が引つ張られる、から……」

「……つまり？」

「デリフオードがああ夢を見せられてる限り、暫くは問題ないってこ  
と」

「なるほど……！」

因みに、ヴェトルの能力によって過去ラカムとカタリナが被害に  
遭ったことがある。ヴェトルが仲間になる前の話だが、その時見せら  
れた夢によってカタリナはグランを怖がり、ラカムはおじいさんのよ  
うに老け込んでしまっていたのだ。

「……団長と、添い寝……ふふ……」

「……団長殿」

「ん、何？」



「夢でもしかして治るのを早めているのですか？」

「あんまり動かないでいると、筋肉も弱っちゃうしね。しょうがない措置だよ」

「そうですか…」

ユーリは静かにはしやぐヴェトルを見ながら、グランと共にこの夢から覚めることになったのであった。

「ぬおおお…！」

「…何故だ…」

そして、そんなこんなで1ヶ月くらい経った頃……デリフオードは筋肉痛で苦しんでいた。その光景を見て、グランもユーリも困惑しきっていた。

「デリフオード殿…一体何をしたのですか…」

「ちよ、調子に乗って働き続けていたら……再発した」

「…何つでだよ…！」

グランの心からのツツコミが、デリフオードの心に突き刺さる。今日だけのものならばともかく、恐らくまた前と同じようになってしまっているだろう。

「ぬうう…私はまだ若いのに…」

「若いかもしれないけど…デリフオードはお兄さんじゃないよ…」

「…すまぬ…流石に今回は私が悪い…」

「そ、それよりも…何をして筋肉痛に…？」

「魔物の群れを1人で討伐していたのだ……昨日は…朝気づいたらこ

うなっていた……」

それでも何だかんだで、群れを一人で討伐出来ているので：槍の名手という名は、伊達ではないということだろう。何だかんだ言っても、デリフオードはかなり強い方なのだから。

「まあ……これからはあんまり無茶しない様にね？」

「あ、ああ……」

グランの言うことを素直に聞くデリフオード。こういう状態の時は、デリフオードが落ち込んでいる時とかによく見られる状態だ。何を言われても反論せず、自己嫌悪の材料として使ってきまう時のデリフオードである。

「……とりあえず治ったら、しばらく奥さんのところいたら？ 偶には会ってやりなよ」

「……そうだな、休暇をしばらく貰おうか……」

「奥さんと一緒にいてあげた方が、案外薬になるかもね」

「そうかもしれないな」

ユーリはグランとデリフオードが話し合っている中、1人考えていた。群れを一人で討伐している辺り、デリフオードは相当な強者だということと、いずれ自分もそこに追いつきたいという考えである。

「あの、デリフオード殿」

「む……？ どうしたのだ？」

「強くなれる秘訣……教えてくれませんか？ あ、勿論時間が空いているときに構いません」

「そうだな……私が休暇から帰ってきた時でいいか？」

「は、はい！」

ユーリ、彼は未だ強くなるために努力を積み重ねていく。デリフオードも、未だ現役でいるために強くあろうとする。グラン、言わずもがななので省略。

男3人、強くあるためにここで心の中で固い結束で結ばれた……様な気がするのであった。

夢見の双子、貴方が見るのはどんな夢？

「今回のゲストは、いつも二人揃ってるんで2人出しますよ。モルフエさんとヴェトルさんです」

「よ、よろしくお願いしますー！」

「よろしくー」

「モルフエとヴェトルはよく安眠作用のハーブティーとか、寝るために必要な道具を揃えてくれてるので……よく寝たいなあって人は1度相談するといいよ」

眠そうに椅子に座っているヴェトル、そして規律ただしそうに座っているモルフエ。この2人の正体は、ヴェトルは星晶獣オネイロスであり、モルフエはオネイロスに作られた存在である。しかし、今は姉のヴェトルと弟のモルフエとしてグランサイファーに乗船しているのだ。

「あの、姉さんが最近添い寝し始めたって聞いたんですけど……」

「同意の上の……合意だから……大丈夫」

「姉さん、それでもあんまり団長さんに迷惑をかけたらだめだよ？」

「いやいや、そこまで迷惑かけられてるわけじゃないし……気にしないで気にしないで」

「ほら、グランもこう言ってる」

「本音でも建前として聞かないと……団長さんも、あんまり姉さんを甘やかさないでくださいね？」

「むー……モルフエの馬鹿……」

膨れっ面になるヴェトル。彼女がグランの事をどう思っているかは明白ではあるが、グランからしてみればヴェトルはルリアやサラ等という所謂『妹的存在』に近いので、異性として認識されてないからこそその添い寝許可なのだ。

「もう……」

「はいはい、姉弟喧嘩は後にしてね。番組内で喧嘩されたら俺りーシャにシメられるから」

「グラン……お魚になるの……？それとも鶏……？」

「どこで魚や鳥をシメるだなんて言葉覚えてきたんですか、お父さん貴方をそんな子に育てた覚えはありませんよ」

「グラン…お父さんじゃない…」

ゆったりながらも、冷静にツツコミを入れてくるヴェトル。モルフエは逆に愛想笑いだけをしていた。どうやらあまりツツコミの才能はないようだ。

「さて、そんなお2人にもお便りがありますので紹介していこう」

「僕達2人なんですけど、時間足りませんか…？」

「ちよつと減るかもねえ…ま、そこはそこで…というわけで『通目』団員の夢の中に潜り込んだりする時はありますか？』」

「僕達2人に関しての質問ですね」

「した事ある？」

「頼まれたり、緊急時の時以外はやらないようにしています。特に、夢の中なのでプライベートなことを覗いてしまう危険性もありますし」

「まー…：：：グランに言われたら、どんな夢でも教えてあげるけど…」

少し複雑そうな表情を見せるヴェトル。グランはあまり教えたくないため、渋っていると思っているが…：：：実際ヴェトルが考えていることは、ほかの女の子の夢の内容を教えたくないし見たくない…：：：という考えだった。まあ、要するに男なら普通に教える位のこととはするという話である。

「なるほど、夢の中の話は他言無用なわけだ」

「はい、先程も言いましたがプライベートな部分が強いですから…：：その人の弱みや、叶えたい夢…：：今やりたいこと等を夢で見ている可能性があります。それを喋るのは、当人達にとって不利益なことにはしかならないと思うんで」

「なるほどなるほど…：：：モルフエ、もつと砕けた感じで喋っているんだよ…」

あまりにも、モルフエが堅苦しく喋っているように感じたグランは少し提案をするが、モルフエはなんの事だかわからずに少し首を傾げていた。彼からしてみたら、これでもまだ砕けている方なんだろう。

「だ、団長さんが言うのでしたら…：：：ローアインさん達にみたいに喋

ります！」

「あそこまでしなくていいから」

モルフエがローアインのように喋るのは、それはそれで需要が無いことも無いだろうが…如何せん、モルフエも大人ぶっている子供感があるので、グランは父性をガンガンに働かせてしまつてモルフエには絶対あの話し方はさせないと心に誓っていた。

「そ、そうですか？」

「モルフエがそれで碎けてるなら、モルフエはモルフエらしく喋ればいいんだよ」

「わ、わかりました!!」

「モルフエ……単純〜」

「ヴェトル、俺特製の飴ちゃんをあげよう」

「わーい……はっ……!」

渡された直後に、ヴェトルは気づいてしまった。グラン特製と言うだけで、簡単に飛びついてしまった自分の単純さに。

「ぐ、グランは……狡猾…そうやって、女の子を落としてきた……」

「わあお、すっごい人聞きの悪いこと言われた」

顔を真っ赤にしながら照れるヴェトルに、グランは軽くツツコミを入れる。雨を貰ったのがそんなに恥ずかしかつたのか、ヴェトルは顔を真っ赤にしたままだった。

「とりあえず2通目『夢の中で夢を見る、というのは実際にあるんですか?』」

「うーん……」

「あれ、なんか悩む質問？」

「実は、夢の中で夢を見るっていうのはあんまりないんですよね」

「というと?」

「確かに、凄く深いところで眠っているのならともかく……基本的に『夢から目覚めたという夢を見てる』って言った方が正しいかもしれません」

グランはモルフエの言ったことを、頭の中で反復させながらどういうことかを考える。そして、辿り着いた結論が1つ出てきた。

「つまり、初めに夢を見てその夢が終わったあとに『自分が夢から覚めるという夢』を見てるってこと?」

「大体そんな所です、少しわかりづらいんですが……」  
「いやあ、まあ確かに納得できる答えではあるよ」

夢の中で夢を見ていた、というのは中々実証できない。何せ、実際見ていたのは『夢から覚めている自分の夢』なのだから。その答えでグランは、納得してうんうんと頷いていた。

「でも……本当に、夢の中で夢を見る……はあるよ……」

「実際、そんな状態になってたら危ないって聞くけどどうなの?」

「すごく深い眠りに着いてて、尚且つ基本的に『自分が目覚めたくない』って思ってたから見ている時がありますね」

「基本的に、って言うത്?」

「大体、夢の中で夢を見ている場合……その夢の中の夢というのは、本人にとつての悪夢が多いんです。勿論、悪夢じゃない場合もあるので一概に『目覚めたくない』って思っている人じゃないですが」

「なるほどね」

「悪夢の場合、自分が現実を受け入れたくないために『これは夢だったんだ』という錯覚を起こさせる為の夢……とも取れます」

モルフェの説明に、グランは理解を深めていく。実に分かりやすい説明をしてもらっているので、本当にグランの夢に対する理解が深まっていくような気がしていた。

「なるほど、グダグダ話すつもりがここまでの勉強会になるとは思いもよらなかつたけど、案外ためになるかも」

「団長さんの為になつているのなら、良かったです」

「いえいえ、こちらこそどういたしました……というわけで基本的にはラストの3通目『ハーブには詳しいんですか?』」

「ハーブティーの調査は僕の趣味ですね」

「私は……夢の話聞くのは好きだけど……」

「なるほど、ハーブティーはモルフェの趣味ってことか」

「モルフェは……真面目、だから……」

にっこりと微笑むヴェトル。顔を赤くしてはにかんでいるモル

フエ。仲のいい姉弟を見せつけられて、グランの顔もニツコリと微笑んでいた。

「ハーブティーの調合っていうのは、安眠作用とか？」

「主にそれですけど……後は気持ちをおちつけたり、リラックスする事が出来るハーブティーもありますよ」

「ハーブティーって、俺触ったことないからよくわからないけど……モルフエに教えて貰ったら、結構知れることが多いかも」

「……むー」

何故か少しだけ頬を膨らませているヴェトル。飴をもう1つやつても機嫌は治らなかつたので、飴ではダメなようだった。因みに、飴は普通に食べていた。

「ヴェトルー？どうして不機嫌なのかなー？」

「グラン……モルフエとイチヤイチャしてる……」

「その発言は一部の人間に多大な影響を及ぼすのでやめて欲しいかな！！」

そんな発言をされてしまうと、一部の別の意味で腐つてらつしやる人達が反応するのだが、それを恐れたグランは即座に否定を入れる。

「……広めさせたくないなら、後で一緒にお昼寝……」

「何時間でもしてやるぞ」

「……やった……」

それで機嫌が治つたのか、ゆったりと微笑むヴェトル。いつの間、ここまで他人を動かすことに慣れてしまったのかグランは少し悲しくなっていた。まるで娘のように接していたのだから。

「姉さん……わざとそんな態度とつたでしょ……」

「勝利者は……私……」

Vサインをするヴェトル。ヒソヒソと話している2人に対して、グランは声が聞こえていなかったの、さらに追加で疎外感を味わってしまった。いた。

「……と、とりあえず……今回はここまでです……皆さんご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「夢に関しては…私達に、相談…だよ……」

最後にヴェトルが宣伝をして、カメラの電源が切られる。切られた瞬間、ヴェトルはグランに思いきり抱きついて顔をグランの腹あたりで擦りつけていた。

「えへへ…」

「ヴェトルは甘えん坊だなあ…」

「……あれ……？」

ふと、モルフエは思ってしまった。ヴェトルと添い寝するという事を、ヴェトル自身の口から番組放映中に言っているのだ。そして、团长たるグランは少なくともこの団の女性達から好意を持たれている。そして、この番組はこの船全体で流されている。それが一体どう言ったことを指し示すのか……モルフエは考えようとして、止めて、そして部屋から勢いよく飛び出していた。

「……？モルフエはどうしたんだ？」

「……さあ……？」

飛び出したことには理由がある。1つ、今回に関しては自分は全く関係がないからだ。いや、ヴェトルが関係しているからそれを言えば関係してると言えなくもないが、自分はグランに添い寝するわけじゃないからだ。

2つ、それでも姉を守りたいので来るであろう方向から、道を塞がねばならない。あの部屋は一方通行でしか来れないので、1つ道を塞げば来れないとモルフエは判断したのだ。

「姉さん達は…僕が守らないと……」

しかし、モルフエは…純粋なモルフエは気づかなかつたのだ。新しい通路が、作られていることに。しかも、よりにもよって部屋の前ではなく部屋の中に直接行けるような道が、上から繋がられていたのだ。ということに。

「うわっ!?ちよつとりーシャ!?急にどうした!?!」

「天井から、現れるなんて……」

「えっ」

部屋の中から急に現れた声に、モルフエは振り向いていた。まさか



こんなに早く、しかも直接部屋から現れるとは思っていなかったのだ。

「え、ちよっ!?姉さん!?団長さん!」

「流石に子供と寝るのはアウトです」

因みに、人間年齢で言うくとヴェトルとモルフエは11歳だ。星晶獣であろうとも、人間的な事を言えば精神年齢は子供同然なのだ。それでもヴェトルは、それを利用してくるのだが。

「一緒に寝るのダメなの!」

「団長さんだとちよっと絵的に…」

「酷い!!」

「え、なんで開かないの…!」

外からガチャガチャとドアノブを弄り回すモルフエ。部屋の内側ではリーシャがドアノブに手を添えているので、それで開かなくなっているのだ。

「まあ、とりあえず……反省室で反省文書いてもらいますよ」

「……俺だけだよね?」

「ヴェトルさんにもちよっと来てもらいますんで」

「ヴェトルは甘えてるだけなんだ……だから慈悲を……」

「駄目です」

そして、それっきり部屋から声がしなくなっていたかと思えば、既に部屋はもぬけの殻になっていた。

「い、一体何がどうなっているんだ……」

モルフエはそれだけしか呟くことが出来なかった。何が一体どうなっただけなのかな……彼には、全く理解できないのであった。

異界の艇人、懐かしいかい？

「今日のゲストはノアさんです」

「よろしく、こういうのに出るのは少し気恥しいね」

「いつもと表情が変わらないように思えるけど……まあでも、多少緊張してくれても話すのに支障が出なければ問題ない問題ない」

「そうかい？そう言ってくれると多少気が楽になるよ」

星晶獣ノア、彼は艇造りの星晶獣である。それ故に、艇自身と話せたり艇に合う材質の木材を選んだり……能力の応用法は多岐に渡っている。彼自身は、過去にラカムと一緒にいた事があった。1度は離れたものの、今また一緒に団内にいて艇を飛ばす為にラカムの力になつてくれていた。

「団長さん、少しいいかな？」

「はいはいなんですか？」

「僕が入った時は、全くと言っていいほど人がいなかったのに……グランサイファーも随分賑やかになったよね」

「確かに……」

「それに、人間だけじゃなくて多種多様な種族を乗せてる。人間に關しても、4種族以外の種族の人種も乗せてるし……本当に賑やかになつたね、グランサイファーも楽しそうだよ」

ヒューマン、ドラフ、エルーン、ハーヴェインの4大種族に加えて、星晶獣や動物、4大種族以外の種族の人間と、グランサイファーは多種多様な種族の者達が乗っている。その事を話しているノアは、実に楽しそうに語っていた。まるで、自分の事のように。

「そう？グランサイファーが迷惑がなくてよかつたよ」

「艇というのは、乗られることで喜びを見出すものだよ。誰もいなくて……人の声が聞こえない艇なんて、寂しいと思わないかい？」

「確かにね……厳格だけならともかく、人の話し声がしないなんて寂しいよ」

「グランサイファーは、毎日がお祭り騒ぎなのが気に入ってるみたいだよ？人が多いと……それだけ、人を祝ったりすることが多いからね」

確かに、とグランは頷いていた。ほぼ毎日誰かの事を祝っていてもおかしくないのだ。無論、皆で盛り上げていくので何ら問題がある訳では無いのだが。

「……ノア自身も楽しい?」

「もし楽しんでいなかったら、僕はラカムに言っつて団長さんに文句を言っつてもらおうつもりだから」

「えっ」

「冗談だよ、ちよつとからかってみただけさ。大丈夫、僕はちゃんと楽しく過ごせているよ」

笑顔でサラリと冗談を吐くノア。その事にグランは苦笑いでしか返すことが出来なかった。

「さて、いつもの通りだとお便りというのがあるんだよね?」

「そうだね、ノアにもいっぱい届いてるよ」

ガサゴソと、箱の中をかき混ぜるグラン。そうして、1枚を取り出して読み上げていく。

「1通目『ノアさんつて女ですか?男ですか?』」

「一応男だよ」

「まあ正直ノアは顔綺麗だし間違えることもある……のか!」

ノアは、はつきり言うのと美男子である。それに加えて話し方や肌の白さ、そしてイケメンと言うよりかは可愛い系統の整った顔立ちをしているので、まあ美少女という風に見える人もいるにはいるのかも知れない。

「僕はあまり気にしないけどね」

「気にしたほうがいいぞー」

性別不詳というのはいるにはいるが、ノアをその括りに入れると色々危険な香りがするので止めておいた。

「あまり性別には拘っつていないよ」

「星晶獣つてそういうものなの?」

「星の民がそうしたのか、それともそういう風に偶然できてしまったのか、はたまた僕だけなのか分からないけど……まあ、少なくとも僕は気にしてないよ」

ふと、ノアのラカムへの態度を思い出すグラン。あまり性別を気にしていないとなると、スキンシップが比較的落ち着いている方であろう彼の方が、助かる。

因みに、ノアは基本的にラカム以外と積極的に絡みに行こうとしないので、ラカム以外での態度があまり思いつかないというのが理由でラカムが選ばれている。

「でも考えたら…メデューサは性別を気にしてるというか、意識してる方だもんね」

メデューサには2人の姉がいる。そして、その姉のことをメデューサ自身が姉と認識している以上、少なくともメデューサは男女の違いの区別はつけているようだった。

「そうだね、彼女や彼女に近い星晶獣のことを考えたら、僕の方が少し異端なのかもしれない」

「……」

「団長さん？どうしたの？」

「やっぱり星晶獣って呼び方してるけど、人間と何ら変わらないよねえ…ただ大きさが自由に換えられるって人達がいるくらいで」

星晶獣というのは、基本的にでかい。そりやあもう果てしなくでかい。しかし、ティアマトやユグドラシルは人と同じような背丈になっ  
て今はグランサイファーに乗船しているので、そういうものなのだと解釈することが出来る。

無論、人並みのサイズだったりそれ以下のサイズでしかあったことがないような星晶獣もいるにはいるのだが。

「そうだね」

「ノアも大きき変えられるの？」

「さて、どうだろうね？少なくとも僕はこの姿だったからこそ、ラカムや団長さん達と出会うことが出来たとも言えるわけだし」

ノアは誤魔化したが大きさを自由に換えられない星晶獣もいるかもしれないので、もしかしたら『そういうもの』だという認識をどこかでしておく必要があるのかもしれない。

アテナやメデューサでさえ、人並みのサイズで生活しているのだから

ら。

「つと、話結構逸れちゃってたね。というわけで2通目いつてみよう。」

『今まで騎空艇を見てきてどんなのが気に入った?』ラカムからだね」

「多分、グランサイファー以外の話かな?」

「そうじゃないかな?」

「うーん……そうだね、僕はグランサイファーとよく似た船を知ってるよ。誰が乗ってたか、どんな船だったか……それは言わないでおくけどね」

「え、なんで?」

「大っぴらに話すことでもないからね。でもまあ、団長さんには後でこっそり教えてもいいかもしれないね。ただ一言言うのであれば……船も乗っている人も、お互いを信用しているようない関係だったと思うよ」

「ノアにそこまで言われてるんだから、相当いい人なんだろうなあ……」

「ふふ、そうだね。とてもいい人達が乗っていたと覚えているよ」

微笑みながら少しだけ語るノア。まるで親が子を見守るかのような表情で微笑んでいるが、ふと思いついたかのようにグランは話を戻し始める。

「他には印象的には船ってあった?」

「そうだね……配達艇、っていう名目で素早い速度で飛ぶ騎空艇なら見た事があるよ」

「どれだけ早いのか?」

「最高速度だと……まともに甲板に立ってられないとか、合ったりするね」

「それ船として成り立ってる……?」

「まあそれを防ぐために色々ほかの騎空艇とは、形が違っていたりしてたけど……」

「世の中にはいろんな艇があるんだなあ……」

しみじみと語るグラン。ノアの話、偶には長々と聞いてみるのもいいかもしれないと、ふと考えていた。

「さて、そろそろ3通目に行こうか……『最近グランサイファーで思うところはありますか』」

「…というところ？」

「多分なんでもいいんじゃない？ 実際、グランサイファーがどうなってるのかとか……団長として聞いておく方がいいだろうし」

少し考え込むノア。そして、しばらく考え込んでから思い出したかのように口を開いていた。

「最近、補修作業が多くなってきたから1度大きなメンテナンスをしておいた方がいいかもしれないよ」

「なるほど、じゃあ1回ガロンゾに寄った方がいいなあ……」

ガロンゾに寄るのは資材を集めるためなのだが、最近技術力がある団員もそれなりにいると気づいたので、グランは1度グランサイファーの団員だけで治すのもいいかもしれないと考え始めていた。

「その方がいいかもしれないね」

「やっぱり職人に任せた方がいい？」

「それでもいいかもしれないけど……グランサイファーを自分たちの手で直したい、って団長さんの思いはグランサイファーにもちゃんと伝わってると思うよ」

「ありや、ばれちやってたか……でも伝わってくれてたら嬉しいなあ」  
職人に任せられた方が確実なのは確かだが、自分達の艇は自分達手で直したいという思いも皆あるのだ。それを否定せず、肯定することでノアはグラン達の考えは決して間違いではないと遠回しながらに伝えられているのだ。

「…あ、もうそろそろ時間みたいだ」

「ふふ、こうやって最近団長さんと話す機会も減ってきてたから、新鮮だったよ」

「俺もだよ、やっぱりこうやって一対一の話をするのは楽しいもんだよ」

団員が多くなってくるといことは、一人一人との取れる時間が減ってくるということでもある。それでも皆、ちゃんとグランに着いてきているので信頼関係はきちんと構築されているのだが。

「では、ご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「この部分の素材は？」

「さつきと同じだよ」

番組が終わってから、グランはグランサイファーの修理に使う素材をノアに聞いていた。同じ艇と言っても、場所によって使われる素材が違ってきいたり、グランサイファーその物が気に入る素材で作らなければならぬという制限が少しある。その為、ノアに聞くのが手っ取り早いという事になったのだ。

「艇を修理するには素材から、素材を知るにはノアから聞くのが一番……やっぱり間違ってたなかつた」

「団長さんは、判断を間違えることはあまりないよね。けど、聞くだけじゃあ駄目だからね」

「分かってる、木材の加工の仕方とかも覚えなないといけないし」

「この騎空団には、鉄の扱いが上手な人達がいたね。鉄と木じゃあまるつきり変わってくるけど、つなぎとめるために必要な釘なんかは、彼らに頼むといいよ」

「木材に関しては……」

「種類を聞くならユグドラシル、加工方法は…僕に聞くのが手っ取り早いかな」

ユグドラシルはルーマシー群島にいる星晶獣、鉄の加工が得意な人というのはガラドア等のことである。ノアに聞いても問題は無いが、

艇造りの星晶獣なので簡易的に木材や鉄のことは分かってても、プロフェツシヨナルに聞いた方がいいというのがノアの判断である。

「分かった！聞いてみる!!」

「うん、行ってらっしゃい」

早速聞きに行くために走り出すグラン。ふと、その後ろ姿を見てノアは考える。グランが自分でグランサイファーを直せるようになった場合、彼の新しい技術が目覚めているのでは?と。

「最近、色んなジョブを手にしてるから……艇造りのジョブを覚えたりするのかな」

戦闘で使えるのか、という話になってくるが……そもそもドクターやセージを戦闘で使っているので、どうとでもなる話である。

「……ふふ、それでも僕は楽しみだよ団長さん」

星晶獣ではあるが、若い人間の活気を見るのは彼もまた楽しんでる節がある。自分でも自覚はしているが、それでも人間の成長を見るのは1つの楽しみになっていた。

「星晶獣は永い時を生きる……だからこそ、こうやって成長を眺めるのが楽しいのかもね。そうは思わないかい?グランサイファー」

語りかけるノア。言葉こそ喋らないが、グランサイファーの思いはきつちりとノアに届いていた。

それを聞き、ノアは微笑みながらグランサイファーの甲板で空を眺めるのであった。



## 船旅の夢現

天候は晴れ、気温は程よい温かき。そんな時にグランサイファーは空を飛んでいた。団員達もそれぞれ穏やかに過ごしている中で、グランは1人甲板の上で日向ぼっこをしていた。

「眠い」

そう言いながら、寝転がっている姿には威厳なんてほんの少しも感じられないほどである。

残念ながら、それに付き合う姿が2人あった。

「そうですねえ……暖かいですもんねえ……」

「確かに、こんな時は眠たくなるのもわかる気がするよ」

うつらうつらと、隣にモルフエとノアが同じように寝転がっていた。今この場に、ヴェトルはいない。

「そう言えば、ヴェトルはどうしたの……いつも二人一緒にいるのに」「姉さんは今部屋でぐっすりです……僕は少し散歩しましたけど、多分今でも寝てるんじゃないでしょうか」

「流石……俺たちも見習って昼寝するでしょう……」

「でも、こんな日に昼寝だけで済ませるのって……なんか勿体ないよね……」

「ノアの言いたいこともわかるけどねえ……」

いい言い方をするのであればゆったりと、はっきり言うのであればぐったりとしながら3人は甲板で寝転がっている。その雰囲気の違いか、会話もまるで適当に話している感が否めないものとなってしまう。

「あー……そう言えば、この後停泊するし……グランサイファーも昼寝させてやろうか……」

「うん……きつとそれがいいよ……ココ最近、グランサイファーもみんなも動きっぱなしだったしね……」

「僕も……皆さんが休めるようにハーブを調合しておきますねえ……」

「ありがとうモルフエ……」

寝返りも打たず、ただただぼーっとしているだけだが、それでもそ

れが有意義な時間の過ごし方だとしても言いたいのか、グラン達は満足そうに笑みを浮かべながら話し合っていた。

「……あ、そう言えば後で面白い物しないとなあ……」

「食料……足りてないんですか……？」

「干し肉とか、保存食色々あったでしょ……あれ今ね、全部ないの……」

「また、なんでそんなことに……」

「いやあ……最近減りが何故か激しくてさ……」

新たな団員がよく増えたり、子供達が成長期だったりもするので……主な理由としては、それらが食料が減りやすい理由なのだが、それを理由として思いつかないほどに、今のグランは惚けていた。

「まあでも、みんなよく食べてるってことはいいことだもんねえ」

「そうだよ……船も人も、みんな成長するのだから……」

「だらけながら言っても、いつものミスティアスは消えてるよノア……」

威厳も何も無い団長には言われたく無いと思うが、それを突っ込むものは誰もいない。ツツコミ役が不在となつているこの空間において、これほどカオスな空間はないだろう。

「あー……ヴェトルに後でなんか買ってあげようかなあ……」

「姉さんを甘やかすのは辞めてくださいって……」

「いやあ……反応が可愛くてついつい……」

「だから、姉さんも甘えちゃうんですよ……」

「甘えられるだけ、マシって事だよ……」

ヴェトルの甘えん坊っぷりは、団の中でも有名な程である。とは言つても、子供の甘え方と同等レベルの扱いをされているのはヴェトルは知らないが。

「そう言えば……後で油を買ってきていいかな？」

「んー？何に使うんだ……？」

「ラカムがね……舵輪の動きが悪い、って言つて……見たら所々状態が悪くなつてたみたいなんだ……」

「あー……それは早いところ治さないと……」

「緊急性を要する程じゃ無かつたから……あんまり気にしてなかつた

けど……」

舵輪が動かしづらいというのは結構な問題の筈なのだが、『ノアが言うんだったら』とグラン達は余り気にすること無かった。事実、艇の事ならばプロフェツショナルよりも理解しているのがノアという星晶獣である。安易に頼りきるのも、あまりいい選択とも言えないわけだが。

「そう言えば……ラカムさんと言えば、最近爆発する夢をよく見るそうですね……」

「え……グランサイファーが……？」

「いえ、自分が……」

「何それ……正夢……？」

「いえ……爆発はするけど、何だかんだ生きてるらしいです……」

「夢の中で……？」

モルフエが言っていることを、グランはよく分かっていなかった。モルフエ自身、ラカムがまったく何を言っているのか理解していないのだが。

「まあ……心が休まるハーブティーを最近飲ませているので、そろそろ大丈夫だと思います」

「ハーブティーで何とかなるもんなのそれ……」

「多分……何か、不安なことがあって……自分の身に不幸が訪れる……かもしれないって思った……のが……」

「……モルフエー？」

説明も途中のまま、モルフエの声は次第に小さくなっていきついは聞こえないほどにまでなってしまうていた。グランが顔を横に傾けると、そこには寝落ちしたモルフエの姿があった。

「……寝ちゃったか」

「まあ……僕達も似たようなものだけどね……」

「モルフエー……グラン……どこ……？」

唐突に、少し離れたところから声がグランの耳に入ってきた。声の主は、ヴェトルだとすぐに理解出来た。恐らく、部屋で目が覚めてモルフエがいないうことに気づいてから探しに来たと言った所だろう。

「ヴェトルー、こつちこつちー」

「あ…グラン、やつと見つけた……！」

「えぐぼっ!!」

見つけるなり、ヴェトルはグランに駆け寄ってからその腹にダイブを決めていた。ヴェトルの頭が綺麗にグランの鳩尾にジャストフィットしたせいも、グランは一気に意識が覚醒していた。

「えへへ……」

「げほっげほっ……そんなに探し回ってたのかー？」

「うん……モルフエが部屋にいなかったし……グランの部屋に行っても、グランはいなかったし……」

「あー、ごめんな。ずっとここで3人で寝てたから……」

「……あつ」

3人と言われて少し首を傾げたヴェトルだったが、そこでようやくノアの存在に気づいたのか、グランを挟んでノアとは反対側の位置に陣取る。そっち側には、モルフエがいたのだが、無理やり隙間に入り込んでいた。

「あはは、余程寂しかったみたいだね」

「ご、ごめんなさい……」

「いいよ、大好きな人が近くにいないって言うのはそれだけ寂しいことなのだから。すぐに会えてよかったよ」

素直に謝るヴェトル、そして全く気にもしていないノア。ノアの態度に少し安心したのか、ヴェトルはホっとしながらグランの腕により強く抱きついていた。

「ふふ、団長さんはやはりみんなから好かれて愛されるタイプだね」

「そうかな？」

「…私は、グランの事好き、だよ……？」

「おー、ありがとうなヴェトル」

優しく頭を撫でるグラン。ヴェトルは気持ちよさそうに目を細めて、撫でられることを享受していた。

「あ、そう言えば……」

「ん？どうした？」

「さつき、頼み事されたの…」

「頼み事？誰に？」

「あの…ファステイバっていう……………  
えっと、人」

男の人か女の子か、そこをヴェトルは迷ったのかなり間が空いてから言葉を続けていた。グランにも、ファステイバがどんな性別なのかはわからない。強いて言うなら、漢娘と言ったところだろうか？

「へえ、なんて？」

「正確には、モルフエが呼ばれたんだけど……『ハーブティーの入れ方を教えて欲しい』って」

「あー、モルフエか……」

ちらつと視線をモルフエに移すグラン。そこでは、安らかな寝息を立てながらガツツリと眠りに付いているモルフエの姿があった。これは明らかに、しばらくは起きないレベルである。

「……うん、しばらく起きなさそうだ」

「なら…起きるまでここで寝ておく」

ヴェトルはわざわざ、グランの隣からグランの腹の上へと移動してから、その顔をグランの胸板に擦りつけながらゆっくりと寝息を立て始める。寝ようと思っただけから、眠りにつくまでの間の時間があまりにも短すぎる。

「……ヴェトルまで寝ちゃったか」

「しかも、この寝方……まるで猫みたいだね」

「猫か……」

そう言えば、最近団の仲間入りを果たした若い猫は一体今どの辺にいるのだろうか？自由奔放にグランサイファーを歩き回っているの、見る時は見るし見ない時はてんでその姿を見る事はない。

「猫が甘えてる時って、確かにこんな感じだよねえ…」

ダントの猫達の中で、未だ甘えん坊なみいちゃんはよくダントの腹の上で寝ている時が多い。起きているのかはたまた元からなのか、ダントはその間寝返りを一切打っていないのもよく確認している。

「……それにしても随分大きな猫だことで」

「重たい？」

「全然、むしろ飯食ってんのかってくらい軽い。これなら後ヴェトル何十人も持てるよ」

「バランス悪そうだね」

ノアがよく分からないツツコミを聞きながら、グランはヴェトルの頭を優しく撫でていた。静かな寝息を立てながらも、無意識なのかその顔には笑みが浮かんでいた。

「……ん？」

「どうしたの？ 団長さん」

「……なんか、そろそろ魔物の群れとかがこつちに突撃してきそう」

「団長さんの勘って、よく分からない当たり方をするからね……彼女達、僕が部屋に連れていこうか？」

「ん、お願い」

「ところで……なんでそろそろ魔物が来ると思ったんだい？」

ノアの何気ない質問に対して、グランは空を見上げる。そして、遠い目をしながらも一言だけ、発する。

「……いつも、タイミングのいい時に現れるから」

「……ああ……」

これには、ノアも苦笑して納得するしかなかった。そう、いつも何かやろうという時に限って、大体魔物が現れるのだ。それはノア自身も理解していたので、ついつい納得してしまっていたのだ。

「確かに、昼寝をしよう……って時に来そうだね」

「全く……4人仲良くお昼寝タイムに持ち込む気だったのに……」

「団長さん、ここのところ忙しかったからね」

「めっちゃ忙しくて、すっごい疲れてる。なんなら2日くらい爆睡したいくらい」

「でも、それをせずに団長の仕事をちゃんと続けてくれてる辺り、やっぱり責任感がある人だよな、団長さんは」

グランはノアにそう言われて、若干嬉しそうになっていた。が、遠くから魔物の群れの声が聞こえてきたために、すぐさま思考を切り替

えてヴェトルをノアに優しく渡す。

「じゃ、モルフエとヴェトルの2人よろしくね」

「うん、任せられたよ」

「俺はあの魔物の群れを滅ぼしてくるから」

「ここら辺の空域では、騎空士初心者でも狩れそうな魔物しかいないはずなのだが、昼寝の邪魔をされたせいかグランの持っている武器が、明らかなオーバーキルだということにノアは気づいた。

「程々にね、団長さん」

「程々に焼いてくる」

「そう言いながら、いつもの早着替え……もといジョブチェンジを行い、ベルセルクへと姿を変える。ノアは苦笑しながらも、その姿を見送ることしか出来なかった。正直、グランサイファーさえ大ダメージを負わなければあまり問題にはしないし、グランがそんなことするわけがないというのはノア自身も理解しているので、その辺は安心していいた。

「真・魂魄灰滅!!」

「……うん、大丈夫…のはず……」

向こうから、火柱が立ちのぼるのがノアは確認できた。魔物の群れはそこまではないように思えるが、そこまで強力な魔物がいる気配もないが、恐らくきつと必要なことなのかもしれないのだ。多分。

「さて、僕達は部屋に戻ろうか」

「んにゅ……」

「ふあい……」

ヴェトルとモルフエを抱えながら、ノアはそのまま2人を団長室へと連れ込んでいく。その直後に本気を出していたグランによって魔物は壊滅したので、グランはそのまま団長室に行って2人と1緒に遅れて昼寝を始めるのであった。

星跡の巡礼者、我らに癒しの力を？

「今回のゲストはソフィアさんです」

「どうも、ゼエン教に興味をお持ちの方がおられましたら、私の方にご相談してくださいね」

「さて、ソフィア」

「はい？どうかしましたか？」

真面目な顔で、グランはソフィアに向き直る。ソフィアは真面目な顔をしているグランに対して、何か真面目な話をするのかと思いきや、背筋を正していた。

「その足はいかんでしょ」

「…へ？」

キョトンとするソフィア。本人は自覚がないのかもしれないが、ソフィアの格好はとんでもなく太ももが露出しているのだ。一時期、とんでもなく短いスカートを履いていると思っていたグランは、突っ込むべきか突っ込まないべきか悩んだほどに、太ももが露出しているのだ。

「いや、足」

「え、えつと……？」

「……自覚無し？」

「え？」

噛み合わない会話。どうやらソフィアは、あまり意識せずにあの短いホットパンツを履いていたらしい。ゼエン教は服装については、どうやらあまり意識していないらしい。

「ええ、正直私も前々から気になっていました」

「でしょ、リーシャ」

「えっ!?!り、リーシャさんいつの間にな?」

「いまさつきからだよ」

驚くソフィア、何も驚かないグラン。慣れきっているせいか、グランはリーシャがどこからともなく唐突に現れても、驚かなくなっていた。



これ以上驚くようなことがあるのか、という話だが。

「わ、私の服装については…直すように努力は致しますが…えっと、それなら私以上に露出している方はどうなっちゃうんですか…?」

「いや、露出の問題じゃないんだ」

「…?」

キョトンとした表情のソフィア。イマイチ理解できない彼女に対して、グランは一から説明するためにわざわざリーシャがどこからともなく取り出した紙に、サラサラと書き記していく。

「えっと、まず男性…とりわけ思春期の男の子は、女性のスカートの中が気になります。そこはOK?」

「は、はい…えっと、ちよつとエッチな事するんですよね…?スカート捲りとか…」

「はいそうです。でもうちの団の場合、スカートももちろん居る。けどメーテラやユエルみたいにもう格好が下着じゃん…って奴もいる。そういうのには、男の子はちよつと思春期心を擦られませんか」

「は、はい」

「スカートもいるけど、そのスカートを履いているメンバーにも短いやつはいるけど、それ以上に短い丈をしているのがソフィアなんです」

絵がかけないのか、名前を書いて『大丈夫』とか『大丈夫じゃない』とか色々書き記していく。ソフィアはそれで少し理解できたのか、頭の上に『?』マークを作りながらも頷いてはいた。

「えっと…つまり、私の格好は扇情的だと…?こ、今度から別のものを着用します…」

「あ、俺としては構わないので出来ればもつと短ぐんっ!!」

突如鋭い音が鳴る。気づけばリーシャの手にはハリセンが握られており、それで殴られたことは明白だった。

「カウンター」

「え、何そのカウンタめっちゃ怖い…」

リーシャから無言で渡されるお便り箱。グランは困惑しながらも、そのお便り箱の中から一枚のお便りを取り出す。お便りコーナーに

行くことを宣言してないので、いつも以上にシニールな光景になっている。

「…あ、忘れてた。今からお便り読み上げます…ソフィアにもいっぱい来てよ」

「う、嬉しいです」

「1通目『今まで1人で旅をしてきたんですか?』」

「今まで…?」

「グランサイファーに乗る前じゃない?」

「あ、なるほど…そうですね。基本的に1人で行動していました」  
得意の杖を自分に持たれさせながら、ソフィアは懐かしそうに語る。戦う力は無いものの、回復に関しては彼女はかなり上なので一時的なチームを組む際には『いてくれたらとても嬉しい』とグランも思うほどである。

「でもずっと1人じゃなかったんでしょ?」

「はい、偶にご一緒になった方と街まで歩いたり…そういうことは何度かありました」

「ごめん。正直ソフィアって純粋なのに、よく今まで…って思ってるよ」

「そうですね…偶に幸運のお守りとか、そういうのを渡されてお金  
が尽きてしまうこともありました」

「そういう時はどうしてたの?」

「お仕事のお手伝いなどをさせて頂いたり、私でも出来そうな依頼を  
成功させて、お金を稼いだり…色々しました」

「なるほどねえ…まあ、一人旅はやっぱり自分の腕っ節がないと  
色々ときついかもね」

ソフィアもまあ戦えないこともないが、それでも強力な魔物などは存在している。誰かに頼めばいいのは明白だが、世の中には足元をみたり騙したりする輩も存在するので、どちらにせよ自分で魔物を狩れる腕がないとかなりきつい部分があるだろう。

「まあ、ソフィアの場合人に騙されそうな場面が多そうだけど…人を疑うことをしないし…」

「ゼエン教の御加護ですね！」

「ゼエン教すげえ……と、このまま2通目へという。『なんで私服もいつもの服装と変わらないんですか?』」

「あう……」

いつもの服装というのは、ゼエン教の所謂制服のようなものである。厳密には違うが、ゼエン教としての役割を果たすために動いているソフィアは、私服よりもそちらの服の方をよく着ているのだ。

そして、私服というのはとある町によった際に変装するために購入した服で、雰囲気ガラツと変わるため団内で見たことある人物達からはだいたい評価がよかつたりする。しかしどちらの服も太ももが凄いいし、私服に関してはミニスカである。

「さつきその服の太ももの露出云々の話したけどさ、そうだよね……ソフィアの私服も太もも結構見せてたよね」

「えっと……そんなにおかしかったでしょうか……」

「別にこれは純粹な疑問なんだけどさ、その服装みたいにホットパンツにしなかつた理由ってあるの?」

「へ……?あ、これ可愛いなあ……って思ってた」

「なんとも女性らしい意見ありがとうございます……まあミニスカのおかげで色々と眼ぶぐん!!」

「2」

「しまった……つい……」

「あ、あの……?」

再びリーシャの持つハリセンが、グランの頭に叩きつけられる。セクハラは本能的に行う団長と、それを許さない秩序の騎空団団員のある意味攻防である。

「ああいやいや大丈夫……ああ、露出といえば……」

「はい?」

「……いややっぱり何でもない」

何も考えずに『なんで上半身はそんなに着込んでるの?』とか言いかけたグランだったが、リーシャの持つハリセンが2つに増えたことと、ソフィアだと本気にしてしまいそうなことを考えたら……口に出せ

ないでいた。

「とりあえず3通目な。『過去を見るといのは、疲れますか?』」

過去を見る、ゼエン教であるソフィアの力の事なのだが……これは正確には、過去を見るのでは無く星晶獣の記憶を辿り、その星晶獣の過去を見るというものだ。つまりは、過去ではなく記憶を読むと言った方が正しい。

「そうですね……かなり疲れます」

「星晶獣は、基本無茶苦茶力が強いからね。戦闘しないような星晶獣であっても、干渉が結構きつい時もあるってルリアも言ってたし」

「ルリアさんですら疲れるのですから、当然私も疲れます。けど、それを理由に困っているのをみすみす見過ごしたりは……私にはできません」

「ん、それがソフィアのいい所だってちゃんとみんな理解しているよ。それに、困ってる人を助けられないなんて選択肢は俺達にはないし」

多種多様なグランサイファーだが、何の不思議か全員困っている人を放っておくことは出来ない性格である。類は友を呼ぶと言うべきか、それとも団長であるグランに感化されたためかは分からないが……少なくとも、皆ソフィアの気持ちは一様に理解出来るのだ。

「後ソフィア」

「は、はい?」

「ルリアと自分の力を比べるの禁止」

「あう……」

出会ってしばらくした頃、ソフィアはルリアの力を聞いて落ち込んだ時があったのだ。理由としては、自分は星晶獣の記憶だけを読むことに対して、ルリアは対話を可能としている為である。

ルリアには星晶獣の感情を読むことも可能だが、正確には記憶を読むことはあまり得意とはしていないのだ。つまり、比べるにしても力の方向性が違うのだから比べようがないという話である。

「うう……でも、ルリアさんは星晶獣とお話できるけど……私は出来ないから……」

「はい、ネガティブ禁止。次ネガティブな事言ったらほったあはば

します」

「微妙に痛いやつじゃないですかそれ……」

「そもそも、前にも言ったけどルリアに出来ないことをソフィアはできるんだから……誇れ誇れ、これが自分の力なんだ才能なんだと自慢しまくれ」

「は、はい……！分りました!!」

グランの言うことが理解出来たのか、ソフィアはキリツとした顔で頷いていた。どうやら、自分の才能を褒められたのが少し嬉しかったようだ。

「さて……今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。また次回、この番組でお会いしましょう……では」

そう言ってカメラの電源が切られると同時に、リーシャがグランの前に立つ。その顔は、いつもと同じように真面目な顔つきだった。

「さて、団長さん……2カウント取られたので、その分の罰を執行します」

「あ、やっぱい忘れてたなんて口が裂けても言えない」

「ダイレクトに今言いましたね……では、2時間私と一緒にラードウガで……一緒にしてください」

「えっ」  
リーシャの言葉に、ソフィアは絶句して固まってしまっていた。唐突に二人きりで酒を飲みたい、というのは最早『そういうこと』のようになんか思えないからだ。

「え、何奢れって?」

「そういうのじゃないんで……ただちよつと一緒にいきたいなあつて」

「……まあそのくらいなら……」

グランが首を傾げながらもそれを了承した時、固まっていたソフィアが覚醒して、グランの肩を掴んだ。

「な、なら私も一緒に!!」

「ん? いいぞー、2時間も一緒にいる必要はないと思うけど……」

「……だ、団長さんがいいなら……私も、別に……」

少しだけ肩を落としているリーシャ。しかし、面と向かって無下に断ることは彼女としてもやりたくない事だったため、リーシャも了承せざるを得なかった。

「よーし、なら行こうかー」

「は、はいー」

「はい」

そして、そのままグランは2人を連れてファステイバの経営する『ラードウガ』に向かって、歩き始めて行った。行った先で、ファステイバは特に驚く様子もなく普通に受け入れてくれて、料理と：3人とも酒はまずいと思ったのか、ミルクやジュースなどを提供していた。

「そう言えば、ジャミルさんもそのスーツ様になってきましたね」

「ありがとうございます、これから精進致します故」

「もつと肩の力抜いていいからね」

こんな感じのゆるい会話をしながら、色々な世間話だったり他の事を話したりと……ゆったりとしながら、グラン達はラードウガでのゆったりとした時間を楽しむのであった。

ちなみに、罰らしい罰はグランには執行されなかったのであった。

天穿の銃槍騎、私の切り札はどれだ…？

「今回のゲストはラステイ」

「おい団長」

「……ラステイナさんです」

「なぜ私は縛られているんだ？」

「ん？じゃあ撮影開始前にお前がしたこと述べてみ？」

椅子に括り付けられ、ついでと言わんばかりにご丁寧に足と椅子の足を揃えるように縛られているラステイナ。なぜ自分が縛られているのか、本人は全く理解出来ていないがグランはカオスルーダーもびっくりの顔でラステイナを見ていた。

「……扉を開けて……」

「転んで扉吹っ飛ばして俺の脳天にドアぶつかったね」

「………椅子に座って……」

「座った直後に椅子が倒れてラステイナの武器が俺の頭にクリーンヒットしたね」

「………えっと……」

「その直後に武器が暴発して、俺が吹き飛んで1回落ちたね」

「き、きつと状態が悪くなってたんだ！私のお金を使って直して欲しい!!」

「人の金でグランサイファーを治すわけないじゃん……おかげで今の俺のHP98%まで減ったよ？」

少々焦げているグランだが、直前に嫌な予感としてスパルタへとジョブチェンジを決めていたので、なんとか耐えていた。しかし、ほんの数秒で部屋が煤だらけになっているのは否めない。

「うぐっ……くっ……殺せ！」

「殺せ殺せ言わないの、そんなこと言ってる屈強な悪いチンピラドラフに悪いことされちゃうぞ？」

「なっ!?私をあんなコトやこんなコトして辱める気か団長!」

「あー、はいはいポンバポンバ」

「流石に返事が適当すぎやしないか!」

カオスリーダーもびつくりの顔から、最早原型がなくなるくらいに破顔するグラン。その顔は最早気が抜けきっていて、別人のそれへとなっていた。

「た、頼む…余計なことしないから外してくれ……」

「外すわけないじゃん…さつきはちよつと可哀想かなあと思つて外したら、まさか胸で顎をカチ上げられて脳みそ揺らされるなんて、夢にも思わなかったよ」

「あう……」

実際その通りなのだが、ラスティナはこれら全てをドジで行っている。つまり無意識であり、彼女の意思関係なく行っていることなのである。実際、足を滑らせて頭を地面にぶつけた挙句そのまま気絶してしまうなんていうのは、ラスティナは一日に数度はあるほどだ。

「さて、じゃあこのままお便り読み上げていきますから…ラスティナはちゃんと答えるように…終わったら何とかして2人とも無事でいられるように解いてあげるから」

「わ、わかった……」

正直、ここまでドジを踏むのならば1度中止した方がいいはずなのだが、それでもグランは続けるつもりらしい。ラスティナも、それに従うことにしたのだ。

「さて、1通目『どうしてベアトリクスさんと一緒に船を破壊して回ってるんですか?』」

「……」

「……え、これどういう事?」

驚きすぎて、冷静に問いただすグラン。しかし、その目はやると言ったらやる気配を見せていた。

「いや、あの…2人で武器を持って歩いていると、偶に向こうから人がやってきたりするんだが……」

「まあ普通避けようとして壁際に寄るよね」

「ああ……寄ったはいいいんだが、大体その時に私が躓くん……」

「ん?」

「そして、大体の確率でベアトリクスに向かって倒れてしまう……つ



いでに、私もその時に武器のトリガーを引いてしまつて…その、爆発してしまふんだ」

「それで船破壊を…？」

「いや、本題はここからなんだ…爆発する直前、ベアトリクスがエムブラスクを持って…私の方に振り返るんだ、そしたらピンチを察してかエムブラスクがそのまま私に攻撃を出すんだ」

つまりは、ラストイナが躓いた影響でベアトリクスがとんでもないピンチになる。とんでもないピンチになることで、エムブラスクがとんでもないパワーアップされ、衝撃波を飛ばしてしまう。その2つによつて、グランサイファーが定期的に破壊されている…ということになつてしまうのだ。

「…なんか、妙に最近爆音が多いと思つてたら…」

「す、すまない…」

「…でもさ、回つてゐるってことは…1度や2度じゃないって事だよね？」

「…ついついさつきもしてしまつたので、今月で7回目だ…」

「今月で…ということとは前も…」

「す、すまない…言おうと思つてゐるのになかなか会えないし、会えたら会えたらで古戦場始まつたし…言う機会が、全く訪れなかつたんだ…」

グランは苦笑するしか無かつた。それと、ここで発表しているのだから、後でラカムからお怒りの雷が何度も落とされるかもしれないが…まあある意味自業自得と言うしかないだろう。

「というか、ベアトリクスと一緒に行動してゐるんだね」

「まあ…結構私達は似たようなところがあるらしいからな」

「似たようなところ、か…」

ドジっ子、自分のドジをあまり認識していない、捕まるとすぐに敵に殺せと言ひ始める、一応貴族…などなど、色々と確かに似通つた部分はこの2人には多いのだ。

「確かに多いね」

「特に、私とベアトリクスは戦闘での相性もいいらしいんだ」

ラストテナの武器は、大型の槍に大砲をくっつけた武器となっている。砲弾の発射と、槍の突きを行える遠近両用武器なのだが……専ら、ラストテナが躓いて暴発することで結果オーライと言った場面が多い。

「戦闘での相性って……それラストテナがドジ踏んで、それでベアトリクスがピンチに陥ったからエムブラスクが威力高くなってるだけじゃあ……」

「そ、そうなのか……単純に戦闘方法が噛み合っているのだと……」

「……まあいいや、とりあえず2通目に行くよ。『団員の中にゼエン教徒いますけど、その人達はいいんですか?』」

「……まあ、別にヴァツヘン派ではないからな……」

「最初こそ、俺が止めなかつたら危なかつたけどね」

ヴァツヘン派。ゼエン教の中でも過激な派閥と言われている所である。ラストテナの父親もそこにいるのだが、娘である彼女を置き去りにしたことで、ラストテナは真意を知ろうとヴァツヘン派の人間を探す為に、この団に所属している。

「ああ……」

「ソフィアとレッドラックも、真摯に話を聞いてくれたしね」

「あの二人と話して、ゼエン教でもヴァツヘン派ではない者達は、まだまだもなのだと認識できた」

「まあ、印象に残ってるのがヴァツヘン派ってなったら……確かにそりゃあね」

物事の一側面において、マイナスの面を初めて見たまたはそこが強く印象に残っている場合、他のいいところを見てもマイナスの方に考えてしまってしまうということがある。ラストテナも、ヴァツヘン派というものを見てしまったが故に他のゼエン教徒に対して、辛辣な態度をとってしまうこともあった。

「あの二人には悪いことをしたな……」

「まあ、あの二人も気にしてないみたいだし……とりあえず3通目行こう、3通目に」

「ん、頼む」

「『1回ヴァツヘン派がいる所に侵入したって本当ですか?』」

「ああ…潜入調査をした時の話だな」

ラスティナは1度、ヴァツヘン派が集まる街で変装して侵入した事もある。ドジっ子ラスティナが潜入調査なんて出来るのだろうか…と、グラン達は1度は心配になっていた。

蓋を開ければ、案の定敵に捕まっていたのだが。

「変装は完璧だったのにね」

「まさか秘密の扉の奥にあった階段から足を滑らせて、頭を打って気絶するとは…」

「そういう所がドジっ子って言われるところなんじゃない」

「私がドジ…?」

「え」

「え?」

自覚がない、というのは何よりも怖いことである。ラスティナは自分がドジだというのはほとんど認識しておらず、大体『偶然そうなた』とかそういう言い訳が多い。彼女にも一応部下がいるが、心労が伝わってくる。

「自分の悪いところは認識しような?」

「ちよつとタイミングとか運が悪かったただけだ…自分の力で切り抜けられる…時もある」

「そういう時じゃない時は?」

「…部下達や団長達が助けに来てくれた」

そこはきちんと認めているラスティナ。別に、助けてもらった恩を返せとはグランも言わないし思っすらいない。しかし、自分の体質を棚上げて1人で突っ込むと自分が危険にさらされてしまうのだ。と、グランはあくまでも自分の体を大切にしろとよくラスティナとベアトリクスに怒っている。別に助けに行くことは、何ら問題ないためそんな怒り方をする。

「OK、それを理解してるならいいよ。仲間がいる時はちゃんと頼ること」

「ああ、善処する」

「善処できるだけしてね……というわけで、今回はここまでとなります、ご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「ところで団長、いつになったら私の縄を解いてくれるんだ？」

「さて、いつだろうね」

「え」

固まるラスティナ。グランは冗談でそう言ったのだが、ラスティナにはどうやら冗談とは思えなかったようだ。でも正直、胸で頭揺らされているので、縄を外すのも真剣にやらないといけない。

「え、ちょ……本当に外してくれるんだろぅな?!」

「いや、まあ外すけど……暴れないですよ？」

「大丈夫だ、後ろ手に縛ってるんだし胸が当たる余地はないだろう!!」

「確かに……」

ちなみに、頭をゆらされた時はラスティナの腹の辺りに結び目を作っていた。『普通後ろだろう』と思うかもしれないが、そこはもう…このグランという男の性格を考えたら分かるかもしれない。

「さあ、解いてくれ！」

「まあ待つてろって……暴れんなよ……?」

「ふふ、分かっている」

縄を外し始めるグラン。じっとしているラスティナ。しかし、ただじっとしているのも手持ち無沙汰なので、ラスティナは窓の外を見ていた。綺麗な青空が広がっていると、そこから日光が差し込んで…

「眩しっ!!」

「ちよっ?!?何後ろに体重傾けて——」

咄嗟に後ろに飛びのこうとしてしまい、椅子を傾けさせてしまうラスティナ。咄嗟のことで反応できなかったグランは、そのままラスティナの下敷きに——

「痛っ!!お、おい団長!無事か?!団長!!おい、聞いているのか団長!!」  
ラスティナはグランを呼び続ける。しかし、そのグランは…ラスティナの下にはいなかった。

なぜならば、グランは床が開いて落ちていたからだ。最近使ってい

なかった為か、それとも急な力が掛かったせいかな勝手に開いてしまったのだ。ラスティナが落ちてない理由としては、奇跡的な引つかかりが出来てしまっているためである。

「何故だか背中がスースーするんだが!?おい団長早く起こしてくれ、団長!!」

その声は誰にも届かない。しばらくしたら異常を察知した団員の誰かが助けに来てくれるかもしれないが、少なくとも何時間かはこのままである。

「そ、そうだリーシャ!リーシャがいるだろう!」

「呼びましたか?」

「本当にすぐ来た!助けてくれ!!」

「分かりました……でもちよつと一人だと難しいので、誰か呼んできますね」

「ああ!頼んだぞ!!」

そう言って離れるリーシャ。この後、数分したらラスティナは助けられて、グランはなんとかかんとか船の底にへばりつきながら、生き延びていたという。

だが、登りきるまでにかなりの時間を要したのは……言うまでもない。

## 剛腕の大喰王、腹減ったか？

「今日のゲストはレッドラックさんです」

「おう、よろしくな」

「因みに今回、特別にいつもの場所ではなくキッチンでこの番組を行うことになりました……レッドラックめっちゃ食うし」

「すまねえな団長、無茶振りしちまってよオ」

「いやいや、番組始まる前からめっちゃ食ってるし……そもそも今の会話の中でも既にラーメン1杯食べ終わってんだからあんまり気にならねえわ」

今回、キッチンで番組を行うことになっている。理由としては、レッドラックが大食いであることと、単純に飯テロをしたかっただけである。キッチンにいるからと言って、2人で占拠してるわけではないので、キッチンと周りには団員達がバッチリと写っている。

「いやあ、ほんとに飯うめえなあ」

「今回、レッドラックの大食いっぷりを見せることで皆の胃袋を空腹にさせるという目的があります……」

「ああ、だから真昼間からやってんだな」

そう、キッチンに団員達がいるということは……要するにグランサイファアの昼飯事情が今からということになるのだ。

「つか、誰が作ってるんだこれ」

「ローアイン、セワスチアン、バウタオーダ、それとファステイバの4人で形成されているぞ」

「おいおい、グラサイキッチンメンツ揃ってんじやねえかよ！こりやあ俺も本気出さねえとなあ!!」

「まあいくらでも飯食っていいから、番組の進行はさせてもらうよ……というか今の間にまた食い終わったな」

色々な料理がある中、喋りながらもレッドラックは食べ終わっていき。律儀なのは、キッチンと口の中のもの飲み込んでから喋っており、口の中に物が入っている時は一切喋っていないということである。

「おう、つか俺に来てる質問なんて大概わかりきってんだろ」

「と言うと?」

「ゼン教、フードファイト、大食いであること、そんでもって過去の話だ」

指を立てながら、レッドラックは数えていく。というか、気になったことを聞くだけなので、その推理はあながち間違っていないかもしれない…とグランも若干ながら納得はしていた。

「ま、例え予想通りの物が来ても俺ア普通に答えるけどな」

「流石、懐が深い」

「腹の底もすげえ深えけどな!!」

大声で笑うレッドラック。ふと、それを見てレッドラックの口の周りには、ご飯のカスが一切ついてないことに気づくグラン。かなり高速で食べているのに、口の周りがかかなり綺麗なのは驚きである。

「…ま、とりあえずお便り行きましようかね」

「おうー!どんどんこいやあ!」

「1通目『空腹じゃない時ってあるんですか?』」

「ん?そりゃあ飯食ったら空腹じゃ無くなるだろ?」

「いや、レッドラックってずっと何かを食べてるイメージあるから…そのせいじゃない?」

「んー…?」

身に覚えがないと言わなければならない、レッドラックは首を傾げる。実際、何かをする度に何かを食べているのは事実なのだが、お便りの主はそれがレッドラックに取ってはずっと空腹なためと思ったらしい。「まあ、ずっと飯は食ってるな。完璧な満腹感は何度も味わってるがよ、動いたらすぐに腹が減ってなあ…:…:…ついついバクバク食っちゃうんだ」

「確かに、フードファイトした後もよく食べてるもんね」

「俺アフードファイターだからな、いつでも腹が減るようにしてるし、腹が減ったら飯を食えるようにしてんだ」

フードファイト。レッドラックは趣味でよく、突発的に村でフードファイトを行う時がある。無論、ちゃんと許可はとってからするのだ

が…レッドラックの食いつぶりに、参加者達も笑顔になるという事がある。

そこで稼いだ賞金を、レッドラックは孤児院などに寄付したりしているのも、有名な話である。

「さすがに2回連続でフードファイトした時は驚いたけどね」

「いやあ、あの時も腹が減っちゃってたからなあ」

「その賞金、全部寄付したんだから尊敬するよ」

「悪いな、団の資金に当てられなくてよ」

「いや、レッドラックの趣味で行ってる事だし…別に稼いだお金をこちらに渡さなくてもいいんだよ？ 依頼料を貰ってるわけじゃないしね」

「そうか？ すまねえな団長」

レッドラックは笑いながら、グランの頭を撫でる。まるで父親のような仕草だが、グランはそれを素直に受け入れていた。まるで本当の親子のようにも見えないことは無い。

「で、結論としてはどうなの？」

「そうだなあ…満腹になってる時はあるぜ、それがすんげえ短いってだけでな」

「なるほどねえ…じゃあ2通目に行こうか」

「おうよ」

『他の大食いの団員達とフードファイトした事はありますか？』

「他の、ってえと…」

「ルリア、アーミラ…それと美食殿のペコリーヌだね」

アーミラ、半人半魔の少女である。戦闘能力は高いが、その性格はとても純粹。美味しいものを食べる時はとことん食べて、眠る時はとことん眠るというまさに子供の様な少女である。

そして、美食殿ペコリーヌ。時折グランサイファーに乗船していることがある少女である。その胃袋に限界はないのか、と言わんばかりによく食べている少女である。恐らく、本当の意味でレッドラックと渡り合えるのは彼女くらいものだろう。

「そうさなあ…一回やってもいいが、グランサイファーの資金が底を



尽きかねねえなあ」

「え、食料庫じゃなくて？」

「おう、資金だ」

「最早大食い大会と言うより、1種の戦争になってない？」

「しよすがねえよ、それがフードファイター同士が戦った戦場になるんだ：国同士が争ったら土地が荒廃するように、フードファイター同士が戦つちまうと開催場所の資金が荒廃しちまうんだ」

「フードファイターを戦争に例える人初めて見たよ」

自慢ではないが、グランサイファーの資金はそれなりにあるのは誰もが知っていることである。かなりの人数の団員がいるのに対して、一人辺りの平均の持ち金の10倍は用意しているとグランはちゃんと帳簿をつけている。

つまり、それが吹き飛ぶということは団が完全な壊滅をするということにほかならない。フードファイターをした結果、団が解散なんて全くシャレにならないことである。

「しよすがねえさ……あの嬢ちゃん達は、俺と渡り合えるレベルでのフードファイター……お互い本気を出しちまったら、取り返しが付かねえ……」

「……とりあえずグランサイファーでフードファイターはやらない方がいいって言うのは理解したよ」

「わかってくれて何よりだぜ、団長」

「……兎も角3通目ね。『美食殿のペコリーヌさんとは、交友は持つていますか？』」

「おう、もちろんあるぜ。フードファイター同士、つてのもあるが各地の美味しい飯の話なんか、会ったら良くしてらア」

先程言ったが美食殿とは、友好的関係を築き上げている。しかし、そもそも美食殿は自分達の島から離れることはあまりないのと、グランサイファーでも中々寄れないような土地にある為実際の交流はほぼ手紙な事もある。

それでも、時折乗船しているので気の合う者同士の会話が、その時に頻繁に行われている。

「俺はペコリーヌの嬢ちゃんとよく話してるがよ、他はどうなんだ?」  
「コッコロちゃんはよくナルメアと話してるね。お世話するもの同士、って事で気がめっちゃ合うみたい」

「あのエルーンみてえな子は?」

「キヤルだね、あの子は……気の合う人と話してる、っていうよりかはペコリーヌの世話を焼いていることが多いかも」

「そっぴやあ……よくつるんでんなあ……」

ふと思いつくと、ペコリーヌのブレーキ役としてキヤルはよく動いているとレッドラックも思い出していた。因みに、3人の想い人のような存在として1人の少年がいるが、彼も3人と一緒に乗船していることがある。その時は、コッコロがお世話しっぱなしになっているが。

「苦労人だなあ、あのキヤルって子は」

「コッコロちゃん程じゃないけど、誰かの世話焼いてないとダメだったりするのかもね」

「はは、そいつアアレだな? 所謂『ツンデレ』って奴のせいもあるんじゃないかねえか?」

「かもねえ」

やつのせいも何も、よく文句を言いながらもペコリーヌの世話をしていたり、他の者達の世話を口では嫌々ながらも率先してやっている辺り、相当な世話焼き家である。本人にそれを言うと、恐らく怒って拗ねてしまうかもしれないが……それでも世話は何だかんだ言いながらやってそうだと、グランは心の中で笑っていた。

「さて……そろそろ時間です」

「もうか? 早くねえか?」

「いつもこんなもんだよ、それに俺とレッドラックが本気で話し合いしたら……本気で駄弁ってるだけになっちゃうしね、ここ団員の紹介番組でもあるしや」

「なるほどなあ……」

「まあ、長時間駄弁ってたらグダっちゃうっていうのもあるんだけどね」

「はは、それはそうかもしれないねえなあ」

「……とまあ、改めて。皆さんご視聴ありがとうございました。また次回、この番組でお会いしましょう。さようなら」

そう言っつて、カメラの電源が落とされる。そして、グランは軽くため息をついていた。

「ん？どうした？」

「いや、このカメラまた運び戻さないとなって思っつてさ」

「大丈夫だよ、俺も手伝っつてやるから」

「助かるよ」

食堂から、一応下まで持つておりなければならなかったため、グランはそれで少しため息をついていたのだ。持つて上がる分には少し体力を使う程度で済むのだが、降りるとなると階段でコケないように登る時以上に集中しなければならなかったため、疲れる……らしい。

「じゃあ、お願い出来るかな？」

「おう、任せとけ……とその前に飯の片付けしねえとな」

「…そう言えば、めっちゃ食いながらだったもんね」

気づけば、レッドラックの周りには大量の皿が並んでいた。これも、途中途中でグラサイキッチンメンツが回収していたのだから驚きである。

「よう！美味かつたぜ!!」

レッドラックがそう言っつて、無理のない範囲で皿を一気に持ち運んで行くのを繰り返していく。

それは、グランも手伝ったためすぐに終わった。そして、そこからようやくカメラを運ぶ事になる。

「これ結構重いよ？」

「それを、1人で持ち上げて来たお前さんが言うのかね」

「…まあ、そう言われたらぐうの音も出ないけど」

パツと見はドラフの男性よりも筋肉が無いにもかかわらず、実際はとんでもなく力が強いグラン。カメラを運ぶのにも一苦労とは言っつているものの、どちらかと言えば重いからじゃなくてコケないように注意しすぎているため、と言っつても過言ではないだろう。

「よし、とりあえず運ぶか」

「OK、お願いするね」

「任せとけ任せとけ！この筋肉は伊達じゃねえって言うところを見せてやるよー」

そう言つて、レッドドラックとグランでカメラを運んでいく。実はこの後、レッドドラックはまた腹が減つたため飯を掻き込んでいた。その為、グランサイファアの食料庫がすつからかんになってしまったので、急遽飯を買いに近くの島に寄ることになったグラン達なのであった。

## Theゼエン

「これが……ソフィアが作った薬膳料理、味もそれなりに美味しいと思ってる」

「おう、うめえよ」

「こつちがラスティナが作ったクッキー」

「なあ、俺ア真つ黒のゲル状のものをクッキーと認めたくねえんだが……ゼリーじゃねえのかこれ」

「素材と調理方法を間違えたらこうなったらしい」

「つまりクッキーじゃねえなそれ」

とある昼下がり、レッドラックはソフィアが作った料理とラスティナが作った料理を食べていた。だが、これらはレッドラックに直接渡されたものではない。

「なんで俺を経由してレッドラックに食べさせようとしたんだろう」

「味見役ってエ話だっただろ？ 要するに、俺ア毒味させられてんだ……スプーンねえか？」

「ゲル状のクッキー食べるんだね」

ソフィアが作ったものは、薬草などをふんだんに使ったお粥だった。全部ぶち込んでいるせいで見た目が凄いが、味は意外と美味しいというのがレッドラックの評価である。グランも一口実は貰っていた。

ラスティナが作ったものは、黒くテカったゲル状のなにかである。彼女曰く、これはクッキーなのだそう。

「……おう、味はまともだぞ」

「え、マジで？」

「クッキーじゃねえけどな」

「どれどれ……」

グランも一口スプーンで掬って、口に入れて咀嚼する。ゲル状のものなので食感もまたゲル状なのだが、確かに食べられない味などではなく比較的美味しい味だった。

「でもめっちゃ海鮮の味だよねこれ、パスタでたまにある海鮮物のスキの pasta みたいなのがする」

「つかそういうことなんじゃねえのか?」

クッキーと聞かされていたはずなのに、甘くもない上にただの海鮮物のスキのゼリーを食べさせられているグランとレッドラック。彼らにはただただ困惑しか存在していなかった。

「……というわけで2人呼んでみよう。というかなんでこうなったのかラスティナに聞きたいわ」

「全く同じことを考えてたぜ」

「つてわけで、2人に調理法を聞いてみたいと思ったんです」

「では、私から説明しますね」

部屋に呼ばれるラスティナとソフィア。最初にソフィアが1歩前に出て、どういったふうにして言ったのかの説明を始める。

「薬草はお店で売っている調理可能なものを選んできました。薬草を煎じたり、刻んだものを入れたり……そうしたものをご飯と混ぜて、あとはお粥と同じ要領です」

「こういうのは、大概薬草の入れすぎて苦くなったりするもんだがよオ……子供でも食べやすくできてんのはすげえよな」

「ありがとうございます、ちゃんと消化も良いですから風邪をひいた時等はおすすめでできると思います」

ニコニコと微笑むソフィア。その隣で、ラスティナは苦虫を噛み潰

したような顔をしていた。それもそうだろう、お粥に対して自分のものはよく分からないゲル状の食べ物なのだから。

「さてラスティナ」

「……クツキーだ」

「俺の知ってるクツキーじゃない……作り方、教えて？」

「……砂糖を使おうと思ったんだ、そしたら間違えて塩を取り出してしまった……」

「そこはまあ、よくあるミスだと思うけど……それ以降だよね問題は」  
「……カラメルを作ろうとして、一旦冷やしておこうと別の場所に置いてたんだ。その時は気づかなかったが、海鮮物のスミが入った瓶が近くにあつて……使おうと思った時には間違えてることに気づいたんだ」

「まあ、まだ分からなくもない……」

そこまですらでも相当なものだが、なぜクツキーを作ろうと思ってゲル状になっているのか。グランはそれだけがただただ知りたいのだ。

「……生地を作ろうと思って、材料を探して……小麦粉だと思ってたのが片栗粉だったんだ……」

「え、これ片栗粉なの……？ どうしてゲル状に納まっているの……？」

「牛乳の入れ物だと思ってたのが、ミネラルウォーターで……」

「中身見えなかったんだよね……？ いや、入れ始めた時に気づかないもんなのか……？」

「そのあと……なんやかんやあつて、こうなつた」

聞いたところではやはり理解できなかつた、というのがグランの結論だった。いや、わかつた所でどうしてそうなつたと言ひようのないものばかりなのだが……

「ラスティナには、料理教える云々以前の問題な気がするぜ」

「俺もそう思う。材料間違えるミスをしなれば……多分大丈夫のはずだけど……これ見せられると、逆に教えたら下手になるんじゃないかとさえ思えてくる」

2人の言葉に、ラスティナは顔を俯かせて真っ赤になっていた。辱めに近いが、しかし自分の料理の腕が全く別の方向性に向いているの

が原因なために、何も言えないでいた。ソフィアも、苦笑いをするこ  
としか出来ないでいた。

「で、でもちゃんとしたやり方さえ教えれば……出来そうですけどね  
?」

「いや、今回ばかりは料理が下手と言うより……ラステイナのドジっ  
子が作用してる気がする」

「……認めたくはないが、確かに凡ミスが多かったのは事実だ」

凡ミスとは、一体なんのことだろうか。グランはふとそう思っ  
てしまったが、それにまでツツコミを入れると話が進まなくなるので、何  
も言わないでいた。

「まあ、料理の基礎自体は出来てるみてえだな……今の作り方聞いて  
る限り、まともなクッキーを作ろうとしたのは間違いねえみたいだ  
し」

「……ベアトリクスと組んだらどうだろう?」

「……ベアトリクス? どういうことだ団長」

「いや、ベアトリクスはお菓子作りに関してはかなり上手だし……そ  
れに、まともな料理も見ただけなら作ることが出来る」

「ああ……そういやお菓子作りは1級品だもんなベアトリクス。何故  
かほかの料理を作ろうとすると劇的に甘いけど」

ベアトリクスはお菓子作りがとても上手だ。それに、材料さえ把握  
している料理があれば見た目だけなら完璧なものを作ることが出来  
る。しかし、お菓子以外の料理を作らせると何故かすごく甘いものが  
出来上がってしまうのだ。それも、美味しいのだから反応に困るタイ  
プのものである。

「ベアトリクスは料理を甘くする力を持つているのか……」

「糖分の神様にでも愛されているのでしょうか……?」

「そんなものに愛されてしまったら、俺は除霊してもらおうと必死に  
なるね」

材料は間違えていないはずなのに、作る料理が全て甘くなるなんて  
一体どこの呪いだろうか……とさえ思えてくるのだ。お菓子作りは  
戦士とは思えないほどに上手なのに、料理がそうなっていては結局の



所出来ないのと何ら変わりない……とグランは思っていた。

「……実際、糖分の神様いるのかな」

「糖分司る星晶獣はいそうだな」

「星の民がそんなの作ってたら、俺はガツカリだよ」

割と居そうなところが星晶獣の恐ろしいところである。役割が細分化されすぎている、なんてことも結構ある。

「んで？ 結局どうすんだ？」

「あー……いや、ラストイナは見張つとけばいいと思う。ミスしそうならヘルプ入れたり……それくらいなら多分ベアトリクスにも出来……出来る、かなあ……？」

「お前のベアトリクスへの信用結構低いな？」

「いやいや、信用してるよ……お菓子作りと戦闘での巻き返しは」

見張りに関してはどうなのか、とはレッドラックは聞かなかった。大方プライドの高い2人が結局争いを始めてしまうせいで、見た目完璧な激甘料理と見なかったことで出来たよく分からないものが並ぶだけの結果になるのは彼にも明白だったからだ。

「……それで、結局どうするんですか？」

「まあ、見張るくらいなら誰でも出来るし……うん、ジャミルに見張らせよう」

「なんであいつなんだ……？」

「いや、気配強かったら別のミス起こしそうだし……気配を完全に遮断できるジャミルなら、見張られても分からないでしょ？ 俺もよく気づかないから結構色んなところ見られてるし」

「おい団長今の話……いや、いいんでもない」

ラストイナがついツツコミを入れていたが、ジャミルだからとツツコムのは面倒になって途端にやめてしまった。事実、ジャミルがグランを24時間365日見張ってるのは周知の事実なのだ。

「あ、ジャミルと言えば」

「お、今の話からどう話広げる気だ」

「最近家庭料理覚えてさ、何だっけな……えーつと、あひ、アヒー……」  
「アヒージョです我が主」

「そうそう、ありがとうジャミル」

「いえ、それでは」

唐突に現れて唐突に消えるジャミル。それをさも当然のようにグランは扱い、ツツコミをすることがなかった。3人は驚くよりもグランの適応能力の高さに、もう何も言わない方が正解だと思っ  
てしまっていた。

「でまあ、そのアヒージョっていうのを最近覚えて食べさせてもらったんだ。すごく美味かったよ」

「ほー、そいつア食ってみてえな」

「じゃあ今からラードウガ行こうか、ファステイバがいいお酒が手に入ったって言ってたし」

「おいおい、お前さんは酒飲めねえだろ？」

「ファステイバの搾りたてオレンジジュース飲むから」

「……そっちもそっちで気になるなあ」

「わ、私達も行つてよろしいですか？」

「よーし、皆で行こう」

その後、全員を連れてジャミルのアヒージョを食べにラードウガに向かう一同。アヒージョに舌鼓を打ちながら、他愛ない世間話などを花を咲かせて、その内自然解散となるのであった。

### 後日以降の話。

「……何、物陰からの視線を感じる」

「またですか？ 最近多くなりましたね、それ」

ラスティナは料理をしようとした時に限って、誰かの視線を感じる  
ことが多くなつた。それもそのはず、グランがジャミルに頼んで本当  
にラスティナを見張らせているからだ。しかし、そこはジャミルの腕  
の見せどころ。キッチンの搜索を隅から隅までされようとも、絶対に  
見つからないようにしている。そのため、ラスティナの感じた視線は  
『結局ラスティナの気のせい』ということになってしまつている。  
「もしかしたら、何かに取り憑かれているのかもしれないですね」  
「な、なんだと!？」

そして、最終的にはこんな風にラスティナを軽くあしらう事になる  
までには、皆慣れきつてしまつていた。

しかし、ここまで来ていて誰も気づかないことが一つだけあつた。  
「……………それにしても、なぜ誰もラスティナ殿に料理をさせまいと  
行動を起こさないのでしょうか」

ふと、ジャミルが呟いた言葉。そう、結局のところ誰もがラスティ  
ナが料理をするところを止めないのだ。本当に危なかつたりする時  
は、ジャミルが隙をついてヘルプに入るため問題ないのだが、誰も止  
めようとしなのはなぜなのか。

「……………いえ、きつとこれは主に何か考えがあつてのことでしょう」

ジャミルは自分にそう言い聞かせて、命令通りヘルプに入るだけで  
ある。しかし、ジャミルが思うようなことは……………決していない。別にグ  
ランが何か深い考えがあつてラスティナの料理をやめようとしてい  
る訳では無い。

あるとすれば――

『やりたいようにすればいいと思うよ、本気で危ないのはダメだけど』  
――この程度のことなのだから。

蒼き迅雷の拳闘士、限界を超えるぞツツツ  
!!!!!!

「今回のゲストはフェザーさんです」

「団長!! 拳を交えよう!! そうしたら分かり合えるぞ!!」

「ゲスト間違えた気がするわ……さて、今回もまた特別スタジオ……  
グランサイファーにある特訓場にて放送します。頼むからカメラは  
吹っ飛ばさないでくれよ?」

なぜまた特別スタジオなのか。理由としては2つある。フェザー  
が何事にも全力を出すタイプのせいで、先程ゲストと話す為に使われ  
るテーブルと椅子が破壊されてしまったので、仕方なくお互いに立っ  
て話せる場所が欲しかったのだ。後フェザーと言え、と言われると  
ここという発想がグランにあった。

「お前この番組の趣旨を理解してる?」

「ああー。勿論理解しているさー。俺達団員同士がそれぞれ交流を深  
めるために、自己紹介を兼ねた話し合いの場だろう??」

「お、おう……分かってるならいいんだ……待て、わかってるならどう  
してさつき殴り合い推奨してたんだお前」

「俺と言えは拳! 拳と言えは交えるものだからだ!!!!!!」

「やっべ俺マジで間違えた説あるわ」

ちなみに先程から、フェザーが大声を出しているせいかカメラに付  
属しているマイクに、フェザーの声は音割れで入っている。五月蠅す  
ぎたのだ。

「とりあえず、もうちよい声のトーン落としてけ。そんなテンション  
で話しても、俺は今は殴り合いしないから」

「……分かった、団長がいうなら少し抑える」

「脳筋なのか物分りいいのか、俺は偶にお前が分からなくなるよ……」  
フェザーは話を聞かない脳筋の様に思われがちだが、実は結構物分  
りがいい。テンション上がってる時の声の大きさはあれだが、一言断  
れば基本的にそれを理解してくれる。理解してない時もある。

「じゃあ、ただ2人で立って喋るのか?」

「そんな感じ……そもそも殴り合いだと、お前テンション上がりすぎ

て大声で叫ぶしかなくなるし」

「……そうか？」

「おっと……まさかの意識してないパターンと来たか」

実際そうなのだが、本人は全く自分のことを理解していないらしい。グランは冷静にツツコミを入れるが、内心今度から大声出すのをどう抑えさせてやるか考えていた。

「……とりあえず、お便り行くぞ」

「おう！」

「また大声の片鱗出始めてんなお前……1通目『ガンダゴウザさんと勝負はしてるんですか?』」

「島に降り立った時は良くしているぞ!! 2人の用事がない時は、専ら拳を交えている!!」

「お前ら島の地形変えてないだろうな!」

ガンダゴウザ。幾つもの伝説を持つ凄腕の拳闘士である。その逸話の中には、信じられないようなものばかりがあるのだが、実際にそれを起こしているかもしれない……という妙な信頼感があるご老人である。

因みに、ガンダゴウザが本気で暴れると島の地形は割と簡単に変わる。殴り合い特化のフェザーもまた、その片鱗があるので下手をしたら島の地形ががつつりと変わってる説も出てしまうのだ。

「大丈夫だ、その辺はちゃんと抑えて戦っている」

「……じゃあそれを信用するけど、君ら2人の拳の強さは君ら2人自身がよく知ってたんだからさ……それを理解してから特訓してくれよな」

「ああ!!」

単純な一撃の重さでは、グランはこの2人に勝てる自信が無い。ガンダゴウザはもと、フェザーも一撃が重いタイプなので避けては一撃を与えて避けては一撃を与えてを繰り返していかなければならぬのだ。

しかし、フェザーは一撃が重く鋭い上に本人のスピードがかなりあるというタイプだから、中々そう簡単にさせて貰えないが。

「前にやった時に、散々に怒られて身に染みたからな!! 時には力をある程度加減することも大事だってな!!」

「……何故だろうか、間違っではないはずなのにお前が言うところでもなく不安が残る……残ってしまう……」

理解力はあるが、『拳を交える』という一点が前提にあるためにどうしてもグランはイマイチフェザーに対しての不安が残ってしまう。ちなみに彼は幼なじみがいるのだが、その幼なじみの方はフェザー以上には理解力も落ち着きもある。時折、怪しいところがあるが。

「……いや、ここは実はそれなりに理解力があるフェザーを信じるとしよう……同じ艇に乗った団員だからな、信用しないとな……」

「拳を混じえたら一発だぞ!!」

「ことある事に布教するんじゃないよ!!」

ゼエン教ならばともかく、フェザーやガンダゴウザの拳教は時と場合を選ばなければならぬ。そこらかしこでやっていたら、タダの喧嘩屋である。

「何故だ!？」

「拳交えられないような人がいたらどうする、子供組にも同じことする気か?」

「む……確かにその通りだな」

理解はしてくれたようで、フェザーは思案し始める。ここで畳み掛けておかないと、話が終わりそうになかったので大急ぎでグランはもう一枚のお便りを箱から引っ張り出していった。

「巻きでいくぞ!! 2通目だオラア!!」

「ん? そうか」

「えー……」相手が武器を持っている時、どうやって対処していますか?』

フェザーは文字通り拳で戦っている。別に手に防具らしいものをつけている訳ではなく、付いているのはむしろ足の方である。それも簡易的なものなので、フェザーが来ているのはほぼ服である。

「武器を叩き割る!!」

「もつと他の人にも出来そうなことは無いのか……?」

「なら武器を弾くことだな!!」

「真剣白刃取りとかは?」

「あー……あれは、危険だからやめた方がいい。相手の攻撃を避けて、隙について武器の側面か相手の手を殴る方がやりやすいし簡単だ」

これに関しては、グランは成程と感心していた。確かに、真剣白刃取りは自分が相手の武器の直線上に来るような形になっているので、万が一失敗した場合そのままお陀仏の可能性が高いからだ。

それなら、安全に武器の側面か武器を持つている手を殴って無理やり武器を落とさせる方がいいと言う方が理解はできる。

「……相手がハンマーとかみたいな武器だと、側面殴ったところでだしなあ……」

「俺は殴り壊すけどな!!!」

「お前レベルになつてくると論外だよ……」

拳上級者の意見は、先程は参考になったが今のは明らかに参考になっていなかった。グランは溜息をつきながら、頭を抱えていた。フェザーの知的な時間をもっと増えて欲しいと、若干願っていた。それはもうフェザーじゃないのだが。

「……ちよつとテンポが早いけど……3通目行くか」

「おう!!」

「えーつと……『ガンダゴウザさん以外で、団内に拳を混じえたい人はいますか?』」

「全員だ!!!」

「うわびわ!くりした大声出すなよ」

全員とは大きく出ているが、その中には十天衆達も含まれているのか少し怪しいところがある。いや、フェザーの事なのだから含まれているだろうが……

「お前非戦闘員にも喧嘩売るつもりか?」

「それは無い!」

「そのの理性はあるようだから、安心したが……ちやんと合意の上でやれよ?」

「ああ! 勿論だ!!」

基本的に十天衆は挑まれたら大抵は受けると思うが……二才がいるということを考えたら、今の質問はしたくなる。絶対に二才は戦おうとはしないからだ。

「全員って言ってたけど……戦ったことあるやつ例ってあるか？」  
「前に停泊していた島で、十天衆のソーンと拳を……じゃなかった。特訓していた!!」

「ソーンと……?」

ソーンはとんでもなく遠くから射る、十天衆の射手。逆にフェザーは超近距離戦闘型。2人の戦闘スタイルは全くの真逆なので、やることと言えばコンビネーションの特訓などが思い当たる。

「ああ！ ソーンが島のどこかから放った矢を殴り落とすという練習だ!!」

「……思ってた以上に脳筋だったわ」

しかし、特訓というのは納得できるレベルである。どこかからいつ飛んでくるかも分からない矢を、落としていく。戦闘の気配の察知の仕方などを学べるので、練習としては申し分ないものである。

やり方が上級者過ぎるのが難点だが、グランもそれは真似しようかなと考えてしまっていた。

「しかしソーンか……よく引き受けてくれたな」

「頼んだら、何故かとても嬉しそうだったぞ。代わりにその後でお茶を飲みに行ったんだけどな」

「ああ……」

ソーンは生粋の寂しがり屋である。恐らく、フェザーが頼ってくれて嬉しかったのでそのまま友達になろうとしたのだろう。それがフェザーに伝わっているかどうかはともかくとして、団内で親しくなれる人が増えるのはいいことである。

「……巻きでいったつもりだったけど、案外時間が経つのは早かったな」

「なんだ、もう終わりなのか?」

「もう時間なんだよ、理解してくれ」

「なるほど……」



やけに落ち着いて理解してくれたと、グランは少し疑問に思いながらも、少し安心していた。このまま『じゃあ拳を混じえよう!』なんて言い始めるかもしれないと、正直ビクビクしていたからだ。

「では今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょうさようなら」

そう言うってから、グランはカメラの電源を落とす。落としてから気づいたが、フェザーが後ろでシャドーボクシングをしていた。最早その行動で、次の言葉が何なのかくらい予想できるようになっていた。

「……拳を?」

「交えよう!!!」

「その前に始末書お願いしますね」

「うお!?!」

唐突にフェザーの後ろに現れるリーシャ。フェザーは驚いていたが、グランは何も驚くことがなくて棒立ちになっていた。

「始末書!?! なぜだ!!」

「自分が所持しているものならば兎も角、艇の備品を壊したじゃないですか……番組用のテーブル」

その言葉にフェザーは黙った。そう言えば、壊したままだったとグランは納得していた。だから始末書の提出をお願いしているのだから。

「……い、いつまでに……」

「期限は問いません。しかし……まあ、常識の範囲内をお願いします」

始末書はいつに出しても問題ないが、遅れれば遅れるほど出した時に見るリーシャの顔が、表情を失っていき真顔になっていく様は恐怖そのものである。酷い時ははにわのような闇の感じる表情になっていた。

「わ、わかった……」

「苦手でもやってくださいね、別に書き方もどんなものかは問いません……ただ、きちんとやった事を把握してくれたらいいだけです」

「あ、ああ……」

「では、失礼します」

普通に部屋の扉から出ていくリーシャ。因みに、リーシャが何か始末書を書くことになった場合は、グランに向けて提出する事になっている。

「……俺も気をつけないとなあ」

「ぬおおお……！ すまん団長！ 部屋に戻って書いてくる!!」

少しだけ唸った後に、フェザーは部屋から出ていく。あの様子だと、しばらくは部屋から出られないだろうとグランは感じていたので……そのまま後片付けだけをして、同じように部屋から出ていくのであった。勿論、カメラはきちんと回収してから元の部屋に戻すために、だが。

リボーンファイター、容赦はしねえぜ？

「はい、今日のゲストはランドルさんです」

「よろしく頼むぜ」

「ランドルさんは、この団では数少ない足技を多用する人です。『足技使ってみたいなあ』って人はランドルさんに聞いてみましょう」

「おい、団長何言ってるんだいきなり」

ニコニコと微笑みながら、グランはランドルを推していく。いきなりの事だったので、ランドルはグランを睨みながら注意する。

「え、人に教えるの駄目なの？」

「そういうのは、俺の時間が余ってる時しか出来ねえんだよ。勝手にそういうのをされたら、俺の予定を知らねえ奴らが困惑するじゃねえか」

「あ、そういう？」

てつきり『俺の許可も取らずに』的な意味だと思っていたグランだったが、自分の予定さえ余っていたら人に教えるのはいいと思ってるランドルに、少しだけ驚いていた。

「ふん、拳より足技を習いにきてんだろ？ そいつは見込みがあるって事じゃねえか」

「ああ、そういう……」

ランドルはフェザーと幼なじみのような関係である。しかし、フェザーが拳で戦っているのに対して、ランドルはそれが気に入らなかつたのか足技で戦うことに固執しているのだ。それが理由なのか、足技を教える欲しいと思ってる者達に関しては、どこか寛容的になっていることもよくある話なのである。

「んだよ、なんか悪いか？」

「いや、全然大丈夫だよ。ただやっぱりランドルはランドルらしくていいなあって話」

「あ……？ よくわかんねえな。とりあえず褒め言葉だと思って聞いておくれ」

「実際褒めてるからね」

ニコニコと笑いながら語るグランに対して、少し疑問を浮かべながらランドルはひとまず納得していた。

「そう言えば、ランドルってフェザーと腐れ縁なんだよね」

「……ああ、あいつがどうかしたか？」

フェザーと名前を聞いて、一瞬だけ眉が動いたランドルだったが、少しだけ反応が遅れただけでそれ以降特に何もリアクションするとは無かった。

「いや、フェザーに対してよく足技を鍛え上げることが出来たよねえって思ってた」

「別に、簡単だったわけじゃ無いからな。自分で言うのもなんだが、血のにじむような思いをしながら特訓したもんだぜ……それだけ、足を使う戦い方ってのは案外育てるのが難しいんだ」

「人間がよく使う部位だからね、そこを戦う目的で使うのは結構勇気がいるよねやっぱり」

「……けどな、足だけじゃ駄目だったのが思い知らされてよ」

「というと？」

「ソリツズ、って爺さんがいるだろこの団」

ソリツズ。年老いてなおその筋肉が健在である筋骨隆々の男である。少々スケベなところはあるものの、その拳から繰り出される一撃はまさに必殺と言っても過言ではないほどの威力。彼の拳は、一撃で大岩を叩き割る実力を持つ。

「いるけど……ソリツズは確か腕を主体にして戦う戦法だったと思うけど？」

「まあそうなんだが……拳を鍛えたけりや、拳だけを鍛えても意味がないってこった」

「……あ、もしかしてバランスよく鍛えろって言われたの？」

「ああ、足だけじゃねえ……腰や腕なんかもバランスよく鍛えていかねえと、足技は成長しねえって事がよくわかった。フェザーの野郎が、なんで俺と互角に戦えてんのかもよくわかったぜ」

「そう言えば……フェザーは基本腕で戦ってるけど、足技も織り交ぜたりして戦ってるもんね」

本当に目立たないことではあるが、フェザーは自身の戦い方に足技を取り入れている。取り入れていると言っても、ただ殴る動作の合間に蹴りを入れる程度のものだが、それもある程度上半身と下半身の鍛え方をバランスよくしてこそ成り立っているものである。

「ま、多少気に食わなかったが……そんなんで、特訓に好き嫌いを言ったら洒落になんねえからな」

「フェザーはその辺好き嫌いなさそうだもんね」

「あいつは戦うことしか頭にねえ野郎だからな、本能的にどこをどう特訓すればいいかを無意識にやってんじゃねえか？」

冗談めいた感じでランドルは誤魔化していたが、それがフェザーとなると、一気に現実味を帯びてくる。実に『あいつはやってそう』という感覚が強いのだ、フェザーは。

「今度聞いてみようかな……」

「おいおい……本気にすんじゃねえぞ？ 仮にしてなかったら、あいつ今度からそれをしてそうな男なんだぞ？」

「確かにね」

軽く談笑をしていた2人だったが、ふと時間が経っていることに格蘭が気づき、そのままお便りのコーナーへと移っていく。

「さて、何だかんだでお便り紹介。ランドルにもいっぱい来てるから」  
「答えられることならなんでも答えるがよ……」

「1つ目『トンファーキックってするか？』ヴァンツアから」

「……トンファーキック？」

トンファーキックという単語に首を傾げるランドル。普通はこうなるのは、当たり前前である。何せ、トンファーは手につけるものであり、足につけるものではないからだ。

「トンファーを付けてキックするんだよ」

「……足に取り付けて薙ぎ払うような蹴りってことか？」

「え、手に持って普通に相手を蹴る技だけだ」

「……？」

本格的に理解できなくなったのか、ランドルは完全に困惑していた。しかし、格蘭は何が理解できないのかが理解出来ずに、困惑し

ていた。

「待て待て、トンファーを手に持つんだよな？」

「それ以外どこに持つって言うのさ」

「で？ そのままキック？」

「そうだよ？ トンファーキックなんだから蹴らないとおかしいじゃん」

「トンファー関係ねえな!!」

「えっ!? トンファーを手に持つことで蹴りが強くなるんだよ!？」

「どういう原理だそりゃあ!!」

当然のことながら、訳が分からずに怒鳴ってしまうランドル。しかし、グランは真顔のままどこからか一枚の白い紙を取り出して、ペンでサラサラと何かを書き込んでいく。

「おい、何を書いて……」

「ランドル、トンファー握るときどこに力を籠める？」

「……そりゃあ、手だろ？ 握る力を強くしてねえとトンファーが落ちちまうしな」

「そうだね、じゃあトンファーを持ちながら蹴るとしたら、重心はどうなる？」

「重さにもよるが……まあ、多少はズレるんじゃないの？」

「そうだね、じゃあ仮に重いトンファーを持ちながら蹴るとしたら……どうなる？」

「重いトンファーなら、より腕に力を込めて……重いから重心もズレるだろうから……はっ!？」

なにかに気づいたかのように、ランドルは驚愕の表情を浮かべる。グランもそれに合わせて笑みを浮かべていた。

「まさかー!」

「そう……重心がズレたのを戻すために、上半身や下半身がある程度捻らなければならぬ。捻るということは、それだけ遠心力が生まれる……そこから繰り出される蹴りは……重い!!」

「……いや、それだったら普通に蹴るわ」

グランはキメ顔でそう答えるが、何故か途端に冷静になったランド

ルが、椅子に座り直しながら真面目にツツコミを入れる。

「というオチが着いた所で、2通目『バランスを崩したりはしないんですか?』」

「蹴ってる時についてことか?」

「まあそれ以外ないんじゃない?」

「ねえよ、じゃなかったら今俺は足を使ってるねえ」

「ま、そういう事だよね」

合っていない武器は使わない、合っていない戦法は使わない。要するにそういう事である。長い間足を武器にして戦ってきたのに、バランスを崩してしまうようなら早々にやめておいた方が正解というものである。

「それ以前に、蹴りでバランスを崩す人間は相当運動神経がねえ奴だな。一般人でもそこまでバランスは崩さんと思うが」

「あれでしょ? 連続で蹴りを出しているから、そんなに連続にしてバランスを崩さないのか? ってことだと思うけど……まあ、どっちにしろだね」

「そういうこつた。俺に憧れて蹴りをしようとするのは勝手だが、ちゃんと自分に合っている戦い方なのかどうかは把握する必要があるな……ハーヴィンは、蹴る行為はあんまりしねえな」

「まあ、そうだね」

せいぜいあるとすれば、相手を牽制する時に顔面に打ち出す程度だが……それを行えるものすら、結構限られている。

「……とりあえず3通目行こつか『武器相手にはどのように戦いますか』」

「これフェザーも同じこと聞かれてなかったか?」

「文章が微妙に違うけど……まあ意味合いはあんまり変わらないかもね」

「俺の場合は……ま、その辺は一緒だ。相手の武器を蹴り落とすか、手を蹴って武器を落とさせるか、だ」

当然というか何と言うか、それが武器持ちに対する対策なのだろうと考えれば、実に自然な結果であるの言うまでもない。実際効果的

な事には変わらないのだから。

「やっぱりそういつた対策に尽きるんだねえ」

「まあ俺の場合、カウンターを入れる要領で蹴り飛ばせるがな」

「それは……確かに」

単純なリーチの差である。フェザーと違い、殴るよりも蹴る方がリーチとしては長い。その長さを利用して、相手を蹴り飛ばしてカウンターを狙うことも可能なのだ。

「ま、さっきも言ったが基本的な事はなんも変わらねえよ」

「相手の武器を側面から叩いて蹴り落とすか——」

「相手の手を蹴って、相手に武器を落とさせるか……だ」

やはり武器を持たない素手での戦闘スタイルは、そういったことに尽きるのだろう。しかし、それはあくまでも基本的なことに過ぎない。ガンダゴウザや、ソリツズクラスになると相手の武器を砕いたり、そもそも拳圧によって相手を戦闘不能にしたり……そういった若干人外じみたことをしている時もある。

「……さて、そろそろ時間だ」

「もうそんな時間か……」

「皆さんご視聴ありがとうございます。また次回、この番組でお会いしましょう……さようなら」

いつも通りのテンプレ台詞を言いながら、グランはカメラの電源を落とす。その後、少し考え事をしていたランドルだったが……ふと思いついたかのようにグランに向き直る。

「団長、いまから蹴り合うぞ」

「え、なに急に」

「色々思うところがあつたつただけだ……それに、俺アフェザーの野郎には負けたくねえからな。これが終わったらさっさと特訓するつもりだったんだよ」

「まあ、別にいいよ?」

「んじゃあ、早速行くぞ」

グランの腕を持って、引つ張っていくランドル。なすがままさがれがままで、グランは特に抵抗することも無くただただ引つ張られてい



くだけだった。

「蹴り合うつて……俺も足限定？」

「いや、今のは言葉のあやだよ……要するに素手での戦闘をやりてえって話だ」

「OK、なら本気を出そう」

その体勢のまま着替え始めるグラン。ランドルは一切気にしていなかったが、ふと『本気』という言葉に違和感を持ったのか、グランの方に1度向き直る……

「なっ」

「これでいいだろう？」

そこには、レスラーとなったグランがいた。その威圧感、笑いだしそうになってしまうほどの謎の雰囲気。その色々な要素によって、ランドルは驚いていた。

「さあ、やろうか……飽きるまでな」

その日、謎の本気を出したグランとそれに釣られて全力でグランに對抗したランドルの戦いは、皆が寝静まった頃まで続いたという……単純に、迷惑なだけの話である。

## 殴蹴連撃

「うおおおおおおおおおおお!!! ビリイイイイイイイ  
イイイイイイイイフ・ブロオオオオオオオオオオオオオ!!!」

特訓所に響き渡る大声。そこでは、フアステイバ特製の人形に対して、本気で打ち合っているフェザーの姿がそこにはあった。実に楽しそうに、フェザーは打ち合っていた。

「全然壊れねえな……」

「まあフアステイバが本気出して作ったからね。ガンダゴウザがそれなりに本気を出さないと壊せないレベルらしいよ」

「素材が気になるところだな……」

「それでいて柔らかいから、自分の自慢の武器を傷つける必要も無いんだ」

「たしかに、そりゃあ便利だな」

そして、その傍らでランドルとグランがフェザーの殴打を眺めている。他にも人形はあるが、ただフェザーがどういったことをしているか気になったので、確認がてら観戦中なのである。

「うおおおおおおお!!! これなら、どう

だああああああああああ!!! アニムスツツツツツ

!!!! ブロオオオオオオオオオオオオオツツツツツ!!!」

「つーか、あいつめちやくちや喧しいな」

「フェザーはいつつもこんな調子だよ」

「あいつそろそろ声帯潰れるんじゃないやねえか?」

「……有り得そうだ」

フェザーは落ち着いているとそうでも無いのだが、少しでもテンションが上がるとそこからノンストップでテンションが上がり続けていき、同時に声量もまるで比例するかのように増えていく。

「あそこまでされて、本当に壊れないんだな」

「ま、簡単には壊れないよ……まああれは素手で戦う人用のものだけだよ」

「武器持ち用のやつもあるってことか」



「まあまあ落ち着いて」

「さつきからやかましいんだよアイツ!! 幾らテンションが上がってるからと言っても、やっていいことと悪いことがあるわ!!」

喧しすぎる、というのはグランも同意である。声の事もそうだが、拳のラツシユによって響いている音が尋常ではないものとなっっているのだ。はつきり言って、特訓所があるフロア中に音が響き渡っていてもおかしくないレベルである。

「フェザーだといつもの事だから」

「普段からあんな大声なわけねえだろうが!!」

「えっ」

「え」

お互いに真顔になるグランとランドル。フェザーが大声なのはグランからしてみればいつものことなので気にしていなかったが、ランドルはうるさいのは嫌い……という状態らしい。

「おーい! 団長ー! ランドルー!!」

「あ、もう終わりでいいの?」

「ああ! いい汗かけたぜ!」

十分に満足出来たのか、フェザーはグランたちのいる場所に戻ってくる。グランは笑顔で迎えていたが、ランドルは少し気に食わなさそうな顔をしていた。

「ん? どうしたんだランドル」

「いや、てめえの五月蠅さにほとほと呆れていたただけだ」

「よし、なら拳で語り合うか!」

「人形相手とはいえ、あんだだけ散々やっておいてまだ殴り足りねえか!!」

「人形はまだ練習相手だからな! やっぱり人と拳を合わせてこその特訓じゃないかと俺は思う!!」

ランドルがキレて、フェザーが斜め上の方向に受けとりながらその怒りをスルーする。その光景を眺めながら、なんだかんだ2人は仲がいいなあと、グランは傍観を決めていた。

「……っーかよ、俺達はまだあの人形相手に練習できてねえよ。て

めえとやるにせよやらないにせよ、体は温めておきてえ」

「そうか……よし、なら2人の準備が完了するまで俺はここで体を動かして待つてるぜ！」

「ちっ……言われなくても、勝手に俺らはやってるぜ」

「久しぶりに手と足を使うなあ……」

ココ最近、素手を使うジョブになっていなかったグラン。ココ最近はクリュサオルばかり使っていて、剣の腕ばかりレベルが上がっているのだ。それでも、まだ勝てない人物たちもいるが。

「剣を振る時の筋肉と、素手で戦う時の筋肉は微妙に場所が違いからな。ちゃんと、温めておけよ」

「ん、了解……とりあえずレスラーになろうかな……」

「げっ……またあの格好すんのか？」

ふとランドルが思い出すは、ブルーメランパンツとチャンピオンベルトをつけて、覆面を被り羽毛が凄いマントを羽織っていること以外は皮膚が露出しているレスラーの姿だった。

「いやあ、あの格好は自分でも『ひでえわ』って思う時あるよ」

「じゃあ別のを着るようにしろよ」

「それがそうもいなくてねえ、似た系譜のジョブだったら問題ないんだけど……こう、気分の問題がさ」

「気分……？」

服を着替える時に、微妙に気を入れ直したりすることはそれなりにある事だが、グランはジョブチェンジの際に行われる衣装チェンジで、スイッチを切り替えるかのようにその服装にあった気分になっている。

「だいぶ前に、レスラーになろうという気分でグラップラー着てたんだけどさ、違和感凄くてまともにレスラーで戦えなくて」

「ああ……」

「仕方ないから、ちゃんとした服を着るようになってるんだよね」

「そういう事か……」

「でもまあ、ランドルの言いたいこともわからなくはない」

「ん？　なんか他にあんなやべえ格好のヤツいたか？」

レスラー並のやばい格好という訳では無いが、グランはアリーザを思い出していた。いつもの格好ならそうでも無いのだが、ある時期に行われた『サウザンド・パウンド』という大会があった。その時のアリーザの格好が、ヘソ見せのノースリーブのシャツが1枚だけというなんとも上半身が素晴らしい服装だったのだ。

「やつぱりドラフって凄いなあ……」

「おい、まじでいきなりなんの話してんだ？」

「あ、いや大丈夫何でもない」

最近厳しくなってきたような気がするリーシャ。下手なことを言うと、後ろから突然肩を優しく叩かれるといったことも少なくとも無い。ココ最近は秩序の騎空団にお世話になってないので、余計に下手なことは言えない。

「……あ、もしかしてガンダゴウザのおっさんの話か？」

「あー、うんうんそうそうガンダゴウザガンダゴウザ」

ランドルが勝手に勘違いしてくれたおかげで、グランもそれに便乗する事が出来ていた。ガンダゴウザは本当に意識していなかったため、少し反応が遅れてしまったが凄い領くことで無理矢理ランドルを納得させていた。

「お、おう……そうか、確かに上半身ほとんど何も着てねえもんな」

「まあ、それだけ筋肉がすごいってことでしょ」

「……そう言えば少し気になってたんだが……ドラフの男ってよ、特訓してなくてもああなんのかな？」

「……そう言えばそうだね。みんななんだかんだ鍛えられるような空間にいたし、一切鍛えていないドラフの男性って体つきどうなるんだろ……?」

逆にハーヴィンだと、それ相応の筋肉しかつかないらしい。それ故、攻撃力よりも手数や技術が優先される事が多いのだとか。

「永遠の謎だな」

「確かに……でも実際、ちょっと見てみたいよね。一切筋肉がなくてお腹タプンタプンの男ドラフ」

「……だな」

「さて、行くか」

「少しでも体を温めておかねえとな」

そう言っつて、2人は人形相手に特訓を始める。グランはレスラーなので殴る蹴るや体当たりなどの戦法、ランドルは言わずもがな足主体の戦法である。

「おお！ 2人とも凄いな！ 俺もまたやりたくなってきたぜ!!」

「てめえはもう下がってやがれ!! 今は俺たちしか居ねえとはいえ、てめえさつきまで使ってたじゃねえか!! また使う気か!？」

「いや！ シヤドーボクシングしておく!!」

「……そうかよ」

呆れた様子を見せるランドル。しかしそれも直ぐに終わらせて、再び人形相手に特訓を始めていく。グランはその光景を眺めながら続けていた。

「……そう言えば、この後依頼行くつもりなんだけど2人ともついてくる?」

「あ? なんの依頼だ?」

「魔物退治、温めた体を使ういい機会じゃない?」

「……うし、なら俺もついていくぜ」

「俺も行くぞ!!」

「了解、なら行くか」

そういうこともあり、2人はグランの依頼に付いてくることとなった。偶然か、はたまた予め誘っていたのかはわからないが、その依頼に付いてきたのが何故か素手主体メンバーばかりなので、その依頼にはパンチングや蹴りの音が響き続けたという。

「いやあ、依頼煩かったなあ……あつはつはつ」

「笑ってる場合か？ 魔物退治は出来たがよ、音のせいで魔物が逃げて逃げて逃げ続けるせいで、無茶苦茶時間かかったじゃねえか」

「だからメンバー結構多いでしょ？」

「全員素手だから起きた問題だけだな」

依頼終了後、全員でとあるレストランにやって来てるグラン達。席わけはその場で決めて、グランはランドルと共に飯を食べていた。要するに、あまりメンバーで2人組になったのだが。

「グランサイファー帰ったらどうする？」

「俺ア、時間によってはそのまま寝るかもな」

「俺はまた特訓所で練習だア!!」

「てめえ時間考えておけよ？ マジで迷惑行為したら、また反省文書かされんぞ」

「……くっ！」

反省文という言葉聞いて、少しだけ落ち着くフェザー。ランドルはため息を履いて、再び飯を食べ始める。

そんな光景を見て、グランはふと思ったのだ。

「……やっぱり、仲良いよねえ」

その言葉はとても小さかったので誰にも聞こえなかったが、それだけグランはそう思ったのである。

この後、戻った後に色々処理していると、グランサイファー中にパンチング音が響き渡ったのは別の話である。



蒼導の剣、覚悟してくださいね？

「本日のゲストはリーシャさんです」

「よろしくお願ひします」

「……秩序しない？」

「何ですかその単語……」

キレイな姿勢で席に座っているリーシャ。いつものことがあるためか、グランは少し脅えてしまっていた。いや、リーシャにはなくいつ逮捕されるのかという怯えだけが。

「いやあ、リーシャに連れていかれるのはいいけど……秩序の騎空団の檻の中って、ベッド少し薄いから……」

「分かりました、モニカさんに伝えて牢内のベッドは少し厚手にしておきます」

「……一応聞くけどさ、犯人というか……犯罪者でも牢内とはいえ結構いい暮らしできるよね」

「秩序の騎空団ですが、あくまでも『公平に』しているだけです。これは秩序の騎空団限定なので……他の国だとそうは行きませんが」

そう言えば……とグランはいつぞやの、捕まっていたランスロットを思い出していた。あの時のランスロットの扱いは本当に酷いものであり、壁に鎖で繋がれていたのだ。

「他の国の牢もああいう風にした方がいいのかもね」

「それは国が決めることですからね……私達に犯人の引き渡しを要求した場合、私達は渡さなければなりません。残念ながら、その後は私達ではどうすることも出来ません……」

「……うーん、まあ……そうなっちゃうのかア……」

「私達は、公平にしているからこそ……その公平さが、時に刺さることもあるのです」

「……そっか」

リーシャの言葉が、真面目すぎる言葉がグランの心に染みこんでいた。しかし、この番組は別にそんな真面目な話をするための番組ではないので、さっさと切り上げていつものお話に戻そうとしているので、グ

ランはお便り箱から3枚早速引き抜いていた。

「とりあえず、1枚目から行こう。『秩序の騎空団は男性しか見ませんが、他に女性団員はいるんですか?』」

「いますね……とは言っても、私やモニカさんが珍しいようですが」「確かに俺も見た事ないや……いると言うけど、普段はどこにいるの?」

「本部で書類仕事です」

「リーシャ達が珍しいって言うのは?」

「現場に出ている女性は、私達くらいという話ですね」

確かに、とグランは納得した。本部で書類仕事ならグラン達と出会う事はほとんどないし、逆に現場に出ているリーシャやモニカの2人が珍しいという話も納得できるものであるからだ。

「けど、リーシャ達に憧れて現場に出そうな人は増えそうなものだけどねえ」

「単純に、男性に囲まれるのをあまりよく思っていないだけかもしれないね……実際、男嫌いという程では無いですがあまりよく思わない女性陣もいるという話がありますし」

「何でだろうねえ」

と、グランは惚けているが……それには理由がある。単純な話だが、男性側は本当に男性側なのだ。時折、リーシャ派かモニカ派で別れて人気投票などを隠れて行ったりもしているので、女性陣が嫌うというか……まあちよつと距離を置こうとするのも、理解できるのだ。

「……まあ、私たちとしてはあまり近づかない方がベストなのかもしれないませんが」

「というと?」

「団内恋愛禁止があるんです、ルールに。しかし男女の距離が近いとそうなる可能性も高くなってしまいますので、今の距離が案外良かったりもします」

「へー……団外は?」

「問題ないです、むしろそっちでして欲しいくらいです」

「何故そんなに食い気味なのか……」

団外で食い気味なのは、要するにリーシャにとつてもそちらの方が都合がいいからなのだが、グランはそれに気づく事は無い。気づかない方がいいということもある。

「まあ、いいや……とりあえず2通目。『男性は兎も角、リーシャさんやモニカさんはその格好は大丈夫なのですか?』」

「大丈夫じゃなかったら着てないですね」

と、リーシャは言っているがグランは微塵も大丈夫だとは思っていなかった。モニカは全く露出はないが、1部の大きな部分が服を押し上げているため、非常に目を引く状態になっている。

リーシャの方は、へそや肩や脇などを露出しているために秩序を乱しているのは明白と言われてもおおかしくない格好をしている。

「大丈夫だといいいね」

「へ? いや、だから……いえ、そうですね……大丈夫だといいいですね」

何かを察したのか、リーシャはグランの言葉を反復していた。まあ、実際の所リーシャの言う通り大丈夫だから着てるのだから、ある意味でしようがないと言える。

「実際のところさ、身軽な格好はいいとしても……スカートつてありなの?」

「下に短パン履いてます」

「嘘だろおい、浪漫が一瞬で壊されたよ」

「お望みなら女性用下着身につけますか?」

怖いオーラを身にまとっているリーシャ、その雰囲気飲まれそうになったのでグランは即座にそれをお断り願っていた。さすがにそんな趣味は彼にはないのだから。

「まあ、今のは冗談として……リーシャの格好は寒くないのかなって思う時はある」

「寒い時は上着を着用しますからね……それに、男性職員が着てるよくなやつしか無いから、結局自分の好きなような格好にするしか無いんですよ」

「モニカは？」

「モニカさんも同じようなものですよ、ある意味私達の特権とも言えるんでしようけど」

特権と言えば聞こえはいいかもしれないが、実際は服が足りないだけである。さつさと本部はこの2人にタイツを支給しろと、グランは内心考えていた。

「今変なこと考えませんでした？」

「あーごめん俺赤ちゃんだから変な思考とか持てな……ごめんなさい変な事言つてすいません」

即座に目を見開くリーシャに、グランはすぐに謝っていた。秩序を執行しようとしている時のリーシャは、グランにとってはリツチの顔面よりも怖い。

「どうか何ですか赤ちゃんって」

「いや、コッコロって子がたまに乗るんだけど……あの子の言う『主様』が、一時の間ほとんど赤ちゃんのようなものだったみたいで……」

「よく分かりませんね……」

「つと、話がそれた……まあ逸れたついでに三通目行こっか」

「了解です」

『秩序の騎空団って結婚して退団する、みたいなのはありなんですか？』

「ありますが、した人は私は見た事はありませんね」

「それって雰囲気できなくなってる……？」

『周りがしてないし、俺もしてはいけないのでは？』という、存在しない圧力によつて結婚したいのに出来ていない、彼女を作りたいのに作れない……という状況になっているのではないか？ とグランは邪推していた。リーシャも、それを言われて少し考え始めていた。

「それも……そうですね……団内で恋愛禁止にしている分、結婚はしては行けないと考えている人は多いんじゃないでしょうか」

「考えたこと無かったの？」

「今も、以前も……正直考えたことは無かったです。やはり、団内恋愛禁止というのが行けないのでしょうか？」

「というか、本当にそのルール生きてるのか俺は甚だ疑問に思うけど」  
「……というど？」

「元々規律が凄いいせいで、そのルールを知らなくて付き合えないって思ってる人が多いかもしれない」

つまりは、ルールの形骸化とも言えるべき現象。恋愛禁止というのを、ルールではなく雰囲気覚えてしまっている事態。このルールが形骸化したことで、誰も団内団外問わずに恋愛禁止だと把握してしまっている可能性が非常に高くなっているのだ。

「……確かに、団長さんの言う通りかもしれないですね」

「まあ、都合がいいならこのまま放置でもいいと思うけど」

「……複雑なところですね。いくら忙しい秩序の騎空団だからと言って、完璧な恋愛禁止にまでしてしまうのは……」

「でも団内じゃないと出会いがない？ 普通は」

グランのその言葉に、リーシャは驚いた表情をしていた。その考えが、全く自分になかったという感じだったのを見て、グランは何となくそれを察していた。

「全く違和感がありませんでした……」

「……団内恋愛禁止解除してみる？」

「……それも、ありなのかも知れません。公平さを明言している秩序の騎空団が、違法な労働時間やルールを行っている組織と同等の状態になっていたなんて……」

過去に何があったかはわからないが、要するに今のような組織を罰することも秩序の騎空団は行っているのだろうか、と的はずれな考えをグランはしていた。

「まあ、そこら辺は俺と言うよりはモニカと話し合って決めた方がいいかもね」

「そうですね……この後モニカさんと話し合って決めてみます」

「うんうん、その方がいいその方がいい……というわけで、時間もほぼぴったりなところで、お時間がやってまいりました。また次回、この番組でお会いしましょう……さようなら」

綺麗な流れで番組を終わらせるグラン。終わった瞬間、リーシャに

肩を優しく叩かれていた。その瞬間、グランの顔から笑みが消えて闇の深い真顔となっていた。

「というわけで団長さん、一緒に秩序の騎空団に来て貰えますか？」

「どこでアウト判定出ましたか……」

「……へ？ いや、ただちよつと来て欲しいなあと思ひまして」

「……何やて？」

秩序の騎空団に来て欲しい理由を一言で言うと、こうである。『今の話を早速話し合いたいから、第三者としてきて欲しい』である。その理由に納得したグランは早速秩序の騎空団に向かうのだった。

「驚くほど話がサクサク進んだ」

「みんな思うところはあったのでしようね」

数時間後、まさか数時間で開放されるとは思ってたかったグラン。行きの移動時間を含めてのこれなので、かなり早く会議は終了していた。

「早く終わることはいい事です」

「しかし、まさか恋愛禁止がこうも簡単に無くなるとは……」

「とは言っても、あくまでもプライベートのみということですけどね。仕事中は流石にイチヤつくのはご法度です」

「なるほど……」

そこら辺の線引きはきちんとしているので、結構安心はできる。しかし、妙にリーシャがイキイキしてるのがグランは少し謎だった。「さて、団に戻ったら……」

「その前にお買い物して帰りませんか？ キッチンの調味料が、いくら少なくなってるのを確認しているのよ」

「ん、なら買って帰るか」

「はい!!」

その後、幾らかの調味料と多少の2人のお出かけを楽しみつつ、グランとリーシャはグランサイファーに戻るのであった。グランは気づいていなかったが、リーシャがある程度自分の気持ちに素直になつて少しだけ連れ回していたのだ。それにグランが気づくことは無い。

「なあ、グランよお」

「どしたのビィ」

「おめえって鈍感ってやつだよなあ」

「え、何でそんなの?」

「いや……今日連れ回されてたけどよ、なんで連れ回されてたのか分かってんのか? って話だよ」

「そりゃあ、俺が変なことしないように見張るためだろ? 後、変なことしたら即座に秩序出来るように」

グランのその回答を聞いて、ビィはふと思った。普段からの行動次第では、『この人に限ってそんなことは無いだろう』ということが起こってしまう場合があるのだと。

ビィは、自分なるべくそんなふうにならないように行動に気を付けておこうと、自分のことを省みるのであった。

蒼天の剣閃、弱さは無いだろうか？

「今日のゲストはモニカさんです」

「よろしく頼む、不埒なことを考えたら即切り捨ててやるからな」

「怖っ、リーシャより過激じゃん」

「……さすがに今のは冗談だ」

「俺も冗談です」

軽い会話のジャブ同士から、番組は始まった。モニカは秩序の騎空団団長である。本来は、蒼の騎士ヴァルフリートなのだが今現在はそうなっている。

「しかしな、一つだけ貴君に言いたいことがあるのだ」

「俺に、一つだけ？」

「私の格好はそこまで破廉恥ではないぞ」

「っ……!?!」

モニカの言葉に、グランは今まで見せたことないような表情になっていた。それこそ、本当の意味での驚愕の表情と言わんばかりに。その表情を見て、モニカはさらに困惑を深めていた。

「何故そんな表情をするんだ……」

「いやいや、だつてそうでしょ？」

グランは目線をずらして、その部位の主張だったりとかを改めて再認識する。少し照れ恥ずかしいのか、モニカは顔を赤く染めるだけで特に何も言つてこなかった。

「そもそも、スカート短すぎますよ」

「何？ しかし、リーシャとほとんど同じ位置取りにできるような作りなのだが……」

「そもそも、リーシャのを基準に考えたら長さが違いますやん」

口で言つたら怒られるし、なんだつたら切られるためにグランは言わなかったが、モニカの身長は低い。それこそ、1部の特徴的な大きさがなければ間違われるくらいに。それでも、時折ドラフの女性に間違われるらしいが。

「……確かに私の身長は『少し』リーシャより小さいが……それでそこ



まで変わるものか?」

「そもそもリーシャそこまで短く無くない? もうちよつと長いかと……」

「……なら、今度からもう少し長めにするか……」

「ああいや、長さはそのままだ」

「何? 貴君もよくわからない男だな……」

グランの要望により、モニカのスカートの長さは今のままの長さを保たれるようになった。なぜそんな要望をするのかモニカは理解出来なかったが、そこまで困っていなかったためグランの要望をすんなりと受け入れた。

「……スカートだけか?」

「まだもう一つあるけれど、今それをここで高らかに宣言したら確実に秩序されるのでいいません」

「……ど、どれだけ破廉恥な事を言うつもりだ貴君は!!」

顔を真っ赤にさせて恥ずかしがるモニカ。その様子を見て、素直にグランは可愛いと思っていた。身長で分かりづらいが、彼女は成人女性である。つまり、合法である。

「さて、ここまで綺麗に話が整ったところで、お便りのコーナーいっちゃいましょう」

「お、おい、話を勝手に——」

「一通目『モニカさん本当にヒューマンなんですか?』」

グランはモニカに喋らせないように、間髪入れずにお便りを読み上げる。真面目なモニカは、それを応えようと仕方なくグランへの追求を今は諦めていた。

「どこからどう見てもヒューマンだろう、ドラフの特徴的な角も、エールのような耳も、ハーヴィンの様な体軀でもないだろう」

「エールンやハーヴィンじゃない、つて言うのはまあたしかに見たら分かるんですけどね」

「……確かに、『少し』身長が小さいせいでドラフ族と間違われることはある。しかし、その場合『何故角が無いのにドラフだと間違われる』のか、だ」

『そりやあ服の下から盛り上がって主張している胸部でしょう』なんて、グランは口が裂けても言えない。本人が自覚しているのかどうかは不明だが、ひとまず言え無いものは言え無いのである。

「……まあ、偶にエルーンやドラフって自分の特徴的なところ隠してる人いますし……意図的なのか偶然なのかはともかく」

「例えば？」

「フォリア」

「ああ……」

フォリアはとある別空域の女性である。見た目は子供、ドラフの様な特徴的な胸部もないので、本当にパツと見はヒューマンの子供に見えるのだが、それは帽子を被っているせいでそう見えるだけであり、実際はエルーン族だった……というパターンがある。

「しかし、私は時折帽子は外しているぞ？ それでも勘違いされるのだが……」

「そのツインテールに隠してるとか思われているのでは……？」

本来ならありえないが、角が小さい人なら隠れるくらいにはモニカのツインテールはそれなりに大きいものである。そして、角が小さいということはまだ大人ではないと認識されているのである。

「そこまで思っているのなら、普通ヒューマンだと思えばいいものだがな……」

「……そうっすね」

その通りなのだが、実際ヒューマンの成人女性とは思えない所があるのもその通りなので、グランはこの話にケリをつけてさっさと別の話に行くことにしたのであった。

「とりあえず、2通目。『仕事が休みの時は何をしていますか』」

「ココ最近休みを取った記憶が無い」

「そう来たか……じゃあ、仕事が一段落着いた時で……」

「いや、待て……そうだなあ……」

少し考え込むモニカ。必死に思い出そうとしているのかもしれないが、ココ最近休みを取った記憶が無いとなると、あまり期待できそうな答えはないように感じるが……

「……ああ、そうだ。服とかを買いに行くことが多いな」

「ほう、服」

「お出かけ用……と言うやつだ。まあまだ私が秩序の騎空団に入ったばかりの頃だったけど……」

「そこまで言うてから、モニカは遠い目をしながら視線を上に向けて、虚空を見つめ始める。まるで、黄昏るかのように。」

「……買ったのはいいが、その服を使うような相手がいなかったことに当時気づいてな……」

「あつ……」

「相手がいけないのでは、見せることも無いだろうと……」

「……じゃあ、この騎空団にいる間にその服着てみたら？」

「少しだけ考えてから、グランはその言葉をモニカに投げ掛ける。グランは『せめてこの騎空団だけでも、私服でいるようにしたらいい』程度の考えだったのだが、モニカはそれを別の意味として捉えたのか顔を真っ赤にしていた。

「なつ……!?! き、君の前でその服を着ろと!?!」

「うん」

「君が私の相手になると!?!」

「Yes」

「『そういう意味』だと受け取っていいんだな!?!」

「何だったら着た次の日に寿退社させるくらい濃密に——」

「そこから、カメラの映像が乱れる。そして、音声もブツリという音を最後にしばらく聞こえなくなる。そして、数分が経過してから再び映像と音声は回復する。

「えー、申し訳ございません。私団長ことグランが少々暴走してしまいました。引き続き番組は続行致します」

「うう……」

「何故か傷だらけのグランに、顔を真っ赤にさせているモニカ。一体何があったのかは、この番組を見ている全員が察したので、そのまま何も言わずに番組は続けられることになったのであった。

「はい、では三通目にいかせてもらう。『もし秩序の騎空団を退団する

ような事態になった後、または秩序の騎空団に入らなかった場合の自分の生活はどうなつてると思いますか?』

「……では、前者の場合から応えよう」

「答え分かれる感じか……」

「質問が少し曖昧だからな、別に悪いことではないのだが……」

「で、どうなの?」

「そうだな……退団する様な事態となると、主に大怪我等になるだろうな。まあ私に伴侶が出来て……子供ができるという事もあるかもしれないが……」

「じゃあ後者で、前者だと結構悲しい」

「……そうだな、では後者で語るとしよう。とは言っても……家事をしたり、家族団欒したり……他の家庭がやっていることと、特に違いはないだろうな」

少し微笑みながら、モニカはそう答える。それを少し楽しみにしているのが、グランは感じ取れていた。

「じゃあ初めから入ってない場合だと?」

「少し考えづらいな……伊達に長い間いる訳では無いからな、必然的に何をどうしたらいいのかは少しわからなくなっている」

「んー……まあ出ないのもまた答え」

「いや……そうだな、もしかしたら普通の主婦になつてたりするのかもしれないな。もしくは、パティシエか」

「パティシエ? なんぞ?」

「……まあ、ケーキ等が好きなんだ。恐らく目指していたかもしれない程度のものだがな」

「なるほど」

照れ隠しをするかのように、モニカはそっぽを向いていた。しかし、それもまた本当にやりたかった事なのはグランにもよく伝わっていた。

「……そうだな、大体の意見だと……『今よりはゆつたりしている』という結果になるか」

「どうか秩序の騎空団が忙しすぎるのでは……?」

「……そうかもしれないな、秩序を維持するのも仕事だが……他にも頼まれたら、やらなければならぬ仕事などもある。そういった仕事をまとめて行うのが、秩序の騎空団というところだからな……」

「やっぱり忙しいんじゃないか……」

秩序の騎空団の忙しさに驚きを隠せないながらも、グランは落ち着いていた。依頼を受けて報酬を貰う普通の騎空団だと、あまり考えられない忙しさとも言える。

「……さて、ここまでご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「む……何だ、もう終わりなのか」

グランがいつものセリフを言ってから、モニカが驚いた表情をしていた。いつもこんな反応をされているので、グランもそろそろ慣れてきていた。

「時間が経つのは早いもので……」

「確かにな……」

ふと、少し考え込むモニカに対してグランは頭に？マークを浮かべていた。このタイミングで、一体何を考える必要があるのかと。そして、しばらくその表情を眺めていたがふと覚悟を決めたかのように……モニカは凜とした表情……かつ少し赤面した表情で、グランに向き直る。

「そ、その……この後時間あるだろうか」

「無いですけど」

「……その、私の部屋に来て欲しい……」

「よし、なら今すぐ行こう」

「そ、そうか？ 助かるな……」

こうして、2人はモニカの部屋に向かって歩き始めるのであった。赤面したモニカ、そしてその表情のまま部屋に誘われる。その事実だけで、グランは部屋に向かおうと決めたのであった。

その後、部屋につくなりモニカに正座をさせられて、数時間ほどお説教を受けたのであった。何故赤面して言ったのか、に関しては。

『説教するためとはいえ、異性を部屋に招くのは恥ずかしい』

……とのことであり、他に一切の他意は無いという。そして、モニカの説教が終わった後に関しては、今度はリーシャのお説教がその場で始まっていた。

『本日2度目ですね』

そのセリフを最後に、グランの意識は遙か遠くの空へと飛んでいった。因みに今回、落とされなかったのには理由がある。

『落とすより、説教の方が今回に関してはいい気がした』

という理由である。実際、流石に団内でちよつと淫猥なことが行われかけていると察したリーシャは、映ってはいないものの既に1度目をグランに味わせているのだから。

『……でもやっぱりモニカが赤面する必要なくない?』

これが、グランが最後に発した言葉なのであった。合唱。

## The 秩序

「……ここにいるのか？」

「情報によるとそのようです……相手は魔物を使役してきます、気を付けて掛かりましょう」

「……にしても、ある意味では過剰戦力じゃない？」

とある日、リーシャとモニカとグランの3人は、とある森の中にある屋敷へとやってきていた。これは、3人が受けたある依頼によるもののだが、グランはこの3人で来ることは過剰戦力だと訴えた。

「何言ってるんですか団長さん、足りないよりも多い方がいいんですよ」

「ま、言ってることは正論なんだけどね」

グランも、リーシャの言っていることは理解出来る。足りなくなつてピンチに陥るよりも、多い方がいい時もあるのだ。

だが、3人とはいえ実力的には相当なものである以上グランが過剰戦力だと考えるのも無理はない。

「しかし、魔物を使役するのだろうか？　ここはもう何人か連れてくるべきではなかったか？」

「いえ、この屋敷……森の中にあるだけあって、相当老朽化が進んでいるんです。あまり多い人数だと、下手したら建物が崩壊するくらいには……脆くなっています」

「そんなところを根城にするなんてなあ……ここに来たやつ、相当な怖いもの知らずというかなんというか……」

依頼内容は、逃げたチンピラを捕まえて欲しいというものだったが、このチンピラが少し術に長けている者であり、一般人に魔物をけしかけたりする事でやっていること以上の罪がかけられている。

秩序の騎空団でも、この男は捕まえなければならぬという結論が出ていた。

「しかし、ここに隠れているおかげで今まで見をかくせていたのも事実……それに、魔物を操れている以上この森であっても彼が有利なことには変わりありません」

「それもそうだ……よし、じゃあさっさと捕まえて美味しいものでも食べに行こうか」

「そうだな……私も早く帰って、紅茶を飲みたいところだ」

「にしても、ここに屋敷を作ったやつは何を考えてたんだろうか」

「森の中で住居を構えたい理由でもあったのだろうか」

あくまで追っている男は逃げ込んで根城にしているだけであり、元々ここに住んでいたと思われる者たちは、何を考えているのか。ふとグランはそれを疑問に思っていた。しかし、単純な興味以上の事は気にならないし、別にそこまで知りたいとも思っていなかった。

「無駄話はそのままでしておいて下さい……次はこの部屋を調べますよ」

「へいへい……よつと」

扉を蹴り飛ばすグラン。そこはもぬけの殻だった。屋敷と言ってもそこまで広いものではないので、あまり時間をかけたくないのだが、どうにも上手くいかず先程から部屋には誰もいないという状況が続いていた。

「……でかいベッドだな」

「確かに……」

しかし、代わりににおいてあったものに3人はふと感想を漏らしていた。ダブルベッドどころか、その倍くらいはありそうなほどでかいベッド、あまりのやかさに寧ろこれだけ広いのをどう使っていたのか……という疑問すらあった。



「こんなに大きいのが必要な程だったのでしょうか」

「よほど寝相が悪かった……とかか？」

「いやあ、蜜月でしょ」

グランの言った一言で、2人は顔を伏せていた。何故だか、グランがこのベッドを使っていないのがおかしいんじゃないかとさえ思っ  
てしまったためである。

「……貴君はこれくらい大きいのは付けないのか？」

「グランサイファー沈んじまうよ、というか置ける部屋がない……」

「まあ、はい分かってるんですけど……」

自分たちの頭の中にでてきた妄想を振り払い、3人はその部屋を後にする。所々穴が空いて、抜けているようなところさえあるような屋敷なのにも関わらず、あんなバカでかいベッドを置けるのは一体全体  
どういうことなのだろうか……とさえ思いながら、グランもその部屋  
を後にした。

「にしても、何処に潜んでんだろうなあ」

「さあ……？」

「案外、この屋敷は氷山の一角だったりしてな」

「なるほど……貴君は、この屋敷の地下があると思ってるのだな」

「じゃなかったら、ここはあんまり根城にしたくない」

氷山の一角、水の上から見えている氷山が実はとても大きなもの  
1部分でしか無かったという諺。ようするに、グランはこの屋敷はた  
だの表向きのものであり、実際は地下が存在していると考えているの  
だ。

「じゃあ探してみますか？」

「じゃあそれぞれ三手に別れて調べよう、待ち合わせ場所は入口で」

「了解した」

小一時間ほど経過した時だろうか。3人は再び入口に集合していた。その表情は、とても真面目そうな顔を保っていた。

「1番手グラン、地下室の入口が見つかりませんでした」

「2番手リーシャ、同じく見つかりませんでした」

「3番手モニカ、同じく見つかりませんでした」

というわけで、全員見つかることなく入口に集合してしまっていたのだ。その表情は暗いとまでは言わないが、少しだけ焦っていることには変わりなかった。

「……地下室、本当にあるんでしょうか」

「さあ……自分で言うておいてなんだけど、もしかしたら無いというオチになるかもしれない……」

「あくまでも予想だったからな……そう言えば、探している最中に地下室ではなく天井裏があることが分かったぞ」

「天井裏？」

「まあ、屋根と部屋の天井部分の間の狭い空間だがな。正確には見えていないが、部屋の大きさと屋敷の大きさを考えれば、広く見積つても這って進むのが限界……と言うくらいには狭いだろう」

グランは少し考える。そんな狭い場所に、まさか犯人が潜んでいるわけがないだろうと。しかし、同時に自分のその思い込みが視野を狭めているのではないかとという考えもあった。

「……よし、確かめてみよう」

「屋根裏をか？　かなり狭いから、あまりおすすめは出来ん気がするが……」

「いやいや、調べることに価値があるんだよ」

「……貴君がそう言うなら……私も付き合おう」

地下室の探索の後は、屋根裏の探索に回るのであった。

「……ほんとに狭い」

「そうですね……」

「と、というかだな……本当に狭くないか……？ 私は動きづらいのだが……」

「え、俺そんなことないんだけど……後それ以上余計な事言うと、修羅が目を覚ましそうだ」

屋根裏部屋に入り込んだグラン達。リーシャの後ろにいるモニカだけが狭さを主張する中で、グランの後ろにいるリーシャが何故だか凄まじいオーラを發揮しているような……そんな気がしていた。

「……お？」

「……団長さん？ なにか見つめましたか？」

「ハシゴだ……こんな狭いところからどうやって降りんだよ……というかどこに繋がっているのやら」

器用に体を動かしながら、グランはハシゴを下半身を下にしながら降りていく。それ相応の狭さと這って移動しているせいで、体の反転が難しかったが何とか降りれていた……先にグランだけ降りて、下に何があるのかを確認してから、上がってくる手筈でことを進めていた。

「地下室」

「……え？」

「まさかの屋根裏部屋から地下室行くルートだった」

「ええ……」

思いがけない所で地下室の予想が当たり、グラン達はそのまま地下に降りて目当ての人物を探しに行くのであった。

「……本当に広いですねここ」

「確かに広いな……何故か水が流れてるのがとても気になるけど」

「屋敷に、地下水を流し込むための設備なのかもしれないな。これならば、一々外に出ずとも水を汲みに行けるのだから」

3人はそんなことを話し合いながら、足を進んでいく。あまりにも広そうだったので、曲がり角に来る度に壁に傷をつけて矢印を作っていく。

そうしてしばらく歩いている内に……3人は自分達以外の人影を見つけていた。

「……例の人物でしょうか」

「分らん、確かめて見なければ……」

「先手必勝」

グランは人影に向かって全速力で走っていき、そして上手く壁を使いながら前が出る。その顔は紛れもなくグラン達の探していたチンピラだったのだが……

「た、助けが来たア……」

「……は？」

チンピラからの思わぬ一言により、急遽彼を逮捕するのは止めになったそうだった。

「……要するに、この屋敷に隠れたはいいものの、あまりにもボロくてろくに出歩くことさえままならない状態だった」

「はい」

「いざ地下室を見つけたのはいいものの、どこが外につながっている道か分からないまま、さ迷っていて……」

「はい」

「気がついたら自分がいるところすらわからなくなっていて、非常食で食いつのぎながら私達が来るのを待っていたと」

「はい……全くもってその通り、1つの間違いもございません……」

今回の話として、意外な結末というか予想的中だったというか……なんとも言えない結果となってしまった。3人とも、仕事としての顔つきにはなっているが、内心ちよつとだけ困惑しているのも事実であった。

「何ともまあ……」

「ひとまず、外に出ましようか」

「そうだな……」

「はい……」

チンピラと共に屋敷から出て、見事チンピラは秩序の騎空団の厄介となった。後日、あの屋敷は秩序の騎空団が調べることになり、場合によっては取り壊す可能性があるとの事である。

「うーん……」

「Hey、モニモニ」

「その仇名やめて欲しいんだが……」

グランサイファアの一室で資料を読んでいるモニカ。その最中に、ドアノックされたかと思えば突如として、グランが部屋に入ってきた。

「どうしたんだ？」

「緊急連絡、って訳じゃないんだけど……結局、屋敷の上部分は取壊すことになったらしい」

「私の貰った資料にもそう書いてある……無論、地下施設は残す方針らしいがな」

貰った資料をグランに見せながら、モニカはため息を吐いていた。仕方ないとはいえ、地下はかなり広がったので壊してしまうとあの辺一帯の地盤がどうなるかわかったものでは無いからだ。

「しかし、あの技術は見習いたいものだな」

「確かに……1人であそこまで広い施設を作り上げるなんて相当だし」

屋敷に1人で住んでいたかは定かではないが、しかしあそこに数百人も入れるような大きさなく、またあの屋敷の中にあつた日記やほかの書物などを確認してみる限り、人数としてはあまり多くないのも確かだったようである。

「どちらにせよ、研究材料にはなるようだ」

「ま、あの設備があれば色々と楽になりそうだしね」

「だな」

「さて、ひと段落着いたことだし……そろそろ休憩にしよう」

「さて、ここでモニカさんに問題です」

「ん？」

「俺は今2つの袋を持っています。そのうち1つはモナカ、もうひとつはシナモンの粉です。選択したどちらかを上げます」

両手に持った袋2つを見せながら、グランはそのような問題を出していた。シナモンの粉だけを渡されても困るが、モニカとしてはお菓子のモナカをもらえるといのならば、その好意には甘えようと思っ

た。

「では、右手の袋を……」

「こっちは……残念ながらシナモンの粉です。というわけで、かけたら美味しそうなのでモナカも一緒にあげましょう」

そう言いながら、結局グランは彼女に2つの袋を渡していた。初めからこうする気だったのだが、周りくどい事をやっている事にモニカは苦笑していた。

「ふふ、それじゃあ一緒にお茶にしよう」

「ほーい」

仕事休みのタイミング、2人は紅茶を飲みながらモナカを頬張っていくのであった。

不屈の心を持つ鋼の戦士、消えてなくなれエ!!

「今回のゲストはシロウさんです」

「よろしくお願いするよ」

「今回ゲストとして誘ったの俺だけど、奥さん放置していいんすか」

「俺も最初は断ろうかと思っただけだね、マリエさんが『偶には機械いじり以外で息抜きしてこい』って言われてね。だから問題ないよ」

シロウ、機械技師として名を上げている人物である。羅生門研究所というところに務めており、その娘であるマリエとの間に子供がいるのだ。

かつて、壊獣という存在と戦うためにロボミを起こしたり、自分が戦ったりしていたのだが、壊獣の被害は最近落ち着いてきているので、出動することはあまり多く無くなっていた。

「いやあ、しかしあの黒いスーツ見ると壊獣にされた時のこと思い出すよ」

「あの時は大変だったなあ」

一度、シロウとグランは壊獣に改造されているのだ。しかし、シロウは見た目そのままなのに対して、グランは見た目完全な壊獣にされてしまっているという差がある。その辺が、少しグランはシロウに対して羨ましさを抱いていた。

「大変といえば、ハレゼナはどう？ 最近」

「ハレゼナちゃんは『マリエとマリエの子供の安心安全を守る！』って言ってるよ、頼もしい限りだよ」

ハレゼナは、自前の武器『壊天刃』キルデスソーを持っている。これは、電源を入れることで弧を描く様に取り付けられた無数の刃が回転し相手を切り裂く武器というもの。

こういったモノを作ったということもあり、羅生門研究所にハレゼナは懇意にもらっている。

「もう娘みたいなもんでしょ、ハレゼナは」

「はは、実は年齢差10未満なんだけど俺とハレゼナちゃんって」

「そっぴやそっぴやだった」



娘にしては、年の差がえらく近くなってしまいが……ハレゼナのしおらしい態度などを見ていると、本当に娘のように思えるから不思議である。

「さて、そんなシロウさんにも色々お便りが届いています」

「ははは、楽しみだな」

「はい、というわけで1通目『白いアーマーの時に金色になるのはなぜ?』」

「その話始めると、多分2時間くらいかかると思う……最短で」

「最短で2時間」

そんなに長い間、会話を行うわけには行かないので今回詳しい話とかそういうのは一切抜きにしてもらうことになった。

「はい、じゃあ取り敢えず専門用語一切抜きでお願いします」

「そうだなあ……ハイパーメガトンキックする時に、エネルギーを貯めるんだけど、そのエネルギーを過剰にすることで一時的にエネルギーをオーバーフローさせているんだ」

「そのオーバーフロー状態の時が、あの金色の鎧?」

「そういうことさ、そうして漏れだしたエネルギーを使ってハイパー斥力斬を使っている……って事だよ」

「はー、凄い納得した」

はつきり言うところグランはただの演出だと思っていたのだが、実際はちゃんと理由があったようだ。どちらにせよ、かつこいなのでグランとしては全く問題がないのだが。

「ハイパー斥力斬でエネルギーを全部使ったから、元に戻ることもあると」

「そうそう、そんな感じだよ」

「ん……じゃああれは? 黒い方の鎧も、銀色になることあるけど」

「あー……あの鎧がああなるのは、よく分からないんだよ。偶になる、程度の理解しかないよ」

黒い鎧。かつて、シロウの姿を模した壊獣『デスロウ』という者がいた。そのデスロウが使っていたのが黒い鎧なのだが、シロウが普段着ている白い鎧に、デスロウの細胞を移植した結果、白い鎧が黒く

染ったのだ。

しかし、そうした結果黒いスーツは生きるスーツとなりシロウでさえも、未だ未知数の部分が多いスーツとなっている。その代わりに、戦士として鍛えられた今のシロウで釣り合うスーツはその黒いものしかないのだ。

「あれそんなに偶然性高いんだ」

「まあ、うんそういう事……俺もあの状態をもっと制御出来ればいいんだけどね、あのスーツは生きている……だからこそ、もっと理解しないといけないのかもね」

「スーツを理解……まあ、機械にせよ生物にせよ……理解するのは当たり前のことなのかもしれないね」

「そういう事」

「というわけで2通目に移行します。『量産型ロボミってどうなったんですか』」

「あれはまだ色々な街に配備されてるよ、最近では離れた場所からでもコンピュータのアップデートが出来るようになったからね」

「へえ、離れた位置から……」

グランからしてみればよくわからない単語が飛んできているのだが、今その言葉の解説をしている暇はないので、知らない人はシロウに聞いてね☆って態度で進めていくことにした。

「まあ、最近では壊獣の被害も落ち着いてきてるし……」

「そもそもココ最近が被害としては酷かったのかもしれないしね」

「そうなんだよなあ……ま、もし壊獣が居なくなったら……とたんだったら……量産型ロボミも、ギガントスーツも何か別のことで役に立てていきたいよね」

「シロウはやっぱり立派だなあ」

「もう俺は一児の父親だからね」

子供を持つと人間変われるものなのだと、シロウは語る。いつかそういう子供を作るような相手が、自分に出来るのだろうか……とグランは考える。

好意に気づいているのかいないのか、という事ではなく。ただ星の

島イスタルシアに着くまでに、どれだけ時間がかかるかという話である。

「そうなんだなあ……」

「あー、でも魔物退治で使うにはスーツは強すぎるかもなあ……」

「出力を抑えるとかさ、後は……あれだ。星晶獣と戦う時に使うとか」

「星晶獣か……星晶獣は相手にするには本音としては怖いな」

「……確かに、そうだね」

『え、星晶獣そんな怖いかな』って思ったグランは、直ぐに自分の感覚が麻痺していることに気づいた。よく考えなくても、普通に騎空士をやってる分にはここまで星晶獣と戦うことは無いだろう。

「そう言えば、メカっぽい星晶獣ってたまに居るけどさ」

「コロツサスマグナとか、メカっぽいもんね」

「あれってコックピットあるのかな」

その言葉で、グランに電流走る。マグナではない通常のコロツサスは、まだ鎧を着た巨人とも認識できなくもないが、コロツサスマグナは完全にメカである。

確かに、羅生門研究所が変形したメカのようなコックピットはあるのかもしれない。

「考えたこと無かったな……」

「今度ルリアちゃんに確かめてもらう？」

「そうしよう」

変な約束が取り付けられたところで、話がズレていることに気づいたグランは、一旦咳払いをしてから最後の3通目のお便りを読み上げていく。

「えー、気を取り直して3通目行きます」

「最後だなー」

『お金つてどこから出てるんですか?』

「随分と現実味のある話に……」

「正直なこと言うと、俺も気になってた」

羅生門研究所は、シロウに子供ができる前……つまりはマリエと付き合う前はシロウとマリエの父がよく無駄なメカを使っては、資金を

消していたという話がある。

だが、その資金の出処は一体どこなのか？ グランもそれが気になっただけだ。

「簡単だよ、人の役に立つメカを作ってそれを売ったりしてるのさ」

「量産型ロボミも？」

「あれは売ると言うより……何と言うか、定期的にお金を貰うことでずっとロボミを渡す契約もあるけど……レンタルに近いかも」

「レンタルに近いの？ つまり、回収する時あたり？」

「簡単なものなら、今は離れてもいいんだけど……修理とかになつてくると、そうはいかないんだよね」

「まあ、確かにそうか」

量産型ロボミは、ロボミを再現しようとしたシロウの努力の結晶である。それ故に、直せる者はほとんど居ないためにシロウやマリエの父親が出張っては修理するという流れになっている。

「月一で、渡してる街に出向いて直しに行ってるんだけどね。どうしようもない時は一旦回収させてもらってるよ」

「どうしようもない時って？」

「本格的に傷が酷い時かな、場合によっては修理するよりも新しく作り直したりする方が早い時もあるから」

「それって中身が壊れてたりとか？」

「そう、エネルギータンクが壊れてたりする時もある。そうなる時、治すときにハマしちゃうから、新しいエネルギータンクを作ってはめ直したほうがいいんだ」

「へえ……」

直すよりも、作り直した方が早いという感覚が機械技師にはあるのだろうと、グランは理解することは出来た。しかし、メカニックというジョブを使っているにも、まだ自分はその域に達していないのか理解出来ないことに少しだけ凹んでいる彼もいた。

「……あ、そろそろ時間だ」

「もうか、結構早いもんなんだな」

「ごめんね、時間取らせちゃって」

「いや、俺も充分楽しませてもらったよ。いい息抜きになったと思う」  
「では改めて……皆様ご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

そうして、グランはカメラの電源を落とす。消してから、シロウがなにか気になるのかカメラをじっと眺めていた。

「え、何……どうしたの？」

「……それ、俺に改造させてくれないか？」

「え、いいけど……どうするの？」

「まあ、それはあとのお楽しみってことで」

「というわけで、さっきシロウに改造してもらったカメラ君です」

「グランよオ、見た目が変わってることからしかオイラわかんねえよ」

「ビイが不満そうに声を上げる。とは言っても、グランも口頭では教えられていないのだ。口で教えるより、渡された説明書を見た方が早いと思っ、渡されたのだ。」

「結構大型になってたあのカメラだけど、まず支えになってた足の部分がタイヤになりました。これで移動がかなり楽になってる」

「そりゃあ見たらわかるぜ」

「次に……この2本のレバーを操作することで、乗りながらの移動が楽になりました」

「乗れるのは楽だなあ」

ある程度の台が設置されており、そこに両足を載せることで乗りな

がらの移動が楽になっていた。これで無理にカメラを持ち上げて移動しなくてもいいようになったという。

「最後に、階段なんかの段差の場合足が生えて勝手に登り始める機能も追加されました」

「……ってオイ！ 移動が楽になっただけじゃねえか!!」

「カメラの精度に関しては、全く問題がないみたいだしなあ……シロウも『今は触らない方がいい』って言ってたし」

「今は？」

「大掛かりにやる時に触らせて欲しいだっ……因みにアタッチメントで背もたれ付きの椅子が付けられるよ」

そう言いながら、グランは椅子を取り出す。ビィは溜息をつきながら、しかし便利そうではある事には納得はしていた。

「今後これでやっていくのか？」

「まあ、ぶっちゃけ楽になったからね。ガンガン使っていくよ」

こうして、団長相談室のカメラは移動がかなり楽になったので相談室以外のところでも、相談室を開くことができるようになったのであった。

因みに、きちんと対価は支払ったのでシロウがマリエに怒られることはなかったという。

愛宿せし鋼の戦士、出撃しますか？

「今日のゲストはロボミさんです」

「よろしく、お願いします」

古代兵器ロボミ。かつてシロウが蘇らせた鋼の戦士である。鋼鉄の肉体に、自立した思考能力……そして現在ではそれに加えて武装の豊富さも備わっている。

「……」

「……団長？　どうか、しましたか？」

「腕のドリルは？」

現在、ロボミの体はシロウが作り上げたレプリカで出来ている。その内の武装の一つに、ハレゼナ特性のドリルが備わっていたのだが……今回はどうやら外してきているようだった。

「今回は、戦闘も起こらないだろうと、シロウが外しました」

「なるほど、あれ外せたのか」

「はい」

壊獣との戦いにおいて、必要なのは殲滅力である。要するに近接戦闘くらいでしか使えないドリルは、あまり必要が無いように思われるが、基本的にそこから竜巻を発生させて攻撃しているので、実はかなり役に立っている。

「団長は、あれが見たいのですか？」

「まあ、うん……かなり。あのドリル結構好きだからさ……自分でも分からないけど、こう胸の奥が熱くなる感じがして」

「それは、熱意……または興奮……などででしょうか」

「わからんけど、俺は好き」

「シロウにも、そう伝えておきます」

ドリル談義もそこそこに、グランはロボミの体を眺めていく。鉄のような硬さの雰囲気は残しつつも、まるでそれが鎧であるかのような柔らかそうな雰囲気を残しているのは、彼なりにアリなのか考え込んでいた。

「団長」

「ん？」

「女性の体を、眺めるのは……犯罪だと、聞きました」

「おっと済まない……ついつい……そのしなやかさを再現出来たシロウすげえなあって思ってた」

因みに、ロボミは完全な機械ではない。その思考能力、というか意識は過去に現実に存在していた人間をベースにしたものである。それは、ロボミを実際に作りあげた夫婦の……妻の意識のものであり、鉄の体であっても女性であることには変わらないのだ。

「この体は、シロウが作りあげたものです……随分と、苦勞をかけたと……思っています」

「ま、これからあの二人守ると思つて……」

「……そうです、ね」

機械なせいか、微笑んでもあまり微笑んでいる様には見えないロボミ。しかし、グランにはバツチリと微笑んでいる様子が目に浮かんでいるのであった。

「さて、とりあえずロボミにもお便り届いているので読み上げていきましょう……一通目『バレンタインの時やハロウインの時等に、何故イベント仕様に出来ているのですか？』」

「シロウが、してくれたからです」

「まあ、そういう答えになるのはわかってたけどね。俺も気になってたけど、お菓子とか発射しても形が全く崩れないから不思議だなんて思ってたのよ」

「発射速度の低下、並びに威力を抑えることによつて、安全、安心に……かつ、子供達なども喜ばされられる様な、システムをシロウが構築してくれました」

ここまで聞いて、『やっぱりシロウすげえな』という気持ちばかりが強くなっていくグラン。バレンタインの時やハロウインの時に、お菓子が飛び出てくる様子を見ると、やはり子供達は喜んでいて、好評なのだろうと予測できる。

「兵器だった私に、子供を喜ばせる……そんなことがあるなんて、思いませんでした」



「実際、子供たちの喜んでる姿を見てどう思った？」

「……すごく、嬉しかったです」

「でしょ」

古代兵器ロボミ、そう呼ばれていた時代よりは文明が退化しているのは事実である。シロウが見様見真似で作ったシステムに、奇跡的にロボミが宿った。しかし、少なくとも兵器である人生に幕を閉じてしまった女性に、喜びを与えたのは紛れもないシロウなのである。

「……シロウって、罪作りな男だなあ」

「シロウは、『団長には言われたくない』と言うかもしれません」

「いや、今のはものの例えです。実際に僕は罪作ってるので、シロウ君とは比較にならないです」

まるで謙遜しているかのような言い草だが、だったら捕まるようなことをするなよ、という話に落ち着いてしまう。ロボミもそう思っていたが、別に言わなくても支障はないため言わないでおくことにした。言ったところで、またいずれ秩序されるのは目に見えているからである。

「因みに、ドリルからも出るように設計中です」

「ドリルからどうやって出すんだ……？」

「側面が開き、クツキーが出ます。先端からチョコクリームを出して、デコレーション出来ます」

「お菓子作るのに万全の機能になってる……」

シロウはパティシエなどにロボミを貸出すのもいいのではないだろうか、もしくは量産型ロボミのお菓子作り ver. でも渡してあげればいいのではないだろうか……と考えていた。

「確か、ミサイル打つところは……」

「ビスケットが出ます」

「……ロボミの武装って、調整次第で幾らでもお菓子作りに貢献できそう」

「シロウも、作りがいがあると、言っています」

「でしようね……」

機械を作るのは、彼の趣味であり仕事である。恐らく、パティシエ

からの依頼は群を抜いてあるのではないだろうか、とさえグランは思っていた。恐らく、それが事実だということもあながち間違いではないだろう……とさえ思っている。

「とりあえず、2通目『他にどんな武装があるんですか?』」

「試作段階、または予想外のことが起こって、取り付けられなかったパターンも参照しますか?」

「まあ、とりあえず3〜5個位で」

「分かりました」

ロボミはどこから取り出したのか、大きな設計図のようなものを取り出して机に置き、広げる。そこには色々な武装の説明が描かれていた。

「これは?」

「未完成や、取り付けられなかった……武装達です」

「へえ……」

「両肩に大型の大砲、熱放射による敵撃破を狙った右腕部、攻撃や高速移動を兼ねた、エネルギーウイング」

「色々あるんだ」

「しかし、バランスの問題や、エネルギー消費の問題、その他様々な問題があつて、見送られました」

ドリルが、ギリギリのバランスで保っていたというのはまた面白い話である。浪漫もあり、尚且つ兵器として成り立っていてこそその武装なのだろう。ただ、大きくて強いものを使えばいいと言うだけでは無いということ、ロボミは語っている。

「様々なバランス、ねえ……」

「ほかには、可変機能なども考えられていましたが、構造上見送られました」

「変形はかっこいいけどする必要性くない?」

「はい、私もシロウにそう伝えました」

独立飛行自体は可能なので、エネルギーウイングや可変機能ははっきりいっていらなさとさえ思う。グランでさえそう考えたのに、シロウは言及されてようやく思い至ったようだった。

「それと、右腕部が有線で繋がられている代わりに、遠くまで飛ばすことによって、相手を掴んで引き寄せるといった武装も考えられています」

「切られたらまずそう」

「シロウも、それを考えていました。それ以上に、私の大きさではその武装はあまり意味をなさないとされました」

それなりに大きさがあるのならともかく、ロボミの身長はほかの一般人とほぼ同程度のものしかない。それでは、確かに腕を飛ばせたところで同じような大きさの敵しか掴むことは出来ないだろう。

「後……3mくらい大きかったら良かったのかもねえ」

「そうです、ね。それくらい体が大きければある程度の敵にも、対応はできたと思います」

しかし、それだけ大きなものを0から作る技術は今の時代には存在しない。ゴッドギガンテスは羅生門研究所を改造してできたものであり、なおかつロボミを大きくすると言うだけで頭が痛くなりそうな課題にもなるのだ。

「ま、武装はもつと適切につて話だ……とりあえず三通目『マリエさんの赤ちゃんの様子どうですか?』」

「今は、元気に育っています。シロウがいないことも多いので、私がマリエと赤ちゃんの様子を、見ています。但し、シロウも子供用玩具武装を、私に取り付けて、居ます」

「そんな武装まで取り付けてたのか……」

お菓子作りといい、子供用玩具といい、シロウは戦闘用以外の武装を作るのが上手すぎやしないか? とグランは疑問に思っていた。いや、実際うますぎるのだが。

「はい、ドリルは、安眠用の子守唄オルゴールです」

「ドリルがオルゴール……?」

「自分でネジを回すことが出来て、自分で音を鳴らせる……素晴らしい武装です」

実際に見て見ないと、よくわからない武装だということだけはグランによく伝わっていた。ドリルがオルゴールになるというのが、全く

予想できないのだ。

「……と、とりあえず今度その武装を見せてもらおう……もうそろそろ時間だし、終わります」

「皆様、ご視聴ありがとうございます。また次回、この時間で、団長とお話、しましょう。さようなら」

「あ、俺のセリフ取られた……」

ロボミに自分のセリフを取られて少しがっかりしながらも、グランはキッチンとカメラの電験を落としに行く。そうして電源を落としてから、再びロボミの前に座る。

「今度羅生門研究所におじゃましていい?」

「分かりました」

今回話し合った武装を確認したかったのと、マリエの赤ちゃんがどれだけ成長しているのかも気になったので、そう伝える。即座にOKが出たので少し拍子抜けだったが、グランはこうして羅生門研究所にいける切符を手にしたのであった。

「おー……大きくなったもんだ」

赤ん坊のベッドで寝ている赤ちゃんの頬を軽くつつきながら、グランは破顔していた。つつく度に、笑みを浮かべるその姿はまるで天使のようである。

「団長、これが、例の武装です」

「オルゴールドリルか……」

見た目は、あまり普通のドリルと変わりはない。むしろ、これを見

せつけられて泣かない2人の赤ちゃんが凶太い精神を持っているように思える。

「これを、回すと音楽が……鳴ります」

そう言いながら、実際にドリルを回し始めるロボミ。その速度はともドリルと言えるような速度ではなかったが、確かに綺麗な音楽が鳴り始める。

「……その速度って、それが最高速度？」

「はい」

「まあ、オルゴールだし当たり前だよな」

綺麗な音を聞きながら、グランも心が癒されていた。時折羅生門研究所に遊びに来ることはあるが、こうやって癒されるのは珍しいことだったからだ。どちらかと言うと、メカを見て興奮しているのがいつものことなこともあったので……

「……いやあ、今日ここに来てよかったよ」

「それは、何よりです」

「……また赤ちゃん見に来る」

「はい、そうしてあげてください。その子も、貴方と会うと喜びます」

「ふっ……まさか、赤ちゃんからもモテるなんてね……」

「罪作り、ですな」

「あ、セリフ取られた……」

武装と、赤ちゃんを見に来ただけで帰ったグラン。新作メカなどのテスト調整を手伝ったが、それ以外は終始癒されっぱなしを味わったまま今回はそのままグランサイファーに帰宅したのであった。

## 鉄人GO

「……うん、確かにいい刀だ」

「俺のお気に入りだよ」

羅生門研究所にて。グランはシロウと一緒にメンテナンスついでに、武装を触らせてもらっていた。今は、ギガントスライサーを手にとって確認している最中である。

「綺麗なのに、これが機械だなんて信じられないよ」

「だろ？本格的なのを目指したかったしき、ちゃんと使い方も練習してたんだぜ？」

「ガラドア辺りに見せたら、結構興奮してそうだ」

「あのドラフの人だよな？確か、鉄が好きだっていう」

「そうそう」

手に取って見ながらも、他愛のない会話を繰り返していくグランとシロウ。そのまま確認が終わったのか、グランはギガントスライサーをシロウに渡す。

「けど本当に助かったよ、手伝ってくれて」

「いや、手伝うのは別にいいんだけどさ……俺がこれやってもよかつたのかなって」

「ダメだったらやらせてないさ。団長だからいい、って感じかな。信用できるし……なんでも出来るだろ？」

「何でも出来るわけじゃないけど……まあ、メカを見ることは普通にできるけどさ」

普通は出来ないのだから、信頼されるのも当たり前なのだが……グランは一応謙遜はしていた。過度な謙遜になっているが、本人はそれに気づいていない。

「普通は、素人はメカを見るのも出来ないんだけどな。その辺団長は、信頼出来る」

「シロウに褒められるのなら悪い気はしないよ……ところで、スーツは見なくていいの？」

「あれは点検すると言うより、様子はどうかを聞くって感じかな」

黒いスーツのことを確認しながら、グランとシロウは黒いスーツに視線を寄せていた。あのスーツは、壊獣細胞……しかも進化した壊獣であるデスロウのものを移植してあるのだ。言葉こそ喋らないものの、あれにはきちんとして自立した意識が宿っている。

「何か、言葉を喋るように出来たら嬉しいんだけどね」

「発声器官が着いてないからなあ……まあ、言葉をしゃべられるようにするって言うのはありかもしれないな」

喋れる様になれば、今よりもっと対話が可能になる。デスロウがひねくれていない前提の話になってしまいが、対話さえ可能になればそこはどうとでもなる壁だろう。

「シロウ」

「ん？ロボミ？どうしたんだ？」

二人で話しあっている最中、ロボミが部屋の扉を開けて入ってくる。急ぎの用事がある風でもないの、伝言だろうか二人で予想し始める。

「マリエが、ミルクを買ってきて欲しいと」

「あ、そっか……うし、じゃあ買いに行ってくるよ」

「いつものもので、という伝言もあります」

「ああ、分かっているよ。ついでにオムツも買ってくるよ、マリエさん今日は何か作って言ってた？」

「夕飯、は——」

夕飯のメニューを聞いて、オムツとミルクと夕飯に使う食材の買い出しに出かけようとするシロウ。ロボミと話しているのを聞いて、グランはふと思った。

「いい旦那がすぎる」

「え、なに急に」

「いや、シロウがここまでいい旦那さんになるなんて……つて考えちゃって」

初めてであった時は、マリエに怒られる程にはメカオタクだったシロウ。自分の趣味を追求するあまり、研究所に使う予定のお金すらもメカの開発にかけてしまうほどだったのに、今では役に立つメカだけ

を作り自身の妻を甲斐甲斐しく手伝う旦那となっていた。

「確かに、私も考えてはいました」

「おいおい、ロボミもか。俺だって、やれば出来るんだよ」

「まあ、シロウは優しいし強いしいい人だから……自分の妻のためにちゃんと色々してくれるってのは、ある意味では予想出来たけどさ」  
「団長の、言いたいことも理解できます」

予想はできるが、いざ目の前になるとやはり困惑してしまうというやつである。事実、グランはそれなりには驚いていたのだ。

「……昔の俺って、そんなにダメ男に見えてた？」

「ダメ男じゃなくてさ、熱血漢だけど趣味に没頭するタイプって感じで見えた。世間一般のダメ男と比べたら、遥かにいい人だろうし」

そもそもダメ男の基準がそれなりに曖昧なので、シロウがダメ男かどうかというのは、結論が簡単に付けられないものではある。しかし、ダメ男と言われるほどダメな部分はグランには思いつかなかった。

「ありがとう、団長」

「いやいや、本音だしね。気遣いできるのはわかってたけどさ」

「じゃあ、俺買い物行ってくるよ」

「俺も手伝うよ、俺自身が買いたいものもあるしね」

「ならお願いするよ。ロボミ、あとは任せたぞ」

「了解しました」

「いやあ、結構な買い物になったな」



「グランサイファーだと、お買い物なんてこれ以上するけどね」

「そう言えば、また人増えたんだって？今何人だっけ？」

「多分100人は超えてると思う」

他愛のない会話をしながら歩く二人。そんな中、シロウが何かを見つけたのか、足を止めてショーウィンドウの中を覗いていた。グランもそれに気が付き、シロウの視線の先を見る。

「……ウエディングドレス？」

「そう言えば、簡単な式しかあげてなかったなあって」

「コルワが聞いたらガチ切れしそうな案件」

「まあ、俺もマリエさんも…あんまり派手なのを挙げずに、静かにやりたかったっていう結論出しちゃったし」

「でも、着せてあげたいんでしょ？」

「まあ、うん……そうだな…マリエさんには、これ着てもらおうのもいいかもなあ」

結婚式は、別にいつ上げても問題ないだろう。グランはもとい、恐らくグランサイファーの仲間達も手伝ってくれるだろうという予想が、グランにはあった。

「って言ってもなあ……」

「どしたの？」

「……やるとしても、祝ってくれる人多くないか？」

「グランサイファーでの知り合いは皆祝ってくれると思うから、相当多いな、何なら司教役も調達できるし会場も調達できるし」

「グランサイファーに乗ってる人たちの素性が気になってきたぞ……」

王族騎士団ゼエン教徒に十天衆更には、星晶獣なども乗り合わせているグランサイファー。メンツさえ揃えられれば、グランサイファーで結婚式は余裕で行えるレベルである。

「まあまあ、コルワもいるし衣装はばっちりだよ」

「でも赤ちゃんがなあ……」

「なら一緒に参加したらいいよ、ロボミも絶対喜んでくれるだろうし」

「……そう言われたら、遠慮してばかりは悪いのかもな」

「よし、じゃあ早速準備しよう」

「え、もうか!？」

「行うのは1ヶ月後だ」

こうして、急遽シロウとマリエの結婚式が静かに始まろうとしているのであった。

「では、お2人は永遠の愛を誓いますか?」

急遽行われた結婚式。場所はウエールズ城、場所提供者はアグロヴァルとパーシヴァル。結婚式を執り行う司祭としてソフィア、その他シロウと仲の良かったグランサイファー団員を軸に結婚式は始まった。

金持ち軍団が、シロウへの祝い金としてとんでもない額を提示してきたが、それをグランはダメにした。あくまでも数万程度で収めるように、と。何人かは、3桁×万ルピを提示してきたので仕方の無い話だが。

「はい…誓います」

「俺も、誓います」

「では、指輪の交換と…その、誓いの口付けを——」

恥ずかしいのか、少し顔を赤くしながらも進行していくソフィア。しかし、その最中にロボミのセンサーとシロウが持っている小型の壊獣発券機から凄まじい音が鳴り響く。

「こ、この音は…!？」

「シロウ君！壊獣よ！」

「ああ！行くぞロボミ！！」

「はい、シロウ」

そう言っつて、赤ちゃんを預かったマリエは心配そうな表情でシロウを見送つていた。そして、2人が出たあとにグランは立ち上がる。

「戦闘できるメンバー集合！！壊獣と戦える武器は持ったな！！」

「おうー！」

「結婚式無茶苦茶にしゃがったあの壊獣達におしおきしに行くぞ！！」

「「おー！！」」

そして、凄まじいテンポの良さでグラン達も何人かは壊獣退治に向かった。せっかくの結婚式のタイミングで、出なくてもいいでは無いか、と叫びながら……慟哭しながらグランは突撃して言った。

「だ、団長さんまで……？」

「あ、あの……こんな結婚式になっちゃいましたけど……」

ソフィアが申し訳なさそうに謝っている。彼女は一切悪くないのだが、それでも責任は感じていたのだ。それに対して、マリエも申し訳なさそうにしていた。

「い、いえー！気にしないでいいんですよ……？私も、ちゃんと進むと思つてませんでしたし……」

「……でも……」

「それに、私達からしてみたら……こう言うのは、ある意味日常なんですもん。シロウ君は心配だけど……それでも、ちゃんと帰ってきてくれるって信じてる」

「ふふ、好きなんですネ」

「ええ、とても」

「行くぞロボミ!!」

「はい、シロウ」

「ダブルハイパーメガトンキイイイイイツツツツツク!!!」

2人の戦士の蹴りにより、一気に倒されていく壊獣達。そして、その一撃により、今回出現した全ての壊獣が全滅したのであった。

「これで全滅か？」

「はい、そのようですシロウ」

「団長達もありがとう、手伝ってくれ——」

「というわけでさっさと戻るぞ!! マリエさんも待つてるだろうし!!」

グランは迫真の顔でそう叫ぶ。まだ結婚式は続いている、さっさと戻って続きをしろという圧力が、シロウ達にもかかっていた。シロウも早く戻りたかったのは戻りたかったのだが、グランほど熱意と感情が籠ってるのを見ると、逆に冷静になってしまう。

「あ、ああ……ロボミ、頼めるか？」

「了解です、シロウ。担ぎあげて、そのまま高速飛行モードへと移行します」

ロボミは自分の背中の上にシロウを乗せて、そのまま空を飛び始める。走って戻るよりも、障害物のない空中を飛行することによって、時短を狙っているのだ。

「よし！俺らもさっさと戻んぞ!!」

そして、グランも着いてきてくれたグランサイファアの者達と共に、さっさとウエルズ城へと戻っていくのであった。因みに、グラン達が完全に戻りきる頃には既に結婚式は行ける所まで行っていたという話があるが……それはまた別の話である。

「あの時！壊獣さえ！！現れなければ！！」

「ま、まあまあ……俺もマリエさんもそれはしょうがないって割り切ってるしさ……それに、壊獣に対しては一部の武器しか通用しないし」

「くっ……それは分かってる、分かってるけど……」

後日、シロウとグランは二人きりで飲んでいた。グランは未成年なので、飲むというか2人でレストランでの食事なのだが。

「それでも、手伝ってくれて助かったよ」

「というか、出撃しなくてもよかったんじゃないか……」

「数は多かったし、結果的に俺とロボミが出て正解だったよ」

「ぐっ……それでもだなあ！！」

しばらくは、グランの愚痴は続いていた。自分の愚痴ではなく、他人の事に対しての愚痴を、本人に対してただただ呟いていく。シロウは、そんなグランを見てふと思うのだ。『だから人が寄ってくるのだろうか』と。

その日、シロウはグランがスッキリするまでその愚痴に付き合ったのであった。

吸血姫、カプつとするよー？

「今日のゲストはヴァンパイイさんです」

「がおー！ ヴァンパイイちゃんだよー！」

両手を猫の手のような形にして、ヴァンパイイはいつものポーズを取る。グランはそれを見てただ『可愛い』とだけ感じていた。真顔なので、誰も気づくことは無いだろうが。

「ねえねえけんぞくう」

「はいはい某はけんぞくう……どしたの？」

「これって何するのー？」

「このお姫様はこの番組を見たことがないのかな!! でも可愛いから教えちやうよ!!」

「わーい！」

「まあ、改めて再認識だけど……この番組は俺と簡単なお話をしたり、お便りを読み上げたりしてちよつとの間過ごす番組だよ」

「お話ー？ お話ー……」

少しだけ考え込むヴァンパイイ。別にそちらから話題を降らなくても、グランから振るので構わないのだが折角という事で、グランは少しだけ待つことにした。

「あ、この間ヴァイトとお洋服買いに行っただけどねえ？」

「え、2人で？」

「ううん、何人が着いてきてくれたよー？」

「ならないけど、気をつけてね」

ヴァンパイイ……それに同種であり弟のヴァイト。この2人はヴァンパイアという種族であり、基本的に滅多なことでは島の外に出ることがない種族である。

時折島の外に出て、人間たちと関わろうとしたりヴァンパイア社会から抜け出したりするもの達もいる。その内の一部がヴァンパイイとヴァイトの2人なのだ。

そして、この2人はヴァンパイアであるが故に人々から恐れられている。バレた場合、その島の警備を呼ばれたりすることもあるので、

基本的にフードを被ってた場合のみ外に出ることになっている。

「それで、出かけてどうしたの？」

「ヴァイトに似合いそうな服があったから、買ってきたの。でもね、ヴァイトはその服を着るの嫌がってたの」

「あら、どんな服だったの」

「うーんとね……フリフリのミニスカートでー」

「あ、うんそれは確かに嫌がるわ」

ヴァイトは男である。しかし、少々童顔な所があるために女性物の服を着ても案外似合う顔立ちな為に、時折ヴァンピイの無茶ぶりによって女装させられかけてる。

「だからねー？ 着せたの」

「……ん？」

「着せたの」

「……ヴァイト……」

この番組でそんな羞恥プレイを受けさせられたヴァイトに合掌するほかなかった。姉から女装させられるというプレイを受けさせられた上に、それを団内で暴露されるといふ更なる追い討ち。まともな人間なら、そのまま船から飛び降りているだろう。

「……さて、そんな羞恥プレイはともかくとして……お便りを読み上げていこうと思います」

「はーいー！」

「一通目『ヴァンパイアって色々な伝説がありますが、当てはまるものはありますか？』」

「当てはまるものー？」

「まあ、世の中に伝わってる弱点って本当に通用するの？ って話じゃない？」

銀製の武器、ニンニク、太陽の光、流水、弱点以外なら鏡に映らない……などと言ったことも含まれるだろう。それらの中で当てはまるものはあるか、という事である。

「ヴァンピイちゃん、にんにく料理あんまり得意じゃないー」

「弱点だから？」

「臭い！」

「……これは弱点だから、という理由じゃなさそうで……」

しかしヴァンパイもヴァイトも、強い方のヴァンパイアなのでもしかしたらある程度の弱点は効かないのかもしれない。グランはそう思うようにした。

「太陽は……あんまり問題ないもんね」

「暑いのも眩しいのもちよつと苦手かなー……でも、最近はある程度暑くはならない！」

そもそも今では真昼間から外出してるので、苦手ということは無いのだ。この弱点が伝わった理由としては、恐らくヴァンパイアの島が常に濃い霧で覆われている為、太陽の光が届かないから……という事だろう。もしかしたら、ヴァンパイ達が特別なだけなのかもしれないが。

「他は……流水とか？」

「うーん……分かんない！」

「俺もそう言えばヴァンパイ達が流水に触るところ見た事がないなあ……」

グラン達は話題に出さないが、銀製の武器は明確な弱点である。しかし、それで実際にヴァンパイ達が襲われているため、グランは余計な話題を出すことは無いだろうと思つて、銀製の武器に関しての話題は一切出さないようにしていた。

「……まあこんな所かな？ とりあえず2通目に行つてみよう」

「はい」

「2通目『蝙蝠になることができるって本当ですか？』蝙蝠を使役してるのは、俺はよく見てるけど」

「出来ないこともないけどー、ヴァンパイちゃんはあんまりしないかなあ」

「まあ、する場面がよっぽど無いもんね」

蝙蝠になる、というのはあまりいいことでは無いらしい。相手の不意を突くこと自体は可能かもしれないが、あまりしすぎると自分の不利になるかもしれないからだ。



そもそも、ヴァンパイもヴァイトもヴァンパイアの中では強い部類なので、余程のことがない限りすることも必要性もないのだが。

「あー！ 今度けんぞくうの部屋にそれで遊びに行ってもいい？」

「いや、別に普通に來たらいいけど」

「ふっふっふ……けんぞくうが部屋に入った後に、いきなり現れたらビックリするでしょ」

「まあ確かにびつくりはするけどさ」

ドッキリ計画を実行しようとしているみたいだが、それを本人の目の前でばらしている辺り、余程驚かせる自信があるのだろう。グランは別に驚かされても怒ることはそうそうないと思うが。

「とりあえず、蝙蝠にはなれるということ……3通目『スープが作れるって本当ですか？』」

「えっへん！ なんとヴァンパイちゃんはスープを作ることが出来るのですー！」

「なお味は保証しない」

「むー！ ちゃんと美味しいんだからー！」

ヴァンパイは、偶にスープを作る。グランも何度か飲んだことがあるのだが、劇的かというともの……正直に言えば美味いとは言えない代物である。かと言って、食べられないほどでもない。でグランはよく飲んでいる。というか、作ったら大体飲むようにしている。

「まあまあ、俺はあの味好きだよ」

「フオローになつてないー！」

「また今度飲んであげるから」

しかしそのスープの味に関しては、ヴァンパイアだからという訳ではなく、ヴァンパイ個人の問題である。現に、他のヴァンパイアやヴァイトが飲んだ時は困った表情になっていたからだ。

「にしても、スープだからあの味変わんないな」

「ヴァンパイオリジナルなのですー！」

「どっかで聞いたことあるフレーズを使うんじゃないですか」

どこぞの四コマの世界からやって来ているジンは、スープを零され

た時にとんでもなく切れていたが、切れている方向が変態的な方向だったために、ヴァンパイが引いていたことをふとグランは思い出していた。

「ローアインとか、他の人達にもスープ教わってもらってるんだよね？」

「うん！　おかげでヴァンパイちゃんのスープは、格段にレベルを上げたの！」

「レベル……上がってるのか……？」

未だにヴァンパイのスープが美味しくなったという話を、グランは聞いたことがない。ヤイアのチャーハンと共にヴァンパイのスープが出されると、無意識に味の相対評価をくだしてしまう時がある。そうなったらまずいので、先にスープだけ飲みほしてからチャーハンを食べる人物が多いが……

「ちゃんと美味しくなってますー！」

「何か、ヴァンパイア限定の何かによってスープがああの味になっているのだろうか」

「けんぞくう！」

「あ、はい私けんぞくうでございます」

「後でスープ飲んで！」

「OK、任された。鍋2つ分くらい作っても飲み干してやるからな」

「やったー!!」

それはそれとして、美少女が手作りしたスープと言うだけで割と飲むやつはいるので、自分のためだけに作ってくれたスープというのは、一種のご褒美である。飲まない訳にはいかないだろう。

「……さて、少し早いようですが本日はここまでです。皆さんご視聴ありがとうございますございました。また次回、この番組でお会いしましょう、さようなら」

「ばいばいー!!」

「グラン、お前今日珍しくセクハラしてなかったなあ。セクハラ考えてる時の顔にもなつてなかったしよオ」

番組が終わってから、グランは一旦自室に戻ってきていた。先に戻っていたビイが、いつものようにグランの頭の上に乗りながら話しかけてくる。

「え？」

「え？」

「ビイ、お前何言ってるの？」

ビイからの質問により、グランは真顔以上に真顔になっており……ちよつとした恐怖があつた。この時、ビイはいつもと同じようにセクハラ思考自体はしていたのだと勘違いしていた。

「ヴァンピイでそんな、セクハラなんて思いつかねえよ……」

「おめえ、今更そんな事言っても誰も信じねえと思うぞ？」

「いやあ、思いつかないものはしょうがないよね」

笑いながら頭を掻いているグランだが、そんなことを今更言つたところでビイの言う通り、誰も信じてくれないだろう。事実、ビイもグランの言うことを全く信用していない。

「ていうかおめえ、大体の女性団員にセクハラかましてんじやねえか」

「男の性だからな!!」

「1回ファステイバに締め上げてもらつたらいいんじゃないか？」

「ビイ！俺たちは相棒だろ!!俺を見捨てるって言うのか!？」

「オイラ、お前がまともになるんだつたらなんでもするぜ」

「相棒の心意気に俺は涙が止まらない……あと正論言われて反論できない事でも涙が止まらない……」

膝から崩れ落ちるグラン。横たわる彼を見下ろしながら、ビイはた

め息をついていた。こういふところさえなければ、ただの好青年で終わるのだが……

「……まあ、思いつかないのは事実だけど……思ったら思ったらでヴァイトに肩ポンされるの目に見えてるし……」

「まあ、あいつなんだかんだ言ってもヴァンパイアのこと心配してるしなあ」

「そう……だから思わなくて正解なんだ……」

「……」

この時、ビイは思っていた。『団長サンなら、ヴァンパイアに見合う相手だから問題ないよ』なんて展開がありそうじゃないか？ と。それがあるせいで、あまり強く反論できないでいた。

「……さて、この後スープ飲みにはいかないといけないから」

「あれを飲む気かよ……」

「ヴァンパイアのスープだぞ、飲まないと拗ねるだろあの子」

「お前、たまにもものすごい人を馬鹿にしてる時ないか？」

「何を言っているんだ？ 俺はヴァンパイアという少女の性格を理解しているだけだ。後約束は破らないタチなのでね」

そう言つて、グランは部屋から出ていく。その姿、背中を眺めながらビイはふと思う。『いつからあんなふうになったのだろう』と。

しかし、思春期に突入して団を作つて出会つた仲間達の内、女性陣のレベルがとんでもなく高いもの達ばかりだった場合、必然的に少年は『変態』という大人になるのだ。

「……オイラも人間だったら、ああなつてたのか……？」

ふと思つたその疑問は、しかし誰も答える訳でもなく……ただ空気に反響するだけなのであった。

血貴、楽しませてくれよ？

「はい、今回のゲストはヴァイトさんです」

「……よろしく」

ため息を吐きながら、ヴァイトは少し面白くなさそうな表情をしていた。番組に参加することは、ちゃんと了承してくれたのだが、実は嫌だったのでは？ という気持ちがグランの頭によぎっていた。

「……嫌だったら断つても良かったんだよ？」

「いや、僕が呆れてるのはそうじゃなくて……団長サンは、女性にモテるねって思ってたさ」

「そう？」

「番組が始まるまでに、何人の女性と会話した？」

「多分10人くらい？ でも全員団員だし、話しかけられたり何か話したりすることはあるんじゃないかな」

更にヴァイトはため息を吐く。グランは意味がわからず頭に疑問符を浮かべていたが、ヴァイトはそのまま姿勢を正して座り直す。

「まあ、人間は『英雄色を好む』と言うらしい？ 団長サンがどんな趣味嗜好を持っていたって、僕は受け入れるしかないよね」

「まさか俺がそんな風に思われてるなんて……あながち間違っていない……」

「団長サン、せめて否定はして欲しかったよ……」

さらに呆れたように、ヴァイトはグランを白い目で見ていた。グランは軽く笑いながらも、ヴァイトから視線を反らせていた。そのまま流れるように箱をとり、そしてお便りを取り出していく。

「と、とりあえずお便りを読んでいこうか。時間は有限だからな！」

「明らかに適当言って誤魔化してるけど……いいよ、僕もその通りだと思ってるから」

「じゃ、じゃあ一通目『ヴァンパイさんと兄弟らしいですが、どちらが上ですか？』」

「一応……僕は弟、ヴァンパイは姉ということになっている」

反面教師なのか、はたまたただの性格の違いなのかはわからない

が、はたから見たらとてもヴァイトが弟であるようには見えない。ヴァンパイの方が妹に見えることもあるが、一応ヴァイトが言った通りなのである。

「ほんと、あんまりそういう風には思えないよね。特に初めて会う人には」

『自由奔放な妹に困らされている兄』という立場だったら、まだ幾分か……いや、その場合ヴァンパイがより好き勝手になってこんな気がするな」

「今の『自由奔放な姉に困らされている弟』の方が収まりがいいのかもね」

まだヴァンパイが『お姉ちゃん』でいる分には、『弟』であるヴァイトの面倒を見ようとしてるので、案外ありかもしれないと思えていた。

「まだこっちの方が良かった……っていう発見が見つかった時点で僕はちよつと落ち込んでるよ……」

「だったらそんな落ち込んだ気持ちを解消するために、2通目に行ってみましょう」

「ん……」

「2通目『自力で飛べるんですか?』」

「飛べたら苦労はしないよ、いや本当に」

羽自体はあるものの、飛行に至るまでのものではないのだ。そもそも、飛べるんだったらもつと早くにそれを見せていてもおかしくないはずである。

「滑空は?」

「するとしてどこですか」

「蝙蝠だと自力で飛んでる扱いにならないの?」

「確かに飛んでるけど、あれでどこまで速度がでるのかって話だけだね」

確かに、とグランは思った。騎空艇で飛んでいるからと言って、人間が自力で空を飛ぶ術を覚えた訳でもない。それこそ、マキラの様に飛力をどこかで身につけなければならぬだろう。あれ自体で飛ん

だとしても、速度がどれだけ出るのかという話になるが。

「僕としては、自力で空を飛んでいる人間がいることが一番の驚きだよ」

「……確かに自力で飛んでるの何人かいたわ」

人間は飛ばないものだどグランは認識をしていたが、よく考えたら魔力が高いものは結構な頻度で空を飛んでいた。ヴァイトが言っつてようやく思い出したが、自力で飛ぶ人間が何人かいるのを完全に忘れてしまっていた。

「あれって、島と島を渡れるのかい？」

「……少なくとも、何人かはそれが出来る気がする」

恐らく十天衆クラスなら……とグランは思っていた。アンチラと出会った時は島と島の間で空であつたので、彼女も恐らく島と島を直通で渡ることが出来るのだと確信していた。

「そうかい……人間は恐ろしいな……」

「まあ、そんなの世界に名を馳せる強者レベルじゃないといけないと思うけどね」

「十天衆だっけ？ 確かに、あれだけの実力者が揃っていたら……まあ出来そうだね」

ソーン、フუნフ、ニオ、ウーノ……十天衆で飛べるのはこの4人である。しかし、十天衆は空の世界でも最強クラスの人員が集う騎空団。残念ながら、ヴァイトはその基準に達してはいないのだ。

「あとは……星晶獣も飛べるよね」

「飛べるって言うか……元々が浮いてるって言うか……」

ヴァイトの言う通り、星晶獣も空を飛ぶことが出来る。しかし、元々が地面から浮いて生活しているようなものなので、基本歩いているのは少ない……と思われる。ココ最近、仲間の星晶獣も増えたので歩いているのをよく目にするところがあるが。

「……今ので思ったけど、星晶獣って仲間になるもんなんだね」

「まあ元々ティアマト、コロツサス、リヴァイアサン、ユグドラシルの4人はルリアの中に基本いるとはいえ、仲間みたいなものだしね」

「彼女が召喚するんじゃないやなくて、自分の意思で戦っているのも今じゃ

あ結構いるね」

「まあお陰で助かってるんだけど……」

星晶獣は、人間よりもその属性の力が強めである。その分に特化しているため、弱点属性による攻撃もより通じやすくなっている。とは言っても、星晶獣なのでタフさはとんでもないものがあるのだが。

「羽の付いた星晶獣でもいれば参考になるんだけどな……」

「いるよ、羽の着いた星晶獣」

「え、ほんとに？」

「ついでにヴァイト同じようなタイプ属性だから、話も合うんじゃないかな」

「今度紹介してよ」

「1人この番組ガン見してるし、いいよ」

そう言うグランの頭の中には、自分の事を悪魔だと思い込んでいる墮天司の星晶獣の姿があった。恐らく、散々口で罵倒しながら否定した後に了承するだろう。性格はひねくれているが、それなりの良心はあるのだ、アザゼルは。

「へえ、そうなんだ」

「うんうん、とんでもなく白い肌に紫がかった黒い服、あと角生えてるから分かりやすいと思うよ」

「角……？ わ、わかったよ」

少しヴァイトは困惑していたが、グランは別に情報を誤魔化している訳ではなく、真実を話しているので後は探せるように祈っておくだけである。

そして、この話のオチも着いたところでグランは3通目へと手を伸ばす。

「3通目『短剣を使っていますが、他にも使える武器はありますか？』  
「使ってみたい感じはあるけどね……あの武器が個人的には1番あつてるよ」

「武器の色も金色で綺麗だしね……」

「武器の色に関しては、銀色だと吸血鬼の体にダメージが入るからなんだけどね……まあ純銀だから通るダメージであつて、鉄なら大丈夫



「なんだけどさ……」

「用心はしたいもんね」

「うん……」

ヴァイトは、先程も言っていたがヴァンパイアである。そして、その体は銀が弱点であり、銀によって普通の攻撃の時よりも高いダメージを与えられる。

刃物を扱っていると、場合によっては自分の体を傷つけてしまう可能性があるため、ヴァイトはそんな心配を避けるために銀では無い武器を使っている。

「因みに個人的に使ってみたい武器とかある？」

「軽くて持ち運びやすくして銀じゃない武器なら何でもいいよ」

「前半2つで結構絞られるんだよなあ……銃とか？」

「銃か……僕が知ってる銃を使う人間は、結構大型のを使っていない？」

ラカムやオイゲンのことを言っているのだろう。ラカムは比較的小さい方なのだが、それでもヴァイトには大型に感じるらしい。確かに、懐に忍ばせておくには少々大きいかもしれない。

「うーん……そうなるか……」

「やっぱり、僕に合ってるのはこの短剣ってことになるかな」

「うーん、ヴァイトにピッタリすぎたか」

「戦闘スタイル的にも、1番あってるしね」

連撃に次ぐ連撃、軽い武器だからこそなせる連撃の嵐。その連撃のスタイルこそがヴァイトの戦闘スタイルであり、彼にとっても1番扱いやすいかつ、1番慣れている戦闘スタイルだと言える。

「ま、使ってみたい武器はあるけどあくまで『みたい』だからね」

「使う気はそんなになんないってこと？」

「そういう事」

「なるほど」

あくまでも希望なだけであり、別にそこまで率先して興味がある武器がある訳では無いようだ。グランはその言葉に納得してから軽く時間を確認する。どうやら、終わりの時間だということヴァイトも

今の行動で認識したようである。

「というわけで本日はここまでです。ご視聴ありがとうございます、また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「ところで団長サン」

「ん？ どした？」

番組が終わってから、ヴァイトはグランに話しかける。ヴァイトは先程グランが言っていた、アザゼルのことについて聞こうとした。最も、名前は教えられていない訳だが。

「さっき言ってた人なんだけど……」

「アザゼルか、なんならちよつと会っていく？ めっちゃ面白いやつだから」

「え、あ、うん」

グランに促されるまま、ヴァイトは部屋から出て行ってグランと共にアザゼルの部屋へと向かう。あつという間の出来事だったせいで、ヴァイトは心構えとか全く出来てないままこちらに来てしまった。

「アザゼルー、入るよー」

「貴様！ また来たのか!!」

「今日何食ってんの」

「貴様に教える義理はない!!」

「美味しそうだね、その骨付きチキン」

「くく、貴様にはやらんからな」

「いや別に人の食ってるもん横取りするほど、俺性格悪くないからね。じゃあまた」

「おい待て！ お前なんの用事でここに――」

扉を開けたかと思えば、コントのようなやり取りを軽くしてからグランは扉を閉めていた。ヴァイトは、その勢いに飲まれて呆然としていた。

「どう？ あいつめっちゃ面白かったでしょ？」

「え……あ、うん……」

「因みにあいつ飯を出しても、まずいまずい言いながら食べるんだよ。けど本気で美味しい時って1回黙るようなタイプだよ」

「……よく食べる人なんだ？」

「え、どうなんだろ？ よく食うって言うか、美味しい飯が好きなの面白いやつってイメージだけど」

「おいー」

突然開かれる扉、そこにはちゃんとチキンを食べ終えたアザゼルの姿がいた。食べ終わってから、グランを探そうとして扉を開けたのだろう。

「え、どしたの」

「何の用だ」

「いや、ヴァイトに合わせようと思って」

「そのガキか、何故だ」

「いや、なんか共通点多そうな気がする」

「俺よりもっと適任の奴がいるだろ、探してきてやる」

「あ、ならお願い」

「代わりにあと二つチキンをよこせ」

「ローアインに頼んどくよ」

そのやり取りをしてから、アザゼルは部屋から出て歩き始めていく。再びそのやり取りにヴァイトは呆然としていた。

「……チキン、好きなのかい？」

「さつきも言ったけど美味しい飯ならなんでも食うぞ」

ヴァイトはふと思っていた。相変わらずグランサイファーには、面

白い人間がいっぱいいるんだな……と。しかし、関わるには相当濃いメンツだということもふと考えていたのであった。

## ヴァンパイアダブル

「ヴァンパイちゃん、本気出しちゃうんだから！」  
「……」

とある依頼を受けたグラン。その依頼に付いてきたのは、ヴァンパイアのヴァイトとヴァンパイだった。そして、依頼も終わりに差し掛かっている中、ヴァイトは魔物を倒しているヴァンパイを見て何やら考え事をしていた。

「ん？ どしたの、なんか思うところあった？」

「いや……前から思っていたことなんだが……ヴァンパイ」

「んー？ なあにー？」

魔物を倒しきつたすぐ側から、ヴァイトはヴァンパイを呼ぶ。呼ばれたヴァンパイは、なぜ呼ばれたのか分からないままは2人の方に近づいていく。

「前から思っていたんだが、本気を出すなら初めから出してもいいんじゃないか？」

「ふふん、ヴァイト知らないの？ ほんとーに強い人は本気を簡単に出さないんだよ」

「……何のことだ？」

「えつとー……そういう言葉があったの！」

グランとヴァイトは少しだけ考えていく。なんの事だか一瞬わからなかったため、二人同時して考え込んでしまったが、思いつくのもほぼ同時だった。

「あ、能あ——」

「能ある鷹は爪を隠す、って奴？」

「そう！」

グランが先に言いかけていたのだが、ヴァイトの方にセリフを取られてしまったため、いい損なった言葉を飲み込みながら黙っていた。

「ヴァンパイ、意味を勘違いして覚えてないか？」

「ほえ？ 本気を簡単には見せないよーって事じゃないの？」

「あれは本気を見せないんじゃないかと、無意味に自分が強いってア

ピールをするな、って話だ」

「へー……」

「ヴァンパイ……自分が興味無いことの反応が分かりやすいな……！」

握り拳を持ち上げるヴァイト。殴ることはしないが、今の反応のせいで余程げんこつを与えたかったように見えた。グランがヴァイトを落ち着かせて、ひとまずは危機が去った。

「でも、どっちにしる本気を出さなくてもいい相手ではあるな。魔物とはいえ、そこまで強力なやつじゃなかったし」

「団長サンはヴァンパイに甘い！ もっとキツチリさせないと！」

「とは言われてもな、本気を出さないと行って言ってもちやんと線引きはちゃんとしてるぞ？ だから毎回ちやんと怪我なく勝ってるんだから」

「うぐ……まあ、確かに……ヴァンパイは確かに力の加減がわかってるけど……」

何だかんだ言っても、ヴァンパイは『この相手ならこれくらい力を出せる』という線引きがちやんとしている。自分の実力を正しく把握している為、行える行為である。

「でも、ちやんと出来ているからいいなんて後から付けた言い訳だよ。

もしヴァンパイの身に何があつてからじゃあ遅いじゃないか！」

「……まあ、それも確かに」

「なら……」

「よし、だったら折衷案と行こうか」

「……折衷案？」

グランのはなつた一言に、妙に不安を覚えるヴァイト。一体今から何をするというのか……それだけが気になってしょうがないのであった。

「折衷案ってなーに？」

「全員で本気出して一瞬で相手を片付ける」

「それは折衷案って言わないと思うよ、団長サン」

目の前には割とデカ目の魔物。そしてグラン達は3人。ぱつと見れば中々苦戦するように思えるだろう。しかし、グラン達からしてみれば目の前の魔物はただの依頼達成に必要な頭数である。

「じゃあ、あの魔物が突っ込んできたら俺が正面担当するから2人は側面から叩いて」

「はい!!」

「分かったよ」

「んじゃあ……GO!」

そう言いながら、グランは魔物に向かって石を投げる。その石は魔物の額にクリーンヒットし、魔物は怒り狂いながらグラン達へと突っ込んでいく。

「いくぞ……! ブラッドエッジ!」

「いっくよー! ブラッディ・アブソープション!」

「夢幻ノ誘中!」

3人の攻撃が、魔物一体に炸裂する。当然の事ながら、魔物は一瞬で倒されて、そしてその体はあまりの攻撃の苛烈さに耐えきれずに遠くへと吹っ飛んでいった。

「……団長サン?」

「3人でも本気を出せば、こうなってしまうという典型的な事が起きたな」

「あれ回収するの面倒そうだけど」

「何、時間はたっぷりあるしゆっくり回収しに行けばいいさ」

そう言っつてグランは歩き始めていく。結構遠くに飛んでいったの

で、探しに行つて依頼主に討伐の証拠として見せなければいけないからだ。

「……団長サン、これはやっぱり折衷案じゃないと思う」

「うーん、案が悪かったな」

「いやだから」

「ヴァイト、なんかいい案ある?」

「え、あ……ちよ、ちよつと待って? 今考えるから」

突然話題を振られて、困惑するヴァイト。しかし、突然振られた事により、戸惑つてそれを受けてしまう。そして、真面目に考え始めてしまうのであった。

「……やっぱり凄い強い魔物に限定して、本気を出すとかでいいと思う」

「やっぱりそうなつちやうかあ」

「ふふーん」

「……まあ、初めから本気を出し続けていたら途中でもたなくなる可能性もあるし……」

「なる程なあ」

真面目に頷くグラン、ドヤ顔のヴァンパイ、ヴァンパイを見て頭の羽がちよつと萎れててまるでテンション下がった犬のようになってるヴァイト。

ツツコミのいない空間が、今ここで出来上がってしまった。

「あ、いたいた。つかこの魔物も良く原型とどめてたよな」

「僕達の攻撃で消し飛んでもおかしくなかったのにな」

「消し飛ぶくらいならまだいいよ」

「え?」

グランの言葉に首を傾げるヴァイト。消し飛んでしまえば、依頼主に見せられないというのに、なぜ消し飛んでるのが『まだいい』と言えるのだろうか。

「中途半端に原型が残つてて、ところどころグチャグチャになってるのが一番きつい」

「……ああ」



「偶にそうなってるのを依頼主に見せると、めっちゃビビられる。一応前もって確認させるんだけど、それでもめっちゃビビってる」

「……そう、なんだ」

『そりゃあ驚かれるだろう』とヴァイトは苦笑いしていた。しかし、見せないことには依頼を達成したかどうかの確認が出来ないので、グランの行動は間違っではないのだ。

「……とりあえず、こいつ回収して見せようか」

「そうだね」

「……さつきからやけに静かだけど、ヴァンパイは？」

「えっ」

いつの間にか声が聞こえなくなっていたので、慌ててヴァイトが振り向くと確かにヴァンパイの姿が見えなくなっていた。絶対にいるものだと思っていたため、完全に確認が遅れていた。

「い、いつの間!? ヴァンパイー! どこ行ったー!?」

「……ヴァイト、ヴァイト」

「何!? ヴァンパイ探さないといけないんだけど!」

「あっち見てみ、めっちゃ深い草っ原がある。この辺見晴らしいから、遠くに行ったとしてもさすがにここで見失うほどじゃない。でも、あの草っ原に入っただけなら……」

「……あっちにいる可能性がある!!」

グランの言葉を聞いて、ヴァイトは走り始める。グランは頭を掻いて、あとを追うようにそのまま走っていくのであった。

「ヴァンパイー！ どこだー!!」

「ヴァイトー、こっちー!」

「こっちって言われてもどっちだー!!」

草っ原の中で、ヴァイト達はヴァンパイを探し始めていた。叫んだらすぐに返事が来たので、ここにいるのは間違いがないようだった。「声がそんな遠くにいなさそうだし……近くにいますと思うんだけど……お?」

グラン達の真上を、コウモリが飛んでいた。恐らくヴァンパイのものだろう。これについて行けば、ヴァンパイに会えるはずである。グラン達はそう確信できたのか、そのコウモリの後を着いていく。すると、少しだけ開けた場所に出てきた。

「ヴァンパイー! お前何してたんだ!」

「この子、足に怪我してるみたいで……ここなら、食べちゃう動物から身を隠せるかなって」

そう言っで見せてきたのは、ウィンドラビットだった。確かに足を怪我しているようであり、動かしづらそうにその足を動かしていた。怪我の手当は既にできているようであり、患部には包帯が巻かれていた。

「……はあ、ヴァンパイ。その子の手当てをするのはいいけど、勝手にいなくなるのはやめてくれ」

「ごめんなさい……どうしても、放っておけなくて……」

「いいよ、僕も怒っていないから。でも、今度から気をつけてくれよ?」

「こういう草っ原にこそ、罨とかが仕掛けられてる可能性だってあるんだから」

「うん……」

「……まあまあ、見つかったしいいじゃん。ほら、ヴァンパイもそんなに落ち込んでないで、その子の怪我の治療をしないとイケないし一旦グランサイファーに戻るよ?」

話を終わらせて、ちよつとした気まずい雰囲気も無理やり変えるグラン。ヴァンパイ達も、グランの言うことを聞いて一旦グランサイ

ファーへと戻るのであった。

「とりあえず、手当は終わりました」

「いやあ、応急処置しててよかった」

「ええ、おかげでちゃんとした手当もかなり早く終わりましたし」

グランサイファーに戻ってから、グラン達はソフィアにウインドラビットの手当を頼んでいた。迅速な対応により、ウインドラビットの怪我はちゃんとした手当がなされて、周りを飛び跳ねられるようになるくらいには、元気になっていた。

「えへへ、良かったね！」

ヴァンパイが抱き抱えて、ほほ笑みかける。それに返事するかのよ  
うに、ウインドラビットは一声鳴いていた。

「……で？ あのウインドラビットはどうするの？」

「そりやあ自然に返さないと、でしょ。見た感じまだ小さいから子供  
だろうし」

「まあ、グランサイファーで飼うわけにも……」

「いや、単純に親から離れるのは寂しいでしょ？」

「……あれ、そんな理由がなかったらもしかして飼うつもりだったの  
？」

「そりやあね、そもそもここただでさえペット飼ってる人多いの」

ふと、どこかから『オイラはペットじゃねえ！』という声が聞こえ  
てきたが、完全に被害妄想である。グランは、そんなことは決して考  
えていないのだ。

「そう言われてみれば、確かに……」

「特に猫が多い」

相棒として扱っていたり単純なペット扱いをしていない人も多いが、どちらにせよグランサイファーは他の騎空団では類を見ないくらいには動物天国しているのは間違いがないだろう。

「なるほどね……一応飼える環境は整ってる、ってわけ」

「とりあえず……親に返さないかね」

「そう言えば……ウインドラビット自体が結構小さいけど……親ってどんな大きさなの？」

「いやあ、さすがに俺達がいつも見ている大きさでしょ。たまに似たような個体でかなりでかいのがいるけど、流石にウインドラビットは見た目通りの大きさのやつしかいないでしょ……」

その後、ヴァンパイにもウインドラビットを返す旨を伝える。ヴァイトは駄々をこねるかと思っていたが、ちゃんとヴァンパイはそれに納得して返すことを理解してくれた。

グランは正直でかい親が出てくるのを半分期待していたが、そんなことも無かったために、落胆半分安堵半分の感情のままその日を過ぎたのであった。

「……そう言えば、依頼主に魔物を見せるのは？」

「……あつ」

ゴブリンスレイヤー、命を掛ける覚悟はあるか？

「今日のゲストはゴブリンスレイヤー……という肩書きのルシウスさんです」

「……別に構わんが、なんだその名は」

「ちよつと前まで、ルシウスが噂になってた時のあだ名みたいなものだよ」

ルシウス、かつて母親をゴブリンに殺された恨みでゴブリンを殺す事に命を掛けているとまで言ってもいいほどの男。妹と父親がこの団に在籍しているが、父親とは未だ確執が残っている。

「ゴブリンスレイヤー……か。ちよつと前という事は、今は俺の噂も風化したと言った所か」

「ま、ココ最近ゴブリンの大規模な群れは見かけられてないしね。ルシウスもゴブリンを相手にすることが少なくなってきたし、噂も風化するって事だよ」

「ふん……まあ、目立たない方がいいがな。変なやつらに絡まれるのも少なくなるだろう」

『いや、そんな黒づくめの格好してたらどっちにしろ目立つんじゃね？』なんてことを言いたかったが、グランは抑えた。どう言った理由で絡まれようとも、ルシウスの眼光には大抵の奴がビビって下がるからである。

「まあいいや、ティナとは相変わらず上手くやれてる？」

「……ああ」

ティナ、ルシウスの妹である。ルシウスについて来ているだけあつて、実力者でありルシウスのちゃんとした理解者でもある。しかし、理解者過ぎるせいかなほとんど保護者の役割に納まってしまっていることがとても多い。

「ティナとのかかわり合いを、お前が気にする事はないんだぞ？」

「いや、同じ団の仲間なんだしさ……そりゃ気になるって」

別に変な勘違いをしてある訳では無いが、妹であるティナにも、少しでもルシウスは距離を置いている。ココ最近、特に距離を置いて

いるせいかな。テイナでも滅多に会うことがないらしい。

「……ゴブリン倒しまくったせいで燃え尽きた？」

「……かもしれないな。ゴブリンの王を倒してしまったせいで、燃え尽きたのかもしれない」

かつて、グラン達がルシウスと初めて会ったあたりのこと。大掛かりなゴブリン狩りの依頼があった。その時にグラン達はルシウスとテイナ、そしてフィーナと出会ったのだ。

そこでゴブリンの王を倒したのだが、それからの残当狩りが続くとつれて、段々とルシウスはその覇気を収めていつていた。ゴブリンを狩る時はかつての覇気が戻るが、最近ではゴブリンも見なくなってきたせいで、特に覇気が抑えられていた。

「……だが、それでもなんとか目標は作っていける気がするさ」

「目標？」

「お前は知らないだろうな、俺は氷魔法を使えるようになったんだ」

「え、マジで？」

「スフラマール先生の指導のおかげでな」

ルシウスに魔法の才能があったこと自体は、特に問題にするほどでもないが……グランはまずルシウスがスフラマールに教鞭を奮ってもらっていたことに驚いていた。どんな経緯だったのかはわからないうが、凄く気になる事案なことは確かである。

「後でその話をたっぷり聞かせてもらおうとして……とりあえず、お便りコーナー」

「……あるのか、俺に」

「無いんだつたらしないよ……」通目『剣ボロボロですけど研がないんですか？』

「……こいつは俺の勲章のようなものだ。ゴブリン狩りを主流にしていた頃のは、もつと刃がボロボロだったかな」

「お便りにもあったけど、研がないの？」

「ゴブリン共に苦しみを与えるためだ。それなりに腕力で切り裂かねばならんが……その分、痛みが奴らを襲うようになっていた」

思ってた以上に、えぐい手を使っているとグランは思っていた。ゴ

ブリン達に苦しみを与えるという目的なら、これ以上ない合理的な方法だが……しかしまあ、よくもここまで丸くなったものだとも感心していた。

「今の剣は？」

「……少しだけ、心機一転というやつだ。ゴブリンを相手にすることはもうほとんどないと言っても過言ではないだろう、他のものを相手にする際はこちらを使うことが多いはずだ」

昔は、細身の刀のような剣を使っていた。しかし今は、大剣を使っている。どちらもボロボロなのだが、ルシウスの趣味なのかと思うくらいにはボロボロが共通している。恐らく、安く手に入れるためにわざとそういったものを買っているのだろうと思われるが、真相は不明である。

「へえ……使い心地は？」

「悪くは無い、俺の手に馴染んでいる」

「それが一番だよね、武器って言うのは」

「ああ」

軽く微笑むルシウス。武器のことでグランが共感してくれたのが、嬉しかったのだろう。

「2通目『髪切らないんですか？』」

「あまり切ろうとは思わないな」

「でも確かにだいぶ長いよね」

グランはルシウスの紙を眺めて、そう思っていた。ルシウスの髪は、彼の腰よりも少し上の辺りまであるのだが、元来の男性の平均的な髪の長さよりも遥かに長いものとなっていた。

「戦いの時とか邪魔だとは思わなかったの？」

「万がどこかに引っかけたり、ゴブリン共に掴まれた時は大概その場で切り捨てていたからな……余り気にしたことは無い」

「え、掴まれた事あるの？」

「あるな、だがすぐに切り捨ててやれば奴らは尻もちをつかされることになるがな」

もしかして、尻もちをつかせたいがために髪を伸ばしてわざと切っ

ていないのでは？ とグランは勘繰ってしまっていた。ルシウスならやりかねないが、わざわざそんな嫌がらせのためだけに、死にかけるとような危ない目に合うのは流石に合理的ではない手段をルシウスが選ぶことは無いだろうと、すぐに頭の中で否定していた。

「まあ、髪の毛の長さは個人的な……そう言えばティナの髪は？ 結構短い方だよな」

「あれは俺が切り揃えている」

「何で？」

「勿論、綺麗なハサミに決まっているだろう」

確かにそうである。自分の髪を自分で切るのは中々難しい。つまり、ルシウスが切っていたことになるのだが……

「……立派な理髪師になれそうだね」

「理髪師か……向いていると言うなら、目指してもいいだろうな」

あまり言いたいことではないが、ルシウスが理髪師になった場合その腕前と顔のギャップで人気が出るパターンか、それでも顔の怖さが勝って客が寄り付かないパターンかの2択のような気がグランはしていた。どちらにしても、理髪師をするルシウスはあまりイメージが出来ないのだが。

「理髪師って多分それなりに会話スキルいると思うよ」

「なんだと？ どういう事だ」

「髪切ってる間、結構な確率で理髪師ってお客さんと

会話してると思うし……」

「そんな馬鹿な……」

あまり表情は変わらないが、ルシウスは落ち込んだ表情を見せていた。それだけ、理髪師もやってみようという気が強かったのだろう。自分の慣れないことに挑戦するのは、何も間違っていないのだから。

「とりあえず3通目『家族仲はいいですか？』」

「ティナとは仲がいいままだと思っではいるが……」

この家族は、少し複雑なのである。それもそのはず、確かに妹であるティナとは仲がいいが、父親であるアレーティアとはあまり仲が良



くないからだ。いや、団内で初めて会った時は仲が良くないどころか最早確執と言つていいものが確実に存在したのだ。

「……アレーティア？」

「……あいつとは、別段仲良くする気は無い」

「……まあ……やるにしてもゆつくりと、だしね」

仲良くする気はないにしても、ティナは既にアレーティアを認めている。ティナが認めているからこそ、ルシウスもある程度は認めていかなければならない。

それをルシウス自身も理解はしているのだ。しかし、どうしても過去の確執がルシウスの心の邪魔をしていた。

「……だが、まあ……最近は剣をぶつけ合う相手くらいにはなっている」

「……そっか」

ルシウスのその言葉を聞いて満足するグラン。久しぶりに会った頃は、それこそアレーティアを殺さんとする勢いで食つてかかっていたが、今はその時よりも落ち着いてはきていた。

「……グラン、もういいだろう」

「ん、ならそろそろ終わろうか」

今の一言が恥ずかしかつたのか、ルシウスは被っている帽子を深く被り直してグランに声をかけていた。表情は見えないが、恐らく顔を赤くしてれていることだろう。つつい笑いみを浮かべてしまうグランであったが、ルシウスの言う通り終わることにした。そもそもそろそろ時間も迫っているのだから。

「では、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました、また次回お会いしましょう、さようなら」

「……」

ルシウスは甲板で一人寝転がっていた。空を眺めながら、ただその蒼さに心を奪われていた。

「空はいつまでたっても変わらない……しかし、変わらないはずのそれは見方が変わっていく……」

「空がより蒼く見えているのか、それとも自分でもよくわからない印象を受けてるのか……どっちかな？」

そして、そんなルシウスに話しかけるグラン。横に寝転がり、ルシウスとともに空を仰ぐ。

「……グラン、俺は変わるぞ」

「一体どんな風に？」

「二度と俺達みたいな子供を生み出さないように、だ」

「立派だね……じゃあ、これからどうしたい？」

「……」

少し黙った後に、ルシウスは起き上がる。グランは起き上がらずにそのままルシウスに視線を移す。

「グラン……いや、団長……俺に力を貸してくれ。ゴブリン共以外の、魔物達によって故郷を滅ぼされる子供達が、これ以上生まれないように」

「まったく……そんな頼み事しなくてもいいよ？ ルシウスは……よいしょっと、仲間じゃないか」

喋っている最中に起き上がり、ルシウスに目線を合わせるグラン。その言葉で嬉しかったのか、珍しくルシウスが微笑んでいた。そして、どちらからとも言わずにその手を取り合って握手をしていた。

「……ありがとう、グラン」

「どういたしまして」

2人は微笑み会う。その握手はどんなものよりも固く、絶対に着れない絆のようなものを感じさせるのであった。

「何この状況……!?!」

そして、そんな状況に偶然通りがかつたルナールが驚いていた。普通に見てみればただの親愛の証の握手なのだが、当然の如くルナールから見てみれば例の耽美本のような状況に見えるってしまうのだ。

「……彼のことはネタには出来ないけど……シチュエーションとしてはありね……普段笑みを浮かべない孤高の剣士が、心を開く男性……うん、ありね」

そう言いながら、ルナールは一旦自室へと戻るのであった。そして、そんなことが一切起こっているとは知らずに2人は未だ握手を続けあっているのであった――

「……なんか嫌な予感がする」

「なんだ、どうした?」

「ちよつとお話する団員がいる気がする」

――訂正しよう、ルナールの存在はバレていないが、ふと何故か唐突にルナールのことを思い出したグランは、一旦ルナールの部屋に向かって『お話』しよう決めて、そのままルシウスの元を離れてルナールの部屋へと向かうのであった。

ゴブリンキラー、闇を祓う炎に見せられてみますか？

「今回のゲストはティナさんです」

「はい」

元氣よく手を上げるティナ、実を言うとグランより歳上である。グランでさえもあまり意識できていないことだが。

「ティナはルシウスの妹、アレーティアの娘……でちゃんとお酒を飲める歳です」

「私自身あまり飲まないようにしてるけどね」

「それまたどうして？」

「みんな飲んでる時に、私まで飲んじやったら誰も介抱できないでしょう？」

面倒見のいい妹である。それ故に、団内でも結構評判も人気もある女性である。お姉さんや母親に近い面倒みの良さに、子供たちも懐いているほどである。

「まあ俺は飲まないからいいけど」

「皆も、節度は守って一応飲んでるけどね」

「おっさん共はたまに酔い潰れてるけど」

時折行われるグランサイファー飲み会のことを思い出しながらも、グランはその時の惨状を切実に声に出す。一応、未だに酒の飲めない歳であるためその時の後始末をよくやっていたりしている。

「あ、あはは……」

「そう言えばルシウスがお酒飲んでるところ見た事ないかも」

「兄さんは多分飲まないんじゃないかなあ……飲めるとは思うけど」

飲めなくても一切の問題は無いが、飲めるのなら飲んでる所は少しは見て見たいとグランは期待し始める。しかし、こういった期待をしながら酒を飲まそうとすると、恐らくルシウスは察知してなんやかんやで回避しようとするだろう。

「……まあ、機会があれば飲ませてみてもいいかもね」

「ですなえ」

ルシウスにお酒を飲ませる話が決定したところで、グランはいつも

通り箱からお便りを取り出す。そして、そのまま適当に一通取り出して読み上げていく。

「1通目『パンツ見えてますよ』」

「……………え!?!」

顔を真っ赤にしてスカートを抑えるティナ。グランも、頷くだけであり前から同じことを思っていたようだった。

「ず、ズボンズレてたの……………」

「え、あれスパッツじゃなかったの!?!」

「こ、こういう柄のものだよ!!」

顔を真っ赤にしながら、両手を振って否定するティナ。どうやら、グランが今までスパッツだと思っていたものは、まるでパンツのような柄が施されたズボンだったようだ。

ここまでウブな反応をしていたら、確かに説得力はあるのだが……………その説得力のせいでグランは納得せざるを得なくなっていた。

「……………も、もしかしてパンツが見えてるって……………」

「すごい思ってた……………スパッツの上からパンツ見えてるよなあって……………え、ほんとにズボンなのそれ? だってブーツの内側に入れてるし……………」

「そ、そういう柄の……………スパッツじゃなくて、ズボンと間っばいのだから……………」

恥ずかしすぎて頭が回っていないのか、ティナはしどろもどろになりながら否定する。グランの中では、ティナの履いているものがスパッツでは無かったことにとっても驚いていた。

「まさかスパッツからパンツが見えていたわけじゃなかったとは……………」

「ま、まさか皆からそんな風に思われてたなんて……………」

「正直『パンツ見えてるよ』なんて言いづらいし……………同性でも異性でも……………多分、何度か同性からなら言われてたと思うよ……………?」

「……………多分本気にしてなかった……………」

「もー、ティナったらお茶目さん!」

茹でダコのように顔を赤く染めながら、ティナはテーブルに顔を突っ伏していた。横から見た時に見える潰れた胸を、グランはじつと眺めていたがずつと眺めていると秩序されるので、話題を振りまく。「まあまあ、誤解が解けたと思えばいいじゃない」「……確かに、そうだけど……」「ずつとパンツ見えてるって思われるより、パンツっぽい柄のものだって認識された方が楽でしょ?」「うん……うん……?」

グランの言うことに対して、少しだけ疑問を感じるティナ。しかしグランは間髪入れずに、話題を振って逸らしていく。

「とりあえずティナの誤解が解けた所で2通目行っちゃいましょう」「お、おー?」

『「ティナさんはお父さんから剣術は習わなかったんですか?」「習わなかった、というか……習えなかった……が正解かも」「と言うと?」

「私達が村を出たのが、私が3歳の頃だったらしいから……」「……なるほど、確かに無理だ」

3歳では、習ったところでまともに理解出来ているかも怪しい年頃である。確かに、習えなかったというティナの言葉は正しいということになるだろう。

「だから炎を?」

「うん、そんな所……後兄さんの片手が塞がらないようにな……ゴブリンって、洞窟にいることが多いから……」

要するに、自分から灯り役になったといった所だろう。そのまま攻撃も行えて、尚且つ明かりにもなれる。面倒みのいいティナらしい判断をしている、と言える。

「でも、ルシウスもランタン持ってた時あったよね」

「兄さん、結局私が攻撃に集中出来るようにもしてくれてたんだよね……」

兄妹でお互いのことを思いあっていると考えれば、微笑ましいとも言える。しかし、2人からしてみれば1番身近の肉親同士なのだか

ら、大切になっていくのも領けるというものである。

「まああかりは多いに越したことは無いと思うし……」

「そう、だよね……うん確かにそう」

ちよつと困った顔をしながらも、ティナはなんとか理解してくれていた。話が一旦落ち着いたところで、また別のお便りを読み始める。

『父親との仲はいいですか?』

「お父さん……うん、私はまだいいと思うよ。でも、まだ遠慮されている気もするけど……」

「何だかんだ、アレーティアも思うところはあつたらしいしね……」

アレーティアは、自分が行ったことをただひたすらに後悔していた。それが負い目となっているのか、ティナが積極的に話しかけても会話はちゃんと言っているが踏み込んだ話は一切しないようにしていた。

「……基本、私から話しかけてる状態なんだけど……1回だけ例外があつたんだよね」

「例外? なんか特別な日だったとか?」

「うん、バレンタイン」

父親の心情が、グランはふと理解できてしまった。そりやあ何年も離れていたとはいえ、娘が楽しそうな笑顔でチョコを作ってたら気になつてしまうだろう。

『誰にチョコを渡すんだ』って聞かれて、『団の皆だよ』って答えたら安心してた」

「へえ……」

まあ本命チョコがあるとはどっちにしろ言えないが、ティナらしいのでちゃんと説得力がある。そのためグランはその言葉に納得したアレーティアに、納得していた。

「……でも、本命はちゃんといえるんだけどね……」

「え、ごめん今なんか言った?」

「ううん、何も言っていないよ」

笑顔で首を振るティナ。マイクにも拾えなかつたその声を聞き取れなかったものはいないが、歴戦の戦士はティナの口の動きだけは見

逃してなかった。

「……そう言えば、バレンタインの時のルシウスってどんな感じだったの?」

「いつも通りだったよ? 『何してる?』って聞かれたから『チョコを作ってる』って返したら『そうか』で会話が終わったくらいだし……」

その時の兄の心情がどんなものだったかは知らないが、恐らく結構な確率で気になっていただろう。そこまで思ったグランだったが、ふと少しだけ気になったことが出来てしまう。

「……バレンタインの時ってさ、ルシウスとアレーティアどんな反応してたの?」

「どういう事?」

「無いかもしれないけどさ、『お前にティナのチョコを受け取る資格はない』とか言いながらアレーティア睨んでそうなんだけど、ルシウス」

「あはは、流星にそれはないよ」

「だよなあ」

「兄さんからはチョコをお父さんに渡したかどうか聞かれたけど」

ルシウスのアレーティアへの拗らせ方は、いつかちやんと元に戻ればいいな……とグランは遠い目をするのであった。

「……まあティナは全員分ちやんと作ってたし、あんまり心配することとは無いか」

「うん! これからバレンタインが来る度にみんなの分を作るよ!」

ティナのチョコ代金だけで、一体どのくらいのお金が溶かされるのかグランは考えないようになっている。一応、自分で支払う形にはなっているのですが、ティナがどれだけ貯金を溜め込んでいるかがよく分かる。

味も悪くないので、チョコの値段もそれなりのものを使っているだろう。

「……つと、もうこんな時間だ」

「またお話お願いしてもいい?」

「まあいいよ。別に減るもんじゃないし……話すのは楽しいしね」  
「やった!」



「……というわけで」視聴ありがとうございます、また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

いつもの言葉を言いながら、グランはカメラの電源を落とすのであった。ティナはカメラの電源が切れるまですつと顔の横で軽く両手を振っていた。

「あ、そうだ……」

「どしたの？」

終わってから部屋を出て、2人で通路を散歩している間のことである。ティナはふと思いだしたかのように、グランに話していた。

「アウギユステで遊ぶでしょ？　そのために必要な水着を一緒に買いに行きたいな……なんて」

「水着？　いいよ」

「ほ、ほんとに!？」

「うん」

グランとしてはティナの水着が見れるという思惑があり、ティナは2人で出かけたという思いがある。偶然にも2人の意見は一致しているとも言える。

「じゃ、じゃあ今から一緒に行こう!？」

「よし来た、なら今すぐに——」

「団長さん、お話ししましょうか」

ふと後ろからグランの肩を掴むリーシャ。グランは目線を下に落としながら絶望しかけるが、今回は簡単には諦めなかった。

「こ、今回はちゃんと許可とってるぞ!？」

「いえ、そうじゃなく」

「ん？」

「……ティナ、水着を選ぶなら俺の方がいい」

さらに突如現れるルシウス。彼は別段水着選びのスペシャリストという訳では無いが、しかし急に現れてそう言い放つのだ。

「え、兄さん水着選びって」

「こいつには後でサプライズで見せてやった方が喜ぶだろう」

「……確かに」

「あれ？俺は今でも全く問題……あ、ちよつと待ってリーシャさん腕持つて引つ張らないで」

「よし、なら行くぞ」

「う、うん!!」

グランはリーシャに引つ張られてグランサイファアの奥へと、ティナはルシウスに説得されて一緒に外へと出かけるのであった。

「くっ……見てみたかった」

「アウギユステで遊ぶ人達の名簿、お願いしますね」

後日、なんとかティナの水着を拝見したグランだったが、他の者達の水着と同じような反応を返してしまっていた。『素晴らしいものです』と。

それを事細やかに、ティナの水着の素晴らしさを語っているうちに、再びリーシャに連れていかれて今回のバカンスはグランはほとんどお預けになったという。

ティナよりも前に5〜6回くらい同じ事をやってたので、バカンスは確実に没収になった……というオチなのであった。

剣の賢者、学ぼうかの？

「今日のゲストはアレーティアさんです」

「ほっほっ、よろしく頼むぞい」

剣聖アレーティア、その剣の腕前は名の通りの剣聖である。つまりは、空の世界において最強クラスと言っても過言ではない。そんな彼はルシウスとティナの父親であり、過去にはぐれて以降グランサイファーで再び出会うまで一度も会っていないのだ。

「あれは二刀流だったよね、結構面白い形の剣……まあ形が面白いのは柄の方だけだ」

「持ちやすくして便利での、何なら使ってみないかの？」

笑みを浮かべながら、アレーティアは冗談を口にする。随分とご機嫌なアレーティアに、少しだけグランは疑問を抱いていた。別にご機嫌なのは構わないのだが、何かあったのだろうか。

「…アレーティア、始める前になんかあった？」

「いや、先程ティナからクツキーを貰ったの。それがまた美味くて…」

「この親バカめ」

「褒め言葉じゃの」

グランも別に悪口のもりで言った訳では無いのだが、ご機嫌すぎるアレーティアに苦笑を浮かべるしかなかった。ちなみに今は、剣をちゃんと持ち歩いている。

「そう言えば、アレーティアはヨダルラーハと知り合いなの？」

「面識はあるぞい、この船で出会うよりも前にの」

「そうなんだ…十天衆のオクトーは？」

「あやつとも、まあ面識がないという訳では無いの……人が変わり過ぎていて、少々気づかなかったが」

グランサイファーには剣の使い手がかなりいる。それも、異名を持つ剣の使い手ばかりである。随分と多いのはグランも理解しているので、誰が上なのかそうでないのかの区別は余りつけないようになっている。

付けたら、そこからグランサイファー剣術大会が開かれかねない。

「……ヨダルラーハもそう言えば二刀流だったね」

「優れた剣の使い手は、二刀流に落ち着くのかもしれんのう：ほっほっほ」

「ほんとご機嫌だな今日」

どれだけテイナのクッキーが嬉しかったのかは知らないが、今日はもうずっと笑みを浮かべながら番組を進行するのかもしれない。別に問題は無いし、変な絡みをするような人物でもないので本当に構わないのだが。

「…さて、そんなアレーティアさんに対してもお便りは届いております」

「ほう」

「という訳で、早速一通目：『テイナからクッキーを定期的にもらっているというのは本当か』ルシウス、そういう話は直接会って話なさーい」

「いやはや…ワシもじゃが…面と向かって話しづらくてのう…」

先程の勢いはどこへやら、ルシウスの話題が出た途端にアレーティアの顔が神妙な顔となっていた。テンションが下がったというよりは、気まずそうな顔である。

「テイナの話だったらしやすいだろうとは思うけど」

「いや…むしろ逆でな……」

「……というと？」

「……ルシウスは、お前さん以外の男が近づくと凄く警戒するんじや」

「……アレーティアも含まれてんの？」

「ワシに一番警戒しとつての……」

本人とアレーティアの確執は確かにあるが、グランは今回に関しては全く別の問題のような気がしていた。ルシウスはココ最近というか、妹関連の話題になると過敏になることが多い気がするのだ。

「……まあ、うん…警戒しちゃうもんは仕方ないとしか…」

「テイナはワシに甘えてくるんじやがのう…」

「まあテイナはあんまりそこは気にしてないみたいだし……」

気にしていないという訳では無いのだが、テイナはルシウスと共に

故郷を抜けた時は3歳だったのだ。鮮明な記憶が残っていないのか、はたまた真実を知って『仕方の無いこと』だと割り切っているのかは知らないが、アレーティアとの間には明確な確執は存在していなかった。

「ルシウスが気にしすぎ……とは思わないけどね、本人の気持ちなんて本人にしか分からないんだから……どうしようもない」

「その通りじゃが……」

「ま、たまにでいいから家族で話すのが1番かもね」

「……そうじゃな、家族で話すのが1番じゃな」

そう言っただけで微笑むアレーティア。家族で時折話してはいるようだが、やはりルシウスとはあまり会話が進んでいないようである。ルシウスの方も意固地になっているのか、はたまたあちらも気まずいのかは分からないが。

「……さて、2通目に行こう『バレンタインのチョコどうだった?』

……え、貰ったの?」

「ティナからは貰ったぞい」

「あんなるほど、ティナかこれ……というか家族会話のネタをここで使うんじゃないやしません」

「まあまあ……」

ティナは基本的にチョコは渡している。特に、グランとルシウスとアレーティアには心を込めて渡している。しかし、アレーティアに渡すのをルシウスがそれを見逃すとはとても思えないグランは、少し疑問になっていた。

「よくルシウスが渡すのを許したというか……」

「近くにいたんじゃないやがの……ティナから説得されて渋々という感じじゃったな……」

「……」

ティナは一応ルシウスの妹なのだが、そのルシウスに対しても皆と同じように、母のような態度を取ることがある。はつきり言えば、世話を焼いているのだ。

「……思ったことあるんだけどさ」

「む？」

「ティナから説教されたことある？」

「前に：その、1度だけのう……」

「あら意外、自分で聞いておいてなんだけど説教されるようなことしたんだ？」

「いや、説教というか：ルシウスの言葉に特に反論しないでいたら……『もつと思ってることを言え』と、のう……」

「ああ、なるほど」

説教というか、それは恐らく喧嘩両成敗に近いものだろう。ルシウスの言葉を聞いているだけではなく、きちんと話し合うということをしろ、というある意味で助言である。

「まあ、会話って話を聞いているだけじゃないしね」

「自分でもわかっておるんじゃないが：どうしても、会話が弾まなくてのう……」

「JJにでも話弾ませるコツ聞いてきたら？」

人選をこの上なく間違えているのだが、アレーティアは何故か納得した表情を見せていた。JJと知り合えているというのが、グラン的にはびっくりなのだが。

「あの者の会話の仕方は独特での：いつか教えを請おうと思っておつたんじゃ」

「え、嘘でしょ？確かにヒップホップは面白いとは思うけど、アレーティアがああ喋り方するの？」

とてもじゃないが、グランは想像出来なかった。というか、まずあの話し方が出来るほど、精神的に元気があるのかという話でもある。

「剣の道以外でも、習うのは悪くないからの」

「攻めて料理でも習ってなさい、ティナ辺りから」

「料理のう……」

アレーティアには伝えてないが、ルシウスも刃物を扱うのが得意ということ、それなりにティナの手伝いをしていることがある。最近では、厨房の包丁係なども率先してこなしている。切り口が綺麗だと、かなり評判にもなっている。

「……いいかもしれんのう、料理か……」

「家族水入らずで料理をするっていうのも案外いいかもしれないしね」

「そうじゃの……今度、誘ってみるとするか……」

「という訳で、3通目『団内の剣士でいちばん強いのもって誰ですか?』……ってこれ最初に話した話題じゃん」

「あまり優劣は付けたくないのう」

笑みを浮かべながらいうアレーティアだが、実際それに関してはグランも同意だった。そもそも、剣士同士の戦いで順列を決めるとなるとそれぞれが本気で斬り合いを始めるだろう。そうなると、必然的に周りの土地が吹き飛びかねない。

「……いやいや、全員で斬り合い始めたらシヤレになんないって……」

「剣士と言っても1口に色々いるからのう」

「手数で戦う系統なら兎も角、ジークフリートみたいな一撃が重たいのも含めたら、グランサイファーが壊れちゃうよ……いや、他の島に降りたとしても島の地形が変わりかねない」

「ワシらをなんだと思つとるのかのう」

「少なくとも鍛錬と称してジークフリートと互角の斬り合い始める人達を見て、俺は普通の人間のレベルを超えてないなんて言えないけど」

「力には捌き方があるんじゃないよ」

「おかしい……それは絶対におかしい……」

ジークフリートの戦い方は、切れ味のいい大剣をパワーで振り回してしかも高速で動くところにある。剣を後ろに持っていったと思つた次の瞬間には切りふせられている、なんて事もざらにあるほどには素早く動くのだ。

「地面に振り下ろしたらクレーターが出来るパワーを、どうやって捌くんだよ」

「ほっほ、また今度やり方を教えてやるぞい」

「えー……できるかな俺にも……」

「きちんとマスターさえすれば、少なくとも立ち向かえるほどには強

くなっておるじやろうなあ」

ジークフリートに立ち向かえる強さの時点で相当だが、はつきり言ってしまうえばグランは既にそれなりに実力はあるのだ。それ以上強くなれば本当の意味でジークフリートと闘えるだろう。

「本当にそうならいいけどねえ……」

「ほっほっほ」

「……という訳で、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「ていうかマスターってどうすんの」

「ワシの技を、見て覚えて……じゃな」

「やはり実力行使か……」

剣を抜くアレーティア。そしてそれを見て同じように剣を抜くグラン。グランも二刀流で合わせるために、即座にジョブチェンジを行う。今回はクリュサオルだ。

「ほっほっほ、やはり二刀流に納まっておるの」

「……確かに、意識してなかったけど俺も二刀流になったのか……」

手数を増やすなら、二刀流は確かに手っ取り早い。グランも何だかんだそれに倣っていたのだ。しかし、そうなるとジークフリートは手数を増やす気は無いようである。

「……いや、思ったけどジークフリートは手数増やさなくてもいいんだよな」

「あの小僧は、手数を自前の速度で補っておるからな」



「大剣1本を二刀流の手数にするのって多分物理法則に反してると思う」

「剣士ならば物理法則くらい反則してみせい」

「無茶苦茶なことを言いよる」

しかしそれくらい成せれば、確かに少なくともジークフリートと並べるくらいにはなるだろう。ただ、グランはふと思ったのだ。ジークフリートを小僧扱いできるヨダルラーハやアレーティアは、彼よりもやはり強いのだと。

「けど確かに、それくらいやらないと剣士を完全にマスターしたとは言えないな!」

「その意気じゃ!」

「よーし、やってやんよ!!」

「来い!!」

「うおおおおおおおおお!」

そこから長い間<sup>5分くらい</sup>剣での訓練が始まった。全力で全力を重ねて、スタミナのことを一切考えず、ただひたすらに相手を切り伏せることだけを考えて、グランは一心不乱に剣を振り続けた。

しかし、アレーティアはそれらをいとも容易く回避しては反撃し、連撃を加え続けた。髭がたまり溜まっているのにも関わらず、老化による衰えを感じさせないいい攻撃を繰り返して続いていた。

グランは負けてしまったが、アレーティアのようになりたいなあと思いつつながら、差し入れに来たティナのスカートが2人の剣戟の風圧によってめくれたために、一瞬でリーシャの手によって落とされたのであった。

## 親バカ兄バカ

「……夏だね!」

「そうだな」

「というわけで、私の水着はどう?」

「すっごい似合ってる」

「えへへ、ありがとう」

「うん」

夏、アウギユステのとある島で。ティナとグランは2人で浜辺を歩いていた。色々な店が立ち並んでいるところも多く、歩いているだけで食欲をそそる匂いがそこらかしこに立ちこめていた。

カツウオヌス、カツウオヌスを焼いた煉獄カツウオヌス、煉獄カツウオヌスがあまりの熱により身が削がれた煉獄骨カツウオヌス。色々な食材が出回っているところで、ティナ達は苦笑いをしていた。

「……カツウオヌスばかりだね、ここ」

「最近どっかの島で、カツウオヌスが大量に乱獲されたらしくてな……その影響だろ」

「……海ってアウギユステ以外にもあるの?」

「いや、溶岩とか島の熱気によって陸地に上がって空に浮遊して燃えている煉獄カツウオヌスだ」

「カツウオヌスって星晶獣だっけ?」

「魚」

「だよね……」

しかしいい匂いがするのは事実であり、とりあえず2人は店に入っていく。別にカツウオヌス限定の店ではないはずなのだが、メニュー一覧にはカツウオヌスの名前ばかりが乗っていた。

「見事にカツウオヌスばかりだね……」

「Hey店主! 煉獄カツウオヌスのたたきと煉獄カツウオヌスの刺身と煉獄カツウオヌスの焼きそばと煉獄骨カツウオヌスのスープをおくれ!」

「ハイ! かしこまりい!!」

注文するグラン、その様子を見てティナは困惑していた。あまりにもカツウオヌス……しかも煉獄カツウオヌスを連呼している事によって、脳がゲシュタルト崩壊をおこしかけているのだ。

「……頭がどうにかなりそうだよ……でも、こんなカツウオヌスがいつぱい乱獲されてたら絶滅しちゃうんじゃないの?」

「いやあ、例によって古戦場の島だし……滅らないでしょ」

「ああ……」

妙に納得してしまう自分に、ティナは少しだけ呆れてしまった。この特殊な状況を起こすアウギユステの夏というのは、最早怪奇現象の起こる島になりかねない。

「ていうか……煉獄カツウオヌスってなんだろうね……」

「燃えてるカツウオヌス、脂が燃料となって燃えてるけど……実はあいつらが生きようと思う気持ちが出かければデカいほど、炎が勢いを増す」

「え……じゃあ骨になってる個体は……?」

「生きようとするがあまり、皮肉にも骨になってしまったカツウオヌスだ。あいつらが安心した瞬間、煉獄の炎は消えてあいつらはただの骨へと帰る」

「そんな……じゃあ燃えた時点で……」

「あいつらは死ぬことが確定しているってわけだ……まあもちろん全部ただの妄想なだけだな」

「もー……」

傍から見れば、恋人なのかと思ってしまうほどのこのイチヤつきっぷり。しかし、それを外から眺めている二人の男がいた。ルシウスとアレーティアである。

「……グラン……ティナとあそこまで仲良くするとはな……」

「親としては複雑な気持ちじゃぞい……」

「あの、お客様方……暑くないのですか……?」

ルシウスはいつも通り黒い服装に帽子を付けた格好、アレーティアもいつも通り魔法使いのような格好だった。しかし、少なくとも砂浜でそんな格好をするのは見るだけでも暑苦しさが存在してしまうレ

ベルである。

「……ティナとグランが2人きりで出かけるなんてな……」

「ルシウス、年頃の男女なんじゃしそういうこともあると思うんじやがのう」

「お前は黙っている……それにしてもこの辺は暑いな……」

「その服を脱いで水着になればいいのでは……？」

幸いにも、グランとティナは2人の存在に気づいていなかった。明らかに目立つレベルで、明らかに観光客たちの視線がそっちに行つても関わらず、グラン達は気づく素振りすら存在していなかった。

「日差しがきつい……熱中症になりそうじや……」

「ふん、ならば戻るがいい……この暑さに耐えられないようでは、剣聖の名が泣くだろうがな」

「舐められたものじやの……ワシはまだまだ頑張れるぞい」

「いや、本当に危ないんで帽子以外脱いで水着になった方がいいですよ……？」

先程から店員が忠告してくれているのだが、2人の耳には1切入つていなかった。それでもちやんと仕事しながら忠告してくれている店員は、かなりいい人だと言えるだろう。

「……しかし、ティナがグランを選んだというのなら……俺はそれを認めないといけない……いや、グランならば問題は無いが……」

「しかしルシウス、グランはグランサイファーのほとんどの女性から好意を持たれておる……その中には、あまり言いたくないが実力行使をしかねない人物もおるぞ？」

「だが、暴力的な女はグランも望まないはずだ……そうなると必然的にティナになる。料理洗濯家事に世話……ティナはありとあらゆる平和的な事が出来る」

「兄バカじやのう……」

「ふん、こんな所までのこのこ着いてきているお前はさしずめ親バカだろうな」

「汗凄すぎて服張り付いてますけど……」

店員はそろそろ無視されすぎて泣きかけている。それでもルシウ

ス達は自分達のことだと未だに気づいていなかった。一体どうすればここまで鈍感になれるのかは不明だが、少なくとも自分たちの格好はビーチでは問題ないと思っっているようだった。敢えて言うなら、ティナのことを考えるあまりそれ以外の常識的なことをそれなりに忘れてしまった……という方が正しいのかもしれないが。

「……しかし、あまり汗をかくのもたしかに問題だな……おい、俺は少し着替えてくる……いや、変装してくる」

「変装じゃと？」

「ああ、俺が普段しないような格好をしておけばティナ達に気づかれる心配も少なくなるだろう」

「俺の後でした方がいい……2人を見失う訳にはいかないからな」

「うむ」

店員もようやく話を聞いてくれたのだと思い、一旦その場を離れていた。その後にルシウスが一旦離れて、アレーティアが2人を見ることになったのであった。

「いやあ、カツウオヌス美味しいなあ」

「カツウオヌス美味しいねえ」

「……後でカツウオヌスが食べたいの、ルシウス」

「俺も同じことを思っていただけに、腹が立つな」

少し経ってから、ルシウス達は着替えていた。ルシウスはピンクのノースリーブのアロハシャツに、星型のサングラス、髪は後ろで縛ってポニーテールに。

アレーティアは白いワイシャツ1枚に半ズボン、そしてサングラスと子供が被るようなデザインの帽子を被っていた。とりあえずとてつもなくダサイということを2人は認識するべきなのだが、一切認識していなかった。

「しかし、お前のその格好……バレやすいんじゃないか？」

「そうかのう……普段のワシなら絶対しない格好じゃからバレるとは思わないんじゃないのう」

「ふん……普段しない格好というくらいなら俺くらいになれ」

ティナのことしか頭にないためか、2人ともいつもの冷静さはどこへやら完全にポンコツと化していた。着替えたとは言っても、別の意味で目立つような格好をしているために、また視線を集めていたが。

「あの、お客様……入られるんですしたら入って欲しいのですが……」

「……そうだったな、では少し腹にものを入れていくか……」

観察がてら、2人は何か胃袋に物を入れたほうが良いと判断して、店の中に入り軽くスープとチャーハンを頼んでグランとティナを観察することにしたのであった。

そして、その様子を遠くからグラン達も確認していた。

「すげえ格好だなあの2人」

「そうだね、でも結構可愛い趣味してると思うよ？」

「え、あ、はい……」

ティナは全く気づいていないが、グランは気づいていた。遠くから観察しているあの二人が、ルシウスとアレーティアだということに。ティナが気づいていないのは、2人が来るのを予め拒んだためか、はたまたあの二人があそこまでラフな格好をするわけがないと考えているのかは分からない。

とりあえず、気づいていないということだけは……事実であった。

「あれが可愛いとか言うのか君は」

「可愛いと思うよ？ ピクのアロハシャツ」

「あれを着て可愛いのは女の子だけだから、あとへそ出ししてる」

「そうかなあ、私は男の人が来てても可愛いと思うよ？」

「まあ人によってはギャップ萌えとかあるから分からなくもない、け

ど……いやまあいいや、カツウオヌス食べよう」

「はい」

ひとまずルシウス達のことには置いておいて、グラン達は出された料理を食べることになった。グランも気にはなっているが、カツウオヌスが美味しいのでもう思考するのがめんどくさくなり、『カツウオヌスおいしい』しか考えないようにし始めた。

「……にしても本当にカツウオヌスばかりだなこの店……」

「でも美味しいし……」

「そうだな……」

美味しいとかわいいは正義である。別段、グランも不満がある訳では無いが、ティナの下から上を見上げるような視線で見られると、とても可愛いと思えたのでもう全てがカツウオヌスでも問題は無いだろうと思っただのだ。

「……食べ終わったら次どこに行こっか」

「大きな浮き輪を貸出してるお店があったから、その浮き輪を貸してもらって2人で海を漂流とか？」

「いいね、ならそうしようか」

ティナはグランと一緒に居たいと考えており、グランはいぎとなればティナにくつつく事が出来る大義名分を得られるかもしれないとかがえているので、今2人の利害は……1人おかしな方向ではあるが、一致していた。

「さて……ご馳走様つと」

「美味しかったねえ」

「だなあ、また来年来てみるか……」

「来年もカツウオヌスいっぱいかな？」

「多分いっぱいじゃねえかな……」

そんな他愛もない話をしながら、グラン達はお会計をして店から出ていった。それを眺めていたルシウスとアレーティアも、自分たちの頼んだものを急いで掻きこんでから、追いかけていく。

「ティナ……お前の海での安全は俺たちが守るからな……」

「そこを守るのはグランじゃないかのう……」

「お前は黙ってる」

いつものようなやり取りを行いなながらも、ルシウスとアレーティアもまた店から出ていくのであった。

結論としてだが……今回、ルシウス達は結構簡単にテイナにもバレてしまった。理由としては、殺気を出して近づきすぎた為である。本人達も意識しない間に殺気を出して近づいてしまった為、テイナに敵扱いされかけてバラした……という結末であった。

テイナもテイナで今回グランと二人きりであんな事やこんな事を画策していた為、それらがすべて水の泡になったことにキレてしまい、珍しくルシウスともあまり口を聞かなくなってしまうていた。

「ふんだ！」

「テイナ……」

「ワシも怒られてしまったぞい……」

「いやあ、今回は2人の自業自得だよ……俺が宥めてくるから謝りな……まあテイナも2人がテイナのために動いてたことは伝わってると思うし……」

……だが、それでも唯一の父親と兄。グランが軽く宥めたらある程度落ち着きを取り戻して、何とか仲直りまで漕ぎ着けたのであった。



再興を求めし義侠騎士、カチコミしますか？

「今日のゲストはユイシスさんです」

「よろしくお願いするわ」

ユイシス、とある街をシメていた騎士団『ディートリア組』のカシラの一人娘である。しかし、同じ組のとある人物が裏切りを行い組は離散。今現在はその人物を探すためにグランの所について働いている女性である。

グランの事をカシラとして慕っており、何でもする覚悟を決めている。

「ユイシス、確か去年ユカタヴィラ着てたよね。あれ結構可愛かったけど今年も着るの？」

「ええ、着ようと思ってるわ。着て欲しいなら、命令さえあれば今でも着替えるわよ？」

「それはまた今度にしようか……というわけでちよつと後で俺の部屋にユカタヴィラ……あ、いやごめんなんでもない」

いつも通りの発言を行おうと思ったグランだったが、リーシャから放たれる殺気を感じてすぐに言葉を変える。そのまま殺気は納まったが、グランは後で起こるであろう事を予想したが、どうしようもないだろう。

「今年はまだユカタヴィラ仲間増えたみたいだし、お祭りに参加してきても良さそうだな」

「そうなの？」

「ゼタ、ベアトリクス、カシウスが最近着てたな」

「へえ、あの3人が……確かに一緒に出かけたいわね、ユカタヴィラ仲間」

「ちなみに俺も着たぞ」

「じゃあ、後でカシラとも一緒に出かけたいわ」

「いいよいいよ、どんどん来いそういうのは」

サラツとデートの約束を取り付けるユイシス。今度は彼女に殺気が向けられたが、常に弾丸が飛び交い剣がぶつかり合うような環境に

いたユイシスは、その程度の殺気では驚かなくなっていた。

「にしてもユイシスの武器って面白いよね」

「そうかしら？」

「可変武器って、もうそれだけで男心をくすぐる武器だし……」

「そうかしら……」

男心をくすぐるといのがユイシスにはいまいち分からなかったが、グランが好きだというのならこれからもグランの目の前では積極的に変形させていこうと思うユイシスなのであった。

「……さて、軽く談笑して場が温まってきた所でお便りのコーナー」

いつも通り箱から3つのお便りを取りだし、そしてそれを一旦自分の目の前に置くグラン。そして、その中から1通目を適当に選んで読み上げていく。

「1通目『カチコミって何ですか？』」

「カチコミって言うのは……ってこれ、カタギに教えていいのかしら……？」

「いいんじゃない？ 子供が真似して使ったら注意する程度でさ」

「そうね……カチコミって言うのは、要するに相手の組に喧嘩を売りに行くことよ。逆に、自分達がされる立場になったら『カチコミされた』で構わないわ」

「例えばどんな使い分け？」

「そうね……カチコミしに行く場合は『カチコミだア！』みたいな言い方で、された場合は『カシラ！ カチコミです!!』みたいな使い分けなのかしら……？ 案外教えるのって難しいわ……」

「カチコミって、どうして行うのかの理由も言つといたら？」

「そうね……カチコミっていうのは……まあ基本的に組同士が争って、勝った方が負けた方の領地を奪い取れるって感じかしら」

要するに、規模が小さくなった国同士の戦争である。負けたところは勝ったところに吸収される……大きいか小さいかは関係なく、組織という枠組みにいる以上その組織のトップが領地を広げたい時は相手の領地を奪うしかないのだ。

「にしてもビーがユイシスの事を『物騒な姉ちゃん』って言うけど……」

まあ、言いたい気持ちは分からなくもない」

「そうかしら……私からしてみれば、騎空士っていうのがここまで平和なものだと思っただけだったわ。もちろん、この団が特別だって言うのもあるかもしれないけど……」

「まあ、普通なら国からの依頼でも動くしね……俺達も動くことは動くけど、国とり戦争の依頼はなるべく動く気はないかな」

「その言い方だと、動く時があるっていう風に聞こえるけど……？」

「動くとしたら、それはすごく悪い相手国が攻め込んできた時とかそんな感じだよ……要するに、防衛戦」

「なるほど……攻める戦いはしないのね」

「皆をそんな戦いに連れて行きたくないだけだよ、それに攻める側に立ってって言われるってことは……多分俺らの数と、ルリアの力を過信してるような人だと思うし」

少し真面目な顔をしながら語るグラン。その目をユイシスはじっと見惚れていた。その視線に、語っているグランは気づかない。

「まあ……結局シエロカルテからの斡旋だったりしたら、受けなきや彼女の評判にかかるから受けるんだけど……あと直接的な依頼とか？」

「……なるほど……」

「……つと、俺があんまり長々話しててもしょうがないな。2通目に行こう……『オトシマエってなんですか？』」

「オトシマエっていうのは……まあ、簡単に言えば自分でやった事の責任は、自分で取るって事ね」

「まあ割と俺達もそんなもんだしね……」

ユイシスはオトシマエを付けるためには、自分の腹を切る覚悟を持ち合わせている。1度グラン達に止められてからはそんな事はなくなったものの、それくらいオトシマエを付けようとする世界にいたということになる。

「まあ私たちの場合だと、命をかけるのが当たり前なんだけれど」

「まあ明確な違いがあるとすれば、その辺だよねやっぱり」

「私達の世界は、指とか命を掛けていけるのが当たり前……それだけ

責任が重いことが続く世界だから……」

「まあこの団にいる間は、絶対そんなことさせる気ないけどね……」

「カシラ……」

頬を赤らめているユイシス。よりグランに着いていこうという気持ちだが、また強くなっていた。グランからしてみれば仲間が死ぬのが嫌なだけなのだが。

「……にしても、指ってというのは？」

「え？ 切り落」

「あ、ごめん話振っておいてなんだけど、これ子供も見てるからそういうマジで想像しやすい事は多分言わない方がいいわ」

「そ、そうね……」

命をかける、という言葉で恐怖を覚えるものは少ないだろう。何せ、かなり曖昧な言葉なのだから。しかし、指を切り落とすとか腹を切るというのは想像に難くない為に、子供達が容易に恐怖を覚えてしまいかねない。

「あとそれ言うとユイシスが今度から子供たちから怖がられかねない」

「……それは、ちょっと困るかも……」

何だかんだ子供達と関わる人が多いグランサイファー。そんな中で子供たちに嫌われる事は、何だかんだ結構辛いものがある。グランサイファーでは、子供達に嫌われたり避けられたりするようになることはなるべく避けなければならぬ。

「でしよ？ だったら……省いていかないよ」

「……カシラの言う通りに」

グランも子供達に嫌われることは、相当に辛いということがそれなりに理解出来ている。何故ならば、子供たちに嫌われるということはその親だったりも同様の反応を返してくる可能性が高いからだ。

アギエルバとか、アギエルバとか、アギエルバとか。

「娘が嫌がっている人に、親が合わせようと思うわけないもんなあ……」

「カシラ？」

「ああいや、ごめんなんでもない……3通目行こうか」

「はい！」

『ユカタヴィラの時に出てるあの黒い紐はなんですか？』

「……黒い紐？」

「あーちよつと待つてちよつと待つて」

ガサゴソとそのへんを漁るグラン。因みに説明すると、ユカタヴィラを着ている時のユイシスは、首から背中を通して胸にかかっている黒い紐のことである。確かにあることは確認出来ていたのだが、あとから確認すると消えていたのでどこに行つたのかと、グランも気になつていたので。

「はい、これこの間撮つた写真」

「……あー、その紐……」

「あれついてたけど……どしたの？」

「付けてたのはいいんだけど……その、キツくて外しちやつて」  
「なるほど」

真面目な顔以上に真面目な顔になるグラン。何がきつかつたのかは、敢えて聞かなかつた。敢えて聞かないことにより、自分の中のものにかを高めようとしていた。しょうもないものということだけは確定しているのだが。

「外したやつどうしたの？」

「捨てちやつて……」

「そっかあ……」

因みに、見てた感じだと胸の横部分に巻きついているような形になつてると予想は出来ていたのだが、実際のところどうなつていたのかはユイシスしか知らないことである。他のユカタヴィラを着ていた女性でも、皆背中まできちんと布地があつたのでユイシスとの違いが確認しづらかつたのだ。実際のところどうなつているのかは、グランも全く知りようがない事となつてしまった。

「他のエルーンの誰かがユカタヴィラ着てくれたらいいんだけどなあ……」

ユエルやソシエのがユカタヴィラに近い為、『それユカタヴィラな

の?』と聞いておこうと思ったグランなのであった。

「カシラがつけて欲しいのだったら、付けますけど……」

「あ、マジで?」

「それが命令だったら……」

「つけて欲しい、何ならあの紐だけ付け」

随分ご無沙汰だったのでグランは忘れていたのだが、実は未だに床が開くという機能は存在している。最近はある程度そういうこともなかったのだが、セクハラ発言をすれば落ちるのだ。最近はずらなくなっていたせいか、全く意識していなかったが。

「カ、カシラ!?!」

「大丈夫大丈夫!! がっちり捕まってるから!!」

そういうグランは、床が抜けた後の穴に何とかしがみついていた。忘れてはいたが、反応ができなかった訳では無い。しかし、そんな中でグランに近づく影がユイシスの他にもうひとりいた。

「団長さん」

「その声はリーシャ! よかった助けてくれ!!」

「団長さん」

「あ、はい何でしょうか」

「下でアンチラさん待機してるんで……Fly away」

「わかりました……」

謎のテンポを踏んで、手を離して落下するグラン。落ちる寸前の顔は、虚無と言っているほどの感情の籠っていない顔となっていた。その光景をユイシスは呆然と眺めておくことしか出来なかった。

「え、あ……」

「ユイシスさん」

「は、はい」

「あまり過激な言葉を使わないで下さいね、子供達から怖く見えますよ」

「は、はい……」

その言葉だけを伝えて、リーシャは立ち去る。グランは何とかアンチラに回収されていたらしく、無事なことは確認出来た。ふと、ユイ

シスはあのユカタヴィラに着いていた黒い紐のことを思い出ししていた。

「……あれだけ付ければ……カシラは喜んでくれる……?」

「あ、そういうのしたら淫行防止条例違反で反省文ですんで」

「ごめんなさい」

いつの間にか音もなく戻ってきていたリーシャに、ユイシスはとんでもない恐怖を抱いたが、流石にバレたらまずいと言うのとグランに喜んでもらいたいという気持ちかせめぎ合って、顔を真っ赤にしてその部屋で1人悶々と過し始めていた。

「……あ、でもあの紐どこに行つたんだろ」

……とりあえずまずは、あの謎の黒い紐を探すところから始まりそうなる予感だが、恐らく見つからないような気がしているのは……彼女自身がそう感じているのであった。

古今独歩の大拳豪、拳1つでどこまで行けるか…？

「今回のゲストはガンダゴウザさんです」

「がーはっはっは!! 古今無双流大開祖ガンダゴウザである！ 拳に出来ない事は何もない!!」

「その挨拶もしかして考えてた？」

「はっはっは!!」

大声で笑うガンダゴウザ、頼いと感じるほどではないが声のボリュームはやはり大きいものである。それに加え、ドラフの男性とくればもう声も体も筋肉も全てが大きくて仕方がない。

「まあ、別に考えてもいいけど……ごほん、えーガンダゴウザはさつきも言った通り大体拳で解決します。というか、拳というか筋肉で決するタイプです」

「うむー」

「ま、本人にそのつもりがあつたのか聞くといつもはぐらかされるんだけどなあ……」

「がーはっはっは!!!」

「ほらこんな感じで」

少し呆れているグランだったが、ガンダゴウザはそれを意に介さない。それがガンダゴウザなのだが、グラン的にはいい加減真実とか内心とか色々教えて欲しいものである。

「そう言えば、ガンダゴウザには色々伝説があるわけで……」

「真実かどうかは言えぬがな!!」

「そりやまたなんで」

「歴史、つまるところ伝記というのは所詮人が主観で書いたまたは話したものに過ぎん……ワシが言うのとは、どうしても齟齬が生まれてしまうからな!!」

「なるほどそこまで考えて……いるのかどうかは分からんけど……」

言ってることは、グランも理解できる。ものによっては1部分だけ切り取られている場合もあり、話されているまたは書かれているものが真実かどうかは結局のところ本人に聞くしかないのだ。



「けどガンダゴウザなら出来てそうで不思議はない」

「がーはっはっは!!」

「ほらまたそうやってすぐに誤魔化す」

ジト目で見るグランだが、やはりガンダゴウザには聞いていない。だが、ガンダゴウザの拳の伝説はどれも話だけ聞くと眉唾物なのだが、ガンダゴウザ本人を目の前に行っているとどうにも出来てそうで違和感はないのだ。

「……ま、いいや……とりあえずお便りいつてみよう。1通目『アルバコアが師匠つてどういう事ですか?』」

「ふむ……アルバコア、ではなく魚全体がワシの師匠だ」

「確か、昔泳げなかった時に……魚に抱きついて泳ぎ方を教えてもらったんだっけ?」

「うむ!! 故に、ワシは魚直伝古今無双流泳法術を使い魚と同等の泳ぎが出来るのだ!!」

「水中にいるアルバコアを1人で倒してたもんね」

「がーはっはっは!!」

アルバコア、魚型の星晶獣である。星晶獣なのだが、群体であり1匹しか存在していない訳では無いのだ。故に、夏はよく海にいたりするのだが……魚と言えども星晶獣、しかもアルバコアの得意のフィールドである水中で、しかも拳だけで勝っているのだ。

「うーん、俺も武器は使っているけど……拳一つで……オマケに水中で魚の星晶獣に勝つってなかなかすごいな……」

「古今無双流に不可能は無いのである!!!」

実は人間ではなくて、星晶獣だった……と言われても正直に言うグランは信じられる気がしていた。しかし、現実が小説よりも奇なり……ガンダゴウザは恐らくちゃんとした人間なのだろう。

「……もし、覇空戦争の時にガンダゴウザいたら……もつと早く戦争終わってた気がするよ」

「がーはっはっは!!!」

実際本当にやってのけそうなのが怖いところである……カリオストロも、星の民を退けた実績はあるが……ガンダゴウザだと殲滅まで

いきそうなのが怖いところである。

「それくらい強いからねえ……」

「しかしワシのこの拳は、戦争には使う気は毛頭ない!!」

「分かってるよ」

ガンダゴウザは人に縛られる生活をしているような男ではない。今はグランの師匠という事でグランサイファーに乗っているが、本来は自由に生きて拳を奮っているような男である。そんな男が、ここまですぐに連れて来てくれるだけでグランは感謝をしているのだ。

「俺はここまで着いてきてくれるガンダゴウザに感謝してるよ、それに争いに勝つ為だけの拳を振るわないってのも分かってるよ」

「ならばよし!!!」

「という訳で、2通目『アルバコアは美味しかったですか?』」

「誠に美味である!!」

「ガンダゴウザがメたアルバコア、ユイシスが切って捌いてたけど滅茶苦茶美味かったもんなあ……」

星晶獣なのに、まず食われることがあるアルバコア。グランも最近、ただの強い魚じゃないだろうなという気さえしていた。カツウオヌスの方が、まだ星晶獣な気さえしてくるのだから。

「……今度また食うか、アルバコア」

「では、その時もワシが捕まえてこよう!」

「シグに聞いて、群体来そうなら……その群体からアルバコア大量ゲットしちまうか」

「よかろう!!」

「因みにガンダゴウザは、他の夏に食う食べ物シリーズで好きな物ある?」

「好き嫌いはワシにはない! 全てが美味であり、ワシの血肉となるのだ!!」

「守畏禍も?」

「……」

その言葉に、ガンダゴウザは答えなかった。守畏禍というのは、少し前にグラン達が無人島に漂着した際に食べたもののだが、それは

まあとても食べられる味ではなかった。

水分と胃袋を満たすためにとっても必要なことだったが、しかしそれでも不味かったのだ。

「……食べ物で好き嫌いはせぬが、しかしワシは魚の方が好みである！」

「俺も同じくらいかな……」

基本的にグラン達は高級な魚などをよく食べていた。ンナギだったり、ンニだったり……夏限定という訳では無いが、エヴィもよく捕食していた。

「因みに俺はンナギの井がここ最近で一番うまいと思った」

「うむ!! あれもまた大変美味である!!」

「あと食べてた訳じゃないが……」

「む?」

「サメって食えんのかな……」

その言葉に、ガンダゴウザはまるで『天啓を得た』と言わんばかりに驚いていた。サメ、人間を襲うはつきりいえば危険生物である。しかし、ほんの少し前に出会ったサメ達は空を飛んだり人間になったり火を噴いたり大きな鮫の形を取って群体で襲ってきたりと多種多様な存在になっていた。

「しかし、食用には向かんと聞いたが？」

「ずっと泳いでる上に、皮膚が硬いし筋肉も硬いからな……ただ、ヒレの方はふやかして食えるようになるかもしれないって聞いた覚えがある」

「ほう、それはまた興味が湧くのう……」

「……食うか」

「あいわかった!!」

「って訳で3通目『弟子はいますか?』……って、一応俺が弟子なんだけどね」

「グランには才能がある!!」

忘れられがちだが、グランは一応ガンダゴウザの弟子である。クリュサオルやらソルジャーやらやっているため、本当に忘れ去られて

る可能性の高いことなのだが。

「拳でいいと言うとるのに、グランはすぐ他のものに手を出す悪い癖があるからな!! ガーはっはっは!!」

「そう言って笑うのは怒ってんのか笑ってんのかわかんないから」

「怒る? なにを怒る必要がある! 悪い、とは言ったが本格的に悪いことでない限り、全てを試さねばなるまい!! ワシは拳一筋で戦える男! しかしグラン!! お主はワシと同等の拳を扱えるようになるばかりか、他の武器も群を抜くほどに扱いこなすだろう!!」

「褒めてくれるのは素直に嬉しいけどね」

少し照れながら、グランは返す。ガンダゴウザが言っていることは、なんだかんだ外れたことがない。グランがこれから鍛錬を怠らなければ、これからもっと成長して全てが最強の人物になるだろうと予測しているのだ。

「ワシはそれが楽しみでしようがないぞ!!」

「……ま、ご期待に添えられるように頑張るとしますよ」

「ガーはっはっは!!」

「その笑い声ホントでかい、ガンダゴウザって感じがして安心できるけどさ」

大声に晒されながら、グランはほっこりしていた。部屋が笑い声で振動しているのだが、それにグランは気づいていなかった。

「さて、今回はここまでに致します。ここまで見てくれてありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「ガーはっはっはっは  
!!!!!!」

「あの、団長さん……」

「あれ、どしたのリーシャ」

番組終了後、部屋から出ようと思った矢先にリーシャが珍しくちやんと扉から部屋に入っていた。そのあとから言いづらそうに言葉を濁していた。

「いや、あの……えつと……」

「どうした娘っ子……なにかあつたのか？」

「……とてもいいづらい事なんですけど、ガンダゴウザさんの大声でルナールさんが気絶しました」

「あつ……」

声でかかったもんなあ……とグランはつい他人事のように考えてしまっていた。よくよく考えていたら、ルナールのハートは絹のように柔らかい。そこにガンダゴウザの大声というミサイルが飛んできたら、たちまち吹っ飛んでしまうのは目に見えているのだ。

「しかも、なにやら作業していたようで……番組が始まっていたことに気づいていなかったようです」

「それで、不意打ちの……」

「む、むう……あの絵描きの娘っ子には悪い事をしたの……」

「とりあえずルナールのところ行くか……」

「そ、そうだな……」

珍しく気落ちしているガンダゴウザ、グランはこの後ガンダゴウザを誘って漁にでも出かけようかと思うのであった。

そして、とりあえずリーシャにはルナールの様子の確認を再度お願いしておくのであった。

「……ええ、まあびつくりしたのは事実だけど……別に気にしてないわ」

「そうか……」

「だから、そう落ち込まないでガンダゴウザさん」

そしてルナールの様子を見に行ったら、ルナールはなんとか元気そ

うにしていた。ガンダゴウザは基本的に落ち込むような性格ではない。それは他人に本格的な迷惑をかけることがないからだ。

しかし、今回自分の声のせいだという責任を妙に気にしてしまっているようだ。

「貴方が落ち込んでいる姿は誰も見たくないわ、だからいつもの様に大声で笑ってちょうだい」

「……うむ、ならばワシはいつも通りにするまでよ！」

「そうそう……というか、今回私もちよつと耐久性無すぎたし……もうちよつと強いハートを持つようにするわ」

「まあもうちよつと船の防音設備のレベル上げておくよ」

「まあ、それができるならそうして欲しいけど……」

「どうせ近々改修するつもりだったし……その時に防音レベル上げておくよ」

「……なら、お願いするわね」

グランが言ったことに、少しだけ安心するルナール。絵師である以上、静かな空間は彼女にとっても都合がいいのだ。故に、防音をつけてもらえるならそれに越したことはないというわけである。

「ま、とりあえず今からルナールに料理でも作って元気だしてもらおうよ」

「……あんまり重たいものは食べられないけど……?」

「大丈夫大丈夫、スープだから」

「ならいいわね」

その後、ぼそつと『サメの』を付け足すグラン。当然聞こえていないので、ルナールは知る由もない。

その後、サメのヒレのスープを飲んだルナールはその意外な美味しさに感嘆の声を漏らしたとかなんとか。

## 剣豪と拳豪

「ぬううううううん!!!」

「はあああああ!!」

拳が唸り、剣尖が光る。叩き込み、切り裂く。アルバコアが水中から叩きあげられて、それが一瞬で刺身になる。その光景をグランは浜辺でずっと観察していた。

「アルバコアのスシねえ……」

バカンスも続いていく中、グランはお世話になったスシ屋『みや里』にネタを届けるためにアルバコアを調達している最中である。

無論、他のネタを見つけたらそれも即座に捌いていく。

「まあ、アルバコアも食べられるし絶対美味えとは思っぜ?」

「俺もその点は心配してないんだけどな……」

そして、今回は隣にビイもいる。バカンス中なので、割と一緒にいたりもする。ルリアは今は浜辺で遊んでいるので、近くにはいない。そう簡単に命のリンクが途切れる訳でもないと思うので、大丈夫だとグランは考えて好きにさせている。

「じゃあ何が心配なんだよ」

「アルバコアの中でもデカイ個体がいたら……みや里爆発しそうでな……それに、あの二人にもあまり無理させる訳にはいかねえしな」

魚は鮮度が命である。2人……イシユミールやスフラマールが頑張って魚のネタを冷やしてくれているが、暑さに弱いあの二人をあまり酷使させてしまうのも、あまり気乗りはしないのだ。

「まあそうだよな、じゃあこの辺にしとくか?」

「まあな、多分この量なら足りるだろうし……あの頭の中がプレミアムフライデーなフライデーが邪魔する可能性も低いしな」

因みにフライデーは未だにみや里にスシを食いに行っているようだ。別にそれは構わないのだが、みや里の人達はよく受け入れてくれているものだと、グランは少し感心していた。

因みに知らない人の為に解説すると、フライデーとは『プレミアムフライデー』なるものを広める為に尽力している女性である。そのた

めならその人の大切なものを焼き払う性格から、『見た目と思想はいいのに、性格が全てを無駄にしてしまっている』女性という扱いになっている。残念美人というか、犯罪美人である。

「まあ、邪魔するにせよ邪魔しないにせよリーシャがいるから安心なんじゃねえか？」

「目を光らせてるからな、今」

単純な営業妨害、そして年始にヴァジラやほか多数の人の家を焼き払いかけた放火未遂の2つの件で、フライデーに関してはリーシャが目を光らせていた。

「……やっぱりちよつと性格最悪過ぎないか？」

「人の家焼いてるからなあ」

「寧ろあそこで怒るだけで済ましてるヴァジラ聖人かよ」

「あの姉ちゃんの肩は持つつもりじゃねえけどよオ、家族が無事だったからあんまり怒るのもなあ……すまねえ、やっぱり家燃やすのはおいらもダメだと思う」

手のひら返しと言っても過言ではないほどの速さで意見を覆すビィ。しかし、仕方ないだろう。あの性格でなければ、多分もしかしたらほんの少しの希望で擁護出来た可能性もあったかもしれない……だが、あの性格では無理である。

「見つけたらリーシャ呼ぶ？」

「間に合うかあ？」

「多分間に合うでしょ、一応シロウから『メカ停止ハンマー』なるものを貰ってきたし」

「え、なんだそれ」

「これをぶつけたメカは止まる」

ハンマーのようなものを取り出して、グランは呟く。その顔はいつもの顔ではなく、何故か覚悟を決めた目だからである。

「それよお、意味あるのかあ？」

「大丈夫、無理矢理めり込ませるから」

「因みに止めたあとどうすんだ？」

「……縛って放置かな……」



「うわあ…」

やっつてることはかなりあくどいのだが、正直同情すら湧かない時点で運命は決まってるって言っても過言ではないだろう。言い方は悪いが、あのエビフライがなければ彼女は何も出来ないのだから。

「まあプレミアムフライデーを宣伝する行為を、永遠にプレミアムフライデーするだけだから」

「オイラ、偶にお前がすごく怖く見えるぜ」

「でも正直あいつの事性格込みで擁護出来るやついたら教えて欲しい……」

「まあ、うん……」

目を背けるビィ。ルリアでさえ、『フライデー捕まえたらどうしようか』なんて聞いたたら口籠るくらいである。最近、グランサイファーに乗船しようとしているらしい。仲間になるのは構わないが、エビフライを起動させたらどうしてくれようか。

「ま、その時はその時か」

「ポジティブなのかどうかわかんねえなあ……」

「実際、グランサイファーに乗りたかったらいつでも乗っていいしね」「大丈夫かあ?」

「まあ、エビフライは最悪また大破させてやればいいし」

1度は破壊出来ているのだから、また別に破壊してやればいいとグランも考えていた。楽観視というよりは、万が一起動させた場合は許さないと言うだけである。

「カシラ! なんの話しているんですか?」

「がーはっはっは! ネタの準備は完了したぞ!!」

「マジか、ありがとう……んじゃあこのままみや里行くか」

ネタの準備が出来たので、そのまま全員でみや里に向かってネタを届けることに。結構な量があるので、恐らく今日しばらくは足りるだろうと

グランは考えていたのであった。

「グランさん！ネタがなくなっちゃったっば！」

「まさか閉店と同時に無くなるとはな……」

大量に取っていたネタだったが、アルバコアのついでに取っていたネタでさえ完全に尽きていた。みや里の客の入数を完全に舐めていたと言っても過言ではない。

「まあネタは新鮮だしな、翌日まで持ち越すよりはマシだろうけど……これ、明日完全に足りなくなりそうだなあ」

「カシラ、どうします？」

「多めにネタを買ってきてもいいだろうけど……」

「しかし、それでは市場に出回っている分を無くしてしまいそうだな」  
ガンダゴウザもユイシスも、何とかならないかと考えてくれたいた。エヴィなどは問題ないかもしれないのだが、問題はンナギなどの高級魚のネタである。

ンナギは流通数は前よりは一時的に戻ってきているが、しかしそれでも少ないものは少ないのである。

「何とかして稼がないとなあ……」

「どうするっば？」

「……よし、明日朝っぱらから俺たち3人は漁に行くか。他のグランサイファアのメンバーで手が空いている者がいたら、そっちはそっちで市場にネタの買い出しだ」

「はい！」

「ならばワシも全力を出そう!!」

翌日。グラン、ガンダゴウザ、ユイシスの3人は浜辺に立っていた。魚を捌くユイシスト、ガンダゴウザとグランで魚を仕留めていく係である。

「なんでもいい、美味しい魚なんかを片っ端から倒していこう」

「うむ!!」

そう言ってグランとガンダゴウザは海に入る。グランは短剣を握って、一撃で仕留められる様に。ガンダゴウザは変わらず拳で仕留めていく様に。

「行くぞおおおおおおおおおー!」

グランの掛け声と共に、ガンダゴウザは海に潜り、グランも続く。息が続く間は確実に魚を稼いでいかなければならない。それが分かっているから、グランはなるべく素早く泳ぎつつ魚介類の頭目掛けてその刃を振り下ろす。

因みに使っているのは、リヴィアンゲイズ・マグナ：リヴァイアサ  
ンマグナから取れる短剣である。何となく水の中でも使えそうな気がしたので、グランはこれを使っていた。

「……?」

海に潜って何度か魚介類をしとめている間に、グランは視界の端で何か妙なものが映ったことに気づいた。海の中にいるのだから魚介類なのは当たり前なのだが、妙にその魚介類の色合いがおかしかったような：そんな気がしたのだ。

「……?ばっ!?!」

そして、その妙なものの姿をグランは確実に視界に捉える。瞬間、あまりのことでグランは肺の中の空気を思いつきり出してしまふ。

何故ならそこにいたのはエリート・ビジョン of ファンタステイク・ライフ……フライデーの乗る謎の機械、エビフライだったのだから。

いきなりのことで驚いたグランだったが、とりあえず空気を一旦取り入れるために水面から顔を出す。

「ぶはっ!!」

「カシラー! どうしましたか!？」

「フライデーに笑わされた!! あいつぜってえ許さん!!」

「カ、カシラー!？」

グランは再び水中へと身を潜めていく。サラツと武器を変えて、今度はシロウ制作のハンマーも一緒に手に取っている。しかし次に入る時は、何故か目の前にフライデーがいた。

「……」

「……」

対峙する2人。とりあえず、グランはハンマーを投げてエビフライの動きをちやつかり停止させた上で、対話に臨もうとしていた。

『エビフライ止まっちゃったんですけど!？』

『うるせえ黙って連行されろ』

それぞれのジェスチャーが何故か通じる中で、グランは真顔でフライデーを睨みつけていた。フライデーは、今のグランに捕まったらまずいと悟ったのか、首を横に振りながら逃げる体勢に入っていた。

『きよ、今日の所は一旦引かせてもらおうわ!』

『逃がすか』

泳いで逃げようとするフライデー、そんなフライデーよりも早く動いて、グランはフライデーの前に出てくる。フライデーは驚いてしまい、そのまま捕まってしまう。

『ちよ、ちよっど?』

フライデーはそれでもジェスチャーで、なんとか意思疎通を図ろうとするが、フライデーを捕まえているため両腕が塞がっているグランは既にジェスチャーを行う事が出来なかった。

「ぶはっ!! ガンダゴウザ!! 犯人一丁!!」

「ぬうん!!」

「きゃあ!?!」

呼んだ瞬間に、巨大な水柱を起こしながら現れるガンダゴウザ。そのままフライデーを担ぎあげたかと思うと、浜辺に向かって投擲していた。

「きゃあああああああああああ!?!」

「破煌刃・天終!!」

そして、そのままの流れでユイシスはフライデーに峰打ちを行う。気絶したフライデーは、そのまま突如として現れたリーシャの手によって、どこかに連れ去られるのであった。

因みに、この後グラン達はキッチンとみや里にスシのネタを大量に届ける事が出来たのであった。

「――はっ!?!」

「ようやく目が覚めましたか」

フライデーが目を覚ました時、周りはどこかの船の中だということだけは確認出来ていた。そして、グランの仲間がいる以上そこはグランサイファーの中だとフライデーは推理していた。

「私を閉じ込めてどうする気かしら?」

「このまま連行するんですよ、貴方には罪が多すぎる」

「あら、私に罪?ふふ、プレミアムフライデーを進めるのが罪だと言うのなら、幾らでもその罪は犯してあげるわ。だってそれが人のためだもの」

「なるほど…」

グランサイファーは、多種多様な人が乗っている所である。そして、底抜けの善人ばかりが集まっているところでもある。何とか何人かを一時的に味方に引入れることが出来たら、この場から逃げ出してプレミアムフライデーを進めることが出来るとフライデーは踏んでいた。

「……ああ、そうそう一つ言い忘れました」

「……何かしら？」

リーシャが演技するかのようには、何かを言い始める。フライデーは首を傾げるが、リーシャはそのままフライデーを見下ろしながら、淡々と告げる。

「ここはグランサイファーの中じゃなくて、秩序の騎空団の騎空艇の中です」

そう、フライデーは秩序の騎空団に連れていかれているのではなく、今秩序の騎空団に連行されている所なのだ。

「つまり、貴方が誰かを説得して仲間にしようとしても…貴方の危険性を知り尽くしている私の仲間達は仲間になることはありません」

「……え？」

つい間抜けな声を出してしまうフライデー。しかし、残念ながら事実である。その事実にはばらく頭が追いつかなくなりながらも、フライデーはそのまま秩序の騎空団預かりになったのであった。

サムライドリーマー、ぎぎるー？

「本日のゲストはミリンさんです」

「ぎぎるー！」

着物を着た少女、侍を目指す少女ミリンが今回のゲストである。侍らしく着物を身にまとっているが、その剣筋は確かに侍の本質を感じ取れるようなものであった。

「ミリンはあんまり俺と年が変わらないわけだけど」

「とうとうっ！」

「いやあ、同年齢ってあんまりないからさ……正直感動してたりする」

「いやはや、拙者こそありがたいと思つてますよ！」

褒めるグラン、謙遜するミリン。しかしグランはミリンが謙遜する時に動いていたとある一部を見逃していなかった。ミリンは結構アグレッシブに動く。その為か、結構揺れるのだ。何処とは言われないが。

「にしても、ミリンとサビルバラが同郷だなんて俺初めて知ったよ」

「あれ、言つてませんでした？」

「まあ、言う機会ないし本人達が気づく機会も中々ないからね」

「ローアイン殿達が言つていた『グラサイ七不思議』ですね！」

「まあ、うん確かに不思議だよな。いや、むしろ同郷が集まりまくつてるグランサイファーが凄いとこころなのでは？」

言つてはならない疑問だが、然して気になつてしまうものは仕方ないといえばそうなのである。とは言つても、その同郷のサビルバラはミリンよりも実力が数段上なので、ミリンは尊敬の眼差しを送るばかりで話しかけられない状態が続いているが。

「さて、それはともかくとしてお便りを読み上げていきます」

「はい!!」

「早速一通目『ぎぎるってあんまり言わないですよね』」

「っ……………」

驚愕の表情に染るミリン。そこまで驚くことなのだろうかと思う

が、彼女は実際時折『ござる』というだけで実はそこまでござる口調では無いのだ。意識してないと出てこないとまでグランは思っていた。

「そんな……拙者、そこまで言えてなかったんで……言えてなかったでござるか!?!」

「今言い直した? いや、まあいいけどさ……実際そこまで言っていないよね」

「くっ……こんな所でバレてしまうなんて……では、今度から徹底してござるを付けないと——」

「はいストップ、サビルバラがそんなにござる言ってる言っていないんだから気にしちゃだめだっこの」

「……確かに」

ミリンの尊敬するサビルバラも、そこまでござるござる言っていない。寧ろ、ござるよりも『ぜよ』の口調の方が目立っている。はっきり言えばサビルバラの喋りの方が『ござる』よりも特徴的に感じられる。

「しかし、今更ござるを辞めるのも……」

「なんか思い出したように使ってるせいで、意識的にしてるような気がしてならないんだけど」

「い、一応無意識です!!」

「まあ偶に本当に思い出して使ってる時あるよね」  
「うっ……」

「まあある程度根付いてんだったら、そのうち本当の意味でござるを使いこなせると思うよ」

「グラン殿は一体ござるの口調に何かあったのですか……?」

一体何様のつもりなのか、グランは頷きまくっていたが……ミリンは首を傾げるだけだった。しかし、グランはそれを無視して2通目に取り掛かる。

「サラシを巻いていて苦しくないんですか?」

「巻き方にもよるでござるよ」

「ござるの口調」



「い、今は関係ないですよね!？」

「まあそれはそれとして……サラシ巻いてるのは知ってたけど……なんか結構きつめに巻いてるってルリアから聞いたよ」

「あ、一緒にお風呂入った時でしようか」

「その話詳」

その先の言葉を紡ごうとしたグランに、ねっとりとした殺意が絡みつく。それ以上の言葉を吐けば殺秩序されると直感が感じ取ってしまった。

「グラン殿？」

「いやなんでもない……そう言えば、その話を聞いた時のルリアの顔が虚無ってたけどなんか知ってる？」

「虚無って……？ よくわからないですが、特に何も無かったと思いますが……」

こんな聞き方をしているが、グランは原因がわかっていた。あくまでも予想だが、それなりにきつく巻いたサラシのせいでルリアはミリンの事を『同類』だと認識してしまっていたのだ。

しかし、それがお風呂に入ったことにより真実が発覚してしまったため、ルリアが虚無を起こしているのだと理解してしまったのだ。

「多分ルリアの前で今後脱がない方がいいと思う」

「どうして……」

「それが持つものと持たざる者の違」

再び訪れる殺気、今度はまるで蛇に丸飲みにされる蛙が如き恐怖をグランは味わっていた。今度は殺ヒュゴウされるのだと、直感的に感じ取ったのだ。

「……？」

「なんでもない、気にすんな」

「と、兎も角……ルリア殿の前では脱がない方がいいのは理解出来たでござる」

「そうそう、それでいいんだ」

因みに、ククルも1度胸の話題をルリアに振って死にかけた事がある。無論、肉体的には全くの無傷なのだが直感的にそう感じてしまっ

たそうな。

「で、話は戻るけど……苦しくないわけ？」

「巻き方にもよるので……」

「巻き方って言っても……結構キツめに巻いてるようにはしか見えないんだよ」

ミリンのサラシの内側には凄いものが隠れている。本来、サラシとは女性がつける場合胸が動かないようにするための……つまりは下着の役割を果たしている。

しかし、あまりにもサイズが合わない場合またはあまりにも大きい場合、固定していても動いてしまう時がある。ミリンがその例である。

そして、ミリンはサラシを巻いているにも関わらずその大きさが見えているし、動くとき動くのだ。つまり、そこから導き出される結論はたったひとつ。『すごくでかい』

「そ、そうでござるか？」

「巻くのには時間かかるでしょ、サラシ」

「うう……確かにその通りでござる……もっと早めに巻けたらいいんですけど……」

「いやあ、今でも結構早い方だとは思うけどね」

グランの見立てでは、ミリンの大きさは団の中でも有数の大きさを誇っていると考えている。つまり、上から数えた方が早いと言うやつである。

「ほ、本当にござるか？」

「うんうん、それにでかい」

「……？ 拙者、残念ながらまだまだチビ助ですよ？」

「おっと、これ以上語ると今度は俺が死んでしまう」

「ぐ、ござるか？」

グランの突然の言葉に驚くミリンだったが、グランは追求をするなりのポーズをする。ミリンもそれに従い、とりあえずこの件は保留にすることになったのであった。

「さては通目『刀落としまくってますけど』」

「うぐぐっ!!」

「戦闘中の事だね」

時折、ミリンは刀を落とす時がある。その刀は大切なもののだが、時折グランは『そんな扱いで大丈夫か?』と思う時がある。

「せ、拙者まだまだ未熟者故……」

「せめて今度から落とさないようにするべきだね……なんなら手に紐でも括りつけて刀と一心同体で生きてく?」

「お風呂に入ったら刀が錆びてしまうでござる……」

冗談で言ったのだが、彼女からしてみればあまり冗談で済むことはなかったらしい。刀を雑に扱うのは一応、彼女の本心ではないため、こんな感じのいじりはグランは辞めて別のいじり口を探し始めていく。

「でも、いざと言う時拾えなくて悲惨な目に遭うかもしれないな」

「というと?」

「ベアトリクスが1回ノース・ヴァストの池の中にエムブラスクを落として、水着を着て拾いに行くはめになった」

「ヒエツ……」

ノース・ヴァストの池なんて死地以外の何物でもないのに、それについてうっかりエムブラスクを落としてしまったことで、無駄に寒いと冷たいを味わう羽目になったベアトリクス。

その光景をふと思いついてしまっただけで、ミリンは身震いしていた。基本的に、寒い思いはあまりしたくないものである。

「せ、拙者……これから刀を落とさぬように精進します……」

「うんうんその意気その意気」

別に他意はなかったのだが、ちやっかり上手いことだったのでグランもそれに乗っかることにした。だが、落とした時に悲惨なことになりかねないと言うのは案外事実でもある。

なるべく、自分の武器は落とさないようにするのがベストなのであった。

「さて……刀談義もここまでにしておこう」

「もう時間でござるか?」

「そういう事。というわけで、皆さんご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「拙者の故郷の話が聞きたい方は、いつでも話すでござるよー！」

その言葉を言い終えてから、グランはカメラの電源を落とす。その目線は、サラシをつけているにも関わらず揺れている胸に釘付けではあった。しかし、ちゃんとカメラのスイッチを押せているあたり、そういうこと関係だと思わなくても行動できるようになるまでになるようである。

「ルリアとリーシャがそれぞれ別の意見を言っていて辛い」

「んん？ そりゃあどういふことだ？」

「ルリアは『サラシは誤魔化すための物に過ぎない』といい、リーシャは『風紀が守られる物』だという」

自分の部屋で、ビーとグランは話していた。サラシについての話である。

ルリアは誤魔化されるくらいなら、初めから胸を強調して欲しいと言う。リーシャは揺れる胸が抑えられるということ、男たちが見る視線も落ち着いてくると考えていた。

「別によろ、そこまでして2人の意見を聞かなくてもいいだろ？ 折衷案でも立てりゃあいいじゃねえか」

「折衷案立てようとする、ルリアがヒュゴウの体制になる。余程ミリンの事がシヨックだったようだ」

「ええ……」

頭を抱えるグラン。リーシャは折衷案を立てることに納得はしてくれたが、ルリアは胸を誤魔化されるくらいなら初めからでかいのを見せて欲しいという欲求が大きすぎるようだった。

まあ、ミリンの場合かなり小さいように見えるくらいには巻き付けられていたのが原因なのだが。

「……仕方ない、何とかしてルリアを説得するしかない」

「リーシャに事情説明したらどうだあ？」

「それも考えたが、秩序の名の元に粛清されると考えたらなあ……」

「お前、変なところで妙なこだわりあるよなあ」

どうするか色々思案してる中、ふと部屋の扉が叩かれる。入ってきたのはミリンだった。

「少しいいですか」

「どしたの？」

「ルリアさんとさっき話してきたでござる、そしたら何とかサラシのことを理解して貰えたんですー」

「マジで!？」

「これは着物専用の下着だと言ったら納得しました」

「ルリアがそれで納得しただと……?」

「お前ナチュラルに酷い時あるよなあ」

「実は――」

簡単に説明すると、着物はミリンのアイデンティティである。そのアイデンティティの着物の下着となっているのなら、ルリア自身仕方ないと理解したという話である。

「因みに、ルリア殿的に拙者から着物を取るということは、自分からあの白い服を取り除く様なものだど理解したようです」

「なるほど」

確かにアイデンティティは大事だ、グランはそう頷きながらちらりとミリンの胸に視点を向ける。

「……因みに、サラシ取ったまま着物って着れるの?」

「……その、擦れて――」

その言葉が言い終わる前に、グランは吹き飛ばされていた。主に

リーシャに。そして、『セクハラ禁止』と書かれた大きな紙を全身に貼り付けられてそのままリーシャはすぐに退場したのだった。この間、1分未満。

「おーい、大丈夫かあ？」

「幸せの代償だから大丈夫」

何とか紙を外すのに時間がかかったが、とりあえずサラシの話題は敏感な話題だと認識して、今後なるべく話さないように気をつけるのであった。

無頼の好漢、痛い目に遭ってもらおうか？

「今回のゲストはサビルバラさんです」

「よろしゅう頼むぜよ」

「サビルバラは刀を使って戦う侍、侍と言ってもござるをいうって訳じゃないけど」

「ござる言うんはあの娘っ子くらいじゃ、ワシが言うにはちいと歳を食つとるからの」

軽く笑みを浮かべるサビルバラ。ここだけ見れば、気のいい兄貴分のようにしか見えないが、その実彼は仕事を果たす時はかなり冷静になる。人が変わったように。

「それと、前から気になってたんだけど」

「何じゃ？」

「使ってる刀結構でかいよね」

「そうじゃの、自分の体を使って相手を切り裂いとる」

シャルロットも、自分よりも大きな剣を使っている。使っている得物の多少の差はあるとはいえ、戦い方は似たような感じだとグランは前から薄々思っていた。

「まあ、確かにその刀の切れ味で魔物をバツバツサ切ってるけどね」

「……ま、ワシは人も切っておるが……」

「え？ 今なんか言った？」

「いや？ 特になにも言うたらんが？」

笑みを浮かべて誤魔化すサビルバラ。因みに彼はグランよりも年齢としても精神年齢的にも、きちんとした大人である。その分の汚れ仕事を、実は密かに受けていることもある。

「しかし、身の丈より大きな武器と言うならばリユミエール聖騎士団の現团长殿も似たようなもんじゃろ……いや、最強と言われるだけワシより強いんじゃないか？」

「……うーん、正直どっちが強いかって言うのは気になる。でもなあ……」

そう言ってグランはサビルバラに目を向ける。彼は何のことだか

わからずに首を傾げていたが、グランは内心こう思っていた。『どうせ言ってもはぐらかしてやろうとはしないだろう』と。

サビルバラは、そういう男なのだ。『殺し』をやる、またはそれくらいの殺意を見せる時に刀を抜く。

無論、特訓でも抜く時はあるがそのときはあくまで木刀を使う。真剣を使うことは、ほとんどないと言っても過言ではない。

「なんじゃ」

「いや？ なんでもない……とりあえず、お便りを読み上げていきま  
す」

「ふむ、まあワシに答えられる事だけは答えていこう」

グランは、いつの間にか取り出していたお便り三通をサビルバラに見せる。少し困ったような顔を見せていたサビルバラだったが、答えることにはあまり積極的では無いだけのようである。

「一通目『この船に知り合いはいますか？』」

「いるぜよ？ ミリンじやろ、あとはもう一人いると思うんじやがの  
う」

「会えてない？」

「うむ、年中忍者の仮装をしておる子供でな」

ふと、頭の中に思い浮かべる一人の少女。名をレオノーラ、年中忍者の格好をしているという枠には当てはまるし、何よりサビルバラの故郷はハーヴェインが多い。あながち間違いでは無いかもしれないが……何故かグランは、名を告げる事にあまり肯定的ではなかった。

「団長殿は何か知らんかの」

「うーん、いたとしても……自分で探して欲しいかな?!」

「この広い船の中でか……」

少しだけ笠を深く被るサビルバラ。グランも気持ちはわからなくもなかった。グランサイファーは結構どころかかなり広い。かなり広い為に、人を探すのも移動するのも一苦勞なのだ。

よくルナルがぶっ倒れるくらいには広いのだが、外から見た感じあまり広くなさそうに見えるのが不思議な程である。

「……まあ、万が一別人だと言われない方が正解ということもあ



るぜよ」

「そうそう、そういう事……正直言うと仮に知り合いだったとしてもそれ目当てで探し回るのが一番しんどい」

「じゃろうなあ……」

お互いにとって息を吐く男2人。グランサイファアの広さは有意義に使わせてもらっているが、あまりにも有意義に使いすぎて最早1つの小さな島レベルの密度がある。

食料を買うのも一苦勞である。最近のグランの悩みは買い物に行くとちよつと店主から睨まれることである。

「……とりあえず、2通目行こっか」

「じゃな」

「2通目『他の剣士のことをどう思いますか?』」

「そうじゃな……ヨダルラーハ殿は、偶に教えを乞う事があるぜよ」  
「教えを?」

「ワシの剣は廃れた流派じゃが、だからこそ他の者の流派を覚えてワシの流派を伸ばさねばならん……ま、正直に言うんじやったら……技術を盗んでいる、と言った方がいいのかもしれない」

「俺もよく盗んでるし、大丈夫でしょ」

「その言葉だけじゃと、妙に勘違いされかねんのう」

『技術を盗んでいる』とグランは言いたかったのだが、どうにも間違えてしまったようで。言いたかったことの意味は伝わっているので、まあいいかとグランは特に訂正することも無く続けるのだった。

「にしても、サビルバラも誰かに教わるんだ」

「どういう事ぜよ?」

「いや、既にかなり強いのに教わることあるんだなって」

「まあ、ここにはワシよりも上等な剣士がいっぱいいるぜよ。だったら、一緒に戦って特訓しての方がワシにとって有意義になると判断してるだけぜよ」

「因みにグランサイファア七不思議の内の一つに『有名な剣士は二刀流になりやすい』って噂がある」

アレーティア、ヨダルラーハ、ランスロット、そして団長であるグ

ランもまた二刀流の使い手である。無論、必ず二刀流になるという訳でもないのだが、どうにも二刀流に増える人が多くなってきたのは事実である。

「それ前から思っと思ったんじゃが、単純に力よりも手数を優先する戦い方の者が二刀流になっただけじゃないか?」

「ま、俺もぶっちゃけそう思う。シャルロットやジークフリートは大剣1つで戦ってるし、そっちの方がまだ信用出来る」

「そうじゃろうな、ワシの流派かて別段二刀流での戦法がある訳でもなし……作ろうと思えば出来るじゃろうが、ワシは今のところ刀1本で戦うつもりぜよ」

「まあ、ぶっちゃけ戦い方なんて人それぞれだしね。俺だって刀1本かと思えば二刀流してたりするし」

「団長殿は、多才すぎるぜよ」  
「よく言われる」

グランも褒められて悪い気はしないが、1つの道を極めていくといふよりは、使えるものを常人より使いこなす……程のレベルアップをしていくタイプである。

団員の中でも未だに勝てない人物はいるが、おいおい勝つつもりではあるのだ。

「さて、とりあえず3通目『刀を背負って困ったことになったことはありますか?』」

「そうじゃのう……特に思い当たらんが……」

「まあ、刀と殆ど一緒に暮らしてるようなもんだしね。早々困ったことは起こんないでしょ」

「まあ、あるとすれば……人混みが多いところでは歩きづらいつちゆうところかのう」

「……それは、まあ予想しやすい」

自分よりも大きな刀を背負っている、それだけで結構人混みでは引っかかりやすくなっているのだ。それでも、サビルバラの場合縦向きで持ってあまり邪魔にならないようにしている事がほとんどだが。

「後、刀を持ってると妙に狙われやすいんじや」

「と言うと?」

「辻斬り、または妖刀持ちに間違われて……なんちゆうことも、団長殿達と出会う前はそれなりにあったぜよ」

妖刀、サビルバラの故郷に伝わっている呪いの刀。覇空戦争の時代のものでされているが、それがこの世界に散らばって伝わっているのだ。その妖刀を握っているものは、強大な力を得る代わりに自我を段々と妖刀に蝕まれていく。

グラン達が昔であった妖刀を持った男……コルウエルという名のその男は、妖刀に精神を蝕まれきっていたせいでサビルバラの妹を殺したという事があった。

だが、その当のコルウエルはまともな会話すら出来ないほどとなっており、最終的に無残な最期を遂げている。

「……ま、ワシにはなんら問題ない相手ばかりじゃったけどな」  
「というと?」

「本当に強い者つちゆうんは、強者を求めてさ迷ったりしないつちゆうことぜよ。まあ、中には強いかつ他人と戦うことを目的としとるやつもおるが……基本的に誰かと殺し合いを望んでいる者は、大体自分が死ぬことは考えてないぜよ」

確かに、とグランは納得していた。フェザーのような人物は、殺し合いではなく他人と拳を混じえて試合をするのが楽しみなタイプだ。決して、殺し合いを望んでいるような者ではない。

「まあ、妖刀に蝕まれとるやつは相手するのがかなり面倒じゃがの」  
「本当に強いもんね」

「そして理性もない……理性がないどころか、生物としての本能すらもろくに残つとらん」

「というと?」  
「死ぬことは恐れず考えず……そのまま相手を殺すまで戦いを続けるつちゆう事じゃ。それが一番厄介でな……相手をするのが、かなり面倒だと正直に言わせてもらう」

本当に面倒そうに、ため息をつくサビルバラ。グランも、そんな面倒臭いというのは身をもって知っている。しかし、それでも頭を働か

せられるというのも残っており、死ぬのを恐れていなくても冷静に死を避けるということを頭で考えている風ではあるのだ。

「……まあ、妖刀対策会議はまた今度行うとして……」

「ふむ、もう時間か」

「そういう事。という訳で今回はここまでとなります、皆さんご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

外に出てて、サビルバラは甲板で風を浴びていた。加えた葉が風によつて揺れて、憂鬱げに空を見上げる。その目には何が写っていて、一体今は何を考えているのか。それはサビルバラだけにしか分からない。

「……カラクラキル、おんしとも……楽しく暮らしたいぜよ。完全に昔みたいには、とは言わんが……それでもおんしとは……」

かつての友に、今の楽しい暮らしを見させてあげたい。いや、どうせならグランサイファーで飲み明かしたい。今は難しくても、いずれそうなるように、今彼が負っている問題を解決したい。そう考えているのだ。

「……そうは言うが、ワシにやつを止められるか……？」

暴走する友を救いたいのには、変わらない。しかし、その友にも信念があり覚悟があり……それを自分に止められるほど弱いものなのか、とも思えてしまう。

「……いや、ワシの覚悟も本物じゃ」

覚悟を決めた目。それは友を止めるため、友を救うため……自分に出来る事を、できるだけ精一杯行わなければならない。そう考えているサビルバラの目には、再び覚悟の炎が宿っていた。

そして、それを後ろから眺めているのは――

「……声掛けづらい雰囲気だなあ」

「今から飯行くから誘おうって言ったのおめえじゃねえかよ」

「でも、一体何を考えているんでしょう……」

グラン、ビィ、ルリアの3人。ご飯にしようかと誘おうとしてきたのだが、凄まじくシリアスな雰囲気をまとったサビルバラに、声がかげづらくなっていた。

「……もうちよい待ってみる？」

「その方がいいぜえ……」

「そうですね……私お腹が空いちやいましたけど、大丈夫です我慢出来ませう」

そうして、グラン達はシリアスなサビルバラに中々近づけないまま、30分程してサビルバラから声をかけられるまで、一切声がかげられない状況が続いたのであった。

## 侍寒々

「それでは第1回『ンナギを裁け！ チキチキ？ カヴァア焼き丼を作って判決を言い渡せ！』対決―」

「団長殿、どうしたんじゃ」

「最近の暑さで頭がおかしくなっちゃいましたか……？」

「暑さと空腹で頭おかしくなりそう……という訳でこれから2人にはカヴァア焼きの丼を作ってもらいます」

急遽始まった対決、その場にはサビルバラとミリン。そして、何故かチームローアインの3人組の合計5人がこの場にいた。グランはもちろん除いている。

「……何故ですか？」

「確かに……純粋な疑問ぜよ。それに、その3人はなんで縛られとるんじゃ」

「それには深そうでそんなに深くないわけがある」

「キヤタリナさんのためにカヴァア焼きを焼いてたら」

「ダンチョにいきなり襲われて」

「縛られてここにいろっつーわけよ」

ローアイン、エルセム、トモイがそれぞれ理由を語る。要するに、カヴァア焼きを食べさせようとしたら作っている最中に空腹のグランに無理やり連れてこられたと言っことらしい。

「流石に料理を作るくらいなら……」

「料理はピクチリ問題なしっすよ」

「カタリナに渡すところ見てから襲って連れてきました」

「終わった瞬間3人同時峰打ちとかパネーわ、ダンチョまじケモノすぎてベルセルク」

「……で、この大会の趣旨はなんじゃ？」

「そうですね……ローアイン殿達を連れてくる意味が……」

「これから2人には、ローアインからカヴァア焼きを教わってもらいます。ンナギは俺が準備して、タレの方はローアイン達が用意してま

で、ローアインの目の前でそれ食ってもらいます」

要するに『腹減ってる時に美味しい匂いを嗅がせたからお前も同じ目に逢え』ということである。ただの八つ当たりである。グランのその言葉に、サビルバラもミリンもただただ呆れるばかりであった。

「ダンチヨマジパネーション、お腹メチャ減りまくりんぐで美味しい匂いがせるとかオーガ畜すぎる」

「黙れ！ お前に俺の空腹が救えるのか」

「その割にはンナギ紗で釣りワズ的な……」

「兎も角、たまに自分で作る飯食うと滅茶苦茶美味しく感じるので作って食べてみようってのも兼ねてる……但し副食を付けること。何でもいいけどね？」

「ふむ……添え物か……」

その言葉で考えるサビルバラとミリン。どんな副菜を作るのか、どんな添え物にするのか。それを考えようとしてくれている以上は、今回やる気自体はあるということである。

「……よし、団長殿の言うこともたまには聞いてみるとするぜよ」

「いつつもそれなりにいうこと聞いてくれるくせに」

「とは言っても、作るの結構時間かかりそうですね……物によっては、先に副菜作るのもありかもしれないです」

「だな、とりあえず……作るぞ」

そう言って料理道具を大量に取り出すグラン。それぞれ3つずつあることに気づいたサビルバラとミリンは、ここで改めて驚愕の表情を浮かべる。

「団長殿もやるんか？」

「当たり前、俺がやらないで誰が俺の腹を満たすってんだ」

「まあ、ワシらも別に腹が減ってないというわけではないが……」

「拙者は……少し遠慮したいというか……」

「え、なんで？ 飯食っちゃった？」

「い、いえ……その、体重……増え……」

言いづらそうにモジモジと喋るミリン。こんな彼女はとても珍しいのだが、グランにはちゃんと聞こえていた。要するに最近体重増え

たから、あまりカロリーの高そうな食事は取りたくないということだった。

しかし、見た感じだとミリンは太っているようにはグランは感じられなかった。

「…………いや、別に大丈夫だろ?」

「うぐ…………ぜ、拙者は気にするんです!!」

『多分腹ではなくて胸だろう』とグラン考えたが、それを言うところから判定が出て秩序されるだろうと考えてしまう。それに、頬を赤らめて言いづらそうにしているミリンを見るのは、グランにとっての心の保養になっっているので一切問題がなかったのだ。

「んじゃあ、あっさりした副菜作ればよくね?」

「む…………」

「相性はいいっしょ!」

「それは言われてみれば…………」

「後、カヴァ焼き食わないのはもったいないっすよ」

「うぐぐ…………わ、わかったでござる! 食べればいいのでしよう!」

「その意気だ、一緒に美味しいご飯を作って食べような」

グランはヨダレを垂らしていた。もはや作る前から我慢が効かなくなっているようである。カヴァ焼きは確かに絶品だが、それを我慢できなくなるほどにはグランの目は狂気に満ちていた。

「さて…………料理タイムだ」



「カヴァ焼きは教えてもらった通りに作ったでござる！」

「んで、肝心の2人の副菜は？」

少ししてから、3人は物を作り終えていた。全員エプロンを着用しており、ローアイン達も満足そうに笑みを浮かべていた。誰かに作りを教えられたのが、存外満足だったようである。

「拙者はこれじゃ」

そう言っつてサビルバラが出してきたのは、天ぷらだった。しかし、その天ぷらはどうにも緑色が目立つものでローアイン達含めた5人は興味津々といった様子で見ている。

「この天ぷらは？」

「口直しじゃ、刺身なんかにも使われる食用の葉を揚げたものじゃな」

「お、これバチリコ美味いっすね」

トモイが先に、その天ぷらの1枚を取って食べていた。ローアイン達も手を伸ばし、その天ぷらにかぶりついていた。それはとても好評であり、味見用に作っていたものは全て平らげられていた。

「どしたんすかこれ」

「栄養もさる事ながら、口直しをする事でカヴァ焼き丼をずっと上手く食べ続けられるっちゅう戦法よ」

「確かに、これならいくらでもパクつけちゃうわけで……いや、マジすげーっすわ」

「……サビルバラの副菜が美味かったので、次の人にも期待が乗りますね。という訳でミリン!!」

「ござる!!」

そう言っつて、ミリンが出てきたのは……1杯のお茶碗の中に入った無色の汁だった。中には、果物の皮の一部が入っている上に食用の草のような物も入っていた。

「これは？」

「ほほう、すまし汁か」

「すまし汁……?」

「無色の汁じゃ、薄味だがちゃんとした味付けが施されている。オマケに柑橘系の皮を入れたか」

「皮を入れるとなにか味が変わるの？」

「味ではなく、香りじゃな。香りを付けることによって、一味違ってくるんじゃない」

「ほう……」

「人数分作りましたので、どうぞ！」

そう言っ出て出てくるミリン。全員、興味津々で器を手に取っている、ゆっくりとその出汁を飲み込んでいく。喉をならす音が響きわたり、全員が器を下ろす頃には器には何も残っていなかった。

「たしかに美味しい……」

「いい味してんねえ……！　こりや俺らも負けてられ」

「ローアイン達は俺らに作るのが仕事だから、余ったンナギでカヴァア焼き作ってね」

「ダンチョマジで激おこじゃん……」

笑っていない目を向けながら、グランはローアイン達を見る。その目によって、ローアイン達は恐怖を覚えていた。ここまで怒ることはまあまあ無かったというのものもあるからである。

「ともかく……次は俺だな」

「団長殿はどうしたんぜよ？」

「ふ……俺は、こいつだ……！」

そう言っ出てグランが取り出したのは、赤黒い色をしたしわくちやの物体だった。ローアイン達は見たことがないために首を傾げていたが、ミリンやサビルバラは見たことがあるのか少し驚いた表情をしていた。

「こりやあ、梅干しじゃな」

「梅干し？　なんか、めちゃんこしわくちや何すけど……？」

「はい、この梅干しは……梅という植物の実を干した後に加工して作られるものなんです」

「へえ……どんな味がするんすか？」

「酸っぱいな」

「酸っぱいでござる」

サビルバラとミリンの言葉に、興味半分怖さ半分といった表情で梅

干しを見つめるローアイン達。1つずつしかないが、その酸味を味わってみようということで一つずつ手に取っていく。

そして、3人目を合わせたあとに同時に口に入れる。

「っ……………」

ローアインは口を抑えてプルプルしながら親指を立てる。美味いと言いたいのだろうが、酸味の強い梅干し1つでは言葉すら出せないということが理解できる。

「うえぶえ、うあぶぶぶぶ……………」

何を言ってるのか分からないし、おそらく意味のある言葉を発していないだろうと思われるエルセム。酸味が強すぎて、とりあえず言葉を発していないといけなほどになっているようだ。

「うえ……………うぐっ……………ぶえ……………」

えづいてるトモイ。もう単純に絵面がやばいので、流石に食べてない3人が口直しに何かを渡していく。酸味さえ誤魔化せばいいので、単純に茶碗に白米を盛って渡していく。

「あぐ、うぐ……………」

がつついて白米を食べるトモイ。その中で白米と梅干しの相性に気づいたのか、白米を更にほおぼっていく。その様子を見たローアインとエルセムも、同じように白米を頬張っていく。そして、グラン達が余分に炊いた白米はきつちりなくなってしまうていた。

「いやあ、まじパネーわ」

「ぐ飯と相性よすぎっしょ」

「それな」

「ふふ……………梅干しの魅力が伝わるところで……………俺ら3人で飯を食うから、よろしく!!」

先程から味見でローアイン達はバクバク食べている。それなりに満足しているのだが、グランはそのことに気づいていない。言ったらめんどくさいので、全員この場は何も言わないのが吉だと察した。

「さて、カヴァ焼きと一緒に副菜食べるか」

「じゃの」

「バギン〜」

「「いただきます」」

そして、3人はご飯を食べ始める。ローアイン達は目を合わせてから、再びその光景を見るが……随分と美味しそうにカヴァア焼きを食べている姿を見て、ほっこりとしていた。

「うま、うま……」

グランは我慢の限界が来ていたのか、ものすごい勢いでかき込んで、それらを流すかのように水を飲む。ミリンはその光景をチラチラ見ながら、自分のペースで食べていた。

「ダンチョ、白米追加で炊きまくってきますわ」

「ほふ、ほへはいは」

「喋るか食うか、どっちかにした方がいいぜ」

エルセムのその言葉で、グランは一旦水で口の中のものを一気に流し混む。白米の熱さを、冷たい水で冷ましながらカヴァア焼きの味の余韻を一旦リセットする。

「ぶはあ……うし、オカワリお願いな」

「ういーつす」

そう言って白米を追加で炊き始めるローアイン達。グランの食べっぷりに満足そうにしながら、美味しそうに食べるその姿を十分に眺めていた。

「にしても、ほんとによく食うのう……」

「あ、そうだ……この後釣りに行こうぜ釣り」

「いいですねえ、なにを釣る予定なんですか？」

「ゴツドアルバコア」

その言葉にサビルバラもミリンも驚愕の表情を浮かべる。ゴツドアルバコアは、その強さも見た目もアルバコアとほぼ同じなのだが、如何せんアルバコアと違って一応はただの魚類な上になかなか見つからないことで有名なのだ。よって、ただ釣るといふ訳にも行かない。

「任せろ、シグとガンダゴウザも一緒に連れていくから」

「ふ……その辺はあまり気にしてないぜよ、なんだったらゴツドアルバコアの中でも特別大きい個体を釣ればいいんぜよ」

「ごぞる!! とりあえず、ご飯を食べ終わってからにしましょう!」  
こうして、この飯の後にはゴツドアルバコアを釣ることが決まったのであった。しかし、その話はまた別のお話ということである。

亡国の希望、お願いしますね？

「今日のゲストはヘルエスさんです」

「よろしくお願いします」

「突然ですが、おそらくこの騎空団全員が思っていることを聞いていい？」

「はい？」

「その服、というか鎧ってどうやってその位置を保持してるの」

ヘルエスの鎧。それはこの騎空団きつての謎とされている。というのも、エルーン族の服装は決まって背中と脇が空いていることが多い。それは男女問わずなのだが、そうなると胸や腹の位置の服はどう保持するのか？ という疑問になる。

基本的に、首や袖などで保持していることが多いのだが……ヘルエスはそれすらない。背中は勿論、袖にも首からも何かしらで固定されている訳ではなく、上半身の服装は腕だけについてる袖と胸元と腹を隠すだけ鎧部分しか残っていない。

しかも、胸は上からや横からでもある程度見えるくらい露出が高く、腹も横腹は完全に確認できるレベルである。

「ふふ、気になりますか？」

「気になるよ、気になりすぎてお便りの殆どこれだからね」

「皆さんどれだけ気になってたんですか……さて、どう言ったらいいのでしょうか……」

「え、なんか複雑な事情持ち……？」

「いえ、むしろあまりこれを気にしたことがなかったので、説明の仕方がわからないのですよ」

「……まじかア」

忘れているだけの可能性もあるし、はぐらかしているだけの可能性もある。しかし、はぐらかすにはあまりにもケロツとしているし忘れてるなら忘れてるで、その程度の理由でと言うのが説明できる。

つまり、下手をしたら特に深い理由もない服装ということになってしまう。

「もしかしてアイルスターの王族……女性はそういう鎧着るのが当たり前だったり？」

「……その可能性はありますね」

今のヘルエスの服装は、仲間になった時のもの。しかし、1度だけその鎧が変わったことがある。アイルスターに一時的に戻った際に着た服装なのだが、その服装も今のヘルエスと似たような服装だったのだ。

「にしても、相当やばい服だよねそれ」

「そうですか？ 私はあまり気にしたことはありません」

「ヘルエス美人なんだから、近寄ってくる男も多いだろうに」

「おや、私とその辺の男に負けるんでも？」

「いいや？ 全然思わない、だってその槍捌きが見事なのは俺も知ってるんだし」

「……ああでも……」

「ん？」

「団長殿クラスであれば、負けてしまうかもしれない」

微笑みながら、しかし少しだけ頬を染めながらグランの目を見るヘルエス。当然の事ながら、グランがそれに反応しないわけがないのだ。

「なら後で試すか、もし負けちゃったらそのまま部屋に」

瞬間、グランの座る椅子の僅かな隙間に剣が突き刺さっていた。あと数ミリズレていれば、グランの男部分がぶった切りされていた可能性もある。

「……えー、秩序の人から催促来たので進めていきます」

「おや、残念です」

「というわけで一通目『その格好、子供達や男性諸君には目の毒ですよ姉上』」

「セルエル、相変わらず口が悪い」

「口が悪いのは兎も角として、言ってることは正論だと思う」

何せ露出がすごい。一時期ユエルにも言ったことのあるセリフである。この団には、男女問わず子供がいる。思春期の男子にとって

は、まともに目すら見られないほどのものであり女子からしてみれば価値観が揺らぎかねない。『大人ってこういう格好するんだあ』とか思われたらグランは殺されかねない。

「後ほんとに目をそらすにしろ目を奪うにしろ、意識してしまうのは事実」

「しかし、これ以外の鎧となると……」

「もう水着着ちゃえば？ あっちの方がなんか安心感ある」

ヘルエスの水着。本来、水着とはいつも来てい服よりも露出が高くなるはずなのだが、1部のメンバーは水着の方が露出面積が低くなっている時があるのだ。

主にユエルやヘルエスなどといった、露出過多の人物に言えるのだが。

「しかし、水着だと風邪をひいてしまいますが」

「え、あの鎧着てる方が風邪ひくよ!」

その鎧には暖かくなる魔法でもかけてあるのだろうか、とグランは気になった。というか、それでも無い限りあの格好で風邪を引かないことがそうそうないだろう。

「そうでしょうか?」

「普通はそうなんだよ、ユエルにも同じこと言われたけど……何、2人はいつもの服装実は何かしらの魔法かけられてるの?」

「おえ、そういう訳では……」

「????」

??これ以上2人の衣装に何かしら言うのは、間違いではないのだろうか。グランはそう思えてくるほどには、困惑しきってきた。確かに布の薄さとかを考えれば、水着は風邪をひくかもしれないだろう。だが、それ以上に布面積的に明らかにいつもの格好の方が風邪をひくというものである。

しかし、本人らは特に意識していないのだと考えれば……もうそこはそれで放置していてもいいのかもしれないと、グランは結論づけるのであった。

「……とりあえず、2通目『横からかつさらっていくのはずるいと思う



の！』……え、何の話？」

「おや、クラリス殿でしょうか？」

「なんでクラリス……？」

何故かヘルエスはお便りの主がわかったようだったが、グランにはその内容は特に伝わっていなかった。しかし、深く聞くのは何となく地獄を見そうな気がするので、一旦グランは保留することにしたのだった。

「クラリス殿と言えば……ディアンサ殿からなにか貰っていましたよね？」

「ああうん、貰ってるけど……」

「なにを貰ったのですか？」

「ヤンバルクイナの着ぐるみ」

「……はい？」

「ヤンバルクイナの着ぐるみ、ちなみにディアンサもヤンバルクイナの着ぐるみを着る」

ヘルエスは、訳が分からなくてツツコミが出来なかった。何故ヤンバルクイナなのか、どうしてディアンサも持っているのか。グランとお揃いの格好といえ、恐らくグランサイファアの殆どの女性から羨ましがられる事態である。

しかし、それはヤンバルクイナの着ぐるみなのだ。ヤンバルクイナの着ぐるみでお揃いになったところで、果たして本当に羨ましがられるのか。いや、もしかしたら羨ましがられるのかもしれない。何故ならば、自体の意味不明さよりも羨ましが勝っているからだ。勿論、ヘルエス自身が……である。

「……えっと、因みにそのヤンバルクイナの着ぐるみというのはどういった……」

「これ」

グランはどこから取り出したのか、ヤンバルクイナの着ぐるみを見せる。まず、ヘルエスが抱いたのは『思ってた以上にヤンバルクイナだった』という所である。

というか、最早ヤンバルクイナの生皮をそのまま持ってきたかのよ

うな見た目だった。正直、異質な雰囲気しか漂ってこなかった。

「……その、随分と個性的……ですね……」

「正直自分もそう思う、これ個性の塊すぎる」

「……貰ったのに、理由が？」

「いや……渡されたし、無下に出ないかなって……」

「そう、ですか……」

ヘルエスは目を瞑る。この件は、あまり深く追求すると1人の元巫女の闇を見る羽目になるのが理解出来たからだ。つまり、この件からヘルエスは手を引くことを決めたのである。

「……最後のお便り、お願いしますね」

「3通目『手料理を習ってみてはどうだ、男もなびくだろうに』……誰これ？」

「……スカーサハ様でしょう、まったく……人間のどこに関しては……いえ、私のことに関してはエルバハの様に聞いてきますね……」

「え、何？ エルバハさんになんか聞かれてんの？」

「いえ、私だけに聞けることですので……」

うつすらと頬を赤く染めながら目をそらすヘルエス。グランは首を傾げながらも、本題へと戻していく。

「ところで、料理って出来たり？」

「あくまでも一般人の範疇ですけどね……まだまだ精進しなければなりません」

「師匠は？」

「この団のコック全員ですね、私はもう王女ではありませんが……王女でないからこそ、料理も人並み以上に出来なければなりません」

「最近ハマっている料理は？」

「家庭料理です、主にこちらはローアイン殿から教わっていますね」

「家庭料理……」

エプロンを付けるヘルエスが、グランの脳内で思い描かれていく。普段の格好がよく分からないので、鎧姿の上から思い描いたエプロンを当てはめる。するとどうだろう、ほとんど裸エプロンなことにグランは気がついた。

「なるほどありだと思っただけで、今度目の前で作って貰っていい?」

「……つまり、そういう意味だと受け取ってもらっても?」

「俺は料理を食べたいんであって下心が無いわけじゃないよ、決してない」

「つまりそういう事ですね?」

「そういう事」

噛み合っているようで、噛み合っていない。今ここで実を言うとグランの命運は決まったも同然なのだ。それにグランは気づいていない。

「さて、そろそろ時間です」

「そうですね、時間は守らなければなりません」

「では、皆さんご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょうさようなら」

少々早口で、しかも巻きながら番組を終わらせるグラン。裸エプロンもどきを見るために、その行動はとても早いものだった。そして、ヘルエスもヘルエスで自身の欲望のために動き始めていた。

「どうも、秩序しに来ました」

「げえ! リーシャ!!」

「げえって何ですかげえって」

グランの部屋で、予めリーシャが待ち伏せていた。どうやら、ヘルエスがグランをここまで連れてくることは予想出来ていたようだ。

「リーシャ殿、どうして貴方が彼の部屋に?」

「淫行防止条例違反の気配を感じました、逮捕します」

「ふ……私は止められませんよ」

グランは嫌な予感がしてそくさと部屋を出ていた。『まず狙われるのは自分』という予感がしたからだ。というか、基本的にこういう時に狙われるのは自分だと言うのが彼は1番理解出来ていた。

「逃げるが勝ちさ……！」

「逃がしませんよ」

「同じくです」

「さつきまで睨み合ってた者同士が手を組む速度が早すぎる」

グランは捕縛された。その後、2人のテーブルを挟んだ舌戦をひたすらに眺めながら、明日何をしようかとグランは思考を明後日の方にしかとぼす事が出来なかった。

結論から言うと、グランは特に何もされることなく解放された。思考放棄してたので何を話してたのかは分からないが、少なくとも彼のメリットになるようなことらしいのは確かである。

但し、内容を聞けば恐らくグランは『なんでさせてくれなかったん？』とどこかの異国の言葉混じりで話しながら、ちよつと怒ってる顔でリーシャを見ていたかもしれない。そんなことをすれば、死ぬのは明白なのだが。

『なんでさせてくれなかったん？』

『淫行防止条例違反』

『ギョー』

とテンポよく秩序されてしまうのは分かりきっているのだ。故に、グランは死ななくてよかったね……と自分を言い聞かせておくことしか出来ない。

「でも正直、ヘルエスの裸エプロンは見たい」

と、さらにこの後で漏らした一言から波乱が始まるのだが……それは多分移すことのない本当にただの日常の1枚だろう。

亡国の血脈、お手伝いの必要が？

「今日のゲストはセルエルさんです」

「よろしくお願いします」

「セルエルは前回のヘルエスの弟、というわけで王子な訳だが」

「『元』王子です。その辺を間違えないようお願い致しますね、それと私達が王族だったのは昔の話です。それもきちん和理解して欲しいものです」

「分かって言ってるんで大丈夫大丈夫」

「やれやれ……そんな調子で本当に理解しているのか不思議ですね」

グランの言うことに逐一ダメ出しを入れるセルエル。初めてであつた時と比べれば軟化しているが、相変わらずの口の悪さである。元王子なのにと言うべきなのか、元王子だからこそと言うべきなのか分からないが、性格はひねくれていた。

「前は姉上が少々暴走していたようですね、その辺は謝っておきましよう」

「本当に謝るつもりあるのか、と言いたくなるような謝罪だけども俺自身そこまで気にしてないので、問題なしと扱いますよう」

「出来れば姉上に直接言いたい所なのですが。昨日の間に、その事を言ったら少々荒っぽい特訓が始まってしましまして……直接言うのは諦めました」

「なるほど」

姉弟仲が悪い訳では無いのだろうが、どうにもこの2人は出会う度に何かしらの言い合いをしているような気がするグラン。大体、セルエルが余計なことを言っただけ？ 『いえ？ 何も言っただけ？』までの態度をテンプレでとるので最早日常の一部分と化していた。

「そーいやセルエルってヘルエスと違って露出少ないよね」

「むしろ姉上が見せすぎなのですよ」

「ここで俺の仮説、もしかして2人着る鎧間違っただけ？」

「……その可能性は有り得ません、私の鎧を姉上が着るのならともかく……姉上の鎧を男の私が着ることはまず無いでしょう。スカート

ですよスカート」

「まあそれもそうか」

仮にスカートじゃなかったとしても、ヘルエスの鎧を男が着るのは些か間違っているはずなのだ。だが、セルエルは一瞬その可能性を視野に入れてしまった。入れてしまった上で、否定しているのだ。

「まあそれはそれとして……お便り紹介のコーナー」

「答えれそうなどころだけ答えていきます」

「まあたそう言うこと言う……というわけで一通目『そのひねくれている性格はどちらから来ているのですか』」

「姉上……前回の意趣返しですか」

お便り自体は番組が始まる前ではなく、もっと前に予め回収しているものなので前回だとか前々回となると全く関係ない。つまり、この2人はほとんど同じタイミングでこんなお便りを出しているのだ。「で、どうなの」

「私はひねくれているのではなく、疑り深いだけですよ」

「疑り深いのと口が悪いのはⅡでは繋がらないので、もつと言いつて成立することを言ってください」

「と言われましてもね……私は、気がついたらこうなっていただけなので何も言えませんよ」

「子供の頃どれだけの事があれば、そんな口の悪さになるのか気になる」

初めて会った時、セルエルは1度グラン達の騎空団入りを断っている。理由としては『得体の知れない連中と付き合う気は無い』ということだった。そのあとに皮肉たっぷりのセリフを付けていたので、ひねくれ方は天下一品である。

「私ではなく、環境に問題があるとしても?」

「人を育てるのは環境以外ないだろう。環境関係なくそんなひねくれ方をするというのは、最早逆にすごい」

「結果論ですね、違う過程を経ていたとして……それがどう影響するのかなんてだれも証明できないのですから」

「まあ、それは確かにそうだ……で、結論としてはどうなの」

「姉上が言うようなひねくれ方はしていない、と言うだけです。寧ろ、姉上が純粹過ぎるのですよ。元王女で狙われる理由なんて目に見えているのに、バカ正直に相手をしすぎている。この間の夏の事で嫌な目にあつたのはそれが原因だというのに」

皮肉たつぷりだが、ヘルエスが攫われた時のセルエルは顔を真つ青にしていた。余程心配していたのが手に取るようにわかるのだが、もしかしたら照れ隠しで罵倒を吐いている時もあるのかもしれない。そう考えると、少々可愛く思えてくるグランだった。

「……なんですかその顔」

「セルエルは姉思いのいい弟だと言うのがわかったので、2通目にいきます『エルバハには感謝しているか?』」

「スカーサハ様ですね……つたく……」

「……」

「何か?」

「いやなんでも」

『今のでなんで分かるんだこの人』ということを中心に思ったが、アイルスト特有のものだろうと最早グランは思考することを放棄した。リーシャが音もなく現れるのだから、それくらい不思議はない。

「感謝していませんか? 逆に」

「いやあ、まったく……そもそもエルバハさんに頭上がらないでしょう2人とも」

「ええ、ついでに言うなら3人ですよ」

「……あ、ノイシュカ」

「ええ、エルバハにしてみたら私達3人は彼女の子供も同然だったでしょう……今だ気苦労はかけますが、毎週きちんと手紙は送らせて頂いています」

離れてから毎週となると、既に相当な枚数になりかねないのだがグランはそれも触れないことにした。手紙を送る分には問題は無いからだ。頻度が問題なのだが。

「貴方は手紙を送る相手はいますか?」

「いやあ、住所イスタルシア職業騎空士の父親しか離れてる身内がい

ない俺にそれ聞く?」

「住所イスタルシア」

恐らく間違いではないだろうが、その言葉だけだとイスタルシアがとても近しい物になってしまふ。それでいいのか我らが団長よ、とセルエルは内心だけフォローを入れる。

「まあ……いいや、とりあえず3通目『この団の金銭事情について』削れるところはもっと削った方がいいと思われませんが」

「削れるなら俺だってそうしたい」

「……別段、そこまで目立った大食らいが多い訳でもないのに、人随があまりにも多いせいで食費や食器台、調理道具などのお金で吹き飛んでいきますからね」

「その分みんな稼いでくれてるからありがたい」

「今言った諸々の諸経費だけでどれだけ飛んでいましたか?」

「4桁万ルピ、調理するにも火とか色々使うからそれ関連でもガンガン減る」

「頭が痛くなりますね……グランサイファー大食らい三人衆の見積もりは?」

「ドラフ男性のRは実は1番金を使わない、自分で開いた大会で食っては稼いで寄付とうちの騎空団に回してくれてるから」

「ということは……少女Rと女性Aですか」

「特に女性Aだけ……ウチの騎空団の食費の50分の1を担っている」

「多いのか少ないのかわかりませんね」

恐らく多いのだろうが、食費に関してはグランは基本的に受け入れる体制である。というか、これでも予想してた金額よりも抑えられているという不思議である。

思っているよりも稼げているのか、それとも皆なんとかして食費を抑えてくれているのか。それは謎なのだが、しかし今のところ問題がないのも事実である。

「食費……そう言えば、この団は食費に余裕がある時点で相当な金銭を稼げているのですね」



「ああ確かに、食費もある程度余裕は持たせているし……浮いたお金はまた別のところに回してたりするし……」

「ふむ……これだけ大きな団で崩壊が起きてないのは素晴らしいことですね」

「流石みんなと言うべきか」

「一番すごいのは、それをまとめている貴方ですけどね。これだけの人数をまとめておいて基本的に嫌われないというのは素晴らしい事です」

カリスマ性と言うべきか、何だかんだ皆グランのことを何らかの形で尊敬しているからこそ、ここまで着いてきてくれているのだ。だからこそみんなお金を集めるのに仕事を頑張ってくれているのだ。

「そう言えば、彼女はもうするのですか」

「誰？」

「ラムレッタ殿ですよ」

「ああ」

最近クビにしないで欲しいとか言ってくるのだが、クビにする気こそ無いものの、グランは時折それをチラつかせたくなくなってしまいうような性格になってしまっている。

「多分やろうと思えばやってくれるからいいよ」

「そうですね、あなたがそういうのなら問題は無いのでしよう」

万が一の時は『仕事しないとクビね、後シエロカルテを通じてラムレッタの事話しておくから』という脅しをかければいいや、とグランは思っていた。無論そんなことはする気は無いが、そういう脅しをしてガチ泣きする成人女性を見るのが楽しくなってきた。

「これももうラムレッタに責任とってもらうべきでは？」

「いきなり何を言っているんですか……暑さで頭がやられましたか？」

裸一貫のノースヴァストで頭を冷やしてきますか？」

「もー、セルエル君ったらあ、そんなことしたら凍死しちゃうゾ☆」

セルエルは生まれて初めて親愛なる人に殺意を覚えた、後に語っている。剣を抜かなかっただけ、マシかもしれないとも語っている。ぶっちゃけどつちもどつちである。

「まあいいでしょう、今はあまり気にすることでもありません」

「あ、そうだ……もうそろそろ時間ないから切るけど、最後に一つだけ聞きたいことがある」

「何ですか？」

「ノイシュのことについて」

「そうですねノイシュはまず面倒みがいい事が彼の長所でもあり欠点でもあるでしょう事実私達の面倒を見てくれた時や今現在スカートサハ様の面倒を見ている時はまるで兄や父親のようや面倒みの良さをを見せてくれてますしかし反面その面倒みの良さつまりは人の良さが災いしてあまり人に否定をしないところが欠点とも言えますそれが原因でアイルストが滅ぶことになったわけですがしかし彼の人の良さはそのまま面倒みの良さそして家事スキルの高さに直結してきます彼の入れる紅茶はとても質がいい上に私の舌や姉上の舌などといった人によって好みが変わってくるものを敏感に感じ取ってそれぞれ微妙に違う味付けにしてくるのもまた良きことですそれに彼の焼くお菓子などもまた美味だったりするのでそれを踏まえれば家事スキルは高いと言えるでしょうしかし彼の家事スキルの高さの割には彼自身の味覚はあまりいいものとは言えませんその理由はわかりませんがしかしあの味覚はいずれ矯正するべきだと思っていますですがあれが彼の欠点となつてくるとそれを潰すのは彼の個性の一つを潰すことになるかもしれないと考えたらあまりいい策とは思えませんそれに今の時点でもノイシュは最高だと言わざるを得ないところからして欠点であろうが彼の個性を潰すのはダメなのかもしれないと今私の中で結論が着きました後はノイシュはいつも真面目なところも好感が持てますねたかが遊びだとしても彼はいつでも真面目に取り組んでいるそれでいて子供と遊ぶ時はそれなりに手加減もできるというまさに紳士の鏡とも言えるでしょうとここでまだ語れそうですが時間はありますか？」

「お前ノイシュの話になると饒舌になるよな」

「ノイシュですからね」

「なんかもう色々巻くんで、今日はここでおしまい。皆さん、ご視聴

ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう  
ようなら」

竜騎士、ここは譲れないか？

「今日のゲストはノイシユさんです」

「よろしく願います」

「ノイシユは、前回前々回のセルエルとヘルエスのお二人の騎士兼世話係のようなものだったとか」

「世話係と言っても、お2人とそう年齢は変わりませんよ。実質私の母が世話係をしていました」

ノイシユ、かつてスカーサハの本体……ディアドラを自身の槍で葬ってしまった事があった。そのせいで故郷では魔物達が暴れ、国は滅びてしまう。

今は国は復活しており、王政から議会政へと変わっているのだが……ノイシユは未だにそのことを後悔しているのだ。

「でも今はスカーサハの世話係をするもんね」

「世話係……まあ、確かにそうですね」

「見てたら、親子とかそんな風に見えるよ」

「私には婚姻するような人はいませんけどね」

スカーサハが時折ノイシユと話している女性に嫉妬している時があるが、グランはそれを見る度に内心『結婚したらいいの』とか思っている時がある。まあそもそも、スカーサハを女性としてノイシユが見ることは恐らくないだろうが。

「まあそれはノイシユ自身が見つけるべき相手だから置いとくとして……最近どう？」

「どう、とは？」

「いや、結局この船にイルスト全員集合してる訳だけど……肩身狭くない？」

全員気にしていないとはいえ、ヘルエスやセルエル相手の場合だと自分が滅ぼした国の元王女と元王子。スカーサハに至っては、今でこそ見た目が違うが殺した相手本人である。普通だったら、肩身が狭いどころか相当なストレスがかかるレベルである。

「いえ……全員気にしないでいてくれるので、そこは大丈夫です。」

むしろ、その話題を出すとセルエル様から滅茶苦茶皮肉を言われま  
す」

「ああ、うん……」

セルエルならやりかねない、というかノイシユがアイルストの1度  
滅んだ時の話題を出すと決まってノイシユにその話をするなど釘を  
刺すのだ。セルエルが嫌な気分になる、というのではなくてノイシユ  
が気にして欲しくないためにそう言うのだろう。

「そう言えば、スカーサハは今はどうしてるの？」

「浜辺で遊んでいる、あそこだけを見たら本当に子供なだけだな」

「まあ精神は見た目に引つ張られやすいというし……」

元男のカリオスト口だって、自分が美少女っぽい事をしてる男なの  
だが、お姫様抱っこしたりすると本気で照れるのでそういうものなの  
だろう。スカーサハの場合、元の性別が分からないから影響を受けて  
いると言っているのかどうか不明なところではあるが。

「確かに……」

「まあスカーサハの場合は……」

どちらかと言うと、元からあんな純粹さだったのだろうという理由  
でもグランはあまり気にならなかった。そう、スカーサハ……ディア  
ドラに関しては、彼女自身が尊大な態度をとっているがもしかしたら  
根っこの性格がスカーサハと同じなのかもしれない。

「さて、一旦スカーサハの話は置いておくとして……お便り紹介の  
コーナー」

「私に聞きたいこと、ですか……」

「あ、とりあえず質問にだけ答えて。なんか余計なことまでほじくり  
出してきたら、セルエルの皮肉パーティーが始まるぞ」

「皮肉パーティー……?」

謎の単語にノイシユが首を傾げる中、そんなこと関係ないと言わん  
ばかりにグランは箱の中からお便りを取り出していく。そして、その  
中の1枚を読み上げていく。

「1通目『スカーサハ様との一日の過ごし方』」

「……一日の過ごし方?」

「なんかずっと様子見てるし、実はほとんど一緒にいない？　なら一日の動向を探ってみようぜ！　みたいな考えなんじゃない？」  
「なるほど……では僭越ながら」

紙にサラサラと書き込んでいくノイシユ。その光景をグランはじつと見つめながら、ただ待つだけだった。そして、ようやく描ききったのか、グランの方にノイシユはその紙を渡す。

「えーつとなになに……？」

「まず朝、私がスカーサハの部屋に入って起こしに行くんだ」

「一緒に寝てないんだ」

「セルエル様にはそう言われたのですが……ヘルエス様から『流石にそこまでしなくていい』と言われました。スカーサハからもそこまで心配しなくていい、と」

そこは別にいいのだが、グラン的には一緒に寝てる2人を頭の中に思い浮かべながら、その父親と娘のスキンシップのような状態をすごく納得したかのような表情で頷きながら、心が熱くなっていた。

「……？」

「……さて、次は飯の時の話で」

「朝ごはんは基本的に一緒に、スカーサハはよく口元を汚すから拭いてあげている時が多いですね」

「やっぱり子供なのでは？　と思わなくもないグラン。だが、人間の体を作ってからあまり時間も経っていないのだから、ある意味子供とも言える。それに、アイルストの一件以来子供っぽさはますます磨かれていくのも事実である。」

「最近食器の使い方はどうなの？」

「ちゃんとした持ち方を教えているつもりだが、やはりまだ慣れないのか握って持つということが多いな。最近は箸の使い方も習おうとしてはいるが、やはりまだ難しいらしい」  
「……」

もう子供以外の何物でもない気がする、グランは確信を得始めている。今度からスカーサハをまともな目で見れる自信がなかった。出会った頭、持っていたお菓子を渡すくらいには子供扱いしてしまっ

うである。

「さつきも言ったけど、やっぱり精神が見た目に引きずられてるんじゃない……」

「有り得なくもないな……スカーサハと本体であるディアドラ様は存在が少し異なるようだしな……意識の共有はあれど、精神的なものがどこか違うのかもしれない」

「精神的なものねえ……」

やはり肉体というものはどれにおいても基盤になるのかもしれないと、グランは心の中で頷いていた。

「とりあえず、次は……風呂と睡眠時」

「お風呂はヘルエス様に任せてある……基本的な睡眠時は少し挨拶をする程度だ」

「まあさすがに風呂はね……」

元が性別不詳とはいえ、今はただの無茶苦茶強い幼女のエルーンである。そんなのでもし一緒に風呂に入ろうと言うのであれば、秩序が飛んできて秩序を行って秩序するだけであろう。

「にしても……いつも一緒にいるイメージだけど……」

「食事の時くらい……というのが答えな訳で……」

「ふむ……なるほど理解出来た。では二通目に移ろう『夏の時に水着らしい水着を着ていなかったのはどうして?』」

「あまりはしゃぐのも……と考えてしまっていて……私があそこまで薄着なのも珍しい気がするんですけどね」

ノイシユの格好は水着とは銘打っているが、傍から見たらラフな格好にしか見えない。恐らくきちんとした水着なのだろうが、彼自身ヘルエスやセルエルの護衛という所もあるために普段着にも使えそうな服にしてあるのだろう。

「まあいいんじゃない? 薄着でも水着は水着なんだし……」

「団長殿にそう言って貰えるなら、まだいい方か……」

別段、水着と言ってもわざわざ服装をまるっと変えろと言っている訳では無いのだ。実際、水着のリルルはいつもの服装がほんの少し水着っぽくなっているだけなのだから。

「まあ珍しいのは珍しいと思うけどね」

「やはりか……」

「まあそのへんは気にしなくていいと思うよ」

「そうか……」

「というわけで速攻の3通目『もしヘルエスとセルエルが、好意を寄せ  
る相手を作っていたらどうする?』」

「いや、セルエル様はともかくヘルエス様は……」

ノイシユはそれ以上言葉を続けなかった。自分で言うよりかは、ヘルエスの口から直接言わせた方がいいと判断したからだ。だがはつきり言うと、傍から見たらまるつきりわかりやすいので直接言うもなにも普通はありえないのだが。

「セルエルはともかく……言葉よ」

「いや、別に他意はないのだが……しかし、セルエル様が好意を持つ人物というのはあまり想像できなくて……」

「それは分かる」

セルエルがそういった人物を作っているのは、グランも想像がつかなかった。というか、ノイシユのことばかり褒めているのでぶっちゃけ異性にあまり興味が無いのではないだろうか、とさえ思えてくるのだ。なにせ、昔から姉のヘルエスに振り回されているのだから。

「よくいえば仕事人間だよね」

「しかし、休暇の時は休暇を楽しもうとする余裕をきちんと持っておられた。そこは流石だと感服する所だ」

「……ノイシユもノイシユで割と大概だよね」

ヘルエスとセルエルの事になると、ノイシユは結構褒める。勿論否定や何かしらの意見を出すこともあるが、だいたい褒めている。褒めちぎっている。スカーサハは教育のために割りといけないことは怒るので、別である。

「でもヘルエスってたまに子供っぽいところあるよね」

「団長殿的には、ヘルエス様のような性格の女性はどう思われる?」

「ギャップがあるから、水着の時とかのプライベートとかだと可愛く見えるよね」



それ以上にグランは胸囲と露出度に目がいつてしまうのがオチなのだが。それを口に出すほど野暮ではないのだ。

「ふむ……つまりヘルエス様は異性としては？」

「ありじゃない人なんているの？ あとさノイシユ」

「ん？」

「この団の女性陣レベル高いから……」

「ああ……」

納得するノイシユ。ヘルエスだけとは言わず、確かにグランサイファーに乗り込んでいる女性陣のレベルはかなり高い。ヘルエスだけを女性として見ているかという質問は、かなり意味をなさないとも言える。

「……ま、とりあえずヘルエスはともかくとしてセルエルは女性を隣に置くイメージがないという事で」

「しかしなぜそんなイメージがついているのか……」

主にお前のせいだと思うぞ、という言葉は言わないでおくグラン。言っても言わなくても大して変わらない気がするからだ。セルエルがノイシユのことを好きすぎるのがいけない。

「まあ、とりあえず本日はここまでとなります。皆さんご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょうさようなら」

「おいノイシユ」

「なんだスカーサハ」

「箸がまだ使いづらい、フォークを出して欲しい」

「自分で取りに行けるんじゃないのか？ 前は取りに行ってただろう」

「……背が足りんだ」

とある日食堂にて。グランはスカーサハとノイシユを見つけてその光景を眺めていた。ほんとあの親子や年の離れた兄弟の感じがする2人を眺めながら、微笑ましそうにグランは眺めていた。

「……団長さん、何してるんですか」

「幼女とその保護者を眺めてる」

「事案ですか？」

「事案じゃない事案じゃない」

リーシヤが出てきて少しだけ大変なことになっていたが、グランは気にせず眺めていた。その結果、グランはリーシヤに連れていかれて2人を眺めることが出来なくなっていたが、自業自得というものだろう。

「おいノイシユ、水が重くて注げん」

「わかったわかった……注いでやるから」

……この光景を眺めるのは、グラン以外にもいるのだがそれはまたべつのはなしである。

護国真龍、真龍の名伊達ではないぞ？

「今日のゲストはスカーサハさんです」

「よろしく頼む」

「こう見えてもスカーサハは俺らより年上なんでね。まあセルエルとかノイシュよりも年上だけど」

「しかし、この姿の吾を敬うのもおかしкаろう……今まで通りで構わん」

「やったぜ……というわけで、一つ気になっていたことが」

「何だ？」

可愛らしいその顔を傾げながら、スカーサハはグランの顔を少しだけ見上げていた。ロリコンならば一撃で殺せる顔である、グランも今のはなかなか危なかった。

「今のその体、今だこの船に乗ったりするための端末だとかなんとか……」

「ああ、その通りだ。この体はヘルエスが自身の魔力で作ってくれたのだが……それがどうかしたか？」

「それってヘルエスがお母さんみたいなもの？」

「……ふむ、確かに。ヘルエスから生まれたのだから、吾はヘルエスの子か……いや正確にはこの体の時の吾、か」

「お父さんって誰になるのか」

まるで雷でも落ちたかのような衝撃を受けるスカーサハ。そういうことを考えたこと無かったのか、冗談で言っただけつもりなのに思っていた以上に真面目な受け取られてしまいグランは内心困惑してしまふ。

「父親、か……確かにどうなるのだこれは……」

「ノイシュとか？」

「いや、あやつはヘルエスと契りを結んだなどということとは出来まい。ヘルエスに対して忠義はあるが、恋愛対象としては見ておらんはずだ」

「じゃあセルエル」

「論外だろう、血縁関係のあるもの同士ではいくらあやつらとて遠慮してしまいかねん」

「じゃあ一体……」

「お前だろうな、グラン」

「ほう、俺が」

グランは目を輝かせる。ヘルエスの伴侶に自分が選ばれるというのは、彼の中ではなかなかありえない話なのだが……しかし新妻ヘルエスという単語にどうも心が突き動かされてしまっていた。

「……ありだ」

「そうかそうか、気に入ってもらえて何よりだ」

「さて、俺の英気も養われたところで……質問便りのコーナー。1通目『ディアドラとスカーサハの関係を改めて教えて欲しい』」

「ふむ、仕方ないな。説明しよう」

「わーい」

雰囲気を出すためか、スカーサハは足を組みかえてから話をし始める。小さいが、言葉遣いは大人のそのため妙な色気が出ているがグランは自身を律していた。ここで本気でセクハラしたら死である。

「まず、今ここで起きている吾の意識は真龍ディアドラと同一だ。だが、真龍ディアドラが眠っている間のみ吾はここで起きていることができる……それは理解できるな？」

「まあ精神が同一なら、同じ時間帯に起きてるなんて不可能だしね」

「そう、そして逆もまた然り……という訳だ」

「それって意識的にはずっと起きてるってこと？」

「そうなるな……しかしあまり問題ではない。吾の精神は普通の人間とは違う、永続的に起きていて精神が摩耗する……ということとはあまりないからな」

「それすごいな……」

真龍ディアドラが寝ればスカーサハが、スカーサハが寝れば真龍ディアドラが……と言ったふうに体だけが交代しているのだ。アイルスト王国で何かあった際は、これを使えばいきなりアイルストにくようなものなのだから、ある意味で便利ではあるのだが。

「けど、そんなにポンポン体を変えて大丈夫なの？」

「何がだ？」

「急に体の操作が変わったりして、戸惑ったりしない？」

「ふ……それこそ杞憂よ。吾は既にこの体の操作を完全に把握している。まだ細かい操作を求めるものは難しいかもしれないが、一人暮らしなら既に可能となっている」

「へえ、一人暮らし」

「そうだ」

自信満々に告げるスカーサハだったが、それをヘルエス達が認めるとはグランは到底思えなかった。単純に真龍を1人にするというのは具の骨頂なのだが、それ以上に体裁が悪すぎるのだ。

「まあやるにしても一定期間だけね」

「何だど!? それでは人の子の営みを理解出来んではないか！」

「営みを理解するのはいいけど、そのからだで怪我した場合一人暮らしだと、誰も気づけない可能性高いしね」

「怪我程度で喚かんど？」

「自分一人で治療が難しいものもあるしね……人間でも、一人暮らしって実はあんまり向かないような気がするよ」

「そういうものか……」

「案外、そういうものだったりするんだよ。人間っていうのは」

「ふむ、安易な一人暮らしは危険……か……」

納得してるスカーサハだが、どちらにしても彼女が一人暮らしすることになったらヘルエスやノイシュが許すことはないだろう。セルエルはどっちでもいいと言いかねないが。

「話ズレてきたし2通目行こっか」

「そうだな」

『『ノイシュのことをどう思っているか』』

「……うーむ」

少し考え始めるスカーサハ。スカーサハという立場にしては、おそらく好意的に見れるのであるが、真龍ディアドラの立場であれば赦したとはいえノイシュに1度殺されているということもある。

だからこそどう答えたらいいのか分からない……とグランはそう  
思っただけで悩んでいるのだと考えていた。

「……やっぱり答えは複雑？」

「……いや、それでも無い。しかし、どう言葉で表したらいいのかかわか  
らん」

「とうとうと？」

「こう、一緒にいると安心する気持ちはあるが……落ち着く、と言うべ  
きか？」

「……ドキドキとかは」

「ないな、ノイシュと一緒にいて動悸がすると言ったようなことは無  
い……だが、ノイシュが吾を放置して他の事をしていたら妙に腹が立  
つ」

グランは確信した。『これ親扱いだな』と。まあ仮にスカーサハが  
ノイシュに惚れていたとしても、見た目年齢的な意味で付き合うのは  
難しいだろう。

それに、ノイシュがスカーサハを異性としてみてくれるかどうか微  
妙なところだが。

「身内として認識してるんだね」

「……？ まあ、身内だからな」

「ああいや、単純に親とか年上の兄弟とか……そういった家族みたい  
な関係に落ち着いているってこと」

「なるほど……確かに、寝食を共にしていれば吾も意識しないうちに  
それなりに懐いてしまっていた……か……」

「そういう事そういう事」

納得したのか、それとも出来ていないのかは分からないが、表情一  
つ変えないままスカーサハは返事をしていった。悪くは感じていない  
ようだから、大丈夫だとグランは判断をしていた。

「では3通目『人間のその格好になって思ったこと』」

「スースーする」

「だろうね」

スカーサハの人間としての体は、エルーンである。エルーンである

以上脇と背中は見せる服装になるのだが……前部分しか布地が無いために、スカーサハの服装は実は結構危ないものになっている。

それに加えて、真龍ディアドラとしての姿の時はそれはもうモツサモサなのだ。毛が大量にあるので、そこからいきなり人間の体……そして背中と脇と横腹を見せる服装ともなればスースーするだろう。

「だが……どうにもここを開けてないと落ち着かんだ」

「もうそれはエルーンの性としか言いようがないから……我慢するしかない」

「だが、こんな格好をしていて大丈夫なのか？」

「何が？」

「世の中には、未成熟な子供に発情する人間がいるのだろうか？ 吾は気にせんが、エルーン族の幼子がみなこのような格好しては、そのような人物に餌を分け与えることになりかねんが」

「そういう人は秩序されるから大丈夫大丈夫」

暇な時に本を読んでいて、そんな知識を身につけたのだろう。しかしよくよく考えてみれば、成熟しても背が小さいハーヴェインやドラフがいるのだから、そんな知識は案外身についてしまうのかもしれない。

グランはそんなことは無いので特に考えようとはしないのだが。

「しかし、これでもヘルエスよりはマシ……なのだな」

「あれはもうある意味エルーンの極地だから」

ユエルのもそうなんじゃね？ という話なのだが、どっちも『どうやってその服くつついてんの』という人物なのだから、どちらでも問題は無いのだ。

「そうか、エルーンの極地なのか……吾も目指すべきか？」

「目指した途端多分俺かノイシユ当たりがリーシヤに殺られる」

そんなの目ざしてしまうと、恐らく色んなところで被害者が出るだろう。女性エルーンの服は、それだけ刺激的なのだ。特にユエルやヘルエスは目指しては行けない所である。

「さて、少し早いですけど今日はもうまとめに入るとしましょう」

「む、もう終わりか」

「そういう事そういう事」

「致し方なし、か……」

「では皆さんご視聴ありがとうございます、また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「そういえば前から気になってたけど、身支度って誰がしてくれてるの」

「着替えはヘルエス、それ以外はノイシユだ。ノイシユには髪をといてもらっている」

まあそりゃあそうかと、グランは納得していた。自分である程度できるようだが、世話焼き2人で世話を焼いてくれているようだ。

「だが、ノイシユは髪を結ぶのはいいが吾を放置する時がある」「放置?」

「吾と一緒に遊べと言っても、遊ばん時が多い……」

子供みたいな嫉妬してるのが、グランはとても可愛いと思えた。ノイシユの時にも言っていた子供っぽさに引かれているというのは、あながち間違いではないのかもしれない。

「まあまあ、ノイシユだって忙しいわけだし」

「それは分かっている、人間の事情も考えねばいけないというのは吾も理解している」

「けど感情は別?」

「うむ」

知識を得まくってるけど、精神的には本当に子供のようだと言



は思っていた。いや、もしかしたら真龍ディアドラとしてのスカーサハも寂しいと思う時があったのかもしれない。

「……ま、甘えられるときに甘えたらいいと思うよ」

「……ああ、分かっている」

今でこそエルーンとしての体を得ているが、スカーサハの体はあくまでも真龍ディアドラの力が入っている。それ故に、成長もしなければ寿命で死ぬこともない。

甘えられる今だからこそ、存分に甘えておかないと……グランもスカーサハもそう思っている。

「よし、今からノイシュのところに行こう」

「い、今からか？」

「善は急げと言おうし！ 行くぞ行くぞー！」

グランはスカーサハを担いで猛ダツシュでノイシュの部屋へと向かっていく。スカーサハはされるがままだが、そのまま引っ張られていくことに、特に抵抗はしなかった。

「ノイシュー！」

「うわっ!? 団長殿!？」

「スカーサハと遊べ！ 団長命令だ！ 以上！」

スカーサハを下ろして、軽く挨拶をして、グランは来た時と同じように高速で部屋から出ていく。残されたノイシュとスカーサハは少しの間黙りあいを続けていたが……

「ノイシュ、遊べ」

「……いや、別に構わないが……どうしたんだ急に」

「遊んで欲しいだけだ、遊べ」

「……全く、仕方ないな。少しだけだぞ？」

「ああー！」

こうしてスカーサハとノイシュは飯の間までずっと遊んでいることとなった。ちなみに、ちゃんとノイシュはやること終わらせていたのをグランは知っているの、なんら問題はなかったのである。

## アイルスト一念発起

「ええい少し待て!!」

「駄目です！ 今行かなければダメなのです!!」

「朝から何事ですか、姉上。気でも狂いましたか？」

「セルエル、今は貴方の卑屈な言葉に付き合うつもりは無いです」

「スカーサハ、これは一体どういう事だ？」

朝から騒ぐヘルエスとスカーサハ。そこにセルエルとノイシュが現れて、とりあえず獅子のごとき気迫のヘルエスを止めにかかる。しかし、事情がよく分からないので一旦初めから居たスカーサハにノイシュは尋ねていた。

「ヘルエスがグランの部屋に行くと言って聞かん」

「姉上、いまはまだ誰も起きていないような朝ですよ？」

「いえ、だからこそですよ!!」

「なんです？ まさか団長殿の寝顔でも拝みに行くつもりですか？」

「その通りです」

「……セルエルさまが見た事ないような表情をしていらっしやる……」

心底呆れて何も言えなくなったセルエル。朝から起こされて微妙に機嫌が悪いのに、姉の恋路というセルエルにとっては基本的に関わらないでいる問題に首を突っ込まれてしまったのだから仕方ないのだが。

「姉上、朝から覗きに行けば団長殿に嫌われますよ」

「……セルエル、今の言葉をもう一度」

「嫌われますよ」

真つ青な顔を始めるヘルエス。グランに嫌われるのだけは、どうしても耐え難いもののである。それに気づいたセルエルは、更に姉を止めるために追い打ちをかけていく。

「なぜその考えに至らなかつたのです。たとえ姉上と団長殿が交際関係にあったとしても、その行為はかなりの迷惑行為です。朝自分が寝ている時は、基本的に自分で起きたいものです……しかし今の時間は

「どうですか、ノイシュ」

「そうですね……少なくともまだ私ですら起きていない時間です」

「そういうことですよ、姉上。ノイシュですら起きていない時間……つまりそれは誰一人として起きていない時間もいい所なのです」

「はい……」

「そんな時に起こされて見てください、きっと団長殿は姉上を睨むか軽蔑するか蔑むでしょうね」

「うっ……」

追撃に追撃を重ねていく。完全に意気消沈したのを確認してから、セルエルは改めて本題に入る。どうして、今までこんなことをしていなかったヘルエスがこのような暴走をしたのかという話だ。

「それで？　こうなった原因は？」

「先程まで、誰かと飲んでいたようだな」

「それで酔った姉上が特攻しようとしていたという訳ですか……」

「それで、飲んでいた面子は？」

「……ナルメア、アルルメイヤ、シルヴァの3人のようだ」

「はあ……」

そのメンツ、何を話していたのかセルエルはきっちり理解が出来ていた。恐らく、結婚だとかグランの話だとかで盛り上がっていたのだろうということとは想像に難くないと言ったところだろうか。

「……今度から、その面子……ないし似たような境遇の女性達では飲ませないようにしましょう」

「む？　何故だ？」

「人間はとある年齢になつてくると、結婚を妙に急ぎ始めるんですよ。そして、酔っ払うとそのタガが外れて既成事実を作り出そうと躍起になるのです」

「ほう、そうだったのか。あまりそういうものにヘルエスは興味を持つことは無いと思っていたが……」

「姉上も人の子です。恋愛感情を持つことはありますし、その人物と結ばれたいという思いもあるでしょう……そうなれば、酒の力さえあれば簡単に暴走するのが、今の姉上です」

「……セルエル様」

先程から考え事をしていたノイシユ、ようやく口を開いたら何やら神妙な顔つきとなつてゐる。セルエルは妙に嫌な予感を感じながらも、ノイシユから話を聞くこととなつた。

「……ノイシユ、どうしたんです」

「……もしかして、他の面子も暴走しているのでは……」

「1番厄介なのは、ナルメア殿ですね……あの動き方は私達ではとても追えない」

即座に頭の中で対策を考えるセルエル。1番物理的に厄介なのはナルメア、そして捕まえるのが厄介なのがアルルメイヤである。ナルメアは蝶になれる。なつてしまえば例えば十天衆であつても手を焼くほどと言われている。

そしてアルルメイヤ、彼女は予知ができる。それだけで既に厄介なことこの上ないのだ。

「それと、アルルメイヤ殿もですね……」

「……いや、3人という所がミソだろうシルヴァが2人を囷にしてくる可能性も高い」

事の重大さを理解したのか、スカーサハも、真面目な顔をして2人の話し合いに参加していた。恐らく、グランの所には暴走した3人が向かつてゐるだろう。そして、全員止めなければ……グランの色んなものが危ないと思われる。

「ともかく、これから行われるのは団長殿の死守です。死ぬ気で守るようにしましょう」

「では、吾はグランの部屋で待とう」

「部屋で？」

「部屋の前にいても、アルルメイヤは恐らくそれすらも予知してくるだろう。ならばグランの部屋の窓から侵入されるより、グランの部屋にいた方が安全というものだ」

「なるほど、確かに合理的ですね」

こうして、最後の砦としてスカーサハが配置される。では部屋の前には誰も置かないべきか？ と考えたが、現状3人しかいない上に朝

なのでできる限り起こさない方がいいのだ。

あと、ほかの女性陣を起こして仲間にしようものなら、血みどろの嫉妬合戦が行われるような気が、セルエルはしてならなかったのだ。

「では、私達2人で捜索ですか？」

「いいえ、3人です」

「……驚かせてきますね、ジャミル殿」

グランいるところジャミルあり、グランの危機にいつもの仮眠を終わらせて、ジャミルは3人の所へとやってきていた。

「3人で捜索……悪くないですね」

「特にジャミル殿は気配の消し方がプロだ。簡単に相手の背後を取ることができるとしようね」

「お褒めに預かり恐悦至極」

「では、この3人で団長殿をお守りすると致しましょう」

「はい！」

「はっ!!」

「ふ……既に予知で全てが見えているさ……だからこそ、私は……」

「予知で本当に見ていたのですか？」

「恐らく酔ってしまっているからまともに頭が働いて居ないのでしよう、フラフラでしたし」

グランの部屋の前で、軽く縛られたアルルメイヤがちよこんと座り込んでいた。その顔は紅潮しており、どう考えても結構酔っている感じである。先程から妙に会話が成立していなかったので、相当なもの

だろう。

しかし、グランのところに向かっているのは変わらない。よって捕獲したのである。

「さて、残りはシルヴァ殿とナルメア殿のお2人ですね」

「この調子なら、他2人も酔って実力を出せないかもしれませんね」

「だといいいのですが……」

妙に不安になるセルエル。酔って重心がズレるシルヴァは兎も角、酔拳というものがある以上、近接戦闘のナルメアはあまり弱体化に期待できない気がしているのだ。

「ぬお!？」

そして、グランの部屋から窓の割れる音が響いてくる。どうやら、外側から侵入してきた人物がいたようだ。しかし、それは既に予測済みである。

「ノイシュ、貴方はここにいなさい。私が中に入ります」

「了解致しました」

一旦セルエルは部屋の中に入る。そこではフラフラになっているナルメアが部屋の中に入っていた。

「グランちゃんグランちゃんグランちゃん……」

「セルエル！ 吾は初めて人間に恐怖を抱いたぞ!!」

「これは私でも怖いですね、下手なホラー小説よりも奇怪で恐怖です」

ひたすらにグランの名前を連呼するナルメアに、スカーサハとセルエルは青い顔になっていた。どうやって捕まえるか、それを必死で模索する2人だったが……

「きやつ」

動こうとした瞬間に躓き、得物である刀が床に刺さり、結構深い所まで刺さった刀の柄に頭をぶつけ、その当たりどころが悪かったのかナルメアはそのまま気絶してしまうのであった。

「……今のは……」

「自爆ですね」

「セルエル様、少しよろしいでしょうか」

「どうかしましたか？」

「あれを……」

部屋の外から声をかけるノイシユ。セルエルはノイシユの指さすところに視線を向ける。ついでにスカーサハも視線を向ける。指がさしている所は廊下の角なのだが……

「……」

「……あれは、シルヴァ殿ですか？　なぜこちらに飛び込んでこない、もしくは狙撃しないのでしょうか」

「……そうか、シルヴァは照れているのだ。酔っていても、グランの部屋に潜入するといった事は、乙女のあやつにできることではなかったということだな」

スカーサハが推理を披露する。確かに言われてみたらその通りなのだが、酔っていてもそれとは進展させる気はあるのだろうかと言わざるを得ないのだ。

「しかし、来ないのなら好都合です。彼女たちを部屋に返して私たちの仕事は終わりですね」

「じゃの……む？」

「スカーサハ？　どうした？」

「……嫌な予感がする、構えろ」

スカーサハに言われて構えるノイシユとセルエル。通路は一本、つまり左右の両方を警戒しているのだが……スカーサハの予感通り、『それら』は一気に来た。

「なんだあの大量の女性たちは……!？」

「やはりな……」

「知っているのかスカーサハ！」

「いや知らんよ……だが、予想はできる」

「予想？　この状況に対して一体何の……まさか……!？」

目を見開くセルエル。その顔はなにかを察したようであり、スカーサハもそれに対して頷いていた。

「あの女達は……全員グランの部屋に入るつもりだ」

「馬鹿な……まさか、団内の殆どの女性が飲んでいると……?!」

「いや、シラフも何人かいるみたいだが……しかし、全員止めねばグラ

ンサイファーは色んな意味で壊滅するぞ」

グラン戦闘不能、そして女性陣達も戦闘不能最悪戦闘不可能状態になってしまえば、戦力も資金も何もかもが足らなくなってしまう。それだけは避けなければならぬ。

「それは確かに……」

「しかし、こんな時にこそリーシャ殿が必要なのに……一体どこに……？」

「リーシャとモニカならあっち側だぞ」

「秩序の騎空団が何たるザマですか……」

酔った2人はもれなく秩序ではなく、痴女側だということが判明した瞬間である。セルエルは大きめのため息をついてから、構えていた。

「ノイシュ、ここが正念場ですよ」

「はい!!」

「にしてもクラリスまで飲んでいるとは……1度この団のお酒状況を調べなければな」

「だな……」

「あー、よく寝た……なにしてんの3人とも」

「全く……あれだけ騒いでたのに何故起きないんですか」

「団長殿、大丈夫か？」

「いや俺は大丈夫だけ……」



「殆どの団内の女達が粗相をしてな、少しばかり処罰を加えていたところだ」

「……？　そ、そう……リーシャは？　まさか起こした側？」

「もれなくモニカまでついてきている」

「何が起こったかは分からないけど……ありがとう、3人とも」

グランは事情を後で聞くことになるのだが、セルエルは終始呆れた顔をしていた。ひとまず、酔っていた団員は気絶させてシラフの団員は厳重注意で終わらせていた。

だが、いつまたこういうことが起こるかわからないので、騎空艇内での飲酒はラードウガのみになるということ、島での飲酒をした場合はその島で一夜を明かす事、グランの部屋がとんでもなく厳重な装備になった……という結果になったのであった。

海に咲く五花、みんな準備はいい？

「今日のゲストは巫女の1人ディアンサさんです」

「よろしくお願ひします……って私一人なんだ」

「と言うと？」

「ローアインさんは3人だったし……てつきり5人1緒にやるものかと……」

「巫女は特別ということだ」

ぶつちやけ仲間として入ってるのはディアンサなのと、巫女稼業忙しいのに全員誘うのはきついというのと、5人もいたら絶対にまとまらないというグランの判断の元行われていることである。

「にしても……私一応祭司見習いということなんだけど、やって良かったの？」

「それ言ったらシロウやロボミも出てるからなあ……あんまり気にしないでいけるって」

「だったらいいんだけど……」

「実際、ディアンサ1人だけやるならって感じだし……」

「あ、あはは……」

ディアンサ、元々シヨチトル島の巫女の1人である。しかし、巫女はとある年齢を超えたら卒業するものであり、ディアンサも例外ではなかった。実際、卒業したのだが……その島の星晶獣シヨロトルがディアンサを呼んではライブに参加させているのだ。

おかげで、ディアンサは巫女を卒業してもよく巫女をしているというよく分からないことになっている。

「いやあ、シヨロトルの事件は大変だったね」

「確かにあの事件は大変でしたね……」

「みんな仲良くしないとね、うん」

「そうですね」

「そういえばディアンサはクラリスと面識あったっけ？」

「クラリス？ うん、友達付き合っていてくれてるよ」

ちなみに、ディアンサは今年のバレンタインの際にグランに『好き』

だと伝えている。対してクラリスは、その気持ちを伝えることなく『デートしよう』で終わってしまったている。

ディアンサの方が遙か先をいつているのだが、グランは敢えてスルーしていた。そういう話は、受けたら負けな時があるのだ。

「そっか、まあ仲良くやれているなら良かったよ」

「うん！」

「という訳で、お便りのコーナー。1通目から行きましょう『なんでヤンバルクイナなんですか』」

「アウギユステで見かけて……可愛いなあって思ってた……それで、つい」

「ついであれを着せられてたのか俺」

ヤンバルクイナの衣装、というか着ぐるみ。不思議な技術によりヤンバルクイナとほぼ同サイズになる謎の着ぐるみ。確かに可愛いといえどそうなのだが、グランからしたらもっと何かあったのではないだろうか……と思えてしまったてしようがないのだ。

「すごい技術だよねあの着ぐるみ」

「すごいって言うか、あれ来ると自分がなんなのか問う時がある」

「でも団長さん」

「はい」

「他にもいろいろ着てるしそんなものなんじゃあ……」

「確かに」

壊獣になったり、他の人物に成り代わったりしてるので、よくよく考えてみたら確かにその通りなのだ。最近他の人物に完全になりきることを覚えたので、その点を言われるとグランは何も言えなくなってしまう。

「まああの服きて面白いことしちゃったけどさ」

「面白いこと……あ……もしかしてあれ？ ベスちゃんと猫ちゃんと一緒に船の中を歩き回った……」

「そうそう」

拾ってきた猫、ベス、そしてヤンバルクイナを着込んだグランとディアンサの4人で、グランサイファー内を歩き回ったこともある。

団員は微笑ましそうにみていたが、実際は猫とベスを除けば完全な  
ディアンサとグランのデートである。

「団長さん的にはどうなの？」

「何が？」

「ヤンバルクイナ」

「いや、可愛いとは思うけどね？　可愛いとは思うけど、なんであの着  
ぐるみにしたのかだけすごく引つかる。理由説明されてもまだな  
おひっかかる」

「そ、そんなに？」

「そんなに」

実際ヤンバルクイナじゃなくてもいいので、本気でグランは疑問に  
思っているのだ。疑問というか、違和感というかそのようなものであ  
る。

「ま、まあいいや……これ以上話しているとヤンバルクイナで会話が  
ループしそうだし……」

「そ、そうだね……」

「という訳で、ヤンバルクイナの話はここでおしまい！　2通目に行  
きましょう『船から巫女達のところに戻る頻度はどのくらいですか  
？』」

「あんまり多くないかなあ……今はもう季節でのイベントの時だけだ  
から……」

「夏、クリスマス、年明け……くらいかな？」

「だいたいそんな所かも……まあ一応卒業した身だしね」

「まあ、それもそうか……」

シヨロトルが全てなので、シヨロトルが認める限りは巫女であり続  
けられると言ったところだろう。どこかの企業の社長のようである。

「……社長型星晶獣シヨロトル……」

「え、今何か言った？」

「いや何も言ってないよ」

「そ、そう……」

「そう言えば、巫女……というか歌って踊れる繋がりでリルルとよく

絡んでるよね」

「お互いに刺激されることもあるから……」

リルル、ハーヴェインのアイドルである。そのアイドルとしての魅力は凄まじく、あまりアイドルに興味がなかったものでもその歌やダンスに魅了されてファンになることもしばしばあるという。

「他にそういう繋がりで喋ったりする人いる？」

「繋がり、というか……私もそういうのができるようになりたい！」

「って子供達から言われることはあるよ」

「ああ、そう言えばヤイアとかアルドラにそう言われてたっけ」

ヤイアはともかくとして、アルドラは父親のアギエルバがアイドルの道で反対するかどうか苦悶してたのがグランは印象的だった。

とは言ってもアイドルになったアルドラは可愛いけど、その可愛さを他の男に見られるのは断固反対という親心から来ているものなのだが。

「ああ、リルルさんみたいなアイドルじゃなくて……エルタさんとかと一緒にすることもあるよ」

「ん？ どうして？」

「あの人達が弾いた曲に合わせて、私が歌う……と言ったものなんだけどね」

「ああ、なるほど」

確かに、リルルやディアンサなら歌うには適しているだろう。イメージとしたらキャピキャピとした歌のイメージがあるかもしれないが、2人は1一応大人しいというかスローテンポの綺麗な歌も歌えるのだ。

「……アイドル、それを綺麗や可愛いと思う子供達、そして音楽隊……まあ見事にアイドルに関係するものばかりだね」

「だ、駄目かな？」

「んにゃ、駄目じゃない。自分の特色を伸ばすのはとてもいい事だしね……これからもアイドルというか、巫女稼業頑張っていこう」

「は、はいー」

「という話のオチも着いたところで3通目『まだディアンサ派のイク

ニアさん達はいるんですか？」

シヨチトル島の巫女というのは、それぞれがファン……イクニアというものがある。それぞれ誰が推しかを感じ取り、ただひたすらにその少女を応援するというものである。

ライブの際には、トレピリというそれぞれの巫女の色に光る棒を振ったりして、自分が誰が推しなのかをアピールしたりする。因みに、自然と直感的に合いの手を入れられるようになったり、ダンスが練習もしてないのに一致団結したりとすることもあるので、チームワークがどこもかなりレベルが高かったりする。

「うん、まだ私を応援してくれて……すごく嬉しいよ」

「しかし……ふと思っただが」

「どうしたの？」

「今までは卒業したら新しい巫女が入ってきたわけで……けど今デイアンサがいるから、5人揃ったままなわけで……新しい巫女も告げられてない……大丈夫なのかなこれ」

「う、うーん……シヨロトル様のお告げだから……」

やはりどこかの企業の社長なのだろうか、とグランは悶悶と考えていた。別にグランが考えることではないのだが、ディアンサ派のイクニア達も今では一応『元』のつく身である。

「まあ……全てはシヨロトルの導きだし……そういうものか……」

「そういうものなんだよねえ……」

「……でも確かシヨロトルって、細かいニュアンス伝えるのめっちゃ苦手じゃなかったっけ」

「そうだよ？ 人の名前ならちゃんと言えるけど、他の言葉が苦手みたいで……私の時もデテケ、って言われたし……最近前みたいに実体化？ してジオラとよく話してるみたい」

言葉を覚えたシヨロトル、流暢に話せるようになったシヨロトルと考えたら、妙に面白い光景になりそうな気がグランはしていた。

「え、ていうか教えてるのは本当なの？」

「う、うーん……本当だと思いたいけど……教えてるのは私も気になっちゃって」

「俺も気になる……今度見に行くか」

「えっ」

「今度見に行こう、決定。今はちょっと忙しい時期だからあれだけど、今度今度」

トントン拍子で決められて、トントン拍子で進んでいくシヨチトル島観光計画。思いがけない帰郷に、ディアンサは嬉しさと気まずさが妙に同居していた。

「……でも私も気になるし……」

シヨトルに言葉を教えてるのはどういう感じなのか、ディアンサもぶつちやけ見てみたかったので、反対する理由はなかった。

「……まあというわけで、今回はここまでです」

「あ、そうなんだ……」

「ここまでご視聴ありがとうございます、また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「因みに団長さんは誰が推しなの？」

「ん？ 5人の中でつて事か？」

「んー……」

撮影が終わったあとに、ディアンサはなんとなく気になり聞いてみる。自分だったら嬉しいが、他の誰であっても別段気にしないので本当に興味本位で聞いているだけである。

「んー……特に決めてないんだよなあ……全員推しみたいなものだ

し」

「ぜ、全員？」

「みんな応援しなきゃダメでしょ」

そう言いながら全色のトレピリを取り出すグラン。誰が推しと言  
うよりかは、グラン的には全員応援しないとイケないと考えているよ  
うだ。

ディアンサは、グランらしいと少しだけ苦笑しながらも結果に納得  
をしていた。

「でもそれじゃあ公演の時とかはどうするの？」

「いい感じに分身する」

「い、いい感じに分身……」

忘れていたが、グランはなんだかんだで常人のレベルを遥かに超え  
ているのだ。分身なんて出来て当たり前と言わんばかりの話し方に、  
ディアンサは改めて認識し直していた。

「大丈夫、全員きっちり応援してきた俺に任せとけ」

「う、うん！」

しかしそれはこれこれ、グランが応援しているという事実は  
ディアンサにとっては間違いなく良い物になっていた。そう、グラン  
がディアンサだけを見て応援してくれている時があると思ひ込むく  
らいには。

「じゃ、じゃあ私ルルルさんとダンスや歌の練習してくるから！」

「おう、頑張っておいでよなあ」

「――告白されたって本当？」

「後ろから殺気!!」

振り向いた瞬間、グランは距離を取っていた。そこに居たのは笑み  
を浮かべてはいるが、その目に光を宿していないクラリスだった。

「バレンタインの時に……ディアンサに……告白されたって……」

「ハハッ」

「……」

上ずって変な笑い声になったグラン。表情の変わらないクラリス  
は、そのまま腕を前に突き出してこう言うのだ。



「アルカヘッドスファイア!!」

「待つて待つて分解は本当に死ぬ!!」

この後、クラリスのグランへの追走劇は丸1日続いたという。

夢見る音符、一緒に乗り越えちゃおう？

「今日のゲストはリルルさんです」

「はい！ リルルです！」

リルル、ハーヴィンの少女である。アイドルをやっつけて、自分のことに関してほとんどもなく厳しい少女でもあり、とんでもなく大人びている一面がある。

ハーヴィンでは分かりづらい為に、大人びていると大人に見られがちだが彼女は一応13歳である。

「好物はラーメンだっけ？」

「はい！ イツパツさんがいてくれて本当に助かりました！ 本当に美味しいラーメンを研究してるので、作ってくれるんです！」

「イツパツのラーメンは本当に上手いからなあ」

内心、13歳の少女がラーメンを好物にしていると考えるとグランは妙に世の中の世知辛さのようなものを感じていた。人気なことはいいことなのだが、そこまでラーメンが好きなのかと。

「けどラーメン食べると体重制限キツくない？」

「その分動き回ってるので大丈夫です!!」

「なるほど」

恐らく尋常ではない動き方をしないとダメだとグランは思ったのだが、ハーヴィンの体で動き回るというのはヒューマンやエルーンでは、そこまで実は体力を使わないのかもしれないと思に至る。

「でもまあ……うん、ライブとかで動き回ってるし……そういうものなのかな……？」

「そういうものです！」

「因みに最近食べた美味しいラーメンの1番の決め手は？」

「1番最後に食べたラーメンは、麺のコシが違いましたね！ チャーシューと煮卵も美味しかったです！」

「……後でラーメン食べに行くか」

「はい!!」

話を聞いていると、ラーメンの美味しさをまた味わいたいとグラン

は思うようになり、次の島へ着いたらラーメンを食べようと心に決めるのであった。

「というわけでそんなラーメン大好きアイドルリルルにも沢山お便りが届いています」

「アイドルだけどファンからのお手紙でお便り系はあまりなかったです…」

「そんなアイドルさんでも大丈夫、1通目『既にラーメンアイドルとしての地位を獲得してませんか?』」

「ラーメンアイドル……」

アイドルなのもそうだが、それ以上にリルルのラーメン好きは知れ渡っている。それこそ、アイドルとして有名になったことでそれが広まったと言わんばかりに。一時期ラーメン系の仕事しか来なかったこともある。

「でも実際ラーメンの仕事多いもんねえ」

「でもお仕事はお仕事です! それに、ラーメンは美味しいですから問題ありません!」

「美味しいラーメン食べれて?」

「実際すごく心が満たされています……!」

仕事とは、楽しめている者が勝者なのだと言はれる。実際、ラーメンは未だこの空の世界では有名では無いものの、着実に広まってきているのだ。

無論、元は広まっていなかったものが急激に広まっているので味や製法がほとんど伝わっていないかったりするのだが、それでも美味しく作ろうとしている気持ちは本物のところが圧倒的に多いのだ。

「なんかこう……珍しいラーメンとか食べたことある?」

「珍しい……材料や作り方の話ではないんですけど、確かに珍しい所はありましたよ」

「例えば?」

「注文の仕方で自分好みのラーメンに出来たりするんですよ、その際に常連客にはある禁断の言葉があるんです」

「……禁断?」

一体どういう事なのか、グランはさっぱり分からなかった。しかしリルルは挑戦したことあるのかその顔はとても遠くを見つめていた。「ニンニクチョコモランマヤサイマシマシアブラカラムオオメ」

「……な、なんだそれどういうことだ……?」

「そのお店の最上級クラスのもので……これを食べきったあとにリルルは3日間食事は必要なかったです」

「そ、そんなになのか……」

グランはリルルのその表情から、凄まじいものだという事だけを読み取れた。そして、同時に思ったのだ。『今度ルリア連れていこう』と。

「そのラーメンの特徴は?」

「量が凄まじい、にんにくも凄まじい、野菜も凄まじい、背脂も凄まじい、辛みとして入れる香辛料の量も凄まじい……全体的に凄まじいラーメンでした」

「……でも1回食べたくなるな……」

「私もまた今度食べに行きたいです」

「え、3日間食事は必要なかったです……って今言ったのに?」

「……なんと言うか、また食べたくなるんですよ。無性に……」

グランはこれ以上聞かない方がいいのだと判断した。別に危ない薬は使っていないのだろうが、味が濃くて美味しいものはその時飽きてもまた食べたくなってしまうものなのだ。

「……まあ、とりあえず2通目。『シヨチトル島の巫女達』のことはどう思いますか?」

「どう、思う……うーん……」

「一緒にダンスの特訓してるとか聞いてるけど」

「私は今まで1人でアイドルをしていたので、みんなで踊って歌うということが出来るのはとてもすごいと思います。私が劣ってるだったり、あの人達が劣ってるなんて言うつもりはありません。」

私はソロ、巫女さん達はチームで出来るように活動をしてるんですから」

「確かに……全部一人でやってきてるもんねリルルは」

ダンス、歌、衣装などなど……リルルは一人でこなせられるところは全て一人でこなしていた。そしてそのレベルはどれも高い水準となっている。

シヨチトル島の巫女達は、サポートやチームメンバーがいる。役目を振り分けたらその分精度も上げられるが、チームワークというものがとても大切になってくる。

「チームワークというのは、鍛えられるものじゃないです。互いの信頼や信用、そして自分の実力……それらが高くて初めて成り立つもの」

「どれかひとつでも成り立たなかったら、ダメってことだね」

「そういう事です」

「チームワークって言うのはやっぱり大切だなあ……」

「その分！ 私はグランサイファーに入ってから、チームワークというものが少しは鍛え上げてきたと自負しています」

確かに、とグランは頷いていた。リルルだけでは無いが、グランサイファーというひとつの家にいる以上、当然ながらチームワークというのは鍛えられる。

誰がいつゴミを出すか、だれが料理当番か……ある程度暮らしているとそのサイクルなどがそれなりに理解できるようになってくるのだ。

「ただ、ハーヴェインの体だとやれる事が少ないんですよ……」

「まあ、そこはしょうがない」

ハーヴェインの体では、本当にやれることは少ない。ゴミ出しにしてもあまり大きかったり重いものだったりする場合そもそも持ち上げても引きずってしまう場合が多いのだ。

料理するにしても、足場が必要だったり結構不便なことも多い。リルルはそれを嘆いているのだ。

「それに、チームワークを鍛える以上に自分自身に出来ないことを他のことで補おうとしているリルルは凄いなと思うよ」

「ありがとうございます！」

「さて、とりあえず3通目『イツパツさんとシヨチトル島の巫女さん達

以外に関わってる人はいますか?』」

「そうです……ヴァンパイさんとかですかね」

「おや? 意外も意外」

「アイドルというものに興味があるようでして!」

確かに、ヴァンパイなら案外アイドルとしてもやっていけそうだとグランは感じていた。何せ、リアクションも見た目も服装も何もかもが可愛いのだ。グランからしてみれば、アイドル向きの可愛さを兼ね備えたヴァンパイはアイドルに興味を持つのもわかる気がしていた。

「それで、最近はダンスと一緒に練習してるんですよ!」

「へえ、ダンスを」

「それに、ヴァンパイさんは可愛さと妖しさが同居してますし……ちよその気になれば、ミステリアスアイドルとして名を馳せる事が可能なはずです!」

「現役アイドルの『アイドルに向いてるっぽくない? 眼』は確實そうだ」

そんな能力はリルルには無いが、おそらく直感としてはヴァンパイがアイドルに向いているというのはあながち間違いではないだろう。但し、ヴァンパイアという一点を除けば……だが。

「それ以外で気になる人とかいる?」

「うーん……皆さん優しいですし、基本的に気になるというほどのこともないんですよ、仲良くしていないという訳では無いんですけど……」

「まあ大体の人は聞いたら話してくれるしな……」

そこがグランサイファアの団員のいい所でもあり、悪いところでもある。善人すぎてみな隠し事すらあまりしてないのだ。理由としては、ただの感情ではなく友情なこと……その友情により腹を割って話し合うことも多い。そのために、みんな結構深いところで仲がいいのにも関わらずグランサイファア内での交流関係は皆同じくらいまでの広さとなっている。

「リルルも、皆さんとすごく仲良くしてますし……」

「気になる疑問も全部解決しちゃってる、確かに気になるというの

はかなりありえないことになるのかもね」

疑問に思っていたことは、大抵本人が答えるか自分で察して疑問として無くすかの二択だ。グランサイファーではそれがかなりの確率で多いために、リルルも自然とそうなってしまったらしい。

「むしろ気になったことを聞いたら、自分達と同じような道に墮としてくるようなやつもいるし、グランサイファーは人がいいやつが多すぎる」

グランの脳内ではカリオストロとシロウがくしゃみをしていた。所謂沼に入れ込んでくる2人という扱いなのだ。グランの中では。

「そうですねえ……あんまり専門知識が多い事だと、聞いておいて自分で気圧されるなんていう失礼な態度をとってしまいます」

シロウにメカのことを何気なく聞いた際に、断れないまま徹夜コーズを味わった様な顔を浮かべたまま、リルルは遠い目をしていた。因みにカリオストロに聞いた際には、まず専門用語を覚えさせる基礎知識授業から始めてくれる。

「主にシロウとかだよね」

「わ、私からはなんとも言えないのですが……」

シロウは目を輝かせながら子供のようにはしゃいで説明するため、断りづらいという理由もあり、そして前者であるカリオストロとも比べられて……『カリオストロは教えるのが上手い』という結論にさられてしまっていた。いや、クラリスに錬金術の基礎をなんだかんだやってくれているため……案外間違っていないのがしれない。

「……つと、こんな時間になっちゃってたか」

「では私の出番はもう終わりですか？」

「まあ少なくともしばらくは出番は無いだろうね、同じ人はやるかどうか不明なところあるから」

「でもまた出られるように、私は自分磨きをしておきます！」

ピシッと敬礼をとるリルル。そんな彼女を見るグランの目は、まるで孫を見る老人のようだと実は中から覗いていたルリアは語る。

「というわけで、同じ人に果たして出番は来るのか？ そんな心配を私とリルルさんでしながらも、今回はここまでとさせていただきます」

す。ご視聴ありがとうございます、また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「きつと！ 私は!! いつか!!! また!!!! 出ますから、ねえええええええええ!!」

その言葉を言い終える前に、カメラの電源は落とされるのであった。



## アイドルキャスター

「コラボ合同アイドルイベント!?!」

「そう、これから復興支援が必要な場所に行くわけだけどそこでリルとディアンサにはコラボしてもらおう」

グランサイファーの中で。次の依頼に向けての大幅な動きがこの船にはあった。とある街に、魔物が大量に発生したとの事。魔物は撃退出来たものの、原因の究明だったりけが人等の治療だったりと色々で大掛かりな依頼となっている。

「みんな色々やってる中で、2人が率先してくれたのはとてもありがたい……そして方や巫女……方やアイドル……どちらも歌って踊れるのなら、コラボさせてしまえばいいじゃないと俺の五感が囁いているんだ」

「私はそれで構いませんー!」

「けれど……どこでやるんですか? 街の建物だとそこまで広くて大きなところはないって聞いてますけど……」

街の地図を広げながら、ディアンサはグランに尋ねる。それ以前に、ライブをするにはそれなりの施設が必要である。エルタ達のような、演奏家達ならば楽器は何処でも弾けるので被災者達の心を癒すには、どちらかと言えばそちらの方が向いているまでである。

「街の中心……そこなら機材さえ置いたら、そこから街全体に2人の歌声が響くはずだよ」

「なるほど……つまり街の中心を使えば、リルル達は歌っていいと言うことですか?」

「そうそう……けど、片付いた後からステージの設営を一からやってたってしようがない」

「……でも、片付いていないのにステージは設営出来ませんよ?」

「ふふふ……それはこの俺に任せておけ。片付けもステージの基盤の設営も、どちらも簡単に出来る秘策がある」

「秘策……?」

微妙に嫌な予感がしつつも、ディアンサはグランのいうことを信じ

て後のことはグランに任せるのであった。

「カリオストロをお、便利な道具扱いしたらめっ☆だぞっ！」

「ししよーよりも役に立てるってところ見せてあげるから!!」

美少女錬金術師2人による解体作業が、ディアンサの目の前で行われていた。クラリスは言わずもがな分解による圧倒的作業量、カリオストロは瓦礫だったり魔物の骨を別のものに変換しながら、作業を行っていた。

「うーん、やはり凄まじい」

「ね、ねえ……あの二人あんな扱いでいいの？」

「カリオストロは兎も角、クラリスはやる気になってるからセーフセーフ」

なにがセーフなのかディアンサには分からなかったが、しかし確かにクラリスは実に楽しそうに作業をしていたので、なんとも言えない気持ちになっていた。

「そ、それに私達ここにいていいの？」

「そうですねえ……リルル達、練習を行った方がいいのでは……？」

「うんにゃ、大丈夫大丈夫……と言うのも、ちゃんとした理由はある」  
「理由、ですか？」

リルルが首をかしげながら質問する。グランは錬金術師二人を見ながら、説明を行っていく。

「実は、二人のイベントをやる前に二人には色々回ってもらおう所があるんだ。まあこれに関しては俺も一緒について行くから、今説明し

た」

「回ってもらおう所……?」

ディアンサもリルルも、顔を見合わせる。ひとまずグランについて行くこと数十分、3人はとある大きな屋敷……とは言っても多少ボロボロになっているが、そこに訪れていた。

「……………は?」

「街の町長の家、今回のイベントの話のすり合わせもしないといけないしな」

「なるほど! 確かに細かいところの打ち合わせも聞いておかないといけませんからね!」

「そういうこと……と言っても、今回は段取りの確認だけだな。2人はとりあえず町長と顔合わせしておかないとね」

そう言つて、グランは屋敷の前にある門を開こうと――

「……」

「……あの、もしかして開かな――」

「いやあ、大丈夫大丈夫。なんだかんだいける行ける……ふんつ!」

壊す訳にもいかないので全力を出すのは不可能だが、しかし中々簡単に開くことは無かった。どうやら扉が魔物達の襲撃により、曲がつて開かなくなつてしまつているようだ。

「……………どこかに裏口とか……」

「あるかなあ……」

「あ! ありましたよ!!」

そう言つてリルルが示した場所は……まるでハーヴェインが入ることが想定されたかのような高さにある穴だった。

「案外するつていけますね」

「凄いなリルル……じゃあ俺も……」

リルルはするつと通り抜けて、グランも少し苦戦しながらも……何とか通ることが出来ていた。地面にあるわけではなく、ハーヴェインの通りやすい位置にあるようなところだと通りにくいことこの上ないようである。

「……………あれ?」

「デイアンサ？ どうした？ 早く行くぞ？」

「ん、ん……！」

上半身が通った辺りで、何やら青い顔をして体を動かし続けるデイアンサ。グラン達もなんの事かわからずに、一抹の不安を感じながらデイアンサに近寄る。

「……え、本当にどうした？」

「……抜けない」

「え、そんな古典的な……」

よくある事である。おしりが引つかかって抜けなくなっちゃった！ みたいなやつである。そして、こういったことが起こって……逆に1度抜け出してから再度入り直そうと試すのも、あるあるである。

「ふん……！」

「……」

「む、胸がつかえて……完全に抜けなくなっちゃってる……」

「り、リルル助けを呼んできます!!」

リルルは大慌てで屋敷の中に向かう。こんな状態になってしまっているのに、助けを呼ばれる町の人達の気持ちを見ると、グランは涙が止まらなかった。

「ど、どうしよう……！」

「……俺が最後に行けばよかったか……！」

「待って今何考えてるの!？」

「やましい事は何一つ考えてないぞ、ただ引つ張るよりも押した方が行きやすいかもしれないじゃないか!!」

「で、でも団長さんに押されるなら……」

「え、ちよっ、マジで？」

思いがけない肯定的な発言について戸惑うグラン。たとえ合意であったとしても今の台詞だけは確実にアウトなので、バレた場合リーシャに殺られるのが目に見えているのだが……突然すぎる出来事によりグランはそのことに気がついていなかった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「町長さんと呼んできました!!」

「リルルでかした!!」

連れてきたのは屈強なドラフの男性だった。ではこの穴は一体なんだろうかとグランは思ったが、今はそれよりもディアンサを救出する方が先決なので、町長さんの指示に従って動き始める。そして無事ディアンサは助け出されるのであった。

「すいません、お手数をお掛けして……」

「いえいえ、その穴を放置していた私にも……あと門が開かない事に気が付かなかった私の落ち度です」

「え、あれ……じゃあ一体どうやってでたんですか……?」

「実は専用の通路が地下にあります……」

「なるほどー!」

ひとまず、一旦話し合いをするために一行は町長に招かれて改めて屋敷の中に入るのであった。

「――では、これで行きましようか」

「はい!!」

「瓦礫などはウチの団員が頑張って片付けてくれているので……何とかなると思います」

「それは頼もしい……!」

こうして、計画はまとめられた。あとは歌って踊って町民を癒すだけである。これで、ディアンサとリルルの2人にもいつそうやる気が出てくるというものである。

「ディアンサさん、リルルさん……お願いします……！」

「はい!!」

こうして街が片付くまでの間、ディアンサとリルルは歌と踊りの特訓を重ねに重ねた。ソロパートやそのソロパートの複合、ダンスも自分たちで決めて……と色々やるが多かったのだ。

しかしそのおかげと言うべきか……ライブを始める前には完全に2人はいきのあったコンビへと成長していた。

「行きましょう！ ディアンサさん！」

「はい!!」

こうして2人は舞台に立つ。錬金術とかで作られたステージ、仲間が予め作った音響セット、それらを噛み締めながらステージに登る。周りからの熱意を感じつつ、2人はマイクを握って……笑顔を振りまきながら踊って歌って癒していく。

密かにグランが作っていたトレピリを、他団員が町民に渡してさらに熱意を深めていく。

そんな事が色々あって……ステージ中は特に問題もなくものが進んで言うて……ライブは成功したのであった。

「いやあ、成功も成功大成功！」

「よかったですね！ 本当に！」

「はい!!」

3人は帰路に着いていた。ちゃんとライブが成功したこともあり、3人の気分はとて素晴らしいものになっていた。

「ディアンサ派とリルル派に見事に別れたもんだ、トレピリで熱意をより深く確かめることが出来て良かったよ」

「あれよく作れましたよね……」

「こう、うまい具合に頑張った」

「す、凄いですね……」

ディアンサはグランのサラツと言った言葉に静かに驚いていた。グランが作ったトレピリは、本来のトレピリよりは複雑なものでは無いが、衝撃を与えると1度だけ光らせることが出来る代物である。

「で、だ……どうだった？ 今回のコラボ」

「はい！ リルルは楽しかったです！」

「私も……すごく楽しかった……」

2人ともいい感じの笑顔を浮かべながら、嬉しそうにしていた。アイドルにイベントをやらせるためには、アイドル達にもその分楽しませなければならぬ。

「でも……復興支援とは言いましたが……ちゃんと支援出来ていたんでしょうか？」

「瓦礫の撤去、怪我の治療、飯の配給……色々役目がある人はいるからな」

「……私達は……」

「物が直って怪我が治っても、人の心は治らなかつたりするからな。やっぱりそういう役目がある人がいてもいいんだよ」

「……じゃあ、私達はその役目って事なんですか？」

「その役目だし、ちゃんと果たせてたよ？ 2人も見たでしょ？ みんなあの笑顔を」

リルルとディアンサはライブ中の町民の顔を思い出していた。皆少し影を落としたような暗い表情だったのが、一様に明るくなっていく様を。

「……はい！ リルルはあの笑顔でまた頑張れる気がします！」

「私も！」

「よしよし、というわけで今日は帰るぞ！」

「はいー！」

そうして3人は帰路に着く。グランサイファーに帰って直後、カリオストロのウロボロスに飲み込まれそうになったり、腕を絡ませて歩いていたグランとディアンサにびっくりしてつい分解の錬金術をぶっぱなしそうになったクラリスだったり、色々あった。

だけど、なんだかんだ復興支援で自分達は人の役に立てたのだと感じ取れたので、2人的にはOKだった。

「おいグラン、ちゃんと今度埋め合わせしろよ」

「OK」

「う、ウチも!」

「どの日がいい?」

「じゃあこの日!」

「この日はユエルと出かける」

「え……じゃあこの日」

「その日はアンスリアと」

「じゃ、じゃあ……この日は……」

「この日はグレアと出かけるね」

「う、う……うわああああああああああああああ!!」

……因みに、何とか2人きりで出かけられる日は決めることが出来た。1ヶ月後まで予定が埋まっている当たり、さすがグランという他なかつたのである。

因みに、その翌日にはディアンサと浜辺で2人きりでデートしていた姿をクラリスは目撃するのであった。



紅陽の舞主、私に色々教えて？

「今日のゲストはアンスリアさんです」

「よろしくね」

「という訳で手を繋ごうか」

「えっ!? そ、そんな急に……しかもみんな見ている前でなんて……  
グランったら……」

突然のグランの台詞に顔を真っ赤にするアンスリア。彼女、グランをよく誘惑するのだがそれは無意識でのことであり、自分がグランを誘惑していると気がつく、すぐに顔を真っ赤にしてしまうのだ。クリリスの天敵である。

「まあこれは冗談として……」

「あら……私は別に今でも見せつける事になっても……」

「ならあんなことやこんな事まで見せつけても——」

グランの頭のちよつと上あたりに、剣が突き刺さる。見覚えのある剣、リーシャのものである。恐らく番組が進まないからさっさと欲しいという合図なのだ。グランは無理やり自分を納得させていた。

「……ぐ、グラン大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、今回に関しては俺もアンスリアも変なことすると刺されるといのがよくわかった」

「わ、私にも今のは飛んでくるのね……」

「とりあえずリーシャのは抜いてここに置いて……アンスリアの自己紹介から……彼女は舞を踊れるんですけど、それがいい所でもあり悪い所を引き付けてしまうところでもある……だよね」

「そうなのよ……私が舞を踊ると、必ずと言っていいほど他の男達から言い寄られるの……」

初めてであった時もそうだったのだ。魅了された男達から求婚されて、無理やり連れていかれそうになっていたのだ。それがきっかけでグランの団に入ったのだが、やはり屈強な男が近くにいると基本的に近寄ることは少なくなっているのだ。

グランが近くにいるにしても、グランを舐めてかかってくる輩もいるせい

であまり減らないのだが。

「基本的に俺も護衛には入ってるけど、やっぱり見た目だけならドラフの男組がいるとあんまり近寄るやつ居なくなるよね……比較的」  
「そうね……」

例えるなら、100人から90人に減った程度である。つまり、一応減った程度でしか効果が発揮されないのだ。それだけアンスリアに魅了された男たちの執念が凄まじいと言えるのだが。

「さて、そんなモテモテアンスリアさんにもお便りがあります」  
「あら」

「早速一通目『他の男性に手を握られたりしても、ドキドキするんですか?』」

「あまりそういうことはさせないから……しないだろうけど」

「まあ俺に対しての誘惑が凄いだけで、基本的に他人に体触らせないもんなアンスリアは」

「はうう……」

真顔でそう告げるグラン。自分の無意識が行うグランへの誘惑は、どうしても直りそうにないので恐らくしばらくはずっと誘惑を続けるのだろう。

「でも本当にされたことないの?」

「うーん……無いわけじゃないけど、その時は……あ、そう言えばグランと初めてあった時は手を握られたわ……でも、ドキドキよりも不快感の方が強くて……」

「というと……」

「無理矢理連れていこうとしてたから、嫌だったのよ」

アンスリアのいうことも最もである。別にアンスリアは惚れっぽい性格なのではないので、手を握られただけでドキドキはしないのだ。それこそ、無理やり握るような輩には不快感すら覚えるのだが。

「まあ俺も無理矢理されるようなことは、結構嫌かな」

「なら……私が手とり足とり」

「ストップ、それ以上言うとりーシャツズ秩序ブレードの一撃が飛んでくるぞ」

「あう……」

羞恥の赤と焦りの青が入り交じった表情を浮かべるアンスリア。いまのでとんでこなかったのは、ある意味セーフであった。

「まあ、それなら優しく握ればいいのか？」

「ぐ、グランなら……その……無理矢理っていうのも燃えるっていうか……ひゃう!？」

突如感じる殺気、アンスリアはゾワっとした恐怖を感じとって後ろを振り向く。ドアは空いてないし、人の気配もないが間違いなくリーシャが居ることだけは確信できていた。

「ブレードが飛んでこなかっただけマシだな」

「え、ええ……」

リーシャに恐怖感じながら、アンスリアはグランに視線を戻す。かなりの恐怖が今のグランとリーシャを襲っていた、次下手なことをいえば間違いなく死ぬという恐怖である。

「……とりあえず、アンスリアは別に他の男に触られてもドキドキしないということ、2通目に行きましょう『無意識の誘惑行為はどうにかならぬんですか?』」

「なるのなら私だってどうにしたいわ……」

「でしようね」

アンスリアの愛情表現は、とても情熱的なものである。しかし、周りに第三者がいる場合それで諭されたりすると、すぐに素に戻って恥ずかしがってしまうのだ。

「基本的にルリアとビーが一緒だからすぐに素に戻るよね」

「後……逆に攻め込まれても素に戻るわ……」

「そうそう、自分から握ってきても俺が握り返したらすぐに真っ赤になるよな……にぎにぎしたらまた熱っぽくなるけど」

「だ、だって情熱的に誘われたら……反応しちゃうんだもの……」

顔を真っ赤にして俯くアンスリア。あまり激しく責め立てると、どうも余計に恥ずかしがってしまうようだ。グランは無表情で頷きまくっていた。

「にしても、ビーも言ってたけど面倒な性格してるよね」

「わ、私だっつてどうにかしたいわ……」

「情熱的な方でも今みたいな方でも、俺としては好きだからいいんだけどな」

「はう!？」

さらに顔を真っ赤にするアンスリア。グランのそんな深い意味の無い言葉でも、彼女にとっては嬉しい言葉であることには変わりないのだ。

「んえ、なんで今ので反応したの」

「な、なんでもないわ……わ、私にとって嬉し恥ずかしの言葉が混ざってたっただけだから……」

「そ、そうなのか……」

顔を真っ赤にしつつも、ニヤケが止まらないアンスリア。その面白い表情にグランは困惑しかしていなかった。

「……でまあ、結局のところアンスリアの『集中すると周りが見えなくなる』というのを改善しない限りどうにもならない感じだけど」

「……そうね、でも集中したらみんなそうなるんじゃない？」

「まあ普通はそうなんだよなあ……アンスリアの場合、舞を踊る分にはそれでいいけど、情熱的になる時に周りが見えなくなっちゃう所まであるからさ」

「やっぱりそこなのね……」

要するに、情熱的になり過ぎないという解決策しかない。だが、はつきり言っつてそういうことが可能なかと言われれば、アンスリアは首を縦に振れないのだ。

「もう、これは私自身の解決できない問題ね……」

「性格変えるなんて難しいからなあ……認識を変えることは難しくないけどさ」

「うう……」

「もうどうしようもないから諦めな」

「う、うう……」

「というわけで3通目『情熱的になりすぎたことはありますか?』』  
「なりすぎた……?」

「所謂、ストッパーがいなかった場合どうなるのかって話じゃない？」  
「あ、なるほど……でも……基本誰かが止めてくれるから……」

アンスリアも困った顔をしていた。だいたい情熱的になると何かしらの形でストップが入る。そのストップが入らなかった場合のことなんて、アンスリアには少し分からないことだった。

「うーん……これに関しては答えようのない話題な感じ？」

「そうね……だって、止まらなかった時なんて私には分からないもの」「どうしようかね……まあ、なら予想で行こう」

「予想……予想……」

アンスリアは難しい顔をして考え込む。自分の情熱的のところは彼女は理解しているが、それがヒートアップし続けた際に何が起ころのか、彼女自身も分からない。

故に、どうなるかは予想でしかないが――

「……あ、あうあうあう……！」

「すごく真っ赤になって湯気がでてきた。一体何を考えてるのか小一時間話したいところである」

「だ、だめよ……こんなところなんで……あ、ん……！」

「そしてすごく熱っぽくなってきてる。よし、このまま黙ってどうなるか確認を」

今度はどこからともなく斧が降ってきた。リーシャに斧を振り回せる力はないのだが、グランはそれをリーシャが行ったことだと認識していた。

「うーん、この手の速さは恐らくとめないはずいな」

「で、でも貴方なら……！」

「アンスリアアアアアアアア!!」

「ひゃい!!」

「よし止まったな」

とんでもない荒業で止めるグラン。いきなり叫ばれて思考停止したアンスリアは、我に返って冷静さを取り戻していた。

「い、いきなりでびっくりしたわ……」

「びっくりさせるためにやったからな」

「で、でもあれとめなかつたら本当にまずかつたから……助かったかもしれないわ……」

「団員を守るのが俺の役目だからな……」

「あ……」

また顔を真っ赤にするアンスリア。グランも狙っているのでは？と思われてしまうかもしれないが、こちらもまた無意識である。

ぶっちゃけ、こちらはほとんどの女性団員をこういう状態にしているので、尚更タチが悪いのだが。

「……まあ止めなかつたら俺がリーシャに殺されるということだけは理解出来た」

「え……何その斧……」

「本気で気づいてなかったのかスゲーな……という訳で今回はここまですでとなります。ご視聴ありがとうございます、また次回この時間にお会いしましょう。さようなら」

「殺しにかかるのは辞めて欲しいでガンス」

「目の前で子どもには見せられないようなことをしておいて？」

「ド正論が飛んできましたよ」

「まああの斧当たっても団長さんなら死なないとわかっているので大丈夫です」

「大丈夫……大丈夫とは……？」

リーシャを呼び出して説教しようと思ったグラン。しかし、自分がアンスリアにセクハラを働いていた……ないし正直本格的に子供に

は見せられないようなシーンをしているので逆論破されてしまっていた。

「……」

「……？ アンスリアさん、どうかなさいましたか？」

「前から思っていたのだけど……」

「はい」

「リーシャって、グランに情熱的すぎる愛を振りまいているわよね」

「……」

帽子を深く被り直すリーシャ。黙って立ち上がって、そのまま部屋を出ていこうとする。

「あれ、お話終わり？」

「ハイッ！」

「待つて待つて待つて待つて、今めっちゃ高い声出たよ」

「大丈夫です、気の所為です、じゃあおやすみなさい」

「まだ昼だけど」

「………おやすみ！」

猛スピードで部屋を出て行くリーシャ、グランは呆然とする他なかったが……ぶっちゃけ説教され返されると考えていたので、グラン的には拍子抜けだった。

「………何だったんだ？」

「グランは愛されてるってことよ」

「そうか、俺は哀されてるのか」

「今私無理やりな変換を見た気がする」

「気の所為だ」

そんなやり取りをしながら、グランとアンスリアも続いて部屋を出る。因みに、その日はもう二度とリーシャに会うことはなかった。翌日は普通に接してきたので、グランはなんだったのか少し疑問に思うだけで留まっていたのであった。

夜失の桃煙、遊びましよ？

「今日のゲストは……あー……」

「名前呼ばなかったらなんでもいいわ」

「怪盗夜煙に来て頂きました」

「よろしく、本名を教える気はないわ」

「怪盗シャノワールとは違い、目立つことを嫌う彼女ですけどどちらも怪盗です。違うところは、やはりその本質だったりとか」

それっぽい解説を加えていくグラン。優雅に紅茶をすすりながら、余裕そうな表情を浮かべる夜煙……本名キャサリン。子供をからかう大人のお姉さんと言えば、わかる人にはわかるだろう。

「そうね、同じ怪盗として負ける気はないわ」

「まあでも、シャノワールに無くて夜煙にあるものが存在していることを僕は知っている」

「アラ、褒め言葉？」

「だと思っじゃない？ 実際は……こうだ!!」

「きゃんっ!!」

不意打ちのように、グランはキャサリンの露出している腕を触る。触られた瞬間顔を真っ赤にして、キャサリンは腕を引いていた。これこそが、シャノワールに無くてキャサリンにあるもの……それは――

「触られることに弱い」

「い、今のは誰だつて驚くわ!!」

「果たしてそうかな……確かに今のは俺が不意打ちで触りに行った。だが、夜煙の反応が本当に不意打ちで触られたかどうかなんて、俺達以外の誰にも理解出来ないぜ……」

「し、してやられた……!」

「まあこんなことしたら――」

グランの頬をかすり、銃本体が壁に突き刺さっていた。銃弾ではなく、銃本体が突き刺さっているのだ。

「リーシャがこうやって狙ってくるんだ」



「待つて待つて、銃そのものを突き刺さるくらいつよく投げてるって、当たってたら死んでたわよ!」

「大丈夫大丈夫」

「な、なにが大丈夫なのよ……」

「事前に星晶獣カグヤをルリアから貰ったからな……1回だけ復活することができる」

「死ぬこと前提なのね……」

グランのどこか捻れて曲がってる答えに、キャサリンは呆れている。根本的な解決には一切ないけど、一時的な解決策をこうしているところが実にねじ曲がっている答えである。

「さてさて、軽い談笑も終わったことなので……お便り紹介のコーナー行ってみましょう。まずは第1枚目『触られるのが苦手で、どうしてそんな格好をしているんですか?』」

「うぐっ」

「今更な質問だが、確かにその通りだ……もしかして、怪盗となつてるのは誰かが自分を追いかけるのを楽しみにしているから……!?!」  
「違う違う違う! 決してそんな理由ではないわ!!」

グランの言っていることが事実ではないとして、ではなにが真実なのか……と言わんばかりにグランはキャサリンをジト目で見ていた。キャサリンは目を逸らしているが、グランは見ることを辞めなかった……だが、それをまだ辞めてくれる人物はいるのだ。

「だったら一体どんな理由ぶへっ」

濡れタオル……ではなく、なくした雑巾がグランの顔に激突していた。それなりに素敵なフレーザーがある事により、グランの顔は異臭を感じとった猫のような顔となっていた。

「……それ、臭い?」

「雑巾はきつと臭いもの、つていう概念がどこかで生まれてきそうだ。きつと雑巾の星晶獣はいるから、そう言った概念が生まれていても何らおかしくない」

「雑巾の星晶獣はいないと思うわよ」

確証はないが、そんな無駄な使い方をする星の民がいるとはキャサ

リンは到底思えなかった。そんな暇な星の民なんて居るのだろうか、と。

「どうだろうな、星晶獣なんてそれこそ人間の数ほどいると思ってるぞ」

「ま、まあ……思うのは自由よ、思うのは」

「……いや、雑巾の星晶獣の有無はどうでもいいよ!!」

まるで今までの会話が無駄だと言わんばかりに叫ぶグラン。振つたのはそっちだろうと内心突っ込むキャサリン。2人の駄べりが本当に無駄だった瞬間である。

「でもホントなんでその格好なの」

「怪盗としての格好なだけよ」

「でも背中ガン開きなんでしょ？ 僕エルーン何度も見てきたから知ってる」

「というか、私に露出度の話を降らないでよ。正直わたしなんて足元にも及ばないわよ」

確かに、とグランはつい納得してしまった。下着だけのような姿がなんだ、と言いたくなるのも理解できるのだ。何故なら、グランの周りにはそれ以上にやばい露出度を持っている女性たちがいるのだから。

「……結論としては、夜煙はまだマシンな方と言うことで」

「なんか気に食わないわねその言い方」

「じゃあ2通目行きましょう『触られるのが苦手です』として他の人を誘惑してるんですか?』」

「よ、余裕を持つてる方が……いいからに決まってるじゃない……」

「お前俺が良識ある人間だったからいいもの、あんな誘惑してそれに素直に反応する人間だったらどうする気なんだ」

「……私、その所はちゃんと見てからしてるわよ。手を出しそうな人間と、手を出さななさそうな人間の区別はできるようにしてあるわ」

とは言っても、誘惑して誘ったりしているのは今のところグランだけである。彼女は喫茶店の店員『キャシー』としての姿も持っている

が、その時によく話す警察の『リック』という人物には決してこういうことはしない。

気に入ってる人間ではあるが、キャシーが夜煙ということばはばらさないくらいである。

「判別つけている……か。果たしてそうかな」

「……どういふ事よ」

「『え、この人ってこんなことするの……？』みたいなことはなかった訳？ リーシャとか俺とかその他多数とか」

「……いえ、予想してなかったなんてことは無いから大丈夫よ」

「むしろリーシャを予想出来たのはすごいわ」

遠い目をするグラン。その目には、まるで思ってたのと違うと言いたげなほどの思いが込められていた。キャサリンもグランの言いたいことはわかったのか、苦笑するしか出来なくなっていた。

「まあ結論はもう出ちゃったな」

「ええ、私貴方くらいにしかこういふことしないもの」

「アレクとかには手を出していないと」

「そんな小さい子に手を出すわけじゃないでしょう……」

まだ12歳の子供に手を出すわけがないと、キャサリンはため息を吐く。しかしグランに対してだけとはいえ、それだけ誘惑するような行為をしていたら疑われるのは当たり前である。一応、まだグランは少年の類なのだから。

「とりあえず三通目『よくグランサイファーに入ろうと思いましたがね』」

「そりゃあ、ここが私にとっての居心地がいい場所になってるんだから……」

「でもまあいいいたいことは分かる。秩序の騎空団も、探偵も、シャノワールも色々居るしな」

「探偵さんの方は、案外変装してたらバレなくて済むわ。秩序の騎空団の方は……まあ見逃してもらってる感じね。シャノワールはそもそも会おうとは思わないし、会う気もないわ」

「まあ……降りるほどではないと？」

「……そうよ、ええ」

そつぽ向きながら、そう答えるキャサリン。そもそも、初めから危ないと思っていたのなら、彼女はすぐに降りていただろう。つまり、今のところは降りる気は無いということだ。

「……そう言えば、そもそもの疑問なんだけど」

「何かしら？」

「よくこの番組出てこようと思ったね」

「別に……どうせリックは見えないし、この団の子たちには顔はバレているもの」

「まあたしかにそれもそうか」

「それだけ？」

「それだけ、ぶつちやけ参加しない組だと思ってたし俺」

「まあ、そう思われるのは当たり前前よね。寧ろ、今の私の方がおかしいとも言えるわ……」

「シャノワールはすぐに顔だししそうだけどね」

高らかに笑いながら、番組に顔出しをするシャノワール。キャサリンもグランもその姿を容易に想像が出来てしまつてついつい苦笑してしまつていた。

「あいつならやりそうね……」

「シャノワールなら絶対やるな」

「……ええ、もう頭の中に本人が出てきたんじゃないかってくらい明確に出てきたわ」

「……まあ、シャノワールの話はここまでにしておこう」

そう言つてグランは話を区切る。シャノワールの話にすると延々と終わらないような気がしたからだ。

「というわけで、ここ(こ)まで(ご)視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「私に依頼してもいいけど、高くつくわよ」

最後に怪盗としての一言を添えて、番組が終了する。この団で怪盗に依頼するということはおそらく滅多にないと思うのだが、キャサリン的に言っておきたかつたのだろうと、グランは自分で納得している

のであった。

因みにここで怪盗稼業の宣伝を行うと、もれなくシャノワールが妨害にくるということはキャサリンだけしか知らない話である。別段、ここで依頼者を募ることはあまりない訳だが。

「ところで……」

「何かしら？」

「子供たちにはなんて呼ばせてんの」

番組が終わってから、ふと気になったことを聞くグラン。キャサリンの名前を知っているのは、この団だけでもグラン、ルリア、ビィの3人である。

それ以外で名前を教えるということは、彼女がするとは思えないのでそう聞いていた。

「好きに呼ばせているわ、本名以外でね」

「全部返事できるの？」

「そうよ？ 名前が幾つもあるんだもの、その辺も考えておかないといけないわ」

「ふーん……」

偽名がいくつあるのかは分からないが、グランはふと試してみたくなった。本当に覚えているのかどうか、ということをも。

「……アリス」

「ええ」

「キャシー」

「はい」

「ジユネツタ」

「はあい」

「アジエンダ」

「ふふ」

「クリステイヌ」

「OK」

「ディザスター・カオスヒューマン」  
「災厄の混沌者」

「何かし……待つて今の本当に何？」

つい反応しかけたが、キャサリンは聞き直していた。グランも『え、どうしたの急に』みたいな表情でキャサリンを見つめ返していた。

「え、何その反応……」

「いや……ただ単語を言っただけだから……」

「私の名前当てクイズとかじゃなくて？」

「いや、なんかこう……名前っぽい単語？」

「そ、そう……」

「じゃあ続き行くか」

「えっ」

まるで何事も無かったかのように、グランは再び考え始める。何故キャサリンの偽名当てクイズが、突然として始まっているのか……キャサリンはなにも理解出来ていなかった。

「ルイズ」

「え、ええ……」

「ミラジエーン」

「……はい」

「マリア」

「ええ……」

「アルティメット・デトロイテイズム・バーサーク・ディザスター・カオスヒューマン」  
「究極の破壊衝動に駆られた災厄の混沌者、マキシマム・クロニクル・ディアンナ」

「貴方ちよつと楽しんできてるでしょ」

この後小一時間ほどこれが続いたが、何だかんだグランと不承不承

ながらキャサリンは楽しめていたので、二人の間でプチ流行するのであった。

尚、さらにその後になると……子供達の間でキャサリンの本名当てゲームが始まってしまうのを、キャサリンはまだ知らないのであつた。

## ビビビの敏感シスターズ

「さて、今回の依頼の確認をします」

グランはアンスリアと共にとある場所に来ていた。それは、とある富豪が経営する個人的な会場だった。

「私がここで舞を披露すればいいのよね？」

「うん、これ以上ないってくらい客を魅了してもらっても構わない」

得意げに微笑むアンスリア。グランもそれに合わせて親指を立ててサムズアップをする。

「でも、怪盗さんの方は1人でいいのかしら？」

「あー、大丈夫大丈夫」

怪盗……夜煙、つまりキャサリンの事なのだが……今回、彼女も依頼に参加している。と言っても別の依頼なのだが、なんの偶然か依頼内容こそ別だが向かう場所は同じという奇妙な偶然が起こっていた。これをグランは好機と捉えて、同時に依頼をこなすことを思いついたのである。

「にしても、まさかこんな偶然が起きるなんてなあ……」

「ええ、結構奇妙な事よね」

実は、今回グランは特に依頼に関係ないのだ。アンスリアの護衛として来ており、依頼に関してはアンスリア個人を指定したものとなっている。

アンスリア側の依頼は、急遽休んだ人物の代わりとして舞を躍ること。そしてキャサリン側の依頼は、アンスリアに依頼した富豪の家からとあるものを盗むこと、である。

「でも、何を盗むつもりなのかしら？　グランは知っているんでしよう？」

「知ってるけど教えない、今はまだ言えないからさ……まあ助っ人は呼んであるよ。主に……アンスリアに依頼した人対策としてさ」

キャサリンが盗むとあるもの……それは、契約書である。この家に働きに来た人物を違法な契約によって縛る契約書。ただの契約書ではなく、それを書いてしまうと紙に宿った魔力によって魔法的に縛ら



れてしまうというものである。

それがある限り、契約した人達は陰口を言うことすら許されない。そんなものを許す訳には行かないので、キャサリンは働いている者達の親御さん達から依頼された……ということなのである。

「アンスリア、絶対に依頼書に名前書くなよ？」

「ええ、わかってるわ」

キャサリンが盗むとはいえ、書いてしまえばなにをされたかわかったものじゃない。故に、今回は特に念入りに作戦メンバーを決めているのだ。

「でも……今回の依頼で人数割いてない？」

「大丈夫だ、強力者もいるって言っただろ？」

今回、富豪が違法なことをしているというのは既にわかっていたことである。アンスリアの依頼だけなら断ることも出来たが、キャサリンの依頼もあれば、同時に行う事で油断を誘うということも可能なのだ。

「キャサリンは嫌がるけど、今回盗む側のメンバーとしてシャノワールとタッグを組むように依頼してる。それに、依頼者を逮捕するためには秩序の騎空団のメンバーと……全空捜査局のリックにも頼んである。」

さらにアンスリアの護衛で俺、ステージの中には客として紛れ込んでいるフェードラツヘ組とソーンを除いた十天衆組、ソーンとシルヴァで外から依頼者を視認する役割も持たせてある。

しかもその2人の邪魔はさせないようにソーンには錬金術師組、シルヴァにはマナリア組を配置してある」

「……重装備ね」

「念には念を入れて、だよ。実際みんな快く受け入れてくれたし」

一応言っておくが、契約書で縛ること以外は本当にただの一般人である。それに関してもちやんとした調査を行って判明している事だ。だが、グランはそれに対して本気で挑んでいた。

更にいうと、予め他のメンバーを使って建物内の地図も把握済みである。こちらはザーリリャオーとミラオルがやってくれている。

「さて、どうやってあの男を沈めてやろうか……」

「グラン、顔が怖い怖い」

「おっと失礼……さて、そろそろ依頼開始の時間だ。頼むぞアンスリア」

「ええ」

アンスリアが舞を踊り始めてしばらくしてから。グランたちは特に変わった様子もないことに、少し違和感を感じていた。

「ねえねえ団長ちゃん」

「シエテ……？ どしたの」

「ちよーつと……違和感があってね。あんまりにも何も起こらなすぎる」

「確かに……アンスリアはずっと舞を踊ってるし……あそこに依頼者もいる」

「幻術で見せてる幻覚って訳じゃないみたいだしね」

シエテと共に、この奇妙な違和感をどうにも出来ないでいるグラン。少しだけ、作戦の変更を行う。

「シエテ、オクトーと一緒に裏手に回って欲しい」

「了解、任せてよ」

2人なら問題ないだろうと、グランは指示を出して2人を裏手に回す。その違和感に気づいたアンスリアは、ほんの一瞬……たった一瞬だけ動きが止まったが、すぐに舞を再開するのであった。

「ふん……警備員も誰もいないなんて……実に馬鹿らしいわね」

「今回……予告状も二人分出しておきながらこうなのだから、確かに馬鹿だ」

「こちらは怪盗二人組。最適な侵入経路、最短経路、そして部屋の錠前のピッキング……これ以上無いくらいに効率的に進めている。あつという間に、2人は契約書を手に入れていた。

「ふむ……随分簡単に手に入ったものだ……」

「……偽物って線は？」

「いや、これは本物さ。契約書がもう一種類あった……なんて話だったら、こんな簡単に手に入れてもわかるんだけど」

「シャノワールが推理する。確かに契約書が本物なのは、キャサリンでも分かることである。だが、あまりにも簡単に手に入りすぎて少し拍子抜けしていた所なのだ。

「もう一種類……」

「ありえない話ではないと思うが……」

「2人は少し考える。だが、この契約書だけでも逮捕するには十分な代物であることは間違いがない。

「もう一種類探るか、はたまたすぐに戻ってこれを渡すか……考えるまでもないのが答えである。

「……けれど」

「2人戻ってもしようがない」

「じゃあ私が残るわ」

「いや、ここは変装能力が高い僕に任せてくれ」

「じゃあお願い」

適材適所、シヤノワールの変装技術は女に化けてもあまり違和感のないものに仕上がってしまう。残る方としては適任なのだ。

そして、キャサリンは契約書を受け取って急いで建物から脱出する。

「さて……では僕も頑張るとしようか」

全空捜査局や秩序の騎空団と協力する怪盗なんて前代未聞なのだ  
が、しかしそんな前代未聞の騎空団に依頼してしまったこの富豪に  
対して、同情……では無く滑稽だと嘲笑う気持ちの方がでかいシヤ  
ノワールなのであった。

そして、脱出したキャサリンは――

「……うーん」

何故か道に迷っていた。来る時の道をたどっているはずなのだが、  
何故か全然違う場所に来てしまっていたのだ。

「1度入ったら出られない？ いや、そうじゃない……この建造物  
にそんな魔法がかかっている気配はなかった」

では一体どういう事なのか。頭の中で素早く自問自答を繰り返し  
ていき……キャサリンは入る前と今とで1つの違いに気がついた。  
そう、契約書だ。

「……かかっている魔法は一つだけじゃない。この契約書を手に持つて  
たら、外に出られなくなる……？ と言うよりも、正しい道がわから  
なくなると言った方が正しいわね……」

故に警備員も必要ないのだ。なぜなら、持った時点で脱出は限りな  
く不可能になっているのだから。

「随分と姑息な真似してくれるわね本当に……」

だが、迷宮を歩かされている訳では無い。ただ方向が分からなく  
なつて正しい道が選択できない……ただそれだけの魔法なのだ。限  
りなく不可能なのであって、確実な不可能ではないのだ。

要するに、ここでキャサリンが撮るべき行動はただ1つ。

「闇雲にバレないように探し回るしかない……！」

要するに、脳筋プレイを行おうという話なのである。世の中には、

こういった手法を取る方が早いということもある。というわけで、キヤサリンは闇雲にスタートに戻るのを決意するのであった。

「うおおおおおおお！ アンスリアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!」

熱狂的なファンの声を聴きながら、アンスリアは一礼をする。舞は終わり、台からおりる算段となっている。だが、それよりも早く富豪がアンスリアのいる団に上がる。

「ありがとうございます、よければここで働いてくださいませんか？」

「あら、お誘いは嬉しいのだけれど……私既に先約がいるのよ」  
「まあまあそう言わずに……」

ふと、グランは思い出した。この男は人を縛る魔法が得意なのだと。そして、人を縛るのは何も紙の契約書出なくてもいいということに気がついた。

要するに、今アンスリアは言葉で縛られかけている。それに気づいたので即座にドクターにジョブチェンジして、一瞬でなんか煙の出る薬を錬成する。

「これでも喰らえ……!」

そして、その液体が入った注射器を首元に目掛けて投げる。クリーンヒットにより突き刺さり、中の液体が注入されていく。

「あべべべべべべべべべべべべべべべべ」

「え、え……」

「あー、はいはいどいてどいて……あーこれダメですね、すぐ病院行き  
ましようねはい」

「え、え……」

困惑しているアンスリア。しかし、グランは敢えて無視して他の従業員と共に富豪を運んでいく。そして、そのまま会場から出ていってしまう。

「……で、では……今回はこの辺りで……終わりよ……」

そして、最終的にはアンスリアが無理やり閉める形となって終わるのであった。

「ねえグラン？ 見てたけど貴方、何を打ち込んだの？」

「わからん、とりあえずジョブチェンジした時に持つてる色とりどりの液体を適当に混ぜたら出来た」

「ええ……」

降りてきたソーンと話をしながら、グランは全員と落ち合っていた。唯一まだ居ないのはシエテ、オクトー、キャサリンの3人である。

「いやあ！ ごめんごめん遅れちゃったよ!!」

「2人がいて助かったわ……」

「どうやら、道に迷わされていたようだな」

そして、その3人もタイミングよく戻ってきていた。そして、いつの間にかやらいしたシャノワールの手にはもう一種類……とは言わず5種類くらいの資料があった。

「まさか、これだけ資料があるとは思わなかったよ」

「まあ俺としては従業員全員富豪に従わされていただけで、訳を話したら全員協力してくれたことが1番予想外だったよ」

全員の先頭にたちながら、グランは歩き続けていく。その後を団員達が追っていく。

「……でも、流石に私1人放置はひどいわよ」

「いや、ほんとごめん」

「駄目よ、言葉だけじゃあ許さないんだから」

珍しく頬をふくらませて怒っているアンスリア。グランは頭をかいて、どう許してもらおうか考えて……1番いいと思う意見を抽出する。

「じゃあ今度デートしよう」

「えっ!？」

アンスリアが1番驚き、そして周りの女性陣は皆固まっていた。いきなりこの言葉からはいるのだから、ある意味当たり前といえば当たり前なのだが。

「え、ダメ？」

「だ、だめじゃない……」

顔を真っ赤にしながら、受け入れるアンスリア。因みに、その後行ったデートでは何故か2人で1緒にラーメン食って本読んでいっしよに寝るだけの生活だったという。

尚、アンスリア本人は嬉しかったのと……その話は別にするほどのことでもないので割愛させていただくのであった。

## 世紀の大怪盗、その程度かい？

いつも通りのそれっぽいBGMを流しながら、グランは今日のゲストと相対していた。因みに今回の衣装は妙に武器ばかりを装備しており、全体的に刺々しい見た目となっている。近い見た目でいえば、ホーリーセイバーが武器を鎧中に付けていると言ったところだろうか。

そしてそんな格好をする理由としては、目の前のゲストにあるのだが――

「今日のゲストは怪盗シャノワールです」

「おや、私には『さん』を付けないのかい？」

「いやなんか、さん付けよりこつちの方がらしいじゃない？」

「確かに……私は誰かに『さん』を付けられる事に多分違和感しか感じないだろうからね」

「そういうこと。ところで、なんか今日番組内でするみたいだけど？」  
「そうだねえ……この番組中、私が団長から何かを奪うっていうのはどうだい？」

指を鳴らして挑発するシャノワール。グランはそれに対して不敵に笑みを返すだけである。

「ふ……やれるものならやってみるといい、ただし俺からそう簡単にものを奪えると思うなよ？」

格好をつけているグランだったが、そのズボンはベルトがないせいか綺麗に床に落ちていた。格好をつけても格好のせいで格好が付かない状態である。

「ベルトを初めから奪われていることに気づかないなんて、これは随分と簡単に奪えそうだな」

「ふ……俺が気づいていないとでも？ そのベルトは奪わせたのさ……」

「おや、負け惜しみかい？」

「いいや？ 負け惜しみじゃないさ……だってほら、こういうことすると大体犯人の後ろにリーシャが現れるからさ」



「おつと落ち着き給えよ秩序の騎空団の人、私は別に団長のことを狙っているとかそういうのではなくてだね、ただのイタズラでこうしただけであって別に大した意味は無いんだ本当だ」

「凄まじい弁解速度だ……」

突如現れるリーシャ。真昼間なのに、窓から陽の光が差し込んでくるにも関わらず、その顔は闇に染まっていた。珍しくシャノワールも冷や汗を描きながら必死に弁解していた。

その弁解が今は通じたのか、リーシャは気づけば部屋から姿を消していた。

「……さて、仕切り直していきましょう……で？　まさかベルトを奪うので終わり？」

「そういう訳では無いさ、因みに私は既にそのものを奪っている。番組の前の諸君は、何が奪われたか答えてみるといい」

「因みに俺は予めわかっているぞ、ベルトじゃないからな」

2人してカメラに向かって指を鳴らして、この番組にあるまじきクイズを提出していた。そして2人はそのまま何事も無かったかのよう進行していった。

「さて、このままお便り紹介と参りましょうか」

「いいねえ」

「では一通目『手品のレパトリーを教えてください』」

「……ん？」

「シャノワールの手品のレパトリー聞いているから、早く教えてあげて」

送ってきたのは子供だろうか、それともからかいただけの大人だろうか。シャノワールはそれを考え始めたが、直ぐに辞める。別にどっちでも意味が無いからだ。

問題なのはそれに乗ったグランの方である。

「いや、私は手品師ではなくて怪盗で……」

「レパトリーを教えろって言うてんだ」

「……くっ……私は手品師ではない……だが、まあ……技術を応用すればできないことは無い」

「お？　どんな奴？」

「ここに帽子があるだろう？」

つけていた帽子を外し、上下逆さまにするシャノワール。そこに短い杖を数回当てて。グランは読んでいた、これは有名な帽子からハトを出す手品だと。

「ふふ……まあ有名なやつを少しアレンジしたものさ」

「出てくるのがエヴィとか？」

「さすがにそれは出さないが……例えばこんなのを」

そこからゆつくりと現れるもの……それは妙にデフォルメ化されている目から光をなくしているルリアだった。グランは悟った。あ、このルリアやばい方のルリアだと。

「しまえシャノワール」

「まあこれは例の機械技師君が作ったロボットだけだね」

「ジュルリア」

「なんか鳴いてるんだけど、怖いんだけど？」

帽子を元に戻し、シャノワールは被り直す。あのメカチビルリアが帽子の中に入ってるのかと思うと、グランはどうも悪い予感しかしていなかった。

「まあ、しがない手品しか出来ないよ、こちらにはね」

「そうか……まあ、あれでいいか……これ以上恐怖を煽られたくはないし……」

「懸命な判断だと思うよ」

「じゃあ二通目『変装技術、どうやってるんですか？』」

「どうやってる……曖昧で答えに悩むね」

「まあ技術漏洩だしな」

シャノワールは嫌っているが、彼の変装技術はかなりの制度の高さを誇っている。自分よりも身長が下のハーヴェインなどは難しい様だが、それ以外なら基本的に見た目は完璧に変装しきるためだ。

「まあ技術漏洩しない範囲で私が教えられるのは、相手の特徴をよく見て、聞いておくこと……だ」

「と言つて……」

「顔まで似せてくるとなると、特殊な技術が必要になってくるが……それ以外なら簡単に似せることが可能だ」

「ほう」

「そうだね……例えば、髪が長い女性なら色まで合わせた上でそのカツラを被る。胸が大きいのなら柔らかいもので詰め物をする。後は肌だと誤認しやすいように肌色の薄い生地を纏っておく……と言った具合かな」

「当たり前といえば当たり前前の話だ。見た目を似せなければそもそも話にならないのだから。しかし、よく見ての部分が見た目だったとするならば、今度はよく聞くの部分の説明がある。」

「それと、口癖や喋り方とかも考えておかないといけない」

「というところ？」

「例えば、お淑やかな人ならゆったりと……激しい人なら荒々しく……ちゃんと性格も見極めておかないといけないよ」

「まあ、喧嘩上等な性格のやつが静かに喋ってたら違和感だもんなあ……これは極論だけだよ」

「まあそんなイメージで構わないさ」

例えばグレアがツバサのようにオラついたり、ツバサがグレアのように基本的にお淑やかだったら違和感しかないだろうという話である。

「まあこれ以上は語れないかな」

「ところどころでさ」

「ん？」

「声ってどうやって似せるんだよ、1回というか結構な頻度で女性に変装してたよね自分」

声はなんとか高くしていたようだが、それは元々シャノワール自身の声が比較的高いものだからだ。声の低い男性が仮に声の高い人物に化ける場合、どうするのだろうか。

「まあ……声に関しては頑張って欲しいという他ないね」

「あ、やっぱりそんな感じなのか」

「まあ、自分にできない変装をすることは滅多にないだろうけど」

「ほう、というと？」

「ハーヴェイン達はハーヴェインにしか変装できない、ドラフの男性はドラフ、ドラフの女性もまた同じだ。」

エルーンもエルーンにしか変装できない……ヒューマンは、何とかハーヴェインとドラフの男性以外になら変装は可能だと思うよ」

まあ確かに、とグランは納得を示す。ドラフの男性はデカイ、身長は基本的に2mを超えている人物がほとんどだ。しかも、ドラフ属には特有の角がある。それを踏まえて考えると、同じ角のあるドラフ属にしか変装できないというのも理解できるのだ。

エルーンもしかり、ヒューマンもしかり、である。

「ではそろそろ3通目『手品師っぽい格好の意味は？』」

「私は怪盗シヤノワール、怪盗だがその存在をアピールするためこの格好が必要だと判断した迄さ」

「まあお前自分のアピールの仕方すごいもんな」

キャサリンとは違い、目立ちまくることを信条とする。そしてその上で逃げ切っているのだ。言動がふざけていたりするようにも見えるが、何だかんだ実力はかなり高い方である。

「まあそもそも怪盗は犯罪なんだけど」

「ふふ、私も夜煙も……それをわかった上で行っているのさ。まあ、夜煙に関しては怪盗かつ義賊と言った方がわかりやすいかもしれないがね？」

「ま、その格好は目立つけど暗いところだと姿を消すのに便利そうだしな、黒いし」

「金色の装飾も入っているけどね」

目立つのか目立たないのかよく分からないが、まあ服装にも気を使っているというのは、怪盗としては当たり前なのかもしれない。軽装に軽装を重ねていくキャサリンもそうだが、怪盗は衣装に気をつけるというのが当たり前ということのようだ。

「因みに、団長も義賊の格好があったらどう？」

「ああうんあるけど」

「あれもあれで目立つから、『そういう仕事』がしたくなった時とかに

使うと快感だよ、ははは」

「まあ俺団長だから？ 犯罪なんてしないし？」

「どの口がそれを言うのかな、ちよつと頭の中見てみたいよ」

「勘弁してくれ、頭の中見られたら本音が爆発しちゃうだろ」

「今以上に？ 逆に興味深いな」

最早勢いだけの会話を続けるグランとシャノワール。グランはもとより、シャノワールはそれに乗っかっているだけのようにも思えている。

「……つと、もうこんな時間か」

「おや……もう時間が来てしまったか。楽しい時間はいつも終わりが早く感じてしまうね」

「それに関しては同意しかない」

「さて、ここで冒頭に出したクイズだが……答えがわかった人は団長室に来て欲しい」

「俺に答えを伝えてくれたら、まあ褒美として飴ちゃんをやろう」

そう言いながら、袋に包まれた飴玉を見せるグラン。それはちよつと高級なお菓子のお店のものであった。

「という訳で、本日のご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「私に盗んで欲しいものがあるなら、私を見つけてご覧。きっと叶えてあげるよ」

その後、何人かが部屋に訪れて飴玉が渡されていた。しかしどうし



モーターデイテクティブ、俺の推理を聞くか？

「わからん!!!」

「どうしたんだよ今日のゲストの探偵バロワさん」

「前のシャノワールの時の問題の答えだ!!」

机を叩いて本気で悩んでいるバロワ。それを見ながら、冷静に対処していくグラン。前のシャノワール……その時に出したクイズ『グランはなにを奪われたのか』というクイズである。

ヒントは『バウタオーダって、あの格好で指鳴らせるのかな』である。このヒントで理解した者も入れれば理解しない者もいる。バロワは後者だったようである。

「しようがないなあ……まあ直接言うのはアレだし、もう一個ヒント出そうか」

「頼む!!」

「というわけで、今から行うことが大ヒントです」

そう言いながら、グランは籠手を付けた手を取り出して指を鳴らそうと動かすが……ただ鉄と鉄がぶつかる音が響くだけであり、指を鳴らすことは出来ていなかった。

「……何をしているんだ?」

「これがヒント、さて俺はシャノワールといた時に指を鳴らすことは出来ていたかな」

「……確か、指は慣らしていたな……うむ。その時にはちゃんと鳴らせていたのを俺は覚えていたが……ああっ!?!」

ようやく理解出来たのか、バロワは大声を出しながら机を叩く。元軍人かつドラフの男性ということもあり、そろそろ机が潰れるんじゃないかと思えてくるグランだったが、そんなことも無く机はいまだ無事だった。

「籠手か!!」

「はい正解、あの時奪われていたのは籠手でした。そもそもあの時の俺の格好ごっちゃごちゃしてただろ? 鎧とか武器とかで」

「確かに……そう言えばそうだ……! あれは籠手に意識を向けさせ

ないための心理戦だったか!!」

『ぶっちゃけそこまで意識していない』とは言いにくく、グランは笑って誤魔化した。ごちゃごちゃしていたのは確かにそうだが、別に意識を逸らさせようとかは一切考えていなかった。

「まあシャノワールの盗みの技術は確かに凄かったよ、取られるの計画したの俺だけど、取られたタイミング分かんなかったしな」

「そうだ！ あいつはそういう誰にも気づかれないタイミングで盗むのだ!!」

シャノワールの話になると問答無用でヒートアップするバロワを見て、グランはただ静かに見つめるだけだった。正反対の2人だが、特になんら問題もなく進行されていく。

「さて、そんなシャノワールと宿敵であるバロワにもお便りがいっぱい届いております」

「ほう！ この探偵バロワにかかればどんな些細なことでも解決してみせよう！」

「1通目『推理と言う割には腕力を行使してばっかりな気がしますけど』」

「何を言う！ そんなことは無いぞ!!」

「ほう、では色々確かめてみよう」

そう言ってグランは知恵の輪、ルービックキューブ、そしてパズルを取り出していく。そして最初に知恵の輪をバロワの方に投げて、ただ一言だけ告げる。

「これ番組内でクリアしてみせて」

「ふんっ！」

そして大きな金属音と共に破壊された知恵の輪がグランに投げ返されていた。バロワの顔はとても満足気だったという。グランは知恵の輪とバロワを交互に見ることしか出来なかった。

「どうだ、出来たぞ！」

「バロワ、知恵の輪を砕くのは知恵の輪を解除したって言わないんだぞ」

「なんだと……!?!」



「そこまで驚かれると俺の方が間違ってたのかとさえ思えてくる」

焦るバロワ、冷静に見るグラン。バロワはそのままルービツクキューブを手にとって、片手で砕く。

「これはルービツクキューブを解決したんじゃないのか!？」

「それただ壊してるだけだよ、マジで?」

思ってた以上の脳筋っぷりを発揮しながら、バロワは驚いていた。グランはもはやドン引きしていた。元軍人とはいえ、明らかに脳筋過ぎるのだが本人は一応探偵業で稼いでいるのだから世界は分からない。

「……なんという事だ……」

「……まあ、うん。探偵にも力技が必要な時だってあるよ」

「やはりそう思うか!？」

「実際それで助かっていること多いから、本当にそう思えてくる」

パワーオブパワーというのは、このことだろう。一緒に謎解きしている時ほど、バロワのパワーに助けられたことも少なくないのだ。だからこそ、グランは複雑な思いを抱いてしまっている。

「もうちよつと頭使ってくれたらかつこいいんだけどなあ……」

「もつと褒めてくれてもいいからな!」

「……まあ、いいや。2通目『怖いものつてありますか?』」

「ふつ……怖いものなんて探偵には——」

「前にあつた昆虫大天国の島の話でもする?」

「待ってくれ」

グランが冷静に言い、バロワが即座に止める。昆虫大天国の島というのはグランが勝手に呼んでるだけだが、その島でシャノワールと関わったことがあるのだ。

その際に、トラップの一つに幽霊を出したりゾンビを出したり……もちろんただの細工なのだが、それで驚かすには十分な時もあった。それでびびったバロワだったが、その際に下着が1枚ダメになってしまっているのだ。

「どうしたの?」

「その話はやめてくれ」

「しようがないなあ……正直にいえばいいよ」

「む、むう……おば……じゃ無いな……非科学的なものとかが怖いな……特にそれを信じてしまっているという人物とかな!!」

グランは少し考えて、それでいいかとスルーした。別段驚かす気もないし、正直に答えてくれればいいと思っていたので言い方は問題ではないのだ。

「まあ、間違っていないからいいか……でも大の大人があればいいよ」「言わないで欲しい……」

「俺が女の子だったら本当に悲惨なことになってたよ」

因みにその時一緒にいたのは、ルリアとビィは勿論マリーとフェリの2人がいたのだ。因みに、お化けやゾンビに見せかけたトラップに対してフェリは本気で怖がっていたのをグランはよく覚えている。なんだったたら、写真まで撮ってみたかった程である。

「そんな仮定の話をしてもな……」

「仮定は大事だぞ？ ハーヴィンの若い子とか男か女かたまにはつきりしない時があるからな……」

「……そういう……」

微妙に共感出来たのか、バロワも否定せずにそのまま納得の表情を浮かべていた。流石の探偵でも、ハーヴィンの男女の区別がつきづらい時があるようである。

「じゃあ3通目『サーヤのことをどう思っているか』」

「随分と曖昧な質問だな」

「で、実際どうなの」

「実に優秀な女性だと思っている、俺の推理を先に言ってくれたりするんだからな」

サーヤ、バロワの探偵事務所で働く女性である。頭脳明晰とは彼女のことを指しており、バロワ探偵事務所の稼ぎ頭でもある。仕事熱心というべきだろうか。

因みに趣味は読書である。

「ほー……」

「だが、戦闘面はやはりどうしても苦手らしくてな。最低限の格闘術

だけ教えている」

「格闘術だけ……つて、人間相手？」

「ああ、犯人を捕まえるときに逆上されて襲われては敵わんからな。軍役時代の格闘術は徹底的に教えこんでいる」

「確かに、それは大事だ」

犯人という未知数の危険人物と関わる以上、そういった技術も確かに大事なのだ。ただ推理して犯人当てした所で、それに素直に従って降伏してくれるわけではないのだから。

「まあ、さすがに俺レベルになれとは言わんがな」

「そもそもバロワに対して襲いかかるのって相当勇気いると思う」

肉弾戦慣れしていないドラフの男性に会ったことがないため、グランは判別しにくい……くそ太い腕や足を持つ相手に対して、軍人レベルの格闘術まで身につけていれば基本的に負けることはないだろう。

相手が相当の強者でなければの話だが。

「やはりそう思うか？」

「でかい男相手にするのってなかなか勇気がある、単純に大きさっていうのは相手に威圧感を与えるのにピッタリだし」

グランも良くあることのために、ほのぼのとして語るが……探偵をやってるバロワが過去の軍隊時代を踏まえてもそこまで大きな敵と戦っていたかは定かではない。

「ふむ……俺も大きな相手に対して戦える術を身につけておくか……？」

「いやあ、別にやらなくていいんじゃないかな」

もはやその大きさの相手は魔物くらいしか居ないだろうし、そもそもそんな大きな魔物に対して格闘術で戦えるのは、十天衆クラスの使い手のみだろう。

「そうか？」

「そうだよ、探偵なんだから人しか相手しないでしょ……」

「いやあ、分からんぞ？ 人相手とはいえ、その相手が大きな機械に乗るかもしれない」

「それを格闘術だけで倒そうとしているって言うのは、多分勇気を通り越してただの無謀になっていると思うよ」

「無茶と無謀は履き違えんさ!!」

「バロワにしてみればちよつとした無茶程度に収まるってわけか……」

改めて、バロワの脳筋っぷりをグランは認識し直すのであった。そして、し直したところで時間が迫っていることに気づく。

「と言うわけで、ご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「難事件はいつでも解決! 探偵バロワに解けない謎などない!!」

考えていたのか、はたまた前から会ったのか。キャッチコピーらしきものを叫びながら、バロワは決めポーズのままカメラに向かっていたのであった。

「因みにパズルはどうやって解くの」

「ふ……パズルなんて御茶の子さいさいさ」

きつと腕力に任せて解くんだろうなあ、とグランはしみじみ予想していたが……結果は全く別のものへと成り果てていた。

「まず角が直角の物を探すんだ。そしてちゃんと枠との絵柄が一致する場所を探す。そうしたら今度は、1部分が直線のパーツを探して……これも絵柄が会うところを探していく。

そして外周が埋まれば……後は絵柄と形をみながら当て嵌めていくだけで、簡単だろう?」

「誰だお前!？」

「なっ!？」

バロワが腕力にものを言わずにクリアしたことを踏まえて、グランはつい叫んでしまっていた。バロワもまさか自分の正体が疑われると思っていなかったのか面食らっていた。

「そうかシャノワールだな!? 身長がだいぶ違うけど案外なんとかなるだろうがよ!!」

「こうやって自分がシャノワールに疑われるのを見ると、少し心が痛いな……」

「よし暴いてやる!! お前の正体を!!」

「私はシャノワールではなく本物のバロワだ!! 信じてくれ!!」

「そういう奴ほど偽物だったりするんだ!! 覚悟しろ!!」

こうして、急遽バロワとグランの正体当てゲームが開催されてしまった。なおやることは『バロワだけが知っていること』をひたすらに聞いていきグランが確信をもてるだけ続けていくのだ。

尚、例の昆虫大天国の島の話を持ち出してその時シャノワールだけが知りえないことを聞いた時にすぐに確信が持てたため、グランのこのゲームは開始数秒で幕を下ろしたのであった。

探偵助手、何してるんですか？

「今回のゲストは探偵バロワの助手、サーヤさんです」

「サーヤです、よろしくお願ひします」

「いやほんと、真面目だねえ」

「あ、ありがとうございます」

グランはサーヤに優しい笑みを浮かべながら、前回と前々回の事を思い出していた。怪盗シャノワールと探偵バロワ。お互いが終生のライバルなせいか、割と似たような部分があった。真面目にやってくれていたのは2人とも事実なのだが、真面目の軸がズレているのがグランにとってはよく覚えていることである。

「ところでサーヤつて運動はできるの？」

「へ？ ま、まあ先生を追いかける為にある程度鍛えましたけど……？ それがどうかしたんですか？」

「いや、走るの慣れてるとかなんだったらそれでいいんだけど」

この時、サーヤはグランのこの言動を推理した。なぜ唐突に運動のことを聞いたのか、と。バロワは元軍人、運動もできるし体力もかなりある方である。

そしてシャノワール。彼はバロワから逃げ切ることの出来る足と体力、そしてトリックの技術を持っている。

そこからサーヤは答えを導き出していく――

「……なるほど、私が先生達に追いつけていないと思ってるんですね？」

「……そうそう！ そういう事！」

サーヤは答えを導けたと心の中でガッツポーズをしていた。謎を解くのは、彼女も好きなのである。

但し、今回グランはそのような意図があつて聞いた訳では無い。無論、ちゃんと追いつけているか？ と気になったことはあるがサーヤの性格を考えたら、何とかして追いつこうとしているのは明白である。だから、そこは聞かなくてもわかることなのだ。

気になったのは、彼女が女性ドラフだからこそ出てくる特徴による

ものだ。はつきり言えば遠回しのセクハラである。気づかれなかっただけマシなので、グランはサーヤの勘違いに乗る事にしたのであった。

「さて、そんな助手サーヤにも色々なお便りが届いています」

「き、緊張しますね……」

「緊張も回答のスパイスという事で1通目『眼鏡かけてるのに虫眼鏡使うんですか?』」

「目、目が悪い人はみんなそうなりますよ!!」

「まあ虫眼鏡は小さいものを見るものであって、普通のメガネは視力の補強だしなあ」

同じ眼鏡と言っても、使い方で別れてくる。虫眼鏡と普通の眼鏡は全く別の使い方をするものなので、同時に使ってもおかしいことは何も無いのだ。

「そういう事です!」

「でも眼鏡かけてる子が虫眼鏡かけてるのは可愛いと思う」

「かわつ!」

一気に顔を真っ赤にするサーヤ。あまり言われ慣れていないだけなのかもしれないが、可愛いと言って顔を真っ赤にするところがグラシム的にはさらに可愛さを呼んでいた。

「さて、真っ赤になったので2通目に行きましょう『探偵事務所は儲かってますか?』」

「え、えーっと……」

「顔の次はお財布が真っ赤な事情か……」

「はい……火の車です……」

バロワ探偵事務所、バロワの経営する探偵事務所と名の通りである。しかし、実態はあまりにも依頼がこなくて経営するだけでもいっぱいっぱいの状態である。

「それでもやり続けられてるから、実績は固まってきてるんだろうなあ……」

「まあ、ココ最近はやノワールとの激闘が広まっているのか依頼も多くなってきました」

「給料は？」

「前は滞ることがありましたけど……最近は何とか……」

「お財布が火の車なんて言ってる場合じゃねえな……」

「こ、これでもマシになったんですよ!？」

グランも出会い当初から気になってはいたのだ。グランサイファーに乗船する際、そして騎空士としての依頼の報酬を見た時の驚きよう……それらを踏まえると、あまりお金に満足しているとは言えないのではないかと。

「……探偵と騎空士、どっちが儲けてる……?」

「……」

目を伏せるサーヤ。どうやら、騎空士として生活している方が儲かっているようだ。

「せ、先生には今まで滞っていた分の給料は渡されました……」

「つまり……」

最早サーヤも認めていることなのだろう。儲かっているのは騎空士の方だと。確かに、基本的に自分から受けに行く騎空士と待ちの姿勢の探偵では、前者の方が儲けることが多いだろう。世知辛いその事実を認識した時、グランは涙を流していた。

「な、なんで泣いてるんですか!？」

「世の中の世知辛さに……」

騎空士と言えど金がいる、探偵といえど金がいる。世の中の金の必要さにグランは涙を流すしかなかった。

「食品が値上がりした時とか大変でしょ」

「ああ……確かに……そう言えば、ここは人が多いから食費だけでも馬鹿にならないのでは……?」

「まあねえ……値上がりした時とかは結構きついかも」

仮にいつもみんな食べているものが10円ほど値上がりした場合、既に200人近い数のグランサイファーはその食材一つだけで2000円上がってしまう。

しかも、一人前の料理で1つ以上使う可能性もあるので実際はかなりの出費になる。



「食費も馬鹿にならないからね……最近食堂班にはエコ料理の実践をしてもらってるよ」

「エコ料理、ですか？」

「そうそう、まあ食材を余すところなく食べようねって話なんだけど……これが意外と上手くいく」

「その話聞かせてもらっても？」

「別にいいけど、時間もあるからまた後でね」

「はい!!」

このままだと食費談義がはじまってしまいそうだったので、グランは一旦その話を別のところに置いてもらってから、最後のお便りへとかかる。

「3通目『趣味は読書らしいですけど、どんな本でも読むんですか?』」

「ええ、それはもう沢山!!」

「ルナールが書いてるような？」

「読みますね」

即答だった。時々シャノワールとバロワの話をする時にラブレットとか、そういつたちよつとアレな意味合いを持ちかねない言葉のチョイスをしているとグランは思っていたが……ルナールが呼んでいる耽美絵のようなものまで網羅しているとは驚きだった。

「……本当に色々読むんだ」

「読書は知識を貯めてくれますからね」

「好き嫌いはない感じ？」

「はい、漫画も小説もちよつとあれなものまで全部網羅しています!」

「ホラーは？」

「……」

無言になるサーヤ。恐らく彼女のことだから読まないことは無いはずだが、ホラーが別段得意という話も特に聞かないので、なぜだか葛藤に悩まされているような印象を受ける。

「まあとりあえず好き嫌いなく読むことはいいい事だよ」

「で、ですよね!」

「となると……ルナールとは個人的に付き合いとかしてる感じなの

？」

「はい、いつも本を買わせてもらってます！」

「そうなんだ……」

絵柄で好き嫌いをわけないのは、いいことである。ルナールの絵は、本人も認めていることだがどうしても魔物のような絵になってしまうのだ。ココ最近は、絵の矯正が出来ているのか人に見えてくるようになってきている。

「因みに、ルナールさんが書いた魔物本もありますよ」

「あれもか……」

生活の為に、ルナールは一時的に魔物図鑑を書いていたことがある。躍動感に溢れるものであり、シエロカルテからも絶賛されるものだったりにしている。

今は魔物絵は書いていないが、知る人ぞ知る逸品という扱いである。

「あれちよつと欲しかったんだよな……」

「今度一緒に読みます？」

「お、いいね」

魔物に興味が無いわけじゃない。狩る側に回っているからこそ、知っておきたいこともあるという話である。

「そう言えば、ルナールの心の師匠が書いた本も合ったつけ」

「はい、そちらも買わせていただいています」

因みに、ルナールの心の師匠はルナールの書いた魔物図鑑に感銘を受けて今は耽美絵を書くのをやめて『マモモノ』というジャンルを書いている。魔物の擬人化本である。

お互いがお互いに心の師匠化しているためか、今2人はかなり親密な仲になっているようだ。

「あの2人が技術を教えあって、教えあってる中で技術を高め合う……新ジャンルの開拓はやはり辞められません！」

「……」

ふとグランは思った。『騎空団に入る前からこの調子だと、環境はだいぶやばかったのではないだろうか』と。

「……まあ、今が良ければいいか」

「はい？」

「いや、なんでもないこっちの話」

「はあ……？」

サーヤは不思議そうな顔をしているが、グランがなんでもないと  
言ったのを信じたのかこれ以上追求することは無かった。

「さて、そろそろ時間なので今回はここまでです」

「ではまた後で話し合いますよう！」

「おうけい、というわけでご視聴ありがとうございました。また次回  
この番組でお会いしましょう。さようなら」

「依頼があるならバロワ探偵事務所に！ 是非!!!」

「もやしは炒めても炒めなくてもうまい」

「分かります」

番組が終わってから、謎の料理トークを始め出す2人。グランのザ  
ンクティンゼル生活秘話から、サーヤが学ぶべきことは多かったよう  
だ。

「虫食べてたって本当ですか？」

「そこまで生活貧困じゃなかったよ？ ちよつと田舎っただけで食べ  
物は虫とかじゃなかったよ？」

「じゃあ木の幹ですか？」

「ザンクティンゼルをなんだと思ってるの？」

「とてつもなく強いおばあさんがいる世紀末島」

「最後に突っ込みたいのにながち間違っただけから何も言えない」

前言撤回、実は特に料理関係の話題というわけでもなかった。というよりも、サーヤの発想にグランが追いついていなかった。

「でも実際結構田舎だからそう思われるのも仕方ないのかもしれない」

「そう言えば種族構成みたいなのってどうだったんですか？」

「ヒューマンしか見た事なかったかも、ドラフとかエルーンとか……見覚えがないなあ」

ふと故郷のことを思い出すグラン。思い出そうとしている中で、ふとした違和感に襲われる。

「おかしい、5年くらいたった気がするのに実は1年も経ってなかったりしない？」

「そこら辺はあまり考えない方がいいと思います」

「そうかな……そうかも……」

少し踏み込んで行けない領域の話に入りかけながらも、グランはサーヤと会話を続ける。続けていく中で、ほんの話題にシフトしていく。

「今度どんな本読みたい？」

「恋愛小説とかですかね」

「ルナルルに書いてもらうか」

「え、耽美絵を看極めようとしているんじゃないんですか？」

「いや、情報として地の文が書けるようになりたいとか言ってたし」

「漫画と小説はまるまる違いますよ……？」

結局、このあとはグランとサーヤでお互いで本を借り合い、読み終わった時に返しあってからまた借り合う……といった繰り返しを続けていく結果となった。

「では私おすすめめの推理小説、大事にしてくださいね」

「そっちこそ……俺の秘蔵本達を頼んだぞ……」

「男の人の秘蔵ってエッチなものって聞いた記憶あるんですけど、実際どうなんですか？」

「さすがに異性に渡せるほど俺は上級者じゃないから」

こうしてグランとサーヤは無事本の同好会へと成り立ったのであった。その後同好会のメンバーが徐々に増えていったのは……また別の話である。

## LETS推理タイム

「ふむ……」

「そんな……」

「なぜだ……」

とある理由により団長室に集まったバロワ、シャノワール、サーヤ。しかし、三人が目にしたもののせいでバロワとシャノワールの間で逃走激が起こらないこととなってしまった。

「まさか、団長が部屋で血まみれになりながら気絶してるなんて……」

「これは事件だ!!」

倒れているグラン、血まみれとなったその姿は実に悲惨なこととなっていた……のだが、ここでサーヤが気づく。

「……これ、多分ケチャップじゃないですか?」

「何だと?」

「……さつきからやけにトマト臭いとは思っていたけど……なるほど、血ではなかったか……」

「では、なぜ逆にケチャップまみれに……? という謎が残ります」

部屋の中には、ケチャップを使うような食べ物も置いていなかった。無論、グランの下敷きになっているだろうとも考えたが、あるのはケチャップばかりであり入れ物すら見当たらない状態だった。

「ふむ……一旦団長から服を脱がせた方がいいんじゃないか?」

「か、怪盗シャノワール!? 何言ってるんですか!?!」

シャノワールが真顔で言ったことにより、顔を真っ赤にするサーヤ。しかしバロワはシャノワールの言いたいことが理解出来たのか、上半身の服だけをぬがしていく。

「君にしては珍しく勘が冴えてないな」

「……あ、もしかして……服の内側に何か仕込んでた可能性、ですか?」

「その通りだ、しかしよく今の一言でわかったね?」

「軍時代の賜物だ、血糊を入れた袋を急所の上に重なるように仕込んで特訓したのさ。どうやって当たらないように反撃するか……とね」

「つまり……」

グランの服の内側……バロワが取り出したのは破裂した後の袋だった。中にケチャップが詰められていたことがよく分かるように、所々ケチャップが付着していた。

「……ふむ、やはりな。服の内側にケチャップを入れた袋が入っていた、倒れてしまった時に体と床ではさまり……そして破裂したと言ったところだろう」

「では……どうして倒れてしまったのでしょうか。倒れてしまった袋が破裂して気絶……では無いでしょうし……」

「どちらにしても、証拠を探さなければいけないかもね」

シヤノワールは部屋をぐるりと見渡す。なにかおかしな所はないか、おかしなものが無いか……しかしよく訪れる団長室そのものであり、この部屋には特に以上は見つからなかった。

「おかしな所は何もない……つまり、現場はここではない可能性がありません」

「ならばなぜここに倒れているかが問題だが……」

「ふむ……ならば聞きこみ調査などはどうだろう」

「なるほどな……まともなことを言うじゃないかシヤノワール」

こうして、奇妙な3人組は聞きこみ調査をするために1度部屋を離れるのであった。勿論、団長であるグランはその場に置いていくことになっているのだが。

「ダンチョ？　　そういや、朝オレらがケチャップ入った袋渡してから

見てないっすわ」

「やはりね……」

「何がやはりなんだ、シャノワール」

「状況証拠だけとはいえ、この事実なら恐らく真実までたどり着ける」

キッチンにて、ローアイン達に話を聞く三人。ここで得られた情報は、グランが朝ローアイン達にケチャップが入った袋を貰ったという事だけだった。

「聞かせてみろ」

「いいかい？ まず私達とはある前提で動いてしまっている」

「とある前提……？」

サーヤが首を傾げる。シャノワールは1度頷いてから、ローアイン達にもらった紅茶を飲みつつ語り始める。

「まず人が倒れている……その事で『誰かに襲われた』という判断を無意識の内にしてしまっていた」

「……なるほど、団長さんが『勝手に倒れた』という見方もあるわけですね」

「……だとしたら、俺は思い当たる節があるな」

「何だい？ その思い当たる節というのは」

「最近、彼は働き詰めだった。何度も徹夜をしているようで、あまり寝ていなかったことが見受けられる」

バロワはココ最近のグランの動向を語っていく。ここで段々とパズルのピースがハマっていくように、カチリカチリと事実が俺浮かび上がってきている。

「……なるほど、だいたい予想は着いた」

「そうですね……」

「俺もわかった……にしても、体調管理がままならないほど忙しいとなるのは……流石に古戦場とやらの闇の深さを垣間見た気がするな」  
「確かに……私達は参加しなかったがね」

古戦場というものの闇の深さを感じながら、バロワ達は素直に黙祷を捧げる。

因みに事実是这样である。最近古戦場で疲れきっていたグラン、朝



から何かしらの理由でケチャップを拝借、部屋に帰ってきた時について体力の限界を迎えてバタンと倒れる……という結末だった。

「……それにしても、一体なんの為にケチャップそのものを……?」

「あー、なんか試してみたい食べ方があるとか言ってたんすよねえ」

ローアイン達からそう聞かされる3人だが、当然のごとく頭の上にはてなマークを浮かべてしまう。ケチャップ単体でできる食べ方とは一体なんなのか? それだけが気になってしょうがなかったのであつた。

「いや、何かケチャップ飲んだらいいみたいな話があつて……」

「いやいや、普通に体壊しますよ!?!」

その後、起きたグランに話を聞いたところ……ケチャップを飲むという活用方法に出ていたようである。それを聞いて、当たり前の話だが3人は呆れていた。

「いいかい? 君が体を壊せば、心配する人も多くなる……そうなたら仕事を手につかなくなってしまう可能性だつてあるんだ」

「うぐ……」

「これに懲りたら、あまり無茶はしないように」

「はあい……」

しよげるグラン。怒られてしよげていると言うよりかは、みなに心配をかけてしまったことに対する心配ということが判明した。

「……にしても、そのケチャップを飲むだなんてどこで仕入れた情報だい?」

「え？ いやなんかの雑誌」

そう言つてグランは部屋を漁っていき、とある一冊の本を取り出していた。その本の題名は『ゴリラでもわかる健康の秘訣』と書かれていた。

「これこれ、ゴリラでも分かるつてんだから正しいのかなつて」

「……これ、確かデマを流すことで炎上するのを目的にしていることで有名な出版社のもですよ」

「え、まじ？」

「はい、今回の本もわざわざ本屋の方が燃やすくらいに不人気だそうで」

「そっまで？」

まさか自分の仕入れた情報が間違っているとは思つておらず、かなりショックを受けるグラン。

その姿を見て流石に少しサーヤは同情するのであった。

「うう……まさか間違っていたなんて……」

「ま、まあ……間違いは誰にでもありますよ」

そのフォローは果たして彼のフォローになっているのか微妙なところだが、彼は何とかなるだろう。簡単な事でやる気を取り戻す単純な性格なのだから。

「……にしても、どうやって飲むつもりだったんだいこれ……袋のままでけど？」

「いや、ストローさしてちゅーつと」

「紙パックのジュースみたいにして飲むんだね？」

「飲むよ？」

グランがケチャップを一体なんだと思つているのかは、グランにしか分からないことである。そして、そのその考えが古戦場の疲れからくるものなのかそれとも元からこういう考えに至りやすかつたのかは……定かではないのだ。

「……せめてトマトジュースにした方がいい、俺でもケチャップを飲むのはダメだと理解できる」

「……まあ、確かにその方がいいか……」

「……まさか、思いつかなかったのかね？」

「まったく」

これ以降、グランはバロワ達に諭されてトマトジュースを飲用することになる。但し、最初はケチャップを飲む目的だったので目的が迷走してしまっているのだが……疲れからか全く気づくことがなかったのであった。

「……それで一体、これはどういう状況なんですか」

そして事件から1週間ほど経過した頃、グランサイファーでとある物が流行っていた。

「いやあ、ダンチョがああ袋で飲み物を飲むっていうのがどうにも他に伝わったみたいくて……」

「クソ強津波レベルの勢いで周りに拡がったんす」  
「グラサイマジで予想出来ないわ」

元々調味料を大量購入する際、器が勿体ないのででかい袋で代用していた……というものだったのだが、それがどういう訳か小型化&他の飲料を入れて飲むというものに流行っていった。

「ストロー要らずで飲めるっ！　っていうのがどうにも受けがよくて」

「ああ……飲み口みたいなのがあるのはそれが理由……」

「いやあ、俺らもまじ便利グッズ販売しちゃったみたいっすねえ……」  
「子供にも人気だったたり！」

小型の袋に着いたのみ口、その中には多種多様な飲料が詰められて

いる。それを眺めながら、バロワはパイプに火をつけようとし……

「あ、喫煙禁止っす」

「す、すまない……」

ローアイン達に注意されていた。一応キッチンなので仕方ない話なのだが。あまりにもいきなりすぎる状況なので、仕方ないといえば仕方ないのだが。

「……あれ、俺も欲しいな」

「あ、いります？ 注文受け付けてから作るんでちよーっと時間かかりますけど」

「くれるのか!？」

「ういっす、無償で作らせて頂きます」

まるで子供のように目を輝かせて、作ってもらえることに喜び始めるバロワ。その中で、サーヤは首を傾げていた。

「それにしても……なぜいきなり流行ったんでしょう？ あれよりは大型とはいえ、砂漠で使うようなものがあるのに」

「大きさの問題じゃないかな。小さいということは、それだけ手軽に持って行けるってことだし」

「なるほど……」

「というわけで、私も貰ってくるよ」

「あ！ わ、私も貰ってきますー！」

こうして、3人は無事小さな飲み袋を手に入れる事が出来たのであった。因みに、流行の発端となった原因の人物……グランは今現在どうなっているかという……

「うーん……また、爺さんかよ……」

古戦場の疲れもあり、数日は安静に休んでいるように言われたので現在安静中の身である。しかし、古戦場があまりにも苛烈過ぎたためか、寝ている間決まって古戦場の夢ばかり見るようになってしまったという。

「……古戦場で……爺さん……?」

「うーん……いつもお前かハデスやん……」

謎の寝言を発することも多く、その事に同室のビイは困惑ばかりす

るのであった。

ちなみにルリアはカタリナの部屋で寝ているという。幾ら魂を分け与えた存在とはいえ、モラルは守らないといけないのだから当たり前の話なのだが。

「うーん……うーん……！」

「グラン……おめえ……もう忘れてゆっくり休めよ……！」

古戦場が苛烈すぎて、忘れたくても忘れられない。その事実には軽く同情するのであった。しかし同情するだけでは止められないし、そもそもグランが止まることを基本的にしない人物のため、古戦場に彼が向かうのを止める人物は誰もいないのであった。

## グランがもし誕生日だったら前編

「グランがもうすぐ誕生日な訳だが」

カリオストロのその一言は、グランサイファアのほとんどの女性陣に伝えられていた。無論、共通点は『グランを異性としてみている』事である。

「お前ら、何をプレゼントする気だ？」

その言葉で、各々がプレゼントを語る。積極的な女性は『自分』と答えることが多く、それ以外はものを渡す女性が多かった。当たり前だが、自分と答えたところでリーシャが隠せかけていたのだがそれはまた別の話。

「そうだな、俺も自分をプレゼントにしたいところだが……趣向を変えて、ミニカリオストロでもプレゼントしようという話になった」

「待って師匠、ミニカリオストロって何」

「あ？ そりゃあお前俺様が作るゴーレムでの俺様だ」

「……ウチは……どうしよう」

「お前は……あー……廃棄予定の武器達でも処分してやったらどうだ、喜ぶぞ」

「ウチだけなんか違う!?!」

目の前の錬金術師コンビの会話に多少置いていかれながらも、女性達の会話は進んでいく。ちなみに本日は特に目立った依頼もない日なので、特に問題は無いのだ。

今回の話は、一部の女性たちのものを抜粋したものである。よって出番がなくても忘れていく訳では無いのでご勘弁を。

というわけで、錬金術師組の話である。

「え？ 誕生日？」

「う、うん！ な、なにか欲しいものだったり……して欲しいことってある!？」

「あー……うーん……」

グランは悩んでいた。今欲しいものも、してもらいたいことも無いのだ。何かをくれるというのなら、喜んでもらうが……グラン個人としては今欲しいものは明確に存在していない。

「……そうだなあ、せめてこの後に行く依頼の人手が欲しいからそれに参加してくれたら嬉しいかなって」

「じゃあウチそれについて行くよ!!」

「助かるよ」

「……おいグラン、俺様を無視するのは頂けねえな」

「いや、無視してるわけじゃないけど……」

「まあいい。で？ その依頼って言うのは何をするんだ？ 参加させるのはいいが、せめてこいつができることにしてくれよ?」

優しさ故の言葉なのだが、クラリスとしては内心少し複雑だった。女性なので、基本腕力は期待しない方がいいとされる。そしてクラリスはカリオストロとは違って、分解の極地の錬金術しか行えない。それ故、カリオストロのような万能性にも期待できないのだ。

「ししよー……ちよつと酷いよー……」

「事実だろうが、無茶してこいつに迷惑かかるよりよつぽどマシだろうが」

「うう……!」

正論を言われて、クラリスはしよげる。グランはそれをしばらく眺めた後に、依頼の内容を話始める。

「やるのは魔物退治だよ、異常発生してるみたいだから数を減らすための依頼」

「……? そんなに数があるほどの異常発生なのか?」

「うん、結構な異常発生。小さい島だけど、島中で避難勧告が出るレベル」

「おいおい……そりやまた物騒な事だな」

「だよね、俺もそう思う」

呑気な会話を繰り返り広げるグランとカリオストロ。その光景を、クラリスは少し羨ましそうにみていた。

「……」

「あ？ どうしたクラリス」

「ししょーはいいなあつて……」

「……ったく、オレ様は世界一美少女錬金術師だ。だから俺には俺のやり方があんだよ……お前はお前らしい方法があるんだし、その点で攻めていけばいいだろうが」

「……なるほど……！」

やる気を出すクラリス。それを見てグランは首を傾げていたが、しかし特に問題もなさそうなのでこのままクラリスには、依頼を一緒に行ってもらうことになったのであった。

「……それで、グラン？」

「どうしたんだいクラリス」

依頼に出るから、グランはクラリスに詰め寄られていた。甘い雰囲気もなく、熱っぽい雰囲気もなく……クラリスはちよつと目から光がない感じの雰囲気を出しながら、グランに詰め寄っていた。理由は明白なのだ。



「なんで女の子ばかりなの？」

「い、いやあ……人手応募してたら……なんかこうなった」

「他の男の人達は？」

「みんな用事があるとかでどっか行った……」

今まさにグランは、ハーレム状態なのだ。しかもその規模はなかなか見ないレベルのそれである。何せ、100人近い人数の女性を引連れているのだから当たり前である。しかも、そのほとんどがグランに好意を持っているという状況……はつきりいえば少しおかしいレベルだと言わざるを得ない。それは、女性陣のほとんどがそう思っている。因みに男性陣は男ならそれくらいいい派と、1人に絞れ派、好きにしる派の3つに別れている。

「全く……グランは女たらしだよね……」

「面目次第も……」

「……ところで、グランはウチと師匠の二人と一緒に来るの？」

「ああ、2人はいわゆる広域殲滅型だからさ。先手必勝で2人が錬金術ぶち込んでから俺が切り込んでいくって感じで」

「おっけー！ ケガしないように注意してよね!!」

「モチのロンの任せんしゃい」

とりあえず、一旦グラン達は依頼をこなす為に意識を切りかえていくのであった。

その後、依頼が終わったあとグランサイファーに帰宅した一同。そんな中で、クラリスはある1部のメンバーを集めて話し合いを初めて

いた。

「ディアンサとククルとアンナは何あげるの？」

「私は……歌をあげようかなって」

「私は特製の銃かなあ」

ほぼ同年代の女子達を何人が集めての、グランに何を送るかを互いに聞きあっていた。

クラリスも自分のプレゼントの参考にしようと、なんとかメモをとりながら考えていた。

「アンナは？」

「ぼ、僕は……お弁当……かな……」

その時、クラリスに電流走る。お弁当、今のクラリスにとってはとても甘美な響きである。作って渡すだけで、カップル感を飛び越して夫婦感が産まれるからだ。

「お弁当、か……」

「お？ クラリスはグランにお弁当を送るのかな？」

「んー……被るのはなるべく避けたいんだよね……」

同じお弁当では、アンナに失礼だろう。そう考えたクラリスの頭の中で出した結論は『手作りの何か』という案に至った。但し、チョコはバレンタインのものなのでその系統は使えない手である。

「……ところで、エッセルとかつてなにか上げるの？」

「ん……私は……街のみんなで作ったペンダント……あげようかなって」

エッセル、十天衆が1人。銃の使い手の少女である。同じく十天衆が1人カトルは弟であり、同じ星屑の街で育ったストリートチルドレンである。

年齢はグランとほぼ同じなのだが、育った環境のせいとお姉さんの立ち位置にすることがよくある。因みに服の露出度が凄まじかったりする。

「……グラン、受け取るかな？」

「わかんない……遠慮しちゃうかも……」

団全員、勿論グランもエッセル達の境遇は理解している。理解して

いるからこそ、そのペンダントを受け取りづらいとなる時がある。

何せ、星屑の街は子供しかいない街でありその為生活するのみなか一苦労しているのだ。

その苦しさを知っているからこそ、グランが受け取るかどうかかわからないのだ。

「受け取るか、受け取らないか……私は受け取ると思うけどねえ」

「そうだと、嬉しいな……」

「グランが優しさを見せるのは当たり前前だけど、その優しさがどこに向かうのかは分からないもんね……ウチも受け取るとは思うけど……」

「グランの場合……倍どころか10倍くらいにして即座に返してきそうだし……」

「やりかねないよね……」

グランがやりそうなことに、全員苦笑していた。しかし、それをされたら恐らく女性陣のほとんどが羨むだろう。何せ、グランからの直々のプレゼントなのだから。

「……そういえば、さ。クムユちゃんとシルヴァさんはなにを渡すつもりか聞いた？」

「クムユは特製の弾丸、シルヴァ姉は……聞いたらはぐらかされちゃった」

「うーん……」

「あ、あの……」

「アンナ？ どしたの？」

おずおずと手を挙げたアンナ、クラリス達は全員アンナに視線を向ける。

「ほ、僕じゃないんだけど……あの、ヘルエスさんのことで……」

「へ？」

「ヘルエスさん……？ 急にどうしたの？」

別の人のプレゼントの話題に入ったためか、恐らくアンナが聞いたのであろう事を、デイアンサが優しく聞き始める。何せ、ヘルエスはグランのことを好意的に見ている女性陣の中でも、その積極性がトツ

プに近いレベルなのだ。故に、皆聞きたがってしまおう。

「……じ、自分にリボンを巻くって……」

「それって……」

「つまり……」

「自分がプレゼントって事!？」

クラリスが大声を出す。当たり前だ、リーシャがいる中でそんなギリギリのことはなかなか決行出来はしない。許されていても、恥ずかしさが勝りかねない。因みにクラリスは自分がそんなこと出来そうにないことを自覚してしまっている。

「う、うう……それはずるいよ……!」

「自分がプレゼント……体にリボンなんて巻いて、そんなこと言ったら……絶対手を出すよ……」

「滅茶苦茶スタイルいいもんね……」

グランのことを考えて、全員が思ったこと。それはまず許されている状況ならば、絶対に手を出すということ。そして、グランサイファー以外でなら、リーシャも中々防ぐことがしづらいなどという事もある。

「……いつその事、リーシャさんに後を追わせる?」

「そ、それはそれで……」

「プレゼントを渡す……って行為そのものは邪魔したくないんだよね……自分がプレゼントとはいえ……ヘルエスさんだって、グランに喜んでもらいたくして居る訳だし……」

止めたいが、止めるとしても他人のプレゼントの妨害は良くないとクラリス達も怖気付く。風紀を乱すのはリーシャ的にも良くないが、それがグランを喜ばせるための誕生日プレゼントということもあつてか、それはとめたくないという矛盾した思考が生まれてしまっている。

「……よしー!」

「お、なんか名案が浮かんだ感じ?」

「ウ、ウチも自分をプレゼントにする!!」

クラリスのその言葉に、全員が言葉を失っていた。驚いたというのもあるが、それ以上に呆れているのだ。『できないことは無理にしない方がいい』といった感じで。

「……クラリス、お姉ちゃんと一緒にもうちよつとプレゼント考えよ？」

「え、なんでウチが適当にプレゼント考えたみたいに……？」

「そうだよ……流石にまだ早いよ？　もうちよつと段階踏まないよ……」

「ディアンサまで……？」

「ぼ、僕も手伝う……から……」

「ア、アンナ……？」

全員が呆れ、そして同情的なセリフを投げかけていく中でクラリスは困惑していた。彼女の的にはさんざん悩んだ末の答えなのだから。だが、おそらく他に言っても同じような答えが返ってくることは、間違いないだろう。

「う、ウチだつて一生懸命考えてるのに!!」

そして、クラリスは顔を真っ赤にしながら飛び出していくのであった。

「……多分、しようとしても箱の中でずっと体育座りしてそうなんだよねえ」

「わかる……」

「う、うん……」

……グランサイファー内でのクラリスの評価は『いざと言う時にへたつてしまう』という物なのだが、クラリスだけがそれを知らないのであった。

## グランがもし誕生日だったら中編

「……は？ グランの誕生日？」

メーテラは一人で廊下を歩いていたが、ふとその質問をされてから顎に指を当てて少し考える。メーテラの中ではグランは所謂『いい男』の部類に入るので、プレゼントを与えるに値する男でもある。それに加えて、色々な恩もあるので渡さないと自分の心が気まづくなってしまうというのもある。

「んー……アタシなら……やっぱり、アタシを好き勝手できる権利とか？ それを与えられるなんてグランも幸せもんでしょ」

ケラケラと笑いながら、冗談めいた風にメーテラはそう告げる。だが、実際言われたら渡すくらいの気概は彼女も持ち合わせている。中々恥ずかしいものであることは間違いないのだが。

「……え、好き勝手できるの意味？ そりゃアンタ、あーんなことや……こーんなことをさせられる権利、って意味に決まってるんじゃないの？」

質問してきた人物に向かってそう伝えるメーテラ。相手は『そういう』意味を知らない人物なので、それとなく遠回しに教えていた。そしてふと、メーテラは質問してきた人物がなにを渡すのか気になったので、逆に聞き返すことにしたのだ。

「って言うかさ、アンタはグランに何渡すわけ？ ……スーテラ」

「はい！ スーテラも姉様と同じく私を好き勝手できる権利を痛っ！！」

どこから取り出したのか、メーテラは真顔でスーテラの頭をハリセンで叩いていた。良い感じのしなりによって、いい音が鳴っていた。

「アンタ意味わかってないのにそういう事言わないの」

「え!？」

「メーテラ姉様、どういう意味なのですか?」

スーテラの近くにいたアステールも、意味が気になりメーテラに聞くが、スーテラは兎も角としてもアステールはまだ子供なので、メーテラは教えることは無い。

「あー……まあもうちよつと大人になったら理解できるから」

「そうなのですか？　なら、我慢するのです……」

「というか……プレゼントものであることは迷ってるなら、私じゃないくて他にも聞きに行ったら？　私だけだったら、考え偏るわよ」

「なるほど！　さすが姉様です！　では不詳このスーテラ！　他の団員達にも聞きに行つてきますー！」

「スーテラ姉様！　アステールも着いていくのです!!」

脱兎のごとく、2人は凄まじい速度で走り抜けていった。メーテラはぶつからないことだけを祈りながら、別に向かう場所があるので歩いていくのであった。

「私ですか？　ふふ、私は私というプレゼントを渡しましょう」

ひとまずスーテラとアステールは、手当り次第に聞きに行つてきた。まず聞いたのは、角でぼったりと会ったヘルエスである。しかし、メーテラと同じプレゼントということだけを伝えて別の人物の所へと向かう。

「ウチ？　ウチはなあ……プレゼントはウチ!!」

「ゆ、ユエルちゃんがそう言うなら……ウチもそうする……」

そして、元気に自分をプレゼントするユエルとそれに対して意見を合わせてくるソシエ。メーテラとプレゼントが被っているということだけ伝えて、また別の人物の所へ向かう。

「プレゼント？　そうねえ……ふふ、私……かしら……あつ！　いや待って今のは待つ」

最初こそ大人っぽい雰囲気で、アンスリアはそう告げたが……自分が如何に恥ずかしいセリフを言っているのか気づいたのか、顔を真っ赤にして訂正を入れていた。2人はメーテラとプレゼントが被っているということだけを伝えていた。

「姉様！ ただいま戻りました！」

「おかえりメーテラ、アステール。それで？ プレゼント決まった？」

「はい、やはりここはスーテラ自身を痛っ!!」

もう一度ハリセンの刑に処されているスーテラ。再び真顔なのと、いい音が鳴っているのはご愛嬌。

「え、なんでまたその意見に落ち着いたの？」

「いえ……聞く人聞く人皆メーテラ姉様と同じプレゼントだったので

……」

「……」

自分が言っていた事なのだが、団長へのプレゼントに自分を渡すやっぱかりがいるこの団は大丈夫なのだろうか？ とメーテラは少し心配になった。一日の誕生日のプレゼントでそうなったら、1週間はグランサイファーは機能停止するだろうとさえ思えてくる。

「いやあ、思ってたよりやばいわこの団」

「へ？」

「あんだ達は気にしなくていいけど、プレゼントが自分ってのはやめときなさい」

「か、かしこまりました」

「メーテラ姉様がそう言うなら、アステールもそうするのです」

グランはよくセクハラをしていたりするが、あれでも一応15歳の思春期真っ盛りの少年である。こんな自分をプレゼントするばかりの騎空団にいたら、性癖が歪んでしまうだろう。

「……にしても、ほんと狙われやすいわねえウチの団長サマは」

「みなから愛されてますよね」

「そうよねえ……ちよっと、他にも意見聞いてきましょうか」

「？ 姉様は既に自分をプレゼントすることが決まっているのでは？」



「アタシじゃないわよ、アンタらと一緒に歩いて行くって話してんの……まあ他がどんなのあげるか気になるのよ」

「なるほどー」

メーテラの魂胆としては、自分をプレゼントする女性達がどれだけいるか確かめたいのも大きいのだが、下手をすれば秩序による大虐殺が行われかねない為に止めないといけないからだ。

「へ？ 私？」

まず最初にメーテラ達が聞きに来たのはコルワだった。今は仕事が無いのか自室で服の絵を書いているだけだった。

「そうねえ……まあ新しい洋服かしら。私らしいプレゼントって言ったらそうなるもの」

「だよね、まともなのがいて良かったわ……」

「え、何？ 何かあったの？」

「あー、いや……うちの妹達が周りにプレゼントどうするか聞いてきたみたいなんだけど……」

メーテラはこれまでの経緯を説明した。全てを聞いたコルワは苦笑いを浮かべていた。当たり前である。自分をプレゼントする女性陣がそれなりにいるのだから。

「アタシが言うのもなんだけどさ……この団大丈夫なの？」

「んー……まあ大丈夫じゃないかしら？」

「根拠は？」

「皆団長が大好きな人ばかりだからよ」

メーテラはそれに少しキョトンとしたが、確かにそうだと思い軽く笑っていた。皆同じ人物が好きなのだから、ここまで暴走する者もいるのだと。

「姉様？」

「あー、うん。みんな確かに大好きだしね、アタシも好きだからこう言っただろうし」

「……珍しいわね？」

「ん？ 何がよ」

「メーテラがそういう風に、自分の好意を出すのって……大体いつも『イイ男』って基準で探してるのに」

コルワの言葉に、メーテラは固まる。スーテラ達はなんの事だかわからずに首を傾げていたが、メーテラは直ぐに正気になり何とかコルワの言葉を訂正しようとする……顔を真っ赤にしながら。

「は、はあ？ 別にそういう意味じゃないし？ アタシの基準で、イイ男なのがウチの団長サマってだけだし？」

「へえ、じゃあ琴線に引つかかったんだ？ 『イイ男』の」

コルワの言葉に、完全に反論が出来なくなってしまうているメーテラ。赤い顔でプルプルと震えているメーテラの姿を見て、コルワは妙にからかいたくなる気持ちになっていた。

「そ、そうよ？ それだけだから、それだけだから!! 行くわよスーテラアステール！」

「は、はい！」

「待ってくださいなのです姉様！」

3人が出ていったのを見て、コルワは微笑んでいた。メーテラの珍しい姿が見られたのもそうだが、それ以上にメーテラが明確な恋愛感情を持ち出してきているというのが、友人として微笑ましかつただ。

「……おや、あそこにいるのは十二神将のお2人ですね」

「ヴァジラちゃんと、アンチラちゃんなのです……」

「それに……アニラ、かしら？ 3人で何してるのかしら」

廊下を歩いていた3人、そこで十二神将の内の3人と出会っていた。アニラ、ヴァジラ、アンチラの3人である。3人の方はすぐには気づいていなかったが、近くを通りがかつたらすぐに気がついた。

「アンタら、こんなところでなにしてるの？」

「む、メーテラ殿達か。実はの、プレゼントを考えていたのじゃ」

「団長殿への、ですね？」

「うむ……我は羊羹をあげる予定じゃ」

「ワシとアンチラが決まっていなくてなあ」

考え込むエルーン2人娘。さすがにアステールの様に、悪影響が入って『自分をプレゼントする』ということと言わずに住んでいるのを確認出来て、内心メーテラはほっとしていた。

「でも大体何あげても喜ぶんじゃないの？ 勿論、プレゼントとして体をなしてたら、だけど」

「うーん……なら僕は一日抱きつき券！」

「……いやそれ、普通にどっちも負担かかるからやめときなさい」

「そうだぞ……とは言っても、ワシも精々天ぷらそばしかなあ……」

「それでもいいと思うのです」

互いにプレゼントの内容を考えていく6人。だが、何故かイマイチ納得ができず決めあぐねていた。決まっているアニラやメーテラはいいが、他四人が納得できるものが並ぶことがなかった。

「うーん……」

「悩むなあ……」

「悩むのです……」

「姉様、やはり団長殿が好きなのを渡すべきなのでしょうか？」

「そうねえ……」

4人の意見を聞いてから、悩むメーテラ。そしてふと思いついたように手を叩いて口角を上げて笑みを浮かべ始める。

「いいこと思いついたわ、アンタら食堂行ってなさい」

「食堂、ですか？」

「そうそう、あんたらの他に悩んでる子達を呼んであげるわ」

「なるほどのう、三人寄れば文殊の知恵……なれどそれでも足りぬならということか」

「そういう事、4人で待ってたらそのうち集まってくるわよ。夕飯までまだ時間あるし、それまで駄弁ってなさい」

「分かりました!!」

素直に受け入れるスーテラ。そしてそれに続いてアステールも食堂に向かう。あとを追うように、ヴァジラとアンチラもそれについて行く。

「……それにしても、他に誰を誘うつもりじゃ？ お主と我は参加せんのじゃろ？」

「当たり前じゃない、アタシらが参加したらあの子たちすぐ聞きそっだもの」

「ま、たしかにの……ではこれから人数を集めてくるのかの？」

「そういう事、着いてくる？」

「面白そうじゃしの、ついて行かせてもらおうのじゃ」

アニラとメーテラ、あまり見ない2人の組み合わせのパーティが今ここに結成された。目的は、団長であるグランの誕生日プレゼントに悩んでいる乙女達を集めること。

そして、最初を集めるのはそれなりに前から居たはずなのに後から来た女子たちに先を越されまくってる系美少女……クラリスの元である。

そして、この後クラリスを誘い……また別のメンバーを集めに向かうのだが、またそれは別の話なのである。

「……………うーん」

そしてまたここに1人、プレゼントに四苦八苦している少女の姿があるのだが……………彼女がプレゼント悩み隊に入るのが時間の問題なのは、誰の目から見ても明らかなのであった。

## グランがもし誕生日だったら中編2

「うーん……」

今ここで悩んでいる少女が1人居た。団長であるグランのためにプレゼントを考えていたのだが、如何せんそのプレゼントをどうするか……それだけがひたすら悩みの種なのだ。

「……どうしたらいいかなあ……」

悩んでいる少女、褐色の肌に驚異的な胸囲、そして大きな角。彼女は十二神将が1人、クビラである。趣味が温泉の健康的な少女だ。

「あら……何を、悩んでるのかしら？」

「あ……イシユミール……」

そんな彼女に話しかけたのは、イシユミールだった。氷を使うドラフの女性、熱いものが好きなある意味で変わり者の女性である。

「……もしかして、グランへのプレゼント……？」

「うん、何にしようか悩んで……」

「彼なら、なんでも喜んでくれると思う、けど……？」

「だから余計に悩んじゃうんだよ……」

なにを上げてても喜ぶというのは、本当に欲しいものがわかりづらいということでもある。故に、渡しがいいこそあるものの本当に欲しいものか分からないため後悔してしまわないか心配しているのだ。

「……そう言えば、貴方は何にするか決めたの？」

「私は……魔力で作った、氷……中々溶けづらいように出来てるから……1週間、バルツに置いてても溶けない……」

「へ、へえ……」

イシユミールはイシユミールらしいプレゼントを用意出来ている。その事が、クビラを更に焦らせていく。ふと、イシユミールはクビラの腕の下に本が隠れていることに気がついた。

「それ……温泉の、本？」

「へ？ う、うん……最初温泉旅行をプレゼントにしようと思ったけど……時間取られちゃうから、駄目かなって」

「温泉のチケット、は……？」

「それも考えたんだけど……チケット販売してるところは軒並み完売しちやっつて……」

「……タイミング、悪かった？」

「そんなところ……」

テーブルに突っ伏して、落ち込んでいるクビラ。こればかりはクビラは悪くなく、そして悪いのはタイミングだけなだけにイシユミールも慰めようと言葉を考えていた。

「そういえば……他の人達は何をプレゼントするつもりなんだろう……」

「……一緒に、聞きに行く？」

「……そうだね、聞きに行つてどんなプレゼント送るのか考えてもいいかもしれないし」

こうして、イシユミールとクビラはみんなにプレゼントを聞きに行くということになったのであった。

「私？ 私は……1日何でもしてあげちゃう券！」

「それは……きつとりーシャが怒るわ……」

どこかで聞いたような話を繰り返しながら、イシユミールとナルメアは話していた。そんな彼女と一緒にいたフォルテに、クビラは話しかける。

「フォルテはなにをプレゼントするの？」

「私は、特注の槍だな。さすがに私のモノ……という訳には行かないが、彼に合うように作らせた特注品だ」

「武器の特注品!? 凄く高いんじゃないの!？」

「まあ、確かに金額は安いとは言えないかもしれないな。しかし、恩を感じているし、彼には強くなってもraitたいとも思っている。槍だけを使い……とは言わないさ。その願いを込めたものの象徴として渡すんだからな」

「そ、そうなんだ……」

「……まあ、私が言うのもなんだが……プレゼントは金額ではないと思うぞ? そうでないと、子供達の気持ちが安っぽいものということになってしまうからな」

フォルテのプレゼントはともかく、最後の言葉には同意するクビラ。確かに、金額⇨気持ちではないのだ。限度はあるが、プレゼントにかけるものはお金ではなく気持ちなのだから。

「しかし……渡すものはなるべく早く決めておいた方がいいぞ?」

「どういうこと?」

「いや……プレゼントが被ってしまうと後がきついからな……主に、彼の負担が、だが」

「……あ、もしかして……食べ物で被りとかあった……?」

「ああ……既に女性団員の中だけでもケーキで数件被りが出ている。その件には関しては、最終的に全員分のケーキを合体させた巨大ケーキで対処するようだが」

何人でケーキが被ったのかは分からないが、恐らくその大きさが凄まじいだろうという事は、クビラにも理解出来た。そして、その大きさに関しては突っ込まない方がいいことも、なんとなく理解出来ていた。

「でも、プレゼントかあ……」

「思いつかなければ、自分の好きな物を送ってみたらどうだ?」

「好きな物……」

クビラの好きな物を送る。その案は既に自分の中で出ており、そして自分で却下したものだ。自分のプレゼントだけ、時間を食うものになれば意味が無いから……とクビラは考えてしまっているのだ。

「確か、温泉が好きだったな?」



「確かに、好きだけど……」

「実はな……面白い依頼が入ってるんだ」

「面白い、依頼？」

「まあ、未だに受ける人物が誰もいないというのが真実だが……恐らく、ピツタリなものだ」

「……？」

首を傾げるクビラ。内容を誤魔化すフォルテについて行って、彼女はイシユミールとナルメアの2人も連れて、バルツに向かったのであった。

依頼内容、温泉開拓。バルツに新しい温泉宿を作りたいが、人も資金も足りない。もしここを開拓してくれる人がいるならば、売上の70%は騎空団の資金にしても良い。

そういった依頼である。因みに、温泉宿が無事完成した日には好きな時に貸切にできる権利も貰えるというある意味で破格の依頼である。何せ、数が多い騎空団であればあるほど有利になれるからだ。

しかし、この依頼には未だ人が寄り付いていない。

「温泉、開拓……」

「そ、でも未だに開けてなくてな。原因は2つある」

「……この地下の温泉源が多すぎて、下手につつくと地盤が崩れか

ねないこと。でも、安易な力でやっても砕けない地面の硬さ……その2つ、だよな？」

「流石だな。すぐに察したか」

「……でも、ここは力任せに崩せない……」

地面の硬さを確認しながら、クビラは思案する。確かに、この温泉を開拓できればグランには最高のプレゼントになる。騎空団そのもので貸切にできるのだから、その日にゆつくりとパーティを開催することができるからだ。

「……人手を集める……？」

しかし、こんな時に集まる人手はなかないだろうとクビラは首を横に振る。団長であるグランの誕生日。他もプレゼント選びや準備、それに依頼も他に受けているからそこまでゆつくりしている人物はそうそういないのだ。

「なんとかならないかなあ……」

悩むクビラ……そこに、とある人物が近寄っていた。クビラと同じように大きな角と胸囲を揃えており、もふもふの格好をしている女性……そう、クビラと同じ十二神将が1人アニラだった。

「困っておるようじゃのう」

「……アニラ？ どうしたの？」

「くつつつぶ、お主の助けになりそうな人物達……すぐに集められるやもしれんぞ？」

「ほんと!？」

「うむ、ただしまだ少し人数が足らんのでな……少しばかり集める必要があるのじゃ」

「私、がんばるよ!!」

「その意気じゃ！ 我も手伝うからの！」

こうして、クビラはプレゼント悩み隊という部隊にいつの間にか入隊することになったのであった。

「……どうしよう……」

「早速じゃな……」

「あれ……メリッサベル……？ どうしたの？」

グランサイファーに戻った一同。その中で、クビラとアニラはメリッサベルと出会っていた。自身の髪を自在に操れる能力を持ったハーヴィンの女性である。これでも一応20歳は超えているので、ちゃんとお酒も飲める年齢である。

「それが……プレゼント、決まってる……」

「ああ、誕生日プレゼント……私も決まってる……」

「ほんと？ ごめん、一緒に考えて欲しかったんだけど……」

「それがのう、メリッサベルよ……我らはプレゼントを思いついていない同士を集めておる最中なのじゃ」

「同士、を……？」

「そうじゃ、メリッサベル……どうじゃ？ お主も混ぜてみては」

「……わかった、ちよつと考えてみる。それに、同じく思いついてない人達も集めたいし」

「うむうむ！ 人手が多いほどいいからもう！」

満面の笑みのアニラ、少し首を傾げているメリッサベルだったが、しかしプレゼントのことで話し合えるのならいい事だと思い直して、そのまま走り去っていく。

「そういえば……団長いつ帰ってくるの？」

「もうそろそろじゃと思うんじゃがな……一応、バレないように気をつけておくのじゃぞ？ サプライズ、という訳では無いが……プレゼントのことを話し合ってるなんて耳に入ったら、気が気でないじゃろうし」

「確かに……うん、わかったバレないようにしておくよ」  
アニラの忠告も受けて、クビラは再度先程の場所まで向かっていく。もう一度、あの地をちゃんと開拓できるかどうか……それを確認しておきたかったのであった。

その頃、噂の団長であるグランはと言うと……

「朱雀朱雀朱雀朱雀！ 玄武玄武玄武玄武！ 白虎白虎白虎白虎白虎！ 青龍青龍青龍青龍青龍青龍！！ これで全員か!?!」

「グラン！ 青龍1回多いです！ 玄武は1回少ないです!!」

とある場所で、四象と呼ばれる星晶獣達を狩っていた。死に物狂いで、ひたすらに、真っ直ぐに、一生懸命に。

「まだまだア!!」

「君たちも愛でてあげよう」

「光栄に思いなさい」

「うるせえてめえらの仕事は俺に狩られる事だ!!」

「愉快だわあなた達」

「うるせえ!!」

時には目の前でイチヤついているカップルを燃え盛らせたり――

「力と力をぶつけあおう!!」

「筋肉筋肉ムツキムキ!! 筋肉一貫星晶獣!!」

時にはマッチョを狩るマッチョハンターとなりて、荒野を駆け巡る狂戦士に堕ちていたり――

「行くぞ——」

「うるせえ!! なに両脇に変なランタンみたいなの出してんだ!! 壊すぞ!!」

燃え盛る主人公のような星晶獣と戦って、ちよつと引火しながらもなんとか勝利を掴み取り——

「っ……!? っ……?!」

「やつと邪魔するものはいなくなった……さあお楽しみタイムだ!!」  
「はわわあ」

龍っぽいお供を排除された後に、グランに攻められて涙目になりかけてた星晶獣を、ルリアが助けたりと色々あった。因みに、最後のに聞かしてはルリアは威圧だけでグランを圧倒していた。

「これで……いいのか……?」

「次は麒麟と黒麒麟ですう」

「うわああああああああああああああ!!」

そして、最後に黄色と黒の星晶獣を相手どらないと行けないことに気づき、発狂したりもしていた。だが、これでグランの戦いが終わった訳では無い。

頑張れグラン、負けるなグラン、君の戦いは割とこのあと結構長い間続いてしまうぞ。

「助けて……ジークフリート……助けて……」

「ジークフリートさんは今フェードラツへでお仕事があるので忙しいらしいですう」

——ルリアの容赦ない一言により、さらに心が粉碎されたグランの明日はどっちに向かうのかは、多分誰も分からないだろう。

### グランがもし誕生日だったら中編3

「……という訳で、ハーヴィンの中でもプレゼントに迷ってる人員を集めたよ」

メリツサベルの集合の元、ハーヴィンの女性達が集まっていた。それぞれ自分がどんなプレゼントを送るか……それに悩んでいる女性ばかりである。

「……驚いたね、彼のプレゼントに悩んでる人員が結構いるなんて」

「え、ええ……ほんとに……」

「……私は、決まってるけど……」

メリツサベルの呼び声により、3人のハーヴィンの女性が集まっていた。内1人は渡すプレゼントは決まっているようだったが、残り2人は決まっていないようだった。

「……二才は、何を渡すの？」

「私は……彼に優しい旋律をあげるわ。彼が寝るときに、私が安心してきる旋律を流すの……快眠できるようにね」

二才、十天衆が1人……他人の心を旋律として読み取ることが出来る能力を持っている。感受性が高いと言うこともあるのか、恨みや怨念……そういった心の旋律を聞くと、辛くなるという弱点も併せ持つ。

因みに、受けるので簡単にグランに抱きに行ける特権持ちである。

「……わ、私は元々ポルサーガを貸す予定だったけど……流石に物を貸すのがプレゼントはないかと思つて……だから、他のプレゼントにしようかな、って……」

「ルナル……男の子にそれ渡すのは……多分、ダメだよ」

「そ、そうよね……」

ルナル、所謂腐女子である。好みのタイプはジークフリートだが、恋愛対象として見ているというよりは、自分の好きな漫画のキャラクターとして試みている面が強い。

事実、彼と彼女自身が絡んでいるよりジークフリートと他のイケメンが絡んでいる方がルナル的にはいい光景なのだから。

「……にしても、アルルメイヤさんが一番悩んでるなんて珍しいわね」  
「未来が見えるからこそ……何を渡すべきか悩んでいるんだ。私自身が、考えて渡したいんだから……今回は 未来を予知していないよ」  
アルルメイヤ、未来を見通す能力を持つている女性……グランにはよく甘えているのは、グランサイファーでも頻繁に見る光景である。  
「他の女性たちのように、私達を自由にしている権利……なんて渡されたところで彼も困るだろうしね」

「そう言えば……シャルロットさんとか……プレゼント決まっているのかしら……」

「彼女は、自分の剣を模したお守りを渡すみたいだよ」

「……そういうのって、お高いって話だけど……?」

「だろうね、お守り……小さいものとは言えその値段は計り知れないだろう」

リュミエール聖騎士団現団長シャルロット・フェニヤの持つ剣、それを模した小型のお守り。色合いを似せるだけならばそこまで高くなるものでもないだろうが、素材によっては本当にお高くなる可能性がある代物の様である。

「魔力を流し込めば、一時的に相手の攻撃を防ぐ障壁を生み出せる仕様だとか何とか」

「……すごいね、それ……」

単純に、使いやすすぎる守りの御札である。まさにシャルロットのような騎士から渡されるプレゼントといったところだろう。

「……私も髪の毛の一部をプレゼントしたらよかったかな……?」

「あの……それ多分すごく重いプレゼントになるわ……」

「……私の髪、そこまで重くないよ?」

「重量的な意味というより……髪を渡すってもうプロポーズみたいなものじゃないかしら……」

「……確かに」

メリッサベル的な問題は無いが、単純に考えてみたら髪を送る女性は怖いという認識に落ち着いた。メリッサベルのような特殊な髪ならともかく、一切そんなことない人の場合を想定しての話である。

「そう言えば……マキラやザーリリャオー達は……どんなプレゼントなのかな……」

「今年は……マキラは小さいニワトリ型の機械、ザーリリャオー達は自分達と同型のボウガンを渡すって聞いてるわ」

そして、ルナルとメリツサベルとはある同盟……『おこたみ』に所属している。おこたみメンバーであるマキラ、ザーリリャオー、ミラオルの3人はプレゼントはもう決まっているのでここに参加はしていないのだ。

「……ところで、なんで私達だけを集めたの？ 今グランサイファー内でプレゼントが決まってる人達が集まって話し合いしてるって聞いたけど？」

「その話し合いのために、あなた達だけを呼んだんだよ……ちよつと手伝って欲しいこととかもあるから」

「……？」

「まあ……着いて来て」

メリツサベルについて行くがまま、呼ばれたハーヴィン達はバルツへと向かっていく。そこは、クビラが温泉を作ろうとしていた場所だった。

「……ここって……」

「……私達の目的のためには、ここに温泉宿を立てる必要があるの」

「……仮に、私達が手伝うことがあっても、だ」

「……私に手伝えることって、ある……？」

ルナルがおおずおおずと手を上げる。十天衆のニオともなると、工事するメンバーの士気を音楽によって上げることが可能だ。アルルメイヤの未来予知によって事故を未然に防げる事も可能だ。メリツサベルは自由に動かせる髪を使って、色々な作業もできる。

しかし、ルナルは絵を描くのが得意分野だ。しかも、別段その絵を見たらニオのようにやる気を出させるといった特殊な効果も存在しない。

「ルナルは……温泉宿が建築し終えたら……いっぱい仕事与えてあげるよ」



「……終わって、から？」

首を傾げるルナール。しかし、自分にしかできない仕事があるというのならと、素直にそれに従うことにしたのだった。

「さて……それならみんなと合流しよっか」

「……皆？」

「さつき言ってた……プレゼントを渡すのに悩んでる人達、だよ」

「おつまたせー！ クラリスちゃんだよー!!」

「という訳で、これから団長グランのプレゼントに悩む私達全員で！

温泉宿を一から作っていきます!!」

クビラの盛大な掛け声の元、集まった女性陣達は喝采を上げていた。それなりの数があるので、時間こそかかるが全く終わる気配がない……ということは無いだろう。

「まずは掘削班の紹介だよ！ 1番クラリス！ 分解の錬金術で頑張ってるね!!」

「まっかせて!!」

「2番！ メリツサベル！ その強い髪ので細かい掘削はよろしく!!」

「……うん……!」

「掘削班紹介終わり!!」

「短い……!」

短い紹介の後、クビラはまた別の班を紹介し始める。今度は、宿を作るために必要な木材の調達のための班である。

「次に紹介するのは木材調達班だよ！ 1番2番3番それぞれ一気に紹介するね！」

まずは三姉妹が長女メーテラ！ 次にスーテラ！ 最後に末っ子アステール！」

「私とスーテラは兎も角、アステールは純粋な姉妹じゃないけどね……つうかなんでアタシこんな所にいんだろ」

冷静に状況を判断したメーテラだったが、可愛い妹達のことを考えると別に気にするほどのことでもない気がついたので、特になにも突っ込むことは無かった。

「ところで、何故スーテラ達が木材調達班なのですか？」

「森に近いところに住んでた、って話だから……木材に詳しいのになって」

「あんだ、牧場の近く住んでて牛の種類に詳しくなれると思ってるわけ？」

「……はっ!!」

今気づいたのか、声を上げるクビラ。しかし、別に詳しくない訳でもないのでスーテラは断る理由がなかった。

「アステールは……役に立てるのでしょうか……？」

「あんだがいてくれた方が人数的に助かるんだし、いても構わないって」

アステールは不安そうに手を挙げて尋ねたが、クビラが答える前にメーテラが答えていた。メーテラの言葉に安心したのか、アステールはやる気のある顔つきへと変貌してきた。

「じゃあ次！ その他班!! 残りのメンバー全員!!」

「まさかの全員と来たか……」

「因みに僕は何をすればいいのー？」

アンチラがクビラに尋ねる。彼女の特技として分身があるが、人数がいた方が助かるであろう木材調達班に何故か入ってないことに関して、尋ねているのだろう。

「組み立ての時に分身使ってもらうかも、でも分身出来るのはすごく助かるから……色々してもらおうかも」

「いいよ！ クビラ姉ちゃんの為なら何だって出来る!!」

アンチラの強い思いを受け取り、クビラは涙する。いい子が同僚なのが、彼女のメンタルの支えとなっっているようだ。

「さ……仕上げていくよ！ 団長の誕生日までまだあとちよつとあるんだから!!」

「「おー!!!」」

その頃、その団長であるグランだが……

「白虎びゃつ白虎、白虎!」

「はわわあ……グランがおかしくなっちゃったみたいですよ……」

鶏肉を頬張りながら、ルリアがグランの惨状を語っていた。因みにこの鶏肉はとある赤色の鳥の星晶獣から剥ぎ取ったものである。食糧になるんじゃないかね? と思ったら人間は大体のものは食える。

「あと何が食えるかだな……」

「ネプチューンのルヴェリエとか美味しそうですよ」

「——!!」

ネプチューンは泣いて首を横に振っていた。ルヴェリエというのは、ネプチューンが従えている龍のような存在なのだが、それすらもルリアとグランは食事の対象として見始めている。

「うへへへ、ルヴェリエを食べた後は——」

「はわわあ、懲りない人を食べるのもまた一興ですよ」

「——また朱雀でも焼くか!!」

ルリアの語彙力が、段々とルリアノート並になってきているのを感じながら、グランは日和った。当たり前だが、ルリアは完全にブチギレると怖いのでグランですら逆らえないのだ。

「にしても……あと何食ってないっけ？」

「ゼピュロス、アグニス、ネプチューン、テイターンですう」

「人型は食う気起きないなあ……アグニスの周りに浮いてるあれも完全に無機物だろうし」

何故か星晶獣を食べること前提で話が進み始めているが、今の2人の周りにはツツコミを行う人物は存在しないのだ。故に、止められる人物は誰一人として存在しない。

「……次は、黄龍を食べてみたいですよ」

「いやでもあいつと戦うと黒麒麟セツトじゃん……」

「でも、黄龍は麒麟のような見た目をしています」

「ルリア、それでなんで俺が食欲湧くと思った……？」

グラン以上に、ルリアは異常な境地に達していた。最早目に光があつた頃の純真な彼女は今やどこにも存在していない。存在しているのは、食べられそうな星晶獣を片っ端から食す食事狂戦士フードバーサーカーと言ったところだろうか。

「……それにしても、お腹すきました」

「さつき食べたばかりだよね」

「召喚って、すごくお腹が減るんですよ」

「ひえっ……」

ルリアの威圧感に圧倒されながらも、グランは四象を生き抜く。まだ終わることは無いので、さつきとして欲しいところなのだが、実はルリアの食事を優先させないとグランの命が危ないところまで来ていた。

頑張れグラン、生き抜けグラン、ルリアの御機嫌をとりつつなんとか四象を勝ち抜くのだ。じゃないと、次のルリアのご飯は君になりかねないぞ。

## グランがもし誕生日だったら後編

グランの誕生日当日、グランはそんなことも忘れてグランサイファアに帰ってきていた。一旦グランサイファアに戻って色々しないと、体が持たないと判断したのだ。因みに、戻ってきたのは日付が変わって2時間ほど経過してからである。そして、帰ったグランを待っていたのは……クビラだった。

「あ、おかえり団長」

「クビラ……？ どうした？」

「ちよつといいかな？ グランサイファアを飛ばしたいんだけど」

「……え、今から？」

「今からはキツイだろうし、朝になってからね」

「ん、別にいいよ……」

「朝になって、目的地に到着したら起こしてあげるから」

「わかった……じゃあ、お願いね」

グランは既にかんりの眠気に襲われている。特に思考が回ることも無く、そのまま受け入れていった。

クビラがどこに向かうか、グランは気にならない訳では無いが別段危ない場所に向かうことはないだろうし……と考えていたせいでもある。

「明日……まあ時間的に行ったら今日なんだけど……ゆっくり休んでね、団長」

クビラのその声はグランに届くことは無く、夜のグランサイファアの闇に吸い込まれて消えていくのであった。

「団長、団長！」

「ふぁ……もう朝……？ 早い……目的地、着いたの……？」

「うん、着いたよ……ほら見て」

「つてあれ……バルツ……？」

着いた場所はバルツ公国。クビラが向かいたかったということとは、温泉関係なのだろうかとグランは推理したが、それならば寝る前にわざわざはぐらかす必要も無いので首を傾げていた。

つまり、バルツの中ではぐらかしたくなるような場所……もしくははぐらかさないといけない理由があるということである。

「で？ どこに向かつてるの？ こつち、何も無かったと思うんだけど……」

「まあまあ、もうちよつとで着くからさ」

「一体にどこに……ん？」

そして、船から降りたグランをクビラが連れていく。しかし、グランはバルツ公国で滅多に向かうことの無い方向へと向かっていく。地図上では何も無い場所だったはずなので、余計にグランは首を傾げていた。

そんな中で、グランが見つけたものは……グランサイファアの絵が書かれた旗が掲げられている温泉宿だった。

「……グランサイファア？ いや、ここ……何？」

「まあ、最初の反応はそんなものだよね……とりあえず中に入って？ 今日1日、ここ貸切だから」

「そうなの……？」

困惑しきっているグラン。グランサイファアの絵が掲げられた温泉宿で十分だったのだが、クビラの貸切の一言にさらに困惑を深めていく。なにせ、見た目だけならクビラー人のお財布の予算では難しいところの予約をしているのだから。

「ここね、私たちが作ったんだ」

「え、クビラ達が？」

「というか……1部の団員で、かな？　それでも結構な人数がいたけどね」

「そうだったのか……」

「そういう依頼があつてね、報酬はまた後で報告するけど……今日一日は貸切になったから」

「へえ……」

「じゃ、案内するね」

満面の笑みのクビラの案内の元、グランは今日一日もてなされることとなったのであった。

「本当は男女分けたかったけど……せつかくなので男女混合なので水着着て温泉に入ろう！　のコーナーします！」

「いい企画だクビラ、大好き」

「えっ!？」

クビラは折角団長であるグランをもてなす為に、水着を着用しての温泉を計画したのだが、それで感謝されたこと以上に直接的な好意を告白されたので顔を真っ赤にしていた。

「そ、そんな事より！　温泉を味わってよ!!」

「お、そうだな」

クビラの指示通りに、グランは水着に着替えてから温泉へと向かう。そこには大きな露天風呂が広がっていた。実に気持ちよさそうな温泉をみて、グランは感嘆の声を漏らしていた。

「おお……すごいな本当に……」

「設計図はルナールが書いてくれたんだよ、いって言ったんだけど……善意で書いてもらっちゃった」

「なるほど、設計士としての腕もあるのか……?」

「どっちかと言うと、全員の意見をまとめて、平均化かつそれをいいものに昇華したってことだと思うよ」

「へえ……」

クビラの説明に、グランはルナールへの感謝を示す。こんなに立派なものを作る設計図を書いたのだから、当たり前なのだが。

「あ！ グランー！」

「お、クラリス！ 水着とは珍し……それ水着？」

「ううん、クリスマス衣装」

水着を持っておらず、そしてバルツであっても季節的に水着は売っていないので、クラリスは仕方なく布面積的にほぼ一緒のクリスマス衣装を少し改良したものを着ていた。

「そっか……お、メーテラ達も一緒か」

「そうよー？ アタシ達も頑張ったんだから……明日1日くらいは甘えさせてよね？」

「なら後で部屋でしっぽりと」

メーテラ達、三姉妹以外の視線がグランに突き刺さる。リーシャ1人のプレッシャーには全く及ばないが、プレッシャーよりも気まずさが勝ってしまったため軽く咳き込んで今のセリフをなかつたことにした。

「いやあ、今のは言っていけないと」

「最近こんなプレッシャーに押し負けることが多くなって来た気がする」

「アタシなら、全員相手するくらいの気概の男の方がいいと思うけどお？」

「姉様！ 団長殿と戦うのですか!？」

「アステールも特訓したいのです！」

勘違いをしているスーテラとアステール、グランは苦笑しメーテラは呆れていたがなんの事だかわからずにいた。因みに、アステールは



少し前にルリアが着ていたスクール水着なるものを着用しており、スーテラメーテラの2人はビキニだった。スーテラはパレオを付けていたが。

「……よく見たら、二才達までいるんだな」

「依頼が終わったあとに、なるべく全員集合するだろうから……それまでプレゼント貰いながらゆったりしていつてね?」

「プレゼント?」

ドラフ族のスタイルを見せつけていくビキニを着用しているクビラに視線を向けながら、グランは首を傾げる。何せこの男、自分の誕生日を忘れていたのである。

「おや……もしかして忘れていいのかい? 今日は君の誕生日じゃないか」

「……あっ!?!」

「わかっていたが、君は本当に忘れていたんだね」

アルルメイヤが一応伝えるが、グランは『やっべ忘れてた』みたいな表情をしており、アルルメイヤは苦笑するしかなかった。

「そう言えば、ルナールは? 手伝ってくれてたんだろ?」

「彼女は体力を使い果たしてるから、今は部屋で寝てるよ」

「色々やってくれたからね……とところで団長、ルリアは? 一緒にいたんだよね?」

「今グランサイファーで飯食ってるよ」

ふと思い出されるルリアの食べっぷり。しばらく四象ばかりだったので、それで疲れたのかもすごい勢いでご飯を食べていたのがグランは印象に残っていた。というのも、キッチンメンバー総出演であるからだ。

「そ、そっか……じゃあ、温泉で休憩できたら……本格的にはじめよっか、グランサイファー団長グラン誕生日パーティー!」

「「おー!!」」

楽しそうに全員で喝采をあげる。温泉の気持ちよさもさることながら、その和気藹々とした楽しさは他の何者にも勝るものだということがグランは明らかにしていた。

「はー……みんな色々なプレゼント持ってきたんだなあ」

そして、誕生日パーティー終盤。団員の全員がプレゼント渡すまたは実行する中で、グランは驚いていた。何せ、全団員が今ここに揃っているのだから。

「明日から俺の装備えぐい事になりそう」

「そうだね……確かにガチャガチャしてそう」

ブローチやアクセサリー類が破格的に多かった。デザインが被ることがなかったのがほぼ奇跡のだが、しかしそれでも首元にかかる負担は凄まじくなるだろうと言わんばかりに主に首にアクセサリー類が着けられていた。

勿論手首や足首にも大量についていた。

「それに、武器まで貰っちゃって……」

「一応使えるけど、お守り程度ってみんな言ってたね」

「それにしても多い、武器を大量装備できるジョブとかないかな」

全部使うつもりなのだろうか、とクビラは内心疑問に思っていた。実際やりそうなのがグランのだが、グランでも全部使いこなせなさそうというのが正直な感想である。

「いやあ、流石にあんまり無茶したらいけないと思う」

「あ、やっぱり?」

「そうだよ?」

「まあ案外やったらできる可能性もあるから……いいのいいの!」

渡された数々の武器を背負いながら、グランは軽快に笑っていた。

ちなみに今の装備は、大量にアクセサリ類と武器を装備している変人に見えない装備である。

「……重くないの?」

「この程度なら鍛えてるし大丈夫だけど?」

「たまに心配になるくらい無茶するからね……団長は」

心配するクビラ、その心配にグランは頬を掻く。彼からしてみれば、本当に無茶はしていないのだ。旅に出る前に散々鍛えて、旅に出ても散々鍛えられているので、武器の10や20は簡単に背負えてしまうのだ。

「……それで、クビラのプレゼントって……この温泉のこと?」

「ううん、これは私だけじゃなくて……団員みんなで考えたプレゼントみたいなものだもん」

「じゃあ、クビラ個人からのプレゼントは?」

「ふふ……はい、これ」

クビラが渡してきたのは、袋に入った黄色い粉だった。グランはふと首を傾げたが、首を傾げてもわからないものはわからないのであった。

「……これなに?」

「この温泉……それを再現した粉だよ」

「へえ……騎空艇でも手軽に味わえるってことか」

「まあ、まだ試作段階だから……ちよつとしか量を作れなかったけどね……でも、多分それで1回分くらいだと思う」

「ありがとうクビラ、大切にに使わせてもらおうよ」

粉を、懐にしまうグラン。クビラはそれが嬉しかったのか、ニコニコと微笑んでいるのだった。

「にしても……どうしようかな……話聞く限り、グランサイファー持ちなんですよ?」

「そうだね、私達が解決したから……一応今は私たちのもの……って事になるのかな?」

「でも俺達が頻繁に戻ってこれるってわけでもないからなあ……」

管理方法に少し頭を悩ませるグラン。そして、ここがバルツ公国だ

ということを思い出して、ふと名案が浮かんでいた。いや、妙案と言うべきか。

「ザガ大公に話をつけよう」

「え、いいのそれ？」

「いいのいいの、俺達が掘り当てたんだから俺達が信頼できる人に管理らせてもらうよ……俺達ずつとこの空域にいられるわけじゃないしな」

「確かに……そうだけど……」

ザガ大公という信頼出来る人物がいるので、グランはそちらに温泉の管理を任せようという話になる。自分では話が進まない可能性もあるので、こういう話の場合に出てくる資金面の問題を解決するため何人か団員を連れていくことにもなっている。

「んじゃ、今日はもう寝ようか」

「そうだね、おやすみ団長」

「おやすみ、クビラ」

パーティとはいえ、男女混合なのだ。風呂の時は水着を着用していたが、寝る時は部屋を別にしてあるため、そのままクビラとグランは男女別の部屋へと向かっていく。

この日、グランは最高の誕生日を迎えられたことを心から喜びながら眠りにつこうとして……朝まで興奮で寝られないのであった。

## 揺らぎの斬姫、大丈夫？

「今日のゲストは、皆のお姉ちゃんことナルメアさんです」

「ふふ、皆のお姉ちゃんだなんて……でも、それくらい頼ってくれると嬉しいな……勿論、グランちゃんもだよ？」

ナルメア、ドラフの女性の剣士である。動く際に特殊な歩き方をすることにより、まるで蝶が舞うような動きをすることが出来るのだ。しかし、彼女はそんな自分が強くないと結構ネガティブな性格をしている。

「結構頼らせてもらってるから大丈夫だよ」

「ほんとに？ 怪我隠してない？ 気づかないあいだに怪我してない？ 背中とか怪我したら手当てできる？ お風呂の時気をつけられる？ お着替えできる？」

「ストップストップ、背中傷つて最早それ俺切られてるから番組してるどころじゃなくなるって」

「あ……そ、そっか……」

このように、ナルメアと親しい人物はナルメア自身はかなり過保護にしてくれる。本人は好きでやってきているのだが、ここまで過保護なのを続けていくと本人が疲れかねない。

「そうだよね……グランちゃんはもうお姉ちゃんがいなくても……頑張れるもんね……お姉ちゃん要らないもんね……」

「ネガティブ禁止!!」

そして、先程言った通りとんでもなくネガティブである。これでもいくらかマシになってはいるのだが、少しでも手を借りないと言ったような発言をすると直ぐに落ち込むのだ。

将来、悪い男に騙されなにか心配だがこれでも善悪の区別とかはついているのでおそらく大丈夫だとは思われる。

「ご、ごめんね？ お姉ちゃんグランちゃんの迷惑になつて……」

「迷惑だなんてとんでもない、俺はナルメアにずっと助けられてきたし……これからも頼るよ？ ただ、ナルメアに頼るばつかじゃダメになっちゃうから、自分で出来ることは自分でしたいんだ」

「グランちゃん……」

「つて訳で、ナルメアお姉ちゃんが頼られている証拠としてお便りのコーナーいっちゃおう」

「う、うん!!」

「1通目『シエテさんと被ってませんか?』」

「前にグランちゃんに言われた事だよね……お姉ちゃん、少し前まで団長ちゃん、つて呼んでたから……」

声は男女なので勿論区別は付けられるが、しけし仮に手紙とかになると細かいところまで見ないと、パツと見気付かないことがあるのだ。

「シエテもナルメアも、俺の事団長ちゃんって呼ぶし……しかも話の方結構似てるせいかな文章の書き方も結構似てるよね」

「そ、そうかな……?」

「そうだよ、ある程度シエテと話したことあるだろうけど……まあちよつと考えてみてよ」

「う、うん……」

ナルメアは、グランの言う通りに少し考え始める。少し前のグランと話す時の自分とシエテとの違いを考え始める。

『団長ちゃん団長ちゃん！ お姉さんに手伝えることあるかな?』

『団長ちゃん団長ちゃん、お兄さんがなんでも手伝っちゃうよ』

これがナルメアとシエテである。では、口調そのままに少しだけ改変を加えてみよう。

『団長ちゃん団長ちゃん！ お兄さんに手伝えることあるかな?』

『団長ちゃん団長ちゃん、お姉さんが何でも手伝っちゃうよ』

「あれ……あんまり違いがないかも……」

「でしょ」

そもそもこの話なのだが、2人はそれなりに共通点があったりするのだ。例えば、過保護な点。ナルメアは過保護が過剰なものだが、2人とも誰かに頼られたい精神を持っている。シエテは十天衆の頭目であり、年上の部類なので年下の十天衆達に頼られたいと思っただけめ少し過保護気味になっている。

そして、2人とも真面目になった時に雰囲気ガラリと変わる。それはもうガラリと変わる。普段過保護気味なお姉さんと、胡散臭いお兄さんなのにも関わらず、真面目になると冷静な剣士と十天衆頭目になるのだ。

「まあ紛らわしいから俺に対する呼び方は変えたけど、別に2人にいじわるしてるわけじゃないから……」

「う、うん！ それはお姉さんも分かっているからね!!」

「まあとりあえず1通目の話題が終わったところで、2通目に行きましよう 『誰かに世話されたいと思いますか?』」

「お姉ちゃんがお世話されたい……ってことかな……?」

「そういう事」

「……」

少し考えるナルメアだが、ぶっちゃけ答えはグランはよくわかってるのだ。彼女は、世話したがりな反面とても甘えん坊な性格である。それこそ、世話してる理由は人に甘えたいからという理屈である。最近グランの前だけでは、まるで妹のような甘えん坊っぷりを発揮しているが、それを公言するのかどうかと言われれば――

「グランちゃんになら甘やかされたい」

「思いのほか即答だった」

思いつきり公言していた。しかし、この程度なら秩序は動かないのでグラン的には問題なかった。ナルメアに膝枕をすることになれば、グランにもメリットがあったりあったり。

「しかしまあ、俺に甘えたいって人多いけど……俺に甘えても何も出るよ?」

「グランちゃんの大きな愛が滲み出るよ」

「お、おう」

分かりきってる人も多いが、グランのことを好意的に見てる中でもナルメアはかなり重症な方である。一時期とある人物の事で悩んでいたナルメアに対して、助け舟を出したところそれまで以上の甘え方を発揮させてきたのだ。

「俺の愛そんなでかい?」

「皆から好かれてるんだから……大きいと思うよ?」

「そ、そうか」

友愛、恋愛、家族愛……色々なものがあるがグランが好かれているのは事実である。依存という形の人物もいなくは無いが、大体が素直な好意の示し方をしてくれる。男女問わず愛の形問わず、である。

「……って俺の話はいいよ、まあナルメアは俺になら世話されてもいいと」

「それ以上の事でもいいよ?」

「おっとそれ以上の話題は秩序が来るので禁止だぞ?」

最近どこからともなく現れるため、ワープ機能でも追加されたのかも思いたくなるほどになったリーシャ。グランは最近秩序状態のリーシャに恐怖を覚え始めていた。

「……しかしまあ、答えはそれってことで……とりあえず三通目行ってみよう『そんなに長い刀使って大丈夫ですか?』」

「へ? う、うん……慣れれば全く問題ないよ……?」

「いやあ、自分の背の丈レベルの刀は早々使いこなせるもんじゃないよ」

ナルメアはドラフなので、ただでさえ身長が低いのににも関わらず刀身が長い刀を利用している。にも関わらず、きちんと刀を使った戦術ができている辺り、相当な訓練が必要だったはずだが……ナルメアは基準値がとて高いので『使えて当たり前』と言うふうになっているのだろう。因みに、彼女の中で天才の部類は十天衆のオクトーらしい。

「そ、そうかな……?」

「いやあ、そういうもんだと……」

サビルバラ、自分よりも大きな刀の帯刀。オクトー、流石に彼自身がドラフの男性のために身長よりは大きくないが、それでもかなり長い長刀を愛用。ミリン、刀を使っているが彼女に関しては別に身長より長い訳では無い。

「……そういうもんだと思うよ!!」

「そっかあ……」



思ってたより長い刀を愛用している人物が多かったが、グランは気にしない方向でいくことにした。気にしていたら、多分いつまでたっても終わらないと判断したためだ。

「けど、刀って長いのが特徴というか……それが強みなどところあるもんね」

「そうなんだよね……」

刀は、通常の剣より切れ味が鋭い。鋭いために長くするとそれだけ相手が切りやすくなるというものである。ただ、剣と違って使うのに少し癖があるのも特徴的だが。

「うーん……」

「どうした？」

「皆、刀の良さをもっと知って欲しいなあって」

「ま、まあどの武器使うかは人それぞれだしね」

「……確かに、そうだよね！」

ナルメアに対して、それっぽいことを言うのだいたい信じてくれるのはグラン的には助かるのだが、ここまで遠慮なく信用されてしまうとグランの良心に微妙に後ろめたさが出てしまう。

「ナルメアはナルメアで刀を使ってくれた方が……綺麗だし特徴的だよ？」

「グランちゃん……！」

大変嬉しそうにするナルメア。グラン的には偶にポーズとして取っている胸の谷間と太ももの間に刀を挟む仕草は、刀じゃないと出来ないと思っているもので、それもまたこんなことを言う理由の一つとなっている。ナルメアには全く分からない事情だが。

「さて、もうそろそろお時間となりました」

「え!?! もう終わりなの!?!」

「まあそろそろ終わらせておかないと、時間がいくらあっても足りないからね」

「うう……ならお姉さん諦めるよ……」

グランに諭されて、ナルメアは諦める。そこでほっと一息付いたグランだったが、すぐに今が番組終了間際だということを思い出して締

めに回る。

「というわけで、ご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「お姉さんはいつでも頼ってくれていいからねえ!!」

グランがカメラの電源を落とした後、ナルメアは大きなため息をひとつ出していた。それは、番組が終わったことによる疲れ……などというものでは決してなく、終わって欲しくなかったが為の物であった。

「もつともつと色々おしゃべりしたかったなあ……」

「まあまあ……話すことが目的の一つとはいえ、本来の目的はゲストがどう言った人かの紹介だし……」

番組の主題は、ゲストがどんな人物なのかを視聴者達に分かりやすく教える為に、グランとの会話を通じて知ってもらおうという企画である。

お喋りをするのは目的と言うよりは、その目的を達成するための方法の一つと言うだけなので、それだけで延々と時間を浪費するわけにはいかないのだ。

「ナルメアより後に入って来た人達に対しての番組だし、これでナルメアの魅力が伝われば万々歳と言うやつだよ」

「……明日から、お姉ちゃんがもつと頼られるってことかな……?」

「そうそう、頼られる場面は増えてくると思うよ」

世話焼きお姉ちゃんとしての面、剣士としての面。そのどちらも軽

く触れた程度だが、紹介はできているだろうとグランは思っている。あとは、ナルメアがどれだけ輪を広げられるか……そこにかかっているというだけなのだ。

「……なら、嬉しいかな……」

楽しみに微笑むナルメア。グランもそれに合わせて嬉しそうな表情となる。別に、ナルメアは初対面の相手に話しかけにいけない……または警戒心MAXになる訳でもない。ルナールのように、初対面の人相手に話しかけづらい性格をしているならともかく……

「……ナルメアなら、大丈夫でしょ」

「ほえ？」

グランの言葉に対して、首を可愛く傾げる様な性格ならば問題は無いだろうとグランは謎の自信によって納得していた。天然かつ、甘えん坊の世話焼き。それがナルメアという女性を表す言葉なのだ。

「さ、これから依頼に行こうか」

「うん！ お姉ちゃんも手伝うよ！」

「ありがと、んじゃまさつさと行くぞー」

「おー！」

グランに説得され、安心したナルメア。これからも彼女は世話をやき続け世話を焼かれ続ける生活を送るだろう。しかし、それは彼女が彼女たる所以なので……その点は変わることの無い安心出来るところなのであった。

## 魔竜統、私を落胆させるなよ

「本日のゲストは、フォルテさんです」

「フォルテだ、よろしく頼む」

フォルテ、騎空団『ダークドラグーン』の団長である。グランのことが気に入ったためにグランサイファーへと移っているドラフの女性である。戦闘が好きだが、面倒見がいたため影でフォルテママと呼ばれている。

「というわけで、巷では面倒を見させたら大体どうにかしてくれることとで有名なフォルテが来てくれた訳だけ」

「ちよつと待て、今のは聞き捨てならないな」

「いや、事実じゃん」

「なんだと……?」

「この間、依頼から帰ってくるの遅いから迎えに行ったら何故か幼稚園の先生してたし……」

「うぐつ!!」

面倒見がいいかつ、困ってる人を見かけたら放っておけないタイプなのがフォルテである。その面倒見の良さを彼女自身は否定しているが、どこをどう見ても否定できる箇所がないのが現状である。

「母親になったら、面倒見のいい母親になりそうだよね」

「は、ははははは母親!」

グランの何気ない一言により、とんでもなく動揺するフォルテ。何をそこまで動揺しているのかわからないグラン。しかし、フォルテが動揺するのはとても珍しいので敢えて放置していた。

「そ、そういう事なのか!? その言葉の意味はそういうことなのか!」

「へ? いや言葉通りの意味だけど?」

「そ、そうか……そうか!!」

顔を真っ赤にしながらいつも通り喋るフォルテ。しかし顔が微妙になりにやけているせいで、少しだけ面白いことになっているのでグランはそれをどうにか写真に納めたいと考えていた。

「さて、そんなダークドラグーン団長フォルテにも色々なお便りが届

いているわけで」

「……ほう、ダークドラグーン団長として、か」

ダークドラグーンの名前を出された途端、雰囲気を変えるフォルテ。先ほどのニヤけ面はどこへやら、キリツとして凜とした表情と雰囲気へと変わり果てていた。

「いやフォルテを代表する肩書きで言った方がいいかなって思っただけで、中身ちゃんと確認してるわけじゃないから……ダークドラグーンとしてのお便り届いてるかはわからん」

「そ、そうか……まあ、いいか」

少しだけ肩を落とすフォルテだったが、すぐさま仕切り直しと言わんばかりに凜とし直す。

「さて一通目『子供ができた時、何人くらい欲しいか理想ありますか？』」

「なんだその質問は!!」

「落ち着けてフォルテママ」

「私はママではない!!」

「で? 答えは?」

「……子供、か」

真面目に考え始めるフォルテ。そういつたことを考えられる環境にいなかったなので当たり前なのだが、普通の女の子……が考えるものかどうかはわからないが、そういうことを考えるのもまあいいだろうと眺めていて……

「……6人?」

「おっと思つてたより多いぞ?」

「いや……それくらいの方が全員鍛え上げやすいかなって……」

「それが本音だと思いたいけど、6人ってまた大家族じゃないか……まあフォルテは貯金ありそうだし、6人の子供は育てられるんだろうけど……」

「ん? その時には貴様にも手伝ってもらおうぞ?」

「……ん? 俺?」

突然自分が指名されて聞き返してしまうグラン。妙に嫌な予感が

しつつも、とりあえず聞き返してみる。聞いたらいけないような事なら、すぐさま遮ればいいだけの話なのだから。

「何を言っている？　子供を育てるんだったら父親はおま……私は何を言っている!？」

顔を真っ赤にし直すフォルテ。どうやら考え込みすぎたようで、少し妄想の世界に飛んでいってしまったらしい。冷静になれた様でグランは安心しながら新たなお便りを探し始める。このお便りをこれ以上続けていたらフォルテがまたおかしくなりかねないからだ。「というわけで2通目『もし戦いから離れて誰かと結婚したら、主婦をやれてる自信ありますか?』」

「主婦？　私は守られる側ではなく守る側だ、私の方が働きに出るべきだろう」

「男らしい……でもちよつと近所のお母さんみたいな丁寧に喋ってるフォルテも見てみたい」

「……私が、主婦か……」

「おつとこれは……?」

考え込み始めるフォルテ。普段ここまで妄想激しい人物ではないはずなのだが、質問の内容のせいでこうなっているような気がしてならない。意外と、主婦願望だったり母親願望があったりするのだろうか、グランは冷静に考えてしまっていた。

「……やはり、町内会の付き合いは厳しいのだろうか6児の母親ともなると変な目で見られないのだろうか……」

「その話結構続くね!？」

「はっ……!?!　ち、違うぞ?!　ただ連想しただけで他意はない!!」

突っ込んではいいるが、グラン自身ちよつと楽しくなってきたのかフォルテにそれっぽいことを聞いて妄想させてしまおうかと頭の中で妄想していた。

「へえ……」

「な、なんだその目は……」

連想どころか生活を妄想し始めている辺り、相当重傷のようにグランは思えたが、フォルテはそれを完全に否定してきていた。その目で

少しムキになっているのか、フォルテは怒った表情になっていた。無論、恥ずかしさで真っ赤なのであまり意味をなさないが。

「ほ、本当だ!! な、なんなら次のお便りで証明してやろう!」

「なら三通目『子供が反抗期来たらどうしますか?』」

「は、反抗期……? もうそんな時期なのか……?」

「おっと思つてた以上に即落ちして大ダメージをくらつているぞ?」

反抗期でダメージを受けるのは基本的に父親のイメージが着いているが、まさか少し男勝りなフォルテにその傾向が現れるのはグランの的にも予想外だったようだ。

「ば、ばかな……グラータ達はそんな子達では……」

「もう名前をつけている……」

ギャップ的に面白光景なのだが、さすがにここまで来ると普段からストレス溜め込んでしまつていのではないかと、グランも心配してしまう。

「ぐ、グラン!! どうすればいい!」

「はい落ち着いて深呼吸して?」

「すー……はー……」

「はい貴方の名前と種族と結婚経歴教えて?」

「え……フォルテだ、ドラフ族で……未婚だが……?」

「はい、後でソフィアさんとご案内しますね」

「……はっ!? 違うぞ!? これはまた別の話だ!!」

「ストレス溜め込んでいる人はみんなそういうんです」

「待ってくれ……いきなり敬語はやめてくれ……心に深い傷を負いそうだ……」

恥ずかしさやらなんやらで沈んでいるフォルテ。ここまで相当の反応を返してるので、グランからは完全に信用されなくなっていた。少なくとも、大丈夫だという人間に限って大丈夫じゃないというパターンのあるのである。

「というか、最初に6人くらいいたら鍛えあげやすいとか言つてた癖に反抗期は怖いのか」

「育てかたが間違つてたつて言われたら……今までの自分はなんだつ

「たんだとなつてしまいかねない……」

「そこは自分の育児に自信持てよ」

「しかし……」

妙に弱々しくなるフォルテ。いつもの彼女ならばありえない対応である。最早中身が別人の誰かではないだろうか、とさえグランは考えてしまうほどだ。

「実は中身シャノワールだったりしない?」

「何!? 一体どういうことだ!!」

「いや、いつもと雰囲気違いすぎて……」

「そんな馬鹿な!? 私は私のままだぞ!」

「普段育児とか考えてないでしょ」

「む……」

グランに指摘されて、少し落ち着くフォルテ。頬をかきながら、冷静になっていく。

「……確かに、戦闘以外のことはあまり考えたことがないな。なし崩し的に子供たちの世話をすることになった時は、わからないなりに何とかしたものだ……」

「なんか思う所でもあった?」

「……いや、世の母親達をみていて思うんだ。私も1人の母になつたら……ああやって女性らしい振る舞いをしているのか、と」

「で、今回それを考えてたからちよつと様子がおかしかつたと」

「……恐らく、そういうことだろう」

普段しない他者への願望、それがフォルテの価値観の変動によって起こってしまったということだろう。

「ま、今回の事はきっちり流れちやつてるのでこれからいじられるのは覚悟して欲しい」

「うぐ……」

「まあ面倒みがいいのは事実だけど……フォルテはフォルテのままがいいからね。無理に変わろうとしなくても、皆フォルテの事が好きだから」

「……そうか」



心なしか嬉しそうなフォルテ。いつもは戦闘狂のような彼女だが、時折このような女の子らしい感情と表情を見せるのであれば、たまには悪くないとグランは心の中で頷いて――

「そうと決まれば、私は私らしくするか！ この後訓練に行こう!!」

「いいだろう鍛え上げた俺の腕前見せてやるよ!!」

「ふはは！ 楽しみだ!!」

「という訳でご視聴ありがとうございました!! また次回この番組でお会いしましょうさようなら!!」

「私と特訓したい者は私が直々に鍛え上げてやるからな!!」

「子供の名前がなんだって!？」

「そ、その話はもうやめろ!!」

お互いの獲物をぶつけ合いながら、2人は話を続ける。グランサイファー特訓場で激しくぶつかり合う二人は、周りから見ても感嘆の息を漏らすほどである。

「おらおら！ 天下のダークドラゴン団長さんが思考を掻き乱されて負けたなんて、笑い話にもならないからな!!」

「わかっている!!」

ぶつかり合う二人。金属同士のぶつかり合う音が響く。そんな最中、特訓場に子供たちが入ってくる。

「トリックオアトリート!!」

「……む？」

「フォルテちゃん！ お菓子持ってきたよー!!」

現れたのはヤイアだった。どうやら、ハロウインが近いということ  
で既に仮装をしており、同時にハロウイン用のお菓子を持ってきてい  
るようだった。

「……ヤイア、トリックオアトリートというのはイタズラされるのを  
選ぶか、お菓子を渡すかを選べと相手に問いかけているものだ。君の  
ように、お菓子を渡す人物が使う言葉ではない」

「ほえ？ そーなの？」

「まあ、うんその通りなんだけど……まあ折角持ってきてもらったし  
貰おうぜ」

「……まあ、私達だけでは区切り出来なかっただろうしな。ならば貰  
うとするか」

二人はヤイアにお菓子を貰って、食べていく。ほんのりと甘いクツ  
キーだったが、とても美味しかったのでつつい食べてしまう程だっ  
た。

「……悪くない」

「フォルテも気に入ったみたいだぞ」

「わーい！ じゃあこれ、皆に渡してくるねえ!!」

ヤイアはそう言って走り抜ける。その後ろ姿をみてから、グランは  
ふとフォルテの方に視線を移す。フォルテ自身、なぜ見られているの  
かわからないので首を傾げていたのだが……

「ヤイアとフォルテの髪色って微妙に似てるよな？」

「それが……どうかしたのか？」

「いやまるで親子みた」

「圧倒的な力で全てを打ち砕かん！ 大覇魔竜槍！」

「ああああああああああああ!!!」

突然の言葉に驚いたフォルテが、グランを吹き飛ばす。その後、し  
ばらくの間はフォルテを母親ネタでいじるのは、暗黙の了解で禁止さ  
れるのであった。

## ママ姉

「グラン！ 今日も特訓に行くぞ！」

揺れる胸部、揺れる髪、凛々しく生えている大きな角。構えられしは強力な槍。ダークドラグーン団長兼騎空艇グランサイファアの一員フォルテ。とある日に、グランは彼女に誘われていた。

「グランちゃんグランちゃん！ 今日もお姉ちゃんがアーンしてあげる！」

上下する胸部、左右に動く髪、太く逞しく生えている角。構えしは身長以上に長い刀。蝶のように舞い、蜂のように刺すを体現せしグランサイファアの一人ナルメア。別の日にはグランは彼女に甘やかされていた。

「グラン！ 何をだらけている！ 今から訓練をするぞ!!」

また別の日に、グランはフォルテに部屋から連れ出されてみっちりとしごかれた。足が棒のようになり、完全に動けなくなるまでその日はガッツリとされた。

「グランちゃん！ お姉ちゃんがいっぱいなでなでしてあげるね！」

また別の日に、グランはナルメアに部屋から連れ出されて別室でみっちりと甘やかされた。足が棒のようになり、完全に動けなくなるまでその日はガッツリとされた。

「グラン！ 行くぞ!!」

また別の日、フォルテはグランと共に魔物退治に出かけた。その日は夜になるまでグランはグランサイファアに姿を現すことは無かった。

「グランちゃん！ ゆっくりしよ！」

さらに別の日、ナルメアはグランと共に部屋でゆったりとしていた。その日は夜になるまでグランはグランサイファアに姿を現すことは無かった。

「グラン！」

またまた別の日、グランは出かけた。3日経ったら姿を現した。

「グランちゃん！」

さらなる別の日、グランは部屋から出なかった。3日経ったら姿を現した。

「極端!!… すぎるつつつつつつ!!!」

2人を呼び出して、グランは珍しく感情を暴走させていた。それもその筈だ、飴と鞭とは言うがこの2人に関する日常は飴と鞭どころの騒ぎではない。糖尿病と八つ裂きくらいの差である。

「ナルメアが甘やかすからだ!」

「フォルテちゃんこそ、グランちゃんを厳しくしすぎだよ……3日経っても帰ってこなかった時もあったよ……?」

「依頼を受けていたんだ! 寧ろグランサイファーにいるにも関わらず部屋から3日も出ていない事の方が恐ろしいぞ!」  
「確かに」

流石に3日も部屋から出ていないのはグランも反省していた。あまりにも何でもされすぎて、感覚が一時的に麻痺してしまっていたよ  
うだ。

「兎に角!! あんまり極端なのはやめて欲しい!!」

「腑抜けている貴様が悪い!!」

「休まないグランちゃんが悪い!!」

「……ほう、そんなこと言っちゃうか」

珍しくオーラを醸し出すグラン。その異様な雰囲気、フォルテとナルメアは吞まれかけていた。しかし、そこは歴戦の猛者である2

人。何とか耐えていた。

「なんだ？ 団長権限でも使うつもりか？」

「ああ使わせてもらう！ これから2人はやり方を入れ替えてみなさい!!」

「え、ええ!!」

やり方を入れ替える。つまり、ナルメア級の甘やかしをフォルテが……フォルテ級のスパルタをナルメアが行うという事である。無論、フォルテは兎も角としてもナルメアは不可能の極みである。

「無理っ!! グランちゃんに厳しくなんて出来ない!!」

「1回自分達がやってたことをお互いを感じなさい!!」

明らかに対処法が間違っているのだが、それはそれこれはこれ。単純にグランはそのやりづらさを味わって欲しいのと同時にレアな2人を眺めていただけである。

「いいだろう！ しかし私たちがそれをするメリットはあるのか!？」

「1週間！ それで音を上げなかったら俺がなんでもしてやろう！」

「ならば私が音を上げなかったら、貴様はダークドラグーンの一員にしてやる!!」

「いいだろう！ やってやろうじゃないか!!」

「男に二言はないな!？」

「男に二言はないよ!!」

ノリと勢いとスピーディー差によって、フォルテはグランを極端に甘やかすことにした。無論、音をあげることにはまず有り得なかった。だが、この安易な行動が後の自分の首を絞めていることに……フォルテはまだ気づいていなかった。

「わ、私は……!」

「どうする!? ナルメア!!」

「あ、あわわ……あわわ……! はうづ!!」

変な叫び声を上げて、ナルメアは気絶した。どうやら、思考能力がオーバーして爆発してしまったようである。

「ナルメアは気絶したか……奴は母性四天王の中でも最強……それ故に母性のない行動は彼女にとっては、自らの寿命を縮めるに等しい

……」

「何を言ってるんだ貴様は……」

「じゃあ明日からな！ 明日から1週間だ！ 正確には日付が変わった瞬間が始まりで同じく日付が変わった瞬間が終わり！」

「いいだろう！」

こうして、フォルテはグランをこれから甘えに甘やかす生活を送ることになるのであった。しかし、ナルメアは一切そんな事しなくてもいいという話になったので……本当にやるのはフォルテだけ、という話なのであった。

「ぐ、グラン！ 今日私は私が膝枕をしてやるからな！」

「……うーん」

「な、なんだ……甘やかすとはこういうことでは無いのか……？」

翌日、早速開始したフォルテだが……開幕グランの渋い顔を見てしまったのでつい反論し返していた。しかし、その当の本人であるグラン自身も何が気に食わないのはよくわかっていないようであった。

「いや、確かに合ってるんだけど……」

「だったら何がダメなのだ……」

「……そうか、言葉使いか」

「こ、言葉まで縛るのか……!?!」

「縛れるものはなんだって縛る！ 無論それがによた」

グランの頭が、まるで後ろから何かをぶつけられたかのような……

そんな急降下を見せる。無論、グランの後ろには誰もいなかった。しかし、グランの頭には大きな大きな斧が軽く刺さっていた。

「縛れるものはなんだって縛っていいこう、それが己を鍛える唯一の方法なんだから」

「……頭、なにか刺さっているが……」

「大丈夫大丈夫、ちゃんとダメージ抑えてあるから。後は内功とかで何とか耐えとくから」

「そうか……」

改めてグランが人間かどうか怪しくなってきたところで、フォルテは考えるのをやめた。正確には、考えるのをやめておかないとこれから先絶対苦勞するのを予想してしまったからだ。大切な団長ではあるが、偶にはこうしないといけないようなときもある、という事である。

「……では、どうすればいいのだ？」

「まあ待て……今からお前が全力で甘やかせるようにしてあげるからな」

頭には斧が刺さった状態だったが、もうグランは特に気にすること無く続けていく。その光景をただフォルテは眺めているだけなのだった。

「という訳で、ナルメアが人を甘やかさせる秘訣300選という本を作ってくれました。これを熟読で」

「なん、だと……」

1時間ほど経ってから、グランが太い本をフォルテの前に置いていた。フォルテは驚いていたが、グランを甘やかさせるということも言ってしまうている以上後には引けなくなっている。

「くっ……な、ならばやってやろう!!」

「いい心構えだ、それを読み終えてからまたやるとしよう」

「いいだろう! 待っているがいい!!」

グランは格好つけてフォルテのいる部屋から出ていく。そして、その部屋の前にはナルメアが立っていた。

「大丈夫かな……?」

「フォルテなら大丈夫だろう、ああ見えて人の事をよく見てたりするからな」

「なら、いいけど……」

本気を出すことの定評は、フォルテはかなり高い。努力は必ず稔るものだと、彼女自身がその行動を持って示してくれているのが何よりの証拠である。

それ故に、グランは信じているのだ。フォルテが人を甘やかせられる天才になるということに……

しかし、確かにグランは信じていたのだ。だが、その信用は過小評価と言わざるを得ない結果になってしまうことを……彼は全く理解していなかったのであった。

「はぁーい、ママだよ」



「……」

グランは無表情だった。そう、甘やかすことに特化したフォルテは彼の予想を遥かに上回る結果となったのだった。そう、甘やかに特化し過ぎて……本気で甘やかすすぎたのだ。

「あーんー」

飯を食おうとすれば、まず口に運んでくれる。グランが手を動かす必要すらなく、まるで両手を骨折しているのではないかとグランが疑われるほどである。

「お風呂行こうね」

移動する時もグランを抱き抱えて移動する。普段大きな槍を使っているために、筋力はきちんとあるということだろう。一切の動きがないことで、グラン本人ではなくよく似た別人ではないかと疑われるほどになったのだ。

「体、洗ってあげるからー」

そして風呂まで一緒に……とはならない。流石にリーシャが止めていた。ここまで説明していたが、グランは無表情である。

無表情というか、はつきりいえば虚無となっている。だが、その甘やかしが続いた場合……どういった事態を巻き起こしてしまうのか。

「ママア……」

「グランちゃん!?!」

そう、何も出来ない赤ん坊と化するのだ。紙幣を渡されたらよくわからず口に含んだり、甘やかしてくれる女性がいれば年齢問わず甘えようとしたり、そのようなちよつとダメなタイプの男になりかけていた。

「ほらあ、おねんねしましょうね」

そして、あまりにもグランを甘やかしたが故にフォルテも自身を見失っていた。はつきりいえば、彼女はもはや以前の彼女ではなくなっていた。

「ママア……」

「はあい、ママですよ」

「こ、こんな事になるなんて……」

一体何がこんな事態を引き起こしてしまったのだろうか、誰が原因でこんなことが起こってしまったのだろうか。ナルメアは記憶を辿るが、誰が悪いとも何が原因なのかもわからないままただただ時間だけが過ぎていつていた。

「わ、分らない……もう……グランちゃんとフォルテちゃんがどうなるのか……私にはわからないわ……」

「ママア……」

「ふふふ」

すっかり母親となったフォルテ。その甘やかしは一人の男を墮落させた。早くしなければ、この団は早々に終わってしまうだろう。それだけは避けねばならない。団が解散したら、グランはどうやって生きていけばいいのか。

ナルメアは団が解散したら自分がグランを甘やかすだけ考えていたが、しかし今の団の仲間と離れるのは彼女としてもとても辛いのだ。

「わ、私がなんとかしないと……」

その後、ナルメアの尽力によりグランはなんとか社会復帰できるようになった。その方法を問いかけても、彼女はただ顔を俯かせるだけであった。しかし、フォルテの方はそうはいかなかった。

ひたすらに甘やかす……その行為が彼女にとつては壮大な黒歴史になってしまっていた。故に、グランとともに立ち直りはしたものの彼女の心は深く傷ついたままになっていた。

グランとフォルテが理性を取り戻すまでにかかった期間は1週間、その後さらにフォルテが立ち直るまでに約2週間……計3週間かけて、グランサイファーはなんとか立て直すことが出来たのであった。

壊天災、張り切つていくぜえく？

「今回のゲストはハレゼナさんです」

「よ、よろしく……」

今この場でビクビクと震えているのはハレゼナ。彼女はドラフの女性なのだが、如何せん極度の怖がりでありそれを隠すために普段は狂ったキャラを演じている。自作の武器である壊天刃キルデスナーをよく振り回している。

因みに、壊天刃で切れないものはただひとつを除いて存在しない。そのただ一つというのは、スライムである。そう、ネバネバの体液に勝てないのだこのドラフの女性は。

「……何でそんなに震えてんの？ もつとこう、いつもみたいに振舞っていいんだぜ？」

「だ、だって……僕が変なことしたら……怖がられちゃう……」

怖がり、かつ彼女は寂しがり屋である。周りを巻き込まないように狂ったキャラを演じてはいるものの、1度グランのように信頼出来る人物ができた場合は甘えきることが多いのだ。

裏切られるのが怖いので、そう思ってしまった時の彼女はとても不安げになり雨の日に捨てられたチワワみたいな状態になる。

「……大丈夫だって」

「グラン……」

「ハレゼナの事よく知ってる奴は、ハレゼナがいつものハレゼナををしても気にしないからさ」

「う、うん……い！」

本当にそんなフォローの仕方で納得してしまうのか、と言いたくなるがこれがハレゼナである。信頼出来る人物に対する全幅の信頼は最早愛情の域である。

ちなみに彼女、怖がらせる相手はとことん嫌いなはずなのに服装は上半身に關しては胸を覆う布1枚である。よくチンピラに絡まれるのはそれが理由なのではないだろうか、グランはたまに思っている。

「ところで、ハロウインの格好してたけど」

「うん」

「あの格好リーシャの格好に似てない？」

「そ、そうかな……？」

「いや、俺の気のせいだといんだけどさ」

実際そこまで似てないのだが、一体何がリーシャの服装とハロウインのハレゼナの衣装を似ていると感じさせるのか、グランは分からな  
いでいた。

「さて、それはそれとしてハレゼナにもいっばいお使いがあります」

「わ、わ……本当にいっばいだあ……」

「クレイジー？」

「かわいい……」

嬉しそうに、いつもの狂った振りはどこに行ったのかと言わんばかりの満面の笑みを浮かべるハレゼナ。これでもグランよりも歳上である。年上系妹である。

「1通目『お酒は飲めますか？』」

「んう……あんまり、飲みたくない、かも……」

「ん？ そりやまたどうして？」

「お酒飲むとポカポカするけど……頭フラフラで、あんしんあんぜん、  
じゃない……」

お酒で少し痛い思いをしたことがあるのか、ハレゼナは渋い顔をしていた。グランはまだ飲める年齢ではないので、その気持ちはわからないが飲みすぎても良くないということにはわかつていたので、ハレゼナのようにできれば飲まないようにしていこうという気にはなっていた。

「なるほど、怖くなっちゃうか」

「ふらふらだと……何か、落ちそうでやだ……」

いつもなら照れ隠しでも、雰囲気に戻すためでもここら辺でいつものハレゼナのようにクレイジーと叫びながら壊天刃をけたたましく鳴らすのだが、今日のハレゼナは倍プツシュで弱々しくなっていた。

「……まだ緊張してる？」

「う、うん……」

カメラの前、それも全員が見ていると考えてしまつてどうにもハレゼナはいつもの調子が出ないようだ。要するに、極度の緊張というものだろう。

「そつかそつか、まあゆつくりやつていこうな」

「うん……」

「……つてわけで話戻すけど……飲んだことあるっぽいな？ その言い方的に」

「うん、まだグランサイファーに乗る前に……ちよつとだけ……」

「ああなるほど……」

「こ、これ以上は恥ずかしくて、ヤダ……だから……」

「ん、なら二通目な」

普通の少女以上に、乙女乙女しているハレゼナを眺めながら、グランは微笑んでいた。その微笑みはハレゼナにはとても優しいものだったので、緊張も解けていつていた。

「二通目『壊天刃以外に自作したものがありますか？』」

「色々あるけど……でも、壊天刃が1番……」

「1番？」

「……1番、クレイジーだぜえ!!」

ようやく調子が出てきたのか、テンションの高いハレゼナが現れる……のだが、見られてることを思い出したのか、再び萎縮する。顔を真っ赤にしている所をカメラに収められてグランはとても満足していた。

「ところで壊天刃は何回か改良してるから分かるんだけどさ、他にどんなの作ったのさ」

「ふえ？」

「いや、ハレゼナつて直感で物を組み立てるじゃん？ だから他にどんなものを作ったのか少し気になってさ」

「ほ、ほかだと……」

思い出していくハレゼナ。色々作っているが、壊天刃が1番見た目のインパクトやら攻撃力やらで、彼女の言うならば1番『クレイ

ジー』なので愛着が湧いているのだ。

「……き、キッチン……」

「凄いな、キッチン作ったのか」

素直に感心するグラン。ハレゼナも暖かい物が食べたくなつたのかなのだろうか、彼女としては有り得なくもない話だがやはりそのものを作る技術としては一級品の天才である。

「……にしても、壊天刃もそうだけど……ハレゼナって……」

「ほ、僕は普通にしてるだけなんだけど……シロウと羅生門博士に一番驚かされてた……」

羅生門博士、並びにシロウ。羅生門研究所にいる技術者の2人である。ロボミが関係してくるが、壊天刃の改良のために一時期一緒に切磋琢磨していた時もあったのだ。

それ以降、よくハレゼナは羅生門研究所に遊びに行っている事がある。シロウの妻であるマリエとその子供を守るために、彼女も奮起している。

「……だよねえ」

壊天刃は何でも切る。それこそ、どういった技術で切ってるのかわからないくらいに、よく切れるしなんでも切れる。ただ1つ、スライムだけがどう足掻いても切れなかったのだ。

「今まで作った、どんなクレイジーなものも……ねばねばには勝てなかった……」

「うーむ」

ハレゼナが壊天刃を作るよりも前に、ハレゼナはスライムが苦手だったようだ。それが、壊天刃に影響してスライムだけが切れなくなったという可能性がある。

何せ、壊天刃は壊獣すら切ってしまう凄い武器なのだから。

「だ、だから……武器以外のものを作っちゃうことも……あったの」「なるほどなあ……」

これ以上は話しているとハレゼナが元気を失う可能性があるのです、グランは新しいお便りを読み上げることにした。

「さて、そんな訳でラスト三通目『料理は出来ますか?』」

「あ、あんまり上手じゃない……手作りできる、みんなが羨ましい……僕、壊すことしか出来ないから……」

「そんな事ないさ、そもそもハレゼナは壊天刃を作っただろ？」

「そ、それは……」

「それだけでも、みんなを守る力になってんだからいいのさ」

「え、えへへ……」

ハレゼナの頭を撫でるグラン。ハレゼナは嬉しそうに微笑んでいるが、ここでふとグランは壊天刃で思い出したことがあった。

「……そう言えば、壊天刃といえば改造のために複数台作ったことあったよな？」

「う、うん」

羅生門研究所、そしてアルメイダ等に頼って壊天刃の改造をしていたことがあった。その時、アルメイダと協力して作っていた壊天刃の1台……その事をふとグランは思い出していた。

「確かアルメイダと改造していた時さ……足が着いた自立式の壊天刃作ったよな？」

「作った、けど……あつ」

そう、ハレゼナもまたふとここで思い出した。そう言えば、その時の自立式の壊天刃は……暴走してどこかに走り去ってしまったのだと。

「……あれ、どうしたんだっけ？」

「……わ、忘れてた……」

壊天刃の攻撃力はピカイチだ。それこそ、回転する刃の部分を振り回されたら確実に人は真つ二つになってしまうほどである。

「ど、どうしよう……!」

「お、落ち着けて……特に問題は聞いてないから多分どっかに落ちちゃったんだろ？ バルツで作ったんだし、もしかしたら溶岩に落ちたかもしれないじゃないか」

「……そうかな、そうかも……」

実際、壊天刃による被害は特にあれ以降で聞いた覚えはないので……グランは大丈夫だと思っていた。無論一抹の不安こそあるが、

きつと大丈夫だろうと自分の中で解決させていた。

「……いや、ホントそうだといいいけど……」

「うう……」

後でシエロカルテに聞いて、目撃情報がないか調べてもらおうと内心決めたグラン。ハレゼナがバルツに再び来た時に怖がられないようにしないといけないので、死活問題である。

「ね、ねえ！ グランは……僕を怒らないの？」

「……？ 壊天刃の改造で怒ることなんて何一つないけど……？ あれはハレゼナの努力の証だからな」

「そ、そっか……！」

褒められたことで明るくなるハレゼナ。普段はテンション高い状態を維持していて、そこが可愛いとグランは思っているのだがたまに出てくる弱気な部分もまた可愛いので、本日の相談室はグランは内心ずっとハレゼナを心の中で愛でていた。

「さて、今回はここまでです」

「も、もう終わりなの？」

「楽しかったか？」

「う、うん！」

「まあ機会があればまた呼んでやるからな」

「わかった……！ 待ってる！」

「……という訳で、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます。また次回この番組でお会いしましょう……さようなら」

「僕の壊天刃を見たいやつはいつでも見せてやるからなあ!!」



「にしても、今日はほんと大人しかったな」

「か、カメラはなんか……緊張しちゃう……」

「なれほど、ハレゼナはそういうタイプか」

カメラの前で妙に固くなる、という人間はそれなりにいる。ハレゼナもその類だったということだろう。それ以上に、番組という形なのが余計に緊張を煽っていたのかもしれない。

「とりあえず依頼行こうか、魔物退治の依頼があるだろうし」

「う、うん!!」

「よし、今日も頼むぞハレゼナ」

「任せて！ 僕の壊天刃が魔物の1匹や2匹……いや全部まとめてサヨナラバイバイしてやるからさあ!!」

壊天刃をの轟音鳴らしながら、ハレゼナは高らかに笑う。番組が終わった途端にこれなので、緊張の糸が解けてしまったのだろう。だが、いつも通りのハレゼナなので別に問題は無いのだ。

「よし、頼りにしてるからな!!」

「任せてよ！」

「あ、ちよつといいですか」

「ひっ!?!」

突如現れたリーシャに驚くハレゼナ、慣れてしまったの驚かないグラン。別段セクハラも何もしていないのに、何故リーシャが現れたのかの方が気になったグランは、首を傾げていた。

「ハレゼナさんの壊天刃ですけど、保管場所考え直してもらおうようにお願いできますか？」

「……ふえ?」

「いえ、その形なので……方が一落下したら困りますし」

確かに、とグランは納得した。ハレゼナも別に裸で壊天刃を置いてある訳では無いが、木箱に入れているだけでは方が一落下した場合貫く可能性もある。何せ切れ味はとて抜群なのだから。

「わ、わかった……考え直すよ」

「すいません、お願いします」

「……さ、依頼に行くぞ!!」

「おー!」

「はい!」

ちやつかりリーシャも着いてきていたが、その後の依頼は特に何事もなく終わり……そしてハレゼナは壊天刃を柵の1番下に入れて保管することにしたのであった。

親愛の妹君、今日のごはんは何かなく？

「今日のゲストはヤイアちゃんです」

「はいー！」

小さな手をフリフリと可愛らしく振るヤイア。そして本日のグランは目隠しをつけていた。これには実は訳がある。

「ところで、お兄ちゃんはどのようにおめめを隠してるのー？」

「んー？ 厳しいお姉ちゃんにおめめを隠してって言われちゃったあ」

厳しいお姉ちゃん、というのはリーシャの話である。そして、リーシャは今回のゲストがヤイアということもあって、目を隠すように伝えていたのだ。

理由は簡単、ドラフの少女というのはとんでもなく発育がいい。低身長かつ大きな胸囲という種族のためか、胸に関しての発育速度は異常のそれであり、6歳のヤイアの時点で既に成長しきっているレベルなのだ。つまり、6際の時点でドラフの女性は成長を終えていると言っても過言ではないだろう。

そして、6歳であるため子供らしく動き回る。本当にびよんびよんと動き回る。それに合わせて2つの膨らみも上下左右にバルンバルン動く。はつきり言うのと、目に毒なのである。セクハラ団長グランのことを懸念したリーシャは、妥協案で目隠しをすることを提案した。

因みに、本来であればリーシャは目隠し猿轡に椅子に何重も拘束した上で星晶獣達のパワーを使って封印するという手段まで持ち出してきていた。

「まったく……目を隠されたら少し困るじゃないか……」

「大丈夫……？ お手紙読める……？」

お便りのことを言っているのだろう、確かに目を隠された状態では普通は見ることには不可能だ。しかし、何やかんやでどうにかすればグランでも見ることは可能なのだ。

「ああ大丈夫大丈夫」

そして、この大丈夫はお便りのことだけを指して言った言葉ではな

い。別に目隠しをされていようが、グランはヤイアの姿かたちを認識できるということである。つまり、生粋の変態スキルが生み出した境地ということになる。

「さて、というわけで……お便り紹介していきます」

「はーいー」

「まず一通目……えーつと……『グランサイファー料理班はどうですか?』」

「ずつとお料理出来て楽しいよ?」

ヤイアは、こう見えてもかなりの料理の腕前である。ローアインやヴェインもヤイアの料理スキルの高さは認めており、彼女に教えを乞う事も多々あるのだ。

「ヴェインちゃんもね? ローアインちゃんもね? いっぱいいっぱいお料理してくれるの! ヤイアも、みんなのご飯作ったあといっぱい食べさせてもらうんだ」

「成長期にはいっぱい食べないとね、うんうん」

「? うん!!」

グランのセリフはよくわからなかったヤイア。少し首を傾げたが、特に意味がわからないまま頷いていた。料理は確かにできるが、一応未だ10にも満たない6歳の子供なのだ。理解できないこともあつて当たり前なのである。

「ところで、確かお父さんはヤイアが小さい頃から病気だったらしいけど……料理は自分で調べたの?」

「お父さんにも教えて貰ったよ?」

それでも限界があつたらう、それでも娘を育てていた彼女の父親にはグランは感心するしかなかった。ヤイアの父親は、未だヤイアの家で闘病生活を送っているが、グラン達が援助をしているおかげでなんとか持ち直しているという話をシエロカルテから聞いている。もう時期回復もするだろう。

「ヤイアのお父さんは偉いな」

「うん! ヤイアお父さん大好きなの!!」

屈託のない笑みを浮かべるヤイア。これが反抗期になったらと思

うと、グランは今から胃に風穴が空く思いだった。こんな屈託のない笑みを浮かべる子でさえ、反抗期は来るのだ。人生とは理不尽である。

「……とりあえず、2通目行こっか」

「うん！」

「2通目『最近出来た思い出について』」

「んとね？ あのね？」

「うん」

「海で大きなお魚さんがお空飛んでたこと!!」

恐らくそれはどこぞのサメだろう。空を飛んだり、火を噴いたり、人語を喋ったり、大きな姿に見せるために集まったり、人間になつたりとかなり忙しかった種族である。

ハレゼナがよくさよならバイバイをしてくれたおかげで数日はサメ料理がグランサイファーに並んだのはいい思い出である。いや、当事者のグラン達はあまりいい思い出をしていないのが現実なのだ。

「そうだな、お魚さん飛んでたな」

「うん！ ヤイアすごくびっくりしちやったの！」

「俺もびっくりだったよ」

星晶獣の影響かとも当時は思ったが、実際はそんなことも無く本当に星晶獣何も関係なくあのサメが独自に進化しているだけだったのだ。

「クムユちゃんと遊んでてね？ お魚さんが歩いてきて話しかけてき

たのー！」

「……ん？」

何やら自分たちの考えていた事とは、微妙に違うことが起こっているような気がしてきたグラン。そのうち話を聞いていた方がいいと思っただけ聞き出すことにした。

「その話k w s k」

「フェ？ あのねあのね！ 頭がサメさんの姿で、お手手と足が肌色の変なサメさんだったんだよ!!」

「そのサメさんが話しかけてきた？」

「うん！ 家に来ないかって優しい人だったよ!!」

グランはこの場にヤイアがいなければ簡単に剣を抜いていただろう。今それほどまでに冷静に殺意を覚えていた。

「ヤイア、その人たちどうなったの？」

「んとね？ リーシヤちゃんとか……ランスロットちゃんとか……人がいっぱい来て連れてつちやった!!」

事実はグランサイファー大人組のほぼ全員でその男を連れ去ったと言うだけの話なので、それさえわかってしまえばグランは殺意を出すことも必要ないと考えたのでそのまま落ち着いていた。

「そっか、その後戻ってきたか？」

「ううん、パーシヴァルちゃんが『仕事があるからともう戻っていった』って!!」

「なるほど、後でパーシヴァルにはいちごをプレゼントしてやらないとな」

どっさりと大量のいちごをパーシヴァルに渡そうと、グランは決めるのであった。

「……さて、三通目行こっか」

「はいー!」

「というわけで3通目『フライパンのお手入れはしていますか?』」

「うん！ 毎日ピカピカ!!」

お手入れされているかどうか、それに関してはただフライパンを洗うだけではなく、錆がないかどうか曲がっていたりしないかなど色々あるのだが、正直全く無問題だろう。

何せここはグランサイファー、騎士団長や姫様もいる騎空艇だ。ガラドアなどの鉄関係の職業を生業としている職人もいるので、ヤイアのフライパンの手入れをするには全く問題がないのだ。

「ガラドアちゃんが毎日見てくれるの!」

「ガラドア……」

今度加工しがいいのある金属をガラドアにあげようとグランは考えた。ヤイアの面倒を見てくれているだけで、グランは大変感謝しているのだ。

「おかげで全然壊れないの！ 毎日ピカピカ!!」

「……ん？ ヤイア、お手入れって毎日してもらっているのか？」

「ふえ？ うん!!」

ふと、グランは気になったことがある。ただ手入れしているだけならともかく、毎日修理を行っているのであればその金額は如何程なのかと。

別段、子供たちのためであれば全くそうしてもらって構わないのだが、グランサイファーにもお財布事情というものがある。そのお財布事情を一度見直さないといけないような……グランはそんな気がした。

「……まあ、綺麗になってるからいい事だもんなー!」

「うん!!」

ここでふと、グランは気づいた。そう言えばグランサイファーのキッチン用具も1度手入れしないといけないなど。恐らくされていくのだらうけど、ガラドアも人間だ。抜けがあったりそもそも見えない位置にあったりする可能性もあるので、確認しないといけない。「あ、そう言えばね？ ガラドアちゃんがヤイアの為に包丁作ってくれたの!」

「え、包丁……?」

いくら料理ができるとはいえ、ヤイアに包丁を渡すのは如何なものかと、グランは内心配になっていた。ヤイアはその包丁を持ってきていたのか、懐から取り出す……のだがその包丁は金属製ではなかった。

「……む、白い……鉄じゃないのか……?」

「えつと……プラスチック? って言うのを作ってるんだって! 簡単に切れるのに、安全な代物なんだって!」

「へえ……」

確かに良く切れそうな見た目をしているが、軽く扱いやすい点は金属製のものと比べてはるかに子供向けである。金属製のものよりも、子供のあいだはこちらをに使わせていた方がいいだろうとグランも理解した。

「いいもの貰ったな」

「うん！」

「……さて、と。今回はここまでです」

「もうおしまいなの……?」

「まあまあ、後で話したかったら俺の部屋に来な」

「うん!!」

頭を撫でると、ヤイアは満面の笑みを浮かべていた。グランとはもつと話したいお年頃なのだろう。というわけで、グランとお話するためにグランはヤイアを部屋に誘っていた。別に変な意味で誘っていた訳では無いのだが、はつきりいって事案である。

「今の言葉の意味について詳しく教えてもらいましょうか」

「げえっ！ リーシャ!!」

突如として音もなく入ってくるリーシャ。グランは部屋に入ってきたことは驚かなかったが、リーシャが現れたことに驚いていた。彼女が現れるということは秩序執行する時だからだ。

「彼女と話をする前に私とお話をしましょうか」

「ま、待ってくれ……後生だ……!」

「問題ありません、時間ならたっぷりあります」

「くっ……」

悔しそうな顔を浮かべながら、首根っこ掴まれるグラン。引きずられていきながら、ふと思いついたかのようにカメラに向かって視線を向ける。

「はっ……! ……視聴ありがとうございます!! また次回この番組でお会いしましょう!! さようならあ!!」

そして、そのセリフとともにグランはフェードアウトする。ヤイアはトコトコと歩いてカメラの電源を切ってから部屋から出ていく。最後に視聴者が目撃したのはヤイアの大きな大きな2つの実った事実であった。



「遂に幼女を部屋に連れ込む程に落ちぶれてしまいましたか」

「違うんだ……勘違いだ……ちゃんと調べてくれ……」

「もしルリアさんが大の男に『ご飯あげるから部屋に来ない?』なんて言われてたらどうします?」

「その話しかけた男がルリアに食べられないか心配になる」

「ごめんなさい例えが悪かったですね」

その後、グランはリーシャによつてお説教をされていた。しかし、グランは事案ということは認めてもそんな意味は無いという供述を繰り返しており、説教は長引きそうになっていた。

因みに、目隠しをつけている癖にずっとヤイアの胸元に視線を寄せていたという事実が映像としてきっちり残ってしまったという為、最終的に反省文を書かされるだけでグランは釈放となった。

400字400枚文字数ピツタリで書ききらないと解放されないので、グランはめつたに使わない頭をフル活用して書ききったという話はまた別の話である。

実を言うと、この時例えに出したルリアもきっちり話を聞いていたのでちやっかりグランはヒュゴウされたのだとか。

## 幼女と大人とクレイジーこむら返り

「お料理できたよー!」

朝の第一声、それはヤイアの調理終了の挨拶から始まる。グランは毎日のようにその日の料理当番から言われる挨拶を聞きながら、食堂へと向かう。

向かった先で、いつもどおりご飯を食べ、今日の予定を確認した後、団員の予定も確認してから依頼へと向かう。いつもの日常、いつもの光景……だと思っていた。

「クレイジー食堂へヨウコソオ!!」

「……」

1度グランは食堂への扉を閉めた。何故か律儀に姿勢よく椅子に座って、壊天刃をフルスロットルで鳴らしてるハレゼナの姿があったが、気のせいかと思いい目を擦ってから再度食堂への扉を開く。

「遠慮はいらねえぜえ!! ボクの作ったクレイジークッキングで舌を包んで撃ち込むのさあ!!」

「あー、ハレゼナやハレゼナや」

「ふえ?」

冷静に声をかけられて、首を傾げるハレゼナ。まずグランはこの状況が特に理解出来ていなかった。

「この状況は一体なんぞや」

「ヤイアが説明するのー!」

「ほう、ヤイアが」

「カクカクシカジカゼロポチイチシヨウカン」

「なるほどなるほど、珍しく朝早起きしてきたハレゼナが料理をしているヤイアをみて料理をしたくなって簡単な料理だけを作ろうと思ったら思いのほか手際とかが良くて色々やらせてるうちに今日の分の朝食を作り終えちゃったからいつその事今日はハレゼナの料理メインってことでハレゼナがクレイジー食堂なんて名乗るのを許可してああなった

って訳か」

「そうなのー!」

「今のでわかるなんてクレイジー……」

ヤイアの簡単かつわかりやすい説明と共に、グランも事情を何となく理解する。実際並べられている料理はどれも美味しそうなものばかりであり、この美味しそうな見た目かつ匂いでまずいということはありえないだろうということだけは理解出来ていた。

「にしても、珍しいな……いつもだったら俺の隣に座ろうとして、ユエルとかソシエ辺りに席を取られて涙目になりかけてるけど、俺が膝上を提供して喜んで座ってるハレゼナが料理だなんて」

「い、一々言うなよお……恥ずかしいじゃんかあ……」

「まあ、ハレゼナが作ったものだし貰うよ。ヤイアがいる以上まず味がおかしいなんてことはありえないと思うし」

ベアトリクスでもあるまいし、決して見た目と乖離した味になっているということはなさそうなのが救いである。そう思いながら、グランはいただきますという挨拶だけを行って、サラダから手をつけていく。

「……」

「ど、どう……?」

不安になりながら恐る恐る聞くハレゼナ。よくかんで飲み込んだ後……グランは勢いよく開眼し、ハレゼナに視線を向ける。それはもう迫真の勢いである。

「ひうい!!」

「ハレゼナこれ何入れた!? 滅茶苦茶美味しいんだけど!」

「ふえ……? と、とりあえず壊天刃で野菜を切って盛り付けたただけだよ……? とっても美味しくなりますように……とは思ったけど……」

「た、確かに滅茶苦茶美味い……壊天刃作る時とかもそうだけど……ハレゼナは滅茶苦茶なようで直感で理詰めを行うような天才肌ってことを忘れていた……!」

壊天刃も、ハレゼナにしか作れないクレイジーな武器である。ただの鉄くずからも作れる壊獣すら屠れてしまう武器……それが壊天刃。

そんな武器を作る彼女が、壊天刃と同じように料理を作れば……無茶苦茶なようできて実に美味しい料理へと変貌するのだ。

「キヒヒヒッ！」

「褒められて喜んでいるな……」

「ぼ、僕料理だったら虐められることは無い、よね!？」

「いやこの騎空団でいじめがあったらリーシャが直ぐに駆けつけるし大丈夫だって」

この騎空団はある意味奇跡の騎空団である。人数がかなり多く、しかも秩序の騎空団といった所謂似た者同士が集まる場所という訳でもない。

それにもかかわらず、皆一様に仲違いを起こすことがないというのは、実に素晴らしいことなのだ。

「た、確かにみんなあんぜんあんしん……だから……」

「だろ？ ヤイアだってノビノビと成長してるしな」

「てへへ……」

「……あれ？」

ふと、ここでハレゼナとあることを考える。ハレゼナはヤイアより年上である。そして、年上である以上……お姉さんでないといけない。だが、ハレゼナはこう考えた。『なんかまるで僕の方が年下みたいになってないか?』と。

「……ん？ どうしたハレゼナ？ 真理を見つけたルナルミみたいな顔をして」

「そ、その例えはよくわかんないけど……」

「大丈夫大丈夫、ハレゼナはお姉ちゃんなのは変わらないからな」

「そ、そうかな?!」

「そうそう」

「ヒイヒイヒイアアアアアアアアアア！」

褒められて嬉しいのか、はたまた恥ずかしいのかはわからないがハレゼナは壊天刃をけたたましくかき鳴らして、精一杯の大声をほりあげていた。

「……ハレゼナおねーちゃん?」

「はっ……!?!」

「どうした？ 3日くらい連続で履いた靴下の匂いを嗅いだ時のみちちゃんのような表情をして」

「っ、ツツコミが追いつかないから……ボケないで……欲しいな」

3日くらい連続で履いた靴下の匂いを嗅いだ時のみちちゃんというのが非常に気になるハレゼナだったが、しかし今はそれを気にしている場合ではないので、話を戻していく。

「ハレゼナおねーちゃん！ ヤイアにお料理教えてー！」

「ま、任せとけえ!! おねーちゃんが全部解決してやるからなあ!!」

「……ヤイアが、ハレゼナの真似か……」

故郷のお父ちゃんが泣く事になりかねないが、しかし子供ののびのびとした教育は実施していきたい所存なので、グランは一旦見守ることにした。

何だかんだ子供に悪影響があることを、ハレゼナは教える事はないだろうと――

『ヒヤアアアアアアアア!! クレイジイイイイイイイイ!!』

『ボクの壊天刃を怖がれえええええ!!』

『サヨナラバイバイだああああああああああ!!』

『やだあ……ボクをいじめないでえ……』

『ふえ……?』

『えへへ……あんしん、あんぜんだあ……』

――ハレゼナのことを考えて、色んな面において少し不安になったグラン。特に後半3つをヤイアが覚えた場合、魔性の女になりかねない。6歳の身でハレゼナの様な被虐的可愛さを覚えてしまうのは非常に不味い気がしてきていた。

「……ま、スフラマール先生とエルモートいるから大丈夫かな」

何だかんだ、グランサイファー教師陣に任せておけば大抵解決するかもしれないので、どっちにしる見守ることに変わりはないのだが。

「おらああああ！ やあああああ！」

「あらやだ俺泣くわこれ」

格好をつけているような表情で、ヤイアは料理をしていた。どこかの弾みであちよー！ とか言ってしまうような可愛さはあるが、うっかりすれば不良落ちしてしまいそうな感じだった。

「ハレゼナ、多分あれ君の真似してるよね」

「た、多分……」

「ヤイアヤイア、今日の炒飯は？」

「キムチ炒飯なのー！ 胡椒たっぷりなのー！」

「音楽の趣味は？」

「ですめたるなのー！ でもちよつとお耳が痛いからあんまり聞かないのー！」

「好きな言葉は？」

「きるあんどです！ ところでどういう意味なのー？」  
「……」

あれ？ 言うほど意味理解していないなこれ？ と、グランは察した。とりあえず胡椒たっぷりのキムチ炒飯は後で貰うとして、グランはひとまずエルモートとスフラマールに任せることにした。

「お前……メンドクセエ事してくれたなあ……」

「エルモートみたいに面倒見がいいから案外いいかと」

「俺を基準にしてんじやねーよ……まあ、意味よく理解してねえみてえだから構わねえけどよ」

「ふふふ！ ほんとにエルモート君は面倒見がいいわね！」

「ですよね」

「貴方は後でお話をたっぷり聞かせてもらいますからね」

「ういつす」

「キムチ炒飯は私とエルモート君で食べるわ」

「後生です先生それだけは!! 味が気になって仕方ないんです!!」

妙に人気のあるキムチ炒飯はともかくとして、エルモートとスフラマールはヤイアの強制に入る。まだ染まっていけないどころか皮を被ってる所謂ファツション状態なので、簡単に戻すことが出来たという。

「……なあ、そんなに食べたいの? キムチ炒飯」

「俺は食べたいね!!」

「……辛いのはあんしん、あんぜんなの……?」

……完全に放置されているハレゼナは呆然としていたが、とりあえずみんなが欲しがっているキムチ炒飯のことを聞いていた。それ以外頭に残っていないなかったからだ。

「……ボクは、普通の炒飯が食べたいなあ……」

そんなことを呟きながら、ハレゼナは目の前の光景をただただ眺めているだけだった。それと、彼女は1つ学んだ。『小さい子供にはクレイジーにならないでおこう』と。

「最近ハレゼナなんか大人しくない?」

「ぎ、気のせいだと思うよ……」

グランの部屋で、ハレゼナはグランと話していた。グランの近くに居るのがあんしんあんぜんだと判断しているので、ハレゼナはよくグ

ランの部屋に来ては甘えているのだ。

因みに、グランの部屋に来るのはグランサイファーのほとんどの女性陣である。

「やっぱり……あんしんあんぜんだあ……」

「……」

グランは正直、ハレゼナがお姉ちゃんするのは素晴らしい成長だと思っていた。この成長を糧に、ハレゼナがもつと団のみんなと打ち解けてくれたらいいかなって思っていた。

「すいません、入ってよろしいですか？」

「ん？ リーシャ？ いいよいいよ」

外から聞こえたリーシャの声。いつもの様に入ってくればいいものを、今回は珍しく声をかけていた。とりあえず、入っていいことだけを伝えて、リーシャを中に入れる。

「次の依頼の話なんですけど……」

「あー、それか……メンバー集まりそうにない？」

「いえ、けれど少しあの辺に奇妙な噂が……」

依頼の話をし始めるグランとリーシャ。邪魔をしては行けないと思いい、こっそり部屋から出ようとするハレゼナ。その姿を確認したグランは、ふと思いついた。

「あ、ハレゼナ少しいい？」

「な、何？」

「次の依頼、ハレゼナの力を借りることになるかもしれないから」

「へ……ぼ、僕の？」

首を傾げるハレゼナに、グランは説明を始めようとして……リーシャが変わりに説明を始める。

「明日行く依頼の場所ですが、表皮が非常に硬い魔物が出る可能性があるのです。だから、ハレゼナさんに一緒に来てもらえば助かるかなと」

ハレゼナの攻撃力の高さを、グランとリーシャは頼っていた。そして、ハレゼナも自分が頼られているということがわかったので……少しの間ぽかんとしていたが、すぐさまテンションが爆上がりしてい



た。

「任せてきなア!! ボクの壊天刃があれば、全部全部バラバラのサヨナラバイバイさア!!」

頼もしいハレゼナの姿を見たところで、グラン達は準備に取り掛かる。次の依頼に、頼られているとわかっているハレゼナは準備にもいつも以上に積極的になっていた。

まだお姉ちゃんという頼られ方は出来ないかもしれないが、ハレゼナは自分が団の誰かに頼られている存在になっていることを理解して、より成長していくのであった。

## ハロウィンパーティー

「グランはどこだー!」

「団長を探せー!」

本日はグランサイファーもハロウィン1色だった。船のありとあらゆるところがハロウィン仕様になっており、団員全員でハロウィンという行事を楽しんでいるのがとても伝わる状態である。

「トリックオアトリートさせろー!」

「お菓子くれなきやイタズラするぞー!」

そして、ハロウィンを楽しむ者は色々な楽しみ方をしている。お菓子を作り分け与えるもの、子供たちに混じってお菓子を強奪しに行く者。多種多様に別れているとはいえ、皆一様に楽しんでいることとはとても理解ができる。

「……」

そして、そんな楽しいパーティーの中……グランはたった1人グランサイファーで隠れていた。それはそれは見事なステルススキルを發揮しており、忍者もびつくりと言わんばかりのものであった。

「……クリア、このまま進んでいこう」

この日のためだけに作られたかぼちやの置物、大体160cm程あるのでグランはなんとか中に隠れることが出来ていた。ちょうどいい具合に中に入れるスペースもあるのがいい塩梅である。

「回避しなければならぬ……絶対に……全てを……」

何故グランはこんなに逃げ回り隠れているのか。それはハロウィンパーティーが始まる数日前の話である。

「——ん？　こんな時間に食堂から声が……」

その日、グランは少し寝付けず巡回がてらグランサイファーを練り歩いてきた。満遍なく1周すればそれなりに運動になるので、眠気を誘ったり目を覚まさせたり体を温めるにはちょうどいいと判断したためである。

「俺が言えた事じゃないけど……一体誰が起きているのやら……」

グランはこつそりと食堂の扉に耳を当てる。中から聞こえてきたのは、複数の女性の声、グランは仲間当てクイズでは自身があるので誰が話しているかまできつちりと判断することが出来る。

「——やはり、勝負形式にするしかないと思われませう」

「……この声はヘルエス？　勝負形式って……一体何を……」

まず最初に耳に入ってきたのは、やけに真剣なヘルエスの声。彼女が真剣になっているということは、結構シリアスな話に違いないとグランは注意を更に食堂に注いでいく。

「……誰が1番早く、グランの『初めて』を奪えるか」

「……危険信号が爆爆滅滅……」

本来なら女性に取り合われるというのは、グランと言わず大体の男が歓喜する事だろう。しかも軒並み美人とくれば尚更である。だが、これが勝負形式ということは下手をすればグランの体が物理的に引き裂かれかねないのだ。

「ほ、ほかに誰が……」

「しかし、だ……無理やり襲つては彼にトラウマを植え付けることになりはしないだろうか」

「この声は……イルザ……よし、年上の威厳……！　姐さん最高っす……！」

その言葉はイルザが泣きかねない&ヘルエスもイルザと同年代という事を忘れているグラン。しかし、今のイルザの意見はグランのハロウインの運命を左右していることは間違いないのだ。

「そ、そうだぞ……それに折角のハロウインでそんなハレンチな真似

が……」

「シルヴァまで……できれば中を覗きたいけど、勘が鋭い誰かがいるだけで終わりがねない……」

可能な限りの警戒を持って、グランは中の様子を音だけで判別しなければならぬ。そのまま、監視を続けていく。全く見ていないので監視とはまた違うかもしれないが。

「そうよ、誰か1人だけ彼とハッピーエンドを迎えたら他の子達にとってはバッドエンドだわ」

「コルワまで……! というかさつきからお姉さま系ばかりなんだけど……」

「———というか! ウチらを見視しないでほしいんだけど!」

「この大声は……クラリスか……」

どうやら、年上系お姉さま以外にも何人かいることだけはグランは把握出来た。何人かはわからない、しかしこのまま待機し続けていてもおそらく全容は把握出来ないだろう。

「結構な大人数がいるみたいだし……立ち去るとしようか……」

「……プレデター? どうしたのよ」

「……どうやら、ネズミがいたようよ」

「サヨナラ———」

グランは低姿勢のままグランサイファアの廊下を駆け抜けていく。後ろからピンクと黒の混じったオーラを感じとっていたが、振り向いてしまえばアウトになりかねない。

グランはグランサイファアの甲板まで音速でかつ音を出さずに走りきり……なんとかその日は彼女たちを撒いたのであった。

「……せつかくのハロウィンだ、いや別にお菓子じゃなくて女性を食べ」

「この辺から気配を感じます」

リーシャの声が聞こえてくると同時に、グランは置物と同化する。その間僅か0.1秒未満とされている。一瞬すぎる行動に、リーシャも気づくことは無かった。

「……んー……う？」

「……」

「……おかしい、確かに気配はするのですが……」

話し合っていた女性陣も今や危険な対象となりかけているが、いちばん危険なのはリーシャである。今回の件、グランは逃げてはいるがどちらかと言えばこっちい派な為に粛清されかねない。グランサイファーには子供たちもいるからとかなんとか。

『まあさすがにアルドラとかヤイアとかいるから確かに今教えるのは速すぎるよね』とグランも思っている。

「……気の所為、でしょうか？」

「……」

心臓をバクバク鳴らしながら、グランは静かに待つ。自分は置物だと自己暗示をかけながら、じっと待つ。その内リーシャも気の所為だと思っただのか、その場から離れていく。

「……」

しかし、グランはまだ動かない。リーシャは突如として現れる。動いた瞬間目の前にいても何らおかしくないのだ。だが、完全に離れきったというのなら少しくらいは歩く時間があるだろうと思いい、それまで待つ。

「……よし、足音は完全に離れたな」

音だけではなく、床から感じとれる振動をも感じ取ってまで完全にリーシャが離れたことを理解する。そして、再びグランは歩き続けていく。

「……島に出られても安心はできない……そうだ、島の宿屋なら比較的  
安全かもしれない」

島へは依頼で来ていないのだ。皆グランサイファーで寝泊まりする  
だろう。となれば、宿屋は案外安全地帯かもしれないと思いグラン  
は船の外……島の宿屋へと向かって慎重に歩みを進めていく。

「……順調に来れているな、このまま行けば……っ!？」

リーシャを撒き、そしてあまたの女性陣達を避け続けてきたグラン  
しかしその前に最強の……今現在グランの障害となり得る人物たち  
が目の前にいた。

「んー……？ さっちゃん、この辺に匂いが残ってるって言ってるー  
……」

まずメルウ。相棒のさっちゃんと共に匂いでグランの場所を検知  
していた。匂いで探知されているとはわかっていたが、ゴールが近い  
ところで待ち構えられているのが、悲しいほどに合理的すぎる。

「……私の魔眼からは逃れられない……似たような置物がいっぱいあ  
るけど、グランがこの置物を被っているところを私は確認してるわ」  
十天衆ソーン。一体どこから見てたんだ、とかまさかそれずつと  
使ってないよね？ とかグラン的には色々聞きたいことがあるが、  
とりあえずグランが今の置物を被っているところは確認していたよ  
うである。

「とりあえず、全部ぶっ壊せばいいんだな!!」

十天衆サラーサ。野生で鍛えたその直感力と攻撃力は伊達ではな  
い。今の無防備な状態でグランが狙われた場合桃太郎もびつくりの  
真つ二つぶりを披露することになるだろう。

「……聞こえる、グランの心の旋律が……」

十天衆二オ。心が読める彼女一人で十分じゃないか？ と思わな  
くもなかったグランだったが、ほか十天衆二人を連れてきてる時点で  
十分ガチな事だけは伝わっていた。

「ふふ……彼がここに居るのは予知で読んでいたさ。何せ、私たちが  
追い詰める未来が見えているのだからね」

そしてアルルメイヤ。今回に限りグランがどこに逃げるのか未来

予知で見ていたようである。念には念を入れすぎだと思う、というのがグランの今の内心である。

そう、今ここに十天衆3人と他メンバー3人による6人パーティが結成されていた。

「……」

それでも物になりきるしかないグラン。しかしこのままでは捕まってしまう。どうするか頭を必死に回す。猶予は全くない。こうやって考えていること自体、二才は読んでいるかもしれない……ここまで考えてグランは閃いた。

「……っ!？」

「に、二才!? どうしたの!？」

突如として顔を真っ赤にして悶え始める二才。そう、心が読めるのならとグランはひたすら卑猥な妄想を……しかも二才で行っていた。それを読んでしまった二才は、あまりの恥ずかしさに完全に機能しなくなっていた。

「くっ……けど彼がここにいるのは間違いがないようだね」

「そうね……けど、一体どこに……」

「……匂いを追えば……簡単だよ、さっちゃん」

「……」

仮面をつけたさっちゃんの力を借りてるメルウ。二才は戦闘不能に陥らせることが可能だったが、メルウ……もといさっちゃんは簡単に行く相手ではない。かぼちやの匂いで最悪誤魔化せていたらいいと、グランは願うしかないのだ。

「くっ……ここまでか……!？」

グランはかぼちやの置物の中で眩く。さっちゃんは段々とグランに近づいていく。グランはさらに素早く頭を回転させて、なんとか回避しようとする。

だが、現実は無慈悲也哉……さっちゃんはグランのかぼちやの前に止まってそのかぼちやの中に手を伸ばす。

「——こうなったら……背に腹はかえられぬ!!」

その言葉とともにグランはジョブチェンジしつつ脱出する。ジョ

ブチエンジン先はソルジャーだ。理由は簡単、弾丸をばらまけるからである。無論、ちゃんとケガしないように中身はペイント弾である。

「逃げたわ!!」

「ふふ……君の逃げる先は読んでいるよ」

「読んでいるからと言って追いつけるとは限らない事だな!!」

「そもそも……私の魔眼から逃れられるとでも……!」

「悪いなソーン! お前の目は貰うぞ!!」

そう言つてグランは1冊のノートを持ち出して、それをソーンたちの方向に投げる。そのノートはアルルメイヤ達からは全く見えないが、魔眼を持つソーンはそのノートの中身を完全に見てしまった。た。

「……! そ、そのノートどこから持ってきたの!?!」

「ソーン!?!」

投げられたノートに対して、真っ赤に赤面するソーン。アルルメイヤ達はなんのことか分からないが、これでソーンも使い物にならなくなっていた。

「だったらあたしだ!!」

「サラーサ! 俺の味方をしてくれたらいっぱい美味しいもの食べさせてやるぞ!!」

「なっ……」

「駄目だサラーサ! 話を聞いては!!」

「毎日美味しいものを……ケーキだつて大量に食わせてやるぞ!!」

「よし!! 任せろ!!」

「サラーサ!!」

十天衆、早くも3人脱落である。それどころかうち1人はグランに寝返っていた。そしてグランはこの場をサラーサに任せて、さっさと脱出するのであった。

「というわけで任せたサラーサ!!」

「任せろ!! グラウンド——」

「船が壊れるからそれはダメ!!」



## ステルスハロウイン

走れ、風より早く。駆け抜けろ、イナズマの如く。心臓を騎空艇の動力部のように、炎の様に稼働させていけ。そして、水のようになめらかに人々の間を縫っていき、鳥のように空を滑空するといひ。

「――まだまだ、まだ追われている……!」

グランはひたすらに逃げていた。真つ直ぐで、グランサイファーよりも遠くに。出来る限り島をぐちやぐちやに駆け抜けていく。一直線で島の端つこまで来た場合、囲まれれば終わりだ。ならば、ぐちやぐちやに駆け抜けていくことで恐らくチームで分けられたグランサイファー女性陣達を各個撃破することが可能である。

「どこか、逃げるのに適している場所は……はっ!!」

グランは逃げていく中で、とある場所を見つけた。深そうな洞窟の入口が何個も通っている採掘場のような場所である。かなり都合のいい展開ではあるが、この場所に逃げ込ませてもらおうとその洞窟に逃げ込んでいった。

それが、彼の更なる苦難の幕開けになるとは露ほども知らずに……

「……この辺りから特異点の気配がするな」

「……洞窟、いえ人間達の採掘場でしょうか?」

グランがそこに逃げ込んでから数分が経過した頃、とある5人組がその場所を訪れていた。その姿、そして強大な気配は少しでも戦いをこなしているものであれば察知できる気配……そう、星晶獣達がそこ

にいたのだった。

「……この採掘場、それなりに水の気配が漂っています」

まず1人目、水の星晶獣エウロペ。天司ガブリエルの寵愛を受けし星晶獣であり、使徒と呼ばれている存在である。その力はほかの水の属性の力を持った星晶獣と比べてもかなり強いものでもある。因みに、ガブリエルの寵愛を受けていると聞いた時、グランは少しアレな妄想をしたこともある。事實は不明である。

「なるほどな……ここは私達にとつても、いい場所という事か」

2人目、土の星晶獣ゴツドガード・ブローディア。天司ウリエル<sup>マツスル</sup>の使徒であり、防御のことに関しては彼女は随一の防御力である。だが、ウリエルの使徒だけあって偶にとつてもなく脳筋化することもあるのが偶にキズである。天然である。

「——」

3人目、ブローディアと同じく土の星晶獣であるユグドラシルである。固形物を食すことはなく、液体を好んで食事している。因みに、彼女が苦手なものは近代……とりわけ機械関係の物が特に苦手なので、どこかで妄想でロボットになったチャラ男はまずロボットにならないことから始めないといけない。

「——」

4人目、ティアマトである。三体の龍を従えている風の星晶獣であり、ラカムの事を気に入っている星晶獣でもある。グランサイファーの中でノアと取り合いになっているというルナルの妄想が偶にどこから流れ出している時がある。だいたい原因はゴミ箱に捨てられた原稿である。

「……しかし、どうやって彼をあそこから出す気ですか?」

5人目、アテナ。火の星晶獣であり防衛に特化した星晶獣でもある。勘違いされやすいが、アテナの防御性能は自分に振ったものではなく、守護をする対象に対しての防御性能である。ブローディアの防御性能はまた別の話であり、別にどちらが劣っているのか優れているのかということは無いだ。

「まあ待て、まずユグドラシルが一つを除いて入口を全て土と岩で封

鎖して貰う」

「――！」

ブローディアに言われた通り、ユグドラシルは即座にグランが入ってきた入口以外を全て封鎖する。これにより、出口は1箇所しか残されてはいない。

「そして、次に私が洞窟に入った特異点の気配を探る」

「つまり、彼の場所が丸わかり……と？」

「土の力の応用だ……こういった洞窟内にいる相手を探すことに使うとは思わなかったがな……そしてエウロペは水を地下に浸水させておいてくれ」

「その理由は？」

「万が一地下に出入口があった場合、そこから抜け出される可能性があるからな……」

ブローディアはグランの気配をさぐって……その出処を察知した。その間にエウロペが指示された通り洞窟の地下を浸水させて水浸しにしておく。

「ヨシ……私が洞窟を崩したりしながらあの1箇所の出入口まで、誘導する。そして私が誘導している間に、ティアマトが風をあそこから送り込んでほしい」

「……因みに、私は？」

「アテナは、この洞窟が崩れないように守護を頼む」

「かしこまりました」

「よし……これで布陣が完成した……後は、他の仲間が捕まえてくれるだろう」

「ふふ……私を放置してハロウインを楽しもうとするとは……特異点……少しばかりイタズラしてやる必要がありそうだな」

「ええ……そうですわね……あなたと私のタッグ……光と闇のコンビ……おそらく今回だけです……」

「相手を欺くには丁度いい」

ブローディア達が用意したたった一つの出口、その出口からつながるように辺り一面が常闇に繋がれる。そして、その中で淡く発光する女性。

今ここには常闇の星晶獣オリヴィエと星晶獣シユヴァリエ……その力を完全に制御しているヴィーラがいた。

「イタズラしてやるワン！」

「喉元引き裂いて四肢をもいでイタズラしてやるワン!!」

「こおら、マスターにそこまでしちゃダメよ……せいぜい突撃するくらいで、ね」

そして、ココとミミ……人形と間違われそうなその2人を身につけている星晶獣、ケルベロスもそこにいた。彼女もグランにイタズラを仕掛けようとしているメンツである。しかし、まだ終わりではない。

「あんた達……本当に怒られても知らないわよ……?」

「ふふ、まあいいじゃない」

「これがハロウインか……お菓子が貰えるのだろうか……」

ハロウインにどれだけやる気を出しているのかと、皆に対して呆れてため息をつく土の星晶獣メデューサ、なんだかんだ楽しめればいい派の薔薇の『お姉さん』ロゼッタこと星晶獣ローズクイーン、1人全く別の方向性で楽しもうとしている純真無垢な調停者ゾーイ……もとい、調停の星晶獣ジ・オーダー・グランデ。

「……というか、この闇の中で目が見えてるのは多分あんただけよオリヴィエ」

「私は光っているので見えますが?」

「あんたのことは知らないわよ!! というか眩しいのよ!」

「サンングラスを持ってきている、みんなでかけよう」

イライラしているメデューサに対して、ゾーイはサンングラスを渡す。こんな状況で渡せるくらい呑気な彼女に対して、完全にメデューサは戦意を削がれていた。

「……まあ、ちよつと本格的すぎるとは思うけど……」

「ロゼッタ……あんた、わかつてるなら止めなさいよ……」

「あら、星晶獣が話を聞いて止まる様な性格ばかりなら空の民は苦勞はしなかったわよ」

「はあ……ま、そりやそうね……」

「はむはむ……うん、パンプキンパイは美味しい……美味しいの調停だ……」

1人楽しくパンプキンパイを食べているゾーイ。調停者というのはこんなばかりなのだろうか、メデューサは頭を悩ませていた。

「……それにしても、遅いわね彼。幾らなんでも殺す程はやってないと思うのだけど……」

「そこら辺は大丈夫よ、アテナの力で洞窟が崩落することは無いわ……それに、怪我しないように皆最大限の注意は払ってるしね」

心配するロゼッタ、グランのことを信頼しているので特に心配もしてないメデューサ。しかし、確かに遅い事は遅いのでメデューサも何か問題があったのかと少し訝しんでしまうのであった。

「くっ……なんて完璧な布陣……！ 完璧な正論吐かれて逆ギレするしかない状況みたいじゃないか……！」

グランは手当たり次第に剣を振り回して洞窟内の石ころひとつでも調達出来ないか試していた。全くできなかつたので、速攻で諦めた。

「……外に出るしか、無いのか」

ほかの出口は無いどころか、まず出口が1箇所しかない。風が外から流れ込んできていあるので、この風を渡って歩いていけば簡単にたどり着くことができるだろう。

「……けど、それは罠だ」

簡単に騙されるグランでは無い。だが、いつまでもここに籠城するわけにはいかない。もしこの洞窟が、ブローディアとユグドラシルによつて全て金属に変えられた後に、シヴァにでも変更されてしまえば……一気に熱地獄である。

「くっ……どれだけ俺にイタズラをしたい……の、か……?」

頭の中で電球が弾けて割れた。それほどまでに衝撃的な考えが今のグランに浮かんでいた。そう、今宵はハロウィンなのだ。グランは逃げ惑っていてばかりで簡単に忘れてしまっていたが、よく考えたらとグランにもイタズラをする権利はあるのだ。

「そっだよ……よく考えたら、俺がイタズラしては行けない理由はないだろう……しかもここまでされてんだ……正当防衛にもなるんじゃないか……!? 我ながら自分の考えが恐ろしいぜ……!」

悪辣な笑みを浮かべるグラン。こんなのがみなに愛されているグランサイファアの団長だと考えると、やはり世の中は理不尽なのだろうと、他の者が見た場合そう思ってしまうだろう。

「……出てきたぞ、特異点だ」

「ではいきますよ……ハロウィンなら、ハロウィンらしく——」

「二」「トリックオア——」「三」

まずはオリヴィエ達が、外にまるで砲弾のように飛び出してきたグランに対して、ハロウィンの挨拶を行おうとする。しかしそれをさえぎってグランは先制攻撃を入れる。

「ノートリックオアノートリック!! イタズラされたくなければイタズラすんじゃないぞ!!」

「何……!?!」

「しまった……これではイタズラが出来ない……」

世間知らずの星晶獣故か、グランの言うことを簡単に受け入れてしまおうオリヴィエとゾーイ。だが、こんなものでグランの反撃は終わらない。

「アダルトリックオアアダルトリック! 俺にイタズラしたけりゃあエロい目にあってもらうぜ!!」

「んなっ! んなんなんな!?!」

顔を真っ赤にするメデューサ。しかし、その表情をグランは見えない。それどころかまずグランは誰がいるのかもよく理解していない。最初に声を聞いたのが全員まとめて話してたことにも起因している。

「メデューサがいるようだな!! そしてメデューサがいるならばどこかにアテナがいるな!?! アテナがいるならば、ブローディアもいるだろう!! ブローディアがいるなら仲のいいエウロペも確実にいる! そしてブローディアと同じ土つながりでユグドラシル、ユグドラシルと仲のいいティアマト!!」

この常闇はオリヴィエでさっきから俺の頬をグリグリもふもふしてくるのはココミミ……つまりケルベロス!! そしてそこで光ってるのはヴィーラだ!!」

小さな情報から、大体の情報を引き出せたグラン。この事実には驚き

ながらも、星晶獣達は武器を構える。尚、ブローディア達はそのやり取りに参加できていないので詳しい状況はわかっていない。

「さあ！ どうする!!」

「リーシャさん、呼ばせてもらいますね」

「ごめんなさい……お願い許して……」

そして、ヴィーラの簡単な脅しに屈して、グランは星晶獣組に捕まってしまうのだった。まず戻った時にどうなるのか……グランはそれだけが気になっているのであった。



## ハロウインラッシュ

「……………くう……………俺の作戦ミスか……………」

「ただ単純にアホな事しなかったらよかつただけなのでは……………?」

グランは団長室に軟禁されていた。同時に、リーシャも部屋に入れられていた。軟禁とはいったが、グランのセクハラを攻めるためだけの軟禁ではなく、グランに手が出ないようにリーシャが監視するための軟禁である。

「セクハラはともかくとして……………まさか女性団員の殆どがこんなことをし始めるとは思いませんでした……………」

「……………話を途中から聞いていたせいで、俺もなんでこうなったのか結局分からなんだよ……………」

「今モニカさんが話を聞きに行っています」

「というか、リーシャはあのメンバーの中に入ってなかったんだな」

「へ? まあはい、モニカさんも入ってない組でしたよ?」

「さすが秩序の騎空団だ……………!」

秩序騎空団に対する好感度が爆上がりしたところで、グランは今話を聞きに行っているモニカが帰ってくるまで……………しばらく待つ事になったのであった。

「……………そうか……………それは、まあ少し同情するが……………」

主犯格に話を聞きに行つたモニカ、その表情は何処か暗くモニカも

つい同情してしまっていた。因みに、話を聞きに行っている際に判明した主犯格は『ヘルエス』『イルザ』『マギサ』『アルルメイヤ』の4人である。

「私たちも必死すぎてつい……」

「既成事実さえできれば……」

「こつちを向いてくれるかと思つて……」

「……先に若い子に取られたら、終わりかと……」

つまりは、先にグランと既成事実さえ作つてしまえばあとはなし崩しの責任を取らせることで、何とか自分達の幸せを掴むことが出来るのでは無いだろうか……という話だった。

「いや、まあ……うん……分からなくはない、わからなくは無いのだが……」

「同じ条件が整いすぎてる者同士……モニカ殿、私達と組みませんか？」

「……いや、流石に秩序の騎空団である私が貴殿らに参加してしまつたら、さすがにダメだろう」

「くっ……仲間に入ってくれたら心強かったのだが……」

「……というか、私たちのような……その、彼に好意を抱いている人物は何人もいるだろう。ほかの人物はダメだったのか？」

「当然誘つている……そもそも主犯格が私たちな時点で察して欲しい」

「ああ……」

モニカはさらに同情的な視線を送つてしまつていた。数少ない秩序騎空団団員に対し、偶に『結婚しました』と手紙が届くことがある。部下や過去の友達や知り合いなどは結婚しているというのに、自分はデスクワークと結婚しているのだから毎度毎度やるせない思いが募っているだけである。

「もう部下から『結婚しました』という連絡は見たくない……」

「『私あの人と結ばれますか?』という予知の依頼も受けたくない……」

『未来予知したら確実に結ばれるわけじゃない』なんて言つて誤魔化しているが実は結婚できるんだ……」

「姉上はいい加減身持ちを固めたらどうですか？」とセルエルに言われるのがきついんです……」

「魔術師としての立場で既に役割が結構被ってることに危機感を覚え始めました……」

「貴殿ら素直過ぎないか？ まさか星晶獣達まで協力するとは思わなかったが……」

「……あの子たちはあの子達で自分の意思でやってたわよ？」  
「えっ」

固まるモニカ。女性団員のほとんどが団長であるグランに好意を向けているのは知っている。そしてそれは星晶獣達も例外ではないのだ。

「ティアマトはラクムの方が気に入ってる様だけど……他の子達はご執心なもの」

「は、初耳だぞ?!」  
「だって、彼女達自分たちが抱いてる感情がなんなのか多分理解してないわよ?」

そう言えばそうだとモニカは納得する。星晶獣はそれぞれ作られた目的がある。その目的以外からかなり逸脱してしまう場合は彼らそのものの意思では行うことが出来ないのだ。

上位の星晶獣になればなるほど、役割以外にも対応が可能になってくる……事実天司達は人間といっても過言ではないレベルである。

「そ、そうか……そう言えば、わからなくても仕方ないのか……?」

「勿論、彼らが決められた行動しかできない……なんて冷たいことは言わないわ」

でも、多分知りようがないんじゃないかしら?」

「……確かに」

前提だが、星晶獣達にも情緒は存在する。しかしそれはあくまでも前提として『星晶獣としての役割に必要』だというものがある。つまり、星晶獣達にとって『恋』というものは機能に存在しないものなのだ。

つまり、恋心を何かの形で得たとしても……それを教えてくれる人

物がいなければ、彼らは知ることさえ出来ないのだ。

「……という事は、ライバルが……」

「ふふ、可愛かったわよチョコを一生懸命作ってるあの子達を見ると」  
「……いや待て誤魔化されないぞ、星晶獣達の話に持って行ってしまったけど……主犯格はまだいるんじゃないのか?」

「貴方、もしかして主犯格全員見つける気?」

「辞めておいた方がいい、徒労に終わる未来が見えるよ」

「ああ、やめておいた方がいい」

「ということはまだ他にもいるんだな! 絶対に見つけてやる!!」

そう言っただけでモニカはどこかへ行ってしまふ。残されたメンバー入ったん顔を見合わせてから、その場でガールズトークを始めるのであった。そう、ガールズトークである。

「貴殿も主犯格だな!!」

「みんながハッピーエンドになるためには必要なのよ!!」

「貴殿もか!!」

「ふっふっふ……妾は面白いことが好きなのじゃ!!」

次に見つけた主犯格はコルワとフォリアの2人だった。フォリアは楽しそうだったから参戦しただけ……モニカはそう思っただけで呆れていたが、隣にいた彼女の付き人……のようなものである星晶獣ハクタクが溜息をつく。

「我が王……ハロウインのイタズラで過激なのをしようとして日和つてしまったのを見逃しておりませんぞ」

「うるさいぞハクタク」

凶星だったようで、顔を真っ赤にしてフォリアは怒っていた。ここまでくると最早年上キラードころか女性キラードころではないだろうか……モニカはそう思わざるを得なかった。

「……どうして我が団の団長はここまで……」

「と、とりあえず！ 妾はあやつにイタズラをするからの!!」

「……ほう、日和る事はしないというのですか？ 我が王よ」

「う、うるさいと言うておる!!」

何故か、お供と王女が喧嘩し始める。というよりは、凶星を突かれて焦っているだけのようにはか思えない。モニカはフォリアは放っておいていいと思ってコルワの方に視線を向けて――

「いない!? いつの間に逃げられた!？」

「……ほんとにおらぬ!!」

どうやらフォリア自身も認識していなかったようで、逃げられたことに今更気づいていた。しかし、そこでコルワを追いかけるモニカではなかった。

「……ひとまず、貴殿も説教だ」

「なぬっ!? ただの村娘に説教するのか!？」

「ただの村娘なら存分に説教できるのでな」

「しまった……!」

「我が王……」

「ハクタク！ 助けてくれ!!」

「自業自得です、存分に絞られていくと良いでしょう」

「う、裏切り者め!!!」

「……というわけで、女性団員の中でも25歳以上30歳未満の女性団員の殆どが今回のハロウインの主犯格ということが判明しました」  
こちらグランがリーシャに軟禁されている部屋である。そんな部屋で、リーシャはモニカからのお使いで資料を渡しに来た子供達から資料を受け取って、それを読み上げていた。

その結果、主犯格メンバーがハッキリしたのであった。

「……リーシャ、ひとついい?」

「はい、何でしょうか?」

「主犯格って何だっけ?」

「団体で違反行為を行った際の際の中心人物ですね」

「今回、主犯格は何人いたの?」

「少なくとも5人以上はいますね」

「……ちよつと多くない?」

「あんまりそういうこと言うと馬……いえ、星晶獣オーデインの乗っている馬に蹴られますよ」

「多分死ねるなあ!!」

机を思いつきり殴り付けて吠えるグラン。そんな中でも、リーシャは気にせず淡々と報告を行っていく。仕事人間スイッチがONになっているようである。

「……主犯格達の、動機は……」

「みなさん言っていることは一緒ですね『30近くなってきたさすがに焦り始めてきた』」

「彼氏作りなよオ!!」

「いや無理でしょう」

「辛辣だねリーシャ!」

「私が持っていくしますので」

資料を読みながらサラッと答えるリーシャ。ツツコミの延長線上で溜息を吐くグラン。しかし、ふとリーシャの言葉が再度頭に過って真顔でリーシャの方に視線を向ける。

「今リーシャなんて」

「何も言っていないです」

「いやでも今」

「何も言っていないです」

「……『私が持つていき——』」

「茶化すの辞めてくれますか!? 私が悪かったので復唱するのはやめてください!! 失言、失言でした!! だからやめてください!」

珍しく顔を真っ赤にして恥ずかしがるリーシャ。そんなリーシャがどうにも可愛く、そしていじるのがとても面白く感じているグランは、リーシャの言葉に耳を貸さずに弄り続けていく。

「何!? 自分が一番になりたいってこと!? 意外と独占欲強いよねリーシャちゃん!!」

「ちよ、ホントにやめてください!」

「初心で青くて赤くてその青春が俺は羨ましいぞ! なんだ、お姉さん達に取られかけて嫉妬してるのか! リーシャで良ければ俺がいくらでも構ってや」

「いい加減にしてください」

「はい……」

顔を真っ赤にしたリーシャの顔が真っ黒になる。それはまるで秩序の闇の深さを表しているかのような……それ程までの黒さをまとっていた。代わりに、意地悪な黒さを孕んでいたグランの顔が真っ赤に染まっていた……血で。

「……ところで、主犯格メンバーはどうするの?」

「まあ反省書ですね……2回分」

「……2回分?」

「まあ、女性団員達を煽ったこと……」

「煽ったことと?」

「未成年淫行防止条例違反」

「……そっか俺って未成年か!」

ハツとするグラン。まるで自分が今まで未成年だということを忘れていたかのような口振りだった。まるで、1年も旅をしていないは

ずなのに何度もハロウィンやら夏イベントやらを楽しんでいても年齢が増えていつていない気がしているのだ。

「自分をなんだと思ってるんですか……」

「聞いてくれリーシャ、あまりにもハロウィンやらクリスマスやらお正月を味わっている感じがしているせいか、俺最近自分のことを未成年だと言い張ってるだけのオッサンな気がしてたんだ」

「少なくとも貴方の精神は偶に未成年じゃないですね、後最近取得したジョブの色っぽさとか……」

「色っぽさ……」

「ごめんなさい今の忘れてくださいお願いします言う事を聞かないとまた刺しますよ」

「いや！ そうやってまた私を刺すんでしょ！ ドランクみたいに！」

ドランクみたいに!!」

「……」

「あっ……！ ごめ、痛っ……言いすぎたから……ごめん許して……！」

突き刺すリーシャと刺されるグラン。こうやって二人でイチヤイチャしていきながら楽しんでいるところを、モニカが観察していたことを知るのはまた別の話である。



聖乙女、私に任せてくれないか？

「本日のゲストはジャンヌさんです」  
「よろしく頼む」

戦乙女ジャンヌ、大きな旗を振りかざし戦いに赴く者を鼓舞する聖女である。趣味は裁縫とお菓子作りであり、その辺の趣味はかなり乙女なので案外女の子をしている時もあるのだ。

「えー、ジャンヌ……」

「……どうした？ グラン」

「……いや、一時前のジャンヌって結構色っぽかったなって思って……別に今のジャンヌがダメって言うわけじゃないけど」

「あ、あの時のことは忘れてくれ……」

ジャンヌは頬を赤らめていた。というのも、一時期ジャンヌは幽世の住人と呼ばれる者たちに騙されていた事があるのだ。ジャンヌは神を信じているが、その神に対する信仰をジャンヌから奪い闇へと堕としめたのだ。

ただ、その時のジャンヌはまるでグランに依存するかのような態度となっており、そのことをグランは言っていたのだ。

「あの時の私はどうかしていたのだ……信仰を失うなんて、あつてはならないのに……」

「まあ、うん……あれはしようがないと言えましょうがない……そう言えば、最近可愛らしい服を着てたよね？」

「ああ、あれは私はまだ今のようになる前に来ていた……村娘時代の服だな。引っぱり出してきて、着てみたら案外いけるといふことに気づいてしまったな……」

「なかなか可愛くて覚えてたよ」

「ありがとう、グラン」

ジャンヌの昔の服、白の服にピンクのスカート。それにグランのデフォルト装備である、籠手のみ装備をやっていた装備だ。要するに、まだジャンヌが戦乙女となる前の……聖女である前の姿とも言える。  
「……こうやって話してるとき」

「ああ」

「ジャンヌもカリオストロ並に色んな服着るよね。服というか……霧  
囲気が変わるもの」

「……いや、あとほかには水着程度だろう」

「なんか前にかなりゆつたりとした服きてなかった？ 確か、ジャー  
ジとかっていう——」

「それ以上いけない」

「あっはい」

ジャージ姿のジャンヌ。要するにいつものキリツとした霧囲気を  
全て薙ぎ払って生まれた、グダっているジャンヌである。ルナールの  
妄想によって生まれたそれを、コルワが実現しようとしてジャンヌに  
渡されたものだった。

意外と動き安いために団内ではそれなりに人気が高い代物である。  
オシヤレを気にする女子達からは、かなり不評を煽っている。コルワ  
もオシヤレとしてはナシの方向性だった。

「……まあ、そんなジャンヌにもお便りはあるわけで」

「ほう、まあどのような質問が来てもなるべく答えるようにしよう」

「というわけで一通目『あの旗って重そうですけど、重いんですか？』」

「軽いぞ？」

「嘘つけめつちや重かったじゃんあれ」

「……？ 私はいつも振っているから、別にそうは思ったことは無い  
が……」

ジャンヌのあの振り回している旗だが、普通にグランの扱っている  
剣よりも遥かに重い。大体、鉄の棒に巨大な布をつけているのだけ  
ら、剣以上の重さになりかねないのは当たり前なのだが。

「多分そういうことあんまり言わない方がいいぞ？」

「？ どうしてだ？」

「力持ちとかなんとか言われたりして、パワー面で頼られる」

「それならば団の役に立っていいじゃないか」

「ジャンヌよりもパワーがない男子勢は若干凹む」

「……」

そう、剣よりも重たいものを振るっているのならば、それ以下の重みものを奮っている男勢はそれはもう気にするのだ。ハーヴィン男性陣は元より気にしないので問題ないが、1番気にするのはドラフの男子勢である。

あの筋肉量でジャンヌよりも重たいものを持たないと知れば、おそらく大なり小なりシヨックは受けてしまうだろう。

「……いや、さすがにそれはないだろう」

「いやあ、多分受ける男子は普通にいるからなあ」

忘れられがちだが、一応非戦闘員はグランサイファーにもいるのだ。例えばローアインなどがそれに該当する。ローアインだったら最早シヨックどころか感心するだろうが、とりあえず何かしらのリアクションは確実に存在するだろう。

「そう言えば、あの旗で攻撃ってできるの?」

「……できないことも無いが、完全に殴るタイプの武器になってしま  
うな」

「相手の頭が弾け飛びそう」

「そこまででは無いぞ!」

「片手で振ってる時点であんまり信用ないってことに気づいて欲しい」

大剣はその重さを利用して相手を無理やり叩き割る武器である。つまり、重みさえあれば鋭くなくても大抵どうにかなるという訳である。

「くっ……グランも私のことをゴリラと呼ぶのか……」

「呼ばれてたのか……」

「私が小さかった頃は、剣を振るために剣よりも重いものをよく振ったのに……何故かそれが原因でゴリラと呼ばれてしまっていて……」

「そうか……」

同情的な視線を送るグラン。ジャンヌは悔しそうにしているが、呼ばれる方にも明確な原因があるので、簡単にフォローできないのが現状である。

つまり、フォローではなく見て見ぬふりをするのが得策なのだ。

「……2通目行くこうな」

「……ああ」

『着替えると色々開放的になるのは何故ですか?』

「いや、私はそこまで開放的になった記憶は……」

グランとジャンヌは、今までのジャンヌを思い出ししていく。

闇に落ちたジャンヌ、よくグランに甘える。自分の体を押し付けてくる。なんでもしてくれそうな雰囲気がある。言葉の意味を理解していないながらも体を密着させてくる。結論、開放的。

水着に着替えたジャンヌ、お姉さんみが強くなる。あーんしてくる。濡れた体でも構わずにこちらを誘惑してくる。お姉さん力が強い、甘えさせてくれそう。言葉の意味を理解していながらも甘えさせてくれそう。結論、開放的。

ジャージに着替えたジャンヌ。もうなんか凄いだらけきってる、スッチが完全にoff、モラルもオフ、キャラもオフ……色々とおフにしてスライムになっている。結論は開放的。

「結構開放的だな」

「待て待て、最後のは関係ないだろう」

「うるせえジャージ着せんで」

「くっ……卑劣な……」

「卑劣なの?」

「卑劣だ……」

テーブルに突っ伏しているジャンヌ。その覇気のなさは最早ジャージジャンヌも同然、と言ったところだった。カメラがあれば写真を撮ってやりたい程であった。

「……そうか、そんなにジャージ嫌だったのか……」

「あれは私の黒歴史だ……」

「黒歴史は再誕するものだから後で着せるね」

「馬鹿な……何故そんなことをする……」

「だらけているジャンヌがかわいいのがいけない」

「……」

満更でもなさそうなジャンヌの反応に、グランの嗜虐心が疼いてい

た。この聖女、普段はキリツとしているがどこか抜けが会った瞬間にすごくいじりやすい対象となるのだ。

「……そ、そうか……しかしだらけているところを褒められても嬉しくは……」

「じゃあ俺の部屋にずっと居ていいからずっとダラける?」  
「……」

真面目にジャンヌは思案しかけていた。しかし、聖女としての意地が彼女をなんとかだらけさせない方向へと向かわせていた。

「……い、いや遠慮しておこう」  
「そうかあ」

「……は、早く次のお便りを読んでくれ」

「はいはい……三通目『裁縫が得意ならウチで働いて欲しい』……これ  
コルワだな」

「うーん……」

コルワからのお便りに難色を示すジャンヌ。普段の彼女ならちやんと何かしらのきちんとした意見を言うが、何故かあまりいい意見を言えなさそうにしていた。

「……どしたの?」

「いや、その誘いは嬉しいのだが……」

「だが?」

「彼女の裁縫速度と技術では、私は足元にも及ばないだろうと思って  
な……」

「確かに……コルワの速度は凄まじいしな」

そもそも本業と始めたての人物では、明確な差が出てきてしまうのだが……ジャンヌはそれを気にしているようだ。さすがにコルワク  
ラスともなると、その域に達するまでに時間がかかってしまうかもしれ  
れないが、問題は無いだろう。

「でも、腕前は関係ないと思うぞ?」

「……どういうことだ?」

「ジャンヌは誰かのために思って裁縫ができる、お菓子作りも一緒だ  
けどさ……誰かのために何かができるってやっぱすごい事だし、素

晴らしい事だと思うからさ」

グランは思ったことをそのまま語っていた。ジャンヌはその言葉に感銘を受けたのか、目を見開いて驚いたような表情となっていた。

「……考えたこともなかったな、私の趣味が誰かのためになっている……というのは」

「趣味だからね、誰かのためにできることをした方がいいとか……どんな趣味をやっているから偉いとかはないけどさ……ジャンヌは人の為に来ることを、本当に趣味にできているんだからすごいと思うよ」

「ふふ、ありがとうグラン。少し救われた気分だよ」

「助けになれたのなら、俺も嬉しいよ……という訳で今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます、また次回この番組でおあいしましよう……さようなら」

「……ところで、ハロウインの時に私のお腹を触った件についてだが

――」

「団長さん今の話詳しく」

映像の最後に現れたのはリーシャだった。ふとジャンヌが発現したセリフによって、本日のグランの残り時間はリーシャによる尋問となったのだった。

だが、それはグランの自業自得なので仕方ないのだ。そう、仕方ないのだ。

「ジャンヌジャンヌ」

「どうした？ グラン」

「ジャー」

「着ないからな？」

「ジャー麺食べたくない？ 昼に」

「くっ……」

後日、グランからのジャージ煽りは加速度的に酷くなっていた。ちなみに今の時間は、朝ご飯を食べたばかりなので完全に煽りである。

「いつまで私を辱めるんだ……」

「え？ ジャンヌが俺に心を許してくれる限りずっと」

「君は1人になりたいのか……？」

「トーマンター見てみろよ、あんな顔してて仲良くしたいなんて言ってる奴がまともに見えるか？」

「確かに」

しかし、煽っていてもすぐさまにこうやって普通に会話を始められるので、なんだかんだ仲がいいのは変わらないようである。グランもジャンヌも、お互いのことを信用しているのでできる芸当である。

「いやしかし、あまり煽られると少しおしおきしてしまうぞ？」

「ほう！ どういったお仕置きをするのかな!!? ハロウインのイタズラのような事かな!? だったら俺はジャンヌにジャージを着せるイタズラを」

「神槍マルテ！」

「こはっ!!」

適当に横に薙ぎ払割られる旗。しかし重量が相当なのでグランはこの原理も含めて簡単に吹っ飛んでいく。人間ひとりが吹き飛ばす力を、ジャンヌは簡単に出せるのだ。

「……ナイスマツスル……」

「待て！ 今の一言だけは絶対に認めない!!」

ジャンヌはグランに駆け寄ろうとする。しかし、その瞬間つまずいてしまい……上から旗を振り下ろす形になった。

「あ——」

神槍マルテが振り下ろされた先は、グランの神槍マルテだった。つ

まり、グランは今度からジータちゃんになってしまう……なんてことも無く、後日なんとかグラン君のまま復帰したのであった。



禁呪の恋人、愛の力ですね？

「今回のゲストはサルナーンさんです」

「どうも……それと、僕のハニー……は映るんですかカメラに」  
「いや分からねえ……」

サルナーン、エルーンのメガネ男子である。寿命が近づいていたため、消滅寸前だったカザンという精霊に一目惚れをして、その精霊と半ば強引に契約。その影響により寿命が縮んでしまうという結果になってしまっていた。

しかし、本人は案外そこを気にしていない。気にしているのはカザン……つまりはハニーとの時間をいかに過ごすか。そしてハニーをどう生かすか位のものである。

「……うーん」

「サルナーン？」

「僕のハニーが見えているのなら、僕が語るハニーの美しさや可愛さ等を存分にかつ正確に伝えることが出来るのですが……映らないとなると、理解して貰えない可能性の方が高いと思ひましてね」

「……まあ、うん……わかる」

ぶつちやけ見えていなければ、どれだけ細かい説明をしてもそれを確認する術はないだろう。なおかつ、勘違いが増えかねないのも原因だ。

「というか今回はお便りはハニーの分を紹介してくださいよ？」

「いや、君のハニー見えてても何言ってるかよくわからんから全然来ないっての」

精霊カザン、その言葉は人間のものとは違う。故に意思疎通をできるのは、契約を結んだサルナーン自身と星晶獣をその身に宿せるルリア、そして精霊と縁が深い人物のみとなっている。

「はあ……仕方ありませんね……え？　なんですかハニー？」

「――」

「ふむ……ふむふむ……」

「……ハニーなんて言ってるか説明して」

『タピオカミルクティー飲みながら待つてるから存分に楽しんでいい』ですって!? ハニー、さすがにあんな俗物を飲ませるのは反対ですよ!』

「タピオカミルクティー屋が激怒しそうなセリフだ……いやまあ、それ以前の話なんだが……」

「――?」

『それ以前の問題って何?』と

「もうタピオカは流行り終わってるから続々と店が閉店してきてる」

寒くなってきたせいだろうか、そもその飲み物が少しづつ流行らなくなってきた。暖かい飲み物ならいざ知らず、暖かいものに出ないタピオカミルクティーは必然的に売れなくなってきたのだ。

「――!」

「じゃあここで作れって言ってます」

「ローアインに頼むわ……作ってるのを待つてる間にお便り紹介行ってみましょう」

カメラ越しにローアインにお願いして、グランはお便り箱のダンボールを漁る。そうして、3枚取りだして内1枚を読み上げていく。

「1通目『ハニーさんの性格』」

「ハニーは素晴らしいですよ。強気でドンドン意見を言ってくれますし私にも時々辛辣な言葉を投げかけたりしますがその強気な部分も素晴らしいというかでも時々見せる私を心配する様子や言葉がその強気な部分とのギャップにつながって『ああこれがツンデレって奴ですか』って思えた時のあの幸福感と言ったらまず私以上に幸せに感じる人はいないでしょうでも他の子達には優しく微笑んだり優しい言葉投げかけたりしている優しい部分がまた私の心を優しく満たし溢れ差せていてやはり私のためを思ってくれる言葉を時々投げかけてくれるからこそハニーは愛らしいというか愛しいというかだから彼女は誰に対しても優しいのですが私に対してはツンデレというものになってくるので私にはどうしても素直になりきれないなんて言う部分が」

「」

「キモいって酷くないですか!?!」

「いやあ、今のはしようがなくね?」

ハニーの事になると口調が早口になる、という典型的なルナールのようなタイプのサルナーン。ハニーのこと以外はどうでもいいと考えているため、彼女以外に向けられる興味全てがハニーに注がれるとなれば確かにここまでになるのかもしれない。

「くっ……しかしそんな君が好きですよハニー」

「……………」

「ハニー?」

顔を背けるハニー。なるほどこれは可愛いとグランは納得した。なんだかんだ、この2人は仲がいいのは間違いないことだろう。

「分かりました……要するに早口で語らなければ良いのでしょうか」

「まあそれ以前にもう二通目行くけどね」

「何故!?!」

「だってサルナーンがハニーの話するとまじで三日三晩続くじゃん」

「くっ……………」

「というわけで二通目『ハニーさんの魅力』」

「先程も申し上げましたが、まずハニーの魅力というのは誰にでも優しいところです。その中で私には一見辛辣な態度をとっているように見えますが、これはツンデレの前降りです。そう、私のことを心配しているからこそ出てくる辛辣な言葉……つまり彼女は誰にでも優しいというのが第1の魅力です。無論、彼女のいい所はまだあります。こんなことを言うのは俗物かもしれませんが、まず見た目がいい。見た目のことを褒めるのは3流などと言う輩もいらつしやいませが、見た目から褒めなければ内面なんて到底褒められないでしょう。つまり、2つ目の魅力は見た目となります。見た目のどこがいいかと言われたらまずそのふわふわ感ですね。いつけん天然系ふわふわ女子に見せ掛けてきつちりとしたそのギャップで私の心はもうキュンキュンハートマイラブですよ。ああそうそう、彼女の見た目に關してなのですが、一時期私がやさぐれていた時は少し変色していた

んですよ。あれは別に私の雰囲気に合わせて彼女の優しさではなくて契約している相手の状態に合わせているという話があるんですよ。とは言っても今は吹っ切れて戻っているだけで寿命が尽きそうなのは変わらないのでいつあの状態に戻るかわからないんですけどね。まあ簡単に言えばあの紫色になっているハニーも儂さが溢れていてとても魅力的という事ですね。あとまだまだ魅力的なことはありませんが、一旦3つ目まで置いておきましょう。これ以上語るとまた何か言われかねないですからね。とりあえず3つ目の魅力なのですが」「はいストップ」「またですか!？」

延々としゃべり続けるサルナーン。彼のハニーに対する愛情は文字通り底なしなので、語らせ始めると本気で止まらなくなってしまう。先程と比べて多少トークの勢いは落ちているが、これは話すことが少なくなったと言うよりは早口で喋らないように抑えているというのが正しいだろう。

「凄い語るねほんと」

「逆にハニーのことで語らない私は私ではありませんよ?」「確かに」

サルナーンが本当に重要なこと以外で、ハニー以外のことを語るのをグランは考えられなかった。実際ハニーのこと以外で語るとしたら、飯位のものである。

「しかし、今のところ2つともハニー関係ですね……つまり3つ目もハニー関係ということですね」

「いやいやそれは分かんよ」

「え、ここでハニー関係じゃなかったら寿命貰いますよ?」

「代償が重い!!」

サルナーンなりの冗談なのだが、微妙に通じなかった。というか、一時期のサルナーンは本気で寿命を子供から取ろうとしていたこともあって、微妙に冗談で済まなくなっている。

「……まあとりあえず3つ目読み上げるよ『ハニーさんと行動している時に起(こ)る(こ)ること』」

「行動している時に起こること……？ 質問の意味が理解出来ないのですが……」

「とりあえず昨日一日を振り返ってみてよ」

「……そうですね——」

「——とまあこんな所なのですが……」

「いやあ、ほんとに長かったね」

サンドイッチを頬張っているグラン。既にカメラの電源は切られており番組は既に終了していることを告げていた。サルナーンもそれが分からないほどでは無いので、少しだけムツとしていた。

「……人の話をしている途中に、しかも貴方が開いた番組でしょう？ 長いからと言って勝手に終わらせるのはどうなんですか？」

「窓見ても」

「……窓？ おや……日の入りですか？ たしかに随分と長話してたようですが……」

「日の出だけど？」

「……え？」

「いや、サルナーンが覗いてる窓から見える太陽って日の出の位置なんだよね」

「……では、私は……」

「まあざっと12時間くらいは喋ってたね」

改めて自分が話してた長さが納得出来たのか、サルナーンは頭を抱

えていた。自分がここまで長話するとは思ってもみななかったからだ。

「……しかし、止めようとは思わなかったのですか」

「いや普通一日の振り返りで半日使うとは思わねえわ、サンドイッチはサルナーンの分もあるけど食う？」

「貫きます……いえ、確かに認識してなかった私の責任かもしれないませんが……サンドイッチ美味しいですね……」

「……まあ、うんハニーへの愛情はよう伝わったからさ」

「……ところであなたに言いたいことがあるのですが」

「え、何？」

「ハニーにセクハラしたら寿命取りますからね」

「しないしない、流石に人の彼氏彼女にケチつけるマネはしないって」

そういう面に関してのグランの信用は如何程か、と言われればおそらくそこまで低くはないだろう。セクハラしないという点だけで言えば、もはや地面をのたうち回るどころか島から落下してその下の世界にまで行ってるレベルだが、他人に手を出さないという点で評価されているので、決して低くはない数値になっている。

「……ならいいでしょう、あなたが言うんだったら一応信用しておきます」

「団長への信頼が軒並み低いのはなぜ……？」

「ことセクハラという点においては貴方は信用出来ませんからね」

「まあ大丈夫だよ、魅力的な人ってのは伝わったけどほんとに仲間の彼女だからさ」

本音としてはハニーに関しては、友人以上の目で見れないのがグランの本音である。どこまで行ってもそこまで止まるのが、グランの本音なのである。

「ふむ……突然ですが、1ついいですか？」

「ん？ 何？」

「マンドラゴラについてどう思います？」

「褐色なのにあんな格好するなんてとても性的でえっちだと思いません」

「やっぱりハニーに近づけさせないようにします」

「なん……だと……？」

グランはどこぞのオサレ漫画のような顔をして驚いていた。今の一言で信用が貰えると思っっているのなら、相当の阿呆だろうとサルナーンはため息をつく。

「……一先ず外の空気を吸ってきましょう、その後の本格的に朝食にしましょうか」

「お、いいね何食べる？」

「ハニーの大好きなイチゴジャムを乗せたご飯を」

「ハニーの食事がどういいうものなのか気になる」

二人は駄弁りながら外に出る。その光景を、サルナーンの隣でハニーはふわふわと観察していた。

まるで自分以外に興味を持っていなかったサルナーンが、今では団の皆と親しげに会話出来ている。その光景を見て、サルナーンに気づかれないように微笑む。彼がこの団に来たのは正解だったと、確信を得ながら……またいつも通りサルナーンを軽くいじりながら彼と2人仲良くこの団で過ごしていくのであった。

## 闇堕ち&光堕ち

「神の名の元に！」

「ハニー、今日はどこに行きましょう」

サルナーンとジャンヌを眺めているグラン。その表情はなにか思うところがある様だったが、2人はそれに気づくことは無いのだ。そしてふと、グランは思いついたことがありカリオストロのところへと向かう。

「という訳でなんかこういういい感じに人が分身する薬とかできない？」

「お前錬金術をなんだと思ってるんだ？　んなもん出来るわけがねえだろうが……あんまり変な事言うと、ウロボロスでゴリつと食べさせちゃうゾ☆」

「そこをなんとか出来ない？　作れたらなんでもしてやるぞ」

「言ったな？」

「言ったぞ!!　さあ何をする気だ!!　ちよつとえつちなことか！」

ちよつとえつちなことか!!!」

「そこオープンにさらけ出すお前にびつくりだよ……まあ、そこまで頼み込まれちゃあ仕方ねえな……やってやるよ」

まんざらでも無いどころか、薬ができたあとグランに何してもらおうかのことを考え始めているカリオストロ。そうして、普通そんなもの作ってどうするんだみたいな薬を、作り始めるのであった。

「出来たぞ」



「流石カリえもん」

「天才美少女錬金術と呼べ……この薬は飲んだ人間の魔力を抜き取って、その魔力で分身を作るんだ。だから効果は長くても24時間だ」  
そして難なく薬を作り上げるカリオストロ。グランは撫でながら褒めたたえて、カリオストロの薬を持ち上げる。

「んで？ その薬どう使う気なんだよ」

「ちよつとサルナーンとジャンヌにぶつ掛けてくる!!」  
「えっ」

カリオストロの返事も聞かずにグランはさっさとどこかへ行ってしまう。カリオストロは止める間もなく行ってしまったグランに、少し呆れたものの次会った時に何をさせるか考える時間として、今の時間を有効活用するのであった。

「オラア!! これが通り魔的犯行だオラア!!」

「うわっ!?!」

「ちよつ!?! いきなり何するんです!?!」

2人揃っている所に薬を霧吹き状にして掛けるグラン。明らかな迷惑行為だが、彼の持つ好奇心が倫理観を軽く上回ってしまったのだ。とりあえず今彼の後ろには目を見開いたリーシャが立っていた。ついでにそのままグランにチョコレートスリパーを仕掛けていた。

「くっ……!?! 体が熱い……!?!」

「あ、あなた一体何をかけたのです……!?!」

「んぐえっ……」

薬の効果で微妙に発光しながら、熱を持ち始める2人の体。グランはチヨークスリーパーさされているので本気でそれどころでは無くなっているのだが、すぐにそれ以上に事態が起こり始めていく。

「くっ……!!? 段々と光と熱が強くなってきて……うわああああ!!」  
「くっ……!!?」

そして、目を瞑ってしまうほどの光量を発してその辺一帯が眩しく染まっていく。そして、光が止んだ頃には――

「くっ……な、何が……」

「ああ……体が熱い……グラン、お前の体で私の熱を沈めてくれ……」

「ふへえ……動きたくない……」

「こ、これは一体何が……」

「なっ……!!? 私が2人も増えている……!!?」

「……ああハニー……君を生かすためなら……」

「……こちらも1人増えましたね」

サルナーンがいつものとやさぐれている2人になり、ジャンヌがちよつと色っぽい方と真面目な方と幼い方の3人……になったかと思われていたが……

「……いや、私よ。実は水着の私もいるぞ」

「馬鹿な!?! 水着の私だと!?!」

ジャンヌに関しては水着の分も増えたので4人になっていた。ジャンヌだけ増えすぎでは? と思われるかもしれないが、それが薬の効果なのだから仕方がないだろう。

「ひ、ひとまず落ち着け私たち!!」

「落ち着くためにはグランに色んなところを触ってもらわないとな……」

「く、黒い私がどうにも風紀を乱しかねないです!!」

「水着の私は、格好が恰好なだけに何も言えない……」

ジャンヌの方は4人も増えてしまったので、本気でわちゃわちゃ状態となっている。一方サルナーンたちの方は……

「ですからハニーが……」

「やはりハニーは……」

ハニーの事に関して言い争っていた。同担拒否と言うやつなのだろうか。怒りとか体の熱で真っ赤になってる2人組に対し、グランは段々と青を超えて紫から蒼白へとコロコロ顔の色が変わってきているが、誰も自分のことで手一杯になっているのでグランを助けられない。ちなみに、蒼白になってきているが最低限の呼吸ができるようにリーシャがかなり際どい調整を行っていた。

「……で、これはどう収集付けるつもりなんですか」

「げほっげほっ……すごい強そうなバハムートが見えた……じゃなくて!! いや、まさかここまでになるとは……」

「ほんとに何したかったんですか」

「いや……2人ともちよつと病んでる時期とかあったし、自分で自分のその時期を見たらどうという反応するのになって」

「結果、サルナーンさんは自分同士で語り始めてジャンヌさんは収集が付かなくなったと」

自分同士で結論がついているサルナーンはともかく、ジャンヌは通常の時と闇落ちしている時の自身の差が激しすぎるので、難儀していた。それ以上に、ジャージジャンヌがだらけすぎて操作に難航していた。

「因みにどういう薬なんですか?」

「ぶっつけた相手が急激に変化する前、もしくはした後に別れる薬らしい。ただ衣服の変更とかじゃなくて、性格そのものの変動が起こったら分裂するんだってさ」

「ほかの方だと……」

「そうだな……例えばスタンとかは……ビビリだった時のスタン、死にたがりしてて荒んでたスタン、いい感じに好青年になったスタンの3人に分かれる」

「なるほど……」

「ジークフリートにぶっかけると、片方が暴走してる状態が出てくる」  
「なるほど」

簡単すぎるが、これ以上無い説明の仕方にリーシャは納得する。要するに、碌でもない薬というのだけは理解できるということである。

「それで？ 本当にどう収集つけるつもりなんですか？」

「まあそのうち居なくなるから、大丈夫ですよ」

グランの適当さにリーシャもため息をつく。しかし、ちよつと荒んでいた時期とはいえ元々団に乗ってる仲間。別段こちらに危害を加えることは無いだろうと、リーシャも安心してた。

「ふふ……なあグラン？ 私の体の火照り……2人きりで沈めないか？」

「なっ!? おい私！ 何を言っている!!」

「は、ハレンチですよ!？」

「そ、そうだぞ!？」

「おや……水着の私も言っていたじゃないか……『グランを甘やかしたい、ナルメアが羨ましい』と」

「い、言っていない!!」

「すやあ……」

「なんなら俺は全員相手でも一向に構わなぞ」

グランに手刀を入れつつ、リーシャは確信していた。『止めないと駄目だ』と。仲間に危害は加えなくてもこんな不本意な形で、ルート決定されるのはリーシャにとつても不服なのだ。勿論、ジャンヌもだが。

「今から全員分身が消えるまで部屋にいてもらいます」

「俺は?」

「貴方は部屋で大人しくしてください」

ちやつかり復活したグラン、リーシャに冷たい態度を取られて仕方なくすごすこと下がっていった。だが、リーシャはこれだけでは安心できなかった。何せ、闇ジャンヌがあまりにも風紀を乱しすぎるのだ。

「黒いジャンヌさんはしばらく別室にいてもらつていいですか？」

「なんだ……私だけ省くのか……?」

「相応の罰だと思ってください……とここでこの分身つて……ご飯とか食べるのでしょうか……?」

ちよつとした疑問、グランもその辺は聞いていなかったなので少し考

えていた。食べる必要があるのか、それとも無いのか。そのへんがよく分からなかったため、グランは一旦カリオストロを呼び出して話を聞くことにした。

「……は？ 分身なのに飯いると思ってるのか？」

「だったら食べなくてもいいということですね？」

「要するにそういうことだな」

「単純明快だな……」

「そもそも消化器官を再現してるわけねえからな、まず空腹にすらならねえよ……それに、意思があるように見えるが別にそういう物じゃない。ただ『それっぽい』動きをトレースしてるだけだ」

「……というところ？」

「見た目だけ完全に一緒、服は脱げないし行動は本物っぽいだけ。飯も食わねえなら夜も眠らない……あれだ、動くフィギュアだ」  
「なるほど」

簡単な説明をつけて、グランとリーシャは共に納得していた。つまり、極論監禁しても特に問題は無いという事である。あくまで極論なので、グランたちはする気は無いが。

「ただそれっぽい動きはするからな……グランの童の貞が奪われるのは癪だしな……よし、俺様が黒いジャンヌを見張ってやるよ」

「いいのですか？」

「別に、本来この体は眠る必要性すらねえよ。ただ精神的な問題もあるから寝てるだけだしな」

「そうだったんですか……」

「任せろ……俺様が作った薬に、俺様が作ったこの完璧なボディ……何一つ負ける要素なんてねえからな」

その言葉はフラグではないだろうか、とグランはふと考えたが辞めることにした。これを口に出したら最後……ほんとにフラグが立ちかねないし、ぶつちやけグランは童の貞を失うことに何も恐怖は抱いていないのだ。つまりは、ぶつちやけ襲われてもグラン敵にはオールオツケーという訳である。

襲われたところで、リーシャに裁断されるだけなのだ。ナニがとは

言わないが。

「カリオストロさん!？」

翌日、カリオストロは闇ジャンヌを軟禁している部屋の中で倒れていた。その衣装はなんかいい感じにはだけっていて、正直なことを言えば事後にしか見えないそれである。

「何があっただんですか!？」

「気、気をつける……ジャンヌ……闇のジャンヌ……俺様の、力を吸い取っていきやがった……」

「ど、どうやって……」

「口から直接……」

「よくある漫画とかである奴みたいに吸われたのか!? どうなんだカリオストロ!？」 詳しく聞かせてギユツ」

突然現れたグランに手刀を入れながら、リーシャは一気に警戒レベルを高くする。まさか女性にまで手を出すとは思っていなかったのだ。

「くっ……何とかしなければ……!」

以後、グランサイファー内で謎の通り魔事件が相次いで起こるようになった。犯人はジャンヌ……とは言っても、闇の方なのだが。何故かグランを直接襲うようなことはせず、周りの者からひたすら力を奪って生きのび続けているのだ。

何故こんなことをしているのか、カリオストロでさえ原因がわからないという。ただ、予測をつけるとするならば……闇に落ちている時に溢れているグランへの思いが、妙な化学反応を起こして自己を確立させてしまったのだとか何とか。

「まあ怪我人がなくて何よりじゃねえか」

「しかし、団内の風紀の乱れはまずいですよ」

「いいだろ？ 別に吸われたやつ性の癖が歪んだわけでもあるまいし」

「団内の男の子達が襲われました」

「……」

「何とかしましょう」

「そうだな」

さらに後日、何とか捕まった闇ジャンヌ。その時の最後の一言がこうだったという。

『グランとの練習為だった』と。ぶつちやけキスだけしかしてないの  
で、そんな所は普通のジャンヌを引き継いだのかもしれない……とカリオストロは後に呆れて思っていたのだった。

妄想少女X、いい構図ね？

「今日のゲストはルナルルさんです」

「……コロシテ……コロシテ……」

「まるで不本意に自我が芽生えてしまった機械のような事を言うんだな」

黒いボールのようになってしまっているルナルル。そんな彼女は、耽美絵師である。簡単に言えば男同志が仲良くしている十八禁の絵を描くのが趣味のハーヴィンの女性である。

「だってえ……呼ばれてきてみたらあ……急に閉じ込められて、番組始め出すんだもん……」

「しようがない、要望が多かったんだよ」

「要望って何!?!」

丸まったまま文句を言うルナルル。結構奇妙かつシニールな光景になっているが、グランは一切のツッコミをせずにそのままトークを続けていく。

「ルナルルに出て欲しいって声がいっぱいあってな」

「……いっぱいって?」

「お便りがダンボール箱30〜40箱になるくらい」

「なんでそんなに多いのよオ……」

「そりゃあおこたみが9割書いてかさまししてるしね」

「そんなのノーカンよ!!」

憤るルナルルだったが、時すでに遅し。グランと共に閉じ込められた部屋で、これから番組を行わなければならないのだ。

「まあまあ、そんな丸まってないで元に戻ってご覧よ」

「誰のせいでこうなってる……」

「誰か元凶がいるのか!?!」

「くっ……」

悔しがるルナルル。しかし未だに丸まっているので、最早ルナルルでは無く謎の黒い玉と会話しているようにしか見えなかった。だが、本気で抵抗しないのは諦めていると言うよりは、何だかんだ興味は



あつたということだろう。

「……仕方ないわね……少しだけ戻ってあげる」

「ところでその丸まる特技って、ハーヴェイン全員できるの？」

グランの純粹な疑問による質問、しかしその答えは返ってこずルナルは目を合わせまいと顔を背けていた。自分だけの特技なのかと、グランは無言で理解してしまった。

「またひとつルナルのことを知れた、僕は嬉しい」

「物語りの主人公のような事を……というか、私に対してかさまし以外のお便りってあるの？」

「あるよ？」

ガサゴソと漁りながら、グランは3つのお便りをルナルの目の前に置く。いつもと違うやり方に、ルナルはお便りとグランを交互に見て困惑していた。

「え、なんでこれ私の前に置くの？」

「え、なんかおかしいことしてる？」

「え？」

さらに困惑するルナル。しかし、いつもならこのままグランが読み上げるので、きつとグランが読み上げるのだろうかと思いの間待っていた。

「……え、読まないの？」

「いや、かさまし以外のお便りがあつたよってだけ……因みにご丁寧に名前書いてる人もいるから」

「あ、ああそうなの……えっと……白竜騎士団のヴェインさん、ランスロットさん、パーシヴァルさん……ゴフツ」

名前を読み上げていくうちに、自分に届いたお便りの相手のことを考えてしまって、ルナルに多大な負担がかかっていた。当たり前である、イケメン4騎士……それもなんかこういい感じの空気を出している……とルナルが語る四騎士のうちの3人がお便りを出していたのだ。その負担は想像を絶するものだろう。

「ルナル！ 大丈夫か!？」

「無、無理……私には、読めない……」

「じゃあ俺が変わりに読むぞ。『そういえばこの間ランちゃんを俺が漫画で書いてなかったか？ ちらつとしか見てなかったんだけど』」  
「ゴブツファツ！」

ルナールに甚大なダメージが入っていた。何気ないヴェインの一言が、ルナールのハートに大ダメージを与えていた。あまりにも強すぎるダメージに、ルナールは最早立ち上がることもさえ出来なくなっていた。

「またルナールがダメージを受けてる……」

「な、なんで……」

「そういえばこの間言ってたぞ、ルナールがいくら呼んでも部屋から出てこないし入ってみたら一心不乱に漫画書いてたって」

「い、いつの間に……」

「飯渡しに行った時だったさ」

「……気づいたらサンドイッチがあったのはそれが原因……!?!」

「おっと、まさかそれに気づいていなかったパターン？」

ルナールの集中力にしる感心している中で、自分の見られたくないものがある時は、きちんと鍵くらいはかけておこう。グランはそう思いながら次のお便りに手を伸ばしていた。

「え、まさか今ので私の一通目終わり!?!」

「いや、だって……これ以上話したら多分ダメージ負うのは……」

「そうね、私も次のお便りに移った方がいいと思うわ」

「じゃあ二通目『何故俺とジークフリートの距離が近い漫画を書いてる』」

「ぎゃつはあああああああああ!?!?!?!?!」

まるで心臓が炸裂したかのよけに飛び上がり、ゴロゴロ転がるルナール。最早彼女にとってこのお便りコーナーは、ただの処刑時間と化していた。

「はあ、はあ……も、もうやめて欲しいわ……」

「そんなわけにもいかない……お便りなんだ、さすがに二通連続で答えないわけにもいかない」

「いやいやいやいや!! さっき答えたでしょ!?!」

「駄目です」

「ほとんど同じ内容だったのだけれど!？」

「大丈夫大丈夫……あ、ごめんランスロットも同じような内容だったわ」

「うっひやわあああああああああああああ!!!」

まるで地面で跳ねる魚のように、ルナールは地面を跳ね飛んでいた。最早彼女にとって、この時間は処刑時間を超えて惨殺現場である。真っ黒から真っ赤から色々顔色が変わっていった。顔色の変貌だけなら、シヤノワールに匹敵するレベルだろう。

「う、うう……ランヴェイかヴェイランか……パージクかジクパーか……ソレで悩んじゃうのよお……」

「……え、そっち?」

グランはついルナールの口から出てきた言葉に反応してしまう。もっとほかに言うことがあったんじゃないだろうか、とさえ思えてくるのだが、どうにもルナール的にはそれが一番気になったらしい。

「……仕方ないなあ、じゃあラスト1通目……まあなるべくルナールの書いてる物以外の質問を探してみる」

「お願いします团长様……」

「んー……お、これなんかどうだ」

「え、何?」

『『魔物の絵の書き方のコツを教えてください』』

「……それ、誰からとかわかる?」

「ジークフリート」

「っ——」

ルナールの意識はそこで一瞬吹き飛んでいた。あまりの事態に、魂と肉体が乖離しかけてしまっていたのだ。

「っ!! はあ、はあ……!!」

「あまりの事態に、ルナールの命が今やばかったように思えるけど」

「だ、大丈夫……大丈夫のはずだから……」

「……で、コツとかつてあるの?」

ジークフリートからの質問とはいえ、結構まともな質問なのでル

ナールは少し考えていた。というのも、そもそもルナールは魔物の絵を書くことに向けては天才的だったのだ。しかし、彼女の絵にはそれは耽美絵にはむかない為には今は矯正中なのである。それでも偶に、魔物の絵自体は書いていたりするのだが。

「……これに関しては、魔物だけに限らないわ」

「と言うと？」

「絵って、書く対象の体の特徴を掴まないと書けないのよ」

「特徴」

「例えば……私の絵を描く時に、身長を高く描いてたらおかしいわよね」

「こんな事言うのもあれだけど、ハーヴィンだしね」

「そういう事よ、視覚的なバランスを考えてかければなんとかなるものよ」

「ふむ……」

確かに、とグランは納得していた。ルナールが魔物の絵をサラサラと書けるのは、慣れてる以上はその特徴を掴んでいるからなのだ。ルナールは、魔物の絵のバランスを取ることに非常に長けているため、ああして色んな魔物の絵を書くことが出来るのである。

「……後、これに関しては単純な経験値と技能の話」

「お？」

「絵を描くには、才能がいるわ。努力の才能とかじゃなくて、ほんとに描ける才能が」

「また現実的というか、厳しいというか」

「ただ、バランスを鍛え上げることが出来るわ」

「さっき言ってた体のバランスとかの？」

「そうよ、バランスさえ合っていれば一般的に絵が下手って言われる人でも人間を書くことは出来るわ」

「よくわからんんだけど……」

「そうね……まあこれは書いてみたら案外分かるかもしれないわね、後で部屋に来たら教えてあげるわ」

「わーい」

素直に喜ぶグラン。この時、ルナールは気づいていなかった。実は今自分がサラッと年下の男子を部屋に誘っていることに。そう、耽美絵は18歳未満は閲覧禁止のアダルティゾーンなのだ、ハーヴェインとはいえ大人の女性が未成年の男の子を部屋に誘っているのだ。

「ほんと、こういうところ見てるとやっぱり子供って思えるわね」

「ところでルナール」

「何かしら？」

「今の一言でリーシャが動き出した件について」

「何故……!?!」

ルナールは全くそんな邪な気持ちがなかったので、リーシャが動くことに疑問しか抱いていなかった。しかし、言動と状況があれなので動かざるを得ないのだ。

「部屋に誘うのがそんなにおかしいの!?!」

「ルナール」

「何よ」

「見た目シヨタのお兄さんが、自分よりも身長の高いシヨタを誘ったらどう思う?」

「まず初めにどちらが受けか攻めかを考えるわね高身長シヨタ攻めというのはある意味鉄板で年上が年下にいいようにされるといっては背徳感的な興奮を覚えさせられるわでも逆のパターンの低身長男子が高身長シヨタを攻めているのもまた鉄板と言えるわね年上らしいところを見せようとしてシヨタとイチャイチャするのは何者にも味わいがたい王道を楽しむことが出来るわそしてそのシチュエーションだとどちらかがSかMかでまた答えが変わってくるものなのよ仮に攻められる方がSだった場合もう片方もSだったらMになるか屈辱感を味わいながらもその快楽」

「それ以上話すようなら私と少しお話することになるけれど構いませんか?」

「oh」

覚醒して話している間に追いつかれたグランとルナール。趣味の話をするのはいいが、時と場合を考えなければいけないのだとつくづく

く感じるのであった。

「……ところでルナールさん」

「はい、なんででしょうか……」

リーシャと二人きりになっているルナール。次に何を言われるのかわからなくて、ビクビクと脅えてしまっていた。

「……その、ハロウインの時に着てた魔法少女衣装を……」

「何故それを知っている……」

「……お願いします……少し貸してください……!」

「……いいけど、ハーヴェインサイズだから、着れないわよ?」

「……探寸し直してもらって、私が着ます」

「……何故?」

「か、可愛いオシヤレってしたくないですか……?」

この一言で、ルナールはニヤニヤしながらもリーシャに魔法少女衣装を貸し出すのであった。因みに、リーシャがこんなことを聞いたのは、グランの目の前でこの衣装を着たルナールに対抗するためだったとは、誰も知らない話なのである。

必中の遊撃手、練習を思い出して？

「本日のゲストはザーリリヤオーさんです」

「どうも、長いと感じたのならリヤオと呼んでください」

「……ん？」

丁寧に挨拶を行うザーリリヤオー。その事にグランは、妙な違和感を抱いていた。

「緊張していないの？」

「へ？ まあ、はい」

ザーリリヤオーは、本番に弱いタイプである。特に、1度でもミスできないという状況になると本当に緊張しきって、実力をまともに出せないことが多いのだ。

「ふむ……じゃあ、罰ゲームを付けよう」

「なぜ!？」

「いや、その方がザーリリヤオーも本気出せるでしょ？」

「ほ、本気って……というか、一体どんな罰ゲームをさせるつもりなんですか」

「うーん、そうだなあ……」

少し考え込むグラン。罰ゲームが何なのかが分からないし、射撃ではなく、こういうったトークで罰ゲームを決めるのはなかなか難しいのではないかと、少しだけザーリリヤオーは困惑していた。

「よし、決めた。『1度噛む事に恥ずかしい過去を暴露していく』でいい」

「いやいやいや！ なんですかその罰ゲーム!? というか、恥ずかしい過去なんて暴露しませんからね!？」

「いや、するぞ」

「誰が!？」

「ミラオルが」

「そういう事よ、リヤオ」

突如としてグランの背中からよじ登ってきたのは、ミラオルだっ

た。いつからそこにいたのか分からないが、ミラオルはグランの協力者だということがわかると、ザーリリヤオーはグランたちの言っていることが本気だとわかり、途端に緊張し始めていた。

「因みに1つ暴露される事に、ザーリリヤオーの後にやるミラオルでも同じことが起きるぞ」

「えっ」

今言われたことは、ミラオルですら全くの初耳だったのだが……グランはそのまま続けていく。何事も無かったかのようにお便りを取り出して、何事も無かったかのようにそのままお便りを読み上げている。

「1通目『練習だと分かっていたら、どんな事でも失敗しない自信はありますか?』」

「当たり前じゃないですか」

ふふん、と胸を貼るザーリリヤオー。しかし、グランの隣にいたミラオルは表情を一切変えないままに、とあることを口走っていた。

「じゃあ、団長のズボンのベルトを狙い撃ちしなさい。外したら団長に刺さるかの的じゃないところに刺さるかの二択よ」

「はい!?!」

「じゃあその流れで、ベルトがちぎれてズボンがずり落ちたら成功という条件をつけることにしよう」

「ちよ、ほんとに2人して何言ってるんですか!?!」

矢を外して罰ゲームを受けるか、覚悟を決めてグランのパンツを見るか……ザーリリヤオーは2つ二つの選択を迫られていた。ただでさえ罰ゲームが存在しているというのに、このままでは異性の下着を見ることになってしまうと、顔を真っ赤にしていた。

「う、うう……!?!」

「まあいじるのはこれくらいにして……本番じゃなかったら、リヤオーは本当に百発百中よ……よほど相手が高速で動いていない限りはね」

ザーリリヤオーをいじるのをやめて、ミラオルはザーリリヤオーに正当な評価を下す。緊張することによるマイナスもあるが、それを除けばザーリリヤオーはミラオルも認める射手になるのだ。



「ほー……じゃあ今度無茶苦茶早い狙わせてみよつか」

「だいぶえげつないこと言ってる自覚あるのかしら、この団長は」

呆れながらため息を吐くミラオル。しかし、それくらいのことではまだ動じることは無いのか、ザーリリヤオーは余裕そうな笑みを浮かべていた。

「……ほんとに余裕そうだな、ザーリリヤオー」

「そ、そうですか？ けど、ほんとにそれくらいなら失敗することは本当に低いはずですけどね」

自慢のボウガン。見せつけるように取りだしながら、ザーリリヤオーはやはり自慢するかのように、自分では今の条件は簡単にクリア出来る……と伝えるかのように言葉と行動でそれらを示していた。

「どのくらいまでなら狙えるわけ？」

「そうですね……宙を飛んでる虫や、虫型の魔物クラスでもまだ狙えますね……強いて言うなら、本当に虫を狙う場合だと虫そのものが見えなくて対象が狙えない……なんてことも有り得なくは無いですけど……」

グランはこれにはさすがに納得していた。対象が見えない中で射撃をさせるのは、さすがに愚か者のする事である。よって、流石にグランはザーリリヤオーの相手に虫を選ぶことはないだろう。

「じゃあ轟速のGの相手は出来そう？」

「……え、いるんですか？」

「偶に」

「掃除しましょうよ……」

「いや……そもそもどこから入ってきてるかも分からないのに……」

と、ここまで来て話がズレてきていることに気づいたので、三人は一旦話を戻すために別のお便りを手に取っていた。これ以上あの虫の話をするのは色々都合が悪いのだ。

「さて、2通目と行きましょう。『本当に男ですか？』」

「……」

「……リヤオ、もしかして貴方……」

「なんでそう思われてるのか、謎で仕方ないですよ……」

「何でかしらね……」

ザーリリヤオーの性別。確かにハーヴィン、特に髭が生えていない男性と女性の区別は、基本的にかなりしづらい。成人した男性のハーヴィンは声が比較的低いので、そこで判別することも可能だが……声が高い男性ともなると、意外と判別がしづらいのだ。

「そんなに分かりづらいもんですかね」

「極端な格好をしたらわかりやすいのでしようけど……」

「ミラオルは見ただけで女の子って分かるもんな、なんかもう雰囲気  
が」

「そ、そう？ 私ってそんなに女の子らしく見えてる？」

満更でもなさそうなミラオル。しかし、グランは内心こうも考えていた。『でもツツコミ役として見るとあんまり女の子っぽいツツコミしないよね』と。女の子っぽいツツコミというのが全く意味がわからないが、とりあえずグランはミラオルを女性として認識していた。

「まあ大丈夫でしょ、俺はちゃんと把握してるから」

「ほ、ほんとですか？」

「初見で男か女かの判別なんて簡単に付けられる……あと意外とハーヴィンは分かりやすい。なんか、ほんとにわかりやすい格好してるの多いし」

「……あれ？ その言い方だとまるで、他の種族がわかりづらいと言っているような……」

「……エルーン、声を聞くまでエルーンはたまに分からない時がある」

「え……」

「何でよ……わかりやすいと思うんだけど……？」

横腹脇出し背中出し、女性であれば胸が横から見えるし男性ならば横腹の筋肉がチラリズムしている。はつきりと言えば、そこで判別できる分ハーヴィンよりも圧倒的にわかりやすいはずなのだ。

「……エルーンの男性陣ってさ、何人か女の子みたいな顔してるの多いし……格好は女性と変わらないし……判断の付けようがない時がある」

「ああ……」

余程の理由がない限り男装する女性はいないし、女装する男性はいない。その辺の事を考えてみれば、まずハーヴェインは格好が男性が女性かで結構区別が付きやすいので、案外わかる。だが男女ともにほとんど格好が同じエルーンではわかりづらい時がある。グランはそう言っているのだ。

「……もういつそ全員メーテラとかヘルエスとかユエルみたいな格好になって?」

「流石にそれはやりすぎでは……」

そこまで行くと、最早エルーン関係ないレベルである。そして、若干グランの願望も入っているのは明白である。

「……さて、話がまたそれてきたところで3通目。『練習だと思つて失敗したことはありませんか?』」

「私が知る限りないわよ」

「うーん……覚えがないですけど、多分気が緩みすぎてたらあるかも……くらいかと」

「気が緩みすぎてたらつて……何、そんな事あるの?」

「夏のアウギユステバカンスの時とか……結構……」

少し照れながらも、ザーリリャオーは語る。それに対してミラオルはため息を吐いて呆れていた。

「リャオ……貴方……水着になれる程度ではしやぎ過ぎなのよ。一応傭兵なのだから、もっと冷静にならないとダメよ」

「ミラオル、俺はお前が水着選びで何時間も浪費した挙句、全部買ってしかも前日楽しみすぎて全く寝れなかったことを知っているぞ」

グランはボソリと語る。呆れた表情のまま器用に顔を赤くするミラオル。折角かっこうつけたというのに、グランのおかげで全く格好がつかなかったなので、すごく恥ずかしい思いをしていた。

「……とりあえず、今のところは失敗したことはないってことか」

「まあそうなりますね」

「失敗かあ……」

ふと、グランは銃工房三姉妹のことを思い出していた。3人とも銃が武器だが、どこかで失敗したことがあるのだろうかと考えたのだ。

「……まあ俺はよく失敗するけどね」

「え、そうなの？」

「意外です……」

「いやあ……頭ぶち抜こうとして首ぶち抜いたり胸ぶち抜いたりしちゃってさあ」

「おっとそれ以上はいけない」

この番組は子供も見ているのだ、騎空士あるあるのグロい話はまた別の大人な番組でいえば良いだろう。今は別にやらなくてもいいのだ。

「……というわけで、今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょうさようなら」

「……ほっ」

自分が今回標的にされてなかったのも、少しだけ安心するミラオル。しかし、グランはそんな様子のミラオルを逃すことは無かった。

「今回はミラオル！ 恥ずかしい思いを同じように合わせてやるからな!!」

「そんな……!」

そうして番組が終わる。ミラオルは次回までに自分がどうやって恥ずかしがられる前に、グランを辱めるかの方法を考えて先攻を取れるように準備を進めておくのであった。

尚、グランは例え辱められるようなことを言われても大体『もつと来い!』と返事を返すので、全く意味がないと分かるのはまた別の話なのであった。

「ほんとにやるんですか!?!」

「大丈夫大丈夫! 俺のベルトじゃなくて頭のリングゴ撃ち抜いてくれればいいから! それに、使う矢は子供が遊ぶ時に使う壁にひつつくあれだし!!」

「撃ち抜けないんですけど!?!」

「当たればよし!」

「わ、分かりました……そこだ!!」

「はうっ!?!」

後日、グランの頭のリングゴを当てればいいとだけしてザーリリヤオーは、玩具のボウガンに着いている壁にひつつく矢で、グランの頭のリングゴを撃ち抜こうとした。

しかし、いつもの矢と全く別の玩具の矢なのでイマイチ勝手がわからず、放たれた矢はグランの股関節のちよつとした辺りのアソコにぶち当たっていた。

たとえ玩具でも、当たったら痛いものくらいは存在している。グランは、偶然にもそれを証明してしまうのであった。

雹矢の遊撃者、信頼してもらえる？

「今回のゲストはミラオルさんです」

「……よ、よろしくお願いするわ」

「おやおやミラオルさんや、緊張しておられるのかな？」

ニヤニヤと笑みを浮かべるグラン。明らかに理解している顔だが、ミラオルはそれに気づかないほどには赤面して緊張していた。前回のザーリリヤオーの時のように、自分もまた辱められてしまうと確信しているからだ。

「う、うるさいわね」

「そんな時ははい、これを飲んで落ち着くといいよ」

「……何これ？ 栄養ドリンク？ なんか嫌な予感しかないのだけ  
れど」

グランが渡した栄養ドリンク。ラベルにはやたらとリアルなゴリラの絵が書かれており、ミラオルはどうもそのドリンクに危機感を抱いていた。

「シエロカルテが改めて作った栄養ドリンクだ。名付けて『ゴリラ1  
ターン T T A』だ」  
トライトリプルアタック

「な、何よその名前……というかコレ前の栄養ドリンクの改良……いえ改悪じゃないの？」

「大丈夫大丈夫、シエロカルテが言うにはさすがに前みたいなデメリットはそうそう発生しないってさ」

「ほんとかしら……」

以前、とある事情によりシエロカルテの栄養ドリンクを飲んだことがあるミラオル……もとい『おこたみ』の面々。しかし、飲んだ後ゴリラのような行動をとる者がいたり、ウホウホとしか喋れなくなつたものもいたり、ミラオルは全員がゴリラに見えていたり散々な結果になっていた。

「ただちよつとあるとすれば……」

「ん……？」

「飲んだ後、毛がすごく伸びやすくなるんだそうだ」

「……それって、髪の毛……よね？」

「いや、毛の生える場所全部から凄く伸びやすくなる」

「人間の尊厳ガン無視ね!？」

「大丈夫大丈夫、全身の毛がメリツサベルの髪の毛クラスになるだけだから」

それは恐らく生命に対する冒瀆だろう。ミラオルはそう思わざるを得なかった。そして、それを平然と飲ませようとするグランにミラオルはさすがにキレざるを得なかった。

「あのねえ!? 流石にそんな薬飲ませようとするのはどうなの!？」

「まあまあ、さすがに冗談だ」

「冗談……って、どこがよ」

「そんないきなり毛が生える薬をシエロカルテが作るわけないだろう?」

「……そ、そうよね! 流石に作るわけが……」

「作ったのは毛が生えた気分になる薬ってだけだ、俺がよく知ってるしな」

「どうしてそんなもの作ったの!? というか……よく知ってるってことは……」

「ああ……古戦場で疲れたから、本来なら希釈しなといけないところを、原液で1気に5本くらい」

「それだけの量を希釈せずに飲んだら、そんな効果も出ちゃうわよ……」

少し前に、グランが謎の発狂をしていたのはそれが理由だろうか、ミラオルはふと思っていた。だが、発狂しても延々と回り続けなといけないのが、古戦場なのだ。

「……さて、古戦場の話はともかくとして……お便りのコーナー行ってみよう」

「……」

これ以上、古戦場の闇を広げたくないのかグランは話を変えようとしていた。そんなグランを、ミラオルは哀れみの目で見ていた。

「1通目『どうして素直になれないんですか』』

「余計なお世話よ!？」

「分かってたけど、ミラオルってツンデレだよな」

「分かっているのだったら一々言わないでちょうだい!」

素直になれず、ついツンデレのような反応をしている時が多いミラオル。結構な頻度で団内のメンバーにバレているので、最早そのツンデレはツンデレの扱いにならなくなっている。

「ミラは好意を持っている相手には素直になれないんですよ」

「リャオ!? あなた一体どこから現れているのよ!？」

突如として、グランの足元から現れるザーリリャオー。現れた場所が現れた場所なせいとか、ミラオルは顔を真っ赤にして震えていた。一体何を想像したのか、グランは分からないふりをしながらニヤニヤと微笑んでいた。

実際は、ただ視界の死角になっていただけなのだが。

「そ、それに別に好意なんて……」

「ははっ」

「待つてリャオ、今の笑いだけはすごく腹が立ったわ」

まるで前回の鬱憤を晴らすかのように、ザーリリャオーはミラオルに対して挑発的な笑みを浮かべていた。『照れているお前なんて怖くないぞ』とでも言いたげに、その笑みは余裕と自信に満ち溢れていた。

「とりあえず2通目行こうか」

「ちよ、そんな早くしなくても……」

『偶にどうしようもなくアホになりますよね』

「これ書いたのリャオよね?」

「そんなことするわけじゃないじゃないですか、ハロウインの時に団長殿に去年抱き上げられて驚かされたから、今年は逆に抱っこ要求して驚かせようとして、結局抱き上げられて恥ずかしい目にあってしまったミラオルの事をアホだなんて思うわけじゃないじゃないですか」

「確信犯じゃない!!」

さらに顔を真っ赤にして、ミラオルは顔を突っ伏していた。その間もザーリリャオーの表情は煽るかのようになにやけ顔であった。シエテにも負けないほどの笑顔からは、圧倒的な余裕が感じられる。



「いやあ、あそこまで綺麗な墓穴の掘り方というか……ピンポイントで落とし穴にダイビングしていくかのようなその姿には惚れ惚れしたよ」

「う、うるさいわね!!」

さらにグランからの追撃。最早若干涙目になってしまっているが、そんなミラオルが可愛いのでグランもザーリリヤオーも、つついじめてしまうようであった。

「う、うう……そうよ！ 私は依頼の時以外まともに頭を働かせられないポンコツですう!!」

「ごめんごめん、流石に馬鹿にしすぎた」

「もういいわよ……どうせ私は弄った相手から弄られ返される悲しい生物なのよ……」

「メンタルが湯葉クラスだ……」

怒ったり泣いたり忙しいミラオルだが、それ以上にこの度重なる弄りにより、ミラオルが完全にしよげ返っていた。しかし、ハロウインの時のことは実際自分の墓穴をほった行為が原因なので簡単に反論できない分、自虐的なことを言い出してしまっていたのだ。

「どうせ私は未来永劫結婚できないゴリラになっちゃうのよ……」

「さすがにそこまでは言っていないですよミラ」

ザーリリヤオーの冷静な突っ込みが入るが、それすらもまともに聞けないくらい今の彼女は完全に拗ねてるかつ、諦めてしまっていた。

「何なのよ……なんで私依頼の時以外、ここまで頭が劣化しちゃうのよ……遺伝子なの……？ 遺伝子なのかしら……？」

「まあまあ、ミラオル」

グランはミラオルの肩に手を置いて慰める。ミラオルは、グランに希望を継ぐような目線で無言の懇願を行う……そして、グランから発せられた一言。

「そんなミラオルも俺は可愛いと思うよ」

「フオローになってない……!!」

下唇を噛むミラオル。最早、彼女のポンコツっぷりは伝説級のそれである。だが、それを知られた以上彼女はグランサイファーでは確実

に『クールな傭兵』から『団長大好きなツンデレ』へと変貌していることだろう。

「所で、そろそろ3通目に行きませんか？」

「いいだろう、3通目。『ミラって私服持ってます？』」

「ねえこれはリヤオよね？」

「まあ、これに関しては否定しませんよ？」

「あー……確かにミラオルが私服着てるところって見た事ないな。ずっとその傭兵服だし、違いがあるとしたらフード付けているかどうかくらいだし……」

グランは、普段のミラオルの事を思い出していた。確かにあまり、私服らしい私服を着ているところを見た事がなかったのだ。

「……持ってないわよ？ 持ってもすぐ着なくなるだろうし」

「可愛い服を着てたら、団長殿からナデナデされますよ？」

「えっ」

「後で服を買いに行くわよりヤオ」

突然何故か自分がなでなですることになったグラン。別にすることが嫌ではないが、割と長い間籠手をつけていたりするので匂いが籠っていないか心配なのである。

「というかえらく即決だな」

「べ、別に撫でられたい訳じゃないわよ？ ただ傭兵はプライベートと仕事のONとOFFの付け替えくらい出来ないとおかしいってだけよ」

「別にそこはいいんだけどね……着なくなるとか言った後にそれを言うと、凄まじく説得力が欠けるといいうか」

「世の中必要なのは愛と金よ、説得力なんてあとから着いてくるわ」

「やだ……ミラオル姉さんイケメン……」

「女性にイケメンって言うのはどうなんですかね」

妙に説得力のある雰囲気を出すザーリリヤオー。グランは特に何も答えなかったが、申し訳無さそうにとある島のケーキバイキングチケットを渡していた。

「じゃあ3人で行きましょうか、ケーキバイキング」

「ケーキか……」

「ん？ ミラオル甘いの手だっけか？」

「いえ、別にそこは問題ないのだけど……」

小声で『体重が……』と言ったのは、グランには聞こえていなかった。ザーリリヤオーには聞こえていたが、聞かないふりでもしないとグランと出かけるタイミングなんてものは、滅多に来ないのだ。

「おっと、ケーキバイキングも大事だけど……それでは本日はここまですととなります。皆さんご視聴ありがとうございました、また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「では3人でケーキバイキング行きましょう！」

「その島に着くまでお預けだけだな」

「いい計器を使った景気のいいケーキ屋さん……」

ケーキバイキングの店を見ながら、グランはそんなことをボソリとつぶやく。聞こえていようが聞こえていまいが関係なく、アザゼルすら失笑しそうなギャグをミラオルとザーリリヤオーは無視していた。「とりあえずありったけ食べましょうか」

「そうですね」

「おいおい、そんなに食べて動けなくなっても知らないぞ？」

「その時は抱っこでもして持って帰ってちょうだい」

「む、まさかの返し」

ミラオルにも余裕が出てきたのか、自分が本当に抱き上げられる事を冗談めいて呟いていた。

「でも実際、それだけ食べたなら太っちゃいそうですね」

「その時は動いて減らせばいいのよ」

「グランサイファー内で動ける環境は早々……」

「……」

グランは『ならベッドの上で運動一緒にしようZe☆』なんてことを口走りかけていたが、さすがにアウトだと直感で悟っていた。逆に言えば、直感が働かない限りこんなセクハラを普通にしてくるのだが。今回は普通にアウトである。

「……とりあえず食べに行こう」

「そうですね」

「……行くわよ!!」

……ケーキバイキングに乗り込んだ3人、その後行われた甘味の祭典は……軽く3時間ほど続いてからようやく終わりを迎えるのであった。

## おこたみ怠み

「いやあ、無いわ」

グランは顔を抑えていた。というのも、とある時にマキラが作った『おこた』というものがある。簡単に言えば、暖かい空気を出す機械に分厚い布団をかけたものである。そこに体を入れると、全身を襲う温かさにより、体を出すことが不可能になってしまうという恐ろしくも怠惰で甘美な魅力があるものである。

「はふえー……」

「ぴよ……」

「ぬふえ……」

「はふう……」

——今そのおこたが進化した物に、おこたの民ことおこたみが懐柔されていた。つまり、全員おこたから出られなくなっていた。

「どうしたんですか……」

「マキラが作ったおこたは、確かに団員の心の癒しになっている。けどな……流石にこうもだらけていたら、なにか対策を考えないといけなくなるぞ」

「駄目よ団長さん……こんな素晴らしいものを退けたら、グランサイファーは凍りつくわ」

ふやけているルナルの一言を聞いて、グランはため息を着く……のだが、『おこたをどかした程度で……』とならないのがグランサイファーオリエイ。どかした瞬間にグランサイファーが凍りつく可能性もあるのだ。

無論、寒さではなく氷の力を扱うとんでもない強さを持った人物達に限るが。

「まあ、うん……イシユミールとかリイが何故かおこたを気に入っているから、退かしたらどうにかなっちゃいそうなのがありそうで怖いが……しばらく撤去します」

「そんな……駄目よ絶対……」

「ミラオル……お前ですらそんなに怠けてしまうこのおこた……撤去

しなければ、それこそこの冬グランサイファーは生き残れなくなってしまう」

グランの言葉で、おこたみの全員の目にやる気が灯る。このままおこたを退かされてしまうと、自分達のこの冬の楽しみが完全になくなってしまうからである。

「ならば……実力行使しかありませんね……」

「ええ……」

「微力ながら、私も手伝うわよ……」

「団長君、覚悟してください……」

「……」

グランは構えることもせず、ただおこたみの4人を見るだけである。彼は、自分が動かなくてもこの場で対処できるということを知っているのだ。

理由は明白だ、これまでの行動から考えれば……簡単にわかることである。

「……ミラ、初手は譲りますよ」

「何言ってるのよりヤオ……初手は失敗しても牽制にも威嚇にもなるから、あなたが適任よ……」

「ご自慢の機械なら、離れてても戦えるんじゃないの……?」

「操作盤は……はるか遠くです……」

「目がやる気なのに声と態度にやる気を感じない……」

そう、誰もおこたから出ようとしないのである。当たり前だ、動けば寒気に触れてしまう。寒い思いなんて誰もしたくないのだから、誰も出ようとしなのは自然の摂理なのである。

「リヤオ……なら私たち二人で行くわよ……手なら出してても問題ないわ」

「確かに……では2人で……」

「む……」

流星に動かなくても打てるボウガン、それを出されると幾らグランとて構えなければダメかもしれないと感じ、少しだけ警戒を促す。しかし、これもまた無意味なことなのである。

「駄目よ……2人とも……」

「なぜ止めるのよ……ルナル……」

「確かに……手はあまり寒さを感じないけど……手が抜けた瞬間、隙間からおこたに、冷たい空気が入り込むわ……」

「……それは、まずいわね……」

「ええ……そんなことは起こってはダメです……」

「……」

まさかの、ちよつとした寒さですら許容できなくなってしまっているおこたみ。よく見れば、隙間から寒さが入らないように手で押えていた。

「というか、今更なんだけど……なんで全身突っ込んでんだよ」

「私達……ハーヴェインですから……」

体を全身突っ込んでいるおこたみ。ハーヴェインなので、確かに大きいものさえ作れば全員の体が入るくらいのもものは作れる。だが、そういったことに労力はあまり使わない方がいいのはわかりきっている話である。

「……少しばかり、俺も手を尽くさないといけないかもしれない」

「無駄ですよ……このおこたは……グランサイファアの床と直結しています……故に、取ることはできません……」

「大丈夫だ、そんな初耳の改造をガン無視できる猛者を今から連れてきてやる」

「ふ……私たちの意思は硬いわよ……」

「すごい熱い3人組を連れてきたよ！」

「すごい熱い3人組……？」

しばらくして、グランは3人の人物を連れてきていた。まるで何かの三銃士の紹介のようになってしまっているが、誰も突っ込む気になっっていなかった。

「多分団内での火力は世界一！ シヴァ」

「汝が望むのならばここを燃やそう」

「小さい太陽みたいな炎の塊を作れる！ ザルハメリナ！」

「あの……流石におこたにこもりきりはダメですよ……？」

「胸部のベルトをようやく閉めたのか！ マギサ！」

「ねえ、後で私の部屋で一緒に」

揃えられた炎の3人組。この面子に……特にシヴァに対しておこたみは非常に焦っていた。正直、あれこれ手を考えるより物理的な熱でおこたから出すとしたら、1番向いている星晶獣とも言えるだろう。そんなのは、まったく嬉しくない使われ方なのだが。

「マギサくん……それ以上口を開くとリーシャくんが来ますよ……」

「あら……最近忙しくて出られないそうよ、彼女」

「そんな……秩序たる彼女がいなかったら……」

「誰がこの船の秩序を守るの……」

おこたみはまるで満身創痍になっているかのようなセリフだが、再三申し上げている通りおこたに入っているだけである。つまり気だるげになっているだけである。

「そうは言うけどね少し考えて欲しいのよ」

「……何がですか？」

「この船にリーシャという邪魔する人物はいない、グランサイファアの団長は行為を簡単に受け入れてくれる……これって、チャンスじゃない？」

「そんな……全員で今の間にリーシャ君を抜け駆けしようということですか……？」

「さて、どうかしらね？」



「あう……」

気だるげになりながらも、少し重い空気になる。グランはそれを微妙に感じとったのか、流れに乗じて自分もつい黙ってしまった。

「さて……私は彼をぺろりと頂いていくわ」

「待て、炎の魔女よ」

「あら、私の事？　一緒に呼ばれた仲だけど、あなた私のことをそういう風に呼ぶの？」

「特異点を頂くと言ったな」

「言ったけど……何、貴方そつちの気が」

「人が人を食らうなどあつてはならぬ事だ」

真顔でそう答えるシヴァ。素で勘違いをしているようで、マジサが食事的な意味でグランを食べると勘違いしているのだ。その反応に、全員が1度ほかんとした表情となっていた。

「……どうしたのだ、皆の者」

「シヴァさん？　意味が違う、別にマジサは人食主義者じゃないから」

「さすがの私もそこまで趣味は悪くないわよ」

「では、先程の言葉はどういう意味だ？」

「後で教えるから、な？」

「ふむ……」

少し納得がいかないようだったが、シヴァは後からグランが教えてくれるということに納得してくれたようだった。因みに、シヴァが話を遮ってしまったがために、マジサの話が有耶無耶になってしまったので、当のマジサは少しふくれっ面になっていた。

「……けれど、分かりました……団長君が本気で私達をおこたからどかしたいというのは」

「ようやく理解してくれたか」

「はい……です、1週間……1週間待つて貰えますか。それまでに、このおこたから出ますので」

「……いいだろう、但し1週間過ぎても出てなかったらダメだからな」

「はい……大丈夫です、ちゃんとこのおこたから出ますので……」

妙に引つかかる言い方をしているマキラだったが、グランはその言

葉を信じて一旦部屋から出て、1週間待つのであった。

「時間だ！ 答えを聞こう！」

1週間後、グランは再びマキラの部屋に来ていた。そして、目撃したのだ。マキラが確かに『あの日入っていたおこた』から脱出している姿を。

「……何それ」

「……食料庫完備、トイレ完備、着替えを入れるクローゼット完備、トドメにグランサイファー廊下ギリギリを通れる幅までに大きくした動く凶体……その名も……」

『移動式おこた要塞『カムクラ』』とマキラは自信満々に言い張っていた。しかもこのおこた、ただのおこたではなく数段積まれているおこたなのだ。

1番上に監視塔マキラ、2番目に敵を排除できるよう配備されたザリリリヤオーとミラオル、そして最下段には漫画を書いているルナールが配備されていた。

「どうですか、団長君……これなら……移動も出来ますし、敵の撃退も可能です」

「なるほどなるほど……」

「認めてくれましたか……」

「ダメ」

その言葉にマキラは珍しくショックを受けていた。いや、正確に言うなら表情に現れている、と言うべきか。感情をあまり表に出さない

マキラだが、この時ばかりはショックを前面に押し出していた。

「何故……」

「明日までに理由を考えて反省文書くこと……これは壊さないまま置いておくけど、反省はするように」

「そんな……」

「というわけで……全員退場!!」

あつという間におこたから引つ張りだされたおこたみ。全員が1度身を寄せあつて、まるで子犬のような表情をしながらグランを涙目で見ていた。

「そんな顔にしても駄目です」

「そんな……」

「ぬふー！　ここは暖かいであります！」

「……はい？」

突如として聞こえてきたシャルロッテの声。グランが顔をおこたの方に向けてると、何故かルナールがいた場所からシャルロッテが首を出していた。

「ほんとだね、ここは暖かいよ」

「どうしてこの状態のことを暖かいと言うんだろうね」

アルルメイヤ、フィラソピアもまたマキラがいた1段目とザーリリヤオー達がいた2段目から顔を出していた。

「馬鹿な!?　他のハーヴェインもいたというのか!？」

「寒さには弱いんですよみんな……」

「ならば全員引つ張り出してやる!!」

こうして、この日しばらくグランはおこたからハーヴェインを取り出すだけの作業に追われるのであった。尚、三段合計で10人ほどハーヴェインがいた事と、途中から出したハーヴェイン達が家に戻るかのようにおこたに吸い込まれていったことは、また別の話である。

「いやこのおこた魔力強すぎじゃないか!？」

「やはりこの部屋を加熱するか?」

「シヴァストップ！　それ本当にやったらグランサイファーが全焼する!!」

## 年末のクリスマスタイム

「……」

とある場所にて。そこではベッドに横たわって体のあちこちに包帯を巻き付けているグランがいた。

そして、その傍には3人の女性がいた。ドラフのナルメアとヒューマンのマジサ、そして錬金術師であるクラリスの3人である。

「さすがにこうなるとは予想外だったわ」

「ご、ごめんねグランちゃん……」

「まさか……私もこうなるとは思ってたわ……」

「うぐう……女として負けた気分……」

「俺は人として耐久力に敗北してるがな」

なぜこんな状況になっているのか。それはグランがクラリスに誘われて、彼女の実家に行ったところから話は始まるのであった。

「クラリス、子供は6人ですよ」

「お母様、多すぎだと思います」

「男の子3人、女の子3人が出来ればいいぞ。長男次男三男、長女次女三女、兄と弟、姉と妹……組み合わせが完璧だ」

「お父様、ちよつと何言ってるかわかんないです」

あまり表情に出ていないが、どうやら娘が男を連れてきて嬉しいのかあまりにも家族の会話としてははっちゃけすぎている内容に、グラ

ンですら困惑しきっていた。

「あ、あの……」

「大丈夫、『娘はやらん』なんて言うことは無いですよ。あなたには恩があるし、なによりも私は既に認めていますからね」

「あ、はいありがとうございます」

「ちよつ!? 何領いてるの!?!」

つい褒められたせいかわ、グランは返事をしてしまう。クラリスは顔を真っ赤にしているが、既にクラリスの両親はクラリスとグランは結婚するものだとはかり思っている。

「ふふ、とりあえず私達はお赤飯を炊いてこよう」

「孫の顔が見られるのも早そうですね」

「ちよつ!? 2人とも待って、待ってえ!!」

クラリスは少し涙目になりながら、両親を追いかけていつて部屋から出ていく。1人取り残されたグランは、ふとこの家の探索ついでにトイレを使わせてもらおうと部屋から出ていく。

別に、この家に来るのはなんだかんだ初めてでは無いのでそのまま向かっていく。だが、その最中。

「あら……」

「ん、あれ? マギサ? なんでこんなところにいるの?」

グランサイファーないであるならばともかく、何故かクラリスの家に入っているマギサ。錬金術師でもないが、なにか錬金術関連で呼ばれたのだろうか、グランはその場で納得をする。

「今いるのはマギサだけ?」

「いいえ、とりあえず2人以上の行動をした方がいいと思ったから……ナルメアを連れてきているわ」

「グランちゃあああああん!!」

「おっ——」

グランに勢いよく抱きつくナルメア。その反動でグランはマギサの方に倒れ込んでしまう。だが、そこで安易にT。LOVEらないのがグランである。

「っ……!?!」

ドラフ女性の弾力性により、弾け飛ぶようにグランはマジサに突っ込む。しかし、そのドラフ女性と互角の戦いができるマジサもまた、同じ弾力性を持っているのだ。

つまりどうなるのか？ 答えは簡単だ、再度弾かれる。

「ぐおおおおお!!」

しかし、ドラフ女性は身長が低い。ナルメアが抱きついた時に起こった反動はグランを少し斜め上にはじき飛ばしていた。だが、身長はヒューマンのマジサの脅威的な驚異の胸囲により上半身だけが下向きに弾かれていた。

「あつ……」

そして、グランの体は結果的に勢いよく逆の『く』の字に折り曲げられた。それだけでは無い。上半身はそのまま勢いよく床に叩きつけられ、勢いで下半身は上へと向かう。

そして、漫画かと思うほどに勢いよく着いた反動は床から天井へとグランをはじき飛ばしていた。

「いつ!? たつ!! いつ!!」

そして、まるでゴムボールのように天井と床を弾き飛びながら、グランの体は何度が往復している間に止まるのであった。

「おかしい……なんであんなに勢いよく弾け飛んだんだ……幾ら弾力性があったても、揉んだら手が吹き飛んでしまう……」

「魔法をかけたからよ、勢いよくぶつかつたものを勢いそのままに弾く魔法」

「……俺に？」

「私とナルメアに」

「……」

なんとなくだったが、グランはなぜあそこまで器用に吹き飛んで言っていたのかは理解出来ていた。要するに、ドラフ女性とドラフ女性並の物のポテンシャルが凄かっただけでは無いという事だけだが。

「素晴らしかった……」

「え、グラン？ あれだけの事になってたのに、まさか喜んでるの？」

「全治多分1ヶ月くらいだけですけどすごく喜んでる」

「くっ……ウチのがもうちよつと大きかったら……」

「大丈夫よ、クラリスちゃんは今もつといい所があるんだもの」

ナルメアのフォローは、ナルメアが今回の事件の当人でなければちゃんとしたフォローになっていたのだろうが、グランはふと思っただ。『いやあ、流石にそのフォローはフォローにならないよ』と。

言ったら落ち込む可能性があるので言わないが。

「というかマジサは予知夢でこうなること分かったんじゃないの!？」

「あら、私の予知夢も万能じゃないのよ」

クラリスからのツツコミがあるが、マジサはこれを華麗に避ける。予知なのに100%とでないというのはよく分からない話だが、当たらない時もあると言われたらクラリスは引かざるを得ないのだ。

「だからといって、そんな的中率低かったら予知夢じゃないけどな」

「基本100%よ、団長さんが関わると1%未満になるけど」

「極端すぎる!!」

最早それは予知と言えるのだろうか、という話だが……グラン以外に関しては基本的に当たるので、全く間違っていないのだ。つまり、マジサがある意味では正論となっている。

「やつぱり……胸が大きいと器も大きくなるから、何言っても許されちゃうの……?」

「そんなことは無いぞクラリス」

「グラン……」

グランから声をかけられて、フォローの1つでも入れてくれるのか

と期待するクラリス。そんなクラリスにグランがかけた言葉は、簡単なものだった。

「アルルメイヤが言っても多分何言っても許されちゃう雰囲気はある、胸は関係ないさ」

「大人の余裕があつ!!」

胸の大きさと言うよりは、単純なお姉様的な余裕が見せるものであるということを経クリスは思い知った。そして、自分ではその境地は到底届かないところにあるのだと言うことも思い知った。

「う、うう……：グランがお姉様好きなのかロリコンなのか分からなくなってきた……」

「クラリス、俺がどんな性癖をしているか教えてあげようか？」

「ほんと!? ウチに真似できる!?!」

「エツト」

「ウロボロス、あの色情魔食べていいぞ」

瞬間、ぱつくりとカリオストロの呼び出したウロボロスに飲み込まれるグラン。その光景を、全員が目の当たりにしたまま、グランはウロボロスの中へと消えていった。

「……し、ししよー!?! 何してんの!?!」

「いや……いきなり全治1ヶ月とか洒落にならんだろ、私情抜きにしても団長がいねえってのはよ」

「食べる方がシャレにならなくない!?! と、とりあえず吐き出させて!!」

「安心しろ、ウロボロスの体は改造してあんだ……：グランの治療用にな」

「治療、用……?」

突如現れたカリオストロ。そしてクラリスは気がつけばカリオストロの格好が、ナースの格好だということに気がついた。しかも、太ももを露出させるミニスカナース仕様である。

「……ししよー、何そのカッコ」

「あ? 物事は形から入らないといけねえだろ? つまり……：今のカリオストロはお医者さんだよ☆」



「うっわ」

「うっわってなんだようっわって」

太ももを見せつけるようなアングルをするカリオストロに、素で引いているクラリス。ぶつちやけ元男現同姓のカリオストロの太ももチラは、クラウディアとグランくらいしか引つ掛からない。

「……まあ、しばらくしたら怪我なんて治ってんだろ」

「ところでさししよー」

「なんだよ」

「こんな便利なウロボロス改造案があつたのに、どうして今の今まで使わなかったの?」

「……」

クラリスの言葉を完全に無視するカリオストロ。それは、安易にしてはいけないことである。案の定、知られたくないことがるのだとクラリスは考えて、ニヤニヤと笑みを浮かび始める。

「ししよー、もしかして今まで全然作れてなかったけどようやく作れたとか、そんな話だつたりする?」

「んな事はねえよ、ただこれ使うのはあんまりよろしくねえってただだ」

「そう言っても顔は真っ赤だから説得力ないよ」

「んなつ!」

「嘘だよ」

クラリスのニヤニヤ顔に、プツンとくるカリオストロ。「その笑み」にあたる部分が抜けてる↓その笑みはクラリスに対する逆襲を考えられている時の笑みである。クラリスはそれには気づかない。

「よおーし……お前胸がでかくなりたいんだつたな?」

「……へ? ど、どうしたの急に」

「喜べ、グランサイファー並にでかくしてやるよ……空気力でな」

「そ、そんなに大きくなりたくない! なりたくないから!!」

「安心しろ、空気が抜けたら元通りだ……皮膚と筋肉が伸びきって悲惨なことになってるだろうけどな」

「代償が大きすぎる!!」

半泣きになりながら、カリオストロに迫られるクラリス。怒らせたらまずいと分かっているても、ついついいじって怒らせてしまう。それがこの錬金術士2人の日常である。

「よし、その代償が嫌なら……今からみっちりお勉強タイムだ。俺に風船みたいに胸膨らませられないように、頑張んな」

「そ、そんなあ!? あ、待って引っ張らないで!! あ、あ、あー!!!」

カリオストロに奥まで連れていかれるクラリス。その光景を一同は呆然と眺めていて……ふと、ナルメアが気づく。

「カリオストロちゃんウロボロス消えちゃったけど……グランちゃんんは?」

「……か、返してもらいにいきましようか」

その後、グランはどうか怪我が完治してから取り出してもらった。妙に変な匂いを体から発生させていたが、特に気にされることも無く適度な距離を取った生活をされており、何とか支障がなくなるほどに完璧になっていた。

クリスマス、グランが怪我をしてウロボロスにそれなりに長い間入っていたり、密かにクラリスの家に誘われていた事でちよつと修羅場的な問題が起こったりしたが……グランサイファー内で不和が起こることも無く、そのままグランサイファー毎年恒例年末の大掃除などが開催されるのであった。

次は、年末年始……年越しである。

## 年末年始の1幕

「ハハッ！ ぼくビツキイ！ みんなで楽しくしようよ！」  
「ふむ……」

「……えつと？ そんなにジロジロ見られると、流石の僕もちよつと困るって言うか……何かしたんじゃないかと心配になって、不安になるというか……いや、あの……ほんとにごめんなさい……」

グランは新しく仲間になったビツキイ……もといビカラを眺めながら、ただ頷くだけだった。白い服、白い髪、そして丈があつていないのかわぎとなのか、露出した腹に少し短めのスカート。そして、つけ耳であるネズミの耳……そう、ビカラは十二神将の中の一人でありヒューマンである。

「ネズ耳外そうか」

「えっ……いやそれはちよつと……ネズ耳なくなると私何も出来なくなるし……スライムみたいに溶けるし……ああでも、スライムの方が役に立つから……私スライム以下かも……」

冒頭の一言、あれとは打って変わって凄まじいネガティブオーラを発するビカラ。これが彼女の素である。ネズ耳をつけている時だけ、彼女がイメージする『陽キャ』のビカラになれるのだ。それでも、ネズ耳が無くなるとダメになってしまうのだが。

「ネズ耳外したままその格好な……つて言っても髪色が合わないし、服の色はまた変えよう」

「いやいやいやいやいやいやいやいや……私なんかの服装なんて誰も気にしませんよ……『陽キャのビツキイ』ならともかくとしても、私は……ビカラは……ダメな子でしかないの……」

そして、ビカラはどういう訳かネズ耳をつけている時は白い髪……つけていない時……正確には十二神将であるビツキイとなっている時以外は黒髪の地味めな女の子となる。

髪の色が変わる理屈は、よく分かっている。別に、ネズ耳にセツトでカツラがついているとか……そういうわけではない。

「私みたいなダメで地味でドジでノロマで……そんなのがコルワさん

みたいな陽キャの塊みたいな人が作る服なんて……着たら服がダメになります……服が良くても素材がダメだったらダメなんです……」

「……ビカラ!!」

「ビイツ!」

「一言言うぞ! お前は可愛い!」

「え……いやいやそんなことは……」

「地味な格好と雰囲気になってるだけだ! ビカラは可愛いし、色気もある! ビッキイもそりや確かに魅力的だ! だがそれ以上にお前の方が魅力的だ!!」

「あ、あうあうあ……!?!」

顔を真っ赤にして困惑するビカラ。彼女の心臓は今現在バクバクと鳴り響いており、ビカラ自身ここまで胸を高鳴らせた記憶はなかった。

「黒髪! 目の色! やわらかそうな肌! たしかに地味目かもしれないが整った服のコーデ! 自分よりも他人を目立たせようとするその姿勢! 俺には全てが魅力的だ!」

「え、いや、あの……?」

「それに陽キャになってるとはいえ、ビッキイも君の1部だ! つまり君が望んでいることはビッキイも望んでいることであり、逆にビッキイが望んでいることは君が望んでいることなんだ!」

「べ、別に二重人格とかじゃないから……普通、そうだと思う、けど……」

「つまり、だ!! 君も心のどこかであれほど目立ちたいという欲があるんだろう! へそと横腹を目立たせて注目されたいという欲があるんだろう!! 腰を振ってスカートを翻して見えないギリギリのところを責めたい欲があるんだろう!! そんな腰振りダンスはしてたら男たちが目の色変えげつ」

目が完全にイかかっている人物のそれになっているグラン。そして、そんな彼は後ろから現れたリーシャからの一撃で昏倒してしまっていた。

「……」

「ひえっ……」

完全にネガティブモードへと移行しているビカラは、恐怖を覚えていた。当たり前である、先程までマシンガントークを繰り返していた男が、たった一撃で昏倒させられているのだから。

「大丈夫ですか？ ビカラさん」

「は、はい……」

『少なくとも目の前に新たな驚異がある』ということは、ビカラは言えなかった。言ったら、殺されてしまうような気がしてならなかったからだ。

「ど、どうせ私なんて誰も相手にしませんし……だから殺さないで欲しいとありがたいなって……」

「おや、先程団長さんも仰ったいましたが……あなたはすごく人を魅了することが出来る人材だと思いますよ？」

「ほ、ほんとですか？」

「はい、その理性とか何やらが崩壊するほどに影響力が大きすぎるのが問題ですが」

ビカラが仲間に入ってから数日経った時、ある日グランサイファーに侵入者が入った。しかし、その時にいたのはネガティブモード……つまりネズ耳をつけていない素のビカラだけだった。

幸か不幸か、ビカラはその時はまだ団員たちの顔をきちんと覚えきれていなかったたので、彼をラカムだと勘違いした。そこまではまだ良かったのだ。

しかし、そこからビカラと話している内に何故か侵入者は自分のことをラカムだと思い込み始めていた。そう、自分の事を操舵士のラカムだと勘違いしたのだ。

その後無事に侵入者は捕まったものの、ビカラには人を惑わす何かがあるのだろうかと思ひ始めていた。そう、自分の事を操舵士のラカムだと思ひ始めていたのだ。

「まさか、侵入した男が自分のことをラカムさんだと思ひ程になるのは……誰も予想出来ませんでした」

「す、すいません……私がちやんと顔を覚えてたら……」

「いえいえ、これから覚えていけばいいんですよ」

ネガティブモードの時は、常に下を向いて俯いているというものもあつてか、ビカラはあまり人の顔を覚えていない。少なくともいつもしているような格好を、侵入者がしていたとは到底思えないが……ビカラはその辺の記憶も曖昧となっているようである。

「そう言えば……ドーマウス、でしたっけ?」

「ど、ドーちゃんがどうかしたんですか……?」

「ご飯って……食べるんですか?」

「……えっと……どうなんだろ……昔の子の神将の人が作った式神みたいなものだから、あまり考えたことないけど……」

ドーマウス、鼠の十二神将を選ぶ式神である。元はトラバサミのだが、過去の十二神将がそれを式神としており、ドーマウスに選ばれた者が鼠神宮の神将として1年間お勤めを果たす……という決まりがある。

つまり、過去の十二神将達と違い……後天的に選ばれるシステムとなっているのだ。

「……食べてるところを見た事は?」

「ない、です……多分式神みたいなものだから……ご飯はいらないと……」

「成程……ご飯は食べないのですね」

「食べたとしても……どこに消えてるんだという話なんですけど……」

ドーマウスはトラバサミに鎖を取り付けただけの見た目なので、はつきり言つて何かを食べていたとしても、吸収される先が口の部分を形成するトラバサミか鎖の部分しか存在していない。

「成程……ひとまず、ドーマウスはきちんとお世話をお願いしますね」

「た、確かにドーちゃんはちよつとどころかかなり見た目がおっかなくて動く時にガシヤンガシヤンなってしかも喋らないし目も鼻もなくて牙と口だけしかないししかも金属だから多少の灯りがあつたら反射で鈍い光を発するし……あれ?」

『よく考えたらドーマウスって怖い要素てんこ盛りでは?』とビカラは考えに至つた。よく考えなくても、あの見た目のものが夜徘徊して

いたら、まず恐怖で子供は泣いてしまう可能性が高いのだが。

因みに、ドーマウスの紹介をする度にポケットの中にいるネズミのことだといつも勘違いされている。

「ところで、そちらのネズミにはなにかお名前はあるのですか？」

「い、いえ……気づいたら私のそばにいたので……可愛いので、そのままにして私個人で飼ってます……一緒にチーズを部屋の隅で齧る仲間です……」

「そうですか、では今名前をつけましょう」

「えっ」

『『ツーマウス』でいきましょう、2番目のドーマウスという意味合いを込めました』

『ネーミングセンスねえなこいつ』とは口が裂けても言えないし、仮に自分をつけることになっても恐らく手酷い批判をされるため、ネガティブモード状態のビカラの精神状態は彼女のその名前に対して愛想笑いをうかべることしか出来なかった。

「は、はは……」

「やはりいいと思いますか」

「ち、ちなみに……リーシャさんは自分でなにかに名前をつけることって……ありますか……？」

「そうですね……この間団長さんが拾って使えるようにした剣があるのですが、それに名前をつけさせて頂きました」

「な、名前は……？」

「1度使えなくなっていたけど、研ぎ直して使えるようにした……という所から文字って『グラン君ソード・リカバリー』です」

予想通りのような名前に、ビカラは卒倒しそうになっていた。しかし、ここで気絶するのはおかしいし下手なこととも言えないしでビカラの精神にはとんでもない負荷が今現在掛けられていた。

「ち、ちなみに……どんな反応されましたか……？」

「何故か見たこともないくらい渋い顔だけでした。返事は特に何も聞かされてないです」

『そりやそうだ』とビカラは内心呟いていた。誰が聞いても内心ネー

ミングセンスがないだろう、と思えるその名前に否定以外の意見があるとすれば、それはもう黙ってスルーすることだけしかないだろうという話である。

「……は、はは……」

「……ともかく、これからよろしくお願いしますね」

「は、はいお願いします……」

「ところでネズ耳外すと性格が変わると聞いてましたけど……今は外してないんですね」

「……はっ……!?!」

ここでふと思いついた。よく考えたら、耳は今つけたままでありネガティブモードキャンペーンをする必要性はないということ。しかし、最早ここまでできてしまった以上いきなり戻すのは失礼だろうということ bicara は考え始めていた。

二重人格ならともかく、bicara のいう『ビツキイ』は単なる演技に近いものである。よって、こうなってしまうことも本当にしばしばあったりする……とのことである。

「いつもはどんな感じなんですか?」

「え、えっと……」

『ハハッ！ 僕ビツキイ！ ゆくとびあの住人さ！ さあ、君も一緒に鼠神宮で僕と握手！』

突然の無茶ぶり、リーシャから振られた bicara の頭の中は、最後に



これを唱えたまま真っ白になってしまったのだという。ルナールの  
ような人物には、過度な負担をかけないように気をつけようという認  
識が、グランサイファーに広がるのであった。

ウィッチクラフト、いいかしら？

「本日のゲストはマギサさんです」

「ふふ、マギサよ」

「早速なんだけどいい？」

「何かしら？」

「クリスマスの衣装どうしてベルトを締めたの」

グランは開幕、はつきりといえは酷いことを聞いていた。しかし、マギサは一切表情を崩さないまま……その答えをはつきりとグランに返す。

「そっちの方が団長さんも興奮すると思って」

「よく分かっているじゃないか」

「私は団長さんのためならなんだってするわよ？」

「……」

マギサの言葉に黙り込むグラン。てつきり大きな何かしらのリアクションを返してくれると思っていたので、マギサは不思議に思い首を傾げていた。

しかし、グランの表情をよく見ると浮かんでいたのは複雑そうな表情だった。

「うーん……」

「あら……もしかして私はあまりお気に召さないのかしら……？」

「いや、そうじゃなくて……ただ……」

「ただ？」

「大体の女性団員からそれ言われてるせいで、あまりドキドキしなくなってきた自分の感覚が少し怖く感じてきてる」

「感覚麻痺って怖いわねえ」

大体の女性団員から迫られている事実には、マギサは少し嫉妬しながらも、表情は崩さないままグランとの対話を続けていく。多少体を寄せたりしてアピールするくらいである。

「さて、早速だけど……お便り紹介といきましょう。1通目『アルルメイヤさんと仲が悪いって本当ですか？』」

「……なんでそんな噂が流れてるのかしら……？　むしろ私とアルルは仲がいい方よ？」

「あれじゃない？　クリスマス辺りから2人とも俺を挟んで腕の引つ張り合いしてること多いし……物理的な意味で」

クリスマスの際のことを、グランはふと思い出していた。アルルメイヤとマギサの2人で、グランの取り合いがよく行われていたのだ。マギサは自分の体をグランに押し付けての誘惑、アルルメイヤは自分の体全体をグランの腕に押し付けて誘惑と、大人の魅力全開でグランを誘惑していた。

結果は芳しくなかったのだが、その光景がどうも仲が悪いと認識されてきたようである。

「あの時ね……一応、言っておくけれど……私とアルルはとても仲がいいわ。何せ、未来予知ができる者同士……馬があっただなもの」  
「確かに、よくアルルに相談とかしてるもんね」

「そうよ、私のもアルルのも……見たら基本的に外れることがないもの。団長さんが絡んだ時に限っては、例外が起こることもあるのだけど」

「ああ、なんかアルルとマギサの2人で見てる予知の内容が微妙に違っていったってのはそれが理由？」

「恐らくは……だけれどね。結局予知って言うのは『その時点のまま進んだ場合どうなるか』の道中を見せられてるだけだもの」

クリスマスの日、マギサとアルルメイヤはとある予知を見ていた。『グランが空の底へ落下する』という予知である。しかし違っているところがあり、マギサはグランがアルルメイヤと一緒にいて落下する予知夢を、アルルメイヤは逆にマギサがグランと一緒にいる時に起きている予知を見ていたのだ。

これが要するに『グランが関わった場合の例外』という事だろう。「にしても不思議だよなあ、なんで俺が関わると微妙に結果とか過程が変わってくるんだろうな？」

「そりゃあ……」

サンダルフォン達が言う『特異点』それが理由なのは明白なのだが、

グランも分かっているってそう言っているのだろうとマジサは考え直して特に何も言うことは無かった。

実際、それ以上の事はサンダルフォン達にも分からないだろう。とりあえず『特異点だから』としか言いようのないことが多すぎるのだ。「……まあ、いいじゃない？ それだけ自分が不思議な存在だと思えばいいのよ」

「まあそれくらい認識の方が楽でいいか！」  
「そうそう」

マジサは単純に褒めているつもりなのだが、実際のところ傍から見たらグランは特に何も考えていないのでは無いのだろうか、とさえ思えてくるあほ面をさらけだしていた。

「……つと、とりあえず話はここまでにしておいて2通目にいこう。『予知の精度はどれくらいですか？』」

「団長さんが絡まなければ100%よ、それだけは断言できるわ」

「俺が絡むと？」

「0%」

「うーん、何度聴いてもピンキリがすぎる」

「まあ0%は言い過ぎだけど……団長さんが絡むと確率がぐっと落ちるのは本当よ？」

「例えば？」

「そうね……団長さんが『右足から歩き始めるか左足から歩き始めるか』程度の事だったら外さないのだけど、大きいことは変わってくるのよね……クリスマスの時が一番いい例かしら」

アルルメイヤも同じように言っているので、基本的に外さないというものは本当なのだろう。そして、グランが絡むと確率が落ちるというのも本当なのだろう。

「なあに？ 信じてないの？」

「予知は信用してるけど、俺は俺がやりたいことをしているだけだから……自分のせいでも……いやおかげで？ どっちでもいいけど……とりあえず俺が関係すると、途端に予知がズレてしまうって言うのはよく分からないんだよな。実感がわかないというか」

「……まあ、こればっかりは実際に予知をしている私たちじゃないと分からない感覚よ」

未来を知った者が未来を変えようとしても、それが変化しない。または過程こそ変化はするが結果は変わらない。最悪のものではその過程こそがその未来の原因となる……というのが創作物ではよくあるものである。アルルメイヤもマジサも、同じような気持ちを持っているのだとグランは何となくで理解してしまっていた。

「まあでも、マジサはともかくとしてもアルルメイヤはあんまり予知しなくなっただよね。それこそ俺の事ではって話だけど」

「そういえばそうね……まあアルルも私と同じように団長さんが何かしらの危機に合えば、予知はすると思うわ。だって団長さんを失うのは、死ぬことよりも怖いんだもの」

「そこまで行っちゃう？」

「行っちゃうものなのよ」

「へえ……」

「……まあこれ以上はアルルを混ぜて3人でこっそり話し合うのが一番かもしれないわね」

ニコニコと微笑みながら、マジサはそんなことを呟く。この番組を見ている一部の女性団員を除いた女性団員達に対する先制……だと、思う人は少なくなかっただろう。グランはそんなこと微塵も思いつかずに『だなあ』と呑気に返事を返していたが。

「さ、3通目に行っちゃいませう？」

「ゲストのお望みとあらば……3通目『いつも同じ服を来ているように思います、服はどうしてますか？』」

「案外魔法でどうにかなっているわね」

「結論やっぱりそうなっちゃうよね」

「だって私、クリスマスの時に着ていた衣装だって魔法で作ったものだもの。新しい服がクリスマスの時みたいにすぐ出来るのなら、特に縛りもなく服を変えらるというのはすごく簡単に出来ることよ」

クリスマスの際は魔法の力で一瞬で着替えを終えたマジサ。季節限定のイベントで着替える為に魔法を使っていたが、特に季節などの

イベント事でもない縛りのない着替えともなれば、全く同じ服に変えればいいだけなので実質着替えは魔法でどうにかなっているのだ。

「その魔法出来れば教えて欲しいもんだなあ、着替えに時間を割かなくていいってかなり便利そうだし」

「確かに魔法は、便利に使うために存在しているけど……手間がかかることだってあるのよ?」

「例えば?」

「今来ている服はどうなっているの、とかかしら? 私はずっと同じ服だからそこまで気にした事は無かったけれど……」

「もつと正確に教えて欲しい」

「あら、どうして?」

「依頼で日をまたぐ時とか、みんなの服簡単に綺麗にできるじゃん?」

綺麗な表情でそれっぽいことを言うグラン。マギサは少し考えた後に、グランが何を考えているのかなんとなく察して、次のように言葉をなげかける。

「……本音は?」

「魔法で着替えさせたあとで、魔法を無効化とかしたらどうなるのかなと思いました」

要するに魔法で作られた服を着ている時に、魔法の無効化をすることによって『きゃー、お洋服がなくなっちゃったわー』的な展開をグランは期待していたのだ。そして今、それを素直に報告していた。

「あらあら、そんなことを考えていたのね……でも団長さん思春期だからしょうがないわよね」

「そうだよ」

マギサは、確かに気にしていない。むしろそれくらい異性にかっつくくらいでない……とさえ思っていた。そうマギサ『は』気にしていないのだ。

「秩序のものですが、少しお話があります」

「なんだと……? 俺はまだ何もしていない……」

珍しく扉を開けて入ってくるリーシャ。グランは怪訝な顔をするが、自分のセリフで首を絞めていることに気がついてはいるのか、そ

の顔は真っ青になっており尚且つ体は震えていた。

「とりあえずこちらへどうぞ」

「くっ……連行落ちだなんてサイテー……!」

「船から落下していた時と比べたらとてもマシだと思うので、安心してください」

そして、グランはそのまま部屋から連れ出されてリーシャによって連れていかれるのであった。少しでも呆然としていたマギサだったが、グランが居なくなったのでそのまま番組のメに移り始める。

「……今回はここまでよ、団長さんが居なくなってしまうでしょうがないわね。私に関してまだ質問がある人は、私に直接聞きに来てくれれば教えるわよ……色んなことをね。」

それじゃあ、私は今回のゲストだったけれど……団長と会えるこの番組は、また次回に続くわよ」

残りのメはだいたいマギサがやってくれたところで、カメラの電源が切られる。その後マギサは満足気な表情を浮かべながら戻っていくのであった。

「団長さん、あんまり滅多なことは言うもんじゃないですよ」

「……というと、何かあるのかいリーシャさん」

指導室にて、グランはリーシャと向き合いながら話し合っていた。そのリーシャの表情は、真面目そのものであった。

「ハロウィン……クリスマス……その次はどんなイベントが来るか、

もう分かりますよね」

「……まさか」

「そう、バレンタインです……またあのハロウィンやクリスマスのような騒ぎを起こさない為にも……手伝ってもらいますからね」

何が起るかわからない不安と、グランだけ少しの期待を覚えながら今日も夜が更けていく。バレンタインまでの日数のカウントダウンを刻みながら……



天象の風、精霊の御加護に感謝しましょう？

「今回のゲストはペトラさんです」

「よ、よろしくお願ひします！」

ペトラ、彼女は風禱師という風を読むことが出来る才能の持ち主である。船の上で空の天候をいち早く察知し、船の助けとなる……そういった力の持ち主である。

「ペトラは風禱師、空を旅するにおいては重要な天候の察知能力があるんだよね」

「はい、皆さんの助けになる……重要な仕事です」

「その力はラカムも絶賛してるくらいだからね、天候を読むっていうのは、それだけ凄いいことなんだと思うよ」

「え、えへへ……」

グランに褒められて悪い気はしないのか、照れ隠しに微笑んでいるペトラ。事実、風の流れを読むだけで船がどう安全に航行出来るか……いるかないかで比べれば、いた方が船の生存率は格段に跳ね上がる……そのレベルだろう。

「んで、各地の神殿を回ったことで今は精霊の力を使えるようになったと」

「そうなんですけど……」

天象の精霊、その力を身に宿すペトラは天候そのものの操作が可能である。雨をふらせたり逆に晴れさせたり……その力だけでも世界をどうにかできてしまう強大な力である。

ただ、本人はその力で人の助けになることだけしかする気はしないし、その力を褒めちぎられるのはあまり好きではないみたいだが。

「けど？」

「天候を操ると、どうしてもみなさん私を神様扱いしてきて……少しそれが悩みです。私、そんな大層なものじゃないのに……」

「そうだね、神様ってのはろくなのが居ないからね」

思うところがあるのか、グランは神様という存在は好きか嫌いかわかれば親指を立てて下に向けるくらいには、嫌いなので真顔で淡々と神

をdisっていた。

「あ、あの……？ グランさん……？」

「おつとなんでもない、というわけでペトラにもお便りいっぱい来てるので……読んでいきましよう。1通目『天候を操れると聞きますが、夏に雪降らせたり出来ますか？』」

「そういうのは無理ですね……」

「無理なの？」

「夏に雪は気温的に不可能です」

「ということですよ……ってだけじゃあさすがに早すぎるので、逆に夏に降らせられるものって何かある？」

「うーん……初夏なら、ギリギリ雹って所でしようか……？」

「雹……ってあの氷の塊だよ、夏に降らせられるの？」

「ごく稀にだが、夏に雹が降ることがある。降られた地域はもう不幸だったという他ないだろう。降ってきた雹は家屋を貫き、鎧も潰す。空から降ってくる巨大な弾丸のようなものだ。」

「かなり特殊な状況になりますが……はい、一応降ります。ただ……降らせようとは思いませんが……」

「飛んでる時に降られたくないなあ……グランサイファーが穴だらけになりかねないよ」

空を飛んでいる時に振られた場合、ほぼ確実に墜落するだろう。防御手段はいくらかあるかもしれないが、かなり巨大なグランサイファーの都合上全てを守りきるのは難しいだろう。そう『難しい』で済むのだ。

「なりかねない……って……ならない可能性があるって事ですか？」

「だって………星晶獣が乗ってるところだしねえ」

「ああ……」

シヴァ、グリームニル、ゴッドガードブローディア……少なくともこの3人だけでグランサイファーの大半は守れるだろう。雹が相手という条件をつけたとしても、だ。

「それに十天衆もいるし……なんだったらロボミとかシロウとかも……」

「……本当にグランサイファアって、魔境ですよね」

「それに関しては否定しない……」

戦力過多とはこのことだろう。恐らく今のグランサイファアの戦力は、空の均衡を完全に壊しているクラスである。そして均衡を守る星晶獣すらも仲間として迎え入れているのが恐ろしいところである。「さてさて、そんな話はさておき2通目に行きましょう。『天象の精霊ってどんな見た目の人ですか？ イケメンで筋肉質ですか？』ルナルだな」

「まあ……イケメンかどうかはともかくとしても、強い精霊は何かしらそれを見た目で表現しています。アンスさんの英霊をイメージしてもらえばわかりやすいかもしれないです」

「……あれ？ でも俺見た時筋肉ムキムキだったよね、天象精霊」

「まあ、力という原始的かつ生物としてわかりやすい強さの象徴を表すなら……筋肉になるんじゃないですか？ 私はその辺り、まだ調べられてないんですけど……」

「……まあ、ゆっくり調べていけばいいと思うよ……うん」

今のペトラの力は、精霊を吸収したことで得た力である。同時に、得たことによって何故か服装がかなりはだけているものになっている。はつきり言えば、ペトラのおへそやあるように見える谷間までバッチリ見えているし、グランはちやつかり見ている。

「……にしても、その格好から着替えないの？」

「この服が1番落ち着くんです……」

「力が宿ってるからかねえ……？」

「かもしれないですね……未だに少し恥ずかしいですが……」

「もつと力を使いこなせるようになったら、もつと凄いいことになっ『なったりして』なんて言おうものなら、恐らく秩序が飛んでくるだろう。直前で察したグランはそのまま口を動かさずに黙ることを選択した。

秩序が今ので飛んできていたら、終わっていたところである。

「……あの、どうかしましたか？」

しばらく黙って、秩序のセンサーに引つかかっていることを確認

してから、グランは再び口を開く。安全だと確信したのは30秒を超えたあたりである。

「いや？ なんでもないよ、大丈夫大丈夫」

「そうですか？ なら、いいんですけど……」

「さて、では最後の3通目行きましょう。3通目『マジサさんと仲はいいんですか？』」

杖、そして人ではない自分だけの眷属……風禱師と魔女はまた別物だが、それが分からない人は2人は結構似たような立ち位置にいることだろう。

「はい！ 仲良くさせてもらってます！」

「いやあ、仲良くしているなら大丈夫だね。ぶっちやけ絡むことが多いでしょ？」

「そうですね……案外話があったりしますし、たまにお話を聞いたり聞かせてもらったりしてます」

「魔女……とはまた違うけど……まあ共通点がそれなりに多いもんね」

「まだ私は未熟ですから、マジサさんには叶わないんですけどね」

正反対のように見えて共通点はちゃんとある2人。とある一部分の大きさを頭の中でついつい比較しながらも、グランは結局『どちらでも問題ない』と結論づけていた。無論、何がとは言わないが。

「……えっと、どうかしましたか？ またぼーっとしていきますけど……」

「いや、ほんとにペトラは純粹だなあって」

「そ、そうですか？ えへへ、嬉しいです」

「うーん、この反応ほんとに純粹さの塊だ」

自分の頭の中の思考が恥ずかしくなるレベルで、ペトラは純粹である。グランもさすがにペトラでそういうことを考えるのはなるべく控えようと思うのだった、思うだけだった。

「……そう言えば、マジサはこの間ハロウインの格好してたけどペトラってあんまりイタズラするってイメージわかないね」

「マジサさんほど大胆にはいけないです……」

「んー、相手の下から風を巻き上げて一瞬だけふわっとさせるイタズラって言うのは？」

「その前に地面にある砂が巻き上がって悲惨なことになりますよ？」  
「地面にある砂」

ふと考える。外でグランが言ったようなイタズラをすると……確かに砂が多少なりとも巻き上がって悲惨なことになるだろう。主に砂埃が自分の顔にクリーンヒットするくらいだが。

「なるほど……」

「それに、私は力の強弱がまだ上手くいつてないので……他の方に迷惑をかける訳には行きません」

「ふーむ……」

グランから見ても、ペトラはかなり力のコントロールができている方だと思っている。天候を操るといふ素人目に見ても繊細なコントロールが必要そうなものを扱っているのだから。

しかし、あくまでも素人目なので――

「まあ、ペトラが自信持てるように俺も手伝うからな」

「は、はい！　ありがとうございます!!」

「……というわけで、今回はここまでとなります。ご視聴ありがとうございます。ございました、また次回この番組でお会いしましょう。さようなら」

「ところで団長さん」

「はいはい団長さんですよ」

番組のカメラを落としてから、ペトラがふと思い出したかのように

話しかける。グランは特に気にする事はなく、後片付けを軽く行いながら適当に返事をしていた。

「時折私の目線から目を離していたのは何故ですか？」  
「……」

言うべきだろうか、とグランは悩んだ。ぶっちゃけ胸元が凄まじい開き方をしているペトラの服は、グランのような性格であればつい見えてしまうのだ。『ペトラが悪いんじゃない、そんな服装にした精霊が悪いんだ』とグランは内心思っていた。

「マギサさんの話になったら、特に目線が離されていた気がしたんですが……」

「ははは、気の所為じゃないか？」

「そ、そうなんでしょうか？」

「そうそう、きつとそうだよ」

ハツキリと『実は見ていた』なんて言おうものなら、秩序が飛んできて直ぐに秩序されてしまうのは目に見えている。それを防ぐ為ならば、グランは優しい嘘のひとつや2つつくことだって可能である。無論、これが優しい嘘かと言われれば絶対に違うのだが。

「……とりあえず、私は外に出ます」

「ああ、よろしくお願いするよ」

風漣師としての仕事をするために、ペトラは外に出ていく。彼女の足音が遠ざかったことを確認してから、グランはため息を着く。ああも純粋な彼女を相手にするのは、遠回しなセクハラをしても案外バれないといういわゆるボケ殺しをしそうな気がするからだ。

「いやあ、ネタを振って反応が返ってきたらいいけどペトラは純粋に反応しそうだなあ」

「しかし、それとは別に体を見続けることもダメなんですよ団長さん」  
「H A H A H A……もう来たのかリーシャ」

肩に手を置かれるグラン。最早いつも通りの隠密移動に対して、諦めるしか無かった。彼は特に抵抗することも無いまま、リーシャに連れていかれる。

「まったく……チョコを渡してくれる女性たちを失望させてはダメで

すよっ。」

「Hey」

「ふざけたのでカタリナさんにチョコをいっぱい作ってもらおうように  
お願いしますね」

「待って」

そしてバレンティン当日、体色がスライムのような色になったグラ  
ンが発見されたのだとか何とか。

## 魔女っ子シスターズ

「なぜだか分からないけど、今笑った人がいたような気がするわ」  
「気の所為じゃないですか？」

今現在、マギサとペトラはとある荒野へと降り立っていた。理由は、今回受けた依頼の内容に関係している。しかし、2人の他に受けているはずのグランの姿が見えていなかった。2人はグランを待つために少しだけ暇を持て余していた。

「いいじゃない……私も魔女っ子って名乗ったって……」  
「……えっと、マギサさん……？」

理由もわからずしよげているマギサに対して、ただ困惑することしか出来ないペトラ。マギサの身に起きていることが、ペトラには全く理解出来ていなかった。

「……いいわよ、別に……もうすぐ団長さんが戻ってくるんだから」  
「へ？ そうなんですか？」

「このくらいの会話をしていたタイミングで戻ってくる予知夢を見たのよ……ほら、その証拠に……」

マギサが杖を差し向けた方向に、ペトラは視線を向ける。しかしこのタイミングで、マギサはふと気づいた。よく考えたら、彼女の未来予知の能力はグランには十全に発揮されないのだということ。

つまり、この場合だとそもそもグランが来ていないか、方向が違うかの2択である。

「俺がどうかしたのか？」

「あれ？ 団長さん？ 今マギサさんがあっちからって……」

「いや俺真逆の方向から来てるなそれ」

そして、今回マギサの予知は外れてグランはマギサが指し示した方向とは180°違う方向から現れたのである。呆然とするペトラ、少し苦笑するグラン、顔を俯かせたまま銅像のように動かなくなってしまうマギサ。

「……おーい、マギサー？ 大丈夫大丈夫、俺に関しては外れることがあるって自分でも言ってたじゃないか」



「……別にいいのよ……魔女っ子って言われて笑われる年齢なのよ私……」

「寧ろ成人してるのに魔女っ子って可愛がってる方が需要があったりするぞ」

「……ほんとに?」

グランが適当に言った言葉に反応するマジサ。グランからしてみたら、マジサはいつでも可愛いというのが本音なのだが今彼女が求めている言葉はそうでは無いと直感的に悟って、優しい嘘による慰めを始めていく。

「ほんとほんと、ほらギャップ萌えって奴だよ」

「ギャップ萌え……」

「そうそう、だから気にするなっ」

「……いいえ? 別に私、気にしてないから大丈夫よ」

いつものように笑みを浮かべるマジサ。しかし、どうにもそれが強がりなように思えてしまうグランだったのだが、さすがにそれを口に出すような真似はしない。

「ところで、今日はどんな依頼なの?」

「んー? いや、ここの乾いた土地を潤して欲しいってことらしくてな」

1面見渡す限りの荒野。見た感じ土は枯れ果てており、草木も小さなものくらいしか生えていなかった。

「……ここを、ですか?」

「……私、それ力になれるかしら?」

「どちらかと言うと、地面を耕すというか……」

「……なるほど、モーさんね?」

魔人モラクス、マジサが使役している強力な魔人である。その一撃は中々強力であり、グランでさえも大きく手が出せる代物では無い。下手をすれば吹き飛ばされてしまうのがオチである。

「そういう事、ただ乾いてる地面に水をやったところであんまり意味はなさそうだし」

「なるほど……そうになると、私は雨を振らせればいいんですね?」

ペトラは自分の役割をいち早く察して、グランに尋ねる。グランの方も、そういう風に考えていたのですぐさま頷いて肯定する。マギサが魔人モラクスの力で地面を砕き、乾いて固まっている土を粉々にする。その上から、ペトラが雨をふらせて地面全体に潤いを与える。それがグランの考えていたプランである。

「そして、俺は団の有志達によって作られた肥料を全体的に撒く事で地面に草木がきちんと生えるようにするのが役割です」

「……ところで、地面に潤いを与えるのはいいんですが……かわいたこの土地というのはいつからのものなんですか？」

「1ヶ月ほど前から、らしいな。まあ原因は星晶獣だったんで既に倒して原因は取り除いているけど」

「し、仕事が早いですね……」

「星晶獣が相手だし、なるべく早く相手しておいたほうがよかったですな」

忘れてはならないが、星晶獣は並の人間では歯が立たないほどに強力な『星の民の兵器』である。それを簡単に屠ったとか倒したとか言える、グランがおかしいのだ。

「まあでも、今更じゃないかしら……」

「何がですか？」

「グランサイファーに乗ってる団員の中で、星晶獣を一人で相手できる人たちが結構いるわよ」

「……それは、そうなんですけどね……」

何を今更、と言わんばかりにため息を着くマギサ。実際、1人で星晶獣を倒せる人物はグランサイファーにそれなりにいるので、結構否定できない問題だったりするのだが。

「……さて、世間話はここまでとして……早速作業に移るとするか。ペトラは雨を降らせる準備、その間に俺とマギサで地面を耕しながら肥料撒きだ」

「ええ、了解よ」

「わかりました!!」

というわけで、グランとペトラとマギサによる土地の開拓が始まる

のであった。

「……にしても、乾いて硬くなった土を壊すのはやっぱりマジサの方が早いな」

「モーさんの力は強力なもの、けど安心して？ 直ぐに貴方も同じことが出来るようになるわ」

「え、何？ 俺何したらそんな筋骨隆々のムキムキマッチョマンになるの？」

グランは普通に器具を使い、マジサはモラクスを動かしながら地面を破壊していた。かわいた地面を破壊、そして抉ることで下の柔らかい土を掘り起こしているのだ。

「それにしても、星晶獣によって起こされたって話だけど……随分と凄いことが出来るのね？」

「まあ、これくらいならまだ対処できたしマシだったよ。土が乾いたと言っても、地面下の流水まで乾ききったわけじゃないみたいだし……」

「……平然と言うけれど、それでも大惨事なことに変わりはないのよ？」

「世の中にはもっと酷い能力を持つてるやつだっているしな……」

遠い目をしながらグランは呟く。自分たちが確認できる範囲内で、物理的な働きをもたらす星晶獣は強力そうに見えて、対処は比較的簡単に出来る。

しかし、世の中には概念的なところに対象を搾っている星晶獣も存在する。縁を司つたいたり、歴史に力を及ぼしたりとその数は決して少なくもないのがネックだ。

「……まあ結構概念的なところかつ、かなりギリギリのところにも手を伸ばしてくる星晶獣はいるけども……」

「……そうなのね」

もれなく初めて星晶獣達はグラン達と敵対することがあまりにも多かつて。初めてあつて戦いにならなかつた星晶獣は、片手の指で既に足りきつているほどには少なかつたりする。

「……とまあ、星晶獣は別に今じゃなくていいや。とりあえずさつさとこの辺耕し終わってから、ペトラにこの辺を水浸しにしてみらうとしよう」

「そうね、早く終わらせて団長さんと私は一緒にいたいんだもの」

『早く終わらせたい』という意見が1致した2人は、顔を見合わせて頷く。そして、そこから2人は驚異的なスピードで地面を耕し始めていた。

『さつさと終わらせたい』という気持ちだけで、今2人は今まで戦ってきた戦闘向けの星晶獣との戦い以上のパワーとスピードが出始めていた。

「そう言えば……ホワイトデーのお返しはもう考えてあるのかしら？」

「ホワイトデーねえ……考えてある、というか……基本クッキーで渡す人それぞれで味を変える程度のものになりそうだけど」

「それでも凄い人数にならないかしら？」

「それでも返さないと、失礼だろ？」

「……そういう所で、やっぱり人を引き付けてるのよねえ」

「俺の魅力に惹き付けられてもいいんだぜ？」

「そうやって調子に乗るとまた痛い目見るわよ？」

「ふふふ……ごめん」

素直に謝るグラン。そんな馬鹿みたいなことをしながらも、2人は作業を進めていく。とは言っても、ただ地面を割って砕いて耕して柔

らかくしていくだけの作業なのだが。

「では!! 雨を降らせようと思います!!」

「頑張れえ」

「……」

「……マギサさん? どうかしましたか?」

無駄に甲高い声で応援するグラン。少し考えるマギサ。ペトラはそんなマギサが気になって、声をかける。自分がどこかで失敗しているのではないかと、少し不安になったのだ。

「……ああ、いいえ。少し考えたのだけど……こんな乾燥してるところで、雨なんて降るのかしら? 星晶獣の影響で土地はこうなっているけど……既に星晶獣は討伐された後なのに、未だに雨が降ってないのが気になったのよ」

「……」

「……」

顔を見合わせるグランとペトラ。そして、マギサの方を見てから再び顔を見合わせる。

「確かに」

「降る可能性は……低いですね……いつも通りしても、降るかどうか……」

「じゃあこの辺水浸しにすればいいと思うよ、そしたら水分は充分足りるでしょ」

「へ? どうするんですか?」

グランの提案に、首を傾げるペトラ。グランは自信満々と言った表情で自分の胸を親指で数回軽く叩く。すると、彼の体が光初めて……中からルリアが現れる。

「る、ルリアさん!？」

「ふふふ……最近しなすぎで忘れてたけど、ルリアって俺の体の中に入れるんだよね」

「はわわあ、話は既に聞いてます。水浸しにすればいいんですね?」

「その通り、話が早いよ。なんかこう、いい感じに水浸しに出来ない?

　　マナヴィタンとかでさ」

「じゃあ、リヴァイアサンマグナを使いますね」

「え?」

ルリアの言葉に固まるグラン。マナヴィタンを使えば雨を降らせる事が出来る、というのは置いておくとしても……リヴァイアサンマグナを使うのは明らかに過剰なのはわかりきっている事だからだ。

「リヴァイアサンマグナ、潰崩のタイダルフォール」

ルリアは、表情そのままにリヴァイアサンマグナを召喚し、技を発動させる。この技は、グランも何度も受けている技である。簡単に言えば……とんでもない激流で相手を流し尽くす技である。

「あ——」

そう、流し尽くす技である。この技が発動したが最後、ろくな対策もしないままだと……激流に身を任せないといけなくなるのだ。そして、今回グランはろくな対策をしていないので……どこか地平線の彼方へと流されたいったのであった。

「だ、団長さあん!!」

「……間一髪だったけど……ルリアちゃん? あれ、いいの?」

モラクスの力を借りて、空中へと避難したマギサとペトラ。そして、ルリアはその隣にサタンに抱えられて飛んでいた。

「はわわあ」

マギサに質問されたルリアだったが、答えることなくそのままどこかへと消えたグランの体の中へと戻っていく。結局、なぜルリアはここまで無茶苦茶な手を使ったのか。それはマギサですら、後から聞く

ことが出来なかった。

それとなくグランに話を聞いたが……やはり、詳細な理由はわからなかったようだった。ただ1つ、思い当たることがあるとだけ言い……とある日に言った一言が原因かもそれないと予想をしていた。

『ホワイトデーでのお返しとしてククルに抱きついたけど、予想以上に反応が可愛かったのと予想以上に膨らみがあったのが自分としては十分に良かったんだけどどう思う？ グリームニル』

『どうでもいいけど特異点、秩序の子が後ろにいるけどいいの？』

『だってもう他のことで罰うけてるしこの際全部纏めて告白しようかなって——』

「それが原因よ？」

「あ、やっぱり？」

ホワイト（アウトや）でー

「……」

「……」

グランサイファー内部、とある部屋。そこに2人の少女が深刻そうな表情で座っていた。

1人は自称天才美少女錬金術師、クラリス。もう1人はシヨチトル島の巫女であるディアンサの2人である。2人の共通点として上げられるのが、年代代だと言うことと2人して団長たるグランのことが好きだということである。しかし、今回深刻そうな表情をしているのはそのグランに関することなのだ。

「……まさか、グランがロリコンだったなんて」

「でも……そんな予感してたよね」

そう、先日ホワイトデー。グランからのお返しにグランサイファーの団員達は程度こそあれ、皆喜んでいた。グランからのお返しも多種多様なものであり、一体いつそんな時間を作ったのかと言わんばかりに体力のお菓子を全員に配り終えており、尚且つ全員との時間を濃密に過ごしていた。

「……ウチらがどれだけアピールしても、セクハラこそすれ一線は超えなかったし……」

「うん……軽いセクハラしかしてなかったし、なんならもっと過激なことをしてもいいとさえ思ってたのに……」

グランがそれほどまでに女性に優しくしても刺されていないのは、一概に彼が線引きを行うことを忘れなかったためである。なんだかんだ言っても騎空団の団長、されど未だ青春を謳歌できたであろう15歳である。こんな男にとって目に毒すぎる環境で、自分のことを好きな女のことがいっぱいいると考えただけで、精神は簡単に崩壊してしまうだろう。

「……でもまさか……」

「まさか……」

「メリッサベルさんが本命だったなんて……」



だが、その線引きはあつけなく崩れた。そう、彼は告白しているのだ……ハーヴィンの年上系女性の1人、メリッサベルに。それも聞き間違いなどではなく、ガッツリと聞いてしまっていた。

『そのチョコは義理じゃない』

「そのセリフだけ聞くと、私達も同じこと言われてたけど……」

「顔を赤らめて言うそれは……ウチ達の言葉と同じでも、隠された意味合いが変わってきちゃうよ……」

メリッサベルにお返しをする際、グランは『義理じゃない』とだけ言っていた。メリッサベルは最初意味がわからず、グランに聞き返した。だが、グランはその聞き返した質問に答えることはなく……ただそっぽをむくだけで終わらせていた。それが答えだと理解するのに、メリッサベルは長い時間を必要としなかった。

「……よく考えたら、グランって基本的にドラフとかハーヴィンとか……あと年下の子とか、結構可愛がってたもんね……」

「私たちが構われてないわけじゃないけど……なんか、仲間として接されてる感じがあつたもんね……」

「年下……というか、身長低い子を見る時の目がなんかあれだったもんね……」

「私たちがつけ入る隙は……ないって言うの……?」

推測でしかないが、今の彼女たちにはこれ以上ない説得力を持たせてしまっているこの推理。だが、彼女たちの推理を否定するかのようにな、1人の人物が現れる。

「その考えは……甘えとしか取れねえぞ2人とも!!」

「その声は……」

「ししよー!?!」

クラリスが叫ぶ。そう、現れたのはクラリスの師匠であるカリオストロだった。何故か去年の夏頃来ていた水着を纏っているが、2人は特に気にすることも無くそのまま会話を続け始める。

「お前ら……本当に低身長があいつの好みだと思っつか?」

「え……だって、現に……団長さんは……」

「……はっ……そうか……! ししよーはそういえばバレンタインに

はグランのチョコに菓を盛ってたのに一切反応がなくてようやく自分のしていることが中々恥ずかしいことだつて認識した上で渡されたお礼がかなり友人に渡す雰囲気のものだったせいで嬉しいけど本音が全く言えない状態に陥ってしまったって困ってたよね!」

「クラリスは後で説教だ」

「なんで!」

自業自得としか言いようのない罰を宣言されたクラリスを知り目に、カリオストロはディアンサ達の推理が間違っているという理由を勝手に話し始める。

「まず、かなりイラツとくる話だが……俺様のような完全で完璧な美少女が誘ってもあいつは発狂こそすれ襲おうとは一切しなかった。その時点でも既にお前らの推理は間違っているとも言える」

「多分ししょー元男だしごくたまにおじさんがやるような仕草とつてるしそれが原因で微妙に恋愛対象に発展しづらくなってるだけであつてぶっちゃけ美少女なのにモテないって言うのは9割型ししょーの自業自得だよね」

「後でウロボロスの刑な、大丈夫だ甘噛みで済ませてやる」

「どうして!」

「さすがに自業自得ばかりだよクラリスちゃん……」

新たな罰を貸されたクラリスに苦笑しながら、ディアンサは深く考え始める。中身が元男とはいえ、確かにカリオストロは美少女でグラソよりも低身長のはずなのに、何故そこまで本気にされないのか……そこに何か自分達が足りないものが分かるのではないかと、ひとつの仮説にたどり着いた。

「……」

「その顔……何かを思いついたみたいだな? 何がいい案でも出てきたら、そいつを実行してみるとするか」

「思いついたというか……」

「おう」

「カリオストロさんって素で告白したことないよね多分」

「……」

固まるカリオストロ。ディアンサの言いたいことがすぐに理解出来たのか、彼女はそのまま黙っていたが……クラリスは理解ができていないのかディアンサとカリオストロを交互に見て困惑していた。

「え、え何？ どういうこと？」

「……だってカリオストロさんって、多分好きって伝える時って……」

『やーん☆カリオストロ、団長さん好きすぎてこまっちゃあう☆』

『カリオストロも、団長さんのこと……だ・い・す・き……だよ☆』

「……みたいな感じだと思っただよね」

「あー、わかるー……ししよーって肝心な所で猫かぶるせいで、本心が中々素で話せないしいぎ話そうとしても今度は照れ隠しで誤魔化すしで何だかんだウチ並にヘタレだよね痛い痛いアーツタイアタマガアツ!!」

ウロボロスがクラリスの頭を甘噛みする。カリオストロはそんなクラリスを気にすることなく、ディアンサに向き合う。

「はっ……それがどうした……この美少女の顔を直接見れてねえからグランだって俺様の誘惑に打ち勝ってるんだろ、直接見たら感想は俺様は今頃5児の母親だぜ」

「ししよーのその自信ってどっから出てき待って飲み込むのはやめてナンカヌルヌルシテルウ!!」

「多分普通にカリオストロさんが元男って所で引つかかっただけじゃないかな」

「え、それさつきウチが言待って待ってこれ以上飲み込まれたらシャレになんなアーナンカナマグサインダケドツ！」

クラリスの悲鳴をバツクに、カリオストロはショックを受けていた。何せ、彼女自身が目を背けていたことをついに突きつけられてしまったんだから。

「くっ……やはりその部分でのマイナスがデカイな……」

「や、やっと出られた……っていうかししよー、1個だけいい？」

「……なんだ、クラリス」

「そもそも……強いとは認識されてると思うけど、同い年って認識とどうか年下みたいな扱いされてる時ない？」

「……」

雷に打たれたかのような表情になるカリオストロ。そこまで思考が至ってなかったのだろうと、クラリスは苦笑いを浮かべていた。

「……そうか、理解したぞ……そりゃそうだ……あいつが振り向くための条件は『美少女』だけじゃ足りなかったんだ」

「えつと……どういうことですか？」

「あいつが欲しいのは……『自分より低身長かつロリっけと自分を甘やかしてくれる包容感を持った女』!! 故に俺らじゃあ歯が立たなかったんだ!!」

「……つまり？」

「ハーヴェインとドラフとサラが最大のライバルだ!!」

集中線が入りそうな程の迫真さで、叫ぶカリオストロ。その迫真さにデイアンサとクラリスは言葉が出なかったが、すぐに理性を取り戻してカリオストロに物申す。

「ま、待ってよししよー……年齢的に大人もいるハーヴェインとドラフは兎も角サラちゃんをライバルにするには……」

「お前ら知らないのか？」

「何がですか？」

「グランの奴疲れてる時『サラに抱きしめてもらいたい』って呟いているぞ」

「……ししよー」

「なんだ、クラリス」

「カリオストロさん、リーシャさんのところ行きましょう？ 流石に子供に抱きしめてもらいたいわって言うのは……注意してもらわないと、私達が振り向いてもらう云々以前の話ですよ。」

本人たちが良くても捕まったら悲しい結末になってしまいます  
「……」

「……よく考えて見りやあ確かにそうだ」

真面目な話、幼女に抱きつくのはどこの島でも変人である。英雄色を好むとも言いかもしれないが、流石に未成年どころか10にも満たない子供を、15歳の時点でそういう対象に見てしまいかけている

のは青少年の情緒的に危ない。

そういう訳で、錬金術師組とディアンサはリーシャのところに向かうのだった。

「……あれ？ リーシャさん？」

「おや……珍しい組み合わせですね。どうしたんですか？」

「リーシャさんこそ……今から部屋に向かおうと思ってたのに……ここって団長さんの部屋の近くですよ？ 何かあったんですか？」

向かっている途中、グランの部屋の近くでリーシャを見つける3人。ディアンサが事情を尋ねると、リーシャは微妙そうな表情を浮かべながら言葉を詰まらせていた。

「……その」

「……？」

「……アンスリアさんに、団長さんがユカタヴィラを着せようとしてたんですよ」

「ああ、なにか可愛いのが買えたとか言っていましたもんね……まだセーフじゃないですか？ そのまま押し倒してぬがして無理やり着せたとかならともかく」

「……その光景をみたルリアさんが、団長さんの頭に星晶獣ドグーを振り下ろしたんですよ、今のその事件の処理をしていたところですよ」

「ああ……」

「団長さんは明日には復活してると思うので多分大丈夫だと思います」

……それで、御三方は一体どのような御用で？」

「……いえ、なんでもないです」

全く関係ないところで殺られているグラン。流石に同情したのか、ディアンサ達は用事を語ることなく……そのままその場を去っていくのであった。

二天、逃がさないわよ？

「今回のゲストは十天衆のソーンさんです」

「よろしくお願いするわ」

「十天衆といえば知る人ぞ知る最強軍団、その中でもソーンは最強の弓使いです」

ソーン。魔導弓を使い、どこまで離れていようとも相手を撃ち抜くことの出来る実力の持ち主。その精度もさることながら、本質は島の端から端までを見渡すことの出来る脅威の魔眼である。見渡せるだけではなく、対象を見つけることも可能である。なんだったら、近所の井戸端会議を読唇術で盗み聞きしたりも出来る。

「団長さん、少し違うわ」

「ん？ なんか間違えてた？」

「武器の最強は弓だから、弓使いⅡそもそも最強なのよ」

「全方位に喧嘩売っていくスタイル辞めない？」

お淑やかかつ、大人しそうに見える女性だが……仮にも全空の抑止力となる十天衆の1人。かなりプライドが高い。それが自分ではなく、弓の強さを誇示するために使われるのだからまだマシなのだが。

「というかその理論だと十天衆最強はソーンになるけど？」

「そんなわけないじゃない、ただでさえ十天衆は強いんだからその中で最強なんて決められないわ」

「いやだって自分で……」

「剣を使うシエテ、刀を使うオクトー」

突然放った言葉に、グランは首を傾げる。どちらも剣と刀を使う十天衆のメンバーだが、それが何が関係あるのかと首を傾げてしまう。

「……？」

「2人とも、その場で剣を降るって騎空艇1隻は簡単に落とせるわ。勿論その騎空艇が抵抗するのも込でね……それでも私の理論が正しいって思える？」

「あ、いやなんでもない」

「そもそも今の理論はただの人間だったらの話、十天衆クラスになる

と武器のリーチなんて最早メリットにもデメリットにもならないわよ」

オクトーとシエテの話を聞く限り、文字通りだろう。逆に言えばソーンも並大抵の相手ならば近づかれても問題ないということである。

「じゃあ俺が弓を使ったら最強？」

「残念ながら団長さんは私達側よ」

「……今日やたら押しが強くない？」

「ふふ、ガンガンに推していくわ」

「……とりあえず、お便り紹介のコーナー」

無作為に、無造作にはこの中身をかき混ぜていくグラン。その中から三通の便りを取り出して並べていく。

「というわけで一通目『最近魔眼で覗き見て驚いた事はなんですか？』」

「私がまるで覗き魔みたいな言い方はやめて欲しいのだけれど……そうね、最近驚いたことは……団長さんがシエテから貰った私たちとお揃いの服をダンスから出しては着込んで決めポーズしていることかしら」

「OK、いくらでも払うからそれ以上は話さないでくれ」

十天衆全員を船に乗せた祝いで、シエテから同じ十天衆の装いを貰っていたグラン。その際に一悶着合ってから、シエテが十天衆頭目としてのライバルとしてグランを認識し始めているのはまた別の話。

「気に入ってくれて何よりだよ」

「まあ、かつこいい服だし……そういえば、十天衆の服装で聞きたいことがあったんだけど」

「何かしら？」

「あれって個人で服のデザイン考えてるの？ それとも別の誰かが一括？」

「またどうしてそんなことを気にしてるの？」

「え、だって……もし個人で考えてるものだったらエッセルとかすごい格好になってるよ？ おしり丸出しだよ？」



十天衆エッセル。十天衆の中でも銃の扱いに長けている女性である。2丁の銃を構えて、行う戦い方はスマートささえ感じられるが……いかにせん彼女の格好は、思春期の男子の性癖をねじ曲げるくらいには凄まじい格好になっている。

「ろ、露出度の話は……ちよつと……」

顔を真っ赤にして俯くソーン。20歳である彼女だが、未だこの手のピンクな話題には着いてこれないでいた。

「まあ、これ以上はエッセルの尊厳の為に黙っておくとしよう」

「というか……こんな話、カトルに聞かれたら大変なことになるわよ？」

十天衆カトル。エッセルの弟であり、十天衆の中でも短剣の扱いに長けている少年である。ことエッセルの話になれば、唯一の血の繋がりのある身内である為とんでもなくキレる。えげつない暴言を吐く彼の素が出るくらいには、キレる。

「大丈夫、前にこんな話題振ったから」

「えっ」

「気まずそうに顔そらされたから、カトルとはそれ以上話してないよ」彼女の服装だが……グランの中では二択あった。『エルーンだからあの格好はそこまでおかしくない』説か『エッセルが考えたためカトルが強く出れないか』である。

身内のことに関しては敏感に反応してブチギレる彼が、エッセルの格好で怒ってないのはどちらかだろうという予想である。

「そ、そうなの……」

「だから次の話題に行きまっしよい……『島の端から島の端まで見えるらしいですが、だいたいどのくらいの距離が限界ですか?』」

まあ、前から思ってたけど結構曖昧な表現だよな?」

「そうね、島によつては距離も変わってくるもの」

「で、実際島の端から端なの? 今まで色んな島渡ってきたりしてるけど」

「そうよ? それ以上見る必要性も基本的にないから、見たことは無いの……だから、私自身限界がどこまでなのか把握出来てないかもし

れないわね」

あつさりと言うが、はつきり言って恐怖そのものである。つまりソーンと同じ島にいる間はサプライズはおろか、ドッキリ計画を立てようものなら矢文で提案まで出されかねないのだ。

「そう考えると、魔導弓っていう武器はソーンにはピッタリの武器なわけだ」

「そうね、私の目と一番相性もいいとも言えるわ」

ちなみにソーンは飛行術、つまりは単独で空を飛ぶことが可能な程には魔力も高い。つまり島の端から端までという範囲はあくまでわかりやすい例えなだけであり、彼女の射程範囲は360度最大距離不明な百発百中の矢なのだ。

「……改めてほんと、十天衆になった理由がわかる気がする」

「まあ、そのせいで偽名を使うこともあるけどね」

「まあ有名税というか……名前を下手に出すわけには行かないもんね」

「そうよ、この間うつかり前に滞在してた島の服屋さんで名前言っちゃったら、ビクビクされて気まづくなっちゃったもの」

「それは……ご愁傷さま……」

「もう買に行けないわ……」

自業自得、とは簡単に言えないのが辛いところである。自分は隠していても、ツレによってはそこから名前が漏れてしまうことだってあるのだ。

「……とりあえず転換したいし、ラスト3通目」

「はい」

『結婚したいですか?』したい?」

「したいわよ? 女の子だもの」

「そっかあ……」

ソーンは20歳である。だからなんだ、という話ではないがお姉さん感を醸し出しつつも妙に同年代感を覚えているグランは、何だか知り合いの異性の友達が結婚して遊ぶ頻度がめっきり減ったかのような、よく分からない感情を抱えていた。

「そう言えばシルヴァも結婚しようか、みたいな話してたような気がするわ」

「まあ、うん」

「それと一緒に話してたイルザやモニカ、後ヘルエスさん」

「これ以上は特定の人物にダメージが与えられるからやめよつか」

突然の特定の人物にダメージを受ける話題を展開し始めるソーン。悪意はないが、おそらくそれを流すことは彼女達にとって大ダメージもい所だろう。

「そ、そう?」

「うん、そう……とりあえずやめてあげよう」

「そう……」

「所でソーンは結婚したらどんな生活をしたい?」

「うーん……私は家で主婦をやって……旦那さんのためにお弁当を渡したりして……ごくありふれた、普通の家庭がいいかしら」

望むは普通、十天衆という肩書きを持つているせいかよりその当たり前の夢に新鮮さを感じるグラン。しかし、彼女は一線を超えた強さを持つているだけで、その思考は紛うことなき一般人女性と何ら変わりないのである。

「……あ、でも逆もいいかも」

「逆?」

「私が働きに出て、旦那さんがお弁当を渡してくれるの」

「主婦じゃなくて主夫と……」

十天衆なので、はつきり言えばそれ以上に稼ぎが悪いということは無いだろう。十天衆じゃないとしても、狩人としてなら破格の強さを誇っているソーンなので、割と引っ張りだこになりかねない。

「そうなのよ……でもどっちでもイチャイチャできるからありだと思  
うのよね」

「因みにその2つを比べたらどっちがしたい?」

「うーん……甲乙つけがたいわね……あ、そうだ」

比較的わざとらしく手を合わせるソーン。何を思いついたのか、その表情は少し赤らんで笑顔を浮かべていた。

「せっかくだし、この後練習させてくれないかしら？」

「……何を？」

「新婚夫婦……のごっこ」

「新婚夫婦ごっこ」

「私は主婦の方が向いてるのか、グランが主夫に向いているのか……判断したいんだもの」

さらっと旦那役にグランを抜擢しただけでなく、グランが自分の主夫になるという事を言い放つソーン。グランはあまりの自然さに全く気づくことがなかったので、そのままスルーしてしまっていた。

「まあ、いいよ？ とりあえず一旦終わらせよっか」

「ええ」

「えー……ご視聴ありがとうございます、また次回お会いしましょうさようなら」

「私に依頼通す時は十天衆として依頼することをおすすめするわ、個人的に話す時は友達や仲間としてお話してほしいもの……じゃあね」  
フリフリと手を振りながらカメラを切るまで待つソーン。グランがカメラの電源を切ってから、ようやく手を振るのを辞める。それと同時に、別の話題を振る。

「それで、どっちからしたいかしら？ 旦那様」

「今から始めるのか……うーん、とりあえずソーンが主婦からで」

「ならその後でグランが主夫ね」

「はいはい……」

苦笑しながら部屋から出ていく2人。ちなみにこの後、勘が鋭い女性陣から質問攻めと滅多攻めにグランはされるのだが……またそれは、別のお話なのである。

「……うう……!?!」

「どうしたの？」

「なんか嫌な予感がする……」

「大丈夫よ、何かあっても私が守ってあげるわ」

「やだ……この嫁さんすごくイケメン……」

……グランのこういう所も、原因なので比較的自業自得なのは否め

ないのが、  
難点である。

三天、どうだ？

「今回のゲストは十天衆のサラーサさんです」

「おう！ よろしくな!!」

十天衆サラーサ、十天衆の中では斧を使いあらゆる敵をねじ伏せていくパワーファイターの役割を担っている。その力は海を割って魚を大量に捕獲できる力がある。正直使い方を間違えていると言われても仕方がない。

「さて、サラーサは森の中で育ってきたんだよね」

「そうだぞー！ あたしは森に育てられたんだ！ 森はいいぞー、弱肉強食……弱いやつは強いヤツに食われるって凄くわかりやすいからな！」

「ケーキは森にないけどな」

「ケーキが生えてる木とかないか!？」

今言った通り、サラーサは森で育った野生児である。野生児であるが故に……知識が多少足りていない。知能は悪くないはずなので、教えたら覚えるだろう。

「そう言えばサラーサって勝負に負けたヤツは勝った奴の言うことを聞かないといけない……みたいなのが信条って話だけど」

「しん……？ よくわかんないけど、弱いやつは強いヤツの言うことは聞かなくちゃいけないんだぞ!!」

「ここにはいる時俺そう言えばサラーサに勝ったよね」

「そうだな！ だから今はまだあたしはグランの言うことを聞かなくちゃいけないんだ！」

「ほほう、なるほど……じゃあもし俺と交り」

グランの頭を掠めるようにレイピアが飛んでくる。この感覚も随分久しぶりなので、グランは少し油断して掠ってしまっていた。罰は過剰なのかもしれないが、そもそもセクハラはダメなことである。

「おお……!?! 今のあたしでも全然わからなかったぞ!! 誰が投げたんだ!?!」

「秩序大好きな女の子だよ……俺に当てる気がないのは分かってるか

ら、俺は微動だにしなかったのさ」

「グランすげー!!」

ドヤ顔でできることでは無いが、純粋なサラサはグランの言葉を真に受けて、素直に感心してしまっていた。少しグランは罪悪感に駆られたが、今更嘘でしたというのもあれなのでそのまま話を進めていくことにした。

「……さて、前座はここまでにしておこう。とりあえずお便りだお便り」

「例のやつだな!!」

「そうそう……何せサラサは十天衆だからな、いっぱい質問されてるぞ……選ぶのは三通までだけど」

いつもよりもちよつと大きめの箱に、いっぱいに入っている質問の手紙をかき混ぜて……そして無作為に三通を取り出す。いつもやっている事だが、箱の大きさがいつもと違うのでそれなりに重さをグランは感じていた。

「おー!」

「って訳で一通目『おしやれとかってします?』」

「ソーンとエッセルにやってもらってる! あたしは興味無いからな!!」

野生児のために、オシヤレに興味が無いというのは仕方がない事である。しかし、年頃の娘がそれではいけないとエッセルやソーンが気を利かせて彼女におしやれを教えているのだ。

無論、サラサ自身も嫌がつている訳では無いので特に拒否することも無いが……オシヤレの仕方は全く覚えていないのである。

「あたしは別にいるとは思わないけどな! でも、2人が『女の子には必要』って言うんだ!!」

「まあ、今のご時世年齢が1桁の子だつてする時はするからな」

「フუნフはしてないぞ?」

「フუნフはまだ小さいからな……」

「ハーヴィンは元から小さいぞ……? グラン、大丈夫か……?」

『ハーヴィンみたいな身長とエルーンみたいな耳と尻尾と背中と脇と

ドラフみたいな角と胸がある星晶獣いねえかな』って連日言いすぎておかしくなってるないか……?」

「人の性癖暴露すんのやめて? 俺が言うのもなんだけどさ、今更だけどやめて?」

かなり心配そうな表情で、グランのことを心配するサラーサ。本気でグランがハーヴィンの身長が小さいことを失念しているかのような扱いをしていた。

「分かった!!」

「分かったならよし、話変えたいし2通目に行こうか」

「おう!」

「……えっと……『武器が変形して斧から剣になりますが、何故剣も扱っているのですか?』」

「ん? あたしは斧の十天衆だぞ?」

お前は何を言っているんだと言わんばかりに、サラーサは首を傾げる。

サラーサの武器は、所謂可変武器であり斧から剣へとその姿を変えられるのだ。しかし、斧の十天衆である彼女が剣を使うというのはいささか変な話なのだが。

「いや、戦っている最中よく武器が斧から剣になってたりするじゃん」  
「……?」

更に首を傾げるサラーサ。流石に少し話が噛み合っていないと理解したグランは、何故噛み合っていないのかが理解出来ていなかった。まるでサラーサは自分の武器が剣になることを知らないような……そんな反応である。

「……知らない、のか?」

「あたしの武器は昔から斧ひとつだぞ?」

どうやら、サラーサは剣へと変形することを知らなかったようである。しかし、知らないとなると話は実に単純であり今までサラーサが剣を使っているのに全くその理由を話そうとしないことも理解出来る。

「要するに……斧と同じ使い方でやってたってことなんだな……」



「……？途中で使ってる感覚は変わるけど、それくらいしか気にならないな!!」

「まあ使用感はそれでいいとしても……ていうか、その武器はどこで手に入れたんだ？」

森の中で自然に手に入るものでは無いだろう、明らかに誰かに作られ手渡されたであろうものの所在をグランはサラーサに尋ねる。サラーサは自分の武器を1度見たあと、グランを再度見ながら再び斧を見て三度グランを見るのを繰り返していく。

「……分かんない!!」

「えっ」

「気づいたら持ってたとしか言えない!!」

まさかの回答に、グランは拍子抜けしたかのような声を出してしまふ。サラーサはそのまま明るい笑顔をグランに向けていた。しかし、彼女のことはグランもよく知っており嘘をつくような……それ以前に嘘をつけるような性格をしていないのだ。彼女がそうだと言うのなら、そうなのだろう。

「そうかあ……まあなら仕方ないか……」

「そうだな!!」

「……にしても、その斧は随分と不思議斧だなあ……」

「長年の相棒って奴だ!!」

斧の柄を床に軽く叩きつけ、音を鳴らすサラーサ。甲高い金属音が少しだけ鳴るが、煩くない程々の音である。自慢げに鼻息を荒くするサラーサだが、その子供っぽいところが彼女の魅力的な所である。

「さて、そろそろ3通目行こうか」

「おー!!」

「『森では負け無しだったんですか?』」

「おう！何せ負けたら食われてたろうしな!!」

即答。しかし、彼女が森の中で生活してきた経験は間違いなく本物であり、その言葉は冗談ではなく本物である。という事は、少なくとも今の今までは彼女は1度も負けることがなかったということである。

「ふむ……という事は、サラーサを倒した俺は数少ないサラーサより強い存在だったってことか」

「むっ……いずれ勝つからな!!」

「ははは、いつでも受けて立とう……なんてな!!」

「ならメテオスラスト!!」

まるで隕石が降ってきたかのような衝撃が、グランの体に襲いかかっていた。会話の最中に間髪入れずに降ってきた衝撃に対して、グランは完全にダメージを防ぐことが出来なかった。故にまるで光の中に消し飛ぶかのようなイメージ図を浮かべながらグランはその意識を一瞬失っていた。

「ぎゃあああああ!!!」

……盛大な悲鳴をあげて。

「いやあ、まるでバハムートが一撃で消し飛んだかのような感じのダメージを受けてたわ」

「ごめんな、いきなりやったの」

「いやあ、可愛いしすごい上下に揺れてるの見えたからそれに比べたら2億ちよいのダメージなんて気にしない気にしない」

「よくわかんないけどありがとな!!」

グランのさり気ないセクハラも気にせず、サラーサはいつものように明るく笑みを浮かべる。サラーサは遠回しの言い方をだと理解せず首を傾げるか、または気づかないのどちらかである。故に、彼女

に物申す時はどストレートに言った方が伝わること間違いないのだ。  
「……さて、何故だか機械も無事だったし部屋もほとんどは無事だった  
ので今日はここまでとします」

「なんだ？ もう終わりなのか？」

「ほとんどと言ったけど壁一枚分ぶち抜いちやってるからね、俺よく  
防いで勢い受け流したと思う……まあ物足りなかったら後で話すな  
りご飯食べるなり特訓なりするからさ」

「そっかあ……なら後でケーキ食いに行こう!!」

「というわけで、3番目の十天衆が既に色気より食い気に走ったので、  
今から食べに行きます。ご視聴ありがとうございます、また次回お会  
いしましょう……さようなら」

「グーラーン!! 早くしろー!! またメテオスラストするぞー!!」  
「次受けたらグランサイファー沈むからダメでーす!!」

それを最後に、映像は途切れる。既にサラーサの興味は番組から  
ケーキに移ったので終わらしたが、サラーサを野放しにするのも好き  
勝手させるのもあまり宜しくないことである。それがわかつている  
からこそ、誰かが着いてやらねばならぬとグランは思いササツと番組  
を終わらしたのであった。

「とここでこの間、ギユインギユインする男がアタシにいったんだよ」  
「ギユインギユイン……アオイドスかな？ なんて言われたの？」

『『お前はツヨイドスだ!』って!! あたしのこと強いつて言ったんだ  
よ!! やっぱりあたしは強いんだなって!!』

「へえー……よかつたな、強いつて言つて貰えて」

「だからさ」

「うん？」

「強いあたしと勝負してくれよグラン!!」

「いやいや、だからグランサイフ」

「アニヒレイション・ノヴァ!!」

「嘘やんぎやああああああああああ!!」

後日、グランが飛んでる最中のグランサイファアから吹き飛ばされたという話がでてきたが……何時も吹き飛ばされているので、殆どのメンバーが『またか』という反応だけで終わってしまったという。

因みに、その際グランサイファアは甲板の床1枚ぶち抜いてしまっていたが、サラサがついに加減を覚えたときエテが泣いて喜んだという。その後でシエテもサラサの強さ自慢に巻き込まれて吹き飛ばされたのだが……それはまた別の話である。

## 五天、遊ぼうよ

「今日のゲストはフუნフさんです」

「えっへん！ 十天衆のフუნフだよ！ いっぱいすごい魔法使えるから、みんな宜しくね!!」

十天衆フუნフ、十天衆の中では最年少の存在である。しかし、十天衆に在るからには、彼女にもやはり突出した部分が存在している。それが、彼女の魔力量の多さである。最年少とは言ったものの、その魔力量の多さは同じ十天衆から見ても驚くほどのものである。

彼女自身、それを魔法という形で発散して安定させているが、それでも彼女の魔力の大きさは未だに成長中という恐るべき才能の持ち主である。

「今日はね！ あちしね、ソーンとエッセルとケーキ食べに行ったんだよ!!」

「そうだったのか、美味しかったか？」

「すごく美味しかったよ！ ニオも来たら良かったのになあ」

「そうだなあ、でもシエテと話してたんだろ？」

「うん！ シエテと、じつちやと、ウーノと一緒に!!」

じつちや、というのは同じ十天衆のオクトーのことである。彼女はオクトーのことをそう呼んでおり、オクトー自身も特に否定することをしていないので、このような呼び方が定着しているのだろうか、グランは考えていた。

「ところで、ケーキは何食べたの？」

「んとねー、えとねー」

頭をカクカク動かしながら考えている彼女に、グランは笑みを浮かべて微笑ましそうに覗いていた。まだ歳若いどころか小さいと言っても過言ではない彼女に、子供らしい可愛さを見いだしていた。

「……いっぱい!!」

「そっかあ、いっぱいかあ」

「そう！ いっぱい食べたの!!」

「そんないっぱい食べて満足したフუნフにも、いっぱいお手紙届い

てるからなく」

「わーい！ 最強のあちしになんでも聞いてね!!」

「つて訳で一通目『最近嬉しかったことって何かありますか?』」

「……」

質問に対して珍しく黙って考え込むフュンフ。もしや、嬉しかったことはさっきのケーキ以外なかったのでは？ と思ったグランは少し心配になったが、直ぐにその心配は杞憂に終わった。

「大変だよグラン!! 嬉しいことが多すぎて分からないよオ!!」

「……そっかあ……」

「えつとねえつとね！ さっきのケーキでしょ、じつちやがお菓子買ってくれたことでしょ、シエテが玩具買ってくれたことでしょ、ニオがお休みの前に演奏してくれたでしょ、シスが肩車してくれたでしょ、エッセルがお洒落してくれたでしょ、カトルがアイスクレードでしょ、ウーノが撫でてくれた事でしょ、サラーサと一緒に遊んでくれたこと……まだまだあるよオ!!」

微笑ましい彼女の言葉に、グランはニヤケが止まらなくなっていた。子供らしい、活発的で人当たりの良い彼女の性格と喋り方は、穢れているグランの心を完全に浄化していた。

「あ、そういえば」

「ん?」

「最近ねー、他の人が嬉しくなるとあちしも嬉しくなることが多いんだ」

「……と、いうと?」

フュンフの言葉の意味を改めて確認するグラン。フュンフは思い出すかのようにうんうんと唸りながら考えていく。そして、急に表情が明るくなったかと思えば、両手をパチンと合わせ音を鳴らす。

「ソーンがね！ シルヴァと一緒にいて楽しそうにしてたりとか!」

「……ああ、なるほど……そういう事か」

ソーンとシルヴァ……もとい銃工房三姉妹、オクトーとナルメアの様な十天衆以外に前からの知り合いが団にいる面子が、特定のメンツと仲良くしているのを見て嬉しく感じているようだ。

「みんなみんな、仲良しな事はいい事だもんね！」

「そうだな、いい事だな」

子供の話を聞いている父親の気分、そんなもの味わったことは無いけれどグラン的にはそれが、父親のような気持ちだと言うことは理解できた。

「さて、もつとこのお話をしていてもいいが……2通目に行こつか」

「はあい!!」

『全力を出したらどうなりますか?』

「わかんない!!」

「即答ときた……と言っても、確かにその通りだからなあ……」

フუნフの魔力は十天衆の中でも秀でているものである。しかし、未だ幼い彼女はその魔力を言葉通り『ぶっぱなす』形で発散させているわけなのだが……

「加減とか、したことないもんな」

「全力全壊!!」

そう、加減を知らない。正確に言うならば、力のコントロールをあまりしないのだ。単純に強弱を付けるだけならば、彼女にもできる。しかし、その力を正確に使っていないので無駄なところが多かつたりもするのだ。

逆に言えば、独学と直感だけで魔法を使っているので、今以上に魔法の火力をあげることが可能だったりもする。

「ソーンがね、魔法のお勉強しようって!!」

「してる?」

「してるよ! おかげであちしもまだまだ強くなっちゃう!!」

幼い分、彼女の伸び代は誰よりも大きい。力も誰よりも大きい。既に十天衆という伝説になっているが、それ以上の大きな伝説の1ページになるかもしれない逸材である。

「そう言えば、フუნフは魔法をとりあえず出しまくってるけど……あれって誰から教わったんだ?」

「ほえ? 全部あちしの魔法だよ?」

それが独学で編み出したものなのか、それとも覚えたから既に自分

の魔法だと言いたいのかは、グランは聞けなかった。なんというか、多分このまま同じことを聞いては同じ回答が帰ってくる……そんな気がしたからだ。

「まあ、それならいいんだけど……にしても、毎度毎度ああやってぶっぱなしまくってるのを見ると……気持ちよさまで感じるな」

「でしょでしょ？ サラーサとね、よくね……やるんだよ……」  
「何を？」

「どれだけ大穴掘れるかゲーム！」

それは最早島の地形を変えかねない遊びではないだろうか……とも言えず。先程から言いたいことを全く言える状況でも無くなっているので、グランは軽く下唇を噛んで我慢するという状況に陥っていた。

「……と、とりあえずそのゲームはまた今度見せてもらうことにして……3通目に行きましょうか」

「はあい!!」

「てな訳で3通目……『シエテお兄さんのことはどう思っていますか』……おい頭目、後で団長室」

わざとらしい言葉でお便りを書いていたシエテ。フუნフはなんの事だか分からずに首を傾げていたが、自分のやる事は『聞かれたことを答える』なので、素直にそちらに従う事にした。

「んとねー、シエテはあ……」

「……シエテは？」

「いっつもヘラヘラしててたまに腹が立つ時がある」

「——!?!」

フუნフがこんなことを言うはずがない、と一瞬にしてグランは瞬間的に起きた現実から逃げようとしかけたが、すぐさま満面の笑みをうかべたフუნフに現実に戻されてしまった。

「——って、カトルが言ってたよ!!」

「ああなんだカトルが言ってたのか……」

カトルならいいのか、と言われそうな案件だが……たまに口の悪くなるカトルらしいと言えらしいので、グランはそれならとスルーを



することにした。それはそれとして後でそれとなく注意はするつもりなのだが。

「……フュンフはシエテの事どう思ってるの?」

「んー……面白い人!!」

仮にも十天衆の頭目がそれでいいのか、子供だからこそかっこいいとか綺麗だとかの印象を持たせるように動いた方がいいのでは無いか、グランは笑顔を張りつけながらもそう思った。

「でもねでもね! みんなシエテの事大好きなんだよ!!」

「……まあそれは伝わるかなあ」

自由奔放で頭目の招集をかけても基本的に集まるのはソーンと、ご飯の匂いをかぎつけた時のサラーサクくらいしか集まらないけど。カトルが素を出してブチ切れながら暴言を吐いてボロクソに言ったりもするけれど。それでも信頼はあるのだとグランは知っている。

「……なのに人望ないんだよなあ、不思議な奴だよなあ……?」

「だっていっつもヘラヘラしてるし!」

「ああ……」

答えここにいたり、と言わんばかりの納得である。しかし、そもそも我の強い人物しか集まってないのが十天衆。ヘラヘラするよりも威厳ある方が皆従う可能性がある。

「いや逆に反骨精神モロだしするか……」

「モロ……?」

「ああ、うんなんでもない」

「団長はどう思ってるの?」

「シエテをどう思ってるか、ねえ……」

じっくり考えるが、大切な仲間であることには間違いがなかった。剣オタクで、いつも剣拓を取ろうとしてきていつもヘラヘラ笑っている軽い言葉をかけてくるが……大切な仲間として、グランは認識している。

「俺の中でも評価低くね……?」

「ほえ?」

だが、同時にグランはこうも考えていた。強く、なんだかんだ言っ

て真面目な時にはリーダーシップを発揮している頼もしい人物だと。

「団長も、シエテのこと好き？」

「うん、大好きだよ？」

「えへへえ、そっかあ」

フუნフの態度に癒されながらも、そろそろ時間だということに気づいたグラン。仕方なくカメラの方に視線を動かして、終わりの挨拶を進めていく。

「というわけで、本日はここまでとなります」

「え！ もう終わりなのお!？」

「まあまあ、お喋りだけならまたいくらでもしてあげるからさ」

「むう……分かった!! じゃああちしと喋りたいみんな! あちしの部屋に来てねえ!」

「というわけで、ここまでご視聴ありがとうございました。また次回お会いしましょう……さようなら」

「じゃあねえ!!」

「えへえ……お菓子美味しい」

「いやあ、今日はお出でくれてありがとうなフუნフ」

「いいよオ! でもさでもさ? 次ってニオだよね?」

「ん? そうだけど……それがどうかしたのか?」

「んとねんとね……ずーっと鏡みて、笑ったりしてたの!」

「あっ……」

カメラを切り、グランの部屋でお菓子をほおぼっているフュンフ。そんなフュンフから、今のニオの様子を聞かされたグランはこう思ったらしい。

『フュンフが見ていたことを黙っていよう』と。心を読むニオに対して黙り続けているというのは難しいが、そこも踏まえて何とかしよう。とグランは考えたままフュンフの口にお菓子を運んでいくのであった。

九天、一緒に弾こう？

「今回のゲストは十天衆の二オさんです」

「……」

「……自己紹介して貰えると助かるかなあ」

「……二オよ、十天衆をやってるわ。私の前で隠し事なんて出来ないと思わない方がいいわよ」

「言ってることは怖いですが、可愛らしいので良しとしましょう……そんなことよりも」

「何？」

「——なぜ俺の膝の上に……？」

十天衆二オ、彼女には特殊な力があり心の声を音として聞く耳を持っていたり、逆に音を奏でることによって相手を落ち着かせたり眠らせたりと『音』に関することならばトップクラスの實力を持つ十天衆の1人である。

そんな彼女は、現在グランの膝上にちよこんと座っていた。まるでそこが定位置だと言わんばかりに。

「……駄目？」

「駄目じゃないしむしろ嬉しいけどめっちゃ気になる」

「……甘えたかった、から……」

「——」

ひとつ言うが、二オはグランよりも歳上である。その上での事ではあるが、とても甘えん坊である。周りに誰かいる時はあまりそう言う事をしないが、2人きりになった途端かなり甘えてくるのだ。

しかし今はカメラが回っている最中、空間的には二人きりとはいえ、この映像はグランサイファー全体で流れていることになっている。

「……いやいや、見られてるけど？」

「……見せつけよう、直接見られてるわけじゃないから、平気」

「おっとそういう路線で攻めてきたか」

ハーヴィンとはいえ、成人している女性である。そのうえで甘えん

坊なのである。そして、甘える時はとことん甘える性格なのと、思ってた以上に独占欲の強い性格。

グランの頭の中は爆発してしまい、つい一言を漏らしてしまう。

「――下手な男なら惚れるなこれ……」

「……団長？」

「おつとなんでもない……ってなんで離れるんだ？」

グランが静かに発した言葉は二オには聞こえていない。聞こえていないが、心の声は別である。グランが感じた二オの可愛さが心の中で爆発している結果、それを全て読み取ってしまった。結果、逆に二オは恥ずかしがってしまいグランから離れる結果となっている。

「……」

「顔真つ赤だぞい」

「真つ赤なのは夕日が差し込んでいるから」

「今昼間で曇りだけど」

「……」

「……」

しばらく見つめ合うグランと二オ。しかし、その見つめ合いにおいて二オは耐えきれぬ訳もなくそのまま視線を話す。

「……早く、進めて」

「……ならお言葉のとおりに通目から行こうか。『心の音色が聞こえるって、心が読めるのどう違うんですか』」

「……これ答えられるか……？」

グランは首を傾げる。そもそもの話、心を読めるのと二オの力がどう違うか、というのを説明するのは二オ自身にも難しい話だろう。二オが心の音色を聞けると同時に、それとは別に心を読むことが出来る能力がある訳では無いのだから。

「……正直、違いなんてないと思う」

「そりやまたどうして」

「そもそも……旋律を聞いて、その人が何を考えているかがわかる時点で……『心を読む』のと何ら変わらない……」

「まあ確かにそうだけど」

「これは私の考えでしかないけど」  
「ん？」

『心を読む』という大枠の中に…私の旋律を聞ける力が入ってるんだと思う。あくまで、細分化された中の一つ…と考えれば」

ニオの説明に、グランは理解したようなしていないような微妙な表情をしていた。もちろん、ニオの説明でニオの力が『心を読む』という大枠の中の一つというのは理解はできている。

「うーん…そうなるよ、だけど…あれか…？」

「…どこか、疑問点があつた？」

「いや…多分ちゃんと理解できないのは、言葉の使い方の問題な気がする」

「…使い方？」

「心を『読む』つてので多分軽く引つかかっただけだから…あんまり気にしないで」

「そう」

「とりあえず2通目…『いつも浮いてますが疲れないんですか？』」

ニオはハーヴィンである。そして同時に、彼女は自分の体をほぼ常に浮かせている。無論歩けないという訳では無いが、その体躯の為に浮いてる方が早いと言う時もある。

「疲れた試しがない」

「でもソーンとか普通に歩いてた要な気がするけど」

「…エルーンのメーテラ、彼女もほぼ常に浮いてる」

「あ、確かに」

今上がった2名。ソーンとメーテラ、彼女達もまた宙を飛ぶことが出来る実力者である。しかし、ソーンは兎も角メーテラはまともに歩ける靴をしていないのだから歩いていなくて当然なのだが。

「……つてなると本当に疲れないんだ」

「そもそも一定時間よりも、ほぼずっと空を飛んでいられるからこそ、浮遊は難しいって言われてたりもする…」

「え、そうなの？」

「…冗談よ、一定時間飛ぶことならイオつて子も出来るからその時点で実力は相当なもの」

島から島へと個人での飛行能力を持っているメーテラや、同等の実力を持つニオやソーンは、既に飛ぶことに慣れている。飛び始めたばかりのイオがいきなり3人のような飛行能力を有していたら、それはそれで恐ろしい話である。

「……うーん、俺も練習したらそのうち飛べるようになるかな」

「飛ばない方がいいと思う」

「どうして…?」

「飛ぶと…」

「飛ぶと?」

「……ますますなんでも出来る団長になって、私たちのアイデンティティが失われかねない」

「そこまで行く…?」

飛べることはただの副産物のようなものであり、それが主軸となっている人物は特にいないが…それでも、飛べるという事を取られたくないというのがニオの本音であった。

「それに飛ばれたら…抱っこできない……」

「いや流石に身長差的に難しいのでは…?」

「……確かに」

元々、グランが飛べようが飛べまいが関係ないのだ。ニオは抱っこする側ではなくされる側の人間であることは明白なのだから。

だが、飛べるというアドバンテージは彼女に夢を与えていた。いつも甘えている人間を甘やかせるという、そんな淡い希望を持っていたのだ。

「……」

「……露骨にショックを受けてらっしやる……」

「受けてない…から、3通目行つて」

「あ、はい……3通目『琴の音楽を奏でていますが、激しい感じの音楽はどう思いますか』……例えると、アオイドス達みたいな…感じかな」

アオイドス関連のメンバー、つまりはバンドなのだが彼らの奏でる

音楽は二才の琴とは方向性が全く違うものである。それについての質問ということだろう。

「……何とも思わない、って言うのは不適切かもしれないけど…彼らの音もまた誰かの心の救いになるのなら、と考えると特に思うところはない」

「まあ騒がしいけどね…それがいいって人もいるしそりやそうか」

「ああでも……」

「ん？」

「あの包帯を巻いた男は嫌い」

「ああバレンティン……え、なんで？」

「近くにいると心の音色が聞こえてきて…その……」

「あー……」

バレンティン：かつてアオイドスがまだ記憶を失う前…ベンジャミンとして活動していた時のバンドメンバーである。はつきり言えば、生粋のマゾヒストだ。刺されれば興奮し、罵られれば欲情する。そんな彼の存在を思い出しつつグランは納得した。そして、今度から二才には近づかないように言っておこうと決めたのであった。

「ただの殺意なら受けなれてる…周りを憎む声も、怒りも悲しみも…けど、あの……あの男だけは…無理……」

男女問わず痛めつけられたり、罵声を浴びせられれば興奮するどころか自分から求めてくるような人物である。恐らくは二才が出会ったことの無いタイプの人種だろう。グランも会ったことがないし、可能な限り子供達にも近づかせないようにしている。

個々人の性的嗜好は否定はしないが、それはそれとして普通に危ない。トラウマになったらどうしてくれる。

「まあ、うん…今度アオイドスに伝えておくよ…」

「お願い……」

ライブするな、とまでは言わないがそれとなく今どこで何をするかくらい把握できるようにしておくように伝えておこう。グランはただただそう思うのであった。

「……さて、今回はこんな所かな」



「短い……もつと色々話していたい」

「まあこれも番組の定め……」

「……次は、エッセル？」

「ん？ そうだね、順番的にはそうなるかな」

「そう」

ただの興味本位なのか、なにか思うところがあるのか。それだけ聞くとニオは再び口をとぎす。グランは問いただすことはなく、なにか思うところがあるのだとだけ判断してそれ以上エッセルの話題を出すことは無かった。

「というわけで、ここまでご視聴ありがとうございました。また次回この番組でお会いしましょう、さようなら」

「不定期に演奏会をしてるから……暇なら、来てね」

「……珍しく、今回はゲストのニオさんがカメラを切ってました」

「そうですね」

「けど待てど待てど部屋から出てこない」

「確かにね」

「何事かと思い、確認するために入りました……なんでこうなってるんですか」

番組終了後、しばらく経っても出てこなかったグランを心配してリーシャが部屋に入ってきていた。ニオと二人きり、そんな状況を見逃す訳もなく許可も盗らずに突撃をかましていた。

「ニオオオ……」

そこには、グランの膝の上で頭を撫でられ蕩けきっている十天衆の姿があった。

「いやあ、しばらく二人きりでいたいって言うもんだから」

「頭を撫でて甘やかしていたと」

「はい」

「1ついいですか」

「なんででしょう」

「付き合ってもない女性とひっ付き合うのはどうかと思います」

「まさしく正論すぎる…いや、こういう文化だと思えば希望が…」

「ハーヴェインの女性なら兎も角、偶にアンチラさんなどの未成年の小さな女性と体を引っつけあってますよね」

『逃げられない』目の前の秩序を目の前にして、グランは直感的にそう感じとっていた。しかし撫でるのは辞めないし、ニオは甘えるのを辞めない。

「気づいておられましたか、ぶっちゃけ引っ付かれると悪い気はしないし甘やかしたくなる」

「アウトなんで引っ張っていきますね」

「やっぱり?というか今日雑だね?」

「理由は雑でも厳しく取り締まらないと、この困いずれ無法地帯になりますよ」

主にグラン関係の女性問題で。と言うのはリーシャは言わないでおいた。そしてそのまま引っ張っていかれるグラン、意地でも離れようとせずにくっついてるニオ。

その2人を引っ張っていくリーシャはさながら、父親と娘を引っ張っていく母親と、しばらくからかわれるのであった。

## 十天、逃げられないよ

「今回は十天衆エッセルさんに来ていただきました」

「……よ、よろしく」

「おや、緊張で固まっているのでしょうか？あまり緊張している人を見かけることがないこの番組、初々しさが逆に新鮮さを醸し出してよ  
り可愛さを引き出させる塩梅となって……」

「あ、あの……団長？」

「……何？」

勢いと言葉の強さで、エッセルにしゃべらせないように動いてるかのように見えるグラン。エッセルが勇気をだして放った言葉に観念したのか、笑みを浮かべた表情は買えないままに静かにエッセルの言葉を待っていた。

「……あの、どうして私クリスマス服なの……？」

「……」

そう、エッセルは今十天衆達が纏う専用の衣装ではなく……彼女が去年のクリスマスに着込んでいた衣装を着ていたのだ。しかも今はバレンタインデー、時期が約2ヶ月ほど遅れているのは誰の目から見ても明白である。

「……エッセル、君が普段着ている服がどれだけ恐ろしいか知ってる？」

「……え、あれが実は弾丸の保管の役割も果たしてる服だって知ってたの？」

「え、そうなの？」

「今考えた嘘」

「即興すぎる……いやね、普段の格好……ほんとやばいよ」

グランの言葉にエッセルは考え込む。因みに彼女はエルーン族であるために、例に漏れず背中中はガッツリと空いている。その上で、彼女の服装はスリングショットというものである。

簡単に言えばケツが見えている服装である。つまり、背中とケツが見えている大胆すぎる格好なのだ。

「あれってシエテが渡したの？」

「……ううん、自分で決めた」

「……寒くない？」

「銃を2丁持っただし……動きやすい格好の方が良くない……？」

彼女が動きやすい服装と言ったら、彼女自身的には見た目の派手さよりも機能性を重視したということなのだろう。故に、見た目がどれだけ酷くても動き安ければ問題ない……ということのようである。

「……まあ、でも……渡されたものはあった」

「へえ……どんな服装？」

「色々あったけど……1番印象に残ったのは……袖が異様に長くて、銃をかくせて隠れなくても本体を隠しながら銃を打てるって服」

「戦法に噛み合っていないじゃん……」

銃での暗殺をメインとした服装、今のエッセルは縦横無尽に動き弾をばらまく戦い方なので……はつきり言えばあってないものである。

「……それにしても、布地の削減しすぎじゃないかな……」

「私はこの服装が気に入ってるし……それに、意外と着てみたら着心地良くて驚くと思うよ」

「ほぼほぼタイツだから着心地とかないのでは……？」

それに加えて尻も殆ど見えているので、来ていないと言われても過言では無いのだ。

「ゴホン……ひとまずこのままだと、無限にエッセルの服装の話題になっちゃってしまうから……お便りコーナー行ってみよう。」

今回に関しては、一旦俺が内容を確認してから発表します」

「え、どうして？いつも取ってから読み上げてたのに……」

「そりゃあ質問項目の大半が『その服装どうなってるんですか』とかになってる可能性があるからだよ？」

今説明したとはいえ、エッセルの格好は昔のユエルの格好と大差ないレベルだったのだ。今でこそ、エッセルはクリスマス服、ユエルは舞のための衣装ということと比較的露出はましな服装を着込んでいるが……あの格好に対する質問はおそらくかなりの確率で上がるだろう。

「そ、そうなんだ……」

「というわけで一通目『弟はカトルさんですが、2人で協力したりしますか』」

「うん、するよ…私が後ろから援護して、隙を着いてカトルが切るって戦法を良くしたりするかな」

「お、随分具体的な…：戦法は勿論それだけじゃないでしょ？」

「うん、場合によっては…自分達の立ち位置をしきりに交代しながら戦ったりするよ」

「なるほどなあ…確かに、2人の得意武器を考えるとそうなるのも分かるというか…」

エツセルは二丁拳銃、カトルは短剣の二刀流。だが、獲物の仕留められる範囲がそのまま2人の戦い方という訳では無いということである。

時にはエツセルが前に出て、カトルが後ろに一旦下がり隙を着いて再びエツセルの前に出て交代…：そのような戦法を激しく切りかえていくことで相手を困惑させていく。長い間2人で過ごしてきたからこそ出来る、以心伝心の技のひとつとも言えるだろう。

「けど、グランだって…多分同じような事が出来ると思うよ」

「え、本気でそれ言ってる？やるとしたら、同じような立場って話ならビイカルリアになっちゃうんだけど…」

「…：その二人とじゃなくて、団員皆とって意味」

エツセルとしては、自分がカトルと出来ているようなことをグランは団員全員とできるのではないか…：という風に考えていたのだ。そのようなことを真剣に言われたグランは、一瞬だけぽかんと口を開けていたが…：すぐに恥ずかしそうに目を逸らしていた。

「ま、まあ？俺は団長ですんで？団員のみんなと力を合わせるくらい出来ないと、団長の座をカレンに渡すくらいの気持ちはありますし??？」

「顔、真っ赤だよ」

「シッ！もう二通目行くよ!!『十天衆を家族に例えると、誰がどの立ち位置に来ますか』」

「家族…家族か…」

考え込むエッセル。10人ともなると、結構な大家族扱いとなってしまう。故に仲間である十天衆のことは真剣に考えているのか、ガッツリと考え込み始めていた。

「…まずシエテは、お父さん」

「いきなり父親…ということは、ソーン辺りが母親？」

「ううん、シングルファザー」

「家庭環境がいきなり不穏だな、十天衆大家族」

突然のシングルファザーになつてしまったシエテ。エッセルは残りのメンバーも考えていく。

「ソーンとニオがお姉さん、サラサとフンフが妹」

女性陣の配分もここで決まる。年齢的にあまり年上として扱うことがないからか、ソーンは彼女の中ではせいぜい姉ポジションのようだった。

「オクトーはおじい…父方のおじいちゃん…ウーノが母方のおじいちゃん」

サラツとシエテがオクトーの息子という扱いにされていた。グランは、そのあまりの似合わなさに少し吹き出しかけていた。

「それと、シスが弟で——」

一旦言葉を切るエッセル。グランが首を傾げていたが、何事も無かったかのようにそのままグランの方に向き直り、その言葉を紡いでいく。

「——カトルも、弟」

「…確かに、そこだけは絶対に譲れないよね」

唯一の肉親であり、同じ十天衆の仲間であるカトル。エッセルは、彼の姉でいることを…カトルが自分の弟であることを、誰にも譲らなかつたのだ。

「にしても…シエテの胃が爆散しそうなくらいすごい家族が出来上がったもんだ…」

「ふふ、そうだね」

「まあ、あとで本人であるシエテお兄さんとは話に行くとして…3通

目、行こっか。

『銃使いでありながら、戦い方としては真逆に近いシルヴァさんのことをどう思いますか』

シルヴァ、俗に言うスナイパーである。隠れながら確実に相手を狙撃し、静かに勝ちを狙いに行く戦い方を主とする女性だ。そんな彼女と、戦いの中で前線で2丁の拳銃を扱うエッセル。その戦い方は正しく真逆と言っても過言ではなかった。

「……うん、かなり腕のいい狙撃手だと思う。私達も相当助けられるし、実際ソーンと併せて2人の『目』は私達に取って生命線と言っても過言では無いかもしれない。」

「お、評価がかなり高い……」

「けど、私も負けるつもりは無い。銃を扱う十天衆に入れたんだ：勝負したら、私が勝つ」

「おっと急に不穏な空気になり始めてきたぞ？」

シルヴァの話は、おそらく十天衆のメンバーは大体聞いたことがあるだろう。弓の十天衆であるソーンは、そのシルヴァと仲がいい為其他の十天衆にもその話題をよく振っていることがある。

因みに同じような話を何回も繰り返している時もあるが、エッセルはその都度聞いてくれていた。

「別に、喧嘩というわけじゃない。けど銃の扱いではなるべく負けたくない」

「因みに彼女の格好についてはどう思う？」

「……可愛い、と思うけど……ああでも……肉弾戦するのにスカート履いたりするのはどうかと思うな……」

「自分の格好は……」

「そもそも見える見えないを考えるような服装じゃないようにしてるから……」

「確かに見える見えないの次元じゃないわ」

見られることを気にしないためには、その分ぶっ飛んでいる格好をする必要があるのだなあとグランはしみじみ考えていた。因みにシルヴァは最近黒のズボンを履くようになって来たので、見える心配は

あまりなくなってきた。

「……そういえば、気になってたんだけど」

「え、何急に」

「…私の普段の戦ってる姿見てる時…もしかして、『そういう』の意識したりしてたの…?」

少しだけ頬を赤らめながら、エッセルはグランに尋ねる。その仕事、言葉遣い、喋ってる内容。その全てがグランの理性に完全なる破局をかける。

「そりゃ——」

だが、その破局は秩序の騎空団兼グランサイファー秩序維持担当リーシャという星の逆位置がドアの向こう側から殺気を飛ばしており固定ダメージが1万になっていたので、理性が死ぬことは無かった。

「——ひ、み、つうあああああ……」

選択を間違えてしまい、グランは落下してしまいました。自業自得であり自己責任でもありません、あーあ。

「あ……お、落ちちゃった…」

「いいえ、気にしなくて大丈夫ですよエッセルさん」

「り、リーシャ…?」

「彼は間違いなく生きています…そもそもそのために下に飛行できる人配置してるんですから」

「そ、そうだけど……」

突如として入ってくるリーシャ。エッセルは少し驚いたが気にする事はなく、そのまま会話を続けていた。

「さあ、戻りましょう」

「う、うん……」

そのまま部屋を出ていくエッセルとリーシャ。床は勝手に閉じていき、既にその下を覗くことも叶わない。

「あ、あの……リーシャ…?」

「え、あ、はい……どうしました?」

「その…あんまり団長のグランをいじめちゃ…めっ、だよ…?」



」  
リーシャは絶句していた。エッセルが『めっ』って言ったことと言えはそうなのだが、細かくいえばその言い方やその他諸々のおかげでギヤップ萌えを感じとっていたのだ。故に、その萌えで言葉が出てこなかった。

「……お、怒ってる……？」

しかし、そのだんまりをエッセルはリーシャが怒っているものだと考えていた。その際の耳が動く様により、リーシャは更にエッセルに對して萌えを感じ取ってしまい……しばらくその空間には、2人のすれ違いすぎる対応がひたすら続いていたのであった。

十天ガールズ！ヒアウイゴー！

「正直動き安かったらなんでもいいぞー！」

開幕、十天衆が1人。斧を極めしドラフの少女であるサラーサが元氣よく答える。質問者は答えがわかっていたので、別の者に同じ質問を投げかける。

「右に同じ……え、今のやつはやりすぎ……？」

次に十天衆が1人。銃を極めしエルーンの少女であるエツセルが冷静に答える。しかし、質問者の冷静な注意が意外だったのか珍しくも驚いた表情を見せていた。

「んとねー、いっつもソーンとかに選んでもらってる！　じつちやが可愛って褒めてくれるんだよー！」

十天衆が1人。杖を極めしハーヴィンの少女であるフユンフがサラーサと同じく、元氣よく声を上げる。質問者はとりあえずフユンフの頭を撫でて可愛がっていた。

「……自分で選んでる。選べない年齢じゃない……え、この間聞いてきたのは何かって……？　それは……言うのは野暮……かも……」

琴を……と言うよりも、音を極めしハーヴィンの女性であるニオは静かに答える……が、質問者の新たな質問により顔を赤く染めていた。そして、最後は――

「いっつも選んでるわよ、何なら皆の分だって選んでたりするし……最強の十天衆とはいえ……皆オシヤレに気を使わなさすぎなんだから！」

弓を極めたソーン。彼女は楽しそうに答えていた。少し呆れ、ため息がまじりながらも……その心はどちらかといえば楽しいと感じられるもののそれである。

「それにしても……急に衣服のことを私達に聞くなんて……どうしたの？」

「――いや、十天衆ってカラーリングは統一されてるけど衣装の形みたいなものは統一されてないじゃん？　そういうのも含めてオシヤレとか普段着とか……どうしてんのかなって」

そして、質問者であるグラン。質問の意図としては、十天衆の女性陣の普段の衣装を聞いているようだ。改めて細かく説明された質問に対して、十天衆女性陣は一旦顔を見合わせる。

「まあ、種族ごとだし……そもそも私たち軍隊ってわけじゃないもの……衣装の色とかは統一してるけれど……ほら、形は自分でおしゃれしたいじゃない？」

「少なくともソーンとニオだけしか、まともに服選んでなくない？」  
「う……」

そもそもソーン自身が、他のメンバーの服もまとめてオシャレしているという点からして既に十天衆女性陣はあまりオシャレに気を使わないタイプでは無いようだった。

「え、エッセルはしないだけで連れてった時は自分から選んでるもの！」

「まあ……あんまりにも変な服とかは嫌だし……」

「まあ……そうじゃなかったらクリスマススの服なんて着ないよな」

普段、というよりも十天衆の時の衣装が凄まじいだけでクリスマススの衣装は比較的まともなエッセル。可愛いものに興味が無い訳ではなく、服を買いに行くタイミングというものを掴んでいないだけのようである。

「あたしは別に服はいらないけどな！」

「も、もうサラーサったら!! 女の子なんだから……いえ女の子以前の問題ね……」

「完全に無自覚ですわこいつア……良く悪い大人とかに連れていかれなかったな」

出自からして純粋な野生児であるサラーサ。彼女からしてみれば、服を着ている理由は『言われたから』以上のものは無いだろう。それに関して、恐らくシエテやウーノが言っているから聞いている様なものである。

「それに関しては……サラーサが完全に野生児だから逆によかったというか……」

「とくじや〜」

ソーンが少し頭を抱えながら、ため息を着く。その態度にふと疑問を感じたグランであったが、不意に二才が口を開いきその答えを即答するのであった。

「……弱肉強食、連れていきたかったら私を倒せ……みたいなこと言ってたって聞いたわ……」

「あー……」

サラーサの行動原理は基本的に弱肉強食が前提にある。それに加えて、良い奴か悪いやつかの判断が来るのだ。十天衆は強く、そして皆が善人であるが故にサラーサは十天衆の一員として今日も楽しく過ごしている……ということらしい。

「弱いやつは全部ぶっ飛ばして森のみんなの餌にしたぞー！」

「あらヤダ急にバイオレンス……って今も立場が変わってるだけで、魔物相手に俺らも似たような事してるしな……」

「そういう事だな!!」

ニカツと笑うサラーサ。オシヤレの話をしているはずが、急にバイオレンス風味の真面目な話に早変わりである。内容がズレてきているので、グランは今度はフュンフに詳しく聞き始める。

「フュンフは……基本的にソーンなんだっけか」

「うん！ たまにじつちゃんがオ菓子とかお洋服くれるよ!!」

「フュンフから話を聞く度に、ナルメアのオクトー像とのズレが起こりすぎて頭がおかしくなりそう」

フュンフから話を聞いている分には、オクトーはただの気のいいおじいちゃん。ナルメアから話を聞いた時は、冷酷な二刀流の剣士。今の普段の状態はフュンフに近いのだが……やはりどうしてもそれでも認識のズレが起こるくらいには、本人たちの認識の齟齬が酷い。

「因みにオクトーはどんな服くれたの？」

「シマシマのタイトの水着！ それとサングラス!!」

「幼女になんてもん渡してんだ」

「『おなごがそのようにはだをさらすでない!』っていったよ!!」

「すっごいわかりやすい理由だこれ」

グランは、フュンフの若干似ているモノマネを聞き納得していた。

幾ら肉体的成長が起こりづらく、成長しても幼子のように見えるハーヴィンとは言っても……である。精神的にも明らかに未成熟なフュンフに着せる水着が、派手派手過ぎるとおじいちゃん……もといオクトーからしてみれば心配の種なのだろう。

「……まあ、うん。何となく理解できたよ……サラーサとフュンフは服にあまり興味が無い……というか他に興味あることがデカすぎると思うか……」

「そうなのよ……私とニオはちゃんと自分で選ぶわよ」

「ん……私も、連れてつてくれたら選ぶよ」

「まあ、私……そもそも1人で買いたい派だし……」

十天衆とは、最強の10人である。しかしそれ故に我が強く、大体のメンバーがどこかに癖を持っていたり主張が強かったり頑なだったりする。

「買い物意見すら一致しない辺り、確かに纏めるのは相当辛そう」

「……ねえ、今のシエテに聞かれたら多分泣くわよ」

「え、なんで……あ、団長として理解してくれるかのかな？」

「えつと……多分、それを君が言うのかのかな……」

「……？」

グランは理解していなかったが、この場にいる十天衆メンバーだけは理解していた。

十天衆をまとめている……と言っても、ほぼほぼ集まりが悪い状態の今をシエテが纏めてるとはあまり強くは言えない。むしろ、それと同等くらいに我が強いメンバーを十天衆以上にまとめあげているグランの方が、よっぽど相当面倒な立場にいるのでは無いかと。故に、それを聞いたシエテは自分よりも面倒な立場にいる人間に同情されていることに泣くのではないかと。

因みに、グランが呼んだ場合は十天衆メンバーはほとんど集まるために、余計にシエテが悲しくなることがあるのは秘密である。

「……ふーむ、とりあえず十天衆女性メンバーは……服装に関してはほとんどソーンがファッションの基準と」

「……あれ、そうなるの？」

「だって、ニオは自分で選んでいるからともかくとして……」

「……私は、ソーンかニオが連れてつてくれないとほとんど自分の買  
い物しないし……サラースとフუნフは……まあ、言わずもがなとい  
うか……」

「……確かに」

フუნフ、サラースは未だ子供である。ファツションよりもそれ以  
上に気になることが多い年頃であるために、あまり気にしないと言  
うようなタイプである。

「……そういえば、シエテ達には聞いたの？」

「あ、そういえば聞いてないな……」

「多分、私達より服装気にしてないと思うのよね……」

ソーンの言った言葉にグランは少しだけ考え込む。ハーヴィンのお  
じいちゃん、口の悪いエルーン少年、仮面をつけてるエルーン青年、  
剣オタクのヒューマン、刀を使うおじいちゃん……女性陣と比べて華  
がないのは仕方の無い話だがオシャレに気を使う人材だとは、到底思  
えないのは確かである。

「……まあ、改めて聞いても良さそうだな……男性陣の希望はカトル  
とウーノの2人だしな……」

「寧ろそこでシエテが上がってこないのって……」

「剣拓の柄の服とか着てそう」

「……確かに、彼なら着そう」

グランの言った言葉に対して、ニオが静かに同意していた。グラン  
の、十天衆男性陣に対するイメージは思っていた以上に偏っていたよ  
うである。

「まあ、色々ありがと……参考になったよ」

「ところで改めて聞くけど……なんで男女に別れて聞いているのかしら  
？」

「……特に、そこに理由はないよ？ ただ男女別で聞いた方が、お互い  
に意見を出しやすくなったって思っただけで」

「……嘘、動揺の音が聞こえる」

「くっ！ ニオはやっぱ耳がいいなあ!!」

十天衆二才は、相手が考えていることを音にして聞くことが出来る。但し、あくまで音して聞くだけであり正確な言葉を把握している訳では無い。

それでも、考えていることはほとんど読みとつているのでさほど問題無いのだが。

「……あ！　そう言えば前にシスが言ってたぞ!!　レヴィオン騎士団の方に服装を聞きに行ってたって!!」

「サラーサさんや、今度美味しいケーキ奢るから静かにしてくれないか?」

「ほんとか!?　わかった!　黙ってる!!」

グランはこれ以上情報を漏らさないように、サラーサをケーキでつり上げる。しかし、レヴィオン騎士団に聞きに行つたという情報だけで既に後の祭りなのである。または、時すでに遅しとも言おう。

「……ふーん、レヴィオン騎士団にも……ねえ?」

「……あそこの制服、パツパツな割に通気性がいいって話」

「ん……それ私も聞いたことあるよ……それに、胸の下の方……ちようど谷間の部分の下側が、まるで穴が空いてるような形らしいね……?」

「……?」

「なんかわかんないけど、お仕置な流れかな?」

「フュンフ、サラーサ……後で遊んであげるからお部屋から出てなさい」

「はあい」

危険を察知したグランは、サラーサとフュンフを先に部屋から出していた。そして、すぐに正座をすることで反省していることを体全てで表していた。

「……何が目的だったのかしら?」

「……うちの団にも、制服取り入れられたらな……と」

「……エツちな音が聞こえる、余程な衣装だったようね」

「お仕置……ですか」

「お仕置……だね」

ソーン、ニオ、エツセルの3人がグランの目の前にたちはだかる。それに対してグランは、逃げも隠れも行わない。ただ静かに、己の罰が罪に執行されるのを待つのみである。

「……………どうぞ、おしおきを」

「……………みんなの前でエツチな制服、反対」

ただその一言、ニオのその一言だけがグランの頭の中だけにやけに印象に残っていた。皆の前じゃなければいいのかと、ただそれだけを頭の中で反芻させながら……………グランは総攻撃を受けて意識を失うのであった。

今回得られる教訓は、たったの一つである。『自分の性欲に素直すぎてもダメ』これ一つだけなのである。



一天、何故争わねばならないのか

「今日は十天衆の一人ウーノさんに来ていただきました」

「よろしく頼むよ、グラン」

十天衆が一人ウーノ、男性のハーヴィンで槍の使い手である。その槍裁きは、まるで槍を生き物のごとく動かす事が出来る。そして、本人の守りは鉄壁であり並の人間ではまず彼に傷をつけるのは不可能である。

「なんか珍しく浮いてない姿を見てる気がする」

「まあ、基本的に浮いていることが多いのは事実かもしれないね。私としては、そこまで浮いているつもりもないのだが……印象というのは、時として行動の回数よりも色濃く強く残ったりするものだからね」

「確かに……俺もセクハラしてばっかりだとよく言われる」

「それは印象ではなく行動回数による事実だね」

「そんな馬鹿な……」

グランは彼自身にとっては予想外の事実ショックを受けていたが、ウーノはそんな彼を意にも介さずそのまま話を進め始めていた。

「それにしても、十天衆……女性達から声をかけたのは何か理由があるのかな?」

「……うん? 単純に男女別で分けたかっただけだよ」

「いや何、少し気になっただけだよ」

「……?」

ウーノの言葉が少し引っかけりながらも、グランが再び話を進め始めていく。あくまで司会進行役は、彼なのだ。

「そう言えばウーノの髭……というか、その先っぽについてる奴なんだけど」

「おや、これがどうしたのかな?」

「……浮いてんの? それ」

「ああ、浮いているとも……私自身浮いているから必要ない、と言われる時もあるね。けれどこれは、ある意味では自分に課せてある枷のよ

うなものでもあるんだ」

「枷？ 外したら実は地面が凹むほどの重たい装飾品とか……？」

外した瞬間、落ちて地面にめり込むところを想像したグラン。一瞬キョトンとなるウーノだったが、すぐに笑みを浮かべてグランの言葉を訂正していく。

「いやいや、この小さな物体を細かく浮かせること……それが枷という事さ。空を飛ぶこと自体は私以外にもできる人物が、この騎空団には何人もいる。けれど、物自体を複数……そして自分とは別で浮かせられるのはある程度の集中力が必要なんだ」

「……子供でもわかるように簡単に言うത്？」

「自分、アクセサリーA、アクセサリーBはそれぞれ意識を割きながら浮かせているということさ……まあ慣れてしまえばそこまで意識はしないのだが」

浮いている髪や、アクセサリーは彼自身とは別で浮かせている。それに使われるエネルギーもさる事ながら、ずっと浮かし続けていられる集中力もあるということである。

「……因みに、その枷を外すとどうなるの？」

「基本的に外すことは無いからね……しかし敢えて言うのなら……今よりも槍の精度は飛躍するだろう。速度や小回りの利かせ方、更には攻撃力にも直結してくる。おそらく今よりもっと鉄壁となるだろうね」

「すげえ……ちよつと見てみたいかも……」

「私達十天衆を全員味方につけた君なら、確かに戦える可能性は十分にある……が、やらない方が賢明だと思うよ」

「まあ、ウーノの本気出させるなら……船じゃなくてどこか広い場所で行るよ……それこそ島一個分くらいね……」

グランはウーノの実力を知っている。ウーノもグランの実力を知っている。お互いがお互いを強いと思っているが故に、自分達では決して刃を混じえることがないと考えているのだ。

強すぎるが故に、周りに与える被害が甚大ではないからだ。

「……さて、そろそろお便りのコーナーに行こうか」

「だねえ」

「1通目『なんで杖じゃなくて槍なんですか』……あー、これは正直思ってた頃あるね……俺。なんで明らかに魔法を使う要素が揃い踏みなのに、槍なのかなって」

「使えないことも無いが……あくまで十天衆としては私は槍使いだ……そして、その槍にも誇りを持つているからね。必然的にほかの武器を使う必要性が薄れていつているんだよ」

槍を見せびらかすように取り出しながら、ウーノはそう語る。事実、武器1種だけが十天衆が使える武器では無いのはグランも知っている。

サラーサは斧が変形して槍になるし、シエテはありとあらゆる剣を使う。武器種としてならば剣だけでも言えるが、ほとんど飛ばして使っているに等しいのでどちらかと言えば矢に近い使い方に感じていたりもする。

「……自分以外に槍を使えそうだなあって考える人いる?」

「ふむ……そうだね……使う、と言うよりかは『使うとすればこういう使い方になるだろう』というのならばあるよ」

「お……誰?」

「サラーサなら、槍投げの要領で相手に投げつけるだろうね。それで相手の身体を貫くまでが簡単に予想できる。彼女のパワーなら出来るはずさ」

グランはそう言われて軽く想像してみる。サラーサが槍を持ち、それを思いっきり投げた瞬間のことを。相手個人とは言わず、直線上の全ての者や人を貫いていくのではないか……とそう思えるほどにサラーサはパワフルであった。

「……確かに……」

「後はオクトーだね、彼は髪に刀を持たせて戦うが……単純にリーチが伸びるだけで戦い方が何ら変わらないのが、あまりにも彼らしいというかなんというか……」

想像にかたくない、というのはこのことだろう。単純に武器として使える刃の長さ時代が変わるだけであり、使い方そのものに関しては

オクトーは刀と特に使い方が変わることは無い――

「と、簡単に想像できるのが恐ろしい……」

「他のメンバーは……あまり私と変わらないか、使う事がそもそも無いだろうかという考えだ」

「前者はともかく、後者の候補は？」

「ソーン、シス、カトル、エッセル、ニオ……そういった所かな」

「いや後者全員じゃん……ってフュンフは後者じゃないんだ？」

「槍を使わせれば……と言うよりは、他の近接武器を使わせた場合……彼女は複数本をまとめて操作させるだけで脅威となるからね、剣拓を飛ばすシエテのようなものさ」

フュンフは色々な魔法を使う。物を浮かせて、縦横無尽に飛ばすであらうその姿は想像だけでもかなりの驚異である。

「まあフュンフはともかくとして……ほかのメンバーが使えないって思っただ理由を簡潔に」

「なら、簡単に説明していこう。ソーンは単純に魔眼を活かす戦いができない。シスの戦い方は『倒す』では無く『殺す』に近い、故に長物の槍は目立って彼の戦いがしづらい。カトルとエッセルも同じさ……」

あまりに長い武器は、彼らの『殺す、又は排除する』の戦い方と相反する。ニオは……言わなくてもわかるね？」

ニオやソーンは、その特異な力を活かすことが出来ない。そしてシス、カトルの2人は戦う時にはかなり近づかないといけない……逆を言えば射程があまりにも超近距離な為に、武器と言うよりもその技術によって殺す戦い方。エッセルもまた然り。

「確かに……3人ってどちらかと言うと、目立たずに敵を倒すってことが多いかも」

「そうだろう……故に、先程の彼らは槍を使えないだろうという判断さ。逆に近い性質の武器などだったら、彼らにも使えるだろうね……」

「なるほど……なんか思ってたよりガチな話になった……巻いていこう2通目。『同じ槍使いとして、気になる人はいますか？』」

この質問に対して、ウーノは少し考え始める。そして、指を立てていきながら質問の答えである『誰が気になるか』を応えていく。

「ふむ……ダークドラグーン団長フォルテ、白竜騎士団副団長ヴェインそれとイデルバの……」

「レオナ？」

「そう、彼女さ」

「1人目と3人目は分かるけど……何故にヴェイン？」

「彼の戦い方……仲間を守る為に耐え続け、そして隙を見せた敵に強力な一撃を与える……その戦い方はまるで私のようだと感じてね」

「ほう、なるほど」

ヴェインの戦い方に、自分を感じ取ったというウーノ。ぶつちやけ槍使いかどうか、という話ではヴェインはハルバードの使い手である為に微妙な線ではある。

「他にも個人的に気になるという人物は、槍使いに限らずこの船に乗っている。戦いを諫める側の十天衆だが、訓練のため……また自らの実力を図るためにも1度手合せを願おうとは思っているよ」

「なるほどねえ……因みに俺はどう？」

「ふふ、君は自分が私の目から見て興味を引かない人物だとも思っているのかい？」

「言葉だけだとすげえ怖いこと言われてる気分になる」

「君は、槍に限らず色々な武器を持って戦える。色んな戦い方を学んでいる。我ら十天衆を1度は相手してそして全員を倒している。いずれ、我々が更なる力をつけた際には……もう一度戦って欲しいものだね」

まるで全てを見透かすようなその瞳。その瞳と、かけられた言葉を持ってグランは言葉を無くしていた。まるで全てを見抜かれているような、全てを見定められているような……そんな気分になりながらも――

「じゃあ3通目行くね」

良くも悪くも自分を見失わないという方向性に持っていくのであった。

「えー……『十天衆以外でチームを組んでみたい、という人はいますか？』」

「そうだね……槍使いであれば、例の『組織』のメンバーであるゼタ……彼女がいいだろう」

「若い女の子と!?!」

「わざとだろうけど、その言い方はやめてもらいたいね……理由としては、私は守りの力に突出しているが彼女は攻めることに突出しているためさ」

確かに、と。グランはウーノに言われてゼタの戦い方を思い出していた。全てを貫き、全てを薙ぎ払うと言わんばかりに勢いのいい戦い方をする彼女は守りの要であるウーノと相性がいいと感じていた。

「個人の力としては、私は彼女よりも強いだろう。しかし、彼女にはアルベスの槍という唯一無二の力がある。あの武器の意志を強く引き出せば……その力は憂に私を超えていく可能性が非常に高いのだ」  
「すっごい高評価だね……個人の力って言ったのは？」

「魔力、筋力……要するに肉体面の力の事さ。技術などもここに入ってくる……けれど外的要因が含まれてきたら分からない。こちらの言っていることはそういうことさ……今回の場合だと、アルベスの槍がそれに含まれるかな」

「なるほど……」

武器や鎧、それらを使いこなすのもまた個人の力になるのだろうか……ウーノ的にはそれらは個人の力に属する中でも、外的要因のものになるらしい。

「それでも、負けるつもりは無いけどね」

「お、強気発言」

「けれど残念なことに、船の上でも島の上でも……グランサイファーに乗っている人物は誰も彼もがどこでも本気を出せる訳では無いのが、辛いところだね」

「わかるうー」

「軽い発言で同意しているが……君がその際たる筆頭だよ」

星晶獣すら屠れる武器を持つ、組織のメンバーであるゼタ。そして

争いを収める為に生まれた全空一の実力者達を集めた十天衆のウーノ。なんだかんだ言つて、その組織のメンバーと肩を並べて戦つたり十天衆全員と戦つて勝つていたりするグラン。

これらのメンバーは、総じて本気を出す訳には行かない人材ばかりである。基本的に、本気を出せばそれが戦闘ではなく殲滅は個人対個人の戦争になりかねないからだ。

「あつはははー！」

「笑い事では無いのだけれどね……」

「あー、さーて今回はここまでにしようか！」

「おや、唐突だね」

「話し続けてたら哲学的な話になりそうな気がする！」

表情的には笑みを浮かべているが、目の奥は全く笑っていないグラン。勉強が苦手と言うよりは、こんな場で哲学という真面目で重たい話をするべきではないと考えているのだろう。

「ふむ……まあ君がそういうのであればそうしようか」

「というわけでご視聴ありがとうございます！　またの機会にお会いしましょう、さようなら!!!」

「元氣だね……そうそう、私に何か聞きたいことや言いたいことがあるのなら——」

話してる途中で勢いよく切られる映像。ウーノはそれを見て苦笑してしまうのであった。

四天、その程度ですか？

「というわけで今回は十天衆が1人、カトルさんに来てもらいました」  
「どうも、よろしくお願いします」

十天衆が1人、短剣の使い手であるエルーンの少年カトル。彼は同じ十天衆の1人であるエッセルの弟である。今は丁寧な口調だが、一度振り切れると口調が荒くなってしまうという性格をしている。

「突然ですが今回はカトルさんにはとあるゲームをしてもらいます  
!!!」

「なんですかいきなり……」

番組が始まった瞬間に叫ぶグラン。それに対し雑な反応を返すカトル。グランが奇怪な行動をするのはこの団ではいつもの事なので、もはや慣れたカトルはこれしきのことでは動じなくなっていた。

「それはくダラララララララララララララララララララララララララララララ」

「早くしてもらっていいですか？」

ドラムロールを鳴らすかのように舌を回しながら、グランはやけに勿体ぶっていた。が、少しだけイライラし始めているカトルに催促されたので……隠していたパネルを1枚取り出す。そこには――

『『大声上げながら汚い言葉使ったら番組強制終了』です!』

「……………は？ 夏の暑さで脳みそを蕩けさせるにはもう遅いですよ?」

「あ、そういうのを大声上げたらダメって話なんでよろしく」

「企画誰が考えましたこれ? 団長さんだけですかね?」

いつもと変わらぬ平然とした顔で、カトルはグランの顔を見すえる。その瞳に少しだけ圧倒されつつも、グランは軽いため息をついてから真面目な顔で答え始める。

「そうだね……シエテもいたかな……『いやさあ、たまにくらいこういう縛りで喋らせたらかに役に立ったりしない?』とかなんとか」  
「団長さんだけはともかく頭目の頭も修正しないといけないみたいですね」

「……偶に思うけど、なんでシエテについて行ってるの?」



「約束は守る人ですからね、絶対に……そういうところは信用してま  
すよ？　そういうところは」

「毎度不思議だなあって思ってるよ俺……」

尊敬していかないのかと思えば、信用しているとの言葉。ある意味  
で、罵倒が許される間柄なのかもしれないと内心感じとっていた。

「……まあ、いいや。十天衆達の不思議な間柄は置いておいて……お  
便り一通目、行ってみましょう」

「ええ、どうぞ？　まあ僕はそう簡単に怒ったりしませんけど」

「1通目『口調なんですけど、ツバサ君達と違う点とかあるんです  
か』って事だけど……カトル？　どしたん？」

お便りの内容を聞いて表情を変えずに、黙りこくるカトル。少しだ  
け変な間が生まれた後に、ようやく口を開く。

「ツバサって……誰ですか」

「ああ、ほらマナリア学園から来た金髪リーゼント出乗り物乗り回し  
てる……」

「ああ、ケツタギアの……え、どうして彼らと違う点を聞かれているの  
ですかね」

本気で疑問を感じている顔を浮かべているカトル。グランは一瞬、  
カトルが本気でボケているためにそう感じただけなのかと思ったが  
そうでは無いのだ。カトルは自分のたまに出る口の悪さがガチ不良  
のツバサ達と同じように見られているというのが理解出来ない  
のだ。

「……カトル、傍から見たら君の口の悪さは彼らの言葉遣いと同じよ  
うに見えるということだぞ」

「……えっ」

本気で意外そうな顔を浮かべるカトル。不良であるが故に口が悪  
くなってしまうっているツバサ達。生活している環境が故に口汚く  
なってしまうざるを得ないカトル。

どちらも原因と理由がはっきりしているが、それを明言しない限り  
口が悪いという一括りにされてしまうという話なのである。

「まあ別に直すって話じゃないから……」

「……まあそうですね、聞かれてるのは口調の違いだけなんで……感覚的にでしか、やはり違いは分かりません。ですの、どこがどう違うかという話は少々お答えづらい内容になりますね……質問された方すいません」

「わあすごい丁寧な対応」  
「あ？」

グランの煽りにも取られかねない簡素な返事、一瞬反応してしまう  
が取り繕うかのように軽く頭を振ってカトルは今のを無かったことにしようとしていた。

「今度口を滑らせたらスプラッタな光景が流れてしまいますね」

「それ今までの回見ても言える？」

「……2通目行ってください」

よく良く考えれば、今までも時折スプラッタな光景が流れていたかもしれない……とカトルはすぐさま思考停止し、グランに二通目に行くように催促をし始める。

「ほいほいさ……2通目『同じ短剣使い、又は二刀流使いで戦ってみた相手はいますか？ また、別の誰かとよく模擬戦をしているなら教えて欲しいです』」

ガチ目のやつだ、長いし……んでどうなの？ 誰かいる？」

「……そうですね、ユエルさんとかはたまに手合わせしますよ」

「エルーン繋がりだねえ、同じ二刀使いでもあるし」

「ええ、僕とは違ってあの人は舞ですからね……動きを教わったり教えてたりの関係になつていと思いますよ」

ユエルの戦い方は、同じ二刀流の使い手であるカトルにとっても覚えることは多いようである。十天衆とは言っても、戦い方一つ違えば学ぶことも多い……ということなのだろう。

「けどそもそも、カトルの戦い方だつて結構トリッキーでしょ？ 素早く相手の懐に近寄つて、一気にズバツと行ったりするやり方じゃないか……避け主体じゃない？」

「まあそうですねですけどね……ユエルさんの舞は、攻撃を受け流すという動き方ができるんですよ」

「例えば?」

「僕がいくら素早く動こうとも、相手がそれ以上に早く動く可能性だってあります……その時に強い一撃を貰ってしまえばアウトですからね……その攻撃を受け流せるような動きが出来れば、僕はもっと強くなれる」

「……つまり、舞に受け流せる動きがあると」

短剣という武器の都合上、どうしてもリーチ自体は短くなってしまふ。十天衆という強者であったとしても、相手がそれ以上に強かった場合逆にやられてしまう可能性があるのだ。

そして、短いリーチを補うためにどうしても動きは細かく素早くなくていく必要がある。カトルの言っていることはつまり、その細かく素早い動きをさらに洗練させるために舞の動きを真似ること。それによつて、相手が強力な攻撃を放った場合でも受け流せるような動きを出来るようにしておくことである。

「ええ、川の水のような……受け流すあの動きは相手の攻撃をかわして一撃を加えるのに非常に向いています」

「詩人みたいな例えするね」

「は? 誰の品性が死んでるつつつた今?」

「そこまで言つてないよ?」

段々とグランの態度に腹が立ってきているのか、口が悪くなつてきているカトル。にも関わらず顔だけがいつもと変わらない表情の為に、ギャップが物凄いことになっていた。

「まあいいや……とりあえず3通目行こうか……『他の武器を使つてみたいと思つたことはありませんか?』」

「短剣以外を、ということですか……」

「まああんまり多いと分かりづらくなるから、ほかの十天衆の武器にしておこうか」

「ふむ……拳、と言うよりは拳や爪はいいと思いますね」

「あれ、そういう系統なんだ? まあたしかに、シスとかの戦い方を見てるとカトルに1番近いかなあとは思ふけど」

十天衆の1人シス、拳……と言うよりは爪での戦い方を得意とす

る人物である。しかし他の拳を武器にするもの達と違うのは、戦闘技術と言うよりは暗殺技術に近いものがあるからだ。

そして、カトルとの戦い方としても正面切つての戦いよりも死角をついて一撃を狙うと言いう戦法があつてゐる事があつてゐるのだ。

「それが全てですよ。望む武器も、望む戦闘方法も既に僕は自分のやり方を確立している……他の方達のは、かけ離れすぎて僕には合いませんしね」

「あー……確かに、カトルがサラサーサみたいに斧振り回したり……シエテみたいに剣を飛ばしたりするのはイメージつかないかも」

「剣を飛ばすのは十天衆だとあの人だけです」

「……ん、ということはシスの戦い方とかちよつと気になってたり？」  
納得したようにグランは頷いていた。しかし、ふと思いつき質問をカトルへと返す。カトルはさも当然と言つたように――

「何言つてんですか？ 僕が短剣以外使うわけないでしょう？ 貴方みたいに浮気症じゃないんですよ」

「他の武器を使うことを浮気症と言われたの初めてなんだが……」

「武器のこと以外でも、色んな女性にセクハラしてるじゃないですか」

「……大丈夫、エッセルにはそんな直接的にしてないから！」

そういった途端に、カトルはグランの胸元を掴む。その表情は阿修羅のごとく怒り狂つてゐるかのようになり、血管が浮かんでゐた。

「姉さんが魅力ないつてののか？ ああ？」

「いやいや、違う違う……優しいし魅力的だと思うよ……背中ぱっくり空いてるし」

「姉さんを性的な目で見てんのかア!？」

「――カトル、話を聞いて欲しい」

「……んだよ」

何を言つても怒る状態、しかしグランは冷静沈着に……そして真剣な表情でカトルに視線を向ける。その表情と声音に少しだけ冷静になるカトル。そして、静かにしかしハッキリとグランはカトルに告げる。

「普段の格好で見るなは無理」

「……………」

そして、更なる追撃により完全にカトルは完全に沈黙した。カトル自身も、十天衆としての彼女の格好には思うところがあるのだろう。ただでさえエルーンという種族は男女問わず露出が多いのにも関わらず、人数の多いグランサイファー内ですらさらに多いのだから必然である。

「まあ……分からなくてもいいですよええ……ただ……それはそれとして、です」

「はいなんでしよう」

「腹立つ」

「ぶっ殺ポンポンマンからは逃れられないか……」

「あ？ ……げふんげふん……いえ……僕はまだ理性的です、番組は切り上げておくまでは待ちましょう」

「……というわけで本日はここまでとなります。また次回見てくださいね、さようなら」

表情だけならば完全にブチギレているカトル。そしてそのカトルに胸ぐらを掴まれながら喋っていたその言葉と共に、映像が切られる。そして、その直後にグランサイファー内にはカトルの怒号が響き渡るのであった。

その後、包帯ぐるぐる巻になって元気に喋っているグランが確認されたのであった。

六天、キエエエエエエエエエエ!!!

「今回のツ!!ゲストはツ!!」

「待て待て待て待て」

「はあっ……!はあっ……!どうした、シス……そんなに、息を……荒げて……!」

開幕から激しくやり取りされるグランとシスの攻防。グランの手はシスの仮面目掛けて伸ばされるが、その都度残像によって回避されていた。

「荒げているのはお前だグラン」

「そ、そんなこと……ふう……ないぞ?」

「……どうして貴様とビイはいつも俺の仮面を取りたがるんだ」

「顔見せろ……って思ってるだけなので……というわけで今回のゲストは十天衆のシスさんになります。拳がメイン……と言ってもどちらかと言うと暗殺拳の使い手になります」

「……言っておくが暗殺家業のようなことはやってないからな。金を持ってくるなよ」

2人は席に着き直し、グランはお便りの入った箱を早速取り出す。シスは仮面越しにそれを眺めているが……軽くため息を吐いてから顔を背ける。

「……こら、目を背けないの」

「別段答えたくないという訳では無い、そもそもその気が無いならここに来ることは無い……筈だが……?」

特に脅された訳でも無く、弱みを握られているでもなく……グランに呼ばれたから来たという程度のシス。お便りを答えるというのは理解しているし、来た以上答えないと……いうことをするつもりも無い。

……のだが、ふと何故か不安がよぎってしまい変に疑問形へとなってしまうっていた。

「………星晶獣の中にはさ」

「……?おい、いきなり何の話だ」

「まあいいから聞いて聞いて聞いて」

……で、星晶獣の中には物理的な戦闘能力が強い訳では無い固体もいるんだよ……まあ勿論経緯が経緯だから戦闘能力が抜きんでてるものが殆どなんだけど」

「……まあ、一応は星の民の兵器という体だからな」

何故か急に始まる星晶獣談義。シスは困惑しながらも、食い気味に話しているグランの言葉に相槌を入れていく。

「けどさ、偶にとんでもなく概念に特化してる星晶獣もいるんだよ」

「概念」

「言い方はわかりづらいけど……要するに曖昧な事だね」

「まあ……単純な破壊力じゃあ突破できない事例もあったようだからな……？」

グランの言いたいことがいまいち掴めずに、困惑を強くしていくシス。だが、そんな困惑しているシスを横目にグランはなおも星晶獣談義を続けていく。

「でね……俺達が出会った中に縁を司る星晶獣がいたんだよ」

「ほう、縁……縁結びとかの縁か？」

「そう、その縁……で、これの何が厄介かって……縁切りもできるしシスの言った通り縁結びにもある程度融通を利かせられてね……」

「……」

途端に話が気になり始めたシス。急になぜ星晶獣の話をし始めたのか、急に何故縁を司る星晶獣の話をし始めたのか、そもそもの発端はシスがそもそもこの番組には参加したくないわけじゃないと言った時からである。

「……おい、まさかその力で俺……いや今までの団員達も……」

「まあルリアが吸収したのって一部だからそこまで強い力を発揮することって滅多にないんだけどねえ!!」

ガクツとつんのめってしまうシス。今までの話は要するにただのフリなのであった。

「はあ……わざわざここまで来たんだ、お便りとやらも好きなのをとって読み上げていけばいい。答えられる範囲であれば答えるのみだ。」

「じゃあ今日のお便り一通目『シス君さあ、なんで偶にキエエエエって言うの?』」

「なるほど、あの頭目は1度叩かないとあの根性は直らないらしいな……」

「で、なんで言うの?」

グランの一言でシスは視線をグランに向け直す。少しの間お互いが無言の時間が経ったが……シスからその静かな空間は打ち破られる。

「威圧というのは大事だろう」

「そっか」

内心では『いやそんな理由じゃないでしょ絶対』と思ったグランだったが、ここは飲み込んだ。きつと追求しても自分が納得できる回答は得られないと思ったからだ。

「でもあれいきなり言われるとちよつとビックリする」

「……善処しよう、だが俺自身も意識していない時に言っている事がある……その時は割り切ってくれ」

「あ、やっぱり無意識で言ってるんだ」

「……………」

つい言ってしまうグラン。そして再び訪れる沈黙の時間、数秒見つめあつた後にシスは再び視線を逸らしてしまう。今度は何も言わず、無言でグランに次のお便りの催促を促していた。

「って訳で二通目『拳』というか爪ですよ、シスさんの武器」

「……爪は拳から生えるものだろう、というかこれはカトルか」

よく分かったな、と思いつつもグランは否定も肯定もしなかった。確かにシスは爪を使う事が多いが、切り裂くだけでなく普通に殴ったりもしているため本当に拳そのものを使ってはいるのだ。ただ、拳から生えるものだろうというツツコミは何か違うのではないか……と珍しくツツコミ役に回りそうだったので、グランはあえて何も言うことは無かったのであった。

「まあでも殴るといふか切るって感じのイメージはあるね、シスの武器って」



「……俺には別に筋力は無いからな、本当の意味での拳というのならガンダゴウザやラインハルザが適任だろう」

「あの二人は……まともに食らったら普通の帝国兵なら鎧ごと砕かれそうだよな、骨」

「骨で済むのだろうか……」

「わかる」

ガンダゴウザ、ラインハルザ……共にパワーによる圧倒的な破壊力が決め手の者達である。無論、技がないという訳では無いが……その技自体が一撃必殺のパワーを秘めているのである。当然、並大抵の帝国兵は鎧ごと体を貫かれるのがオチだろう。

「……ところで、今更の話なんだが」

「どつたのシス君」

「暗殺拳……と言ってよかったのか？」

「……」

「おい待て『考えてなかった』みたいな顔をするのはやめろ」

グランは真顔のまま、あつちを向いたりこつちを向いたりと視線を泳がせながらシスの方を向こうとはしない。まるで、言い訳を考えるかのような対応である。

「どうするんだ子供達に答えづらい事を聞かれたら……」

「もうその時は正義の仮面シッスマンにでもなれば良いと思うよ、ほらジークンマンいるから……ガウエインマンは卒業したけど」

ジークンマン、ジークフリートである。彼の兜はフルフェイスのメットの為、パツと見では誰かというのが判別しづらくなってしまったのを利用しグランが適当に流した噂の一つである。

ガウエインマン……ガウエインは呪いが解けたので仮面をつけることが無くなったが。

「お前の頭の中も1度叩き直した方が良さそうだな」

「やめてよお兄ちゃん!!」

「やめろ」

「やめるわ」

「いきなり戻るな……」

よく言えば演技派と言われそうなグランの対応。まるで悲しそうな声を出しながらも、即座に真顔に戻りテンションも戻っていた。はたから見たら精神の病気を疑いそうになるほどには上下が激しかったが、最早シスはそれに対して軽いツツコミを入れるだけにしておくほど疲れていた。

「じゃ、3通目行きマース」

「…そうだな」

すっかりツツコミを諦めたシス、グランはそんなシスを気にもかけずにお便りを漁り…そして1つを取りだして読み上げていく。

「えー…『仮面を外して会話できるようにしたらどうだ』、ネハンだねこれ…」丁寧に名前書いてらア」

「…それに関しては余計なお世話だ」

「取られても会話自体は出来るけどねえ」

「…つけてても問題は無いだろう？コミュニケーションが取りやすい方法を選んでいるだけなんだからな」

シスは仮面を外すと途端に弱々しくなってしまう。近頃は慣れている相手ならば会話はある程度慣れるようになってきているのだが、如何せんそれでも難しい時はあるようである。

「……ネハンと話す時くらい外したら？」

「……………いや……………無理……………だ……………」

「知ってるぞ、仮面付けてない時の方が素直じゃないかシスは」  
「うぐ…」

シスは仮面を外すと弱々しくなる…のだが、その分素直な面も出てくる。むしろ仮面をつけている時の方がコミュニケーションを取れる分、あまり素直に会話出来るタイプではなくなるのだ。何故なのか。

「……………余裕が無くなるだけだ、仮面を取られているから」

「なら取られてももっと会話出来る程度に特訓始めていかないといけねえなあ!!」って訳でその仮面貰い受け——」

「っ!!恐怖せよ、六崩の定道が如何なる滅却を齎すかを!その身に刻め、我が闘争修羅の如く!手加減無しだ!!」

三面六臂の絶技、思い知るがいい！神髓・鬼面阿修羅！」

「――即座に全ブツパときたか」

とてつもない爆音と共にグランサイファアの底に穴が空く。腕を組みながら、ニヒルな笑みを浮かべてグランは、落下していく。なんだかんだ心配しあっている関係だからこそ、本気のだし愛はある程度許されるのだ。

「……………まあ今の俺にはこいつがいるのさ!!カモンエビフライ!!」

指をパチンと鳴らすグラン。しかし、それに答える者は誰もいない。首を傾げながらもう一度鳴らす。やはり誰も来ない。疑問に思いつつも、今日はエビフライは来れない日なのだろうかとグランは思案する。

「……………うーん、どうしたものか」

落下しつつ他の手を思案するグラン。かなり落ち着きつつも落下は続いていく。『誰かが助けてくれるし大丈夫だろう』とは思っているし、最悪装備してる武器でどうにかして飛行する予定なので問題は無いと考えている。

そして、まあ色々端折ってしまうが……………下で待機していた二オに助けられてグランサイファアに戻ったのであった。因みにエビフライはメンテ中だった。

「ところでシスき」

「なんだ」

「昔ご飯どうしてたの？仮面つけながらじゃあレストランとかで食べれんでしょ」

その後、昼食時に何となくシスに気になっていたことを尋ねるグラン。『昔』と言ったが、ぶっちゃけ今もつけているので普通に気になっている。

「むしろ食事処は昔は寄っていない。洒落た料理など出すのはいいが匂いがつきやすかった」

……今はあまり気にする必要も無いだろうと、ここで食事をしていくだけだ」

「ぶっちゃけそこまで安心してくれるのは凄いい嬉しんだけど、じゃあ昔何食ってたの」

「野生の獣を狩り、臭みを取り、保存食に自前で加工していた。味はお世辞にも良いとは言えなかったが…気にせず食べていた」

「……………」

「なんだ、なん…いやほんとになんだその表情？形容し難い表情をするのはこちららも困るからやめて欲しいのだが」

グランは嬉しいような悲しいようなよく分からない表情をしていた。シスはそれに困惑しているが、構わず食事を続けている。仮面を少しだけずらして口に運んでいた。

「……色んな美味しいもの食べような」

「…？あ、ああ……………」

急な優しい言葉に困惑しつつも、シスは食事を続けていく。グランも食事を続けていく。

なんのこっちゃと言わんばかりに困惑しているため……シスはグランの態度を気にしながら食べることになるのであった。

「あ、お代わり頼む？」

「…この後は少し遠出の依頼だったな、腹に溜まってしまおうが…その分の栄養素と思って、その分食べておこう」

「ローアインのペペロンチーノウめえよね本気で」

「…否定はしない」

「…というか食べてよかったの？」

「…口臭が残らないように配慮した飲料や副食がある。衣装の匂いに關しては今着ているのは完全な私服だ、着替えて軽く消臭剤を掛けておけばいいだろう」

「このグランサイファーにできないことは無いと言わんばかりに至れり尽くせりだなほんと…」

「…否定はしない」

七天、本気出しちやおつかなく？

「えー、というわけで十天衆が1人シエテさんです今日のゲスト」

「え、なんか紹介雑じゃない!？」

「ザツジャナイ、ザツジャナイ」

例えるなら初期グラと言わんばかりの塩顔で、グランはシエテと対峙する。シエテは相変わらざる若干のニヤケ顔でグランと話しているが、二人の関係はこれでいつも通り。グランはすぐさま表情を戻してシエテと改めて話し始める。

「というわけで……十天衆が頭目のシエテさんです。頭目の割にはみんなあんまり招集応じてくれないよね？」

「急に刺してくるねえ団長ちゃん？まあでもほら、そこは皆団長ちゃんのこと好きだからだよ、ああもちろん俺も好きだよ」

「多分本音なんだろうけど……ずっとにやにやしてるからなあ」

「酷っ!!お兄さん泣いちゃうぞ〜？」

「……とまあ戯れはここまでにして……さっさとお便り言っちゃおう」

ガサゴソとはこの中をいじり……3枚を選び取るグラン。その内の1枚をシエテの前に出し、そして読み上げていく。

「1通目……ペンネ……いや普通に名前書いてるじゃん……これカトルからだね……『よく考えたんですが、今の十天衆の現状はグランサイファアの下部組織にいることになりませんか、頭目?』」

「え……いや、それは違……とも言いきれない……?」

「グランサイファアでは各々の思想、趣味、宗教など関係なく敬いグランサイファア外の立場は無いものとする!!」

「急に大声で喋るじゃん……」

「いや……だって考えてみてよシエテ……ここ皇族やら騎士団やら星晶獣やらいるんだよ……そこら辺考え始めたら……」

シエテは現在自分が認識しているグランサイファアの面子の事を考え始める。本当の意味での王族や皇族、貴族にその国の騎士団。場合によっては犯罪者なども乗っている。秩序の騎空団も載っている

ので、善悪入り混ざった蠱毒に等しい状態なのだ。

「そもそも力関係だけで言っても天司長、十天衆頭目、伝説の錬金術師……一度バランス関係が崩れたらグランサイファー落ちる所まで行くと思うよ」

「……確かに」

「なのでグランサイファー内にいる時は問わないものとする!! って事で……あ、勿論十天衆としてグランサイファーの中で集まるのOKだよ」

「その配慮は助かるよ……いや、偶に会議したいけど島々にいるとどこにいるか探るだけでも面倒だからねえ……グランサイファー内にいるのなら楽なんだよね」

「それでいいのか頭目……因みにウーノが招集かけたら集まったりするの?」

「いやあ? 集まるんだったら泣いちやうよ、俺」

「あれ、やったことないんだ?」

「俺が頭目だからね、ウーノ個人の用事で誰かを呼ぶことはあるかもしれないけど、ウーノから十天衆として全員に招集かかるのは中々ないねえ」

「そういう感じかあ」

ヘラヘラと笑みを浮かべながら回答していくシエテ。グランは意外だ、と驚きながらもまあそういうものかと密かに納得していた。そして、2通目にゴソゴソと手をつけて……読み上げ始める。

「ってわけで2通目……匿名希望『結局の所十天衆つて入れ替えとかあるの? 選ぶ基準点もよく分かってない』……そういえばあんまり気にしたことないかも」

「ははは、ないよ……余程のことが無い限りね」

ヘラヘラ顔から、圧を感じられるような表情へと変えるシエテ。その表情からは『余程の事は起こさせない』という意味を強く感じさせる程に、強い圧をグランは感じ取っていた。

「……まあけど、選ぶ基準自体は確かに改めて知りたいかも……あ、その武器の分野において空域最強ってのは無しで」

「釘を指してくるねえ…ま、もう散々言ってるしねえ…：うーん、けど基準点か

…：『どこの組織にも所属しておらず』『武器の一芸に秀でており』『力を空の世界のために振るえること』って言ったら納得する?」

「納得はするよ、実際問題みんなどこにも所属してないしね…カトルとエッセルは育った故郷を守りたいってただけだろうし」

星屑の街、エッセルとカトルの故郷であるここは現在長寿のハーヴィン、レイが率いているスーオファミリーの街となっている。かなり大雑把に言えば、スーオファミリーの管轄地域を十天衆の2人が守るといふ構図になりかねないが――

「スーオファミリーの要請で守つてるとかじゃないからねえ、場合によつては手を組むとかはあるかもしれないけど…：それこそ、あの二人くらいしか組むことは無いと思うよ」

「その心は?」

「そもそも今も俺の剣神がああ街守ってるからね…：街内を管理してるのはスーオファミリー、外敵排除は俺の剣神の役目さ」

「…：よく疲れないもんだね?」

剣神、本来シエテは剣拓を使い意のままに操り地を斬り空を裂くと言わんばかりの強さを誇っていた。だが、とある事がきっかけで剣神という力を手に入れていた。それらは一体一体が十天衆と渡り合える力を持っているため…：たった一人でも大群を用意する必要がある代物である。

「いやあ?意外と疲れないもんよ…：ま、そもそも仕事ないけどね」

「それはまたなんで?」

「カトルとエッセルはその力を『敵』に振るうのに容赦しないからさ、団長ちゃんなら意味わかるよね?」

「…：まあね」

銃と短剣、それを振るうことの意味が分からないほどグランは馬鹿では無い。笑みを浮かべながら、シエテの言葉に適当に返事を返していた。明確に返事するよりも、曖昧に返す事の方がいいこともあるということだ。



「で、話を戻していいかな？団長ちゃん」

「ああ、確か十天衆の基準だったつけ：まあたしかに分かりづらいな？十天衆じゃないガンダゴウザ、十天衆のシス：どっちが強いかって言われても俺はどっちか決められないなあ…」

「そういう事よ、だから実力もそうだけど力を空の世界のために振るえる事の方が意味合いとしては強いかもね：だから俺結局団長ちゃん誘ってないでしょ？」

「確かに」

「まあそもそも団長ちゃんが十天衆入っちゃうと俺多分頭目の座取られちゃうよねー!!なんちゃつ…………て…」

ボケたつもりのシエテ。しかし、実際問題自身の人望のなさはある程度は理解しており空の世界の危機だと揃う面子は、基本的に誘ってもこない。しかしグランが誘うと途端に揃うことを今、ふと思いついたのである。

「……………どしたのシエテ」

「……………いや？団長ちゃんならほんとに取れちゃうんじゃないかなって思っただけでさ、うん」

「……………いや、俺シエテより弱いよ？」

「自分の戦績見てから言おうか」

「本気出してない人に言われても…」

「…あれ、そういうこと言っちゃおう？」

『『それが分かるくらいには成長したと思ってくれたら…………』』

無言になる2人。お互いの顔に笑みを浮かべたままだが、その目の奥は笑ってないとわかる人物はわかるだろう。だが、映像や音声越しにわかる人物はそうはいないだろう。

「つて訳で3通目に行こう……………これも匿名希望『あの服考えたの頭目ですか？じよ——』』」

「いやあ！分かる!?このデザインめっちゃ考えてさー！カッコいいと思わない？黒と赤と金を使うとやっぱ余程デザイン酷くないとカツコ悪くならないと思うんだけどね？結果としてみんなよく似合っただけかなりかつこいい服になったから俺としてはかなり自慢のデザイン

だと思っ」

「はいストップ、まだ続きあるから」

自慢げに語るシエテにストップをかけて、語りを止めるグラン。再び3通目のお便りを見直し、そして読み上げ始める。

「えーつと…『女性側のラインはどうしてあんなに出てるんですか、特にソーンさん』」

「……………」

「おいコラ頭目を背けるな」

目を逸らし、剣拓を眺め始めるシエテ。既に自慢げに語ってしまった以上、『いや実はウーノなんだよ考えたの』とか『いや実はみんな考えてこうなったから問題ないよ』とか言い出せる雰囲気ではなくなっていた。仮に後者が本当の事だとしても、言える雰囲気では無い。

「……………?なんであんなったの」

「…………いや、あの…サイズとかはともかく体にフィットした材質じゃないと動き阻害したりするしさあ」

「なるほど…………エッセルは?」

「……………」

「言い訳でもいいから何か言ってよ…」

エッセルは6〜7割くらい露出していた。フィット云々の話は、あくまでラインが分かるほどの状態であっても、素肌があまり見えなければ通じた話だろう。エッセルはどうしようも無い。

「だってさあ!!俺も突っ込みたかったけどさあ!本人あんまり気にしてないからさあ!!セクハラになるじゃん!!言ったらついでにカトルに睨まれるじゃん!!」

「あー…男故の…………」

中々言いづらい事を抱えているシエテ。実際問題、同じ女性陣からのツッコミがなかったら帰ることは無いだろう。だが、そもそも話もつとまともなデザインにすれば良かったのでは…というツッコミは野暮である。

「団長ちゃんもそういうことあるでしょ?」結構露出凄いいけど言いつ

「らいなあ』って言うの」

「……………」

「ねえちよつと、なんで顔背けるの団長ちゃん」

グランは言えなかった。寧ろ『ねえこの衣装どう思う?』とか言われながら開いてるところを見せつけられる側だとは到底言えなかった。

「…………いやあ、今回のお便りも中々でしたね」

「え、ちよつと」

「それでは本日はここまでとなります。十天衆に対しての疑問は――

「ストップストップ!なんで急に話終わらそうとしてるの!?!」

シエテのその言葉に顔を背けながらグランは口を噤む。しかし、シエテは当然それでは納得ができる訳もなく…………追撃を入れていく。

「…………まさか、女性陣の柔肌はその視線を向けて…!?!」

「シエテ」

「…………うん、何?」

「俺に勝てたら答え教えてあげる」

「乗った」

お互いの得物を握りしめ、笑みを浮かべる2人。無論ただの試合なので言うほど本気を出すことは無いだろうが…それでもなお、2人の歴戦の戦士の気迫は凄まじいものがあつた。

「というわけでお疲れ様でした。本日はここまでとなります。」

「十天衆の事ならなんでも俺に聞いちゃってくれていいからねえ!後色んな剣拓あるから見たい人はなんでも見せてあげる! って訳で行こうか団長ちゃん!!」

「因みにシエテが負けたら今日奢りね…………全員分」

「いいよオ!!俺負けないから!!頭目最強だから!!」

その後、誰も住んでいなさそうなどある島にて2人は試合を始めた。時折髪が青くなったり白くなったり剣神を出して多数対個みたいなことになってたりもしたが…………勝負が決着が着く前に空腹になつたので仲良くご飯を食べたという。その頃には、2人ともなんで

試合してたか忘れたので……なあなあになったのであった。